

多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 第4集

今井三騎堂遺跡 今井見切塚遺跡

— 歴史時代編 —

2005

群 馬 県 企 業 局
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 第4集

今井三騎堂遺跡 今井見切塚遺跡

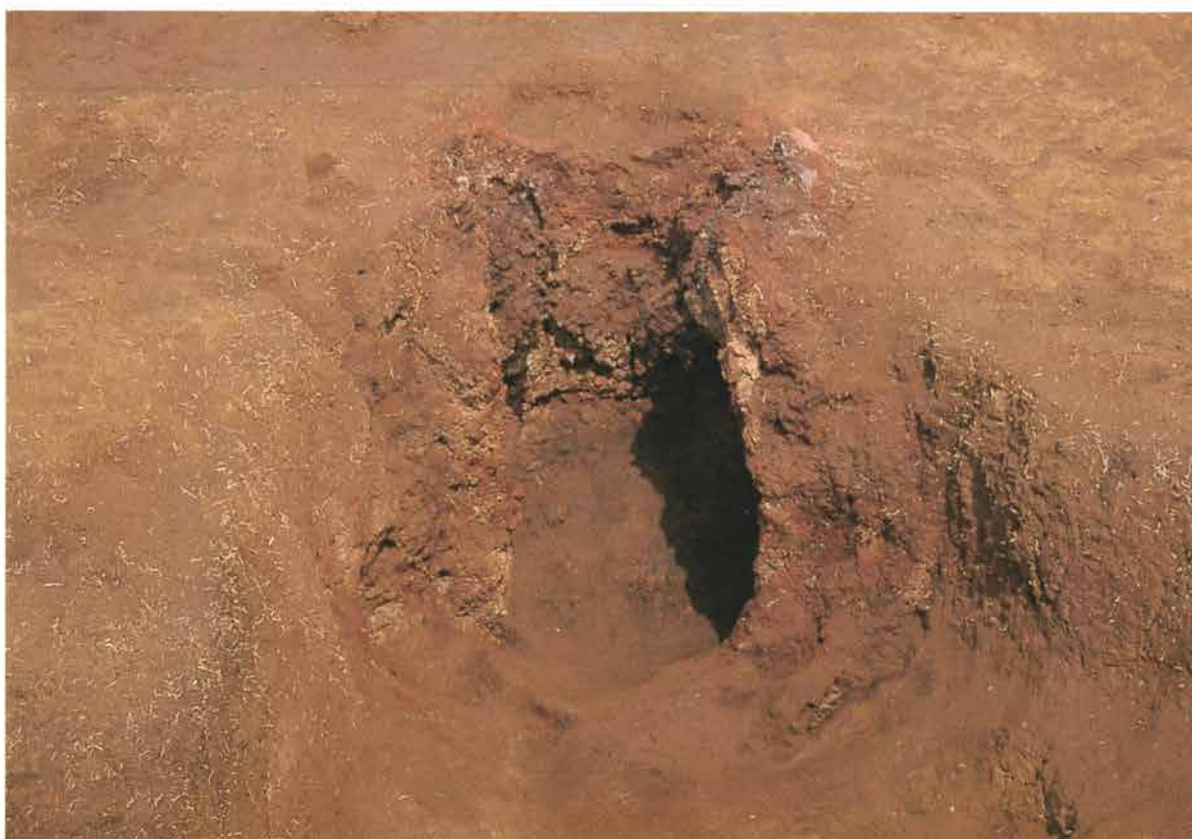
— 歴史時代編 —

2005

群 馬 県 企 業 局
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



三騎堂 4区1・2号豎形炉と廃滓場



三騎堂 6区1号豎形炉炉体



三騎堂 4 区 2 号 豎形 炉 炉 壁 · 羽 口 外 面



三騎堂 4 区 2 号 豎形 炉
炉 壁 · 羽 口 側 面



三騎堂 4 区 2 号 豎形 炉 炉 壁 · 羽 口 内 面



三騎堂6区1号竖形炉 炉壁・羽口外面



三騎堂6区1号竖形炉 炉壁・羽口内面

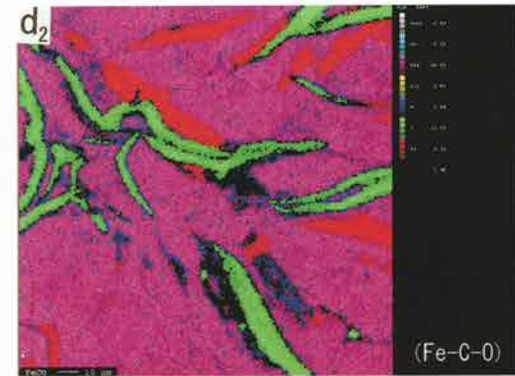
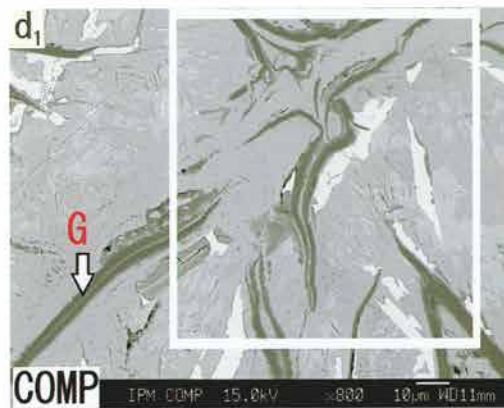
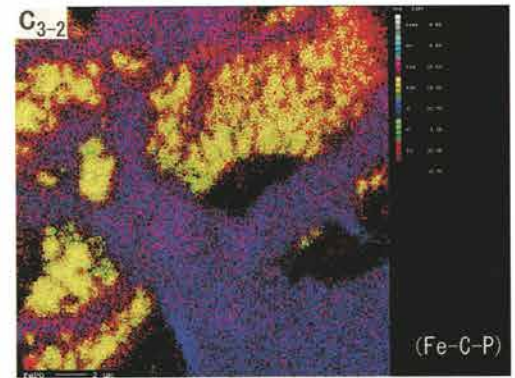
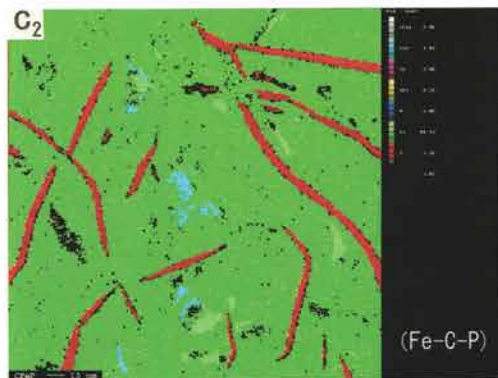
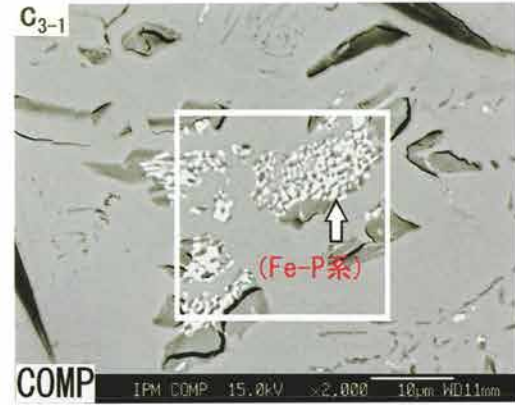
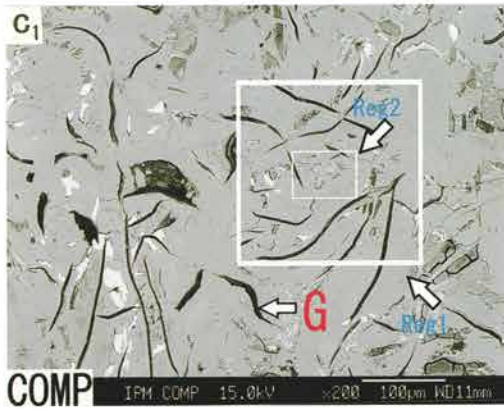
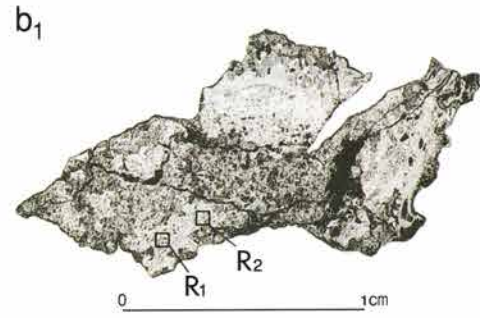
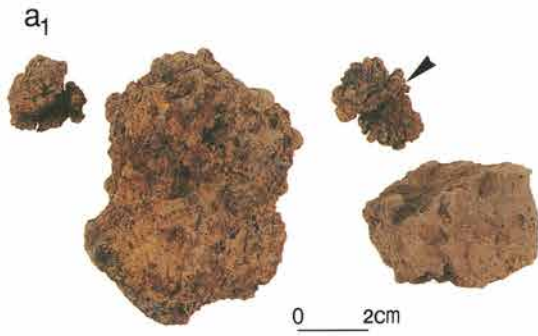


写真1 No.14 (今井三騎堂遺跡6区4号廃滓場出土鉄塊系資料) から抽出した試料のEPMAによる組織解析結果
 a1:外観、矢印は試料抽出位置。b1:マクロ組織。c1:b1R1内部のEPMAによる組成像 (COMP)。c2:c1Reg1内部のEPMAによるFe・C・Pの複合カラーマップ。c3-1:c3-2:c1Reg2内部のEPMAによる組成像とc3-1枠内部のEPMAによるFe・C・Pの複合カラーマップ。d1:b1R2内部のEPMAによる組成像。d2:d1枠内のEPMAによるFe、C、Oの複合カラーマップ。G:片状黒鉛

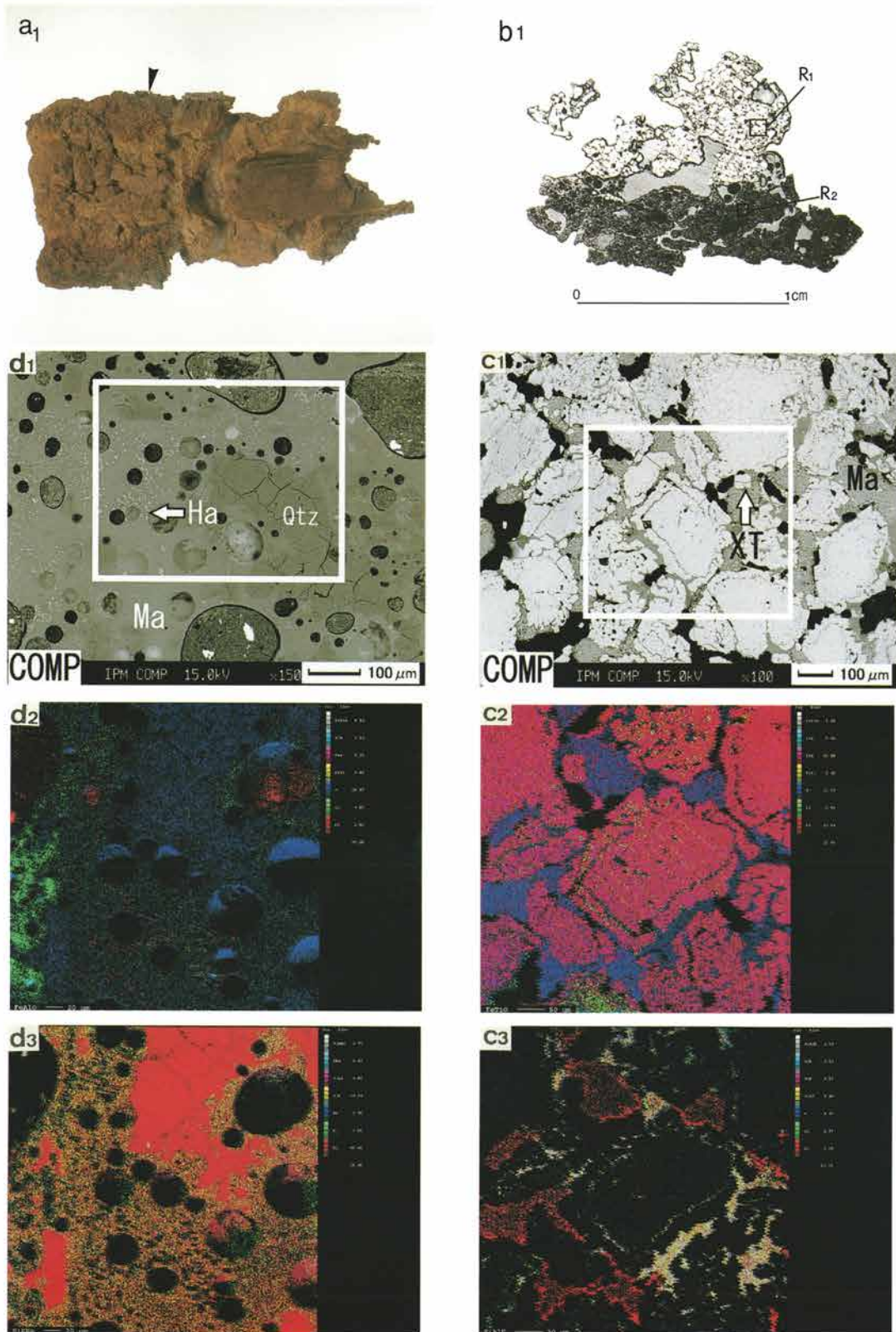


写真2 No6-9 (本文337ページ図3-1今井三騎堂遺跡6区1号整形炉跡出土土羽口の9位置) から抽出した試料のEPMAによる組織解析結果

a1:外観、矢印は試料抽出位置。b1:マクロ組織。c1-3:b1R1内部のEPMAによる組成像 (COMP) と c1枠内部の Fe・Ti・O および Si・Al・K の複合カラーマップ。d1-3:b1R2内部のEPMAによる組成像と d1枠内の Fe・Al・O および Si・K・Na の複合カラーマップ、XT:鉄チタン酸化物、Ha:Fe-Al-O系化合物、Qtz:酸化ケイ素、Ma:マトリックス。

序

『今井見切塚遺跡・今井三騎堂遺跡』は、佐波郡赤堀町今井と前橋市大室町にまたがる通称多田山丘陵上にあり、多田山住宅団地造成工事に伴い群馬県企業局から委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成9年度から平成13年度にかけて発掘調査を実施した遺跡です。

発掘調査の結果、今井見切塚遺跡からは旧石器時代の石器類、縄文時代の住居跡、古墳、平安時代の住居跡・炭窯・製錬炉跡・小鍛冶跡・火葬墓が、今井三騎堂遺跡からは旧石器時代の石器類、縄文時代の住居跡、古墳、平安時代の住居跡・炭窯・製錬炉跡などが発見されています。

本報告書は、これらの時代の中で平成12年度と16年度に整理を実施した「歴史時代」をまとめたものです。この報告書に掲載されている中で注目されるものとして、今井見切塚遺跡と今井三騎堂遺跡の両遺跡で発見された平安時代の「火葬墓」と「製錬炉跡」、「炭窯跡」があります。多田山丘陵では古くから「火葬墓」の存在が知られていましたが、発掘調査において大規模であったことが裏付けられました。「炭窯跡」は周囲から発見された「製錬炉跡」の燃料に使用される炭を焼いたものと考えられます。

これらのことは、古くから地元の人達に親しまれてきた多田山丘陵と各時代の人々との関わりを明らかにしていくうえで貴重な資料となり、考古学研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様の研究も大いに役立つものと確信しております。

最後になりますが、群馬県企業局、赤堀町教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り、心から感謝の意を表すとともに、発掘調査に携わった担当者、作業員の方々の労をねぎらい序といたします。

平成16年11月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小野 宇三郎

例言

1. 本書は、多田山丘陵開発事業に伴う事前事業として、平成9年度から平成13年度にかけて実施した「今井見切塚遺跡」「今井三騎堂遺跡」の発掘調査報告書第4集である。第4集の収録範囲は、両遺跡の奈良時代以降の遺構と遺物である。但し、古墳出土の奈良・平安時代遺物は古墳編に収録済みである。
2. 遺跡の所在地は、佐波郡赤堀町今井（現伊勢崎市赤堀今井町）と前橋市東大室町である。
3. 発掘調査と整理事業は、群馬県企業局から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受けて行った。
4. 発掘調査期間と発掘調査組織は以下のとおりである。

(1) 発掘調査期間と発掘調査担当者

今井見切塚遺跡 平成9年5月14日から平成9年12月26日 54,300m²

石坂 茂、深澤敦仁、田中 雄

平成10年4月1日から平成11年3月3日 36,100m²

石坂 茂、松島久仁治、大西雅広、須田正久、諏訪 晶、
斉藤和之、深澤敦仁、小保方香里、石田 真、田中 雄、
小野和之、関 俊明、松原孝志、原 真（嘱託員）

平成11年4月1日から平成12年3月31日 30,600m²

石坂 茂、松島久仁治、大西雅広、須田正久、斉藤和之、
井上哲男、深澤敦仁、坂口 一、佐藤理重、小保方香里

平成12年4月1日から平成13年3月31日 40,200m²

石坂 茂、小保方香里、斎藤和之、佐藤理重、深澤敦仁、
田村 博、津島秀章、土谷慎二

平成13年4月1日から平成14年3月31日 12,400m²

石坂 茂、関口博幸

なお、本年度の調査では奈良時代以降の遺物・遺構は出土していない。

今井三騎堂遺跡

平成10年4月1日から平成11年3月31日 91,900m²

石坂 茂、松島久仁治、大西雅広、須田正久、諏訪 晶、
斉藤和之、深澤敦仁、小保方香里、石田 真、田中 雄、
小野和之、関 俊明、松原孝志、原 真（嘱託員）

平成11年4月1日から平成12年3月31日 37,050m²

石坂 茂、松島久仁治、大西雅広、須田正久、斉藤和之、

井上哲男、深澤敦仁、坂口 一、佐藤理重、小保方香里

(2) 調査年度と事務担当者

平成9年度

常務理事 菅野 清 事務局長 原田恒弘
管理部長 渡辺 健 総務課長 小淵 淳
総務課 笠原秀樹 井上 剛 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌 宮崎忠司
大澤友治 吉田恵子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり
安藤友美 狩野真子 羽鳥京子 星野美智子 今井もと子 並木綾子
調査研究第2部長 神保侑史 調査研究第6課長 佐藤明人

平成10年度

理事長 菅野 清 事務局長 赤山要造
管理部長 渡辺 健 総務課長 坂本敏夫
総務課 笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌 宮崎忠司、
大澤友治 吉田恵子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり
狩野真子 本地友美 今井もと子
調査研究第1部長 赤山要造(兼務) 調査研究第2課長 能登 健

平成11年度

理事長 小野宇三郎 事務局長 赤山要造
管理部長 住谷 進 総務課長 坂本敏夫
総務課 笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 岡嶋伸昌 片岡徳雄
大澤友治 吉田恵子 並木綾子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子
北原かおり 狩野真子 今井もと子
調査研究第1部長 神保侑史 調査研究第1課長 能登 健

平成12年度

理事長 小野宇三郎 事務局長 赤山要造
管理部長 住谷 進 総務課長 坂本敏夫
総務課 笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 森下弘美 片岡徳雄
大澤友治 吉田恵子 並木綾子 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子
北原かおり 狩野真子 今井もと子
調査研究第1部長 水田 稔 調査研究第1課長 真下高幸

平成13年度

本書に収録する奈良時代以降の資料がないため省略。

5. 整理事業

整理期間 平成12年4月1日から平成13年3月31日

理事長 小野宇三郎 事務局長 赤山要造

管理部長 住谷 進 総務課長 坂本敏夫

総務課 笠原秀樹 小山建夫 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 森下弘美 片岡徳雄
大澤友治 吉田恵子 並木綾子

調査研究第1部長 水田 稔 資料整理課長 西田健彦

編集担当 大西雅広

整理補助員 阿部由美子 小久保ヒロミ 横坂英実 羽鳥望東子 平林照美 池田和子

遺物写真撮影 佐藤元彦

保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 高橋初美

三次元測定土器実測 千代谷和子 田中精子

整理期間 平成16年4月1日から平成16年7月31日

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保侑史

管理部長 矢崎 俊夫 総務課長 丸岡道雄

総務課 竹内 宏 高橋房雄 須田朋子 吉田有光 阿久澤玄洋 栗原幸代
佐藤聖行 内山佳子 若田 誠 佐藤美佐子 本間久美子 北原かおり
狩野真子 今井もと子

調査研究部長 右島和夫 資料整理課長 相京建史

編集担当 大西雅広

整理補助員 高橋とし子 島崎敏子 下境マサ江 深代初子 萩原由香

遺物写真撮影 佐藤元彦

6. 本書の執筆は以下のとおりである。

赤沼英男：第3章 鉄関連遺物分析

楢崎修一郎：第3章 出土人骨

原 真：第2章第1節 2炭窯（今井三騎堂：3区3号炭窯、今井見切塚：1区3・7～9・11号炭窯、4区1号炭窯）

上記以外：大西雅広

7. 依頼・委託業務

依頼

石材鑑定 群馬地質研究会 飯島静男

委託

- ・遺構実測の一部は株式会社アコン測量設計に委託して行った。
- ・遺構図面デジタル編集は株式会社側研に委託して行った。
- ・鉄滓、豎形炉炉壁など鉄関連分析は、岩手県立博物館に研究委託を行い、赤沼英男氏に原稿を寄せて頂

いた。

- ・木炭樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託し、成果報告書を編集者が編集したものを掲載した。

(群馬県教育委員会が実施した試掘調査の際、6区1号炭窯を全掘している。この時採取された木炭の樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託されており、この成果報告を編集者が編集したものを掲載している。)

8. 発掘調査や報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏からご協力・ご教示をいただいた。

赤堀町教育委員会、前橋市教育委員会

穴沢義功、伊藤博之、井上唯雄、小島純一、小林 高、山下歳信

9. 出土遺物、遺構測量図、遺構写真、遺物写真などの記録類は、群馬県埋蔵文化財センターが保管している。

凡例

1. 発掘調査及び本書で使用した基準は以下のとおりである。

平面基準 平面直角座標第Ⅸ系（日本測地系（Tokyo Datum））

グリット グリットは、今井見切塚、今井三騎堂両遺跡をカバーするように南西隅を起点として4 m方眼で覆う形をとった。表記はY座標をアルファベット2文字、X座標をアラビア数字で表した。Y座標のアルファベットは、一桁目のアルファベット（右側）は4 m単位を表し、AからYまでを使用して100m間を、二桁目（左側）は、一桁目が一巡した距離、100m単位を表現する。

本報告で使用したグリット基点「AA-1」は日本測地系 $X=41826$ 、 $Y=-56380$ である。この座標は、世界測地系（日本測地系2000）では $X=42170.7897$ 、 $Y=-56672.3187$ である。図中に示した方位は、日本測地系（Tokyo Datum）座標北である。

2. 挿図の縮尺は、各図下部にスケールで示した。また、遺物写真の縮尺は挿図に近づけたが、一部異なるものがある。

3. 遺構断面図及び等高線に記した数値は標高を表す。

4. 遺構表記

遺構図と遺構写真では、今井見切塚遺跡、今井三騎堂遺跡共に遺跡名の「今井」を省略して表記した。

遺物図と遺物写真では、今井見切塚遺跡を「見」、今井三騎堂遺跡を「三」と略して表記した。

遺物写真では、遺構名を一部省略し、炭窯を「炭」、火葬墓を「火」、土坑墓を「墓」、住居を「住」、構外は区名称のみで表した。

5. 遺構名

竪穴住居調査の都合上、時代を問わず調査順に通番を付していたが、報告書作成が時代毎に分冊となったため、時代毎に見ると住居番号に欠番が多くなる。このため、縄文時代と歴史時代でそれぞれ番号を付け直した。調査時の住居番号と報告時の住居番号は下記の通りである。原図や写真の整理は現場での遺構番号で行っている。

炭窯も古代の地下式炭窯、伏窯や江戸時代以降の石積窯のように構造や時代の異なる遺構に対しても調査順に通し番号を付している。しかし、古墳時代以前には炭窯が存在せず、同一報告書で扱うため、調査時の番号をそのまま使用した。他の遺構も番号の付け替えは行っていない。

竪穴住居遺構番号対照表

遺跡名	旧番号	新番号	遺跡名	旧番号	新番号
今井三騎堂	3区1号	H1号	今井三騎堂	6区10号	H14号
今井三騎堂	3区3号	H2号	今井三騎堂	6区11号	H15号
今井三騎堂	3区4号	H3号	今井三騎堂	6区12号	H16号
今井三騎堂	4区1号	H4号	今井三騎堂	6区15号	H17号
今井三騎堂	6区1号	H5号	今井三騎堂	6区27号	H18号
今井三騎堂	6区2号	H6号	今井見切塚	1区2号	H1号
今井三騎堂	6区3号	H7号	今井見切塚	1区3号	H2号
今井三騎堂	6区4号	H8号	今井見切塚	1区4号	H3号
今井三騎堂	6区5号	H9号	今井見切塚	1区7号	H4号
今井三騎堂	6区6号	H10号	今井見切塚	1区11号	H5号
今井三騎堂	6区7号	H11号	今井見切塚	2区1号	H6号
今井三騎堂	6区8号	H12号	今井見切塚	2区2号	H7号
今井三騎堂	6区9号	H13号			

6. 本文及び土層注記で使用したテフラ表記は以下のとおりである。

As-B：1108年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ。

7. 土層注記及び遺物観察で使用した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修、財団法人日本色彩研究所 色監修「新版 標準土色帖」1991を使用した。

8. 遺物観察表で使用した「胎土」の特徴は以下のとおりである。

土師1：白色鉍物粒多く含む。

土師2：光沢のある鉍物粒多く含む、石英礫含む。

土師3：光沢のある鉍物粒多く含む、石英礫含まない。

土師4：緻密で微細な白色鉍物粒含む。器表摩滅したものが多い。

須恵1：白色鉍物含む。青灰色粒含む。

須恵2：チャート礫含む。素地が全体に砂っぽい。

須恵3：灰色粒含む。白色鉍物僅かに含む。

須恵4：石英、金雲母含む。

須恵5：石英、輝石？含む。土師2に似る。

土器1：土師1に同じ。

土器2：土師3に近い。

序

例言

凡例

目次

表目次

遺構・遺物図目次

写真図版目次

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 調査の方法と経過

第2節 遺跡の立地

第3節 周辺の遺跡

第4節 遺跡の概要

第2章 確認された遺構と遺物

第1節 奈良・平安時代

1. 製鉄関連遺構

(1) 今井三騎堂遺跡

(2) 今井見切塚遺跡

2. 炭窯

(1) 今井三騎堂遺跡

A 地下式炭窯

B 伏窯

(2) 今井見切塚遺跡

A 地下式炭窯

B 伏窯

3. 竪穴住居

(1) 今井三騎堂遺跡

(2) 今井見切塚遺跡

4. 火葬墓

5. その他の遺構

(1) 今井三騎堂遺跡

(2) 今井見切塚遺跡

第2節 中世以降

1. 土坑墓

(1) 今井三騎堂遺跡

(2) 今井見切塚遺跡

2. 炭窯

(1) 今井三騎堂遺跡

(2) 今井見切塚遺跡

3. その他の遺構

(1) 今井三騎堂遺跡

(2) 今井見切塚遺跡

第3章 科学分析

第1節 今井見切塚遺跡6区1号炭窯から出土した炭化材の樹種

第2節 今井見切塚遺跡の炭窯から出土した炭化材樹種同定

第3節 今井見切塚遺跡、今井三騎堂遺跡出土炭化材の樹種同定

第4節 人骨

第5節 鉄関連分析

図目次

- 第1図 遺跡位置図
 第2図 基本土層
 第3図 地形分類図
 第4図 周辺の遺跡
 第5図 三騎堂4区製鉄関連遺構
 第6図 三騎堂4区1号竪形炉
 第7図 三騎堂4区1号竪形炉炉体
 第8図 三騎堂4区2号竪形炉
 第9図 三騎堂4区2号竪形炉炉体掘方
 第10図 三騎堂4区1号炭置き場
 第11図 三騎堂4区1号作業場
 第12図 三騎堂6区製鉄関連遺構
 第13図 三騎堂6区4号廃滓坑
 第14図 三騎堂6区1号竪形炉、2号・3号廃滓坑
 第15図 三騎堂6区1号竪形炉炉体
 第16図 三騎堂6区1号粘土採掘坑（1号廃滓坑）
 第17図 見切塚5区1号竪形炉
 第18図 見切塚5区1号竪形炉炉体
 第19図 見切塚5区2号～4号竪形炉
 第20図 見切塚5区2号～4号竪形炉掘方、5号竪形炉、1号廃滓坑
 第21図 見切塚1区1号鍛冶
 第22図 三騎堂1区1号炭窯
 第23図 三騎堂1区3号炭窯
 第24図 三騎堂1区4号炭窯
 第25図 三騎堂1区5号炭窯
 第26図 三騎堂1区6号炭窯
 第27図 三騎堂1区7号炭窯
 第28図 三騎堂1区8号炭窯
 第29図 三騎堂3区3号炭窯 第1面
 第30図 三騎堂3区3号炭窯 第4面
 第31図 三騎堂5区1号炭窯 第2面
 第32図 三騎堂5区1号炭窯 第3面
 第33図 三騎堂5区1号炭窯作業場・煙道掘方
 第34図 三騎堂4区7号炭窯
 第35図 見切塚1区3号炭窯 第1面
 第36図 見切塚1区3号炭窯 第4面
 第37図 見切塚1区7号炭窯 第1面
 第38図 見切塚1区7号炭窯 第1面（2）・第4面
 第39図 見切塚1区8号炭窯
 第40図 見切塚1区9号炭窯 第1面
 第41図 見切塚1区9号炭窯 第1面（2）・第4面
 第42図 見切塚1区11号炭窯 第1面
 第43図 見切塚1区11号炭窯 第1面（2）・第3面
 第44図 見切塚1区9号・11号炭窯横穴
 第45図 見切塚4区1号炭窯
 第46図 見切塚5区2号炭窯、5区10号炭窯 第6面
 第47図 見切塚5区10号炭窯 第1面
 第48図 見切塚5区9号炭窯 第1面
 第49図 見切塚5区9号炭窯 第5面
 第50図 見切塚5区14号炭窯
 第51図 見切塚5区17・19号炭窯
 第52図 見切塚6区1号炭窯
 第53図 見切塚7区3号炭窯
 第54図 三騎堂1区2号、3区1号炭窯
 第55図 三騎堂3区2号、4区1号炭窯
 第56図 三騎堂4区5号、6区2号・3号炭窯
 第57図 見切塚1区2号・5号・6号炭窯
 第58図 見切塚1区12号、2区1号・2号炭窯
 第59図 見切塚2区3号・4号・6号炭窯
 第60図 見切塚2区7号炭窯
 第61図 見切塚2区5号、5区3号炭窯
 第62図 見切塚5区4号・5号炭窯
 第63図 見切塚5区6号・11号炭窯
 第64図 見切塚5区15号・16号炭窯
 第65図 見切塚5区20号炭窯
 第66図 見切塚5区18号・21号・22号炭窯
 第67図 見切塚7区1号炭窯
 第68図 見切塚7区2号炭窯
 第69図 見切塚7区4号・5号炭窯
 第70図 見切塚7区6号炭窯
 第71図 三騎堂H1号住居
 第72図 三騎堂H2号住居
 第73図 三騎堂H3号住居
 第74図 三騎堂H4号住居
 第75図 三騎堂H5号住居
 第76図 三騎堂H6号住居
 第77図 三騎堂H7号住居（1）
 第78図 三騎堂H7号住居（2）
 第79図 三騎堂H7号住居（3）
 第80図 三騎堂H8号住居
 第81図 三騎堂H9号住居
 第82図 三騎堂H10号住居（1）
 第83図 三騎堂H10号住居（2）
 第84図 三騎堂H11号住居
 第85図 三騎堂H12号住居（1）
 第86図 三騎堂H12号住居（2）
 第87図 三騎堂H13号住居
 第88図 三騎堂H15号住居
 第89図 三騎堂H14号住居
 第90図 三騎堂H16号住居
 第91図 三騎堂H17号住居
 第92図 三騎堂H18号住居
 第93図 見切塚H1号住居
 第94図 見切塚H2号住居
 第95図 見切塚H3号住居
 第96図 見切塚H4号住居
 第97図 見切塚H5号住居
 第98図 見切塚H6号住居（1）
 第99図 見切塚H6号住居（2）
 第100図 見切塚H7号住居
 第101図 三騎堂3区1号～3号火葬墓
 第102図 三騎堂5区西側火葬墓分布図
 第103図 三騎堂5区1号～3号火葬墓
 第104図 三騎堂5区4号・5号火葬墓
 第105図 三騎堂5区6号～8号火葬墓
 第106図 三騎堂5区15号・16号、6区1号火葬墓
 第107図 見切塚1区1号～4号火葬墓
 第108図 見切塚5区火葬墓分布図
 第109図 見切塚1区5号、5区1号～6号火葬墓
 第110図 見切塚5区3号～10号火葬墓
 第111図 三騎堂1区1号道状遺構、6区1号方形周溝
 第112図 見切塚5区1号竪穴
 第113図 三騎堂4区1号、6区1号～3号土坑墓
 第114図 見切塚7区1号～6号・9号土坑墓
 第115図 見切塚7区7号・8号・10号～13号土坑墓
 第116図 三騎堂4区2号炭窯
 第117図 三騎堂4区3号炭窯
 第118図 三騎堂4区4号炭窯
 第119図 三騎堂4区6号炭窯

第120図 三騎堂5区2号炭窯
第121図 三騎堂5区3号炭窯
第122図 三騎堂6区1号炭窯
第123図 見切塚5区1号・7号・8号炭窯
第124図 見切塚5区1号炭窯
第125図 見切塚5区3号竪穴
第126図 見切塚5区2号竪穴

第127図 三騎堂4区1号～4号溝
第128図 三騎堂6区1号・2号、1号掘立柱建物
第129図 三騎堂6区2号粘土探掘坑
第130図 見切塚3区1号竪穴
第131図 見切塚3区1号・2号溜井
第132図 見切塚1区1号・2号溝
第133図 見切塚7区1号・2号溝

出土遺物図目次

第134図 三騎堂4区1号竪形炉出土羽口
第135図 三騎堂4区2号竪形炉出土羽口(1)
第136図 三騎堂4区2号竪形炉出土羽口(2)
第137図 三騎堂6区1号竪形炉出土羽口(1)
第138図 三騎堂6区1号竪形炉出土羽口(2)
第139図 出土遺物実測図(1)
三:4区廃滓場 三:6区1号竪形炉 見:5区1号竪形炉
見:1区1号鍛冶
第140図 出土遺物実測図(2)
見:1区1号鍛冶
第141図 出土遺物実測図(3)
見:1区1号鍛冶 三:4区7号炭窯
第142図 出土遺物実測図(4)
三:1区3号炭窯 見:5区14号炭窯
見:5区15・17号炭窯 見:1区3号炭窯
見:5区19号炭窯 見:4区1号炭窯
見:5区15号炭窯 見:7区5号炭窯
見:5区15号炭窯
三:H1号住居 三:H2号住居 三:H3号住居
第143図 出土遺物実測図(5)
三:H4号住居 三:H6号住居 三:H7号住居
第144図 出土遺物実測図(6)
三:H7号住居
第145図 出土遺物実測図(7)
三:H7号住居 三:H8号住居
第146図 出土遺物実測図(8)
三:H8号住居 三:H9号住居
第147図 出土遺物実測図(9)
三:H9号住居 三:H10号住居 三:H11号住居
三:H12号住居
第148図 出土遺物実測図(10)
三:H12号住居 三:H13号住居
第149図 出土遺物実測図(11)
三:H14号住居 三:H15号住居 三:H16号住居
第150図 出土遺物実測図(12)
三:H16号住居 三:H17号住居 三:H18号住居
第151図 出土遺物実測図(13)
三:H17号住居 三:H18号住居 見:H1号住居
見:H3号住居 見:H2号住居
第152図 出土遺物実測図(14)
見:H4号住居 見:H5号住居 見:H6号住居
第153図 出土遺物実測図(15)
見:H6号住居 三:3区1号火葬墓

第154図 出土遺物実測図(16)
三:3区1号火葬墓 三:5区2号火葬墓
三:5区4号火葬墓
第155図 出土遺物実測図(17)
三:5区4号火葬墓 三:5区15号火葬墓
三:6区1号火葬墓 見:1区3号火葬墓
第156図 出土遺物実測図(18)
見:1区3号火葬墓 見:1区4号火葬墓
見:5区3・5号火葬墓
第157図 出土遺物実測図(19)
見:5区8号火葬墓 見:5区9号火葬墓
三:4区1号土坑墓
第158図 出土遺物実測図(20)
三:4区1号土坑墓 三:6区1号土坑墓
第159図 出土遺物実測図(21)
三:6区1号土坑墓 三:6区2号土坑墓
三:6区3号土坑墓
第160図 出土遺物実測図(22)
三:6区3号土坑墓 見:7区1号土坑墓
見:7区3号土坑墓 見:7区2号土坑墓
第161図 出土遺物実測図(23)
見:7区3号土坑墓 見:7区7号土坑墓
見:7区7号土坑墓 見:7区8号土坑墓
見:7区10号土坑墓 見:7区9号土坑墓
見:7区11号土坑墓 見:7区12号土坑墓
第162図 出土遺物実測図(24)
見:7区12号土坑墓 三:6区1号炭窯
第163図 出土遺物実測図(25)
三:6区1号炭窯 三:4区1号溝 三:4区谷地砂層
三:6区2号粘土探掘坑
第164図 出土遺物実測図(26)
見:3区1号溜井
第165図 出土遺物実測図(27)
見:3区2号溜井 見:3区1号竪穴 見:1区2号溝
見:7区13号土坑 三:4区 三:5区
第166図 出土遺物実測図(28)
三:5区
第167図 出土遺物実測図(29)
三:6区 見:1区
第168図 出土遺物実測図(30)
見:1区 見:6区 見:7区 見:2区
見:5区

遺構写真図版目次

PL-1
三騎堂 4区・6区製鉄関連遺構全景 左が6区、右奥が4区
(南)
三騎堂 4区製鉄関連遺構全景 左下は近代横井戸(東)
PL-2
三騎堂 4区製鉄関連遺構全景(北東)
三騎堂 4区1号竪形炉(東)
三騎堂 4区1号竪形炉体(南)

三騎堂 4区1号竪形炉石組み(作業場)
PL-3
三騎堂 4区2号竪形炉輪座(西)
三騎堂 4区2号竪形炉輪座(北)
三騎堂 4区2号竪形炉(東)
三騎堂 4区2号竪形炉炉体(東)
三騎堂 4区2号竪形炉羽口出土状態(北)
三騎堂 4区2号竪形炉羽口出土状態(東)

- 三騎堂 4区2号豎形炉作業場(東)
- L-4
三騎堂 4区2号豎形炉炉底(東)
三騎堂 4区1号作業場(東)
三騎堂 4区1号作業場焼土近接(南東)
三騎堂 4区1号作業場焼土近接(東)
三騎堂 4区1号炭置き場(東)
- PL-5
三騎堂 4区1号炭置き場炭出土状態(東)
三騎堂 4区1号炭置き場炭除去後(南東)
三騎堂 4区1号炭置き場掘方(東)
三騎堂 6区1号粘土採掘坑(北西)
三騎堂 6区1号粘土採掘坑近接(北西)
- PL-6
三騎堂 6区1号粘土採掘坑近接(南東)
三騎堂 6区4号廃滓坑(南東)
三騎堂 6区1号豎形炉(南)
三騎堂 6区1号豎形炉羽口出土状態(南)
三騎堂 6区1号豎形炉羽口出土状態近接(北)
- PL-7
三騎堂 6区1号豎形炉炉体(南)
三騎堂 6区1号豎形炉炉体近接(南)
三騎堂 6区1号豎形炉炉体近接(南)
三騎堂 6区1号豎形炉炉体掘方(南)
三騎堂 6区3号廃滓坑(南東)
三騎堂 6区2号廃滓坑(南西)
見切塚 5区1号豎形炉(南東)
- PL-8
見切塚 5区1号豎形炉(北)
見切塚 5区1号豎形炉炉体(北東)
見切塚 5区2号から5号豎形炉(南東)
見切塚 1区1号鍛冶(南)
見切塚 1区1号鍛冶近接(南)
見切塚 1区1号鍛冶近接(南)
- PL-9
見切塚 1区1号鍛冶内土坑礫出土状態(南)
見切塚 1区1号鍛冶内土坑(南)
三騎堂 1区1号炭窯(西)
三騎堂 1区1号炭窯(東)
三騎堂 1区1号炭窯煙道(南)
三騎堂 1区3号炭窯須恵器出土状態(南西)
三騎堂 1区3号炭窯煙道口と排煙口(南)
- PL-10
三騎堂 1区3・8号炭窯(真上)
三騎堂 1区3・8号炭窯(南西)
三騎堂 1区3号炭窯煙道(東)
三騎堂 1区4号炭窯近接(北西)
三騎堂 1区4号炭窯(真上)
三騎堂 1区4号炭窯煙道口と排煙口(南西)
- PL-11
三騎堂 1区5号炭窯(南東)
三騎堂 1区5号炭窯作業場(南東)
三騎堂 1区5号炭窯東壁(北)
三騎堂 1区6・7号炭窯(真上)
三騎堂 1区6・7号炭窯(南西)
三騎堂 1区6・7号炭窯(南西)
- PL-12
三騎堂 1区7号炭窯煙道口と排煙口(北)
三騎堂 1区7号炭窯煙道断面(西)
三騎堂 3区3号炭窯と排土置き場(北東)
三騎堂 3区3号炭窯(北東)
三騎堂 3区3号炭窯(南西)
- 三騎堂 同3面奥壁付近炭出土状態(北東)
- PL-13
三騎堂 4区7号炭窯(北東)
三騎堂 4区7号炭窯(東)
三騎堂 4区4号炭窯西壁遺物出土状態(東)
三騎堂 5区1号炭窯(南東)
三騎堂 5区1号炭窯3面炭出土状態(北西)
- PL-14
三騎堂 5区1号炭窯煙道断面(南東)
三騎堂 5区1号炭窯壁工具痕(南西)
三騎堂 同炭窯煙道口掘り直し(右が排煙口に続く)
見切塚 1区3号炭窯3面(北)
見切塚 1区3号炭窯4面(南)
- PL-15
見切塚 1区3号炭窯第1面奥壁に岩(北)
見切塚 1区3号炭窯遺物出土状態(南)
見切塚 1区3号炭窯煙道口石組(北西)
見切塚 1区7号炭窯1面(北)
見切塚 1区3号炭窯1面地山岩(北)
見切塚 1区7号炭窯3面作業場出土遺物(北東)
- PL-16
見切塚 1区7号炭窯1面(北)
見切塚 1区7号炭窯1面炭化室(北)
見切塚 1区8号炭窯1面奥は3号炭窯(北)
見切塚 1区8号炭窯3面(北)
- PL-17
見切塚 1区9号炭窯4面(北東)
見切塚 1区9号炭窯4面(南西)
見切塚 1区9号炭窯炭出土状態(北東)
見切塚 1区9号炭窯炭出土状態(北東)
見切塚 1区9号炭窯1面(北東)
見切塚 1区11号炭窯3面(北)
- PL-18
見切塚 1区11・9・7号炭窯全景(北)
見切塚 1区9号炭窯奥壁横穴(北)
見切塚 4区1号炭窯9面炭化室(東)
見切塚 4区1号炭窯9面(東)
見切塚 4区1号炭窯9面遺物出土状態(東)
見切塚 5区2号炭窯奥壁横穴近接(南東)
- PL-19
見切塚 5区2号炭窯(南東)
見切塚 5区2号炭窯(南東)
見切塚 5区9号炭窯4面(南東)
見切塚 5区9号炭窯6面(南)
- PL-20
見切塚 5区10号炭窯5面(南東)
見切塚 5区10号炭窯1面(南東)
見切塚 5区10・17号炭窯(北西)
見切塚 5区17・10号炭窯(南東)
見切塚 5区17号炭窯1面(南東)
見切塚 5区19号炭窯(西)
- PL-21
見切塚 5区19号炭窯(東)
見切塚 5区19号炭窯鉄滓、土器出土状態(北)
見切塚 6区1号炭窯1面(南)
見切塚 6区1号炭窯5面(南)
- PL-22
見切塚 7区3号炭窯4面(南)
見切塚 7区3号炭窯1面(南)
見切塚 7区3号炭窯奥壁横穴(南)
見切塚 7区3号炭窯横穴近接(南)
見切塚 1区2号炭窯(北東)

見切塚 1区2号炭窯炭出土状態(北)
P L-23
見切塚 1区6号炭窯(南西)
見切塚 1区6号炭窯煙道(南東)
見切塚 1区5号炭窯(西)
見切塚 2区1号炭窯(北西)
見切塚 2区2号炭窯(東)
見切塚 2区3号炭窯(西)
見切塚 2区4号炭窯(北)
見切塚 2区5号炭窯(南西)
P L-24
見切塚 2区6号炭窯(北西)
見切塚 2区7号炭窯(北西)
見切塚 5区3号炭窯(南東)
見切塚 5区3号炭窯煙道(南東)
見切塚 5区4号炭窯(南東)
見切塚 5区4号炭窯炭出土状態
見切塚 7区6号炭窯(南)
見切塚 7区6号炭窯炭出土状態
P L-25
見切塚 7区1号炭窯(西)
見切塚 7区1号炭窯炭出土状態(西)
見切塚 7区1号炭窯奥壁付近炭出土状態(西)
見切塚 7区2号炭窯(西)
見切塚 7区2号炭窯炭出土状態(西)
見切塚 7区2号炭窯煙道(南)
P L-26
見切塚 7区5号炭窯(北西)
見切塚 7区5号炭窯炭出土状態(北西)
見切塚 7区5号炭窯煙道(北西)
三騎堂 H3号住居(南西)
三騎堂 H3号住居鍛冶滓出土状態
三騎堂 H3号住居竈(西)
三騎堂 H3号住居竈(北)
P L-27
三騎堂 H4号住居(東)
三騎堂 H4号住居(南)
三騎堂 H5号住居(西)
三騎堂 H6号住居(西)
三騎堂 H7号住居遺物出土状態(南西)
三騎堂 H7号住居(南西)
三騎堂 H7号住居1号竈(南西)
三騎堂 H8号住居(北西)
P L-28
三騎堂 H9号住居(西)
三騎堂 H10号住居(西)
三騎堂 H10号住居遺物出土状態(南)
三騎堂 H11号住居(西)
三騎堂 H12号住居(西)
三騎堂 H12号住居竈(西)
三騎堂 H13号住居遺物出土状態(西)
三騎堂 H13号住居(西)
P L-29
三騎堂 H14号住居(西)
三騎堂 H15号住居(西)
三騎堂 H16号住居(西)
三騎堂 H17号住居(西)
三騎堂 H17号住居南東隅遺物出土状態(西)
見切塚 H2号住居(西)
見切塚 H4号住居(北西)
見切塚 H4号住居竈遺物出土状態(北)
P L-30

見切塚 H6号住居遺物出土状態(西)
見切塚 H6号住居(西)
見切塚 H6号住居竈(西)
見切塚 H6号住居竈脇遺物出土状態(西)
三騎堂 5区1号火葬墓(北)
三騎堂 5区2号火葬墓(北)
三騎堂 5区3号火葬墓(東)
三騎堂 5区4号火葬墓1面(南)
P L-31
三騎堂 5区4号火葬墓2面(南)
三騎堂 5区4号火葬墓4面(東)
三騎堂 5区4号火葬墓3面(東)
三騎堂 5区4号火葬墓藏骨器近接
三騎堂 5区5号火葬墓(東)
三騎堂 5区6号火葬墓(南)
三騎堂 5区7号火葬墓(東)
三騎堂 5区8号火葬墓(南)
P L-32
三騎堂 5区9号火葬墓(北)
三騎堂 5区10号火葬墓(北)
三騎堂 5区14号火葬墓(南)
三騎堂 5区16号火葬墓(東)
三騎堂 5区15号火葬墓1面(東)
三騎堂 5区15号火葬墓2面(東)
三騎堂 5区15号火葬墓3面(南)
三騎堂 5区15号火葬墓3面近接(北)
P L-33
三騎堂 5区15号火葬墓3面須恵器出土状態
三騎堂 5区15号火葬墓掘方(南)
三騎堂 6区1号火葬墓1面(南東)
三騎堂 6区1号火葬墓2面(南)
三騎堂 6区2号火葬墓(南)
三騎堂 6区3号火葬墓(東)
見切塚 1区1・2号火葬墓(東)
見切塚 1区3号火葬墓1面(南)
P L-34
見切塚 1区3号火葬墓2面(南東)
見切塚 1区4号火葬墓1面(西)
見切塚 1区4号火葬墓2面(東)
見切塚 1区4号火葬墓3面(西)
見切塚 1区5号火葬墓1面(西)
見切塚 5区3から6号火葬墓(南)
見切塚 江戸以降集石(参考)
見切塚 江戸以降集石陶器出土状態(参考)
P L-35
見切塚 5区2号火葬墓(南)
見切塚 5区3号火葬墓(南)
見切塚 5区4号火葬墓(南)
見切塚 5区5号火葬墓(南)
見切塚 5区6号火葬墓(南)
見切塚 5区7号火葬墓(南)
見切塚 5区8号火葬墓(西)
見切塚 5区8号火葬墓藏骨器出土状態(西)
P L-36
見切塚 5区8号火葬墓藏骨器蓋除去後
見切塚 5区8号火葬墓焼骨出土状態
見切塚 5区8号火葬墓藏骨器出土状態断面
見切塚 5区9・10号火葬墓(南)
三騎堂 1区1号道状遺構(南東)
三騎堂 1区1号道状遺構近接(南東)
三騎堂 1区1号道状遺構硬化面近接
三騎堂 6区1号方形周溝(南東)

PL-37

- 見切塚 5区1号竖穴(東)
- 三騎堂 4区1号土坑墓1面(南西)
- 三騎堂 4区1号土坑墓2面(南西)
- 三騎堂 4区1号土坑墓3面(南西)
- 三騎堂 4区1号土坑墓3面(北東)
- 三騎堂 4区1号土坑墓4面(北東)
- 三騎堂 6区1号土坑墓(南)
- 三騎堂 6区1号土坑墓近接(北)

PL-38

- 三騎堂 6区2号土坑墓(南西)
- 三騎堂 6区2号土坑墓頭蓋骨近接(南)
- 三騎堂 6区2号土坑墓遺物出土状態(東)
- 三騎堂 6区3号土坑墓(北)
- 見切塚 7区1・2号土坑墓(南)
- 見切塚 7区3号土坑墓(南)
- 見切塚 7区4号土坑墓(南)
- 見切塚 7区5号土坑墓(南西)

PL-39

- 見切塚 7区6号土坑墓(南)
- 見切塚 7区6号土坑墓齒出土状態(東)
- 見切塚 7区7号土坑墓(南西)
- 見切塚 7区8号土坑墓(南東)
- 見切塚 7区9号土坑墓(南)
- 見切塚 7区9号土坑墓遺物出土状態
- 見切塚 7区10号土坑墓(西)
- 見切塚 7区11号土坑墓(西)

PL-40

- 見切塚 7区11号土坑墓齒・遺物出土状態

- 見切塚 7区12号土坑墓(西)
- 見切塚 7区13号土坑墓(西)
- 三騎堂 4区3号炭窯(東)
- 三騎堂 4区3号炭窯奥壁・煙道(東)
- 三騎堂 4区3号炭窯焚き口(東)
- 三騎堂 6区1号炭窯(南東)

PL-41

- 三騎堂 6区1号炭窯排煙口と炭化室(北西)
- 三騎堂 6区1号炭窯床面(北西)
- 三騎堂 6区1号炭窯北壁(南西)
- 三騎堂 6区1号炭窯北壁中の石臼
- 三騎堂 6区1号炭窯煙道(南東)
- 三騎堂 6区1号炭窯煙道口(南東)

PL-42

- 見切塚 5区7号炭窯(南東)
- 見切塚 5区7号炭窯煙道口(南東)
- 見切塚 3区1号竖穴(北)
- 見切塚 3区1号竖穴(東)
- 見切塚 3区1号溜井(北東)
- 見切塚 3区1・2号溜井(西)
- 見切塚 3区2号溜井(北)

PL-43

- 見切塚 3区1号溜井底部(東)
- 三騎堂 4区1号溝(北)
- 三騎堂 4区1号溝(北)
- 三騎堂 4区2・3号溝(北)
- 見切塚 1区1号溝(北)
- 見切塚 1区2号溝(東)

遺物写真図版目次

PL-44

- 三：4区麿滓 見切塚：1区1鍛冶

PL-45

- 見：1区1鍛冶 三：1区3炭 見：4区1炭
- 見：5区19炭 見：1区3炭 見：5区15・17炭
- 三：H2住 三：H1住

PL-46

- 三：H2住 三：H3住 三：H6住
- 三：H4住 三：H7住

PL-47

- 三：H7住 三：H8住

PL-48

- 三：H8住 三：H9住 三：H10住 三：H12住

PL-49

- 三：H12住 三：H13住 三：H14住 三：H15住

PL-50

- 三：H15住 三：H16住 三：H17住 三：H18住
- 見：H2住

PL-51

- 見：H4住 見：H6住

PL-52

- 見：H6住 三：5区4火 三：5区15火

PL-53

- 見：1区3火 見：1区4火 見：5区8火
- 見：5区3・5火

PL-54

- 見：5区9火 三：4区1墓 三：6区1墓
- 三：6区3墓

PL-55

- 三：6区3墓 見：7区1墓 見：7区2墓
- 見：7区3墓 見：7区7墓

PL-56

- 見：7区7墓 見：7区8墓 見：7区9墓
- 見：7区10墓 見：7区11墓 見：7区12墓
- 三：6区1炭

PL-57

- 三：6区1炭 見：3区1溜 三：4区谷
- 見：1区2溝

PL-58

- 三：4区 三：5区 三：6区 見：1区

PL-59

- 見：1区 見：2区 見：5区 見：6区 見：7区

PL-60

- 三：4区2号竖形炉出土羽口 内面近接

PL-61

- 三：6区1号竖形炉出土羽口 内面近接
- 三：6区1号竖形炉出土炉壁 内面近接

PL-62

- 三：6区1号竖形炉出土炉壁 上部断面近接
- 三：6区1号竖形炉出土炉壁 羽口側断面近接
- 三：6区1号竖形炉出土羽口 炉壁側断面近接

表目次

第1章

- 表1 周辺の遺跡一覧

第2章

- 表2 三騎堂 遺構別鉄滓・炉壁出土重量表
- 表3 出土遺物観察表

三騎堂 4区1号竪形炉出土遺物
 三騎堂 4区2号竪形炉出土遺物
 三騎堂 4区廃滓場出土遺物
 三騎堂 6区1号竪形炉出土遺物
 見切塚 5区1号竪形炉出土遺物
 見切塚 1区1号鍛冶出土遺物
 三騎堂 4区7号炭窯出土遺物
 三騎堂 1区3号炭窯出土遺物
 見切塚 1区3号炭窯出土遺物
 見切塚 4区1号炭窯出土遺物
 見切塚 5区9号炭窯出土遺物
 見切塚 5区14号炭窯出土遺物
 見切塚 5区15号炭窯出土遺物
 見切塚 5区15・17号炭窯出土遺物
 見切塚 5区19号炭窯出土遺物
 見切塚 7区5号炭窯出土遺物
 三騎堂 H1号住居出土遺物
 三騎堂 H2号住居出土遺物
 三騎堂 H3号住居出土遺物
 三騎堂 H4号住居出土遺物
 三騎堂 H6号住居出土遺物
 三騎堂 H7号住居出土遺物
 三騎堂 H8号住居出土遺物
 三騎堂 H9号住居出土遺物
 三騎堂 H10号住居出土遺物
 三騎堂 H11号住居出土遺物
 三騎堂 H12号住居出土遺物
 三騎堂 H13号住居出土遺物
 三騎堂 H14号住居出土遺物
 三騎堂 H15号住居出土遺物
 三騎堂 H16号住居出土遺物
 三騎堂 H17号住居出土遺物
 三騎堂 H18号住居出土遺物
 見切塚 H1号住居出土遺物
 見切塚 H2号住居出土遺物
 見切塚 H3号住居出土遺物
 見切塚 H4号住居出土遺物
 見切塚 H5号住居出土遺物
 見切塚 H6号住居出土遺物
 三騎堂 3区1号火葬墓出土遺物
 三騎堂 5区2号火葬墓出土遺物
 三騎堂 5区4号火葬墓出土遺物
 三騎堂 5区15号火葬墓出土遺物
 三騎堂 6区1号火葬墓出土遺物
 見切塚 1区3号火葬墓出土遺物
 見切塚 1区4号火葬墓出土遺物
 見切塚 5区3・5号火葬墓出土遺物
 見切塚 5区8号火葬墓出土遺物
 見切塚 5区9号火葬墓出土遺物
 三騎堂 4区1号土坑墓出土遺物
 三騎堂 6区1号土坑墓出土遺物
 三騎堂 6区2号土坑墓出土遺物
 三騎堂 6区3号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区1号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区2号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区3号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区7号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区8号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区9号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区10号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区11号土坑墓出土遺物
 見切塚 7区12号土坑墓出土遺物

三騎堂 6区1号炭窯出土遺物
 三騎堂 4区1号溝出土遺物
 三騎堂 4区谷地砂層出土遺物
 三騎堂 6区2号粘土採掘坑出土遺物
 見切塚 3区1号溜井出土遺物
 見切塚 3区2号溜井出土遺物
 見切塚 3区1号竪穴出土遺物
 見切塚 1区2号溝出土遺物
 見切塚 7区13号土坑出土遺物
 三騎堂 4区遺構外出土遺物
 三騎堂 5区遺構外出土遺物
 三騎堂 6区遺構外出土遺物
 見切塚 1区遺構外出土遺物
 見切塚 2区遺構外出土遺物
 見切塚 5区遺構外出土遺物
 見切塚 6区遺構外出土遺物
 見切塚 7区遺構外出土遺物

第3章

第1節 今井見切塚遺跡6区1号炭窯から出土した炭化材の樹種

表1 樹種同定結果

第2節 今井見切塚遺跡の炭窯から出土した炭化材の樹種同定

表1 今井見切塚遺跡の炭化材樹種同定試料リスト

表2 今井見切塚遺跡B地点1区2号炭窯出土炭化材

No1～52の樹種同定結果

表3 今井見切塚遺跡B地点2区1号炭窯出土炭化材

No1～60の樹種同定結果

表4 今井見切塚遺跡B地点2区2号炭窯出土炭化材

No1～23の樹種同定結果

表5 今井見切塚遺跡B地点2区3号炭窯出土炭化材

No1～24の樹種同定結果

表6 今井見切塚遺跡B地点2区5号炭窯出土炭化材

No1～36の樹種同定結果

表7 今井見切塚遺跡B地点2区6号炭窯出土炭化材

No1～24の樹種同定結果

表8 今井見切塚遺跡B地点2区7号炭窯出土炭化材

No1～67の樹種同定結果

第3節 今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡出土

炭化材の樹種同定

表1 今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡の炭窯内の

炭化材調査試料リスト

表2 今井見切塚遺跡1区9号炭窯出土炭化材の

樹種・形状・樹齢などの記録

表3 今井三騎堂遺跡3区3号炭窯出土炭化材の

樹種・形状・樹齢などの記録

表4 炭窯より出土したクヌギ材の年輪数と

年輪最終部位

第4節 人骨

今井三騎堂遺跡出土人骨

表1 今井三騎堂遺跡出土人骨まとめ

表2 今井三騎堂遺跡出土人骨頭蓋骨非計測的形質観察表

表3 今井三騎堂遺跡出土人骨頭蓋骨計測値及び比較表

表4 今井三騎堂遺跡出土人骨人骨値及び比較表

表5 今井三騎堂遺跡出土人骨歯冠非計測的形質観察表

表6 今井三騎堂遺跡出土人骨四肢骨計測値及び比較表

今井見切塚遺跡出土人骨

表1 今井見切塚遺跡出土人骨まとめ

表2 今井見切塚遺跡7区出土人骨歯冠計測値及び比較表

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 調査の方法と経過

発掘調査に至る経過は、本シリーズ第1集『多田山古墳群』において述べられているので、ここでは省略する。

調査の方法

他の遺跡同様表土掘削をバックホーで行った後、プラン確認を実施し遺構の発掘を行った。測量に使用した基準に関しては例言に記したとおりである。次に遺構の調査であるが、地下式炭窯のうち、見切塚遺跡では各操業面を面的に把握し、各面毎に平面調査を行う方法をとった。一方、三騎堂のほとんどは断面観察で操業面や、清掃時の掘削などを確実におさえる方法をとった。伏窯は竪穴住居などと同様な調査方法で、残せる範囲の木炭は図示する方針で臨んだ。

第2節 地理的環境

遺跡が存在した多田山は、赤城山南麓の低台地南端に位置する約20万年前の火砕流堆積物が形成した「流れ山」で、南北約2km、東西約1kmの丘陵状をなす。周辺との最大比高差は約40mと高く、遠方からでも比較的容易に分かる。そのためか、かつては、粕川村、前橋市、赤堀町の行政的な境ともなっていた。特に南北に延びた丘陵稜線はそのまま前橋市と赤堀町（現伊勢崎市赤堀今井町）の境となっている。それゆえ、旧赤堀町側では「緑の松の多田山の」と小学校校歌に歌われ、前橋側では大室カルタに詠まれるなど周辺地域のランドマーク的存在となっていた。

今井見切塚遺跡、今井三騎堂遺跡は、群馬県前橋市東大室町から群馬県伊勢崎市赤堀今井町にかけて所在する。この地域は、赤城山南麓地域にあたり、北には那須火山帯南端に位置する複合成層火山、赤城山が聳える。最高峰黒松山の標高は1,828mと高

竪形炉の調査は、調査期間の制約から、形状を記録する程度の調査となった。また、調査時に取り上げ可能な炉壁は持ち帰り、後日に備えた。また、羽口と判断された精良な粘土で作られた炉壁片は小片であっても遺物として扱うことにした。

火葬墓は元位置を留めるものがほとんどなかったが、その場所を大きく移動していない可能性も考慮し、すべて1/10で記録図を作成した。

調査の経過

歴史時代の遺構は多田山丘陵全体に分布しており、例言に記した調査期間内すべてにわたって調査をおこなっており、特筆すべき点はない。

I層	表土（浅間A軽石を含む）
II-1層	中近世遺物包含層 （浅間A・B軽石を含む）
II-2層	浅間B軽石層
III層	古墳時代遺物包含層 （二ツ岳パミス・浅間C軽石含む）
IV層	縄文時代遺物包含層
V層	ローム漸移層
VI~X層	ローム層 （うち、VII・VIII層は暗色帯）

第1図 基本土層

く、上部は山岳地形をなす。しかし、標高500m付近で地形が丘陵性の台地地形に大きく変換し、広大な裾野を形成している。赤城山北西麓は比較的大規模な輻射谷が発達した丘陵性台地であるが、南麓で

は浅い輻射谷と「馬の背」状を呈した狭い丘陵性台地が広がっている。台地は標高200m付近から下位は底台地化しており、中腹や山麓から流れ出る河川や湧水により樹枝状に開析されている。

第3節 周辺の遺跡

奈良・平安時代の多田山

多田山は古墳の存在と共に古くから平安時代の石製蔵骨器を使用した火葬墓群が存在することで広く知られていた。同様な火葬墓は大正15年には「佐波郡三郷村波志江」から「石櫃十数個」の出土(注)が報じられ、蔵骨器と推定している。多田山では、丘陵東斜面(赤堀町)から昭和28年、開墾中に石製蔵骨器が出土し、群馬大学史学研究室が調査を行い、A、B、Cの3基を発掘した(注)。その後、昭和33年に「群馬県における上代火葬墓」と題する論文が発表され、石製蔵骨器の分類を行うと共に、この種の火葬墓が「赤城山南麓を中心とした地域に圧倒的に多い」とされ、出土状態が判明し、かつ骨が存在した稀有な例として注目されてきた。昭和49年には道路工事(赤堀町域)で更に1基出土している。

確認された数は文献により若干の相違があるが13基を下回らない数が確認されていることは確かである。また、西斜面の前橋市側からも石製蔵骨器の出土(注)が報じられている。前者の出土地点は今井三騎堂5区から6区に相当し、後者は今井見切塚遺跡1区に相当、若しくは1区から転落した蔵骨器と考えられる。これら石製蔵骨器出土数は今井見切塚遺跡、今井三騎堂遺跡発掘調査開始時点において県下第2の出土数である。

石製蔵骨器を伴う火葬墓以外に赤城山南麓地域の

奈良・平安時代を特徴づける遺構に製鉄がある。多田山も火葬墓ほど広く知られてはいなかったが、製鉄遺構が存在することも確認されていた。昭和44年、宮城村『片並木遺跡—赤城山南面の製鉄遺跡—』を報告した井上唯雄氏は、群馬県内の製鉄関係遺跡の一つとして「多田山東麓遺跡」を紹介し、炉壁や鉄滓の出土を報じている。この場所は、鉄滓出土場所の5m程南に池が存在すると記述され、発掘調査開始前の観察でも池北側の畑(調査区外)に鉄滓と炉壁の分布が、調査区との段差部分には焼土も認められ、「多田山東麓遺跡」は今井見切塚遺跡5区に相当すると判断された。

多田山周辺の前橋市荒砥地区や赤堀町域は県下でも遺跡発掘調査が多く行われている地域の一つである。多田山の麓に限っても西側の前橋市域では、荒砥五反田遺跡(24)、荒砥上川久保遺跡(23)などがある。いずれも古墳時代後期の竪穴住居を中心とし、奈良・平安時代の竪穴住居数が次ぐ点で共通する。荒砥上川久保遺跡では、小鍛冶遺構が1基確認されている。

東側の旧赤堀町域では、田向遺跡(26)、向井遺跡(27)、多田山東遺跡(28)などが調査されている。いずれも古墳時代後期を主体として奈良・平安時代には竪穴住居数は減少するものの、集落が継続する状況が伺える。

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地(合併前)	遺跡の概要	文献
1	今井三騎堂遺跡 今井見切塚遺跡		本書に所収	
2	乙西尾引遺跡	大胡町堀越字乙尾引	8世紀中頃から9世紀前半の竪形炉。地下式炭窯1基などを確認。	1
3	堀越丁二本松遺跡	大胡町堀越字丁二本松	9世紀後半小鍛冶遺構1基、時期不詳の伏せ窯方による製炭窯1基を確認。伏せ窯は焚口、煙道施設を有する。	2
4	真木遺跡	大胡町	石製蔵骨器を使用した火葬墓を確認。周辺の遺跡にて紹介される。	2
5	河原古墓	大胡町河原	削り抜き式石製蔵骨器1点の出土が知られる	3・4
6	上大屋・樋越地区遺跡群	大胡町上大屋・樋越	斜面から半地下式竪形炉とそれに伴う地下式炭窯を確認。付近からは須恵器窯も確認されている。	5
7	柳久保遺跡Ⅶ遺跡	前橋市荒子町字柳久保	土坑内から石製蔵骨器の身が単独で出土。	6
8	片並木遺跡	宮城村苗ヶ島片並木	9世紀代の竪形炉1基、竪穴住居1軒	7
9	苗ヶ島火葬墓	宮城村苗ヶ島	開壘時に石製蔵骨器の身が1点出土している。	3・4
10	室沢	粕川村室沢	石製蔵骨器が開壘時に出土した記録が残る。	4・8
11	長峯火葬墓群	粕川村月田字長峯	開壘時に石製蔵骨器が複数出土。実測図は身が3点報告されている。	3・4
12	込皆戸	粕川村込皆戸	石製蔵骨器3点の出土が知られる。	4・8
13	東原遺跡	粕川村	製鉄遺跡に近接し、炭窯群が調査されている。	9
14	松原田遺跡	粕川村深津字松原田	いわゆる鉄アレイ形の箱形炉1基が調査される。	10
15	五反田古墓	粕川村深津字五反田	開壘中に石製蔵骨器が出土し、身1点が紹介されている。	3・4
16	三ヶ尻西遺跡	粕川村深津	東日本最古、7世紀中葉頃の長方形箱形炉が調査されている。	9
17	乾谷火葬墓群	前橋市西大室町	開壘の際に石製蔵骨器出土。身や蓋の6点が知られる。	3・4
18	新林火葬墓群	前橋市西大室町	石製蔵骨器の身3点の出土が知られる。	3・4
	赤城之山古墓	前橋市西大室町	石製蔵骨器の身1点の出土が知られる。	3・4
19	南宿火葬墓	前橋市西大室町	石製蔵骨器の身1点の出土が知られる。	3・4
20	地田栗火葬墓	前橋市西大室町地田栗	石製蔵骨器の蓋2点の出土が知られる。	3・4
21	宝珠寺裏火葬墓	赤堀町今井	石製蔵骨器の身と蓋セットでの出土が知られる。	3・4
22	川上遺跡	赤堀町下触字川上ほか	石製蔵骨器と納骨堂?を確認。	4・11
23	荒砥上川久保遺跡	前橋市大室町	古墳時代後期から平安時代竪穴住居114軒を確認。小鍛冶遺構1基を確認。	12
24	荒砥五反田遺跡	前橋市西大室町	竪穴住居18軒と掘立柱建物を確認。古墳時代後期から平安時代が中心。	13
25	三騎堂遺跡 (旧西大室遺跡群E区)	前橋市西大室町	ビット18基と溝1条を確認。	14
26	田向遺跡	赤堀町今井	昭和56年度に縄文時代中期竪穴住居1軒、古墳時代中期と平安時代竪穴住居42軒、掘立柱建物2棟などを確認。 平成2年度に古墳時代前期から平安時代の竪穴住居17軒を確認。主体は古墳時代後期か。平安時代は1軒。	15
27	向井遺跡	赤堀町下触、今井	昭和55年度に古墳時代後期竪穴住居26軒、平安時代14軒、掘立柱建物5棟などを確認。 昭和63年度に古墳時代後期竪穴住居17軒を確認。 平成2年度に古墳時代後期竪穴住居5軒を確認。	16
28	多田山東遺跡	赤堀町今井	縄文時代前期竪穴住居7軒、古墳時代前期竪穴住居2軒、古墳時代後期を中心に平安時代までの竪穴住居50軒などを確認。	17

第1章 遺跡の立地と環境

文献

1. 『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』大胡町教育委員会 1994
2. 『横沢向山遺跡 堀越丁二本松遺跡 横沢向山遺跡 茂木二本松遺跡』大胡町教育委員会 1998
3. 津金澤吉茂「上野国の古代火葬墓について」『第11回関東古瓦研究会研究資料』歴史考古同人会 1986
4. 加部二他生ほか「群馬県」『第5回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における奈良・平安時代の墓制』第1分冊 東日本埋蔵文化財研究会 栃木大会準備委員会 1995
5. 『上大屋・樋越地区遺跡群』大胡町教育委員会 1986
6. 『柳久保遺跡Ⅶ』前橋市埋蔵文化財調査団 1986
7. 『片並木遺跡-赤城山南面の製鉄遺跡-』宮城村誌編集委員会 1969
8. 『粕川村誌』粕川村誌編集委員会 1972
9. 群馬県勢多郡町村教育委員会事務局研究会社会教育部会文化財分会編集『勢多郡文化財 ニュースNo5』群馬県勢多郡町村教育委員会事務局研究会社会教育部会文化財分会 2003
10. 『深津地区遺跡群』粕川村教育委員会 1985
11. 『川上遺跡、女堀遺構発掘調査概報』赤堀村教育委員会 1979
12. 『荒砥上川久保遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
13. 『荒砥五反田遺跡』群馬県教育委員会 1978
14. 『西大室遺跡群』昭和57年度 前橋市教育委員会 1983
15. 『今井柳田遺跡発掘調査概報』昭和56年 赤堀村教育委員会 1982
『平成2年度埋蔵文化財調査概報』赤堀町教育委員会 1990
16. 『町内遺跡発掘調査報告-下触向井遺跡第Ⅱ地点発掘調査、今井学校遺跡範囲確認調査-』昭和63年 赤堀町教育委員会 1988
『平成2年度埋蔵文化財調査概報』赤堀町教育委員会 1990
17. 『多田山東遺跡発掘調査概報』昭和56年 赤堀村教育委員会 1982

第4節 遺跡の概要

歴史時代における三騎堂及び見切塚で注目される点は二つある。一つは半地下式竪形製錬炉とそれに伴う製炭窯や鍛冶遺構という製鉄関連遺構がまともに確認された点である。二つめは従来から広く知られていた石製蔵骨器を使用した火葬墓群が両遺跡で確認されたことである。

製鉄関係遺構であるが、半地下式竪形炉が三騎堂で3基、見切塚で2基以上確認された。また、見切塚1区では竪穴遺構内で精錬や加熱鍛打が行われていた。加えてこれらの遺構で使用する木炭を生産したと考えられる地下式登窯が三騎堂で10基、見切塚で14基、伏窯を中心とした古代炭窯が三騎堂で7基、見切塚で25基確認された。伏窯は掘り込みが浅く、断面のみで確認した例もあり、本来の数は確認数を

上回るであろう。

第2の火葬墓であるが、三騎堂・見切塚の両遺跡で石製蔵骨器使用火葬墓が確認された。また、須恵器を蔵骨器とした火葬墓も発見された。今回火葬墓として調査し、図示した数量は、三騎堂20基、見切塚15基の計35基である。中には火葬墓ではない遺構が含まれる可能性はあるが、石製蔵骨器が出土したり円礫の石敷や集石が認められた箇所は火葬墓として報告している。当然のことながら中世以降の遺物が出土した遺構は含まれていない。また、分布が集約する点から考えると、たとえ原位置を留めないにしても火葬墓のおおよその位置は示すものと考えて差しつかえないであろう。

第2章 確認された遺構と遺物

第1節 奈良・平安時代

1 製鉄関連遺構

(1) 今井三騎堂遺跡

今井三騎堂遺跡では4区から2基、6区から1基、計3基の半地下式竪形炉（以下竪形炉と表記）が確認された。2基の竪形炉が確認された4区東端は、当遺跡中最も急な斜面で、斜面下は湧水を伴う谷地頭となっている。遺構は、傾斜方向の平面距離約10m、等高線と平行方向12mの範囲に竪形炉2基、炭置き場1基、何らかの作業場と推測されるテラス1箇所が近接して確認された。更に、斜面東側の谷地には廃棄された鉄滓や炉壁が広がっていた（第5図）。最も近い炭窯（4区7号炭窯）は、南に15m離れて位置する。

6区1号竪形炉は緩傾斜地に構築されて。傾斜地下には竪穴住居群が存在し、廃滓場は確認できていない。他の遺構では、炉の東3m程の所に粘土採掘坑と推定された深い大型円形土坑（6区1号粘土採掘坑）が存在する程度である。

4区廃滓場

遺構（第5図、PL-1）

三騎堂における竪形炉の調査は4区から始まった。多田山丘陵の発掘調査は期間的制約がきつく、時間との戦いでもあった。こうした状態の中、従来から製錬遺構と考えられている竪形炉の確認は「大変だ」という言葉がよぎった。竪形炉下に存在する谷地には「トラック何台分」と形容される膨大な鉄滓が埋まっているだろうとも考え、調査行程を必至になって考えた。

いざ調査を進めてみると谷地内に広がる鉄滓の量が非常に少ない（表3）ことに驚いた。加えて炉壁（炉壁の流動滓も含む）の割合が予想以上に多い。製錬に伴うであろう流出滓も小片が数点存在するのみ

である。炉壁や鉄滓は炉の位置から考えれば2基分であり、その分布から考えても下流（南側）に流されたり、調査しなかった東側に広がるとは考えにくい。しかも谷地に広がる廃滓や炉壁は浅間Bテフラ（1107年降下）に覆われており、後世に除去された形跡はない。それ故、調査前に深さ数十cmの排水溝を掘削した際にも確認できなかったのである。

これは、長方形箱形炉などで何トンと形容される鉄滓出土量を有する場合と大きな違いである。この違いは何に起因するのであろうか。現段階で結論は出せない。また、調査担当（編集者）の力不足により調査時、整理時の観察不足を感じる部分が多いが、この点に関しては今後の機会に活かして稿を改めたい。

遺物（第139図）

図示したのは土器類のみで、鉄滓や炉壁は図示していない。出土した土器類の中で比較的器形が判明するのは第139図2の土師器杯と同図7の須恵器碗の2点である。土器類の出土数が少なく、時期決定は困難であるが、10世紀中頃から11世紀前半の間であろう。1号、2号竪形炉個々の時期決定が困難なため、廃滓場出土遺物の時期幅で両者を捉えることしかできない。

4区1号竪形炉

遺構（第6・7図、PL-2）

本遺跡で最初に調査した竪形炉である。2号炉とは50cmと近接する。竪形炉は、標高の高い側から鞆座、炉体、作業場の三つからなる。鞆座は、炉体の上方に等高線と平行方向に長軸を向けて設置される。規模は長軸3.06m、短軸1.24m、高い部分での確認壁高0.5mである。底面は、多少の凹凸を除けば中央がやや高く、両短辺に向かうに従って低くなっている。更に、南側短辺付近は深さ3cm程溝状に窪

第2章 確認された遺構と遺物

んでいる。炉体と接する東側中央は、炉体に向かって35度傾斜している。

炉は作業場の延長線上（上端で南北1.16m、東西1.3m）を僅かに深く下げ、炉を構築する範囲の空焼きを行っている。このため、炉掘方の地山ロームは一面に赤く焼土化している。更に作業場との境には作業口柱石を設置するピットを掘り込む。炉内は空焼きの後、粘土で炉壁を構築してゆくが、北側壁の立ち上がり角度は70度、南側壁は72度で立ち上がる。奥壁側にオーバーハングは認められないが、作業時の壁表面が上部に残る程度であるため作業時の状態は不明である。炉底は不明瞭で、明らかに炉壁崩壊土と判断されるガサガサの焼け土を除去した段階を底部として測図した。その後の断ち割りでも明瞭な底面は確認できず、測図した面が廃棄時の底部と考えて良いと思われる。片並木遺跡例のような炉壁を構成するような礫は認められず、小礫すら皆無であった。

炉の東側（谷側）には谷からほぼ水平に開削した作業場がある。作業場の東半分程は一段下げられていたが、ロームを主体とした硬化面（第6図8層、10層）が存在し、作業に伴って埋められていったようである。作業場と炉の境には柱状の自然石を両端に立て、上に自然石を渡して鳥居状の作業口を作っていた。上部の石が短かったようで、左右に小さめの石をかませて柱石に乗せていた。調査時には天井部の石周りには炉壁粘土が確認され、少なくとも天井部の石は露出していないと考えられた。柱石についても調査時に炉壁と同様な粘土を剥がして確認しており、本来は粘土で覆われていた可能性が高いと考えられる。柱石の表面は被熱により赤化していた。

遺物（第134図）

鉄滓以外の出土遺物は皆無である。しかし、本来は遺構の一部である羽口（第134図）が出土している。羽口は炉内出土8片と竈座出土1片が接合している。当時の調査担当（編集者）が羽口と炉壁の違いに気付く以前の調査であるので、残念ながら炉内出土羽口片の出土位置は不明である。

現状で炉壁との接合は認められず、本遺跡中遺存状態が最も悪い。羽口の粘土は精良で、炉壁粘土のように崩れやすいガサガサしたものではなく、スサも含有しない。先端の内法は12cmと大口径ではあるが短く、先端は溶けて短くなっているものと推定される。外面は炉内部同様黒っぽいガラス質を呈する。内面は縦方向に植物の茎か枝状の圧痕が認められ、基部付近には横方向の細かい圧痕が縦方向の圧痕を覆うように残されている。このことから、径3mmから7mmの細い枝か茎を紐で束ねて芯を作り、そこに粘土を貼り付けて成形したことが解る。しかし、形状から成形後に芯を抜くことは不可能と思われ、焼成して芯を焼く方法が採られたと考えられる。

羽口装着角度を知る手だては少ないが、表面が溶けて流れたような痕跡を垂直にすると、第134図右上に示した側面図のようになり、かなり下向きに送風されていたと推定される。

4区2号竈形炉

遺構（第8・9図、PL-3・4）

1号竈形炉作業場の北東50cmに2号竈形炉竈座南西隅が位置する。竈座と推定される場所は炉上方に接し、軸が直行方向に交わるように掘削された長方形土坑状の掘り込みである。長軸2.4m、短軸1.1mで長軸中央に炉中心軸線延長上に浅い溝を掘っている。この溝周辺は南北端に比してやや高く掘り残されている。炉に接する部分は炉に向かってやや傾斜が認められる。この傾斜が送風施設か否かは判断できない。

炉本体は作業場から続く平坦部の奥、長さ1.25m、幅1.3mを空焼きして防湿を図っている。壁の残存状態は三騎堂中最も不良で、ガラス質で爛れたような炉壁は殆ど残っていなかった。作業場から見て左右、南北壁は調査段階においてオーバーハングしているが、奥壁はほぼ垂直となっている。北壁下部は炉壁崩壊が進んでいたせい、調査時に抉れるように掘れてしまった。その際、さらさらと砂時計のように砂鉄が上部から落ちてきた（第8図断面CC'）こと

を調査担当者（編集者）自身が確認している。これは、炉壁内に溶けていない砂鉄が多く存在したことを意味する。炉壁内部に解けていない砂鉄が存在した。従来、竪形炉から砂鉄が出土しても製鉄原料として扱われることが一般的であった。しかし、炉壁を作る際にも使用されていた可能性はないのであろうか。1号炉同様、片並木遺跡例のような炉壁を構成するような礫は認められない。

底面は1号同様不明瞭で、明らかな崩落炉壁を除去した面、また、出土した羽口下でもある。底面周辺は軟らかく、下部に明瞭な底面が存在する可能性も考えて掘り下げたが確認できなかった。断面図において壁際が窪んでいるのはこのためであり、底面周縁が溝状に窪んでいたわけではない。

作業場は等高線と直行するように水平に掘られ、床面は硬く締まっていた。炉付近の側壁に礫が見受けられたが、地山に含まれる自然礫であった。

遺物（第135・136図、巻頭カラー、P L-60）

羽口は炉壁作りつけと想定され、本来は遺構扱いであろうが、炉内に落下していて調査時に炉壁との接合も不可能であったので遺物として報告する。

羽口は、炉中央に先端を南、基部を北、ガラス質になった炉内面側を作業場側に向けた状態で出土した1号炉羽口に比して器壁は薄い、内面に植物の茎状圧痕が縦方向に見受けられ、これを芯にして製作したものと考えられる。近接写真（P L-60）からもわかるように、内面器表が剥がれた内部にも同方向の圧痕があり、厚い部分は2回に分けて粘土を貼り付けている。粘土は精良で炉壁のようにガサガサせず、スサも含まない。基部から広がった炉壁部分に残る粘土はスサを含む炉壁粘土であり、その差は明瞭である。器表の流動化は激しくなく、滓化した部分が垂れ下がる状態は認められない。

羽口先端の内径は11.5×8.0cm、基部付近の内径は13.5cm×8.5cmで、基部から先端までの長さは40cmである。羽口の断面形は逆「U」字状を呈する。更に残存状態の良い箇所は外に広がる気配を見せている。また、器厚は、中央が厚く、両端に向かう

に従い薄くなる。この点からも羽口が筒状を呈していないことが裏付けられよう。1号炉出土羽口は2号炉出土羽口ほど厚さの違いはないが、両端の羽口粘土端部は接合部で剥がれたような状態を呈している。

羽口表面の流動化が顕著でないため、羽口装着角度の想定が困難であるが、先端部の垂れ下がり方を考慮すると、炉壁から30cmから40cm内部に突き出していたことになる。しかし、1号炉出土羽口の角度との差が大きすぎる点に疑問が残る。第136図右上は炉壁部分を垂直にした状態での測図である。

4区1号炭置き場

遺構（第10図、P L-4・5）

1号竪形炉軸座の北1m、2号竪形炉軸座の西3.3mに位置する。等高線に平行する南北に長軸を持つ楕円形を呈し、東西1.6m、南北2.0mの規模を有する。床面での斜面下側（西）の立ち上がりはないが、掘方は20cm程掘り下げた後に基盤層直上に存在する粘質土を主体とし、木炭片を若干含む土で埋め戻して床面を構築している。床面上には木炭が散乱した状態で一面に広がっていた。木炭は全体に割れたり細片化したものも多いことから、作業終了後に残った木炭が確認されたものと考えられる。

位置関係から三騎堂4区の竪形炉に使用する炭を置いた場所であることは確実視される。しかも、2号竪形炉埋土最上層（第8図1層）に本遺構からこぼれ落ちたり流出したと考えられる木炭片が多く含まれること、炭を持って発掘調査にも危険を伴うほどの急斜面をまっすぐに3m下ることが困難であることが予測され、1号竪形炉に伴うと考えている。

遺物

土器類の出土は皆無で、木炭のみ出土している。木炭の樹種同定は行っていないが、肉眼観察では木口に放射状の割れが顕著で、放射状組織も明瞭に認められるなどクヌギ、コナラに代表される雑木炭の特徴を有していた。この特徴は、炭窯で出土する木炭と同様である。

第2章 確認された遺構と遺物

4区1号作業場

遺構（第11図、PL-4）

性格不明の大型楕円形遺構である。2号豎形炉の輪座北西隅と重複するが、かすめるような重複の仕方であったため、新旧関係は判然としなかった。

等高線と平行方向に長軸を持つ楕円形を呈し、規模は長軸6.5m、短軸2.6mでテラス状に平坦面を作っている。床面は本来平坦であったと思われるが、不明瞭なため掘方に達してしまったと考えられる。

北側中央には焼土や木炭片が集中する場所があり、鉄滓も認められた。しかし、炉のような施設は確認されず、鍛造薄片も見つかっていない。広義の製鉄に係わる作業場と推定されるが、性格は不明である。1号豎形炉作業場は南北に長い形態を呈し、その先端が本作業場方向を向いている。この点から、本作業場は1号豎形炉に伴う可能性を考えている。

遺物

鉄滓は焼土や木炭が集中する場所で出土しているが、埋土中や他の場所での出土は認められない。土器類の出土は皆無である。

6区1号豎形炉

遺構（第14・15図、PL-6・7）

H18号住居と重複し、本豎形炉が新しい。輪座と考えられる場所には攪乱が入り、落ち込みは確認できたが、立ち上がりも緩やかで形状も人為的な感が弱い。一応図化したが、輪座の可能性は低いとしておきたい。

本豎形炉は、緩傾斜地に構築されており、作業場は長楕円形の土坑状に掘り窪めている。作業場南側端部は作業効率を考慮して傾斜を緩やかにしている。

炉本体は作業場北端を円形に掘削し、空焼きを行っているようで、掘方面が焼土化している。炉底は不明瞭でガサガサした壁崩落土を除去した時点を廃棄時の炉底と考えた。

炉確認時には、作業場側を除く炉周辺の壁はスポンジ状を呈していて、操業に失敗した可能性を伺わせる状態であった。炉内掘削直後に大きな炉壁片が

炉内壁を下に向けて炉を塞ぐような状態で確認された。この炉壁（第137・138図に示した炉壁部分）は図化せずに取り上げ、掘削を再開した。この炉壁を取り除いたところ、直下に羽口が先端を下に、炉内壁側を作業場に向けて出土した（第15図、第137・138図に示した羽口部分）。炉内完掘後に残存炉壁との接合を試みたが、接合はできなかった。

炉壁は羽口が出土したレベル以下から残存状態が悪くなり、ガラス質に硬化した面が確認されず、ガサガサした炉壁粘土面が露出する状態であった。本豎形炉の場合も炉底の認定は困難であった。確認された奥壁の立ち上がりは70度である。

炉体部と作業場との境に柱石は残っていなかったが、掘方調査において柱石を設置したピットや安定させるために側壁に掘った窪みが確認されている。本例も4区1号炉同様作業場と炉の境に鳥居状石組みを芯とした作業口を意識した（現時点において操業時に開放か閉鎖かについては判断材料がない）作りになっていたのであろう。

炉壁で最も注目される点は、砂鉄状物質を層状に含むという事実であろう。次項で説明する通風管周辺の炉壁でも層状をなした2枚の砂鉄状物質の層がある。これは粒状を呈し、完全には溶けていない。この部分の破片で確認したところ磁着した。また、この層が炉壁表面に溶け出しているような箇所では、磁石が表面に着く程度の反応が認められる。この物質が砂鉄か否かについては岩手県立博物館赤沼氏の分析結果を参照して頂きたい。

遺物（第137～139図）

土器類は2の須恵器杯が1点出土しているが、本遺構が壊しているH18号住居から同時期の須恵器杯が出土しており、時期を示す遺物とは考えにくい。他には羽口が出土しているが、これは本遺跡出土資料中最も注目される。本来は遺構であろうが、取り上げ後の接合作業によって形状が明らかになったので遺物として紹介する。

羽口は炉内出土15片の接合ができた。現存全長は70cm、同幅は広い箇所で35cmである。炉内表面側は

ガラス質を呈し硬くなっている。羽口先端や壁の一部は流動し垂下しているが、現存部壁上端から16cmの範囲はガラス質を呈さず、炉壁に生じたヒビも観察されるなど高温に曝されていない。炉壁粘土はスサを混入（炭化せずに残っている）した粘土で、現状ではガサガサした脆い状態である。通風孔は炉壁内部に設けられ、精良な粘土を以て作られる。通風部表面は羽口内同様に植物の茎か枝状の圧痕が認められる。細い植物の茎か枝を束ね芯を作り、その周囲に粘土を貼り付けて成形したと考えられる。また、その周囲に径2・3cmの粘土紐を通風管と直行方向に貼り付けた状態が明瞭に観察される。粘土紐間には径1cm前後の紐状のもの（繊維の撚りが観察されず植物の蔓か？）がほぼ等間隔で巻かれている。前後関係は不明であるが、通風管と直交方向にも同様の紐状痕が見受けられる。通風管用粘土の厚さは2～3cmで、紐状のものは通風管粘土と炉壁粘土の境に施されている。通風管と炉壁粘土の境に明瞭な不整合は見受けられず、先の紐状痕が明瞭に残る点を考慮すると、完成した通風管を炉壁構築時に組み込むのではなく、一体成形であったと解される。先述した4区1・2号炉出土羽口の観察結果同様、炉壁空焼き時に通風孔内の芯を燃やして炉を完成させたのであろう。

通風孔が炉壁から突き出た場所、すなわち羽口部分に炉壁粘土は使用していない。羽口断面は逆「U」字状を呈し、内径は15×10.5cmを測る。両端部に羽口用粘土の割れ口は観察されず、接着を良くするための刻み等も施されない。また、外表面（炉内表面）の内側にはガサガサした炉壁粘土が僅かに観察される。この事実と羽口の断面形から、羽口は筒状を呈さず、炉壁又は炉底の一部が盛り上がるような形状であったと考えられる。加えて、三騎堂出土3例いずれの場合も羽口端部に付着する粘土が薄いことからすると、構築時炉底表面は粘土を敷く程度であった可能性もある。

通風管や羽口の角度であるが、壁の通風部盛り上がりから炉壁に至る変換線を基準とした場合、羽口

側縁曲がり始めの角度は約30度で、羽口がほぼ姿を現す部分で約45度と角度を増している。炉壁と羽口表面や先端が流動化して垂れ下がった方向を垂直とすると、羽口外面はほぼ真下を向いていたことが想定される。そして、羽口側縁の角度は炉壁が急激にオーバーハングしていることを示す。すなわち、4区2号炉と異なるが、本炉の場合は送風の中心が炉内の片側に偏っていたことになる。

但し、4区1号炉出土羽口同様、本羽口も先端部が溶けて短くなっていることが先端部の観察から想定できる。したがって、この送風角度は廃棄時の角度である。設置時の送風角度であるが、羽口が炉壁から完全に姿を現した段階での側端部を見ると、先に説明した約45度の角度で炉壁がオーバーハングするようにして姿を現した後、羽口側縁は急激に約60度前後（正確な測定不可能）の角度をもって向きを変えている。そして、この側縁端部において羽口に使用する精良な粘土の使用が終わっているのである。また、硬化した炉壁裏側には薄く炉壁粘土の付着が認められる。

この条件を4区2号炉出土羽口と重ね合わせると、炉壁からほぼ垂直方向に姿を現した羽口は、周囲の炉壁が炉底に至る角度に合わせて向きを変え、傾斜した炉底に沿って30ないし40cm炉中心方向に突き出していた可能性がある。羽口の使用回数は不明であるが、操業に伴って羽口先端が溶けて短くなり、廃棄時には送風先が奥壁側に偏っていたことを本羽口は示していると考えている。

三騎堂・見切塚両遺跡では他に補助的送風を示唆する羽口片の出土は皆無である。また、三騎堂で確認された3基の竪形炉総てにおいて復元可能な羽口が各1基しか確認されないことから、送風は1基の大型羽口で行われたと考えられる。

本資料は応急処置を行っているものの本格的な含浸処理は整理終了時に行う予定であり、現状での側面写真や側面実測は資料崩壊の危険を伴うので行っていない。側面から得られる情報は重要であるが、この点に関しては後日を期したい。

第2章 確認された遺構と遺物

6区2号・3号・4号廃滓坑

遺構（第13・14図、P L-6・7）

ここで廃滓坑とした遺構は、土坑状の窪み埋土に鉄滓が多く含まれていたことを示すにすぎない。1号廃滓坑は後述する粘土採掘坑に名称変更したため欠番となっている。

2号廃滓坑は6区1号豎形炉作業場南東に近接し、3号廃滓坑と接する位置にある。深い箇所が30cmの小規模な土坑である。埋土は炉壁片や鉄滓、焼土である。

3号廃滓坑は6区1号豎形炉作業場の張り出し状を呈するが、プラン確認時には作業場より古いと判断され、操業初期段階の鉄滓の一部が棄てられた可能性がある。

4号廃滓坑は6区1号豎形炉の南2mに位置する。立ち上がりは非常に緩やかで、上方から落ちた廃滓や炉壁が窪みに溜まったような状態を示す。埋土に焼土粒は多く含むが、鉄滓の量は少ない。

遺物

いずれも土器類の出土はなく、鉄滓や炉壁のみの出土であり図示していない。

6区1号粘土採掘坑

遺構（第16図、P L-5・6）

埋土中に鉄滓が多く認められ、当初1号廃滓坑として調査を進めていた。しかし、鉄滓出土層が中層までで底部からは殆ど出土せず、底部付近の土が地山を主体で人為堆積の可能性が高いこと壁の一部を僅かに抉るように掘り込んでいる箇所が認められる。これらの所見から、豎形炉を構築する際の粘土を採掘した場所と推定し、不要な土で埋め戻した後に鉄滓を棄て、その後埋没したものと考えた。

遺物

鉄滓のみの出土で図示していない。

(2) 今井見切塚遺跡

今井見切塚遺跡では、調査担当者の所見では5区で半地下式豎形炉が5確認されている。編集者の判

断では2基については半地下式豎形炉であるが、他の3基は炉としての判断基準が不明瞭に感じる。これは、重複が多く残骸程度の残存で調査が困難を極めたことに起因するのであろう。

かねてから炉壁と鉄滓の出土が指摘されていた「多田山東麓遺跡」に相当すると考えられる。

5区1号豎形炉

遺構（第17・18図、P L-7・8）

5区14号炭窯、同19号炭窯と重複し、共に本遺構が古い。このため、炉底から23cm前後の高さまでしか残存していなかった。炉は確認面での幅60cmほどの規模を有する。作業場と炉の境であるが、平面、断面共に調査時のトレンチにより確認できない。炉壁表面がガラス質に溶けて流動した面はなく、赤褐色に焼けたような状態である。炉の断面観察では第18図に示したように複数の焼土面が確認されている。いずれの面もガラス質で硬化した面は見受けられない。

炉の北側には長方形土坑の一部が残っており、竈座の可能性が考えられる。更に西側には性格不明のテラス状遺構が見受けられるが、本炉との関係は不明である。作業場の南側は調査区外に延びる。掘方調査を実施せずに炉壁の切り取り保存を行っており、鳥居状石組みに使用した柱石ピットの確認調査は行われていない。

遺物（第139図）

作業場西端から強く焼けた礫が1点出土している。豎形炉内もしくは炉内に面していたと考えられる礫である。断面三角形を呈し、2面が強く熱を受け、滓の付着が認められる。1面方向から風を受けたと思われる、角部が片側になびくように曲がっている。ヒビが入った段階でも強く熱を受けていたようで、割れ口が丸味を帯びている。最も熱を受けていない面は赤化している。

鳥居状石組みの有無が不明であるが、この礫が石組みの一部であり、炉壁が溶けて露出した可能性と炉内で何らかの作業に使用された可能性がある。鉄

滓や炉壁以外に遺物は出土していない。

2号豎形炉

遺構（第19・20図P L-8）

1号豎形炉の北東に位置し、1号豎形炉と重複する位置にあるが、断面において直接的な重複は認められない。しかし、1号炉の壁がきれいに巡っていることから本豎形炉が古いと考えられる。断面図に炉床層（第19図34層）という記述があるが、壁の立ち上がりが無く殆どが破壊されていると思われる。ただ、三騎堂の調査所見からすると、炉壁が残存している状態においても炉底の認定は困難であり、炉底と認定する根拠が不明瞭である。しかし、北側の地山面が焼土化しており、これが掘方の空焼き痕と考えられる。

遺物

鉄滓を除いて遺物の出土は皆無である。

3号から5号豎形炉

遺構（第19・20図、P L-8）

1号豎形炉より古いと考えられる。調査時の所見で炉底の一部を確認しているが、いずれも不明瞭である。編集者は、先に記したようにプラン自体が不明な状態で炉底のみを確認することは不可能に近いと考えている。また、土層注記にも現れているように、灰床でもなく、ガラス質の床面でもない点に不安を感じる。また、若干図面修正しているが、掘方図の段階で炉の位置にかなりズレを生じている点、明瞭に確認された炉の掘方は空焼きにより掘方が焼土化しているが、3号から5号炉の掘方に空焼きの痕跡は確認できない。加えて3号炉、4号炉掘方南側壁が抉れている点にも注目したい。通常炉掘方は抉るように掘削しないが、作業場は壁を抉るように掘削した例は報告されている。豎形炉の存在は否定できないが、数と正確な位置に関しては不明であるとしておきたい。

遺物

鉄滓と炉壁以外の出土は皆無である。

なお、見切塚5区で確認された鉄滓や炉壁の観察は時間的制約などから行えなかった。これは、上部を炭窯で破壊されているうえに遺構の重複が激しく、炉壁や鉄滓の帰属が不明であることも理由の一つであるが、今後機会をみて観察を行いたい。

1号廃滓坑

遺構（第20図）

どの豎形炉に伴うかは不明であるが、楕円形を呈し、長軸に当たる北側は作業場の北壁を一部抉るように掘り込んでいる。この抉った部分からは埋め込むようにした炉壁片が重なって出土している。

遺物

土器類の出土は皆無である。

1区1号鍛冶

遺構（第21図、P L-8・9）

調査時の遺構名称が1区8号住居であったように堅穴遺構内に炉が設置されている。1区の頂上付近から南西にやや下った場所に位置し、頂上付近には見切塚H1～5号住居が存在する。

平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は南北3.1m、東西2.63mを測る。遺構が斜面に位置するため、残存壁高は27cmから82cmと差が大きい。床面中央から長軸線に沿って北壁際まで三箇所の土坑状窪みが連続して確認された。これらのうち中央の直径55cm深さ15cmの落ち込みで還元した焼土と酸化焼土が重なって確認され炉と判断された。南側の落ち込みに炉のような焼土面は確認されないが、南壁に沿って鉄滓が付着した破碎被熱礫が5個並べられたように存在し、精錬や加熱鍛打にともなう施設と考えられる。北壁に接する落ち込みは、炉につながる溝状の窪みがあり、轆が設置されていた可能性がある。床中央の南側落ち込みの東には深さ50cmの土坑状施設が確認されている。内部からは、大量の鉄滓と共に長さ30cmほどの礫が出土したが被熱などは認められなかった。

遺物（第139～141図、P L-44・45）

第2章 確認された遺構と遺物

出土遺物中最も量が多いのは鉄滓で、図示しなかった鉄滓量は7.2kgである。次に多いのが羽口で、図示していない破片が1.43kg存在する。羽口は5点（6～10）を図示したいずれも小型羽口で先端は滓が付着し、強い被熱痕を有している。羽口は基部をソケット状に窪めるものと直線状に仕上げる物の二種がある。

鍛造剥片は、サンプルとして採取された約2kgの堅穴内埋土から水洗により検出した。その量は僅か

に10g程で、中には碗状滓の細片が含まれる状態であった。サンプルの採取箇所は不明なため、詳細はわからない。しかし、台石と推定される礫が2点（5・26）出土しているが、製品を生産するための加熱鍛打を主体に行った施設ではなく、精錬を主に行った施設の可能性がある。

土器類は灰釉陶器皿（1）や須恵器椀（2～4）が認められ、10世紀後葉から11世紀初頭の操業が推定される。

2 炭窯

はじめに

炭窯の名称は、大型の地下式窯を「地下式登り窯」、斜面を浅く掘り込んだ竪穴状の炭窯を「伏せ窯」とした。本遺跡では、土坑状の穴焼き窯は確認されていない。

遺構説明に際し、地下式登り窯の場合、焚き口から窯内を望み、後ろ側の傾斜を後傾、前側の傾斜を前傾とする。また、壁は窯内正面壁を奥壁、左側を左壁、右側を右壁と呼称する。焚き口は最も幅が狭まった箇所想定し、焚き口から奥壁までを炭化室、焚き口手前の幅が広がった箇所を作業場、作業場手前の溝状を呈する箇所を作業道と呼称して説明を行う。

伏せ窯の場合は、斜面下側の張り出しを焚き口、中央の竪穴状部分を炭化室、斜面上方の張り出し部を煙道とした。

また、煙道の炭化室側を排煙口、地上側を煙道口と呼称する。

規模はすべて下端の計測値で示す。

(1) 地下式登り窯

A. 今井三騎堂遺跡

三騎堂では地下式炭窯が竪形炉から離れて存在する。これは、多田山丘陵におけるロームの堆積が一樣でないことに起因すると考えている。すなわち、東斜面は4区7号炭窯直下に存在する基盤層の大岩が露出していることにも明らかのようにローム層の堆積が薄い。従って、4区7号炭窯は他の炭窯のように深く掘り込めず、等高線に対し斜行するように構築している。これに対し、頂部付近(5区)や西斜面(1区)はロームの堆積が厚く、5区1号炭窯では奥壁床と確認面との比高差は2m以上に及ぶ。従って、西斜面の方が地下式炭窯の構築に適していた結果が分布に現れていると判断される。炭窯の細かい時期決定が不可能なため、木炭生産拠点の移動経過は不明であるが、竪形炉が存在する東斜面(4

区)から製炭を開始し、より適する西斜面(1区)に移動した可能性も考えられる。

木炭以外の遺物としては、4区7号炭窯と1区3号炭窯から須恵器甕(第141図1)と椀(第142図1)が出土している。

1区1号炭窯

遺構(第22図、PL-9)

確認面での傾斜12度の1区北側にある浅い谷状地形の奥DC181グリットに位置する。炭窯主軸は等高線に斜交し、全長は10.3mである。炭化室構築時の床は奥壁から1/3程までは8.5度後傾するが、次第に傾斜が緩くなり、焚き口付近では前傾し、焚き口ではほぼ水平となる。窯内幅は奥壁中央から1m付近が1.6mと最大になる。窯内幅が最大となる箇所の左壁には煙道が設けられている。煙道は位置的には一カ所であるが、傾斜角87度と57度の箇所があり、前者が構築当初、後者が床面上昇時に煙道を付け替えた際の煙道と考えられる。煙道は床面に設けた排煙口から掘り抜きで地上の煙道口につながるが、壁の崩落によって炭化室の張り出し状を呈している。煙道口は後世の崩落により径が大きくなっている。床面の排煙口施設は確認されない。

幅48cmの焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は長軸約1.6m程の卵形を呈し、底面は皿状を呈する。作業場手前には溝状を呈した作業道がある。底面は前傾して次第に浅くなり、ほぼ水平となったところで地表面に達する。作業道と作業場の底面は、作業後の清掃時に掻き出したと考えられる焼土塊と焼土粒を多く含んだ土によって次第に浅くなっていったことが断面観察から窺えた。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層、壁の崩落土が互層をなしており、最低4回の作業が想定される。作業を繰り返す事によって生じる壁や天井の剥がれ等によって床が上昇すると共に天井も上昇してゆくが、床面が上昇しても構築時床面と同様な床面傾斜は保持されている。作業時堆積土上には天井崩落土と考えられる焼土や黒色土を含まないロームが堆積している。天井崩落土と考えられる口

第2章 確認された遺構と遺物

ーム層主体の堆積層は、焚き口付近まで存在するが、作業場より手前では認められない。確認面最上層には天井崩落後に生じた窪みが無くなる直前に浅間B軽石が降下し、窪みが消失している。1108年以前に操業を停止していたことは確実である。調査時に観察した崩落焼土塊にスサなどを混入した痕跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘り抜いて構築し、ローム層そのものを天井としていたと考えられる。

遺物

焼成された木炭は総て運び出され、窯内で確認されたのは散乱した細片と粉状炭のみであった。残された木炭は肉眼観察ではクヌギ節・コナラ節等のいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外の遺物は出土していない。

1区3号炭窯

遺構（第23図、P L - 9・10）

1区南西向き斜面の等高線が張り出した箇所のC R 153グリットに位置する。炭窯主軸は等高線に対して斜交し、確認面における主軸方向の地表傾斜は6.5度である。全長は9.6m、窯構築時の炭化室床面は7度後傾し、焚き口付近ではほぼ水平となる。窯内幅は、奥壁が2.1mと最大であり、焚き口に向かうに従い幅を減じてゆく。炭化室長は5.5m、奥壁床面と確認面との比高差は1.4mである。幅が最大となる奥壁から0.76m焚き口側に煙道を設け、床面に設けた排煙口から86.5度の傾斜で立ち上がり煙道口に至る。床面の排煙口施設は認められない。

幅0.76mの焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は主軸約2m、直交方向で約2.1mの蒲鉾形を呈している。作業場から手前は次第に幅を減じ、前傾しながら地表へと達する。作業道と作業場の底面は、操業後の清掃時に掻き出したと考えられる焼土塊や焼土粒を多く含んだ土によって次第に浅くなっていたことが断面観察から窺えた。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層が認められたが、互層とはなっておらず、断面観察か

ら得られた最低操業回数は2回と少ない。2回目操業時の床面傾斜も、創業当時の傾斜とはほぼ同じである。

操業時堆積土上には天井崩落土と考えられる焼土や黒色土を含まないローム層主体の土が堆積している。天井崩落土と考えられるローム層主体の堆積土は、焚き口付近まで存在するが、作業場より手前では認められない。天井崩落後に生じた窪みには黒色土が堆積し、わずかに残った窪みにAs-Bが堆積している。したがって、1108年以前には操業を停止していたことは確実である。

調査時に観察した崩落焼土塊にスサなどを混入した形跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘り抜いて構築し、ローム層を天井としていたと考えられる。

本炭窯の作業場下からは、1区8号炭窯が確認され、8号炭窯廃絶後、奥壁側を作業場として利用して構築していた。このため、8号炭窯より新しいことがわかる。

遺物（第142図1、P L - 45）

作業場から須恵器碗が1点出土している他は、総て木炭小片である。

1区4号炭窯

遺構（第24図、P L - 10）

1区で炭窯が5基確認された浅い谷状を呈する箇所のC P 172グリットに位置する。炭窯主軸は等高線に斜交し、確認面での主軸傾斜は11度とやや急傾斜である。全長は7.4mとやや短く、炭化室構築時の傾斜は11度と確認面傾斜同様な傾斜がきつくなっている。全長がやや小規模なため、炭化室規模も全長3.9m、最大幅2.3mと小さい。炭化室最大幅は奥壁にあり、焚き口に向かうに従って幅を減じている。従って、炭化室のみの平面形は羽子板状を呈する。奥壁はオーバーハングしており、天井に近い部分まで残存していたが、危険防止のため写真撮影時には除去せざるを得なかった。構築時奥壁床面と確認面比高差は1.36mと1区の炭窯内では低い。

煙道は、奥壁から焚き口側に1.6mの左壁（北東）に設けている。煙道は一箇所で作成替えは行われていない。排煙口施設はないが、構築時床面からやや登り勾配を付けて横穴を掘り、少し炭化室側に戻った箇所に煙道を立ち上げている。煙道傾斜は82度とほぼ垂直である。

炭化室から次第に幅を減じ80cmと最も幅が狭くなった場所が焚き口と考えられる。焚き口付近の床はほぼ水平で、皿状に窪んでいる。焚き口手前には主軸長2.2mの作業場が続き、端部は急傾斜で立ち上がる。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層、壁の崩落土が互層をなしており、最低3回の操業が想定される。操業をくり返すことによって生じる壁や天井の剥がれなどによって床面が上昇するが、床面清掃が奥壁側を丁寧に行ったためか、床面傾斜は次第に緩くなっている。しかし、焚き口と作業場の傾斜に変化は認められない。操業時堆積土上には天井崩落土と考えられるローム層主体の堆積層は、焚き口付近まで存在するが、作業場では認められない。調査時に観察した崩落焼土塊にスサなどを混入した形跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘り抜いて構築し、ローム層を天井としていたと考えられる。

作業場は、操業停止後に何らかの理由で途中まで掘削されたことが断面観察で明らかとなったが、理由は不明である。

遺物

焼成された木炭はすべて運び出され、窯内で確認されたのは散乱した細片などのみであった。残された木炭は肉眼観察では、クヌギ節・コナラ節などのいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外の遺物は出土していない。

1区5号炭窯

遺構（第25図、P L-11）

1区北側にある浅い谷状地形中腹のDA183グリットに位置する。主軸は等高線に斜交し、全長は8.6

mである。確認面における主軸傾斜は11度とやや急となっているが、先の4号炭窯と異なり、構築時床面傾斜は5度と傾斜を緩く設計している。構築時床面は傾斜が緩いためか、焚き口から作業場の途中まで傾斜の変化は認められない。炭化室最大幅は1.4mと狭いが、炭化室長は4.32mとやや小規模程度の大きさである。また、焚き口に続く作業場も主軸長1.84mと通常規模であるが、幅が50cm程度と非常に狭い。加えて作業場から2.4mにわたって作業道が延びており、非常にほっそりした形に見える炭窯である。

奥壁から1.12m手前の左壁（北西）には煙道を設けている。構築時の排煙口は、床面から僅かに上がった側壁に横穴を開け、そこから85度の傾斜で立ち上がり、煙道口へと向かう。この煙道は側壁にかなり近かったせいも、調査時にはほとんど崩落していた。この崩落は操業終了時前におこっていたようで、58度の緩い傾斜を持った煙道が残っていた。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層、天井や壁の崩落土が認められた。本炭窯の場合、複数の操業を示す床面が不明瞭であるが、炭を多く含む層の重なりや焼土を多量に含む層の状態から、最低2ないし3回の操業は考えられよう。

操業時堆積土上には天井崩壊土と考えられるローム層主体の堆積土が焚き口付近まで認められる。この天井崩壊土と考えられる層は、先に焚き口とした箇所より手前に達しており、更に作業道と作業場が接すると考えた箇所の床面が窪んでいること。加えて操業開始時の床面と考えた層が作業場と想定した場所にまで延びていることから、焚き口は床面が窪んでいる付近に想定した方が良いのかもしれない。そうすると、焚き口付近の炭化室は非常に細長い形状をしていたことになる。

調査時に観察した崩落焼土塊にスサなどを購入した形跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘り抜いて構築し、ローム層を天井とした炭窯であったと考えられる。

遺物

焼成された木炭はすべて運び出され、窯内で確認

第2章 確認された遺構と遺物

されたのは散乱した細片と粉状となった炭のみであった。残された木炭は、肉眼観察ではクヌギ節、コナラ節などのいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外の遺物は出土していない。

1区6号炭窯

遺構（第26図、P L-11）

1区北側にある浅い谷状地形の下位、C T 185グリットに位置する。炭窯主軸は等高線にはほぼ直交し、確認面における主軸傾斜は9度である。奥壁側が調査区外のため、全長と炭化室長は不明である。調査区内での炭化室最大幅は1.64m、確認全長は10.4mと細長い形状を呈している。確認された範囲内での炭化室傾斜は11.5度と急な傾斜である。幅が狭い炭窯であったため、危険防止の観点から主軸方向の断面観察は断念せざるを得なかった。

焚き口幅は72cmで、焚き口手前は皿状に窪み、床面はほぼ平坦となり作業場となっている。作業場手前の床面は急に前傾し、傾斜をゆるめながら作業道が延びる。この間は7号炭窯との重複のため、形状を性格に把握することが困難であった。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層が互層をなしており、最低3回の操業が想定される。操業時堆積土上には天井崩壊土と考えられる焼土や焼土や黒色土を含まないローム層主体の堆積が認められる。更に上位には黒色土が堆積する。調査時に観察した崩落焼土塊にはスサなどを混入した形跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘抜いて構築し、ローム層を天井としていたと考えられる。

本炭窯は7号炭窯が操業を停止し、天井が崩落、若しくは崩落させた後の奥壁付近を作業場として再利用している。古い炭窯の奥壁を再利用し、更に奥壁側に新しい炭窯を構築することは本遺跡のみならず、他の遺跡でも認められる行為である。

遺物

焼成された木炭はすべて運び出され、窯内で確認されたのは散乱した細片と粉状となった炭のみであった。残された木炭は、肉眼観察でクヌギ節、コナ

ラ節などのいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外の遺物は出土していない。

1区7号炭窯

遺構（第27図、P L-11・12）

1区北側にある浅い谷状地形の下位、C R 183グリットに位置する。6号炭窯と重複し、6号炭窯の下位に構築されている。炭窯主軸は等高線にやや斜交し、確認面での主軸傾斜は7.5度である。6号炭窯との重複のため全長、炭化室長ともに不明で、全体は焚き口付近で湾曲している。炭化室最大幅1.16mと狭く、全体に細長い形状を呈している。構築時の炭化室床面は5度と緩傾斜である。

奥壁から60cm以上手前の両側には煙道が認められた。左（北）壁の排煙口は構築時床面から僅かに上がった箇所へ深さ60cmと40cmの横穴2箇所を掘り込んでいる。このうち、奥壁側の横穴は煙道口に通ずる縦坑が確認されず、未完成若しくは失敗した煙道と考えられる。手前側の排煙口は、最深部ではなく手前側に縦坑が存在したようで、60度の角度を持って立ち上がり、煙道口に至る。一方、右（南）側煙道は構築時床面から24cm上の壁に排煙口をほぼ水平に約1m掘り進み、そこから78度の縦坑につながり煙道口に至る。構築時床面との位置関係や残存状態から南側の煙道が新しいと考えられる。

焚き口は幅が60cmと最も幅が狭まり、129.6mの等高線が回る窪んだ場所に想定される。床面は焚き口付近で窪んだ後はほぼ水平に推移し、次第に前傾を強めて地上に至る。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床が認められるが、木炭を多く含む層は認められない。また、最下層以外に明瞭な床面も確認できなかった。しかし、煙道の作り替えが行われているので、複数回の操業は行っていたと考えられる。また、6号炭窯構築の際に、窯内堆積土が掘削されており、7号炭窯の天井崩落土や天井崩落に伴う黒色土の堆積は認められない。上面に堆積している黒色土は、6号炭窯に伴う堆積である。

作業道下端から直線距離で1.5m離れた場所には、南北4.96m、東西4.68mの範囲で炭窯を掘削した際の廃土と考えられるローム二次堆積層が認められた。この場所は炭窯構築地点に比して傾斜も急で作業時にも使用されなかった場所なのであろう。

1区8号炭窯

遺構（第28図、P L-10）

1区南側の等高線が小さく張り出したC Q 152グリットに位置する。炭窯主軸は等高線に斜交し、確認面における主軸傾斜は9.5度である。全長は8.96mで、構築時床面傾斜は7度である。床面傾斜はほぼ均一であるが、焚き口付近僅かに窪み、その後前傾して立ち上がった後に再び緩傾斜の作業道へと続く。炭化室長は4.68m、炭化室最大幅は2m、と長さの割に幅広な形状を呈する。奥壁床面と確認面比との高差は1.6m、作業場長2.1m、焚口幅0.6mを測る。

奥壁から1.6m手前の左（北西）壁には煙道が設けられる。排煙口は構築時床面とほぼ水平に掘られ、その後、71度の縦坑へとつながる。

窯内堆積土は他の炭窯同様、下半に焼土化した床面や木炭層、壁の崩落土が互層をなしていたが、降雨による断面観察土手の崩壊により図示不可能となった。また、操業回数も把握する以前であったため、最低操業回数は不明である。調査時に観察した崩落焼土塊にスサなどを混入した形跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘り抜いて構築し、ローム層を天井としてしたと考えられる。

遺物

焼成された木炭はすべて運び出され、窯内で確認されたのは散乱した細片と粉状となった炭のみであった。残された木炭は、肉眼観察でクヌギ節、コナラ節などのいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外の遺物は出土していない。

3区3号炭窯

遺構（第29・30図、P L-12）

F M 152グリットに位置し、確認面で12度傾斜する北斜面に構築されている。平面形は羽子板状を呈し、等高線とほぼ直行方向に長軸を向け、全長8.64mを測る。窯内構築時の床面は平均10度後斜するが、焚き口付近では傾斜がやや緩やかになる。窯内幅は、奥壁中央から1.65m付近が最大となり、最大幅は1.52mで、窯内長は約5.52mである。煙道は奥壁中央より1.08mの距離の左側（東側）に設けられており、筒状に掘り込み、窯内側よりほぼ水平にトンネル状に掘り繋げるといった構造をしている。遺存状態は良好で、当初より踏襲して機能している。筒状に掘り込む傾斜角は77度を測る。

窯内堆積土は、下半には焼土化したローム層や木炭を含む灰層が互層をなしており、4回以上の操業が想定された。上半には天井崩落土と考えられるローム土を主体とした堆積土が認められ、その上には黒色土が堆積していた。最上郷には天井崩落後に生じた窪みに、ほぼ純層のAs-Bが堆積していた。

焚き口は、当初操業時とそれ以降とでは若干位置の移動がセクション断面から窺えるが、平面形状から、幅0.8mと最も狭まった位置付近を想定している。この部分の底面は、各操業面ともにほぼ水平である。焼土を含むローム層土と焼土・木炭を含む灰層が介在するといった堆積状況が見られ、作業場方向に進むにつれ灰層が無くなる。

焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は長軸約2mの長方形を呈し、ほぼ中央には竪坑掘削時の最深部と思われる楕円形の窪みが見られる。作業場の堆積土は焼土・灰混じりのローム土で、同じ土がセクションに見られるように、さらに手前にも確認できることから、図中点線のように作業場が広がることも考えられる。

本炭窯は、最低4回の操業が確認され、操業による壁や天井の剥落などに起因すると推定される堆積による床面上昇が認められる。これに伴い、床面傾斜がほぼ水平に変化するといったことが認められた。また、窯体の手前（斜面下方）には、窯構築時の廃土を処理したと思われる土坑状の遺構が検出された。

第2章 確認された遺構と遺物

平面形は不規則な方形で、長軸約5.2m、深さ平均0.30mである。

遺物

最終操業（4）面の炭化室中央から奥にかけて、床に接して主軸と同方向に並べられたように木炭が残っていた。木炭の重なり具合から窯積み状態のまま残されたとは考難いが、製品として使用可能な木炭も多く含まれていた。木炭以外の遺物は出土していない。

4区7号炭窯

遺構（第34図、PL-13）

4区で唯一確認された地下式炭窯である。4区の浅い谷状地形の奥まった急傾斜地に構築されている。傾斜を調整するためか、炭化室主軸は等高線とはほぼ平行するように構築されている。それでも確認面での主軸傾斜は12度と急なものとなっている。

炭化室東半と焚き口より下部は、後世の壁土採掘のため破壊されている。このため、全長、炭化室最大幅などは不明である。構築時炭化室床面傾斜は8度である。奥壁床面と確認面との比高差は70cmと本遺跡の地下式炭窯中最も浅い。しかし、奥壁や一部の側壁にはオーバーハングした箇所も認められ、構造的に他の炭窯と異なった点は認められない。

煙道は炭化室奥壁側西隅に設置され、排煙口はほとんど横には掘削せず、側壁に接するように縦坑が掘られていたと考えられる。このため、プラン確認時には煙道が確認できず、壁精査時にその存在が確認できた状態であった。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層が互層をなしており、最低4回の操業が確認された。本炭窯は残存壁高が低いが、竪形炉の残存状態から考えて炭窯の壁を削るほど流失が激しかったとは考えにくい。このため、構築時から天井が低かったと考えられる。そのためか4回以上の操業回数が想定される割に床面の上昇が認められず、操業時の壁崩落焼土などを丁寧に除去しながら操業をくり返したものと推定される。堆積土の上半は焼土などを含ま

ないローム層が堆積しており、天井の崩壊土と考えられる。傾斜が急な地点なため、天井崩落土上に黒色土は認められない。

調査時に観察した崩落焼土塊にスサや粘土などは認められず、ローム層を掘り抜いた地下式炭窯と考えられる。

本炭窯の脇には製鉄関連の竪形炉2基が位置し、製鉄関連炭窯としての立地としては最も良好な場所である。しかし、本炭窯の脇には基盤の大岩が露出していることわかるように、付近はローム層の堆積が薄い。現に炭窯床面直下には基盤の礫を多く含む層が存在し、4区西斜面では炭窯を深く掘り込むことは不可能である。この悪条件にもかかわらず、7号炭窯は構築されている。このためか、付近に地下式炭窯が造られることはなかった。

遺物（第141図1）

焼成された木炭はすべて運び出され、窯内で確認されたのは散乱した細片と粉状となった炭のみであった。残された木炭は、肉眼観察でクヌギ節、コナラ節などいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外では、奥壁で須恵器甕が出土したが、須恵器には被熱もなく、斜めに落ち込むような状態で出土していることから、斜面上方から転落したものと解される。

5区1号炭窯

遺構（第31～33図、PL-13・14）

三騎堂遺跡が存在する丘陵が大きく南側に張り出すET112グリットに位置する。炭窯主軸は等高線に斜交し、確認面での主軸傾斜は9度である。この場所は調査以前から古墳の存在が確認されており、調査行程の関係から周辺の遺構確認作業以前に古墳の調査を先行していた。この古墳の周溝調査時に焼土が多量に認められ、急遽周辺の遺構確認を行い、本炭窯を確認した。したがって、古墳より新しい炭窯であるが、作業場付近が不明となってしまった。本炭窯は、古い炭窯の奥壁側窪みではなく、古墳周溝の窪みを利用して炭化室を掘り進んだものと考え

られた。

確認された全長は8.5mと大型ではないが、構築時奥壁床面と確認面との比高差が2.48mと非常に深いことが特徴である。炭化室全長は5.46m、炭化室最大幅は2.4mと広い。また、その形状は奥壁に最大幅を持たず、奥壁から1m以上焚き口側に最大幅を有し、側壁も直線的ではなく僅かに湾曲し、あたかも胴張り石室のような形状を呈している。構築時炭化室床面傾斜は6度とやや緩傾斜である。煙道は奥壁から1.06m手前の炭化室が最大幅となる箇所に向けている。方向は、標高のより高い北側に煙道口を向けている。排煙口は構築時床面より若干上の北壁に横穴を掘り、79度の縦坑につなげている。その際、第33図に示したように縦坑との連結に2度失敗しているようで、掘り直しの痕跡が見つかった。掘り直しとした根拠は、縦坑につながらない排煙口埋土の炭化室側に燻されて黒変した焼土を調査時に認めたことによる。炭化室の幅同様、焚き口も90cmと幅広である。焚き口に続く作業場は2.2mまで確認できたが、本来はもう少し長かったであろう。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層、操業時の壁崩落焼土層が重なって堆積していた。最低操業回数は3回であるが、操業をくり返す際の床面清掃時に、奥壁側の古い床面を削り込んで傾斜を緩くしていることが判明した。本炭窯は天井が比較的高かったと考えているが、床面清掃は丁寧に行われており、操業時の天井崩落焼土はかなり取り払われているようである。

操業時堆積土上には天井崩壊土と考えられる焼土や焼土を含まないローム層が厚く堆積し、更に黒色土が堆積している。部分的であるが、古墳周溝と重複していた作業場付近には、埋没後の窪みに堆積したAs-Bが認められた。調査時に観察した崩落焼土塊にスサなどを混入した形跡や粘土などは認められず、本窯はローム層を掘り抜いて天井とした地下式炭窯であったと考えられる。

遺物

焼成された木炭はすべて運び出され、窯内で確認

されたのは散乱した細片と粉状となった炭のみであった。残された木炭は、肉眼観察でクヌギ節、コナラ節などのいわゆる雑木炭の特徴を有していた。木炭以外の遺物は出土していない。

(2) 今井見切塚遺跡

1区3号炭窯

遺構(第35・36図、P L-14・15)

グリットに位置し、確認面で平均16度傾斜する北側斜面に構築されている。

平面形は、ちょうど奥壁に巨石があることから、それを避けるために東に張り出すといった変形した羽子板状を呈し、等高線にほぼ直交方向に長軸を向け、全長約8mを測る。窯体構築時の床面は、炭化室では平均9度傾斜し、焚き口部付近で緩やかに転換し、焚き口部ではほぼ水平となる。窯内幅は最大で1.44mを測り、奥壁沿いの床面と確認面との比高差2.16mを測る。奥壁両隅角部に煙道がそれぞれ設けられている。窯内長は4.56mである。壁の立上りをみると、焚き口方向を除く3方向の壁すべてがオーバーハングしており、天井の存在が想定できる。

煙道は、奥壁東隅角部のものは、壁際は地山を半円柱状に掘り込み、残りの窯内側は拳大から30cm位の石を用いて積み上げて構築するといった手法を採っており、最終操業に伴う灰層の上に築かれている。一方の煙道は、地山を筒状に削り抜き、窯内側壁下位部から横穴でつなぐ構造であったものが、少なくとも3回操業段階までには掘り直しが認められ、その後側壁側が崩れ煙道としての機能を果たさなくなったものと推察できる。煙道として残っている壁面をみると、焼土化して硬く締まった状態である。

窯内堆積土は、下半に焼土化したローム層や木炭層が互層をなしており、3回の操業が想定された。上半には天井崩落土と考えられるローム層土を主体とした堆積土が認められ、その上には黒色土が堆積していた。最上部には天井崩落後に生じた窪みに、ほぼ純層のAs-Bが堆積していた。

焚き口は、作業場との境のくびれた箇所で、幅が

第2章 確認された遺構と遺物

0.58mと狭まった場所に設定されていたと考えられ、窯体構築時床面をみると炭化室同様の傾斜面から、作業場に向かってほぼ水平に変わる変換点に相当する。堆積状況をみると、天井崩落上と思われるローム主体の堆積層は、焚き口付近まで存在するが、作業場より手前では認められない。

焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は長軸4.0mの卵形を呈し、底面は皿状に窪んでいる。作業道といった遺構は確認できない。作業場の堆積状況は、各操業後の灰等の掻き出しによると思われる炭化物・焼土を多く含んだ土が、操業回数を増すごとに堆積し、次第に床面上昇を招くといったことが観察された。

本炭窯は、断面観察から最低3回の操業が確認され、操業による壁や天井の剥落などに起因すると推定される堆積によって、床面上昇が認められた。しかし、床面上昇がみられても、窯構築時と同様の床面傾斜は保持されている。

遺物（第142図1、P L-45）

木炭以外の遺物に、作業場から出土した須恵器杯がある。この須恵器には墨書が認められ、炭窯や製鉄関連遺構出土遺物のなかでは古い時期のものである。

1区7号炭窯

遺構（第37・38図、P L-15・16・18）

C B133グリットに位置し、9号炭窯廃棄後の窪みを竪坑・作業場に利用して構築された炭窯である。確認面で平均11.5度傾斜する北側斜面に構築されている。平面形状は羽子板状を呈し、等高線とほぼ直交方向に長軸を向け、全長は約8.3mである。窯内構築時の床面は、奥壁から作業場の2/3付近まで平均7.5度後傾するが、残り1/3ではほぼ水平となる。窯内幅は、煙道側壁付近が最大幅となり、3.2mを測る。

煙道は窯内幅が最大となる左側（東壁）に設けられ、煙道西壁は崩落した状態で検出し、その掘り方傾斜角は43度を測る。また、最終操業面では煙道付近に人頭大から拳大の石が多数出土していることから、煙道西壁崩落後もこれらの礫を使用した排煙口

施設を設けていたことを窺わせている。さらに、煙道を観察すると、窯内部東壁中から上位の掘方は同一であるのに対し、下位では操業別に掘り直していることも確認された。窯内長は5.54mを測る。

窯内堆積土は、下半に焼土化したローム層や木炭層が互層をなしており、4回の操業面が確認された。上半には天井崩落土と考えられるロームを主体とした堆積土が認められ、その上には黒色土が堆積していた。最上部には天井崩落後に生じた窪みに、ほぼ純層のAs-Bが堆積していた。

焚き口は、当初操業時の最狭部幅で1.16mを測るが、床面の傾斜も窯内同様の角度をもって後傾している。さらに操業に伴う焼土・炭化物を含む層と床面の互層が確認できることから、実際にはさらに作業場のほうまで下がる可能性を窺わせている。また、天井崩落土と考えられるローム主体の堆積土は、焚き口付近まで存在するが、作業場より手前では認められない。焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は一辺約2.4mのやや不規則な円形を呈し、底面は皿状に窪んでいる。なお、当初操業時の遺構検出状況を見ると、作業場東壁斜面には、製材を搬出する施設と考えられる階段状の小段が確認されている。作業場の底面は、操業後清掃の際に掻き出したと考えられる焼土塊・炭化物混じり焼土を多く含んだ土によって次第に浅くなっていったことが断面観察から窺えた。

本炭窯は、断面観察から最低4回の操業が確認され、操業のたびに壁や天井の剥落による堆積で、床面が上昇するといった経緯を窺わせる状況がみられた。ここでは、最終操業時になって、これまでの床面傾斜よりやや緩やかな傾斜に移行していることが確認できた。

遺物

ここでは作業場3次操業面よりほぼ完形に近い状態で土師器杯が出土している。

1区8号炭窯

遺構（第39図、P L-16）

CE137グリットに位置し、確認面で平均15.5度傾斜する、北側斜面に構築されている。炭化室奥壁は、3号炭窯の作業場として利用されているため、上半分位は壊されている。平面形状は、煙道崩落のためやや不規則ではあるが、長楕円形を呈している。等高線とほぼ直交方向に長軸を向け、検出部全長は約11mである。

窯体構築時の床面は、炭化室では奥壁より1/2位までは約11度後傾するが、次第に傾斜が緩くなり、焚き口部付近ではほぼ水平となる。窯内幅は、奥壁中央から約1.8m付近が最大となり、最大幅は1.96mを測る。窯内幅が最大となる箇所（西壁）には煙道が設けられている。窯内長は約7.45mである。壁の立ち上がりを最大幅の位置でみると、煙道の反対側では垂直に近いが、場所によってはオーバーハング気味に立ち上がるのに対し、煙道側ではA-A'断面のように、ちょうど3段ある階段状に掘り込まれている。これは、煙道の掘り直しによるものと思われる。

窯内堆積土は、下半に焼土化したローム層や木炭層が互層をなしており、少なくとも3回の操業面が確認できた。上半には天井崩落土と考えられるロームを主体とした堆積土層が認められ、その上に黒色土が堆積している。こうした黒色土層の最上層には、密度の高いAs-Bも確認されている。

焚き口は、当初操業面と最終操業面とでは位置的に大きな違いを見せている。前者は、炭化室奥壁より7.45m手前、幅1.10m、長さ0.80mを測り、後者は炭化室奥壁より約3.90m、幅0.70m、長さ0.50mと、焚き口が3.5m以上手前に移動している。これは、操業を重ねているうちに、当初操業に伴う焚き口部付近の炭化室天井が崩落したことによる移動と考えられ、おのずと炭化室規模の縮小につながるものである。焚き口の底面は、操業面に関わらず水平である。また、天井崩落土と考えられるローム層主体の堆積層は、操業面に関わらず焚き口付近まで存在するが、作業場より手前では認められない。

焚き口手前には作業場が設けられているが、最終

操業面のみ全容を検出したが、他の操業面に伴う作業場は、その大部分が調査区外であるため全容を把握することはできなかった。最終操業面に伴う作業場の規模は、平面卵形を呈し、長軸で3.00mを測る。底面は皿状に窪んでおり、操業後の炭取り出しの際に出るとされる灰・焼土塊等の堆積がみられる。

本炭窯からは3回の操業が面として確認された。最終操業では、炭化室の焚き口付近を中心とした天井崩落を見たものの、廃棄せずにそのまま焚き口を奥壁側、天井の崩落を免れた位置まで移動することで、再度操業にまでこぎつけているといった状況を窺わせている。ここでも他の炭窯同様、操業による壁や天井の剥落などに起因すると推定される堆積によって床面の上昇が認められる。しかし、床面傾斜を見ると最終操業面に移行するごとに、その傾斜角は緩くなるといった傾向がある。

遺物

木炭以外の遺物は認められず、木炭も運び出された後に残る細片のみであった。

1区9号炭窯

遺構（第40・41図、PL-17・18）

CB134グリットに位置し、確認面で平均13.5度傾斜する北斜面に構築されている。11号炭窯炭化室天井崩落に伴う窪みを堅坑・作業場に利用して構築され、7号炭窯によって炭化室が壊された状態で検出された。平面形は羽子板状を呈し、等高線とほぼ直交方向に長軸を向け、全長約10.70mである。窯体構築時の床面は、炭化室では4.3度後傾するが、次第に傾斜が緩くなり、焚き口付近では前傾し、作業場に向かい水平に近い状態になる。

窯内幅は、奥壁中央から1.50m付近が最大となり、最大幅は1.70m、窯内長は7.00mである。煙道は、奥壁西コーナー部より1.080m付近に掘られ、そのまま窯内にトンネル状に貫通させている。遺存状況は良好で、平面形状は楕円形で、長軸0.70m、短軸0.55mを測り、垂直というよりは、ややオーバー

第2章 確認された遺構と遺物

ハンク気味に掘り込まれている。

窯内堆積土は、奥壁寄りはその後の7号炭窯作業場として利用されていることから、乱れはあるが、おおむね上半は天井崩落土と考えられるローム層を主体とした堆積土が認められ、その上には黒色土が堆積していた。下半には焼土化したロームや木炭を伴う灰層が互層をなしており、4回の操業が想定された。

焚き口は、ちょうど窯体が北東に屈折した狭まる箇所（11号炭窯と重複する箇所に相当）に位置し、その幅は0.60mを測り、底面はやや前傾する。焚き口手前には作業場が設けられ、平面形はやや不規則な卵形を呈し、長軸で3.00mを測る。底面は皿状に窪んでいる。なお、当初操業面においては、作業場に溝状の掘り込みが確認された。

本炭窯は、最低4回の操業が確認され、操業による壁や天井の剥落などに起因すると推定される堆積による床面上昇が認められる。ここでも、床面上昇に伴って傾斜が緩くなる傾向が認められた。

遺物

ここでは、最終操業に伴う製炭取り出し時に、天井崩落に遭い、途中で取り出しを断念したことを窺わせる状況が見られた。図はそうした状況を示すように、炭化室の手前から製炭を取り出し、残りが奥壁付近の段階で天井崩落土であるロームによって埋め尽くされた段階から、ロームを取り除いた状態を示している。そのほとんどがクヌギで、直径10cm内の細い材が使われていることがわかった。

1区11号炭窯

遺構（第42・43図、P L-17・18）

CC135グリットに位置し、確認面で平均13.5度傾斜する北斜面に構築されている。9号炭窯構築時の竪坑および焚き口・作業場として、さらに東壁に坑口をもつ横穴遺構によって壊された状態で検出された。平面形は羽子板状を呈し、等高線とほぼ直交方向に長軸を向け、全長約14.16mである。窯体構築時の床面は、炭化室では8度後傾するが、焚き口

付近で水平になり、作業場に向かっては逆に、緩やかながらも前傾する。窯内幅は、奥壁中央から2.30m付近が最大となり、最大幅は2.00m、窯内長は6.78mである。

煙道は奥壁より1.4m手前東壁沿いに位置し、平面形は楕円形を呈する、長軸2m、短軸1.3mの掘方の中に、0.35mの円形の煙道が掘られ、窯内東壁よりトンネル状に貫通しており、遺存状況も良好である。煙道傾斜角は64度を測り、操業ごとに踏襲されていたものと思われる。

窯内堆積土は、奥壁付近は9号炭窯東壁より掘り込まれた横穴遺構の影響による乱れが、さらに窯内焚き口付近は9号炭窯による同じく乱れがあるものの、おおむね下半に焼土化したローム層や木炭を含む灰層が互層をなしており、4操業面が想定された。上半には、天井崩落土と考えられるローム層を主体とした堆積土が認められ、その上に黒色土が堆積する。中には、As-Bの密度が高いところも見られた。

焚き口は、幅0.42mと最も狭い箇所に設定されていたと考えられ、この箇所の底面はほぼ水平である。天井崩落土と思われるローム層主体の堆積層は、焚き口付近まで存在するが、作業場より手前では認められない。

焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は長軸約1.50mの不整形を呈し、底面は皿状に窪んでいる。作業場手前には溝状を呈した作業道がある。底面は前傾して次第に浅くなり、ほぼ水平になったところで地表面に達する。作業場と作業道の底面は、操業後の清掃の際に掻き出したと考えられる焼土塊、灰を多く含んだ土によって次第に浅くなっていったことを窺わせる状況が見られた。

本炭窯は、4操業面を確認したが、操業による壁や天井の剥落などに起因すると推定される堆積によって、床面上昇が認められる。しかし、床面上昇しても構築時床面と同様な床面傾斜は保持されている。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。木炭も搬出された後の細片のみであった。

1区9号炭窯横穴

遺構（第44図、PL-18）

CC134グリットに位置し、9号炭窯崩落後の窪みを竪坑に利用して、新たな炭窯を構築する際の遺構と思われる、9号炭窯東壁に見られる横穴口は、焚き口に相当する。焚き口から炭化室を構築するためにトンネル状に穴を掘り進める過程で、11号炭窯奥壁と貫通したことから、このまま窯を構築しても、炭焼きに必要な火力・高温を維持できないことから、構築途中で断念したものと推察できる。

11号炭窯や本図のセクション図より、11号炭窯埋土が、横穴の下半を流れ込むようにして埋め尽くし、上半はそのまま空洞のままであったことから、こうした状況を窺わせている。

横穴検出時の規模は、平面形は不整形で、一辺1.40m前後で、底面から天井までの高さ約1.45mを測る。横穴内堆積土は、11号炭窯炭化室上半部堆積土の流れ込みが見られ、壁・天井崩落に起因するロームブロック主体と、同じローム主体土の中に炭の混入が見られる土の層で構成されている。床面・壁の立ち上り状況は、掘削作業途中で放棄されたことに起因すると思われるように、すべてが一定しておらず、床面をみると焚き口から延長線上については、ほぼ水平に掘られているものの、奥壁方向に向かって前傾している。なお、壁面にはヘラ状工具痕が残り、その状況から少なくとも東壁・西壁と異なる2種類の工具痕が奥壁方向に掘り進むように残されていることから、横穴掘削時には二人の工人が同時に作業を行っていたものと推察できる。

遺物

遺物は出土していない。

4区1号炭窯

遺構（第45図、PL-18）

DE111グリットに位置し、確認面で平均8度傾

斜する東斜面に構築されている。平面形は羽子板状を呈し、等高線とはほぼ直交方向に長軸を向け、全長は約8.5mである。窯体構築時の床面は、炭化室では10度から11度傾斜し、焚き口部付近で緩やかに転換し、焚き口ではほぼ水平となる。窯内幅は、奥壁中央から1.9m付近が最大となり、最大幅は1.4m、奥壁床面と確認面比高1.24mを測る。窯内幅が最大となる箇所（北側）には煙道が設けられている。窯内長は約4.9mである。煙道は検出段階で平面径25～30cm規模の楕円形を呈し、窯内幅が最大となる箇所北壁に位置する。その傾斜角は平均57度を測り、煙道壁面全体は焼土化し、還元炎によると思われる青色のタール化した非常に硬く締まった状態である。

窯内堆積土は、下半には焼土化したローム層と木炭層が互層をなしており、5回以上の操業が想定された。上半には天井崩落土と考えられるロームを主体とした堆積土層が認められ、その上に黒色土が堆積している。こうした黒色土層の最上層には、密度の高いAs-Bも確認されている。

焚き口は、長さ60cmにわたって幅が64cmと狭まった場所に設定されていたと考えられ、窯体構築時床面をみると炭化室同様の傾斜から、作業場に向かってほぼ水平に変わる変換点に相当する。堆積状況を見ると、当初操業面に伴う灰層や床面が当該地より作業場まで延びていることから、焚き口の位置が操業ごとに作業場まで後退するといった移動がみられる可能性を示している。

焚き口手前には作業場が設けられ、平面形は長軸約1.7mの卵形を呈し、底面は皿状に窪んでいる。作業場手前には溝状を呈した作業道がある。作業場から検出時で底面が2段に掘られ、前傾して浅くなる。作業場と作業道の底面は、操業後の掻き出しおよび再利用時の整備を思わせるように、ローム主体層と灰・焼土主体層が互層になっている。

本炭窯は断面観察から最低9回の操業が確認され、操業による壁や天井の剥落などに起因すると推定される堆積によって床面の上昇が認められる。しかし、

第2章 確認された遺構と遺物

床面が上昇しても構築時床面と同様な床面傾斜は保持されている。

遺物（第142図1、PL-45）

最終操業の作業場から須恵器碗が1点出土している。時期は10世紀後半以降であろう。

5区2号炭窯

遺構（第46図、PL-19）

E H40グリット、見切塚の丘陵東斜面に離れて存在する未完成の炭窯である。

全長は3.24mで、主軸が等高線に直交するように設定している。主軸方向の確認面傾斜は13度と急である。掘削途中のため、底面と確認面との比高差は1.4mと浅い。作業場にあたる場所を縦穴状に掘削した後、向きを横に変えて焚き口部分から横穴を掘削している。完成後に作業場となる縦穴部分の長さは2.82mである。横穴掘削開始部分、完成後には焚き口となる部分の幅は64cmである。

この焚き口となる場所の両側には、基盤を構成する大きな礫が下面に露出しており、深く掘削することができなかったであろう。更に、掘削を諦めた地点の先にも礫が露出しており、これが決定的な障害となったのであろう。

当然のことながら壁面や埋土に焼土や灰は認められなかった。下部にはローム層を中心とした堆積層があり、その上部は黒色土の自然堆積であった。

遺物

木炭を含め、出土遺物は皆無である。

5区9号炭窯

遺構（第48・49図、PL-19）

多田山丘陵の調査で最も炭窯が集中する見切塚5区東斜面のD O21グリットに位置する。作業場と作業場から続く作業道の規模が不明確なため、全長は不明である。炭窯主軸は等高線に斜交し、確認面での主軸傾斜は9度である。炭化室長は4.62m、炭化室最大幅1.4mで、構築時の炭化室床面傾斜は7度である。構築時奥壁床面と確認面との比高差は2.2

mである。炭化室床面は、均一な傾斜であるが、焚き口付近で傾斜がほぼ水平となり、その後、1.2m程緩い前傾が続いた後、急激に立ち上がり、その後は水平となっている。

焚き口の位置がわかりにくいのが、断面D D'付近と考えておきたい。なお、この場所の幅は64cmである。焚き口手前には作業道のような浅い溝状遺構が表記されているが、幅が広すぎるなど疑問もある。また、下部には古い時期の炭窯に伴う焼土層が続くこともあり、作業道は確定できなかったとしておきたい。

煙道は奥壁から84cm焚き口側に寄った東壁に設置されている。排煙口は構築時床面から少し上に横穴を掘り、99度（炭化室側に9度傾く）の角度を持った縦坑に続く。

窯内堆積土は、下半に焼土化した床面や木炭層、壁の崩落土が互層をなしており、最低6回の操業に伴い床面の上昇が認められる。他の炭窯では、操業時堆積土上には天井の焼土などを含まないローム層が認められるが、本炭窯の場合これがほとんど認められない。本炭窯の場合、操業時の堆積が他の炭窯に比して厚く、天井を構成していたハードローム層が剥離してしまったのであろうか。断面B B'の壁際にはローム崩落土が認められ、こうした可能性があることを裏付けている。天井が崩壊した後は黒色土が堆積し、上位にはAs-Bの堆積が認められた。

本炭窯の作業場下部から14号炭窯が確認され、14号炭窯奥壁の窪みを利用して構築したことが判明した。

遺物（第142図1・2）

出土地点と層位が不明であるが、須恵器碗が2点出土している。

5区10号炭窯

遺構（第46・47図、PL-20）

多田山丘陵の調査で最も炭窯が集中する見切塚5区東斜面のD Q21グリットに位置する。作業場と作業場から続く作業道の規模が不明確なため、全長は不明である。炭窯主軸は等高線にはほぼ直交し、確

認面での主軸傾斜は10度である。炭化室長は4.66m、炭化室最大幅1.42mで、構築時の炭化室床面傾斜は11度である。炭化室床面は、均一な傾斜であるが、焚き口付近で傾斜が前傾に変換してほぼ水平に変換する箇所では焚き口となる。焚き口の斜面下方の床面は皿状に浅く窪み、ここが作業場に想定される。作業道は、実測図にそれらしきものが表記されているが、幅が広すぎるなど疑問もある。従って、作業場より斜面下方には古い時期の炭窯に伴う焼土層が続き、作業道は確定できなかつたとしておきたい。焚き口幅1.0mとやや広い。構築時奥壁床面と確認面比高差は2.2mと深く掘り込まれている。

煙道は、奥壁から1.6m焚き口側に寄った右（北）壁に設置されている。炭窯主軸は僅かに斜交しており、標高の高い側に煙道を設置したのと考えられる。排煙口は構築時床面から60cmもの高さから横に40cm掘り進み、90度の縦坑につなげている。断面図E E'に最終床面の線を入れているが、最終段階の煙道として考えれば良いが、当初からの煙道とするにはかなり高い位置に設定されたことになる。炭窯の場合、排煙口を高くすればするほど床面付近の炭化に悪影響を与えるが、調査所見によれば他の煙道は見つかっていない、この点はどうであったのだろうか。

窯内堆積土は、下部に焼土化した床面や木炭層、壁の崩落土が互層をなしており、最低6回の操業が想定される。操業をくり返すことによって生じる床面上昇により、床面傾斜が11度から4度へと次第緩くなっている。また、それに伴い、炭化室床面、焚き口部、作業場が水平に近くなっている。

操業時堆積土上には、天井崩壊土と考えられる焼土や黒色土を含まないローム層が堆積している。このローム層は焚き口付近より手前では確認されていない。天井崩壊後の窪みには黒色土が堆積し、ほぼ埋まりきる直前にAs-Bの降下が認められる。

遺物

木炭以外の出土遺物は皆無である。

5区14号炭窯

遺構（第50図）

今回調査した多田山丘陵中最も炭窯が集中する見切塚5区東斜面のDP20グリットに位置する。炭窯主軸と丘陵の傾斜との関係は不明である。作業道が不明瞭で全長は不明である。規模は炭化室長4.84m、炭化室最大幅1.88mで、平面形は隅丸方形に近く、奥壁・側壁共に直線的である。構築時炭化室傾斜は7度である。煙道は奥壁から1.06m焚き口側に寄った右（東）壁に設置されている。排煙口は構築時床面から20cm上の側壁に25度の傾斜をもった横穴を1m掘り、そこに向かって90度に縦坑を掘り込んでいる。構築時奥壁床面と確認面との比高は1.84m以上と比較的深く掘り込まれている。焚き口は炭化室が最も狭まった箇所に想定され、幅は66cmである。焚き口に続く作業場と作業道の長さなどは不明である。

他の炭窯や竪形炉との重複により、調査当初にプランが不明瞭であったため、主軸方向のセクションにズレが生じた。このため、主軸方向断面図は報告書には図示しなかった。また、床面上昇に伴う傾斜の変化も捉えることができなかった。

窯内堆積土は、下部に焼土化した床面や木炭層、壁の崩落土が互層をなしており、最低4回の操業が想定される。操業をくり返すことによって生じる床面上昇により、最終操業面（4面）では、セクションB B'箇所では40cmの床面上昇が認められた。操業時堆積土上には、天井崩壊土と考えられる焼土や黒色土を含まないローム層が堆積している。しかし、天井崩壊後に斜面上方に9号炭窯が構築され、その際に炭化室中央の堆積土を掘り込んでいる。このため、断面B B'には天井崩壊土が削り取られている様子が明瞭に現れている。

本炭窯も斜面を利用した地下式炭窯であったと考えられる。

遺物（第142図1）

出土層位と位置が不明であるが、土師器杯が1点出土している。

第2章 確認された遺構と遺物

5区17号炭窯

遺構（第51図、P L-20）

今回調査した多田山丘陵中最も炭窯が集中する見切塚5区東斜面のDQ20グリットに位置する。他遺構との重複などがあり、確認面傾斜は不明である。炭窯主軸は等高線とほぼ直交し、確認された全長は6.1mである。しかし、焚き口より手前は調査区外のため未調査である。炭化室長は5.8m、炭化室最大幅は1.44m、構築時炭化室床面傾斜は7度である。炭化室の平面形状は、幅が狭い長方形を呈している。炭化室西側壁は直線的に延びるが、東側壁は焚き口部で内側に曲がり込み、幅を60cmに狭めて焚き口としている。煙道は奥壁から43cm手前の右（東）壁に設置する。排煙口は構築時床面から16cm上がった側壁から斜めに掘り込み、85度の縦坑につなげている。

窯内堆積土は、下部に焼土化した床面が重層的に確認され、部分的に壁崩落土などの焼土塊層が認められる。最低操業回数は5回であり、操業をくり返すことにより床面は上昇し、焚き口寄りの箇所では60cm近く高くなっていた。操業時堆積土上には天井崩落土と考えられる焼土などを含まないローム層の堆積が認められるが、新たに上方に構築された10号炭窯により中央部が削り取られている。

奥壁には15・16号炭窯とされる遺構があり、奥壁の一部が破壊されている。本炭窯は10・15・16号炭窯より古い。

5区19号炭窯

遺構（第51図、P L-20・21）

今回調査した多田山丘陵中最も炭窯が集中する見切塚5区東斜面のDQ19グリットに位置する。炭窯主軸方向は等高線とほぼ直交するようである。主軸方向の確認面傾斜は19度である。作業道先端付近が14号炭窯に破壊されており、全長は不明である。炭化室長は2.18m、炭化室最大幅は2.0mと非常に小さい。炭化室床面傾斜は5度で、構築時奥壁床面と確認面との比高は2.0m以上と深い。作業場長と思

われる場所は幅が狭く、作業道と区別が付かない形状を呈している。焚き口幅は80cmであるが、煙道が確認できないことや窯内堆積土中に操業時に発生する壁や天井の剥落層が全く認められないなど操業された形跡が認められない。しかし、炭化室床面には焼土や炭の分布が認められ、炭窯を完成させる際の空焼きが行われたと考えられる。しかし、左（南）壁の湾曲部には巨石があり（危険防止のため撤去した痕跡で湾曲している）、これが原因で操業を諦めた可能性が高い。

窯内堆積土の下半はローム層で、上半は黒色土である。

6区1号炭窯

遺構（第52図、P L-21）

本炭窯は、試掘調査の際に本調査が行われているため、以下遺構説明を多田山第2次試掘調査報告書より用語のみ一部改変して遺構説明を掲載する。

6区東側、丘陵南西斜面に位置し、傾斜面に沿って築かれている。窯体は焚き口が狭い羽子板状の平面形態を持つ木炭窯で、壁の断面形が中心に膨らみを持つこと、土層堆積状況において地山であるローム土が焚き口付近まで厚く堆積していることから地下式構造であることは間違いない。天井部は崩壊しているが、オーバーハングした部分も多く、現況において地下式の痕跡を良く残している状態といえる。

当初構築面における詳細は次のとおりである。

およそ主軸方向はN-9°-E、窯体の全長7m、炭化室最大幅2.2m、焚き口部幅50cm、傾斜角4度を測る。煙道は奥壁角から飛び出すように幅20cmほどの溝状に設けられ、天井部より上位は径約30cmの円形を成す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存高約1.9mを測る。奥壁正面天井部に垂直に穿たれた1辺20cmの隅丸方形の穴が確認されたが、確認面近くまでチョコレート色粘土によって人為的に埋められており、火を受けた痕跡も認められなかった。焚き口手前には径3m程の不整形のすり鉢状に近い堅穴

の作業場を持ち、焚き口から右斜め下方に作業場を越えて作業道が延びている。この作業道は作業場を出るところで、高さ60cm程の段差を持ち、傾斜角約3度と浅く南へ3m程延びている。最後は比較的角度を持って立ち上がっているから、削平されているとはいえ、更に南へ延びていた可能性は低い。

最終作業面の詳細は、当初作業面と大幅に変わることはないが、比較した場合の相違点を以下に示しておくことにする。

床面において当初構築面との比高差は、炭化室奥壁寄り約20cm、焚き口部で約70cm、作業場で50cmを測り、傾斜角0度とフラットな状態である。また、焚き口は人頭大の石によって補強されており、幅30cmと狭くなっている。また、焚き口の左脇には一部鉄を叩いたような跡がある長さ50cm、幅20cmほどの直方体の石が転がっていた。

窯体の規模は変わっていないが、壁は断面形状から床が上がった分削って造り直している様子が窺える。作業場は完全にすり鉢状となり、作業道は作業場を出たところで短く1m延びて終わる。

遺物

遺物は天井崩壊土中から鉄製鎌1点（今回の整理時には不明）、縄文土器1点と作業場埋土から縄文土器片が3点出土したのみであり、木炭以外遺構に伴う出土遺物はない。

7区3号炭窯

遺構（第53図、P L-22）

7区の浅い谷状地形内に単独で構築されている。調査時のグリット表記ではB O77に位置する。炭窯は炭化室中央やや下方で左に曲がっている。炭化室内に岩などの障害物は認められず、その理由は不明である。作業場から炭化室手前部分の主軸は等高線に直交し、奥側は斜交している。確認面における平均的な傾斜は12度である。構築当初の全長は7.44m、炭化室長は5.2m、炭化室最大幅は1.62mと細長い形状を呈している。構築時床面傾斜は9度で、焚き口付近で急に前傾して立ち上がる部分が焚き口であ

ろう。焚き口幅は60cmである。焚き口の手前、作業場床面は浅く皿状に窪み地表へと続く。作業場の平面形は、卵形に広がらず幅は狭く、上端幅1.4m、長さ2.2mを測る。構築時床面と確認面との比高差は1.42mで、多田山の地下式炭窯の中にあつて、非常に浅い場所に床を構築している。

窯内堆積土は、下部に焼土化した床面と木炭層が互層をなし、最低操業回数は4回を数える。操業に伴う堆積で床面は上昇するが、炭化室床面の傾斜に変化はないようである。しかし、焚き口の場所は次第に奥壁側に移動し、3回目には構築時に比して1m近く奥壁側に移動していることが断面観察から判明した。また、2回目の操業で堆積した木炭を含む層が奥壁から1.6m付近で小さく立ち上がっている点も注目される。この立ち上がり部分の先は地山になっており、断面で確認される2回目の創業後、3回目の操業以前に、奥壁側を掘りすすめ、炭化室長を長くした可能性も考えられる。加えて、操業時奥壁の先にはローム層で埋まった横穴が確認された。この横穴は操業時堆積土を除去した後に確認されており、奥壁を更に掘り進めようとしたが、何らかの理由で取りやめた後に埋め戻し、操業を続けたと考えられる。しかし、拡張以前の煙道は確認されず、拡張を行った確証は得られていない。

煙道は奥壁から1.2m手前の左（西）側壁に設置している。排煙口は床面と同レベルで横穴を掘り、90度に掘り進んだ縦坑につなげている。

遺物

木炭片以外の遺物は出土していない。

（2）伏窯

A 今井三騎堂遺跡

1区2号炭窯

遺構（第54図）

C V 160グリットに位置する。三騎堂西斜面の1区において最も標高の高い場所に構築された炭窯である。平面形は、長軸を等高線と直交方向に向けたいびつな隅丸長方形を呈する。規模は全長4.2m、炭

第2章 確認された遺構と遺物

化室長3.2m、同幅1.5mを測る。確認された深さは10cm前後と浅い。地山傾斜角は8度で炭化室床面は周辺と合わせているようで、同じ8度の傾斜で掘削されている。断面C'付近にピット状の落ち込みがあるが、製炭時に材料を固定するような杭などの設置痕としては浅く、他の壁際でも確認されておらず、床面の窪みとして考えておく。

標高の高い側の短辺中央には長さ30cm程の煙道が確認された。一方焚き口は、標高の低い短辺中央(断面A'付近)に張り出しが認められ、この場所に求められよう。両者共に礫等を用いた施設は確認されない。

埋土は黒色土を主体とし、ローム塊は含まない。また、壁面の焼土化も認められず、埋土中の焼土も焼土粒が部分的に認められる程度であった。

遺物

生産された木炭はすべて使用されたようで、木炭細片が少量出土したのみである。土器類の出土は皆無である。

3区1号炭窯

遺構(第54図)

古墳周溝内に築かれており、周溝調査中にその存在に気が付いたためにプランは一部のみ図化し得た状態であった。幸いなことに古墳周溝セクションに炭窯がかかっており、断面では幅2.4m確認できた。また、断面で確認できた壁高は48cmにも及ぶ。平面形を確認し得たのが一部であり、全長、焚き口や煙道施設、床面傾斜などは不明である。

埋土は黒色土を主体とし、ローム塊は含まない。また、床面や壁面の焼土化も認められず、埋土中に焼土粒が部分的に認められる程度であった。なお、埋土上部にはAs-Bが認められ、1108年には水平に近い状態にまで埋没していたことになる。

遺物

生産された木炭はすべて運び出されたようで、木炭細片は底面部分に多く認められたが、図化し得るほどの大きさの木炭はわずかであった。土器類の出

土は皆無である。

3区2号炭窯

遺構(第55図)

三騎堂遺跡が存在する丘陵頂部付近のEV154グリットに位置する。平面形はいびつな隅丸長方形を呈し、規模は全長4.6m、炭化室幅1.1mから1.5m、確認壁高12cmから22cm、炭化室床面傾斜4度を測る。南東にはピット状の掘り込みが存在するが、木炭片などを含まず、無関係の可能性が高い。

埋土は黒色土を主体とし、ローム塊は含まない。また、床面や壁面の焼土化は認められず、焼土粒もほとんど認められない。埋土下部には細かい木炭片や灰が認められたが、図示し得るほどの木炭は北隅にわずかに認められた程度である。埋土際上層にはAs-Bが認められ、1108年段階ではほとんど水平に地下以上にまで埋没していたことは確実である。

4区1号炭窯

遺構(第55図)

4区北東斜面のGS177グリットに位置する。平面形は、長軸2.64m、炭化室幅0.86mから1.3mの長い楕円形状を呈する。確認壁高は6cmから15cmで、炭化室床面傾斜は6度である。底面に焼土粒は分布するものの、床面の焼土化は認められない。埋土は黒色灰と木炭粒を主体としており、ローム粒は認められるがローム塊は認められない。

木炭細片が多く出土したことから炭窯と判断し、掘り込みが浅く底面が平坦であるので伏せ窯とした。煙道や焚き口施設は不明である。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

4区5号炭窯

遺構(第56図)

三騎堂の東斜面中央のFT136グリットに位置する。平面形は、全長2.2m、炭化室幅1.04mから1.14mの隅丸長方形を呈する。確認壁高は4cmから11cmと

浅い。炭化室床面傾斜は3度と緩い。焚き口や煙道施設は確認されない。

埋土は黒色土であるが、木炭粒や木炭細片を多く含んでいた。床面や壁の焼土化はほとんど認められないが、北西壁の一部がわずかに焼土化していた。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

6区2号炭窯

遺構（第56図）

6区の標高が低い場所のG I 127グリットに位置する。炭化室のコーナー部のみの残存であり、竪穴住居分布域に近接して確認されたため、当初は竪穴住居の可能性も考えていた。しかし、埋土中に木炭細片を多く含んでいたため、炭窯として調査した。全長、炭化室幅は不明。炭化室床面傾斜は6度で、確認壁高は0 cmから8 cmである。

遺物

木炭片以外の遺物は出土していない。

6区3号炭窯

遺構（第56図）

6区の竪穴住居分布域内のF U 113グリットに位置する。残存状態が悪く、部分的な確認にとどまり、平面形や規模は不明である。全長は3.96m以上、炭化室幅は1.96m以上、炭化室床面傾斜は8度、である。残存壁高は0 cmから8 cmであった。底面が傾斜していることや埋土に木炭小片を含んでいたことから伏せ窯とした。底面や壁面の焼土化は認められず、埋土中に焼土粒も認められない。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

B 今井見切塚遺跡

1区2号炭窯

遺構（第57図、P L-22）

見切塚丘陵再頂部のB U 114グリットに位置する。平面形は、幅広の不整長方形を呈する。規模は、全

長4.5m、炭化室長3.64m、炭化室幅2.1mから2.7mを測る。炭化室床面傾斜は1.5度と緩い。短辺のほぼ中央には、各1箇所竪穴住居の竈状に40cm突き出した箇所が見受けられた。この箇所は、伏せ焼き窯の焚き口と煙道施設と考えられる。傾斜下部の張り出しは焚き口と考えられ、張り出し南側には長軸方向の木炭が3本存在する。また、張り出しを挟んだ北側にも短軸方向の木炭下位に長軸方向の木炭が認められ、これらを使用して焚き口施設を作っていた可能性が高い。炭化室床面の焚き口側には短軸方向の木炭が列んでおり、窯詰めの仕方を表していると考えられる。確認壁高は20cmから30cmと伏せ窯にしては壁の残りが良好である。

埋土は黒色土を中心とし、木炭片や粉状になった炭を多く含んでいる。底面や壁面の焼土化は認められず、埋土中の焼土粒もほとんど認められなかった。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

1区5号炭窯

遺構（第57図、P L-23）

伏せ窯が比較的集中する1区丘陵頂部付近に位置する。グリットはC H 105である。上端での直径1.6m、深さ30cmの土坑状を呈する。埋土には焼土粒と炭を少量含む。積極的に炭窯とする根拠に欠けるが、周辺には伏せ焼き窯が多く分布することから、穴焼きによる炭の生産を行った土坑の可能性もあり、炭窯に含めて報告しておく。壁面の焼土化は認められない。

1区6号炭窯

遺構（第57図、P L-23）

伏せ窯が比較的集中する1区丘陵頂部付近のC L 106グリットに位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈する。規模は、全長5.4m、炭化室長4.7m、炭化室幅2.0mから2.4mで、炭化室の床面傾斜は1度とほぼ水平である。焚き口は不明であるが、斜面上方の短辺中央が約70cm竪穴住居の竈状に張り出し

第2章 確認された遺構と遺物

ており、ここが煙道と考えられる。張り出し以外の煙道施設は認められない。確認壁高は6cmから20cmである。

埋土は黒色土を中心とし、底部付近には微細な木炭が多く含まれていた。床面や壁面の焼土化は認められず、埋土中の焼土粒もほとんど認められない。

遺物

床面に散乱したような木炭片以外の出土遺物は認められない。

1区12号炭窯

遺構 (第58図)

伏せ窯が比較的集中する1区丘陵頂部付近のB Y103グリットに位置する。上端長径1.85m、短径1.45m、深さ50cm、の楕円形土坑状を呈する。溝状に延びた部分や浅い土坑状の箇所は伴わない可能性が高い。

土層注記が不明であるが、調査時に炭窯として調査されているので炭窯として報告しておく。穴焼き法による製炭を行ったのであろうか。

2区1号炭窯

遺構 (第58図、P L-23)

見切塚丘陵北西斜面急斜面の裾付近、AT110グリットに位置する。斜面に構築されていたためか、焚き口側は流失している。炭化室の平面形は隅丸方形を呈していたようである。確認された全長は4.1m、炭化室長は3.3m、炭化室幅は2.0mであった。炭化室床面傾斜は焚き口側が1度と緩く、中央付近で傾斜が変換し、14度と急激に傾斜を増す。等高線が図示されておらず、地山傾斜との相関関係は不明である。斜面上部側の短辺中央には、76cm程の煙道施設が認められる。形状は竪穴住居の竈に似ている。確認壁高は0cmから21cmである。

埋土は黒色土を主体とし、下部には木炭細片を多量に含んでいる。最下層にはロームを主体とした土層が存在するが、木炭層下であり、窯詰めをした際、木材を覆う際に使用した土ではない。また、焼土粒

もほとんど含まず、床面や壁の焼土化も認められない。

遺物

木炭片以外の遺物は出土していない。

2区2号炭窯

遺構 (第58図、P L-23)

見切塚丘陵北西部の西斜面に位置する。測量図のグリット表記に不備があり、正確な場所は不明である。平面形は不整長方形を呈し、規模は全長1.8m、炭化室長1.8m、炭化室幅1.8mから1.96mである。炭化室床面傾斜は15度と急であり、1区に近い丘陵頂部寄りには位置していなかったことは明らかである。焚き口や煙道施設は不明である。焚き口が存在したと思われる傾斜下部の短辺中央にやや張り出した箇所が存在するが、焚き口施設か否かは不明である。確認壁高は10cmから20cmである。

埋土は黒色土を主体とし、長軸方向の中央付近に多量の木炭片とやや長い木炭が確認された。ソフトロームを多く含む埋土は最下層に存在する。埋土に焼土粒はほとんど認められず、床面や壁も焼土化していない。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

2区3号炭窯

遺構 (第59図、P L-23)

見切塚丘陵北西部の西斜面に位置する。測量図のグリット表記に不備があり、正確な場所は不明である。方位と断面図から、主軸は等高線と同方向に設定されていたと考えられる。

西側長辺が流失しているもののコーナーは残存しており、平面形は隅丸長方形であることがわかる。規模は全長4.6m、炭化室長4.6m、炭化室幅1.7m以上である。長軸方向の炭化室床面傾斜は2度である。確認壁高は0cmから30cmと壁の残りは良好である。焚き口や煙道施設は認められない。

埋土は黒色土を主体とするが、本炭窯の場合には

木炭片を多量に含む3層より上層に、微量ではあるがソフトローム小塊を含む層の堆積が認められる。床面や壁面の焼土化は認められず、埋土中の焼土粒もほとんど認められない。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

2区4号炭窯

遺構（第59図、P L-23）

見切塚丘陵北西部の西斜面に位置する。測量図のグリット表記に不備があり、正確な場所は不明である。方位と断面図から判断して、炭窯は三騎堂に近い北斜面に位置し、長軸を等高線とほぼ並行するように構築していたようだ。平面形は焚き口と思われる側が丸みを帯びた隅丸長方形を呈している。規模は全長5.26m、炭化室長5.26m、炭化室幅1.7mから2.02mである。長軸方向の炭化室床面傾斜は1度とほぼ水平であるが、短軸方向の傾斜は13度と急である。確認壁高は6cmから20cmである。焚き口や煙道施設は確認されない。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多く含んでいた。また、木炭細片を含む黒色土中にはソフトローム小塊も含んでいた。床面や壁面の焼土化は認められず、埋土中の焼土粒も目立たない。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

2区5号炭窯

遺構（第61図、P L-23）

見切塚丘陵北西部の北西向き斜面に位置する。調査グリット表記ではB E 137である。平面形は不整形な隅丸長方形である。規模は全長5.7m、炭化室幅1.5mから2.0mで、炭化室の床面傾斜は10度と急である。確認壁高は8cmから20cmで、焚き口や煙道施設は確認されなかった。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多く含んでいた。床面や壁面の焼土化は認められず、埋土中にも焼土粒は目立たなかった。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

2区6号炭窯

遺構（第59図、P L-24）

見切塚丘陵北西部の北西向き斜面、B B 131グリットに位置する。主軸方向は等高線にほぼ直交していると思われ、焚き口側が流失している。平面形は不整な隅丸長方形と推定され、規模は全長3.0m以上、炭化室幅1.6mから1.9mである。炭化室の床面傾斜は15度で、確認壁高は0cmから20cmである。

埋土は黒色土を主体とし、ローム塊は含まない。また、床面や壁面の焼土化は認められず、埋土中も焼土粒も目立たない。

遺物

生産された木炭はすべて持ち出されたようで、木炭細片が認められたのみである。土器類の出土は皆無である。

2区7号炭窯

遺構（第60図、P L-24）

見切塚丘陵北西部の2区は急斜面が多いが、本炭窯は1区に近い丘陵頂部付近に構築されている。調査グリット表記ではB I 113グリットである。平面形はやや不整形な隅丸長方形である。規模は全長6.7m、炭化室長5.75m、炭化室幅1.9mから2.0mと大型である。炭化室の平均床面傾斜は5度であるが、中程から煙道よりで急傾斜となっている。斜面上方の短辺中央には、竪穴住居の竈状張り出しが81cm認められ、煙道施設と考えられる。確認壁高は10cmから77cmと深い。

床面には木炭細片が散乱していたが、煙道施設内と斜面下部に主軸と同方向に列んだ木炭が認められた。木炭の直径は10cmから15cm程で、30cm程度の間隔を置いている。斜面下部西側の木炭延長線上の炭化室中央西側にも木炭が認められた。これらの木炭は、窯詰め時に焼き台として置かれたものであろうと推測される。

第2章 確認された遺構と遺物

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多く含む。埋土上部にはAs-Bを多く含む層やローム層を主体とする土層が認められる。しかし、8層や12層上で明瞭な不整合が認められ、本炭窯の埋土とするには疑問がある。埋土下部には木炭細片のみならず、焼土粒も多く認められている。また、壁面は焼土化していないが、壁際にも一部焼土が多く認められた。床面の焼土化は認められない。

遺物

木炭以外の出土遺物は認められない。

5区3号炭窯

遺構（第61図、P L-24）

見切塚丘陵東斜面のBE137グリットに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は全長4.86m、炭化室長3.96m、炭化室幅2.34mである。炭化室の床面傾斜は9度で、確認壁高は10cmから18cmである。斜面上方には堅穴住居の竈状に76cm突き出した部分が認められる。本炭窯が伏せ焼き法の炭窯と考えられることと床面傾斜から、この施設は煙道と推定される。煙道施設の長さは110cmと長く、炭化室内には幅30cm、長さ110cm、深さ3・4cmの溝状排煙施設も認められた。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多量に含んでいた。埋土中に焼土粒が含まれていたが、床面や壁面の焼土化は認められない。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

5区4号炭窯

遺構（第62図、P L-24）

見切塚丘陵の南東斜面にあたる5区DL43グリットに位置する5区5号炭窯と重複するようであるが、関係は不明である。

平面形は楕円形か隅丸長方形であろう。全長は1.4m以上、炭化室幅は1.4m、確認壁高は6cmから13cmである。地下式炭窯以外の重複はこの1例のみである。埋土は黒色土を主体とし、木炭細片が認めら

れる。床面や壁面の焼土化は認められない。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

5区5号炭窯

遺構（第62図）

見切塚丘陵東斜面のDM136グリットに位置する。1号堅穴と重複して構築されていたようで、平面形状は不明である。断面観察により、深さは80cmと判断される。堆積土上面付近にはAs-Bが認められ、操業が1108年以前であることは確実である。断面図によると立ち上がり部分の傾斜が緩いうえで上部が不鮮明であり、堅穴遺構が深いために沈下しているとも考えたが、底面が水平に近く不明確な点が多い。

5区6号炭窯

遺構（第63図）

見切塚丘陵中央尾根上のCN75グリットに位置し、多田山15号墳の周溝埋土内に構築されていた。平面形は不整形な隅丸長方形を呈し、規模は全長5.32m、炭化室長4.6m、炭化室幅2.84mから3.06mと大型である。尾根上の傾斜が緩やかな場所に構築されているため、炭化室床面傾斜も1度とほぼ平坦である。斜面上部の短辺中央には60cmの堅穴住居竈状の張り出しが認められ、傾斜から煙道施設と推定される。確認壁高は20cmから28cmである。

3方の隅には浅いピット状の掘り込みが認められ、窯詰めの際に使用する木材固定用の柱を立てたものであろうか。床面や壁面の焼土化は認められず、埋土中にも焼土粒は目立たない。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を大量に含んでいる。最上層にはAs-Bが降下しており、1108年以前の操業であることは間違いない。本炭窯以外にも埋土にソフトロームが含まれる例があるが、多くが木炭細片層より下位の床面直上であり、この層の上が炭窯の操業面であった可能性もある。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

5区11号炭窯

遺構（第63図）

5区6号炭窯同様、見切塚丘陵中央の尾根上に立地する。調査グリット位置はC Q 83である。平面形は不整形な長楕円形を呈し、規模は全長4.86m、炭化室幅1.3mから2.04mである。尾根上の傾斜が緩やかな地点に構築されているため、炭化室の床面傾斜は2度である。確認壁高は2cmから16cmである。

埋土は黒色土を主体としており、木炭細片を多く含んでいる。下部にはローム塊を主体とし、炭粒と焼土粒を含む層が確認され、調査所見では本層上面が床面と考えられている。本層上面でも被熱による赤化部分は皆無に近い。

遺物

木炭以外の遺物は出土していない。

5区15号炭窯、5区16号炭窯

遺構（第64図）

地下式炭窯が集中する5区南東隅に位置する。調査グリットではD Q 21である。調査時の所見では地下式炭窯の5区17号炭窯より新しく、5区10号炭窯より古いとされている。

両者ともに平面形状や規模は不明である。調査時の所見では壁面の顕著な焼土化が認められたり、15号炭窯の断面図に認められるように、短軸方向と長軸方向の立ち上がり角度に大きな差があるなど伏せ窯法による製炭窯とは考えにくい。深さは15号炭窯が60cm、15号炭窯より下層で確認された16号炭窯は深さ22cmであった。

長軸方向の断面図を見ると更に下層にも堆積土が認められ、当初は大きな土坑状の遺構が存在した可能性もあるが、詳細は不明である。また、土層断面B B'に見るように立ち上がりも不明瞭で、不明な点が多い遺構である。

遺物（第142図1）

木炭以外の出土遺物としては、5区15号炭窯埋土から須恵器椀が出土している。

5区18号炭窯

遺構（第66図）

見切塚丘陵における調査区南端で確認された。掘り込みが非常に浅く、ローム層にまで達していなかったため、調査区境の断面でその存在に気が付いた。断面での確認長は4m、深さは24cmである。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を少量含み、焼土粒は目立たない。

5区20号炭窯

遺構（第65図）

見切塚丘陵中央の傾斜が緩やかな尾根上に立地する。調査グリットではC S 66に位置する。平面形は楕円形に近い形状を呈する。規模は全長8.2m、炭化室幅2.8mから5.8mと多田山丘陵中で最も大型である。尾根上に立地するため、炭化室床面傾斜は2度と緩い。確認壁高は0cmから26cmである。焚き口や煙道施設は確認されない。

遺物

木炭細片以外の遺物は出土していない。

5区21号炭窯

遺構（第66図）

見切塚丘陵ほぼ中央の尾根上からわずかに下った箇所に築かれている。調査グリットではC X 56である。平面形は、不整な隅丸長方形の竈を有する堅穴住居状を呈する。竈状の部分は斜面上方にあたり、煙道施設と考えられる。規模は全長5.6m、炭化室長4.7m、炭化室幅2.44mから2.7mである。炭化室床面傾斜は7度で、煙道長は32cm、確認壁高は8cmから24cmである。床面や壁面の焼土化は認められない。床面には浅いピット状の掘り込みが不規則に認められるが、用途はもちろんのこと遺構か否かも不明である。

埋土は黒色土を主体とし、木炭を含んでいる。焼土粒の混入もほとんど認められない。

遺物

生産された木炭はすべて運び出されたようで、木

第2章 確認された遺構と遺物

炭細片以外の遺物は認められない。

5区22号炭窯

遺構（第66図）

見切塚丘陵中央尾根を南側にやや下がったところで確認された。調査グリットではCG42に位置する。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、規模は全長3.5m、炭化室幅0.9mから1.12mと小型である。主軸方向の炭化室床面傾斜は2度とほぼ水平であるが、短軸方向の床面傾斜は6.5度である。確認壁高は1cmから6cmとローム面への掘り込みは浅い。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多く含んでいた。また、焼土粒も少量認められたが、床面や壁面の焼土化は認められない。

遺物

生産された木炭はすべて搬出されたようで、出土した木炭はすべて細片であった。また、土器類の出土は認められない。

7区1号炭窯

遺構（第67図、PL-25）

見切塚丘陵南西の浅い谷状地形内に構築されている。調査グリットではBU75である。平面形は竈を有する隅丸長方形の竪穴住居のような形状である。主軸方向は等高線にはほぼ直交する。斜面下位の短辺は攪乱により破壊されていた。規模は全長5.6m以上、炭化室長5.0m以上、炭化室幅1.84mから2.4mである。長さ60cmに及ぶ竈状の張り出しは、傾斜から考えて煙道施設と考えられる。確認壁高は8cmから20cm、炭化室床面傾斜は6.5度である。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多量に含んでいる。埋土中に焼土粒層が認められたが、部分的であり、面的な広がりには認められなかった。床面や壁面に焼土化した箇所はなく、平面図に示した焼土範囲も、床面における「焼土粒」分布範囲である。

遺物

生産された木炭はすべて運び出されたようで、平面図にあるように床面には夥しい量の木炭細片が散

乱している状態であった。木炭細片以外の遺物は出土していない。

7区2号炭窯

遺構（第68図、PL-25）

見切塚丘陵南西の浅い谷状地形内に構築されている。調査グリットではBL68に位置する。平面形は各短辺に竈を設けた隅丸長方形の竪穴住居のようである。規模は全長6.1m、炭化室長4.16m、炭化室幅2.1mから2.2mである。確認壁高は10cmから32cmと比較的ローム層への掘り込みは深い。炭化室の床面傾斜は5度である。竈状施設は傾斜との関係から、下部の張り出し長80cmの幅広の方が焚き口施設、上方の張り出し長1.14m側が煙道施設と考えられる。焚き口と煙道の両施設が確認された伏せ窯は数が少なく貴重な資料である。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多量に含む。焼土粒も比較的多く認められるが、床面や壁面の焼土化は認められない。平面図に示した焼土範囲は焼土粒の分布範囲である。

遺物

平面図に示したように、生産された木炭はすべて運び出され、細片が散乱している状態である。一部割れてはいるが、比較的良好的な木炭が主軸と直交方向に認められ、木材の窯詰め方向を示している可能性がある。木炭以外の遺物は出土していない。

7区4号炭窯

遺構（第69図）

調査区は7区であるが、見切塚丘陵の尾根上に近い場所に構築されている。調査グリットではCH54に位置する。一部が攪乱で破壊されており、形状は不明である。規模は全長2.1m以上、幅1.2mから1.3mであり、確認壁高は8cmから30cmである。伏せ窯法によると考えられる製炭窯と異なり、底面が窪んでおり、壁の立ち上がりも緩やかであるなど協議の（穴焼き法と伏せ焼き法を分ける）伏せ窯とは考えにくい点がある。しかし、埋土は伏せ窯と共通す

る特徴が認められ、穴焼き法による製炭窯と考えられる。

遺物

土器類の出土は認められない。

7区5号炭窯

遺構（第69図、P L-26）

7区は見切塚丘陵の浅い谷状地形部分であるが、本炭窯は谷状地形上部の尾根に近い場所に構築されている。調査グリットではC E 65に位置する。平面形は各短辺に竈を設けた隅丸長方形の竪穴住居のような形状を呈する。規模は全長5.8m、炭化室長3.84m、炭化室幅2.0mから2.2mである。竈状施設は傾斜との関係から、下部の張り出し長90cmの幅広の方が焚き口施設、上方の張り出し長100m側が煙道施設と考えられる。焚き口と煙道の両施設が確認された伏せ窯は数が少なく貴重な資料である。確認壁高は22cmから40cm、炭化室の床面傾斜は3度である。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片を多量に含む。焼土粒の混入は目立たない。床面や壁面の焼土化は認められない。

遺物

木炭片以外の出土遺物は認められない。

7区6号炭窯

遺構（第70図、P L-24）

見切塚丘陵南西部にある浅い谷状地形の最も下で確認された。調査グリットではB U 58グリットに位置する。平面形は竈を有する隅丸長方形の竪穴住居に似た形状である。傾斜下部は攪乱により破壊されており、全長は不明であるが、現状で3.64mを測る。炭化室幅は1.84mから1.9m、残存壁高は6cmから20cmである。炭化室の床面傾斜は11度と急である。竈状に80cm張り出した部分は、傾斜から考えて煙道施設と考えられる。

埋土は黒色土を主体とし、木炭細片や粉状の炭を多量に含んでいた。焼土粒は目立たず、床面や壁面の焼土化も認められない。

遺物

生産された木炭はすべて運び出されたようで、粉状の炭と木炭細片のみの出土であった。土器類は出土していない。

第2章 確認された遺構と遺物

3 竪穴住居

A 今井三騎堂遺跡

H1号住居

遺構 (第71図)

3区の最高所、E T146グリットに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.7m×短軸1.2mと小さいうえに長軸方向に長い。主軸方位はN-53°-Eである。残存壁高は65cmから76cmと高いが、竈が設置される北東壁以外の上半はテラス状に広がっている。しかし、広がった部分は総て傾斜して崩落の可能性が考えられる。

貯蔵穴は竈焚き口に向かって左側の住居壁との狭い間に設置されている。深さは37cmを有し、底面はほぼ平坦に仕上げている。

竈は北東壁中央に設置している。規模は全長1.08m、屋外長36cm、焚き口幅40cm、燃烧部幅34cmの竈を設置している。燃烧部の位置は、壁下端の延長線より内側に設け、焚き口は床面から粘土を用いて築いている。焚き口と燃烧部付近の壁には、礫を芯材として使用していたようである。燃烧部床面は皿状に浅く窪んでいた。

掘方は認められず、当初からローム面を平坦に掘削して床としていた。床に明瞭な硬化面は認められなかった。

遺物 (第142図、P L-45)

遺物の出土は少なく、小片を含めて4点を図示し得たのみである。図示した遺物はいずれも土師器杯である。2の土師器杯は壁際から出土し、3の土師器杯は竈前、住居中央、北隅付近から出土した3点が接合している。図示しなかった遺物は、須恵器杯片1点、土師器杯片13点である。

H2号住居

遺構 (第72図)

三騎堂丘陵の北側尾根上のE V177グリットに位置する。住居の大半が多田山3号墳の周溝埋土内に構築されており、古墳調査時にその存在に気がついたため、南側1/3程が確認できたのみであった。し

かし、図示できなかった場所からは図示し得るような土器の出土は認められなかった。約1/3のみの確認であったため、平面形・規模は不明である。唯一確認できた北壁は4.15mで、隅はかなり丸味を帯びている。

主軸方位はN-125°-Eである。残存壁高は14cmから30cmと深い、平面形はやや乱れている。

竈は北壁中央に設置され、煙道部分が屋外に32cm張り出している。竈の壁下部が残存していないため、正確ではないが、燃烧部床面は皿状に窪んでいるようで、この窪みから推測される燃烧部幅は68cmと幅広い。

掘方は住居東側の床面を一段下げていた程度で、床下土坑も竈手前に浅い土坑が認められたのみである。

遺物 (第142図、P L-45・46)

図示した遺物2点はすべて竈燃烧部から出土している。1は体部下端に篋削りを有する土師器碗で、2は「コ」の字状口縁土師器甕である。他に図示しなかった遺物には円礫5点があり、内1点は被熱で割れている。

H3号住居

遺物 (第73図、P L-26)

三騎堂丘陵北側の尾根上地形先端に位置し、眼下は急な傾斜地となる。調査グリットではG G171である。平面形は隅丸長方形で、主軸方位はN-69°-Eである。残存壁高は18cmから30cmで、住居南西隅には貯蔵穴を設けている。貯蔵穴の規模は長軸50cm×短軸37cm、深さ12cmである。西壁直下には壁溝が確認され、北壁の手前で屈曲していた。この周溝から、本住居は拡張されたと推定される。拡張後の規模は長軸3m、短軸1.85mで、拡張前の長軸は2.34mである。

竈は東壁南寄りに設置され、屋外長は44cm確認された。焚き口部には幅30cm、高さ20cmの石組みが残っていた。燃烧部は壁の延長線上より外側に設けられ、両側には焚き口の石組みにもたれ掛けるように

礫が認められた。

貼り床は認められず、ほとんど構築面を床として使用していた。床下土坑も竈手前に長軸90cm、短軸76cm、深さ25cmのものが1基確認されたのみである。

遺物（第142図、P L-46）

図示した遺物は竈焼き口部床面から伏せた状態で出土した土師器杯（1）南東隅と北壁西寄りから出土した2点が接合した須恵器椀（2）の2点である。他には竈埋土中から鍛冶滓と思われる鉄滓8点がまとまって出土しているが、鍛冶炉は確認されなかった。

図示しなかった遺物は、土師器甕片2点、須恵器杯片1点、土師器甕片44点がある。

H 4号住居

遺構（第74図、P L-27）

三騎堂丘陵北東端の傾斜地下に位置する。住居が存在する付近は傾斜が緩く、狭いテラス状になっている。周囲には炭窯以外の遺構は存在しない。調査グリットではG X 174である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.72m、短軸2.65mである。主軸方位はN-72°-Wである。残存壁高は24cmから68cmと残存状態は良好である。西壁では中程に小さい段が認められるが、崩落か人為的なものか判然としない。床面の南側は1段高く、いわゆるベット状遺構となっている。

竈は西壁中央（1号竈）と北壁東寄り（2号竈）の2箇所には設けられているが、残存状態はから判断して1号が新しい。1号竈の全長は1mで、屋外に23cm延びている。焼き口部を構築する礫が残っており、焼き口幅は38cmであることがわかる。燃烧部幅は焼き口と同じ38cmである。

掘方は認められず、掘削した地山面を床として利用していた。

遺物（第143図、P L-46）

遺物はベット状の高まり部からはほとんど出土しておらず、平面図に図示した遺物もすべてベット状遺構以外の場所から出土している。実測図を掲載した遺物は6点で、住居北寄りから多く出土している。

図示しなかった遺物には、須恵器杯片8点、土師器杯片21点、土師器甕片84点がある。他には円礫が4点出土しており、内1点は被熱していた。

H 5号住居

遺構（第75図、P L-27）

三騎堂丘陵南東端の堅穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットではG T 110である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.4m、短軸3.0mである。北壁側は1辺2.56mとやや小さい。主軸方位はN-98°-Eである。残存壁高は5cmから14cmとやや残存状態が悪い。

屋外長56cmの竈は、東壁中央やや南寄りに設置されている。焼き口から燃烧部にかけての床面は皿状に浅く窪んでいる。竈の右側と南壁の間には直径52cm、深さ27cmの貯蔵穴が穿たれている。

掘方は浅く、黒褐色土層を以て埋めている。中央南寄りには不整形の床下土坑を掘っている。

遺物

出土遺物は非常に少なく、土師器甕片28点、土師器杯片4点の32点出土したのみで図示し得る破片は皆無であった。

H 6号住居

遺構（第76図、P L-27）

三騎堂丘陵南東端の堅穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットではG F 113である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.98m、短軸1.94mのと小型である。主軸方位はN-98°-Eで、残存壁高は5cmから18cmである。床面に明瞭な硬化面は認められない。東壁中央南寄りに屋外長72cmの竈を設置している。貯蔵穴は確認されない。

遺物（第143図、P L-46）

出土遺物は少なく、図示した遺物も細片のみである。図示した遺物は8点で、須恵器杯（1）と土師器甕（2）以外は、23点出土した不明土製品のうちの6点（3～8）である。図示した不明土製品の多くは竈内出土であるが、形状や、厚さ、二次被熱が

第2章 確認された遺構と遺物

認められないなどの特徴から竈構築材とは考えにくい。図示しなかった出土遺物は、須恵器杯片1点、須恵器甕片1点、土師器杯片7点、土師器甕片43点、不明土製品17点である。

H7号住居

遺構（第77～79図、P L-27）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットではGF112である。平面形は正方形に近い長方形を呈する。本遺跡で確認された竪穴住居中最大の大きさを誇り、長軸は5.7m、短軸は4.84mを測る。主軸方位はN-50°-Eで、残存壁高は2cmから44cmと傾斜による影響を強く受けている。

竈は東壁中央（1号）と、東壁南寄り（2号）の2箇所を設置されている。1号竈規模は、全長1.03m、屋外長45cm、焚き口幅49cm、燃焼部43cmである。焚き口両側には土師器甕（21、23）を逆位で建て、24の土師器甕を天井として架けていたと推定される。残存状態から判断して2号竈が古いと考えられる。貯蔵穴は南東隅に穿たれ、長軸102cm、短軸72cm、深さ46cmの大きさである。床面には柱穴が4本確認され、深さはNo1が36cm、No2が36cm、No3が30cm、No4が32cmである。

掘方は認められず、当初から掘り込んだ面を平坦にして床としていた。

遺物（第143～145図、P L-46・47）

出土遺物は非常に豊富で、図示し得た遺物だけでも27点に達した。遺物は東壁寄りに多く分布していたが、貯蔵穴付近は特に集中している。また、この周辺から出土した土師器杯（7）や土師器甕（25）、須恵器甕（27）は接合率が高い。図示しなかった遺物は、須恵器杯片6点、須恵器甕片12点、須恵器盤片2点、土師器片178点、土師器甕片443点、不明土製品片7点がある。

H8号住居

遺構（第80図、P L-27）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットではGE114である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.18m、短軸2.8mである。主軸方位はN-121°-Eを示し、残存壁高は26cmから58cmと斜面上部と下部で2倍程度の差が生じている。

竈は斜面下側にあたる東壁中央に設けている。屋外長は56cmで燃焼部幅51cm程度である。南東隅には長軸50cm、短軸46cmのほぼ円形の貯蔵穴が穿たれ、深さは10cmと浅い。

掘方は明瞭に認められ、西側には6基の床下土坑が確認された。

遺物（145・146図、P L-47・48）

出土遺物は豊富で、全体に床面から少し浮いた位置からの出土が多い。図示した遺物は残存状態が良く、土圧などで割れたような出土状態のものが多い。図示しなかった遺物は、須恵器杯片27点、須恵器甕片2点、土師器杯片20点、土師器甕片331点がある。

H9号住居

遺構（第81図、P L-28）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはGE120である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸3.7m、短軸2.5m、主軸方位はN-105°-Eである。残存壁高は15cmから28cmと6区の平均的な残存状態である。東壁南寄りには、屋外長65cm、燃焼部幅52cmの竈が設けられている。竈燃焼部両側壁面は焼土化していた。南東隅には長軸60cm、短軸38cm、深さ26cmの貯蔵穴が穿たれている。

貼り床は認められず、当初から地山面を平坦に掘削して床としていた。南壁中央には深さ30cmの床下土坑が1基確認された。

遺物（第146・147図、P L-48）

遺物は、床面北東部分に集中する傾向が認められ、図示した7点の内3点が出土している。図示しなかった遺物は、須恵器杯片12点、土師器甕片59点である。

H10号住居

遺構（第82・83図、P L-28）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットではGD110である。平面形は張り出し部を有する方形を呈する。であるが、北壁中央には長軸1.8m、短軸62cmの張り出し部が存在する。張り出し部と住居部分の床面に段差は認められず、両者の間には周溝も確認できなかった。張り出し部を除いた住居本体部分の規模は、長軸3.46m、短軸3.04mである。残存壁高は55cmから86cmと残存状態は良好で、斜面下方の確認壁高が低い。

斜面下方にあたる東壁南寄りには全長1.45m、屋外長65cmの竈が設置されている。燃烧部は住居内に位置し、幅は40cm程である。焚き口も同様に40cm前後である。床面南東隅からやや西寄りには貯蔵穴が穿たれ、規模は長軸80cm、短軸52cm、深さ15cmである。

掘方は認められず、当初から地山面を平坦に掘削して床としている。また、床下土坑も認められない。

遺物（147図、P L-48）

遺物は埋土中から床面まで広い範囲から出土した。出土遺物のうち、土師器杯10点と土師器甕1点を図示し、図示しなかった遺物は、須恵器杯片1点、須恵器甕片1点、土師器杯片14点、土師器甕片112点である。図示した遺物のうち、4、9、10の3点は床面出土である。

今回の調査で確認された歴史時代住居の中では最も古い段階の一群に属する。

H11号住居

遺構（第84図、P L-28）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはGB122である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸4.05m、短軸3.28mで、主軸方位はN-108°-Eである。残存壁高は16cmから45cmであり、斜面下方の残存壁高が低い。斜面下方の東壁南寄りには屋外長40cm、燃烧部幅40cmの竈が構築されている。屋外に張り出した部分は壁面が

焼けているうえ、平面形も丸味を帯びており、燃烧部と考えられる。床面は燃烧部に向かって僅かに下り勾配となっている。床面南東隅には貯蔵穴長軸84cm、短軸76cm、深さ15cmが穿たれている。

掘方は床面より最高で20cmほど掘り下げた後、ローム層を主体とした土で埋め戻している。掘方の深さを傾斜方向（等高線直交方向）で見ると、低い側の掘方を深く下げている様子が断面からわかる。

遺物（第147図）

出土遺物数は比較的多かったが、図示し得た遺物は小片5点のみであった。これらのうち、床面出土は4の須恵器杯底部と5の灰釉陶器瓶の口縁部片の2点である。図示しなかった遺物は、須恵器杯片55点、須恵器甕片3点、土師器杯片36点、土師器甕片219点である。

H12号住居

遺構（第85・86図、P L-28）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはGD119である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸4.2m、短軸3.7mである。主軸方位はN-112°-Eを示す。構築時には深く掘り込んでいたようで、残存壁高は46cmから76cmと非常に高い。

斜面下方にあたる東壁の中央には2基の竈が確認された。南寄りの1号竈は全長1.3m、屋外長92cm、焚き口幅58cmである。燃烧部の大半は屋内に位置し、底面は皿状に窪んでいる。幅は60cmとやや広い。竈前には焼土が広がり、2号竈に比して残存状態が良い。一方、北寄りに位置する2号竈は燃烧部壁は残存せず、焚き口付近に焼土や灰の分布も認められない。残存状態から判断すると、2号炭窯の方が古いと推定される。2号竈の燃烧部は楕円形に浅く窪み、燃烧部幅は40cmほどと思われる。

床面南東隅には長軸85cm、短軸66cm、深さ15cmの貯蔵穴が確認された。更に、南西隅には長軸50cm、短軸46cm、深さ23cmの小土坑があり、西壁からは低い土手状の高まりが小土坑を囲むように40cmほど延

第2章 確認された遺構と遺物

びており、貯蔵穴の可能性が高い。

貼り床は全体的には数cmであるが、大小の床下土坑が多く認められた。

遺物（第147・148図、P L-48・49）

遺物の出土量は多く、図示した遺物も14点にのぼる。14は椀状滓の可能性はあるが、他の出土遺物と同時期とすると三騎堂の竪形炉や見切塚1号鍛冶遺構より古い時期となるが、調査区内ではこの時期の炉は確認されていない。しかし、炭窯出土遺物にはほぼ同時期の遺物が認められ、調査範囲外の多田山丘陵か近くの遺跡から持ち込まれたものと考えられよう。図示しなかった遺物は、須恵器杯片51点、須恵器甕片5点、土師器杯片69点、土師器甕片517点がある。

H13号住居

遺構（第87図、P L-28）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはG F 116である。平面形は正方形に近い隅丸長方形で、規模は長軸2.64m、短軸2.18m、主軸方位はN-96°-Eである。残存壁高は12cmから34cmで、斜面下方の壁が低い。

斜面下方にあたる東壁の南寄りには全長54cm、屋外長22cmの竈が築かれている。住居内部竈壁の残存が不良であるが、焚き口幅は42cmほどであろう。また、燃焼部もほぼ同じ幅で壁の延長線上に位置すると思われる。

南東隅にあたる竈焚き口の右側には、接するように径40cmほどの貯蔵穴が穿たれている。

遺物（第148図、P L-49）

出土遺物総量は多い方ではないが、図示可能な遺物は10点と多い。遺物は東壁側に多い傾向が認められ、5・6・7・9の須恵器杯と椀や10の土師器甕は東壁際からの出土である。西壁中央壁際出土の須恵器杯は明らかに時代が古く、混入であろうと考えられる。図示しなかった遺物は、須恵器杯片55点、須恵器甕片3点、土師器杯片36点、土師器甕片219点である。

H14号住居

遺構（第89図、P L-29）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはG B 108である。平面形は方形に近い隅丸長方形で、規模は長軸3.32m、短軸2.8m、主軸方位はN-112°-Eである。残存壁高は52cmから66cmと比較的高い。

斜面下位にあたる東壁の中央には全長1.23m、屋外長80cmの竈が構築されている。床面上には竈壁下部が残存しており、焚き口は幅42cmである。燃焼部は東壁延長線上に設け、幅は45cmである。確認された床面は傾斜しているが、床面には明瞭な硬化面や色調の違いが認められず、構築時の床面が傾斜していたか否かは不確定である。貯蔵穴や柱穴は確認できなかった。

掘方は認められず、当初から地山を平坦に掘削して床としていたと考えられる。

遺物（第149図、P L-49）

遺物の出土量は少ないが、土師器杯5点と須恵器杯1点が図示可能であった。中でも2と3の土師器杯はほぼ完形で竈内から出土している。図示しなかった遺物は、須恵器杯片3点、土師器杯片38点、土師器甕片20点である。

H15号住居

遺構（第88図、P L-29）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはG C 113である。平面形は、長軸2.55m、短軸2.45mの隅丸方形である。主軸方位はN-110°-Eを示し、残存壁高は8cmから28cmと3倍以上の差がある。

竈の位置は明確ではないが、東壁南寄りに24cmほど張り出した箇所があり、他の住居から考えてもこの位置に構築されていたと考えられる。貯蔵穴は南東隅に位置しており、規模は長軸62cm、短軸45cm、深さ14cmである。

掘方は浅く、全体に5・6cmの貼り床を施して床面としていた。床下土坑は竈付近と北西隅に、計3

基認められた。

遺物（第149図、P L-49・50）

遺物の出土量は少ないが、6点を図示できた。1・3・5の土師器杯と土師器甕は竈付近床面からの出土である。図示しなかった遺物は、須恵器杯片4点、土師器杯片10点、土師器甕片73点である。

H16号住居

遺構（第90図、P L-29）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはGB115である。平面形は方形に近い長方形で、南西隅はやや形状が乱れる。規模は長軸3.26m、短軸2.8m、主軸方位はN-109°-Eである。残存壁高は10cmから40cmと4倍の差が生じている。

北壁中央と東壁中央南寄りの2箇所竈が設けられている。竈の新旧関係は不明瞭であるが、東壁の竈（1号）がやや残存状態が良く、使用面も明瞭であったのでこちらが新しいと考えられる。1号竈の全長は56cm、屋外長は35cm、燃焼部幅は40cmである。2号竈の屋外長は50cm、燃焼部幅は35cmである。床面南東隅には長軸70cm、短軸50cm、深さ13cmの貯蔵穴を設けている。

掘方は貼り床を施さず、床下土坑を3方向の隅と中央に掘り込んでいる。中央の床下土坑の規模は長軸1.26m、短軸1.25m、深さ15cmである。

遺物（第149・150図、P L-50）

出土遺物総量はさほど多くないが、9点を図示できた。2号竈付近の床面からは4の土師器杯と7の須恵器杯が出土している。また、貯蔵穴からは9の須恵器甕が出土している。図示しなかった遺物は、須恵器杯片8点、須恵器甕片3点、土師器杯片42点、土師器甕片222点である。

H17号住居

遺構（第91図、P L-29）

竪穴住居が集中する6区の最高所、F O109グリットに位置する。平面形は、東壁北半に張り出しを

持つ隅丸方形を呈する。規模は、本体が長軸3.66m、短軸3.62mで、張り出し部が長軸1.72m、短軸1.1mである。主軸方位はN-90°-Eで、残存壁高は27cmから48cmである。

東壁南寄りには全長1.0m、屋外長36cmの竈が設置されている。焚き口幅は50cm程で、燃焼部幅は40cmである。竈右脇には長軸38cm、短軸35cm、深さ24cmのやや小型の貯蔵穴が存在する。床面は竈を囲むように硬化面が認められ、更に北西隅にも硬化面が認められた。

貼り床は全体に同じ厚さに認められ、床下土坑は認められなかった。

遺物（150・151図、P L-50）

出土遺物量は少ないが、残存状態が良好な遺物が多く、7点を図示できた。床面中央南寄りからは、ほぼ完形の土師器甕（7）が出土し、竈右側からは土師器杯（1から3）が3枚重なった状態で出土している。竈右側には竈に使用したものか、自然礫も出土している。図示しなかった遺物は、土師器杯片4点、土師器甕片1点のみである。

H18号住居

遺構（第92図）

三騎堂丘陵南東端の竪穴住居が集中する6区に位置する。調査グリットはGG121である。平面形、規模は残存状態が悪く不明である。残存壁高は0cmから15cmである。北東には6区1号竪形炉が存在し、本住居の壁が破壊されており、本住居が古いことがわかる。貼り床は認められない。3箇所認められるピット状の窪みは、本住居に伴うか否かは不明である。北側で確認された土坑は、床下土坑として調査したが、壁外に延びており、別な遺構の可能性が高い。竈は確認されておらず、他の住居の竈位置から考えると1号竪形炉に破壊されていると推定される。

遺物（第150・151図、P L-50）

残存状態は不良であったが、7点の遺物が図示可能であった。7の須恵器甕は南西壁際の床面から出土している。図示しなかった遺物は、須恵器杯片13

第2章 確認された遺構と遺物

13点、須恵器甕片10点、土師器甕片62点である。

B 今井見切塚遺跡

H1号住居

遺構（第93図）

見切塚遺跡で最も竪穴住居が集中する丘陵頂部にあたる1区に位置する。調査グリットはBY115である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.77m、短軸2.38mである。主軸方位はN-124°-Eで、残存壁高は26cmから40cmである。

東壁南寄りには全長1.3m屋外長1.0mの竈を設置している。竈の焚き口幅は25cmほどで、燃烧部も同程度の幅である。東壁の竈より北側は、テラス状を呈している。床面南東隅には長軸58cm、短軸49cm、深さ21cmの貯蔵穴を設けている。

掘方は認められず、当初からローム面を平坦に掘削して床としていた。

遺物（第151図）

壁残存は良好であったが、出土遺物量は非常に少なく、図示した2点も小片である。また、図示しなかった遺物は、土師器杯片11点、土師器甕片17点である。

H2号住居

遺構（第94図、P L-29）

見切塚遺跡で最も竪穴住居が集中する丘陵頂部にあたる1区に位置する。調査グリットはBV113である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸4.4m、短軸3.42mである。主軸方位はN-92°-Eで、残存壁高は42cmから44cmである。

東壁南寄りには屋外長70cmの竈が構築されている。燃烧部幅は28cmとやや狭く、住居内に位置する。貯蔵穴は南東隅に設けられている。

掘方は小さい凹凸が多く、この凹凸を水平に整えるような状態で貼り床を施している。

遺物（第151図、P L-50）

出土遺物は少ないが、6点を図示することができた。1と4の須恵器杯と碗は床面出土で、3の須恵

器碗は埋土中の出土である。図示しなかった遺物は、須恵器杯片3点、須恵器甕片4点、土師器杯片2点、土師器甕片12点である。

H3号住居

遺構（第95図）

見切塚遺跡で最も竪穴住居が集中する丘陵頂部にあたる1区に位置する。調査グリットはBT114である。1区2号炭窯に上部を破壊されており、平面形は不詳であるが、ほぼ隅丸方形であると推定される。規模も詳細は不明であるが、概ね、長軸3.2m、短軸3.0mであろう。主軸方位はN-105°-Eである。残存壁高32cmから34cmである。

東壁やや南寄りには、屋外長26cm、焚き口幅34cmの竈が築かれている。貯蔵穴は確認できなかった。

掘方は認められず、当初からローム面を平坦に掘削して床としていた。床には明瞭な硬化面は認められなかった。

遺物（第151図）

出土遺物は土師器片7点が出土したのみで、かろうじて1点のみ図示可能であった。図示しなかった遺物は土師器甕片6点である。

H4号住居

遺構（第96図、P L-29）

見切塚遺跡で最も竪穴住居が集中する丘陵頂部にあたる1区に位置する。調査グリットはBQ108である。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸2.0m、短軸1.6mである。主軸方位はN-118°-Eを示し、残存壁高は14cmから28cmである。

東壁南端には屋外長54cm、焚き口幅40cmの竈が構築されている。この竈は住居の規模からすると、ややアンバランスな感を受ける大きさである。貯蔵穴は確認できなかった。

遺物（第152図、P L-51）

出土遺物は非常に少ないが、7点が図示可能であった。竈内からは、7の土師器甕内に6の小型台付甕が入った状態で出土している。北壁の東西隅から

は、墨書土師器杯（1）と須恵器碗の転用碗（5）が出土している。図示しなかった遺物は、土師器杯片1点。土師器甕片6点である。

H5号住居

遺構（第97図）

見切塚遺跡で最も堅穴住居が集中する丘陵頂部にあたる1区に位置する。調査グリッドはBV110である。平面形は、長軸3.5m、短軸1.8mの長軸方向にかなり長い長方形を呈する。主軸方位はN-118°-Eを示し、確認壁高は3cmから5cmである。東壁南寄りには屋外長40cmの竈が設置されている。竈前には長軸88cm、短軸76cm、深さ14cmの土坑が確認されているが、位置的に床下土坑であろう。

掘方は認められず、当初からローム面を平坦に掘削して床としている。床に明瞭な硬化面は認められなかった。

遺物（第152図）

出土遺物は非常に少なく、須恵器碗小片を1点図示できたのみである。図示しなかった遺物は、土師器杯片6点、土師器甕片8点である。

H6号住居

遺構（第98・99図、PL-30）

見切塚丘陵2区、西斜面に構築された住居である。平面形はほぼ隅丸方形で、規模は長軸2.68m、短軸2.4mである。主軸方位はN-90°-Eを示し、残存壁高は28cmから56cmである。

東壁南寄りには全長1.15m、屋外長70cmの竈を設けている。燃焼部は屋外に設け、その幅は38cm、焚

き口幅は25cmである。南東隅には長軸42cm、短軸32cm、深さ20cmの貯蔵穴を穿つ。

掘方は認められず、当初からローム面を平坦に掘削して床としていた。床面に明瞭な硬化面は認められない。

遺物（第152・153図、PL-51・52）

遺物の出土は多くはないが、竈周辺から残存率がかなり良い土器が出土している。竈南側と貯蔵穴との狭い間には並べられたような状態で土師器杯（1・4・8・7）が出土しており、土師器甕（12）も近接して認められた。遺物は竈周辺に集中する傾向が認められる。図示しなかった遺物は、須恵器杯片8点、土師器杯片4点、土師器甕片76点である。

H7号住居

遺構（第100図）

見切塚丘陵2区、西斜面に構築された住居である。2区では2軒しか住居が確認されていないが、H6号住居が入れ子のような状態で中に入っていた。新旧関係は本住居が古い。平面形はほぼ方形を呈し、規模は長軸は3.25m、短軸は2.9mから3.3mである。主軸方位はN-105°-Eを示し、残存壁高は18cmから40cmである。

東壁南寄りには屋外長52cm、燃焼部幅40cmの竈が設けられている。床面はほとんど6号住居に破壊されており、掘方も不明である。

遺物

出土遺物は土師器甕片9点のみであり、図示可能な遺物は皆無であった。

4 火葬墓

A 多田山火葬墓の概要

遺跡の所在する多田山は、古くから石製蔵骨器を使用した火葬墓群（注）の存在が知られていた。今回、火葬墓を想定して調査した遺構は、三騎堂で20基、見切塚で15基である（付図1）。しかし、焼骨の出土があって確実に火葬墓と判断された遺構は、図らずも須恵器壺を蔵骨器とした見切塚5区8号火葬墓のみであった。また、骨は出土していないが、石敷きと石製蔵骨器が確認された遺構は、三騎堂で5区4号火葬墓（第104図）、6区1号火葬墓（第106図）の2基、見切塚で1区3号、同4号（第107図）の2基のみであった。これらも石製蔵骨器の身が下を向いていたり蓋の出土が認められないなど原位置を留めているとは言い難い状態である。今井三騎堂5区4号火葬墓は、昭和28年に発見された火葬墓と似た出土状態を示し、最も良好な状態と思われるが、蓋が伴わず、身が二個体、うち1個体は逆位であった。三騎堂3区1号火葬墓（第101図）からも石製蔵骨器が出土しているが、石製蔵骨器が割られていることや円磔を用いた石敷が認められないことから、後世に集石された結果と考えられる。3区2号、同3号火葬墓も角磔のみで円磔を用いておらず、火葬墓ではないと考えられる。他は円磔を用いた石敷状遺構のみである。中には磔間から須恵器短頸壺片が出土した遺構（三騎堂5区2号火葬墓・5区15号火葬墓、見切塚5区9号火葬墓）もあるが、円磔の間に挟まっているような出土状態からは埋納されたとは考えられない。上方に位置する前庭を有する古墳からも須恵器短頸壺や須恵器壺といった器種が出土しており、今回接合関係は認められなかったものの、古墳との関連も考慮する必要がある。

さて、昭和28年に調査された地点であるが、報告では「この円墳の東側から約20m下った所」と記述され、赤堀村誌（注）には「中里古墳」の「南方50

注

1. 尾崎喜左雄、大里仁一「群馬県赤堀村多田山発見の火葬墓群」『古代研究』第15、16合併号 古代学研究会 1956.11
2. 『赤堀村誌』赤堀村誌編纂委員会 1978

mのところ」との記載から推定すると、三騎堂5区西側、第102図に示した範囲の可能性が高い。そして、円磔が集石されている箇所は開墾時などに破壊され、石製蔵骨器が出土した後の状態である可能性が高い。しかし、三騎堂5区9号・10号・11号・12号火葬墓の円磔は火葬墓に由来する磔と考えられるが、原位置からはかなり動かされているか、破壊が著しいと考えられる。いずれも中世以降の遺物は出土していない。

見切塚でも丘陵頂部（1区）と東斜面（5区）で火葬墓が確認されている。かつて多田山西斜面として紹介された石製蔵骨器は丘陵頂部に存在する1区の火葬墓から転落した可能性が考えられる。石製蔵骨器は1区で出土しているが、須恵器などの出土は皆無である。しかし、終末期古墳前底部の斜面下に位置する5区では、3・5号火葬墓と9号火葬墓で須恵器が出土している。須恵器壺を蔵骨器に、須恵器杯蓋を蔵骨器蓋に使用した5区8号火葬墓が存在するが、三騎堂例や残存状態を考慮すると、これらの須恵器は古墳前庭部から転落してきた遺物の可能性が高いと考えられる。5区では石製蔵骨器が出土しなかったが、円磔の状態から須恵器を使用した火葬墓との区別が不可能であり、石製蔵骨器を使用しない一群であったか否かの判断はしかねる。

火葬墓の分布は、原位置から大きく移動していると判断される三騎堂3区の例を除くと、三騎堂5区古墳下東斜面と丘陵頂部の見切塚1区、見切塚5区古墳下東斜面の大きく3群の墓域に分けられる。

これらのうち、三騎堂5区東斜面や見切塚5区東斜面火葬墓群の斜面上には終末期の古墳が存在し、前底部からは8世紀から9世紀代の須恵器も出土している。見切塚1区火葬墓群は付近に終末期古墳が存在しないものの、位置関係から終末期古墳と火葬墓群とが無関係とは考えにくいのではないだろうか。

B 今井三騎堂遺跡

3区1号火葬墓

遺構 (第101図)

三騎堂丘陵東斜面の尾根先端に位置する。調査グリットはFW170である。古墳墳丘内で確認され、長軸115cm、短軸80cm、深さ40cmの土坑内に角礫が集積されていた。礫に並べられたような様子は認められず、5区で確認されたような河床礫(円礫)も認められない。周辺にあった礫を後世に集めたものと考えられる。火葬墓ではないが蔵骨器が出土しているため、ここに記しておく。

遺物 (第153・154図)

出土した角礫はすべて粗流輝石安山岩で、完形の蔵骨器蓋(4)と考えられるもの1点と3点の蔵骨器片(1~3)が出土している。破片の3点は接合しない。図示していない遺物はすべて埴輪片である。

3区2号火葬墓

遺構 (第101図)

三騎堂丘陵東斜面の尾根先端に位置する。調査グリットはFW170である。1号火葬墓の南40cmと近接している。1号に比して小さい粗流輝石安山岩角礫を集積している。

集石下部からも何ら施設らしきものは確認されおらず、火葬墓を想定して調査したものの、その可能性は低い。

遺物

角礫間から円筒埴輪片が出土しているのみである。

3区3号火葬墓

遺構 (第101図)

三騎堂丘陵東斜面の尾根先端に位置する。調査グリットはFW169である。古墳墳丘内に位置し、角礫が集積されていた。北2.5mには2号火葬墓が存在する。

本集石も火葬墓の可能性は考えられず、時期は不詳であるが、地山内の礫が集められたものと解される。

遺物

出土遺物は皆無であった。

5区1号火葬墓

遺構 (第102・103図、PL-30)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはEQ118である。北側を攪乱によって破壊されている。明瞭な掘方は認められないが、集礫部分の軟らかい土を取り除いた状態を図示した。礫を意識的に並べたような状態ではなく、集めたような状態である。確認された石材は、粗粒輝石安山岩河床礫81点であり、重さは55gから2,338gである。

遺物

遺物は出土しなかった。蔵骨器の出土がなく、火葬墓とする確証はない。

5区2号火葬墓

遺構 (第102・103図、PL-30)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはER118である。北側を攪乱によって破壊されており、礫の分布範囲は不明である。残存範囲の分布を見ると、やや散乱した状況を見て取れる。掘方は不明瞭であった。

礫は総数118点で、石材構成は粗粒輝石安山岩116点、溶結凝灰岩2点である。118点のうち20点が垂角礫で、残りは河床礫であった。重さは19gから11,300gと幅が広い。

遺物 (第154図)

須恵器蓋(1)1点と短頸壺(2)が各1点出土している。短頸壺は3片が接合している。蔵骨器の出土がなく火葬墓とする確証はない。

5区3号火葬墓

遺構 (第102・103図、PL-30)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはES118で

第2章 確認された遺構と遺物

ある。小さい掘方内から8点の礫が出土している。

石材は8点すべてが粗粒輝石安山岩で、重さは251gから3,904gである。他と異なり河床礫3点、亜角礫5点と亜角礫が多い。

遺物

遺物は出土していない。石製蔵骨器が出土していない。え、亜角礫の比率が高く、火葬墓の可能性は低いと考えられる。

5区4号火葬墓

遺構(第104図、P L-30・31)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはFI133である。掘方は土の硬さを中心として確認した。当初確認(1面)した礫の範囲は円形で、東から南にかけて周囲を大型の礫で囲むようにしていた。この面の礫を取り去ると(2面)、掘方に接するように大型礫を巡らし、中小の礫を隙間と中央に詰めていた。更に礫を取り去ると(3面)、大型と中型の礫が中心となった。北西には正位の蔵骨器の身(7)が、その南に接してやや小型の蔵骨器身(6)が逆位で出土した。蔵骨器に蓋が認められず、現位置を留めているとは考えにくい。7の蔵骨器は現位置を大きく動いていないと考えられる。

本火葬墓は比較的残存状態が良好で、礫の総数が1171点と多い。石材の内訳は、砂岩10点、溶結凝灰岩30点、ホルンフェルス6点、変珪岩5点、花崗岩河床礫1点、チャート河床礫1点を除き、他はすべて粗粒輝石安山岩である。重さは8gから41,700gであるが、石製蔵骨器を除く自然礫では21,700gが最も重い。河床礫がほとんどで、1割未満の亜角礫を含む。但し、馬見岡凝灰岩のみは21点すべてが亜角礫であった。

遺物(第154・155図、P L-52)

2点の石製蔵骨器身(6・7)以外では、須恵器杯蓋や短頸壺などが出土している。これらの須恵器が本火葬墓に伴うか否かは不明である。従って、須恵器の年代で本火葬墓の年代を決定することはでき

ないであろう。

5区5号火葬墓

遺構(第102・104図、P L-31)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはE S 118である。総数129点の礫がやや分散した状態で確認された。西よりの箇所は幅20cm以上の礫がほとんど分布しない箇所があり、攪乱が入っていると考えられる。掘方は不明瞭であったが、この部分の北側ではピット状に深い箇所が認められるが、これも攪乱の可能性が高い。粗粒輝石安山岩以外の石材は、砂岩8点、軽石1点、溶結凝灰岩10点、変珪岩1点で、重さは7gから3,359gである。軽石のみ亜角礫で、他はすべて河床礫であった。

遺物

遺物は出土していない。石製蔵骨器も出土しておらず火葬墓とする確証はない。

5区6号火葬墓

遺構(第102・105図、P L-31)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはE U 119である。長軸2.0m、短軸1.5mの楕円形の範囲に348点の礫が集中して確認された。礫の密度は高く、土が少ない状態であった。石材構成は、粗粒輝石安山岩以外の石材が溶結凝灰岩24点、ホルンフェルス4点、変質玄武岩3点、石英斑岩2点、変珪岩2点、砂岩2点、チャート1点である。1割未満が亜角礫で他は河床礫で、重さは7gから3,359gと幅があるが、大半は大きさが揃っていた。

遺物

土器類の出土はなく、蔵骨器の出土もない。従って火葬墓とする確証はない。

5区7号火葬墓

遺構(第102・105図、P L-31)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘

陵南東斜面に位置する。調査グリットはE P 119である。長軸2.5m、短軸70cmの範囲に散乱した状態で81点の礫が確認された。東側のみはやや集積された状態を示していた。

石材構成はホルンフェルス、砂岩、溶結凝灰岩各1点以外は粗粒輝石安山岩である。粗粒輝石安山岩の亜角礫1点を除き、他はすべて河床礫であった。

遺物

土器類の出土はなく、蔵骨器の出土もない。従って火葬墓とする確証はない。

5区8号火葬墓

遺構（第102・105図、P L-31）

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはE R 119である。長軸1.6m、短軸90cmの範囲に礫がまとまって確認された。礫の隙間は比較的空いており、重なりも認められなかった。

石材構成は148点すべてが粗粒輝石安山岩河床礫である。重さは48gから7,800gであるが、全体的に見ると大きさは揃っているといえる。

遺物

土器類の出土はなく、蔵骨器の出土もない。従って火葬墓とする確証はない。

5区9～11号火葬墓

遺構（第102図、P L-32）

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはE P 118である。9号から11号は3基としたが、一連のもの可能性が高く、長さ約6mにわたって直線的に延びる石列状をなす。

9号の礫構成は、50点中36点が亜角礫であり、他と大きく異なる。馬見岡凝灰岩亜角礫1点を除き、他はすべて粗粒輝石安山岩である。

10号の礫構成は、出土した18点すべてが粗粒輝石安山岩であるが、河床礫は3点のみと非常に少ない。

11号の礫構成は、総数125点。粗粒輝石安山岩以

外の石材は石英斑岩、変珪岩、溶結凝灰岩各1点である。粗粒輝石安山岩の亜角礫2点を除き、他はすべて円礫である。重さは20gから5,880gである。全体を見ると亜角礫の比率が高いうえ、直線上をなすなど火葬墓の可能性は非常に低いと考えられる。但し、使用された円礫は付近の火葬墓群から集められたのであろう。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

5区12号火葬墓

遺構（第102図）

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはE S 117である。9号から11号同様直線的に礫が列ぶため、個別図は作成していない。図上で見ると明らかのように、9号から11号の延長線上に位置し、後世に付近の火葬墓に使用されていた礫を使用して地境に並べた可能性が高い。

礫構成は、27点すべてが粗粒輝石安山岩で、5点が亜角礫であった。重量は1gから4,144gである。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

5区13号火葬墓

遺構（第102図）

地境の石列と見られる9号から12号の延長線上に位置する。礫は一部散乱しているが、まとまりも認められる。しかし、礫間の土が表土に近く疑問があるために個別図は作成していない。火葬墓が付近にあった可能性はあるが、原位置からはかなり移動してしまっている可能性が高いであろう。

礫の総数は47点で、溶結凝灰岩1点を除き、他はすべて粗粒輝石安山岩である。47点のうち6点が亜角礫である。重さは322gから16,200gであった。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

第2章 確認された遺構と遺物

5区14号火葬墓

遺構 (第102図、P L-32)

地境と考えられる9号から12号の延長線上に位置する。126点の礫が散乱し、礫間の土も表土に近い。付近に存在した火葬墓からもたらされた礫群であろう。

礫の総数は126点で、溶結凝灰岩1点、ホルンフェルス1点、石英斑岩2点、馬見岡凝灰岩亜角礫1点を除き、他は粗粒輝石安山岩であった。亜角礫の総数は16点。重さは14gから7,100gである。

遺物

土器類や蔵骨器の出土はない。

5区15号火葬墓

遺構 (第106図、P L-32・33)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはF I 133である。土坑状の掘方内に礫が詰まっていた。確認時(1面)は20cmを超える礫を中心に詰め、周囲を10cm前後の礫で周囲の隙間を埋めたような状態であった。再下面(3面)には20cmから30cmの礫が認められた。

礫の総数は173点で、溶結凝灰岩16点、ホルンフェルス7点、石英斑岩2点、チャート1点、砂岩1点を除き、他は粗粒輝石安山岩である。173点のうち33点が亜角礫であった。重さは12gから17,700gとかなりの差が認められる。

遺物 (第155図、P L-52)

確認面で須恵器薬形壺の蓋小片が1点、最下面の礫上や下から9点ほどが出土し、すべて接合(1)している。遺物はこの1点のみで蔵骨器などは出土していない。火葬墓とする確証はない。

5区16号火葬墓

遺構 (第106図)

古墳時代終末の多田山12号墳が存在する三騎堂丘陵南東斜面に位置する。調査グリットはF G 135である。小礫の上に長さ40cmの礫を乗せたような状態

で確認された。礫は総数36点のうち、1点が馬見岡凝灰岩亜角礫で、残り35点は粗粒輝石安山岩河床礫であった。重さは36gから9,300gである。礫の状態からして火葬墓の可能性は低いと考えられる。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

6区1号火葬墓

遺構 (第106図、P L-33)

5区14号から16号とほぼ列ぶような位置の斜面下方で確認された。ピット状の掘り込みは本遺構に伴うか否かは不明である。礫は楕円形を呈するように集積され、南東から小型蔵骨器の身が出土している。礫の総数は167点で、ホルンフェルス14点、溶結凝灰岩5点、チャート2点、変珪岩1点、閃緑岩1点、石英斑岩1点を除き、他はすべて粗粒輝石安山岩である。これらのうち亜角礫は19点である。重さは39gから6,500gであるが、蔵骨器を除くと、最も重い礫は5,700gであった。

遺物 (第155図)

土器類の出土はないが、小型石製蔵骨器の身(1)が1点正位で出土している。正位での出土であるが、集石の端からの出土であり、原位置かどうかは不明である。しかし、少なくとも至近距離にあった可能性は高いといえよう。

C 今井見切塚遺跡

1区1号火葬墓

遺構 (第107図、P L-33)

見切塚丘陵頂部の1区に位置する。調査グリットはC C 117である。礫の分布は三角形を呈し、各辺は比較的整っており、人為的なものを感じさせる。礫は総数326点と多く、石材構成は黒色頁岩4点、軽石2点、細流輝石安山岩1点、チャート1点、ホルンフェルス1点であり、他はすべて粗粒輝石安山岩である。亜角礫は30点で他はすべて河床礫である。重さは2gから3,117gである。

遺物

土器類や蔵骨器の出土は認められなかった。

1区2号火葬墓

遺構(第107図、P L-33)

見切塚丘陵頂部の1区に位置する。調査グリットはCC117である。1号の北60cmに位置し、52点の礫が散在していた。礫の総数は52点で、すべてが粗粒輝石安山岩河床礫であった。重さは26gから1,341gである。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

1区3号火葬墓

遺構(第107図、P L-33・34)

見切塚丘陵頂部の1区に位置する。調査グリットはB X104である。直径約1.3m、深さ40cmほどの土坑上に礫がややまとまった状態で確認された。土坑底部からは重さ129kgという巨大な石製蔵骨器が逆位で出土した。

身が逆位で出土しており、蓋が認められないなどとても原位置とは考えられないが、近い場所に火葬墓が営まれていたことは間違いがない。埋土中からは窪み石状の石製品が出土している。形状は中世の窪み石に似るが、時期は不詳である。

出土した礫の総数は90点で、軽石1点以外はすべて粗粒輝石安山岩であった。重さは81gから12,900gであるが、石製蔵骨器を除くと最も重い礫でも1,394gである。

遺物(第155・156図、P L-53)

粗粒輝石安山岩の亜角礫である。129kgと巨大な石製蔵骨器の身と小型品が出土している。蔵骨器は出土したが、土器類の出土はない。

1区4号火葬墓

遺構(第107図、P L-34)

見切塚丘陵頂部の1区に位置する。調査グリットはB Y109である。長軸約1.5m、短軸1.0mの楕円形状土坑内に504点の礫が集積されていた。北と東

側には大型の礫を列べ、他は小礫を詰めている。しかし、全体を見ると大きめの礫を周囲に配している。

上部の礫下(2面)には、石製蔵骨器が3点あり、2点が正位、1点が逆位であった。

掘方底部は北側が浅く、南が深くなっており、底面は2段となっていた。

石材構成は、総数504点のうち1点の黒色安山岩を除くすべては粗粒輝石安山岩であった。重さは12gから18,700gで、504点のうち35点が亜角礫で、残りはすべて河床礫である。

遺物(第156図、P L-53)

粗粒輝石安山岩製の蔵骨器が3点(1~3)出土している。抉りの浅い蓋状のものは出土していない。土器類は出土していない。

1区5号火葬墓

遺構(第109図、P L-34)

見切塚丘陵頂部の1区に位置する。調査グリットはC E111である。総数420点の礫が集積され、密集している。掘方は断面を見ると、底面2段になっているが、礫の垂直分布はほぼ水平である。1面の礫分布では不明瞭であるが、2面では北側と南側の2箇所が接しているようにも見受けられる。

礫420点すべて粗粒輝石安山岩で、このうち亜角礫は9点であった。重さは13gから3,849gであった。

遺物

土器類や石製蔵骨器は出土していない。

5区1号火葬墓

遺構(第109図)

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC W69である。長軸50cm、短軸30cmの長形状に礫が小さく集積されている。規模が小さく火葬墓の可能性は低いであろう。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

第2章 確認された遺構と遺物

5区2号火葬墓

遺構（第109図、P L-35）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC W69である。礫が散在しているのみであり、図示した範囲を1基とする根拠にも乏しいが、調査時に付した遺構名を変更せずに報告しておく。しかし、付近で確実な火葬墓が確認されており、消失した火葬墓の名残である可能性は否定できない。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

5区3号火葬墓

遺構（第109・110図、P L-34・35）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC X69である。長方形に近い礫の集積が認められるが、中央部は攪乱により分断されているようである。

遺物（第156図、P L-53）

蔵骨器は出土していないが、上野型の薬壺蓋片（1）が出土しており、5号出土の破片と接合している。

5区4号火葬墓

遺構（第109・110図、P L-34・35）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC Y69である。長軸90cm、短軸60cmの範囲に礫が集積されている。5区3号や5区6号との距離は約1mと近接している。

遺物

蔵骨器が出土しておらず、火葬墓の確証はない。

5区5号火葬墓

遺構（第109・110図、P L-34・35）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC X70である。楕円形の一部を切ったような範囲に礫が集積されている。礫の状態は見切塚が少なく状態が悪いとは感じない。

遺物（第156図、P L-53）

礫の状態は良いように見えるが、蔵骨器は出土しなかった。土器では、上野型の薬壺蓋片（1）が出土しており、3号出土の破片と接合している。

5区6号火葬墓

遺構（第109・110図、P L-34・35）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC Y70である。礫の集積は2箇所に分かれているが、調査者は同一遺構として判断している。東側の礫集積は良くまとまっている。

遺物

土器類や蔵骨器は出土しておらず、火葬墓とする確証は得られていない。

5区7号火葬墓

遺構（第110図、P L-35）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはD A70である。直径70cmほどの範囲に礫が集積される。

遺物

土器類や蔵骨器は出土しておらず、火葬墓とする確証は得られていない。

5区8号火葬墓

遺構（第110図、P L-35・36）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはC Y71である。長辺2.5m、短辺1.6mの範囲に礫が集積される。東側長辺の礫は直線的に並び、南北短辺も1mほどは直線的に並ぶが、西側の礫分布は乱れる。本来の礫分布は長方形の可能性が考えられる。礫は部分的に厚く盛られ、厚い部分に頸部以上を打ち欠いた須恵器壺が置かれていた。壺の上には、ややずれた位置に正位で須恵器杯蓋が出土している。須恵器は土圧などで割れており、埋葬時には須恵器杯蓋を蔵骨器の蓋として埋置したと判断される。壺内からは焼骨が認められた。

掘方は不明瞭で、設計に基づき計画的に掘られたとは考えにくい。8世紀前半から中頃の埋葬である

う。今回の調査で唯一の焼き物蔵骨器を使用した火葬墓である。また、5区で唯一蔵骨器が出土した遺構である。

遺物（第157図、P L-53）

蔵骨器として転用されたのは須恵器短頸壺（2）である。短頸壺は口縁部が打ち欠かれている。1の須恵器杯蓋は焼成が悪く軟質である。蔵骨器内には火葬骨が残っていた。

5区9号火葬墓

遺構（第110図、P L-36）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはD A 74である。約1.5m四方形の範囲に礫が集積されている。一部が直線的に見えるなど、8号火葬墓と似た礫の集積状態が窺えるが、蔵骨器は出土しなかった。

遺物（第157図、P L-54）

礫間から須恵器壺の体部片（1）と底部から体部にかけた破片（2）が出土した。

5区10号火葬墓

遺構（第110図、P L-36）

見切塚丘陵東斜面の多田山15号墳東側に位置する。調査グリットはD A 74である。長さ約50cmの集石1条と約70cmの集石2条が列ぶように確認されている。3条の石列の間は綺麗に石がなく、攪乱によって除去されている可能性もある。

遺物

土器類や蔵骨器は出土していない。

5 その他

A 今井三騎堂遺跡

1区1号道状遺構

遺構（第111図、P L-36）

三騎堂丘陵と見切塚丘陵との境にある谷状地形の北側斜面に位置する。主軸は等高線とほぼ直交する。本遺構は、黒色土除去中にわずかな窪みとして長さ25mほどが確認された。幅は広い箇所約1.5mで、中央部には硬化面が認められた。硬化面直上の土は伏せ窯内の黒色土に近く古代の遺構と推定される。本遺構を古代の道とすると、斜面を下ると見切塚遺跡2区の炭窯が存在し、製炭作業に伴う道であったと推測される。

遺物

土器類の出土は皆無であった。

6区1号方形周溝

遺構（第111図、P L-36）

堅穴住居が集中する6区斜面低位に位置する。調査グリットはC F 123である。幅40cm前後dの「L」字状を呈した溝をふたつ合わせたような形状をしている。方形周溝の外側規模は、南北が7.1m、東西が7.0mである。溝埋土の質感は、古代堅穴住居の土に非常に似ていた。

遺物

図示可能な遺物の出土はないが、溝内から土師器細片が2点出土している。遺構の性格は不明である。

B 今井見切塚遺跡

5区1号堅穴

遺構（第112図、P L-37）

見切塚丘陵東斜面中腹に位置する。調査グリットはD L 42である。平面形は直径約5mの円形を呈し、深さは1mである。底面は直径2.4mほど平坦となっている。上部には4号炭窯が存在した。

形状や埋土、壁などに性格を伺わせる特徴がない。

遺物

土器類、石製品類ともに出土していない。

第2節 中世以降

1 土坑墓

A 今井三騎堂遺跡

4区1号土坑墓

遺構（第113図、P L-37）

GC134グリットに位置する。墓坑の長軸方位はN-23°-Eで、形状・規模は長軸92cm、短軸60cmの長方形を呈し、残存深度は10cmから16cmと浅い。この地点は黒色土の堆積が厚く、頭骨が出土した時点でプラン確認を行った。人骨の残存状態は比較的良好であり、頭部、腕、骨盤、足などが認められ、出土状態から埋葬体位は北頭東面の側臥屈曲位と判断される。

遺物（第157・158図、P L-54）

副葬品は多田山丘陵中最も豊富で、銭貨、煙管、櫛、柄鏡などが出土した。主として副葬品は頭部下に置かれていた。頭蓋骨下の遺物は、墓坑底に接して割り竹が置かれ、その上に布に包まれたと思われる柄鏡（3）を置き、更に紙入れのような袋物が置かれていた。更に上には交互に2枚重ねた木製櫛が出土し、この櫛にも袋物の一部と推定される有機物の付着が認められた。紙入れのような袋物は脆弱なため取り上げ不可能であったが、内部から寛永通寶1枚（20）が出土している。煙管はこれらの更に北側に火皿を北に向けて短軸方向に置かれていた。煙管と袋物の間には5枚の寛永通寶（10~14）がずらしながら重ねた状態で出土した。これらの銭貨は紙に包まれていた可能性が高く、文字の書かれた（木版？）紙の付着が認められた。櫛は2点とも木製で漆などの装飾は認められない。頭蓋骨付近以外では、腰付近から寛永通寶5枚が重なって出土している。出土位置は骨より上位で、遺体上部に納められたと考えられる。11枚出土した寛永通寶はすべて銅銭で鉄銭は認められない。また、半数近い5枚はいわゆる文銭である。柄鏡は合わせ鏡より更に小型で、出土状態から考えても携帯用として使用していたものを納めたと考えられる。10~14を包んでいたと考

る紙には文字が認められるが、残りが悪く判読不可能であり、埋葬用に文字を書いた物か転用かは不明である。なお、釘の出土はない。本土坑墓は、出土遺物から江戸時代後期（18世紀中から後半頃）に築造・埋葬されたと考えられる。周辺や表土などからも墓石は出土していない。

6区1号土坑墓

遺構（第113図、P L-37）

FV128グリットに位置する。墓坑の長軸方位はN-22°-Eで、規模・形状は長軸105cm、短軸57cmの長方形を呈し、残存深度は66cmから74cmと深い。骨の残存は比較的良好で、頭骨、脊椎、骨盤の一部、足が認められた。埋葬体位は、骨の状態から北頭東面の側臥屈曲位と判断される。

遺物（第158・159図、P L-54）

副葬品は腹部にあたる墓坑東壁中央から煙管と銭貨が出土している。煙管は短軸方向に雁首を西に向けて置かれ、雁首の北に接するように寛永通寶6枚（13~16）が重ねて置かれていた。また、煙管の14cm北側には板が残存しており、板の上には11枚重ねた寛永通寶（2~12）が置かれていた。板の木目は短軸方向に延び銭貨の緑青が付着しており、この錆の影響で銭貨の下のみ棺桶材の板が残存したと考えられる。先の煙管下も明確ではないが、板状の痕跡が認められた。また、後頭部に接するように朱漆の塗膜のみが確認され、副葬された漆仕器の木地が腐食したものと解される。重なって出土した寛永通寶は、いずれも布が付着していて布にくるむか袋に入れられていたと考えられる。17枚の寛永通寶の内2枚はいわゆる文銭で、鉄銭は含まれない。なお、釘は出土していない。先に説明した4区1号墓同様、寛永通寶と煙管から江戸時代（18世紀中から後半）の築造・埋葬と考えられる。

6区2号土坑墓

遺構（第113図、P L-38）

FV128グリットに位置する。墓坑の長軸方位は

N-28.5°-Eで、規模・形状は長軸120cm、短軸54cmの長方形を呈し、残存深度は8cmから10cmと浅く、残存状態が悪い。骨の残存は比較的良好であるが、頭骨の残存は悪い。骨盤や足などの出土状態から、埋葬体位は北頭西面と判断される。

遺物（第159図）

副葬品は少なく、肩から首にかけての後ろ側から寛永通寶（1～11）が出土している。頭部東側には朱漆塗膜が認められ、副葬された漆仕器の木地が腐食したものと解される。寛永通寶はすべて銅銭である。江戸時代。

6区3号土坑墓

遺構（第113図、P L-38）

F O 109グリットに位置し、堅穴住居の埋土内に構築されていたため、プラン確認が困難で人骨が出土した時点で墓と確認できた。墓坑形状と規模は不明である。骨の残存状態は良好であり、出土状態から埋葬体位は座位屈葬と判断された。墓坑は円形を呈していたと推測される。

遺物（第159・160図、P L-54・55）

人骨前面の床面から、かわらけ2点（1・2）と渡来銭（3～15）が出土している。銭種構成は開元通寶2枚、景德元寶1枚、祥付通寶1枚、皇宋通寶3枚、熙寧元寶1枚、元豊通寶2枚、政和通寶2枚、聖宋通寶1枚の計13枚である。土器皿（2）は割れた状態で12cm離れて出土している。

B 今井見切塚遺跡

7区1号土坑墓

遺構（第114図、P L-38）

B F 52グリット、2号土坑墓の東40cmに位置する。墓坑の長軸方位はN-1.5°-Eで、規模・形状は長軸92cm、短軸77cmの長方形を呈する。残存深度は9cmから16cmと残存状態が悪い。人骨の残存状態が悪く、埋葬体位や方向は不明である。しかし、墓坑形状と他の墓を考慮すると、頭を北に向けた側臥屈曲位と推定される。

遺物（第160図、P L-55）

副葬品は銭貨のみで墓坑北側中央（1）と北東部（2～5）から北宋銭5枚が出土している。北東部の銭貨下には、腐食した板が残存していたが、取り上げは不可能であった。釘は出土していない。中世の埋葬であるが、詳細な時期は不明である。

7区2号土坑墓

遺構（第114図、P L-38）

B F 52グリット、1号土坑墓に西40cmに位置する。墓坑の長軸方位はN-17°-Eで、規模・形状は長軸104cm、短軸76cmの楕円形を呈する。残存深度は7cmから12cmと浅く、残存状態が悪い。人骨の残存状態も悪く、頭と足の一部が確認できたのみである。埋葬体位は側臥屈葬と推定され、頭位は北である。

遺物（第160図、P L-55）

副葬品は墓坑中央東寄りから2枚の北宋銭（1、2）が、墓坑中央南寄りから1枚の北宋銭（3）が出土している。副葬品が少なく、中世ということ以外詳細な時期は不詳である。

7区3号土坑墓

遺構（第114図、P L-38）

B F 52グリットに位置する。長軸方位はN-13°-Eで、規模・形状は長軸100cm、短軸86cmの楕円形を呈する。残存深度は10cmから25cmと残存状態が悪く、底面も木根などの影響で荒れており、凹凸が激しい。骨の残存状態が非常に悪く、墓坑中央東西寄りに各2片認められたのみで、埋葬体位は不明である。

遺物（第160・161図、P L-55）

副葬品は墓坑中央の二箇所から渡来銭各3枚の計6枚（1～6）が出土している。6枚中2枚が明銭の永樂通寶である。永樂通寶初鑄の1408年以降で寛永通寶が流通する以前の埋葬と考えられる。

7区4号土坑墓

遺構（第114図、P L-38）

第2章 確認された遺構と遺物

B F 52グリットに位置する。長軸方位は不明で、規模・形状は長軸120cm、短軸80cmの不整楕円形を呈する。残存深度は最深部で27cmであるが、断面形状はすり鉢状を呈している。骨は南西部から小片が出土しているが、形状から墓とするには疑問もあり、副葬品もない。当然のことながら時期も不詳である。

7区5号土坑墓

遺構（第114図、P L - 38）

B K 69グリットに位置する。長軸方位はN - 30° - Eで、規模・形状は一方が直線的な長軸90cm、短軸57cmの楕円形を呈する。調査時の手違いで断面図がなく、残存深度は不明である。人骨の残存状態は悪く、細片が散在した状態で埋葬体位は不明である。墓坑形状からは側臥屈曲位と推測される。副葬品はない。時期は不明であるが、見切塚遺跡に近世墓が確認されていないことや周囲の土坑墓から中世の埋葬と考えられる。墓坑内に大きめの炭化物が認められるが、床面や壁面の焼土化は認められない。

7区6号土坑墓

遺構（第114図、P L - 39）

B J 54グリットに位置する。長軸方位はN - 5° - Eで、規模・形状は長軸80cm、短軸72cmの長方形を呈する。残存深度が4cmから10cmと墓坑の残りが非常に悪い。人骨の残存状態も非常に悪く、細片が数点出土したのみである。墓坑北西隅には上下歯列の一部が原位置で出土しており、墓坑形状を考慮すると埋葬体位は頭北西面の側臥屈曲位と推定される。副葬品はない。見切塚遺跡に近世墓が確認されていないことや周囲の土坑墓から中世の埋葬と考えられる。

7区7号土坑墓

遺構（第115図、P L - 39）

C F 57グリットに位置する。7区2号溝と重複するが、新旧関係は不明である。長軸方位はN - ?° - Eで、規模・形状は長軸100cm、短軸84cm、の隅丸

方形を呈する。残存深度は46cmから50cmと深い。

遺物（第161図、P L - 55・56）

遺構の残存が良いにもかかわらず、骨の出土が皆無であったが、渡来銭が壁の傾斜部分から3枚重なって出土（1～3）し、埋土中からも3枚重なった銭貨が出土していることから土坑墓として扱った。3枚ずつ重なった渡来銭が二つ出土したことから土坑墓としたが、出土位置が判明する1～3の出土場所が底面ではなく疑問も残る。遺構の時期は中世であろうが詳細は不明である。

7区8号土坑墓

遺構（第115図、P L - 39）

B M 53グリットに位置する。長軸方位はN - 27° - Eで、規模・形状は長軸112cm、短軸76cmのやや不整形な長方形を呈する。残存深度は15cmから28cmである。人骨の残存状態は悪いが、墓坑北西に歯がままとまっていることから、埋葬体位は北頭西面と推定される。

遺物（第161図、P L - 56）

副葬品は墓坑中央西寄りから渡来銭3枚（1～3）が出土しているのみである。3枚のうち2枚が北宋銭で1枚が明銭の永楽通寶である。永楽通寶初鑄の1408年以降で寛永通寶が流通する以前の埋葬と考えられる。

7区9号土坑墓

遺構（第114図、P L - 39）

B P 49グリットに位置する。長軸方位はN - ?° - Eで、形状・規模は長軸72cm、短軸62cmのほぼ円形を呈する。残存深度は13cmから20cmと本調査区では比較的良好な状態といえよう。人骨の残存状態は悪く、小片が墓坑の北と南寄りから出土しているのみで、埋葬体位は不明である。墓坑の形状からは座棺の可能性が考えられる。

遺物（第161図、P L - 56）

副葬品は銭貨のみで、墓坑中央西寄り（3～5）と北西隅（1・2）から出土している。なお、墓坑

南東から自然礫が7点出土しているが、配置された出土状態は見うけられず、埋葬に伴うものではないと考えられる。

7区10号土坑墓

遺構（第115図、P L - 39）

B L 51グリットに位置する。長軸方位はN - 26° - Eで、形状・規模は長軸108cm、短軸70cmの楕円形を呈する。残存深度は40cmから48cmと状態は良好である。人骨の残存状態は悪く、2本の歯と骨の一部のみが残っていた。これらの出土状態から、埋葬体位は北頭西面の側臥屈曲位と推定される。

遺物（第161図、P L - 56）

副葬品は、西壁付近から至道元寶が1枚出土しているのみである。中世の埋葬と推定される。

7区11号土坑墓

遺構（第115図、P L - 39・40）

B J 50グリット、12号土坑墓の北西20cmに位置する。規模・形状は長軸47cm、短軸44cmの円形を呈する。残存深度は8cmから12cmである。人骨の残存状態は悪いが、北西隅から上下顎骨と歯が出土している。墓坑規模が小さく円形を呈しているが、他の部位が不明なため埋葬体位は不明である。

遺物（第161図、P L - 56）

副葬品は顎上から銭貨（3～6）が出土している。最新銭は明の洪武通寶であり、1368年以降、寛永通寶が流通する以前の埋葬である。

7区12号土坑墓

遺構（第115図、P L - 40）

B J 50グリット、11号土坑墓の南西20cmに位置する。長軸方位はN - 18.5° - Eで、規模・形状は長軸100cm、短軸70cmの長方形を呈する。残存深度は13cmから20cmである。人骨の残存状態は、本調査区内では良好で頭骨と足が認められた。骨の出土状態から、埋葬体位は側臥屈曲位で頭位は北であることは判明するが、顔の向きは不明である。

遺構（第161・162図、P L - 56）

副葬品は銭貨のみで、頭骨付近（1・2）と墓坑中央（3・4）から出土している。

銭貨は南唐銭と北宋銭であり、中世の埋葬であること以上は不明である。

7区13号土坑墓

遺構（第115図、P L - 40）

B K 52グリットに位置する。長軸方位はN - 1.5° - Eで、規模・形状は長軸96cm、短軸56cmの一方が直線的な楕円形を呈する。残存深度は16cmから19cmである。人骨の残存状態は、本調査区内では比較的良好であり、顎骨や歯、足が認められた。顎と歯の出土位置から頭を北に向けた側臥屈曲位であることは判明するが、顔の向きは不詳である。

遺物

副葬品はないが、見切塚に近世墓が確認されていないことや、遺構分布から中世の埋葬であると考えられる。

第2章 確認された遺構と遺物

2 半地下式炭窯（石窯）

A 今井三騎堂

4区2号炭窯

遺構（第116図）

G S179グリット、確認面傾斜8度の東斜面に構築される。規模は全長4.8m、炭化室長2.2m、炭化室最大幅1.1m、焚口幅0.4m、確認面からの奥壁深さ0.8mである。炭化室内は、調査時に大量の焼礫が出土し、石組みの炭窯であったと考えられる。また、石間に詰めた焼けた粘土もブロック状となって炭化室を埋めていた。石組みで原位置を保ったものはほとんどなく、図示したのは掘方である。炭化室掘方床面は水平である。掘方面は一様に焼土化している。炭化室奥壁中央には3段の石組みが残り、石組みに接して白色灰が分布しており、この場所に排煙口が設置されていたと考えられる。

焚き口下部には南北4.8m、東西3.2mの範囲で作業場が広がり、黒色灰が分布していた。灰の分布は、北側が厚く南側が薄い。大量の焼礫が出土していることや壁面の焼土化が激しいことなどから白炭を生産したと考えられる。炭の材料はおそらくクヌギやコナラであろう。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

4区3号炭窯

遺構（第117図、P L-40）

G T160グリット、確認面傾斜19度の東斜面に構築される。規模は全長3.4m＋、炭化室長2m、炭化室最大幅1.4m、焚口幅0.4m、確認面からの奥壁深さ1.5mである。炭化室は中央幅が広がる紡錘形をなす。調査時に炭化室内から多量の焼礫や焼けた粘土塊が出土し、焚き口付近には石組みが残っており、石組みの炭窯であったと考えられる。奥壁中央には煙道掘方が残っている。掘方面の地山は全面焼土化している。掘方底面傾斜は奥壁側に1度傾いている。焚き口床面には扁平な石が据えられる。

焚き口下には作業場が広がるが、急傾斜のため焚

き口付近のみ残存していた。作業場に灰は残存していない。

石組みの窯で、非常に焼けた床や壁の焼土は酸化状態であり、白炭を生産した窯と考えられる。炭の材料はおそらくクヌギやコナラであろう。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

4区4号炭窯

遺構（第118図）

G L159グリット、確認面傾斜8度の東斜面に構築される。規模は全長5.68m、炭化室長1.8m、炭化室最大幅1.4m、焚口幅0.4m、作業場幅3.04m、確認面からの奥壁深さ0.8mである。炭化室掘方の床面傾斜は奥壁側に3度傾斜している。炭化室内調査時には焼礫と焼けた粘土塊が大量に出土し、石組みの窯であったと判断される。煙道は奥壁中央に設置されていたようで、掘方に突出部が認められる。

焚き口下には斜面を水平に削った平坦面があり、東西3m、南北3.18mの範囲に黒色灰が分布していた。この作業場にも焼礫が部分的にかたまって出土していた。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

4区6号炭窯

遺構（第119図）

G H145グリット、三騎堂丘陵東斜面の浅い谷状地形内に位置する。急傾斜のため焚き口付近より手前は確認できない。炭化室長は2.5m＋、炭化室最大幅は1.55mを測る。炭化室は中央部分が丸く張る形態である。焚き口付近は残存しておらず、焚口幅は不明である。奥壁の深さは90cmと残存は不良ではないが、炭化室内の石組みはほとんど残っていない。確認面の傾斜18度と急であるが、床面傾斜は2.5度である。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

5区2号炭窯

遺構 (第120図)

E V126グリット、三騎堂丘陵南東斜面に位置し、古墳墳丘の傾斜を利用して構築していた。作業場と焚き口の西側を攪乱により欠いている。規模は全長4.6m、炭化室長2.3m、炭化室最大幅1.3mである。煙道は奥壁中央に設置していたようで、掘方が突出している。攪乱により焚口幅は不明である。奥壁の深さは1.4mとかなり深く残っている。確認面傾斜は9度、床面傾斜は奥壁側に2度傾斜している。壁の石組みは北西下部のみ残存していた。

焚き口手前には古墳の前庭状の作業が広がるが、西側は攪乱により破壊されている。

埋土中にはさらさらした焼土細粒が大量にあり、壁材と推定される。また、焼けた礫も認められ、白炭用の石窯と考えられる。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

5区3号炭窯

遺構 (第121図)

B L119グリット、三騎堂丘陵南東斜面に位置し、古墳墳丘の傾斜を利用して構築されている。規模は全長4.4m、炭化室長2.3m、炭化室最大幅1.3m、奥壁深さ1.3mである。床面傾斜は1度であるが、埋土中に焼礫を大量に含み、本来は石窯であったようだ。焼土は炭化室全面に認められた。また、作業場が広がっていたようで、焚き口全面には灰層が認められた。おそらく白炭用の石窯であろう。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

6区1号炭窯

遺構 (第122図、P L-40・41)

C C112グリット、三騎堂丘陵の南東斜面下方に位置する。今回の調査中最も残りの良い石窯である。全長は5.58m、炭化室長は2.3m、炭化室最大幅は1.3mである。焚口幅は40cmと狭く、焚き口手前の

作業場は幅3.08mの広さを有する。作業場の形状はちり取りや十能のようである。奥壁の深さは1mである。確認面傾斜は10.5度、床面傾斜は水平である。排煙口は奥壁中央下部に設けられ、土砂の流入防止であろうか、排煙口には板状の石で蓋をした状態であった。石壁の裏側は広い範囲で赤く焼けていた。今回調査した半地下式炭窯はすべてこのような窯であったと考えられる。クヌギやコナラを使用した白炭窯と推定される。

遺物 (第162・163図、P L-56・57)

床面には板状の石を敷き詰め、壁は各礫を積み上げていく。向かって右側(北)の壁下部には、完形の石臼(上臼)(6)が組み込んであった。また、粗粒輝石安山岩の石製蔵骨器蓋(1)と推定されるものも壁に使用されていた。

B 今井見切塚遺跡

5区1号炭窯

遺構 (第123図)

D R61グリット、見切塚丘陵東斜面に位置する。残存状態が非常に悪く、楕円形土坑が2つ重複したような形状である。壁に礫が全く残っていないが、床面や埋土中に砂質細粒の焼土が多く認められ、この土が石壁の裏側に詰められていたと推定される。煙道は奥壁中央に設置されていたと考えられるが、掘方の突出も認められない状態である。

作業場も残存が悪く、古墳の前庭状には広がっていない。しかし、床面には灰層が認められた。おそらくクヌギやコナラの白炭を生産した窯であろう。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

5区7号炭窯

遺構 (第123図、P L-42)

見切塚丘陵東斜面に位置する。主軸は等高線に斜交する。全長は6.2m、炭化室長3.0m、炭化室最大幅1.4m、作業場幅2.6m、奥壁の確認壁高は40cmと低く、壁の残りは不良である。しかし、床面の石敷

第2章 確認された遺構と遺物

きはほぼ完全に残っていた。煙道は炭化室奥壁中央に設置されており、掘方の突出部として残っている。作業場も残っており、床面は灰を多く含む土であった。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

5区8号炭窯

遺構（第123図）

D S 34グリット、見切塚丘陵東斜面に位置する。炭化室の半分程が確認され、他は攪乱により破壊されている。奥壁も高さ20cm程とかなり削平されている。しかし、一部の床と西壁の石は残存していた。煙道は奥壁中央に設置されていたと考えられるが、掘方の突出も残存していない。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

5区12号炭窯

遺構（第124図）

D Q 81グリット、見切塚丘陵東斜面に位置する。主軸は等高線にほぼ直交する。確認された全長は5.2m、炭化室長は3.6m、炭化室最大幅は1.7mである。焚き口幅は掘方で1.0mとなっている。

埋土には大量の焼礫が含まれ、壁や床の石がすべて剥がされたり崩落していた。埋土中の焼土には砂質細粒焼土が多く認められた。本炭窯はクヌギやコナラの白炭を焼いた石窯であったろう。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

3 その他の遺構

A 今井三騎堂遺跡

4区1号から4号溝

遺構（第127図、P L - 43）

三騎堂丘陵東斜面直下のテラス状部分に位置する。1号溝の北東側は、急斜面直下に沿うように走向する。2・3号溝は直線的に等高線に平行に掘られて

いる。4号溝は1号溝より古い、形状が不整で、人為的ではないかもしれない。

1号溝北側部分は低地の縁辺となっており、As-Bが確認された。しかし、斜面直下のごく一部での確認であるため、水田などの遺構は確認されなかった。2・3号溝はその走向から1号溝より古い可能性が考えられるが、証拠は得られなかった。

遺物（第163図）

1号溝からは江戸時代の瀬戸・美濃陶器碗（1）と在地系焙烙（2）が出土している。

6区1・2号溝

遺構（第128図）

三騎堂丘陵南東部斜面下部のほぼ平坦に近くなった場所に位置する。等高線に沿うように掘削され、水田などに水を引くための溝と推測される。直接関連するか否かは不明であるが、4区豎形炉が存在する斜面最下部には横井戸が存在し、かつては下流部の田畑に水を供給していた。また、4区の谷地縁辺には、谷地頭の水を引くための江戸時代の溝が存在したようで、第163図に示した陶磁器類も出土している。

本溝は、4区1から3号溝と同一である可能性もあるし、4区谷地から引水する溝であった可能性がある。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定は困難である。

6区1号掘立柱建物

遺構（第128図）

G E 124グリット、三騎堂丘陵東斜面の豎穴住居が集中する場所に位置する。柱はかなり乱れ、ピット群としたほうがよいであろう。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

6区2号粘土採掘坑

遺構（第129図）

三騎堂丘陵東斜面の最下部に位置する。断面図C C'に現れているように、斜面下から順次掘り進み、次第に後ろ側へ排土を出しながら埋めてゆく状態が見て取れる。ポイントC'地点は最後まで掘削していた箇所と思われ、上部は自然堆積が認められた。本採掘坑は地元の方の話では、壁土を取るためのものであったことが判明した。

遺物 (第163図)

ポイントC'地点で瀬戸・美濃の尾呂茶碗底部が出土したが、聞き取りによる年代に開きがあり、江戸時代の陶器碗は混入の可能性がある。

B 今井見切塚遺跡

5区3号竪穴

遺構 (第125図)

D P 27グリット、見切塚丘陵東斜面に位置する。平面形は、長軸2.7m、短軸1.9mの隅丸長方形を呈する。残存壁高は10cmから20cmである。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

5区2号竪穴

遺構 (第126図)

C Q 21グリット、見切塚丘陵東斜面に位置する。規模は長軸3.6m、幅2.2m、深さ約1mで、大きな落とし穴状の形状を呈する。短辺中央床面にはピットが一对認められる。

遺物

遺物の出土は皆無で時期決定が困難である。

3区1号竪穴

遺構 (第130図、P L-42)

A G 72グリット、見切塚丘陵南西斜面最下部に位置する。北側を1号、2号溜井に破壊される。平面形は長軸4.8m、短軸3.0mで確認壁高は70cmの隅丸長方形である。各壁の直下には隅と中央に礎石が配されている。礎石間隔は梁行が狭く桁行が広い。礎石は床面に置くのではなく、床面を窪めた掘方内に

設置している。床面は灰白色シルト層で貼り床を行っていた。

遺物 (第165図)

本竪穴からは古瀬戸入れ子(1)が出土している。

3区1号、2号溜井

遺構 (第131図、P L-42・43)

A G 72グリット、見切塚丘陵南西斜面最下部に位置する。1号竪穴より古い。3区の斜面を横方向に掘ってテラス状にしている。底部は溝状に深く掘り下げる。調査区の境に近いことや1号竪穴との重複により導水路は不明である。

1号と2号の重複関係であるが、ごく一部で重複が確認されるのみであり、不明確だが1号溜井が新しい可能性が高い。

遺物 (第164・165図、P L-57)

溜井からは在地系の中世火鉢(3)や宝篋印塔風輪(9、10)などが出土している。

1区1・2号溝、7区1・2号溝

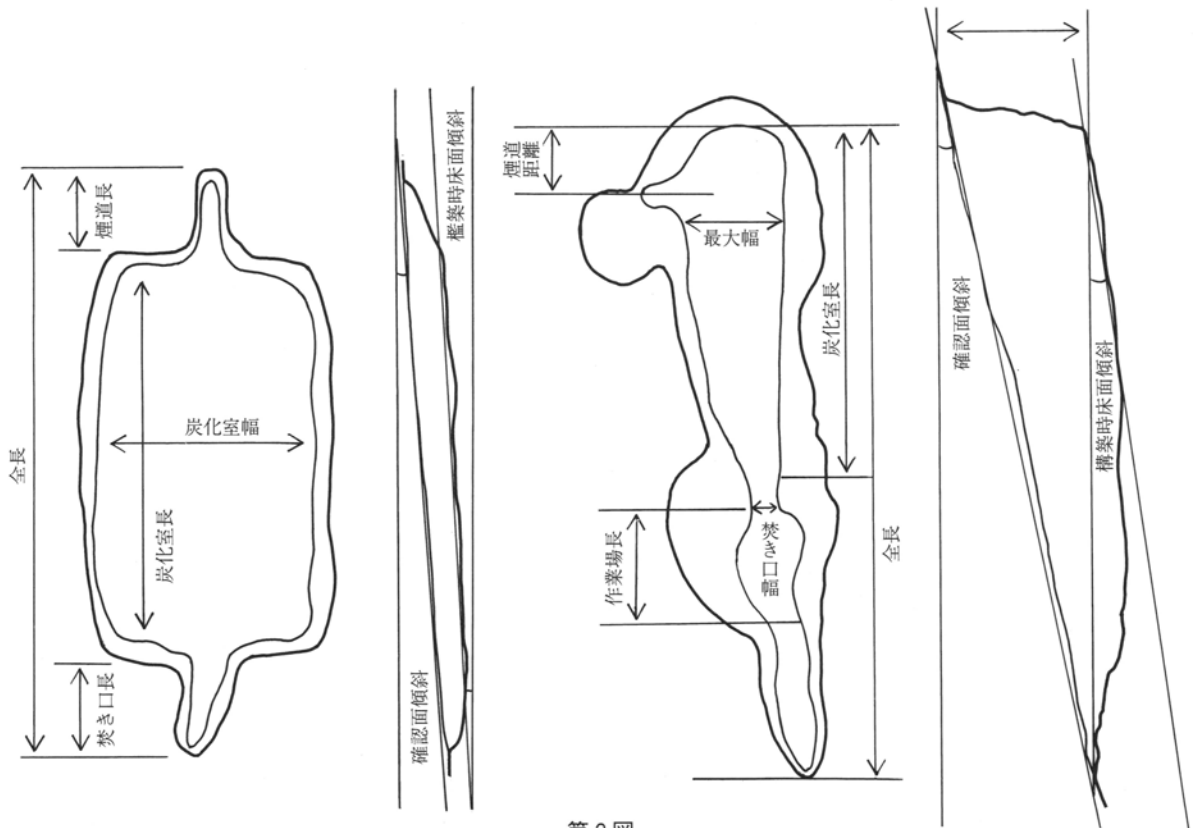
遺構 (第132・133図、P L-43)

見切塚丘陵の西斜面、1区と7区の調査区境に位置する。調査中にも使用していた道路のため、中央を調査できなかったが、1区2号溝と7区1・2号溝は本来同一の溝である。このため、道路下を含めると全長115mを確認したことになる。

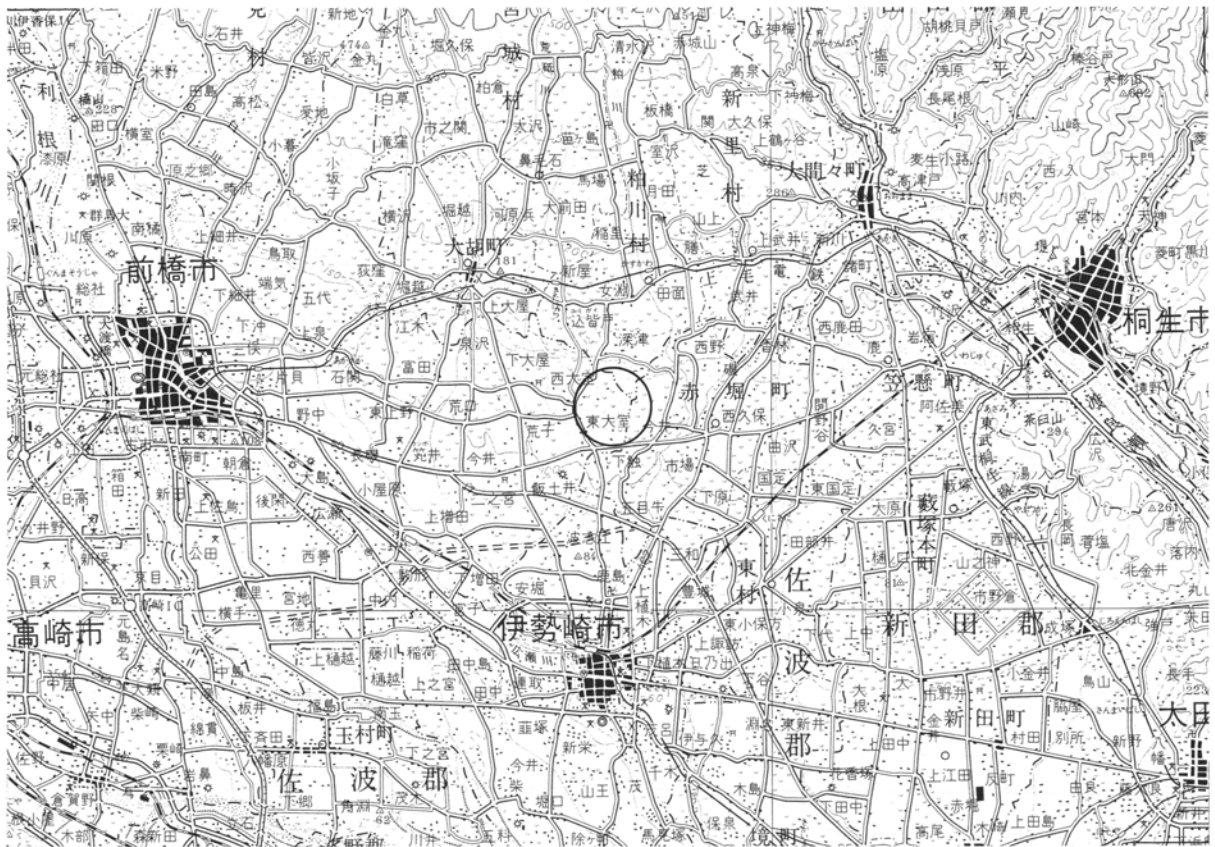
溝は7区1・2号溝の関係で明らかのように、ほぼ同一場所で2条が重複している。1区の場合は、A Bの断面に1号溝が姿を現さず、1号溝が古い可能性が高い。これらの溝は直線的で、計画的に掘削されたことがわかる。

遺物 (第165図、P L-57)

出土遺物は非常に少ないが、1区2号溝から中世の在地系かわらけ3枚(1~3)と砥石1点(4)が出土している。また、埋土の質感も新しい特徴を示しており、時期は中世としてよいであろう。

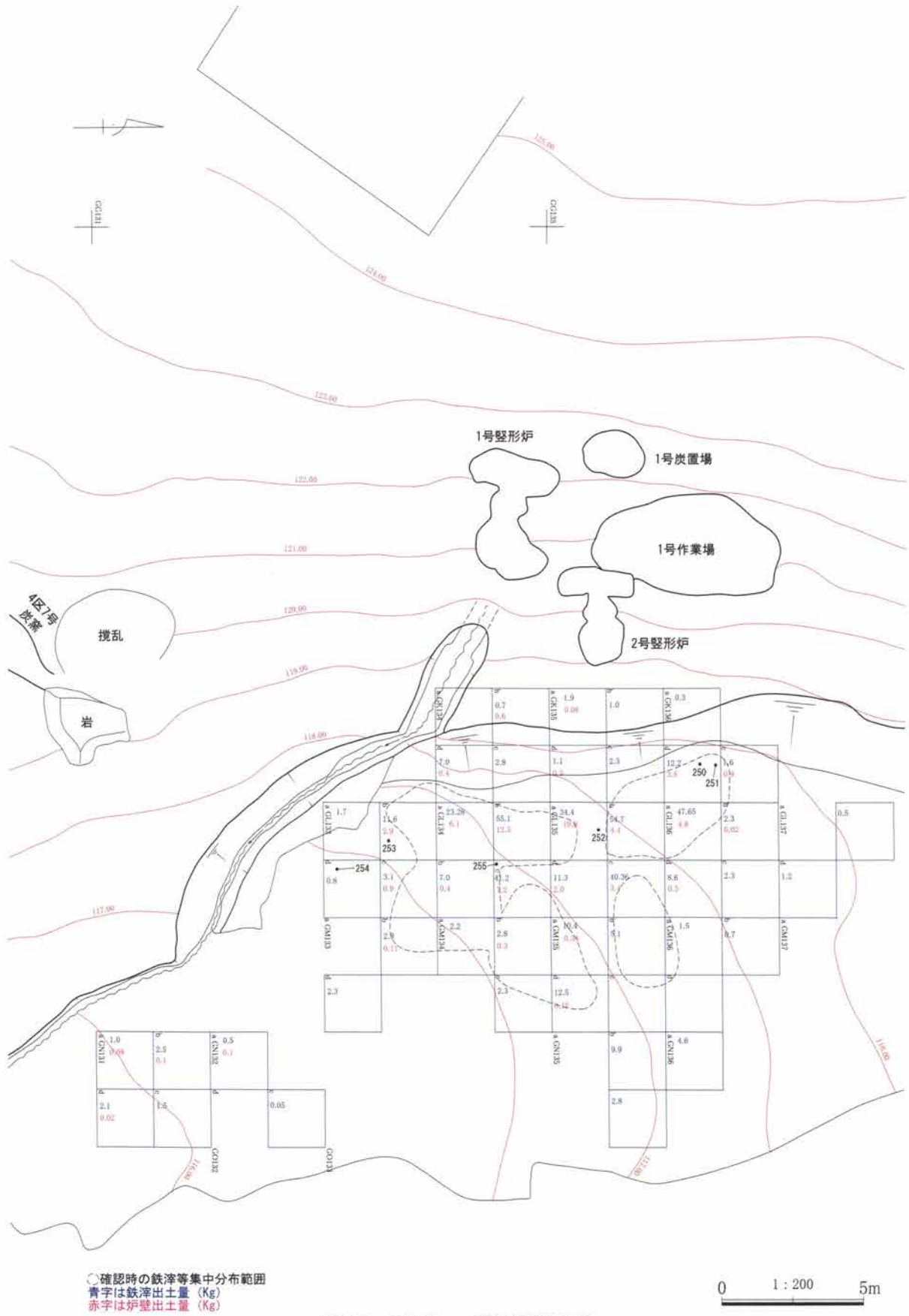


第2図

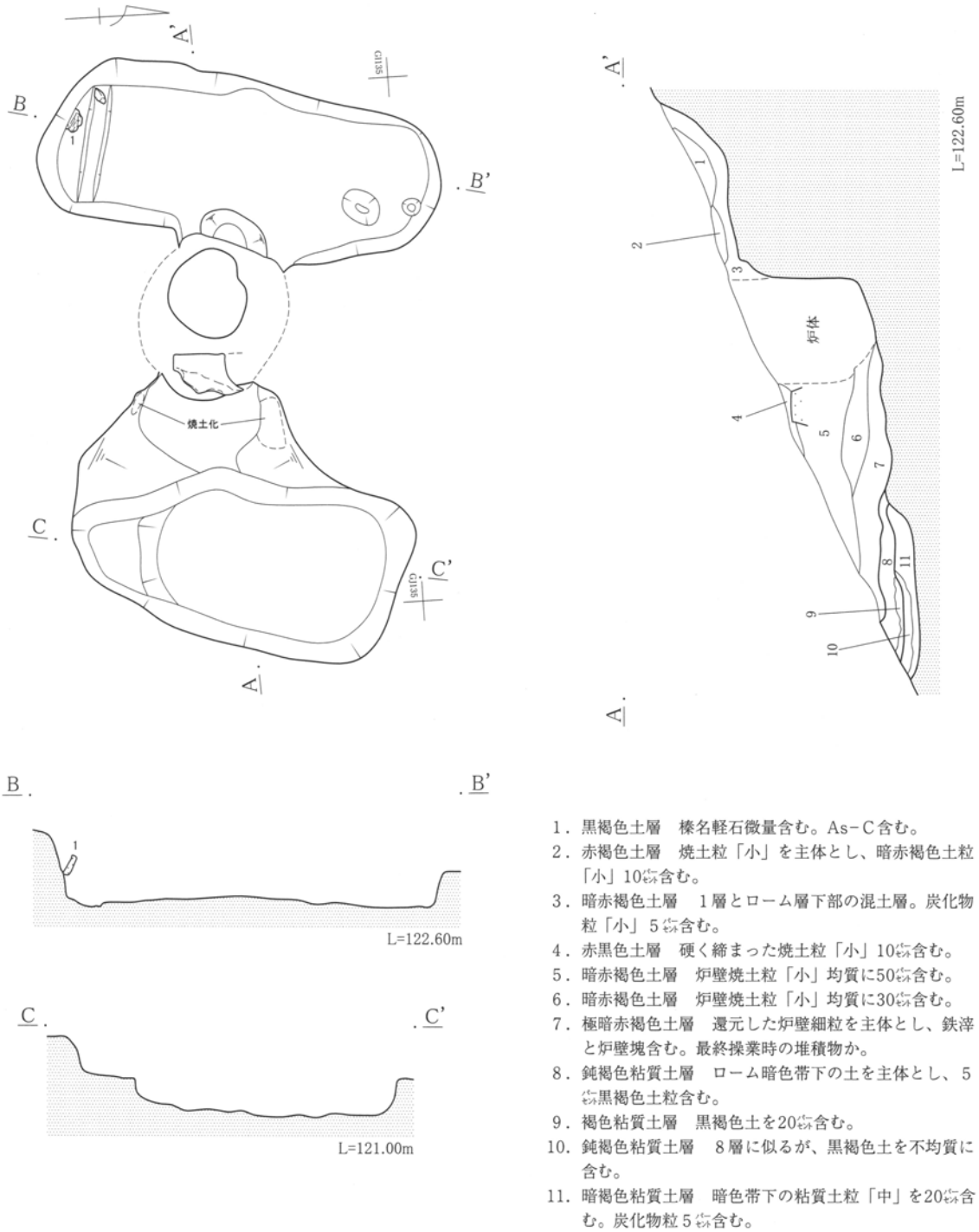


第3図 遺跡位置図 (20万分の1)

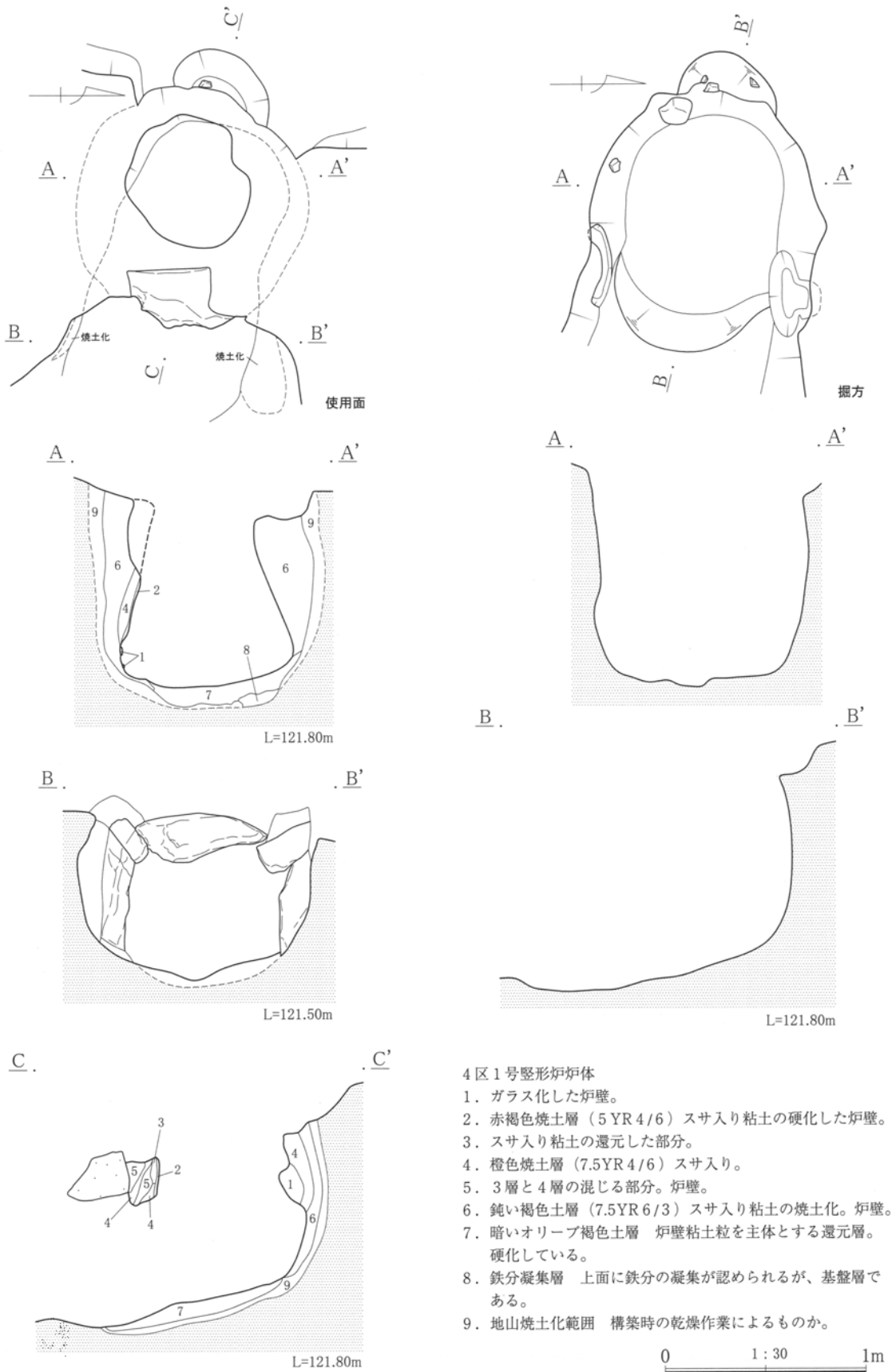
第2章 確認された遺構と遺物



第5図 三騎堂 4区製鉄関連遺構

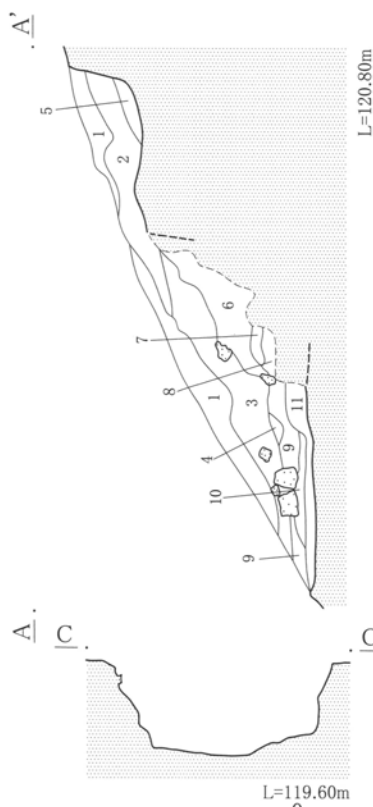
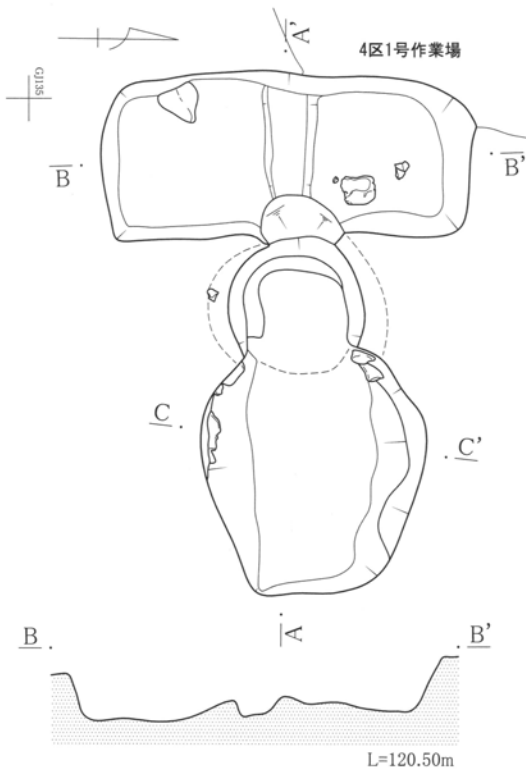


第6図 三騎堂 4区1号豎形炉



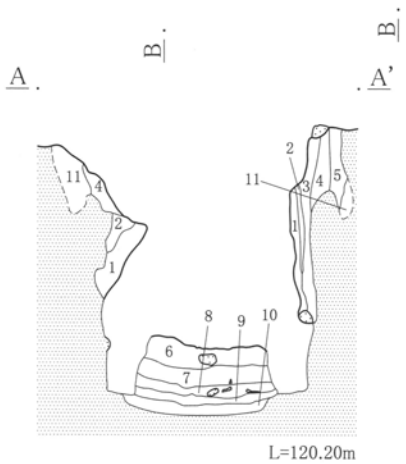
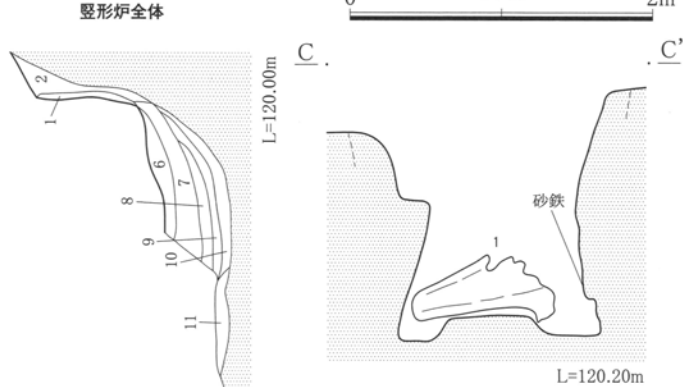
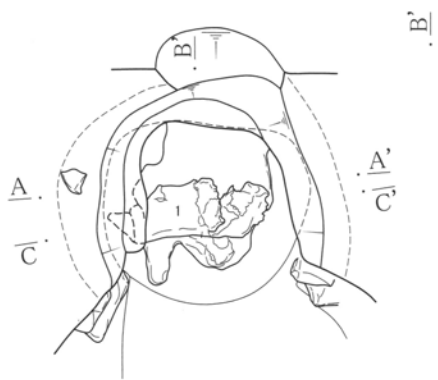
第7図 三騎堂 4区1号竖形炉炉体

第2節 中世以降



4区2号竖形炉全体

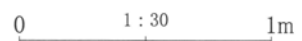
1. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 上方に位置する1号炭置き場の二次堆積木炭片30%を含む。
2. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 木炭細片と焼土粒5%を含む。
3. 鈍い褐色粘質土層
4. 鈍い褐色粘質土層 焼土粒を10%を含む。
5. 暗赤褐色土層 1層とローム層下部の混土層。炭化物粒「小」5%を含む。
6. 明褐色土層 (7.5YR5/6) 暗色帯下の粘質土を主体とし、焼土中粒10%を含む。
7. 焼土粒層 炉体崩落土。
8. 暗褐色土層 砂鉄状の粒20%を含む。
9. 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘性あり。黒色土と褐色土の混土層。
10. 9層に似るが、焼土粒を多く含む。
11. 暗褐色粘質土層 暗色帯下の粘質土粒「中」20%を含む。炭化物粒5%を含む。



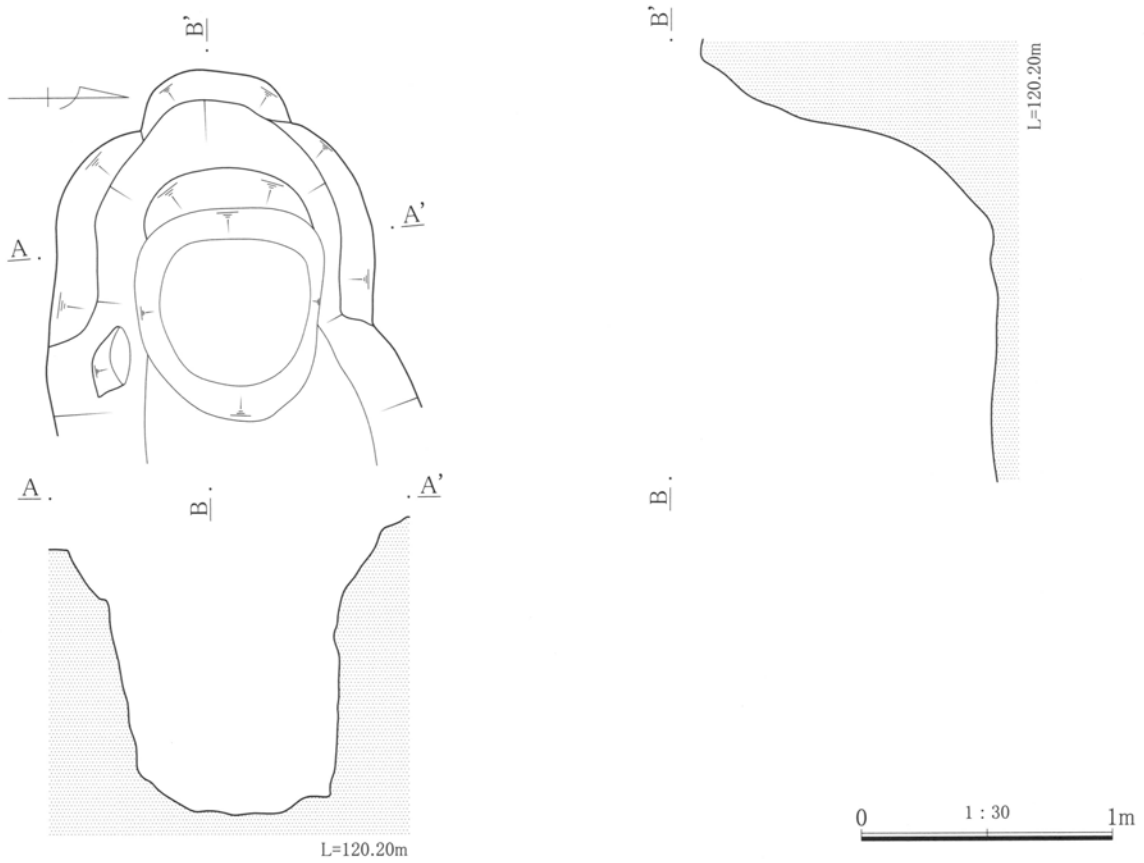
炉体

1. 炉壁 炉壁内側面は灰黒、他は淡橙色を呈する。
2. 炉壁 暗赤褐色を呈する。
3. 炉壁 橙色で、粒状を呈しガサガサした状態。
4. 炉壁 本来は1層の裏側に位置し、淡い橙色部分。
5. 炉壁 赤褐色を呈する。
6. 褐色土層 (7.5YR 4/3) 部分的に灰色味を帯びて硬い。
7. 黒褐色土層 (7.5TR 3/1) 6層に比して軟らかい。
8. 7層に似るが、木炭細片少量含む。
9. 炉壁粘土粒を中心とした層
10. 6層に同じ。
11. 地山の焼土化した範囲

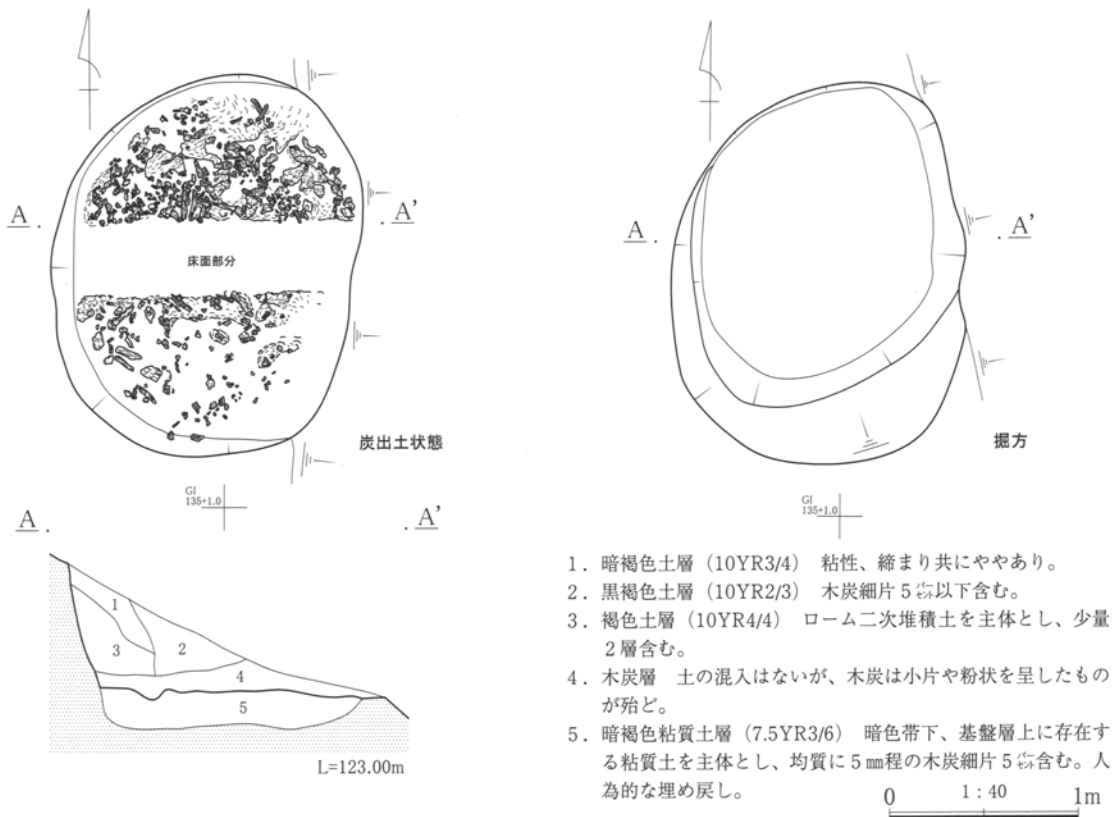
炉本体使用面



第8図 三騎堂 4区2号竖形炉

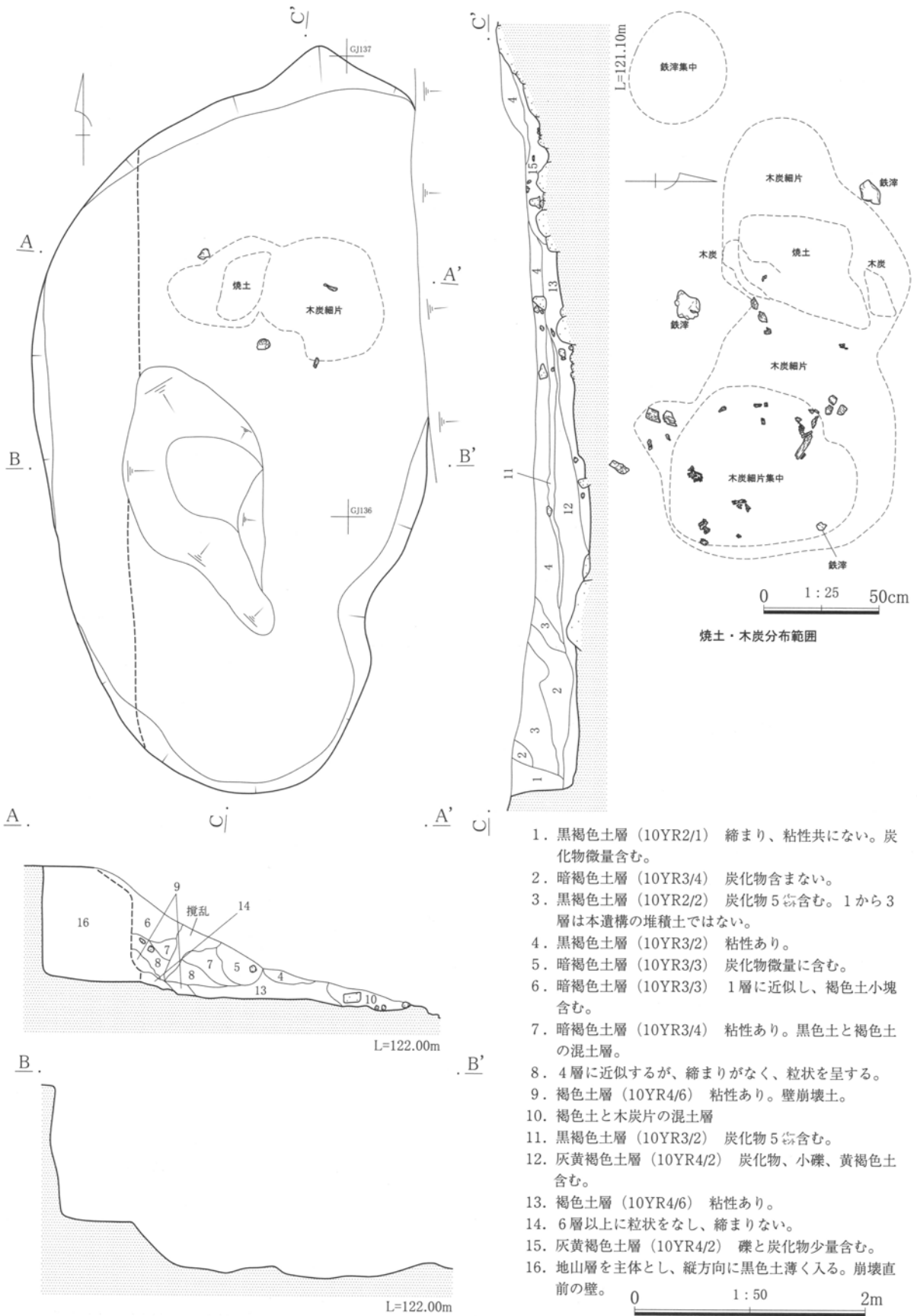


第9図 三騎堂 4区2号豎形炉体掘方

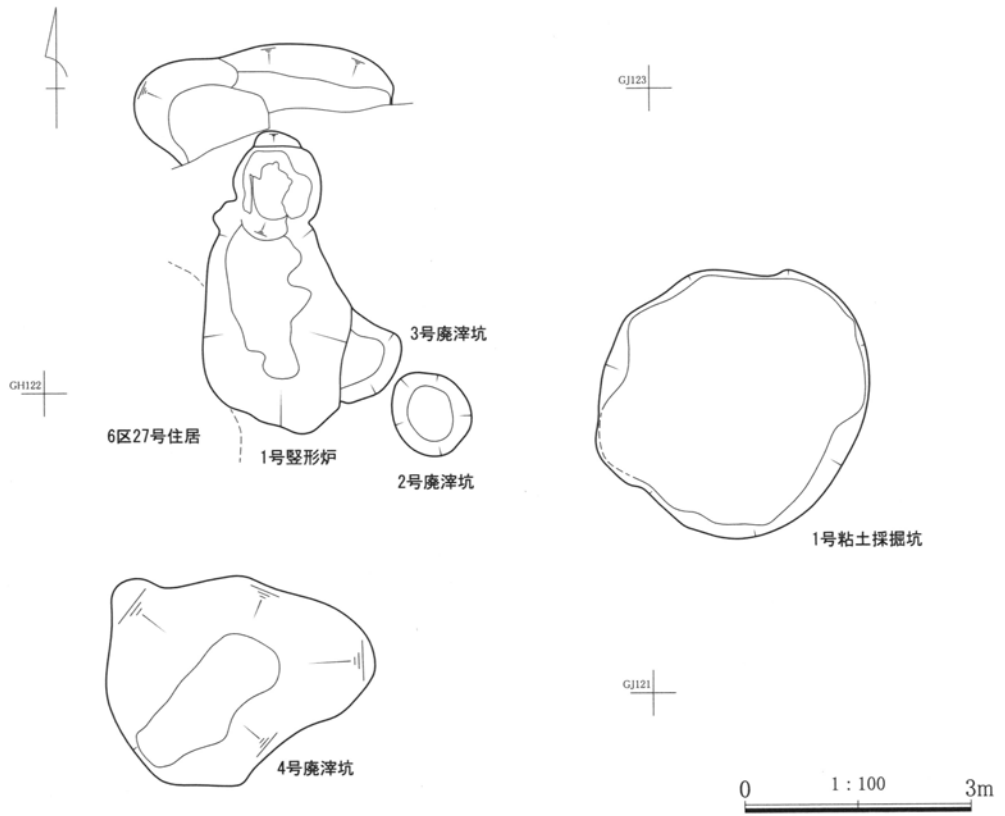


1. 暗褐色土層 (10YR3/4) 粘性、締まり共にややあり。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) 木炭細片 5mm以下含む。
3. 褐色土層 (10YR4/4) ローム二次堆積土を主体とし、少量2層含む。
4. 木炭層 土の混入はないが、木炭は小片や粉状を呈したものが殆ど。
5. 暗褐色粘質土層 (7.5YR3/6) 暗色帯下、基盤層上に存在する粘質土を主体とし、均質に5mm程の木炭細片5mm含む。人為的な埋め戻し。

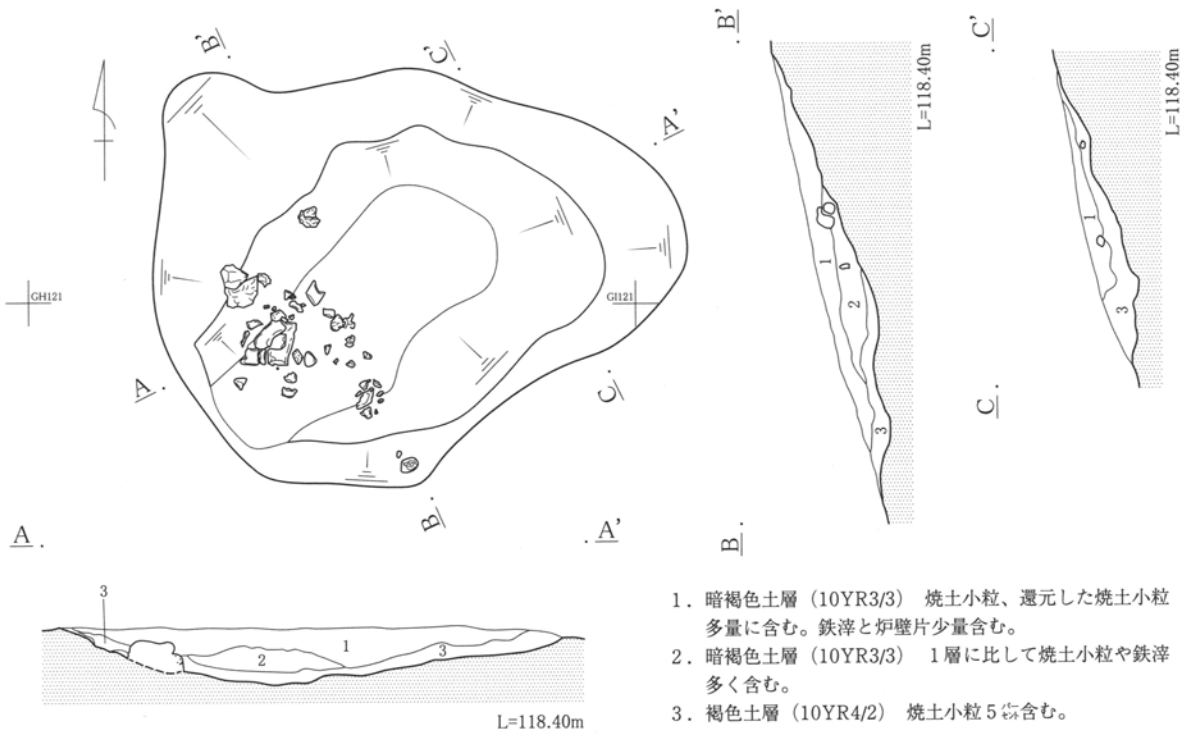
第10図 三騎堂 4区1号炭置場



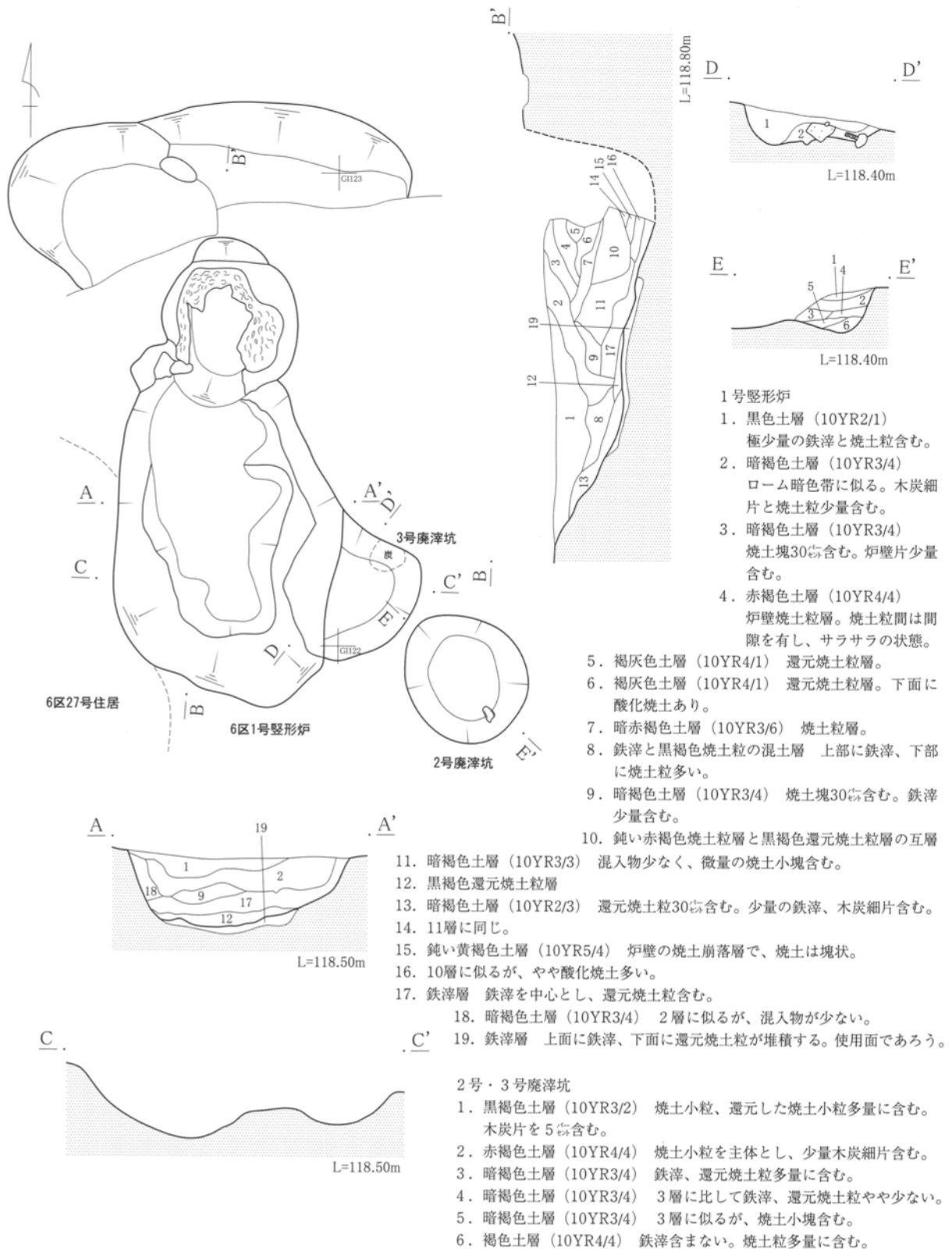
第11図 三騎堂 4区1号作業場



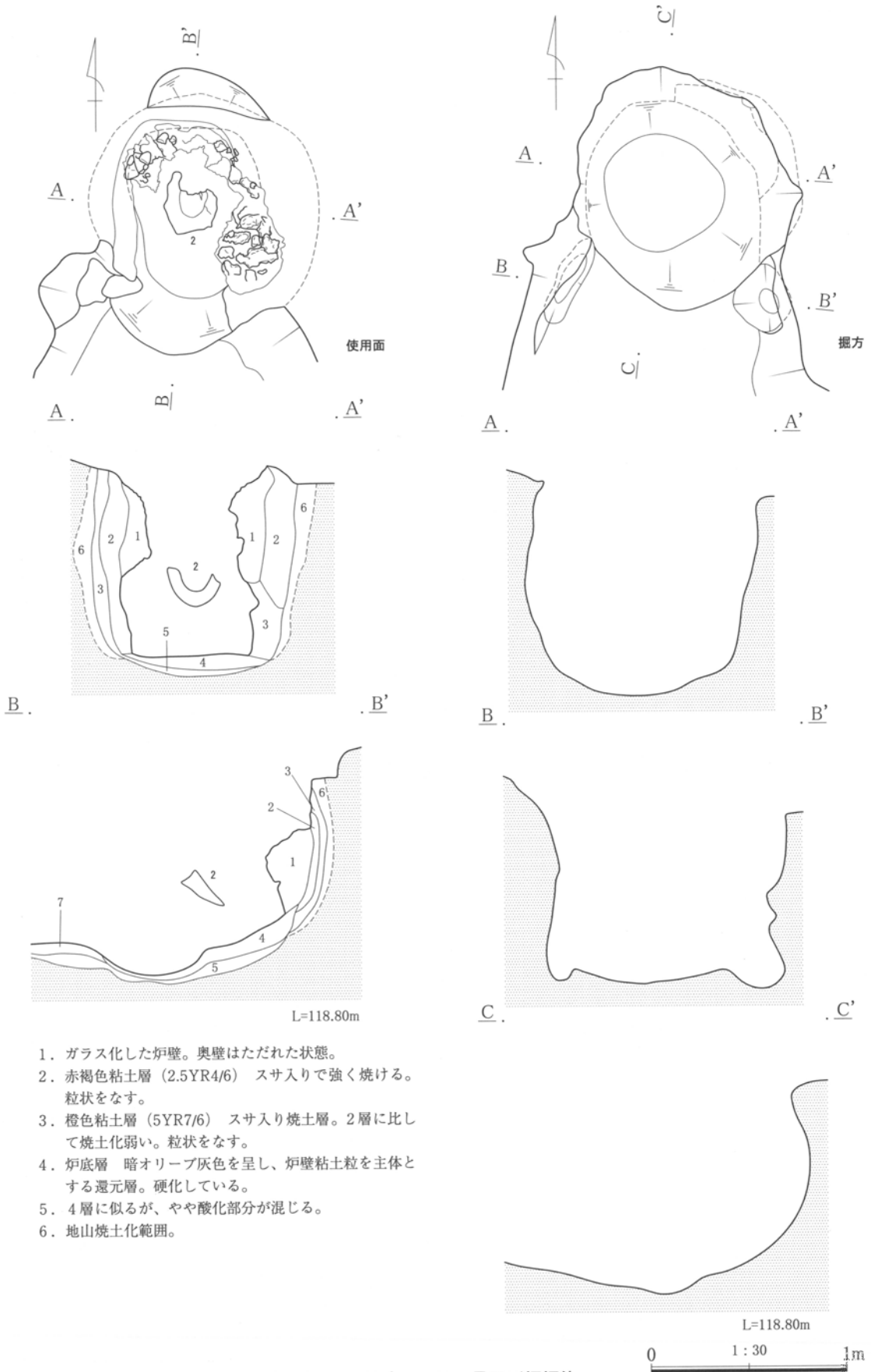
第12図 三騎堂 6区製鉄関連遺構



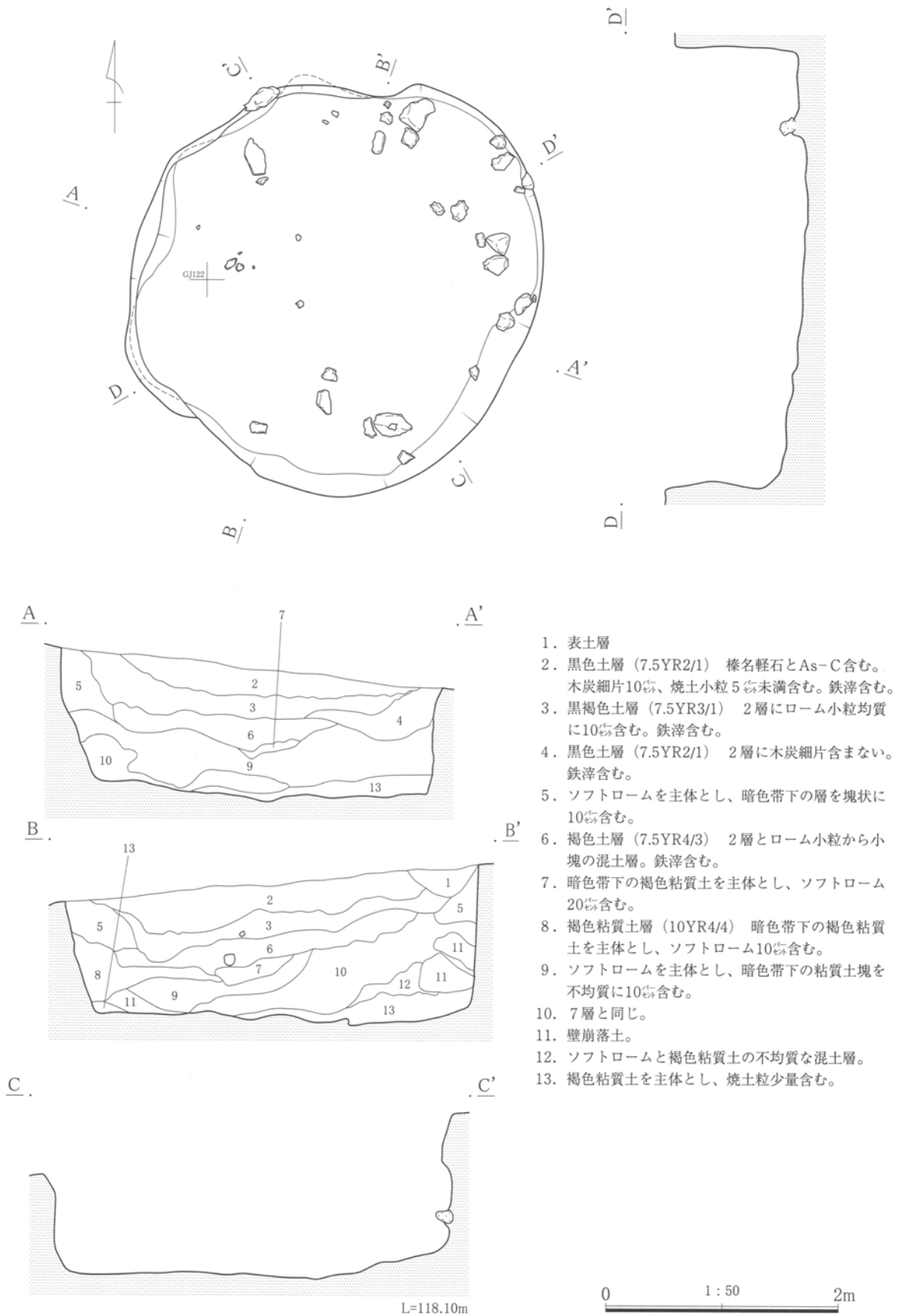
第13図 三騎堂 6区4号廃滓坑



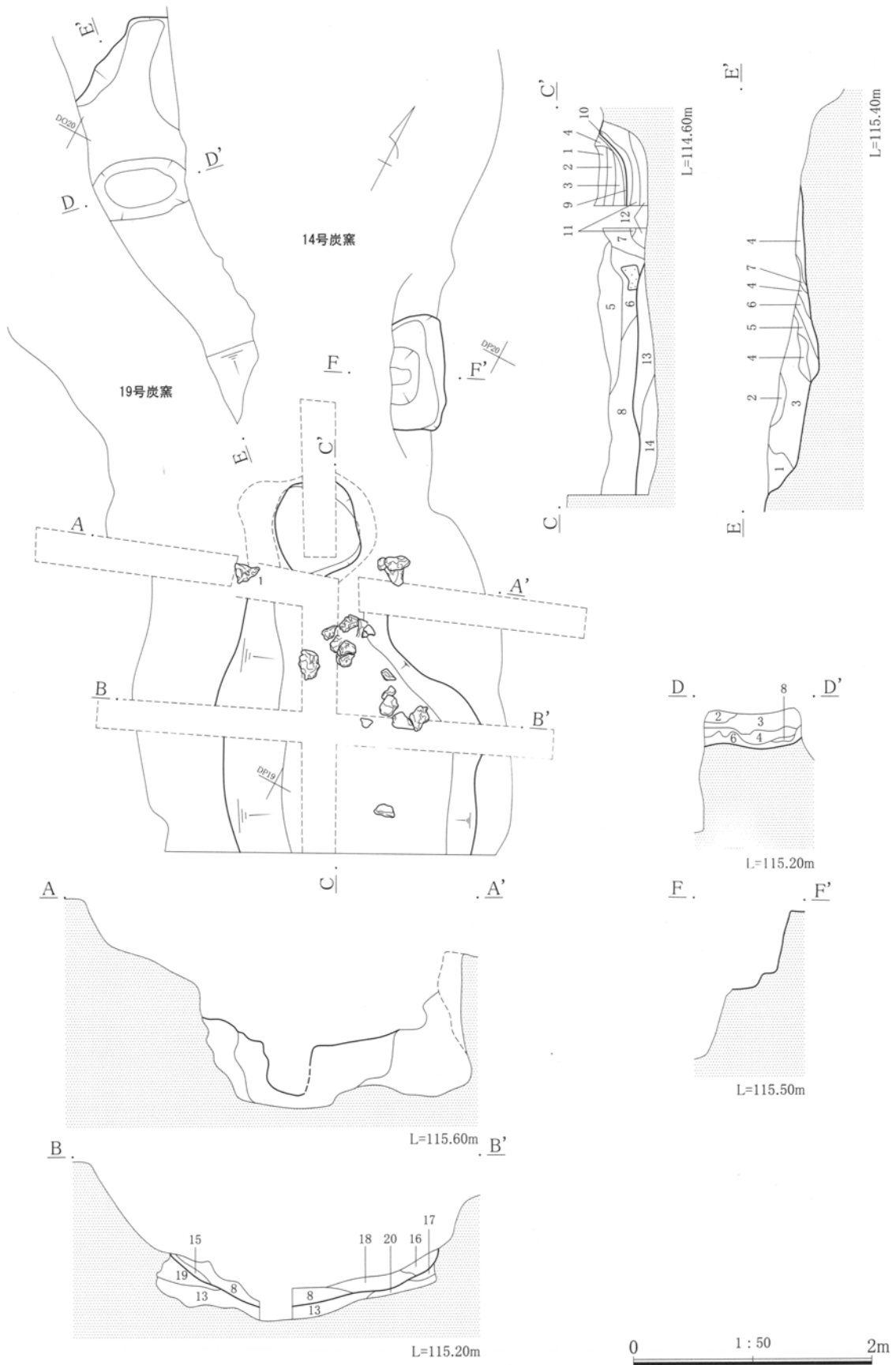
第14図 三騎堂 6区1号豎形炉、2号・3号廃滓坑



第15図 三騎堂 6区1号豎形炉炉体



第16図 三騎堂 6区1号粘土採掘坑(1号廃滓坑)



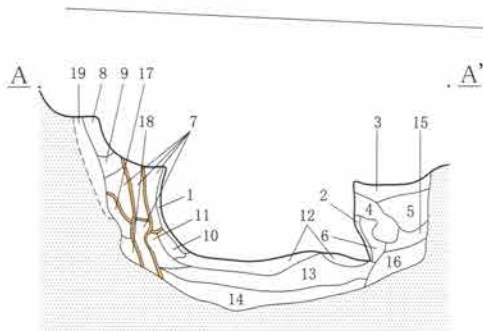
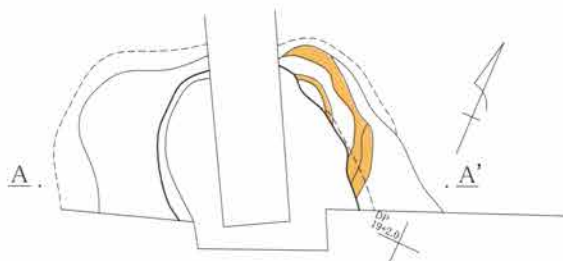
第17図 見切塚 5区1号豎形炉

B、C

1. 明赤褐色土層 (5TR5/6) 炉壁焼土の崩壊層。
2. 1層に比してやや黒味の強い炉壁崩壊土層。
3. 褐色焼土層 2層20%程含む。炉壁崩壊土。
4. 橙色焼土層 炉壁崩壊土か。
5. 褐色土層 (7.5YR4/3) 焼土粒と木炭片5%含む。
6. 暗赤褐色焼土層 (5YR3/3) 鉄滓40%含む。
7. 暗赤褐色焼土層 (7.5YR3/3) 橙色焼土塊含む。
8. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 木炭片、焼土粒5%程含む。
9. オリーブ黒色焼土層 (7.5Y3/2) 還元した焼土層。
10. 極黒赤褐色土層 (5YT2/3) 木炭片30%含む。
11. 極暗褐色土層 (7.5YR2/5) 焼土や木炭片殆ど含まない。
12. 11層中に15層20%含む。
13. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 焼土粒20%含む。
14. 極暗褐色土層 (7.5YR2/3) 焼土粒、鉄滓10%含む。
15. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 焼土、鉄滓、木炭片10%含む。
16. 黒褐色土層 (10YR2/3) 焼土粒僅かに含む。
17. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 焼土粒20%含む。
18. 極暗褐色土層 (7.5YR2/3) 焼土塊、鉄滓20%程含む。
19. 灰褐色土層 (7.5YR4/2) 炉壁粘土と鉄滓混土層。
20. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 焼土粒10%程含む。

D、E

1. 黄褐色ローム層 二次堆積。
2. 褐色土層 (10YR4/4) 鈍黄褐色土粒5%程含む。
3. 褐色土層 (10YR4/6) 4層粒20%含む。
4. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 粘質。
5. 3層と6層の混土層
6. 黒色土層 (10YR2/1) 漸移層10%含む。
7. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム漸移層に黒ボク5%含む。
8. 黒ボク土塊



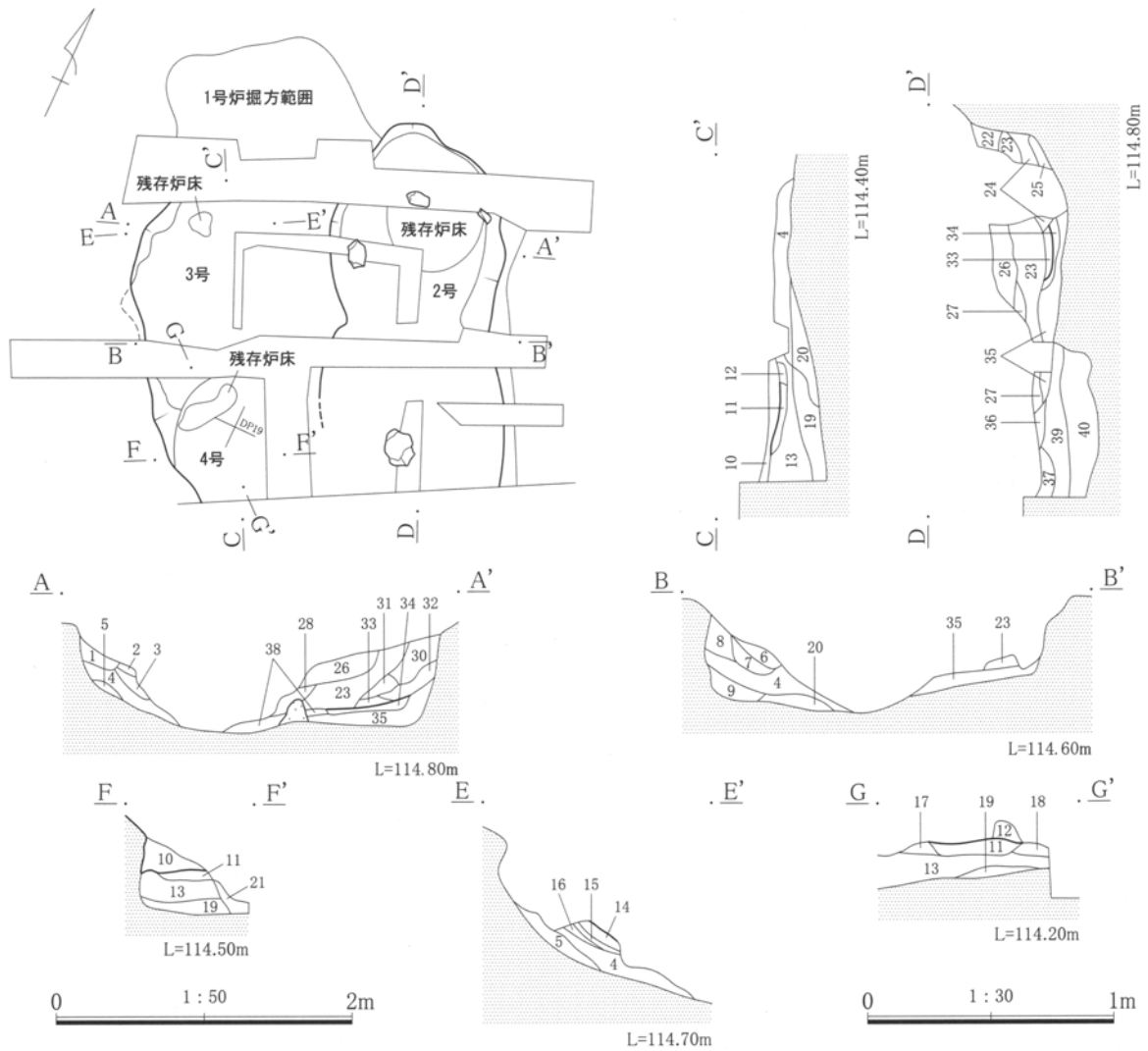
L=114.70m

0 1:30 1m

第18図 見切塚 5区1号竪形炉炉体

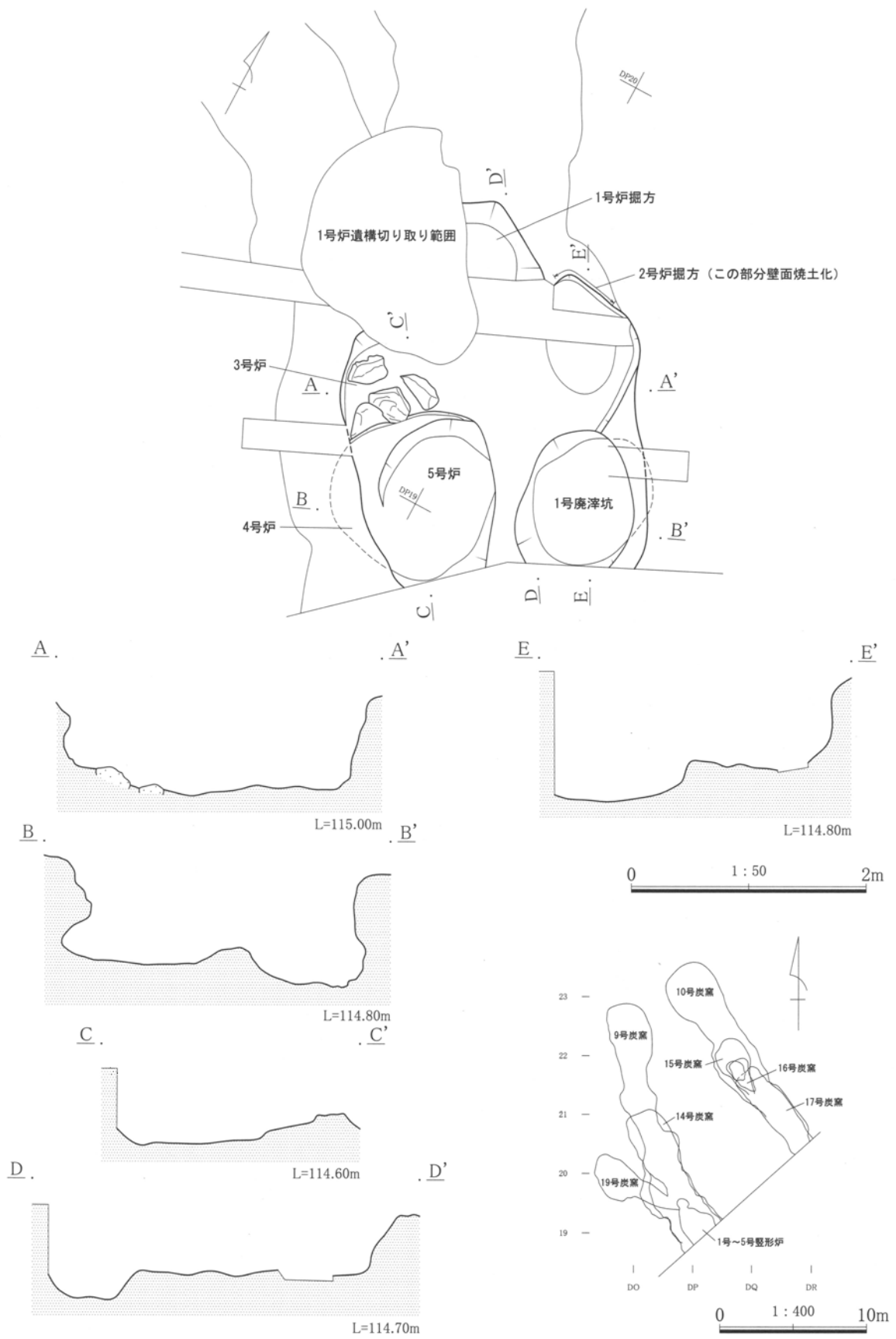
5区1号竪形炉炉体

1. 橙色焼土層 (5YR6/6) 炉壁、スサ含む。
2. 籍褐色焼土層 (5YR4/6) 炉壁、スサ含む。
3. 暗赤褐色土層 (5YR5/6) 炉壁粘土含む。
4. 3層に似る。スサを含む炉壁粘土主体。
5. 鈍黄褐色土層 (10YR4/5) 赤褐色や橙色焼土粒「中」30%含む。
6. 鈍赤褐色土層 (5YR4/4) 焼土塊含む。
7. 暗灰黄色土層 (2.5Y5/2) 焼土粒「小」5%含む。スサ含む。
8. 橙色土層 (5YT7/6) スサを含む炉壁粘土。
9. 橙色土層 スサ含む。
10. 暗緑灰色土層 (10G3/1) 還元した炉壁層。
11. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 炉壁。
12. 青黒色土層 (5B2/1) 炉底面。
13. 暗褐色土層 (5YR3/4) 炉壁焼土主体。木炭片5%含む。
14. 13層に似るが、極暗褐色焼土含み、鉄滓20%含む。
15. 褐色砂質土層 (7.5YR4/4) 焼土粒「中」30%含む。
16. 褐色粘質土層 (7.5YR4/3) 焼土粒「小」5%含む。
17. 橙色土層 焼土粒「小」10%含む。
18. 橙色土層 焼土粒「小」20%含む。
19. 地山

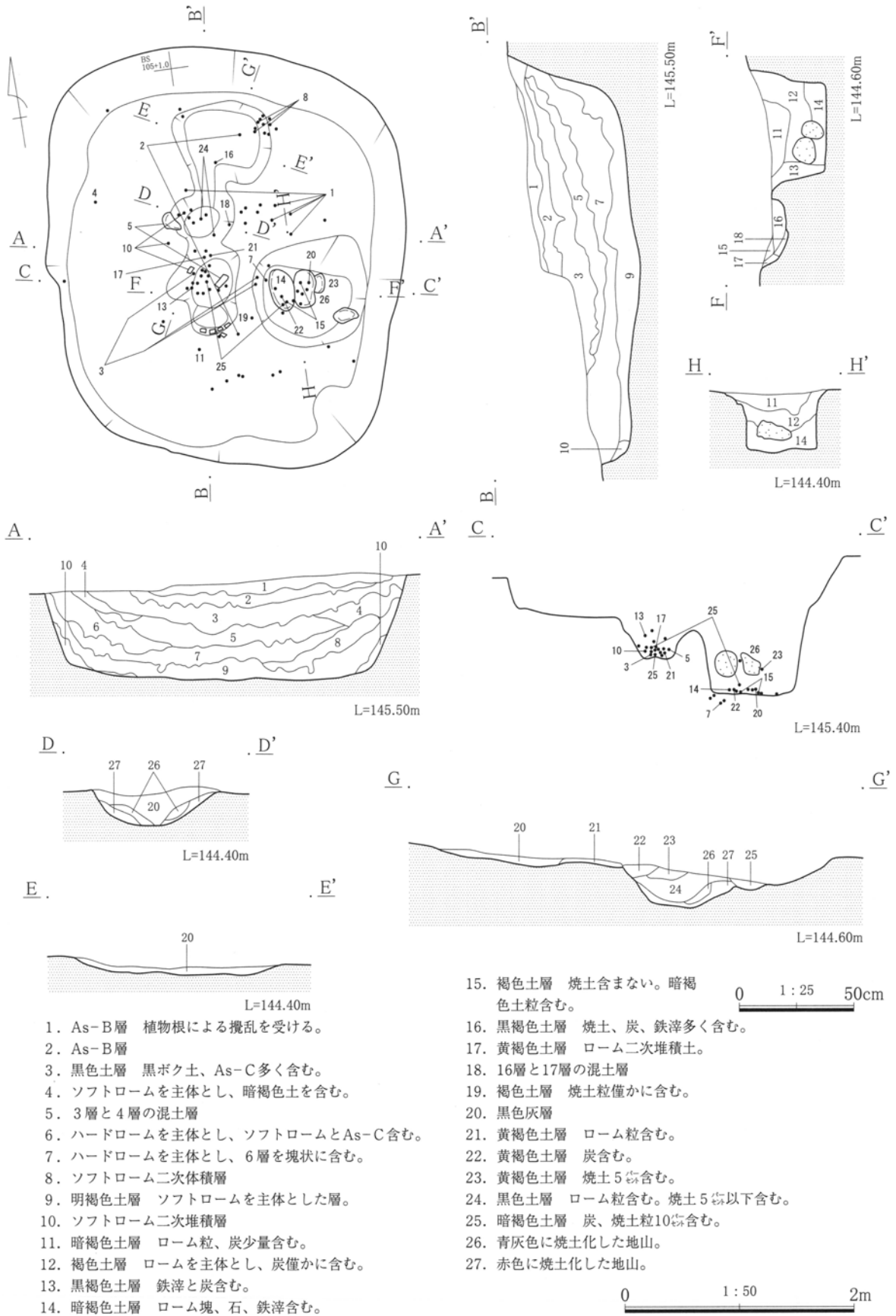


1. 黒褐色土層 (10YR2/2) 焼土粒僅かに含む。
2. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR5/3) 鉄滓含む。
3. 極暗褐色焼土層 (7.5YR2/3) 暗青褐色焼土粒「小」20粒含む。
4. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 焼土粒含む。部分的に鈍黄褐色粘質土塊含む。3号炉炉床層。
5. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 砂鉄多く含む。
6. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 暗青褐色焼土粒「小」30粒含む。
7. 炉壁片、鉄滓、暗青灰色焼土の混土層
8. 暗赤褐色焼土層 炉壁、鉄滓少量含む。
9. 暗褐色粘質土層 (10YR3/4) 焼土、木炭片殆ど含まない。
10. 黒褐色焼土層 (5YR2/2) 赤褐色焼土粒「小」20粒含む。木炭片5粒含む。
11. 暗青灰色焼土層 (5B4/1) ガサガサし、脆い。4号炉炉底。
12. 灰褐色粘質土層 (7.5YR4/2) 鈍黄褐色土粒「小」5粒含む。
13. 鈍赤褐色焼土層 (5YR4/4) 炉壁片10粒含む。
14. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR5/3) 明黄褐色土粒20粒含む。3号炉炉体の一部。表面は暗青灰色。
15. 暗青灰色焼土層 (5B4/1) 3号炉炉底。
16. 極暗褐色焼土層 (7.5YR2/3) 砂鉄10粒含む。
17. 暗赤褐色焼土層 (5YR3/3) 黒褐色土10粒含む。
18. 暗赤褐色焼土層 (5YR3/3) 黒褐色土5粒含む。
19. 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土粒、木炭片殆ど含まない。4号炉基礎の貼り床層。
20. 暗赤褐色焼土層 (5YR3/3) 粒状をなす。暗灰色焼土粒20粒含む。
21. 黒褐色土層 (2.5YR3/2) 焼土粒、木炭片10粒含む。
22. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 炉壁塊、木炭片5粒含む。
23. 極暗褐色土層 (7.5YR2/3) 鉄滓30粒含む。
24. 橙色焼土粒と青灰色焼土粒の混土層 木炭片5粒含む。
25. 24層に似るが、暗青灰色焼土塊含む。
26. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR4/3) 焼土粒「中」20粒含む。
27. 暗赤褐色焼土層 (5YR3/2) 赤褐色、橙色焼土粒20粒含む。
28. 暗褐色土層 (7.5YR3/2) 焼土粒30粒含む。
29. 28層に似るが、木炭片5粒ほど含む。鉄滓含む。
30. 極暗褐色焼土層 (5YR2/3) 木炭片10粒含む。鉄滓10粒含む。
31. 極暗褐色焼土層 (7.5YR2/3) 赤褐色焼土10粒含む。
32. 黒色土層 (10YR2/5) 焼土殆ど含まない。
33. 黒褐色焼土層 (5YR2/2) 暗青灰色焼土を層状に含む。
34. 極暗褐色焼土層 (5YR2/4) 暗青灰色焼土粒30粒含む。2号炉炉床。
35. 黒褐色焼土層 (5YR2/2) 木炭片5粒含む。2号炉床基礎層か。
36. 黒褐色土層 (10YR3/2) 焼土粒10粒含む。
37. 黒褐色土層 (10YR2/3) 僅かに焼土粒含む。2号炉作業床か。
38. 黒褐色焼土層 (7.5YR2/2) 木炭片10粒含む。
39. 赤褐色焼土層 (5YR4/6) 炉壁と鉄滓20粒含む。
40. 暗赤褐色焼土層 (5YR3/3) 壁材30粒含む。ガサガサの状態。

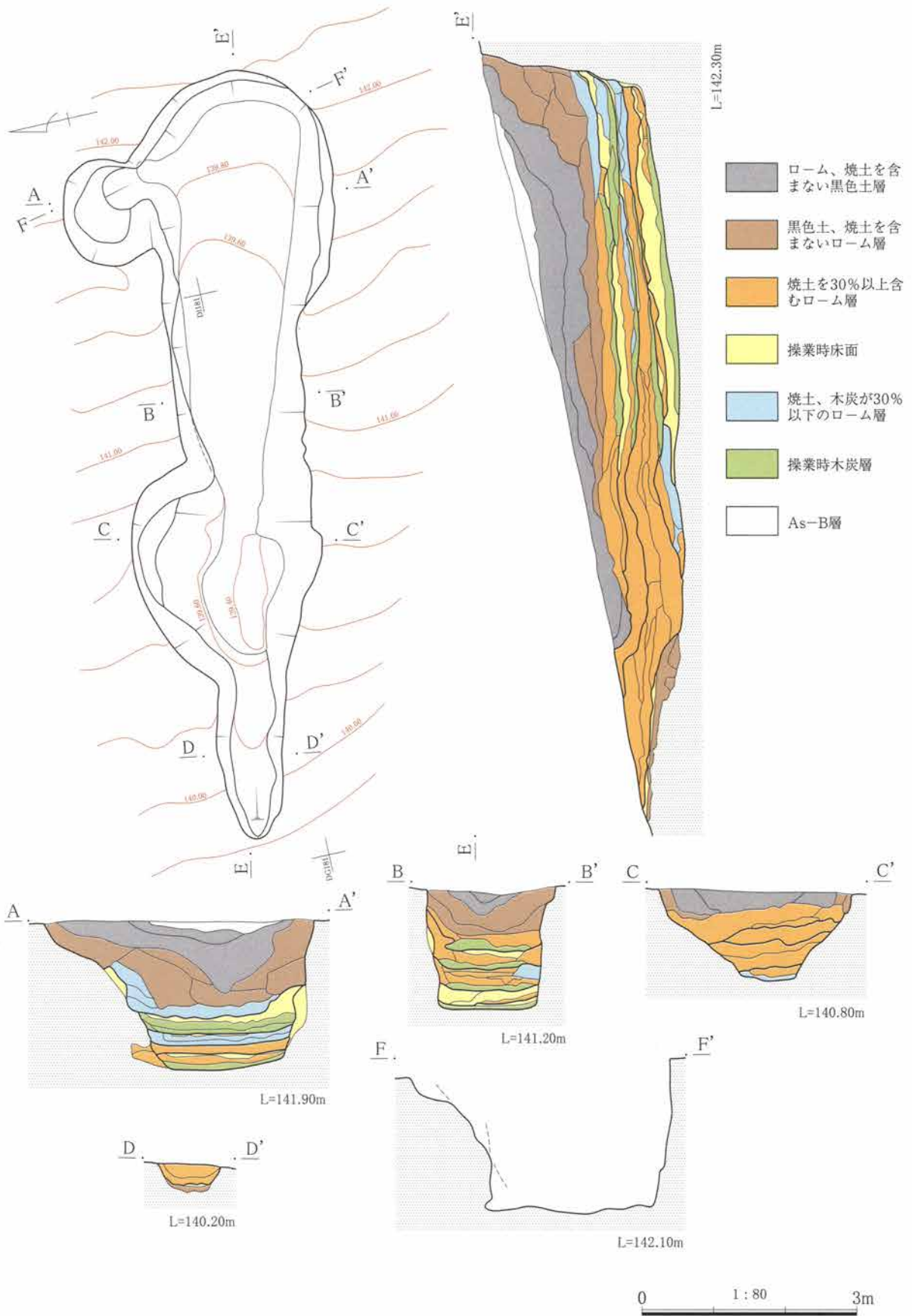
第19図 見切塚 5区2号～4号豎形炉



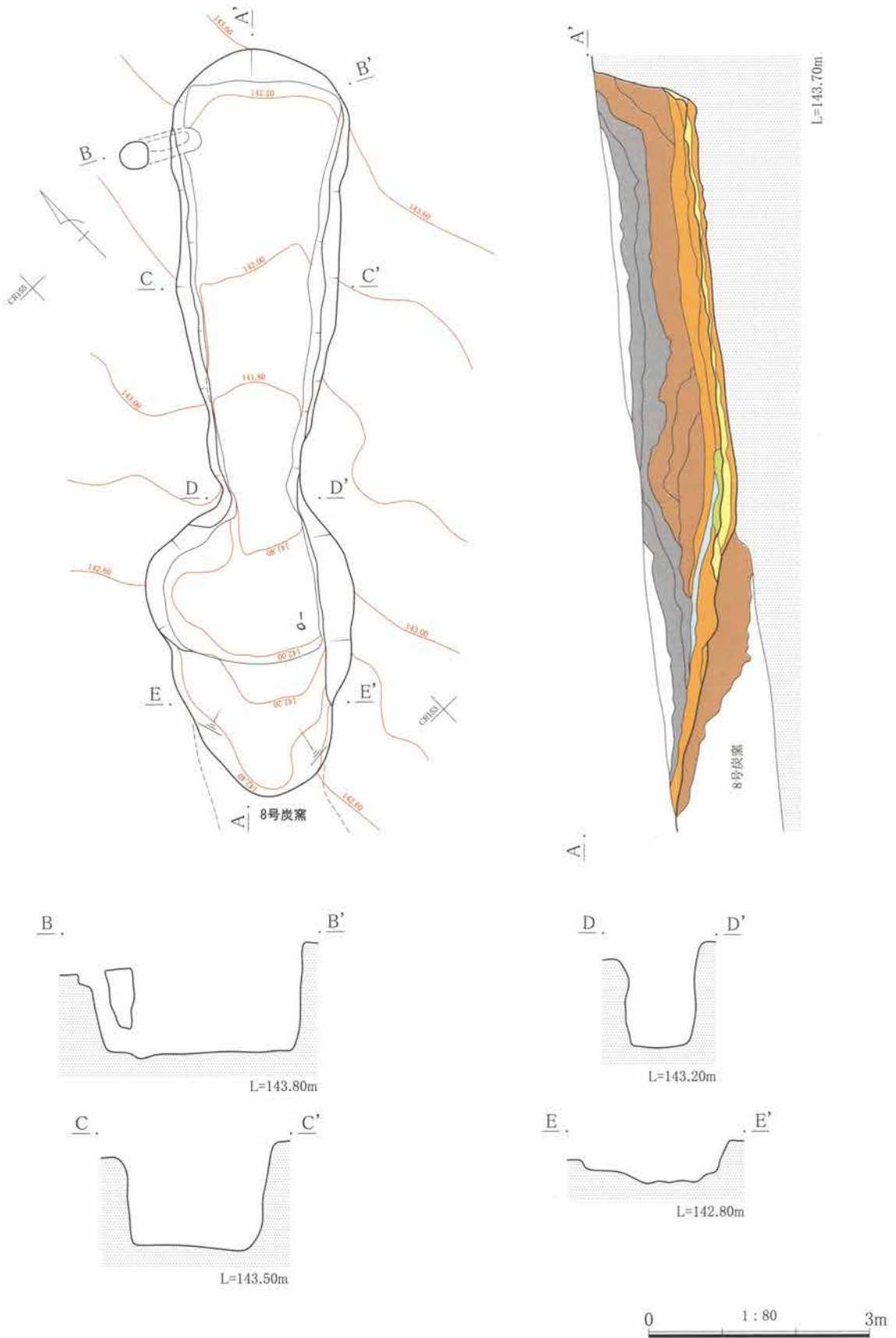
第20図 見切塚 5区2号~4号整形炉掘方、5号整形炉、1号廃滓坑



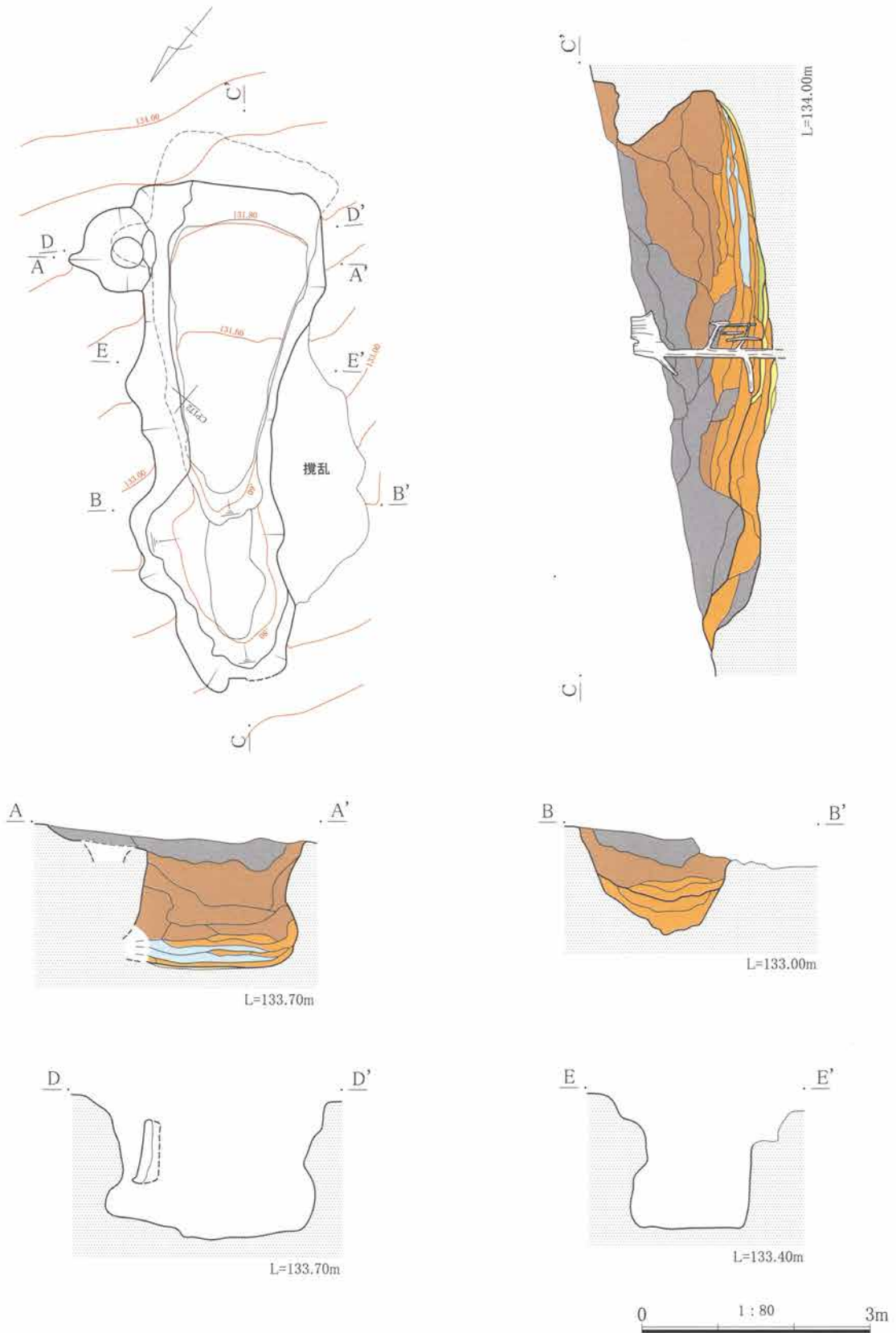
第21図 見切塚 1区1号鍛冶



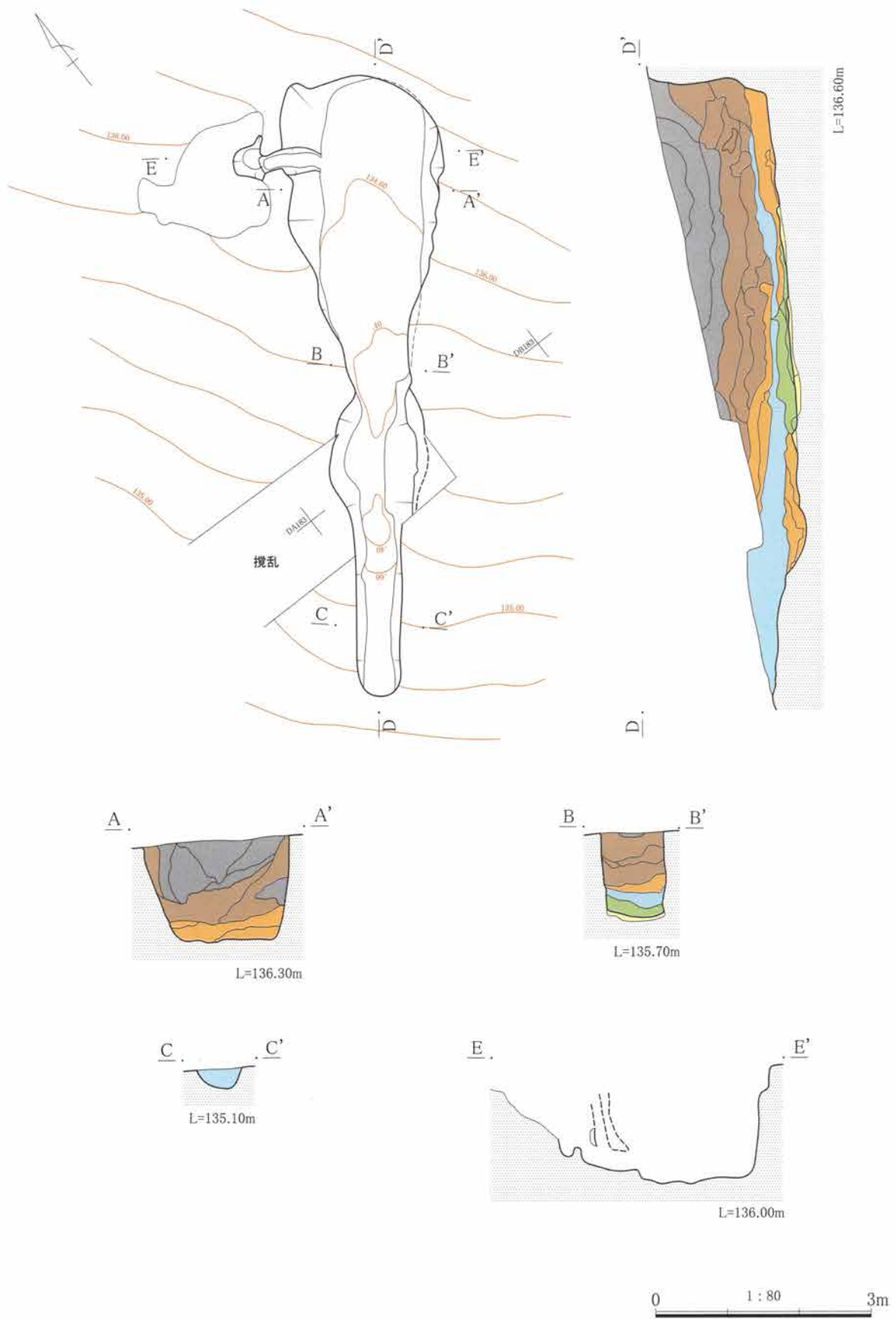
第22図 三騎堂 1区1号炭窯



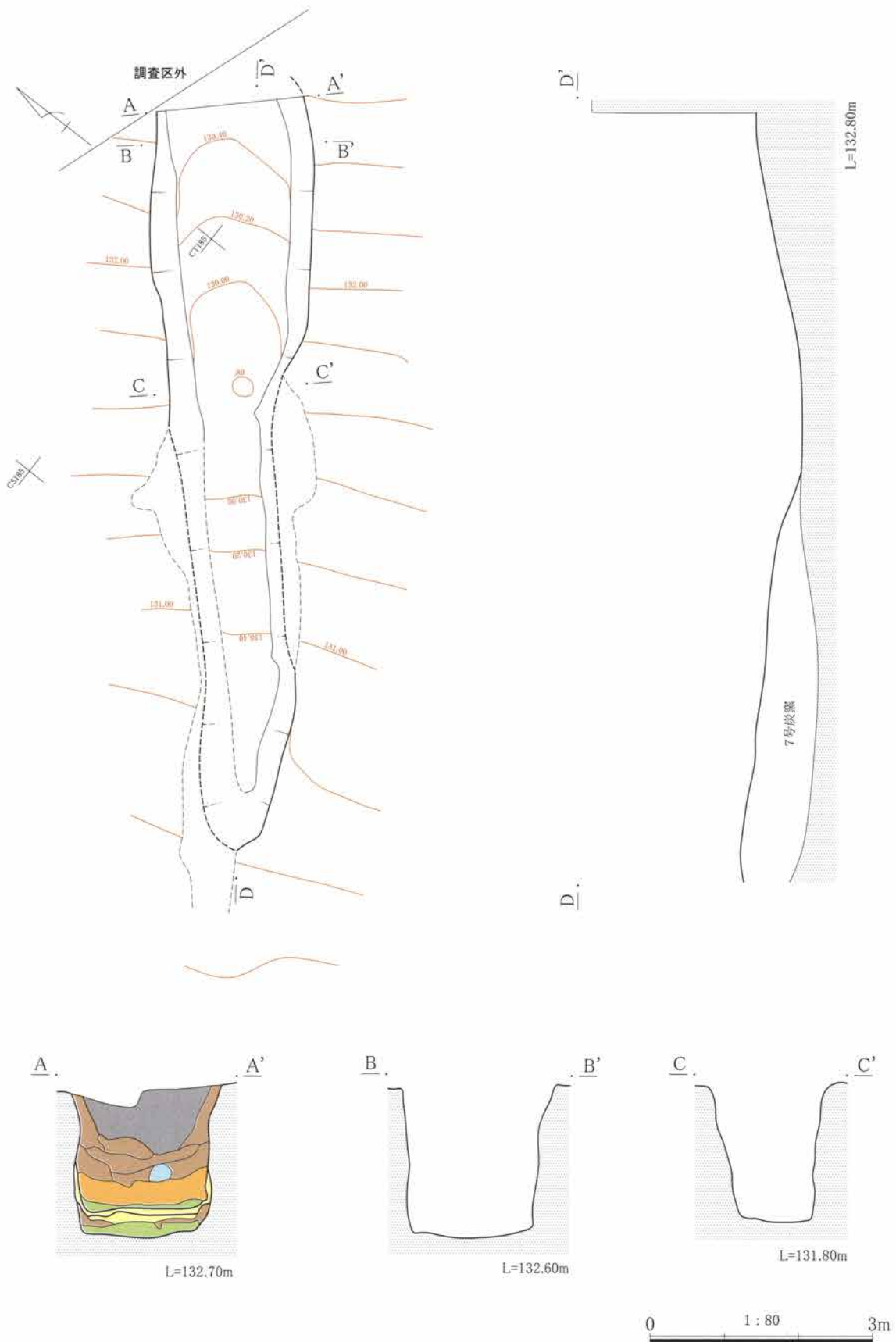
第23図 三騎堂 1区3号炭窯



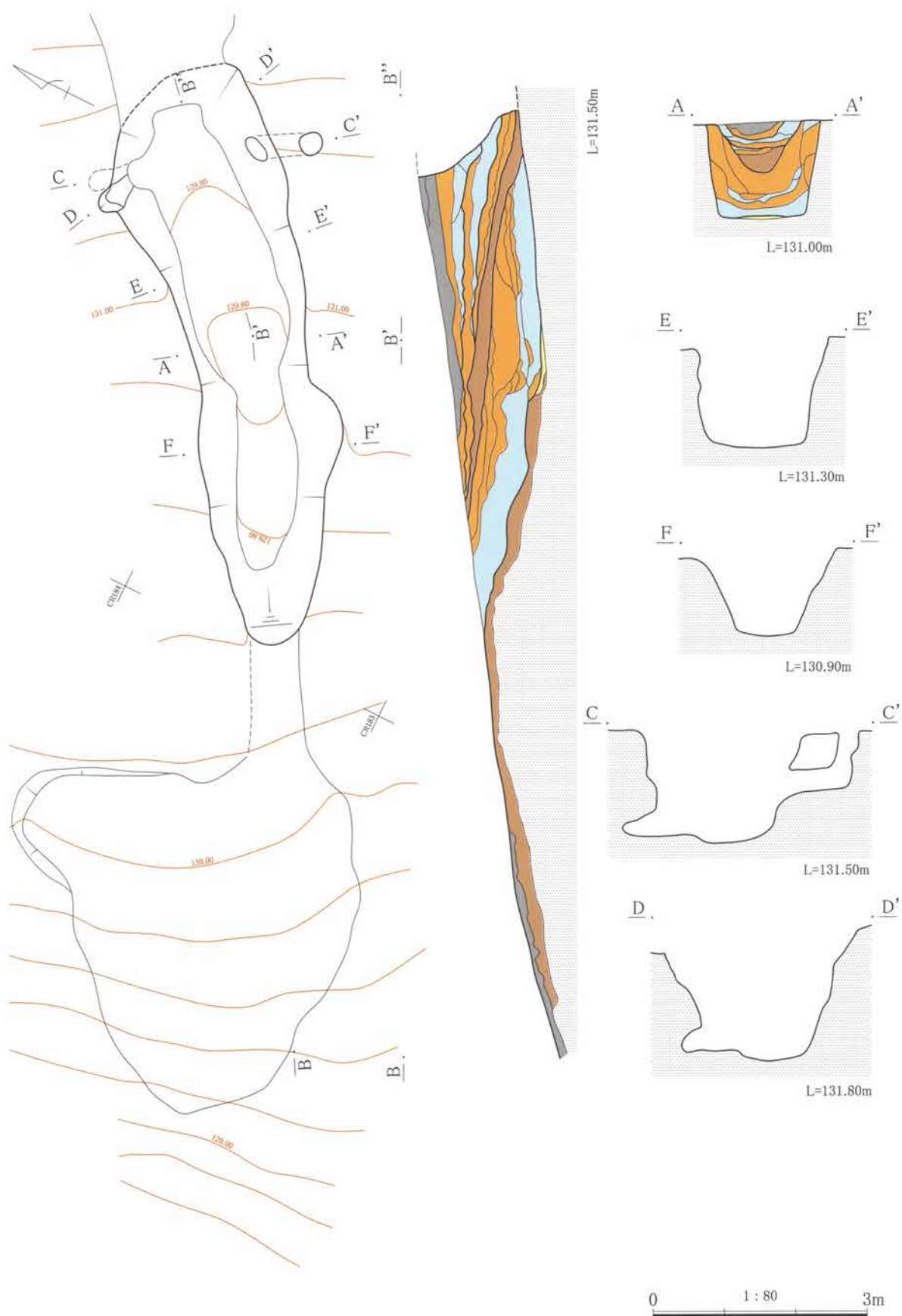
第24図 三騎堂 1区4号炭窯



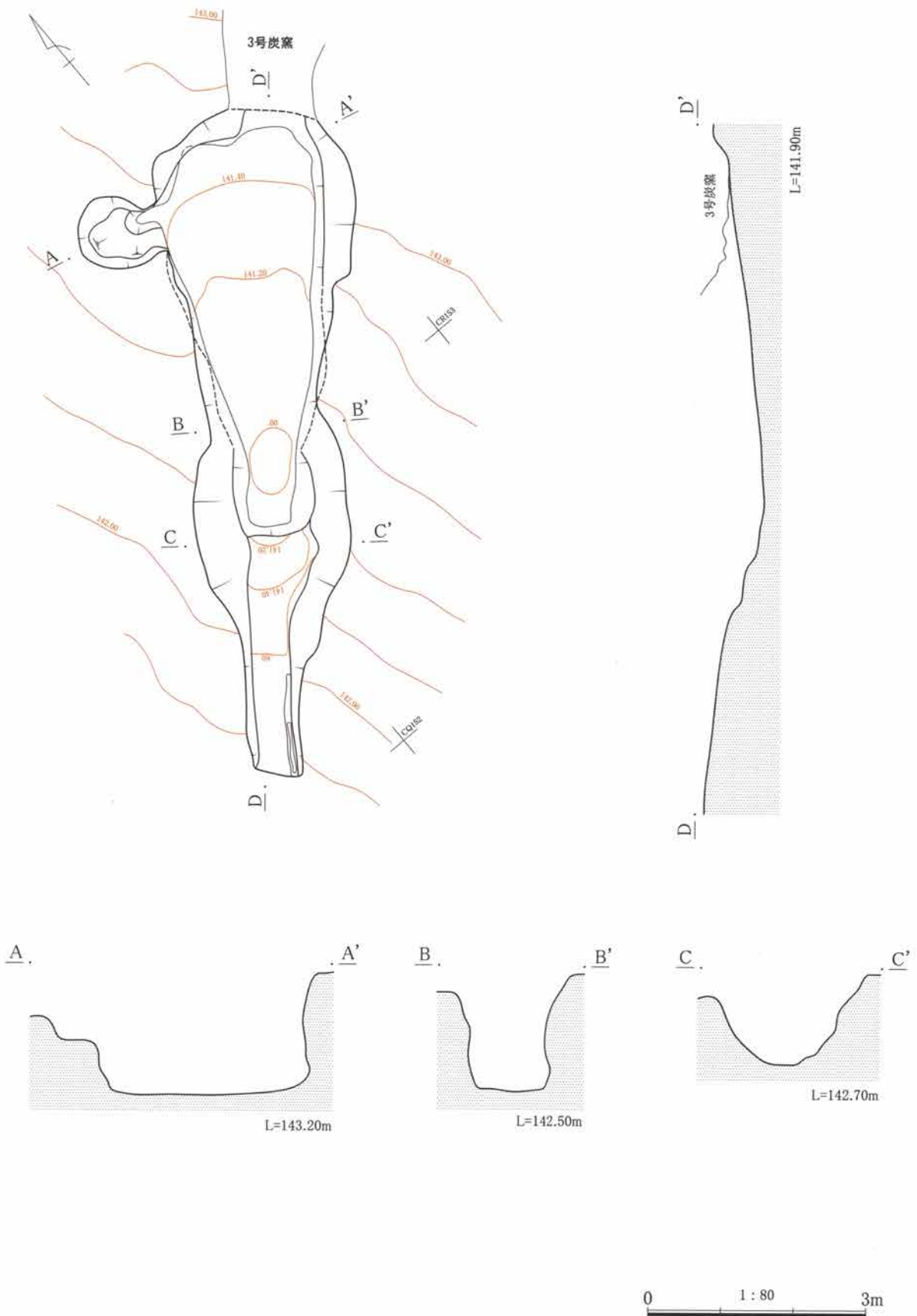
第25図 三騎堂 1区5号炭窯



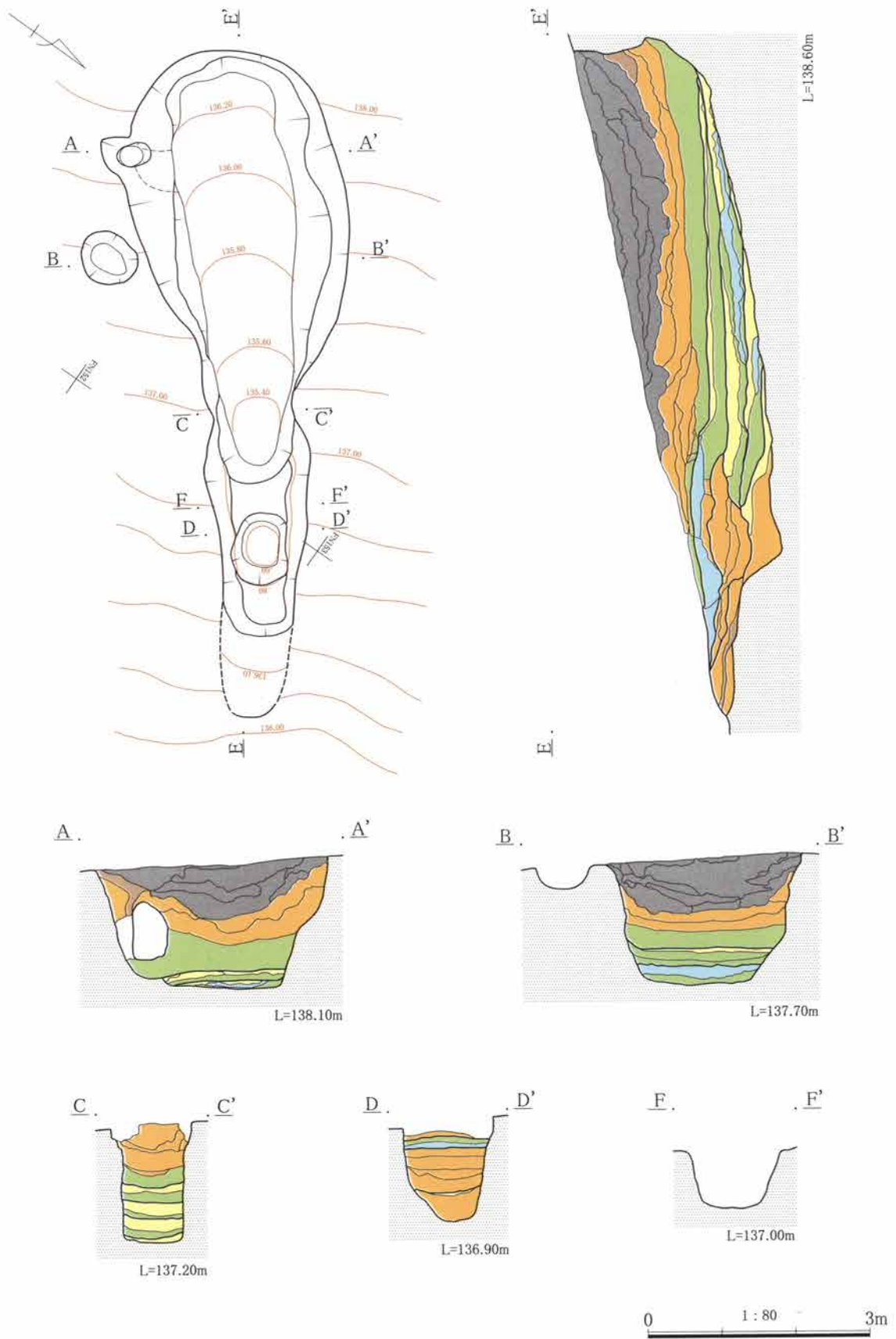
第26図 三騎堂 1区6号炭窯



第27図 三騎堂 1区7号炭窯

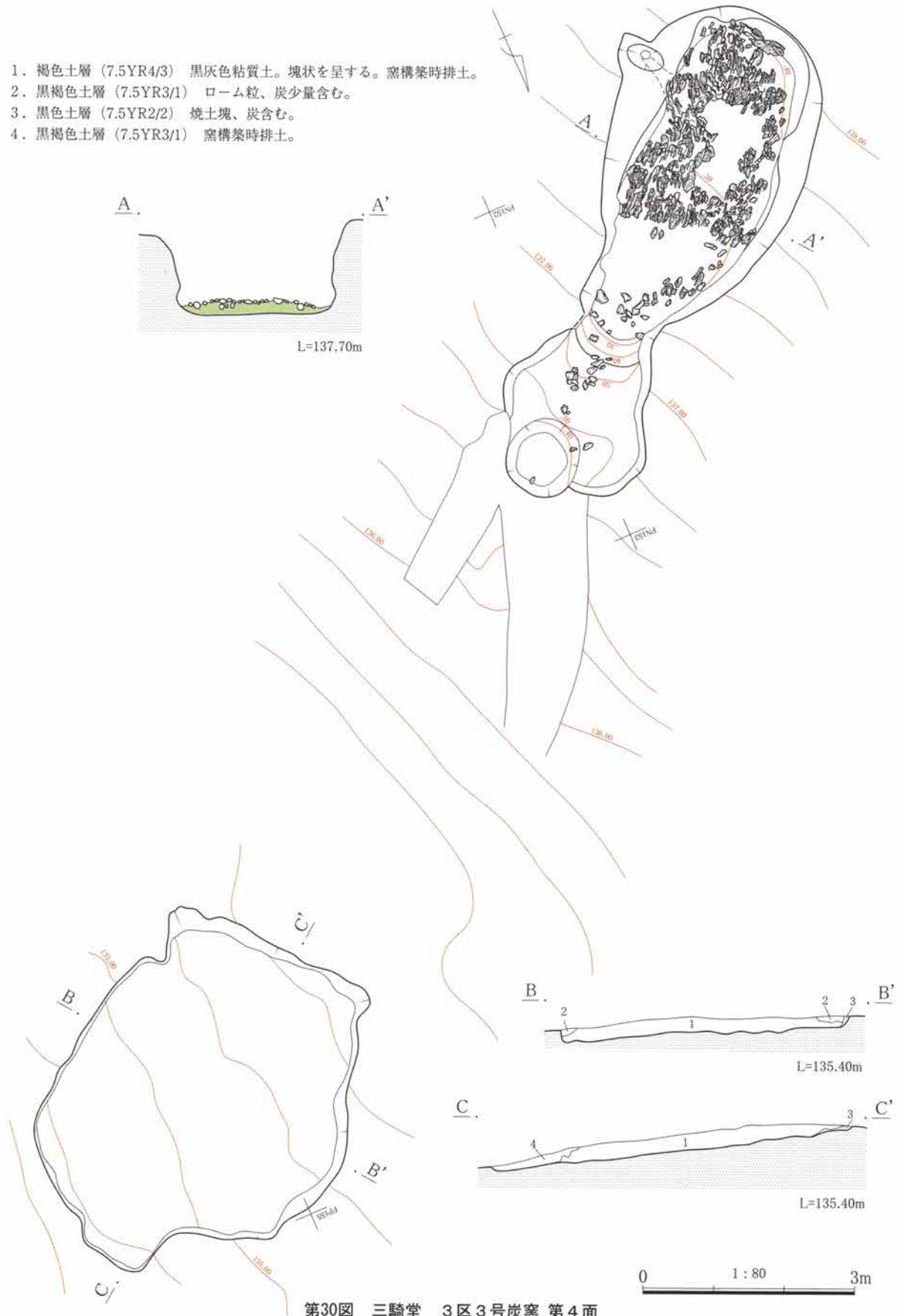


第28図 三騎堂 1区8号炭窯

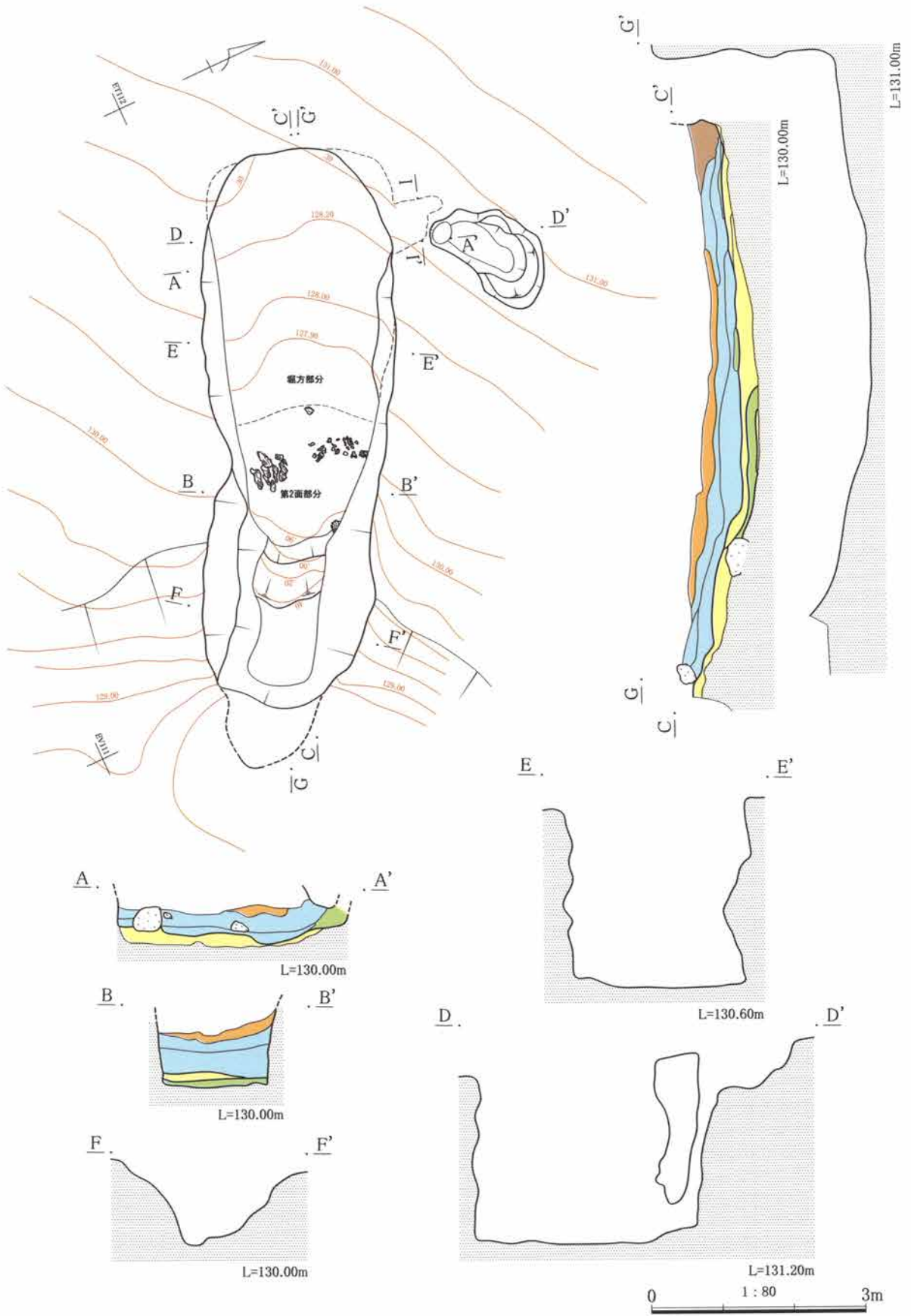


第29図 三騎堂 3区3号炭窯 第1面

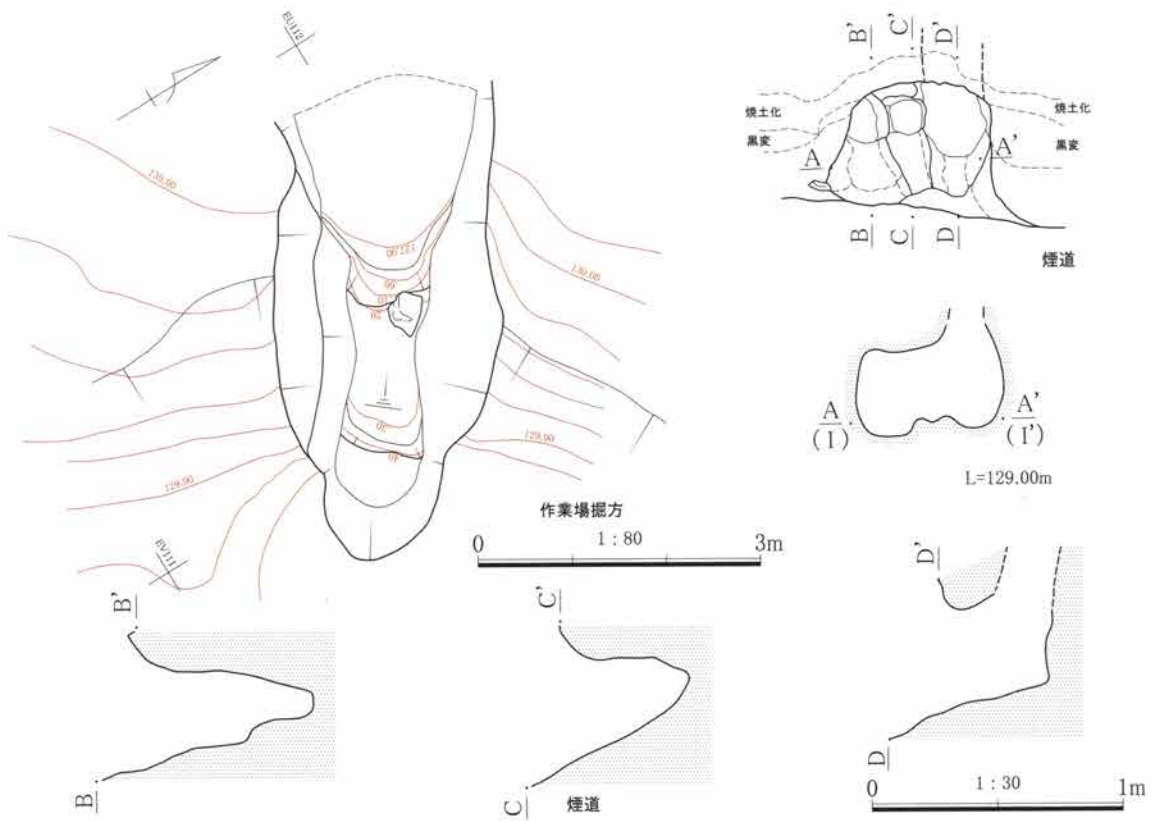
1. 褐色土層 (7.5YR4/3) 黒灰色粘質土。塊状を呈する。窯構築時排土。
2. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) ローム粒、炭少量含む。
3. 黒色土層 (7.5YR2/2) 焼土塊、炭含む。
4. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) 窯構築時排土。



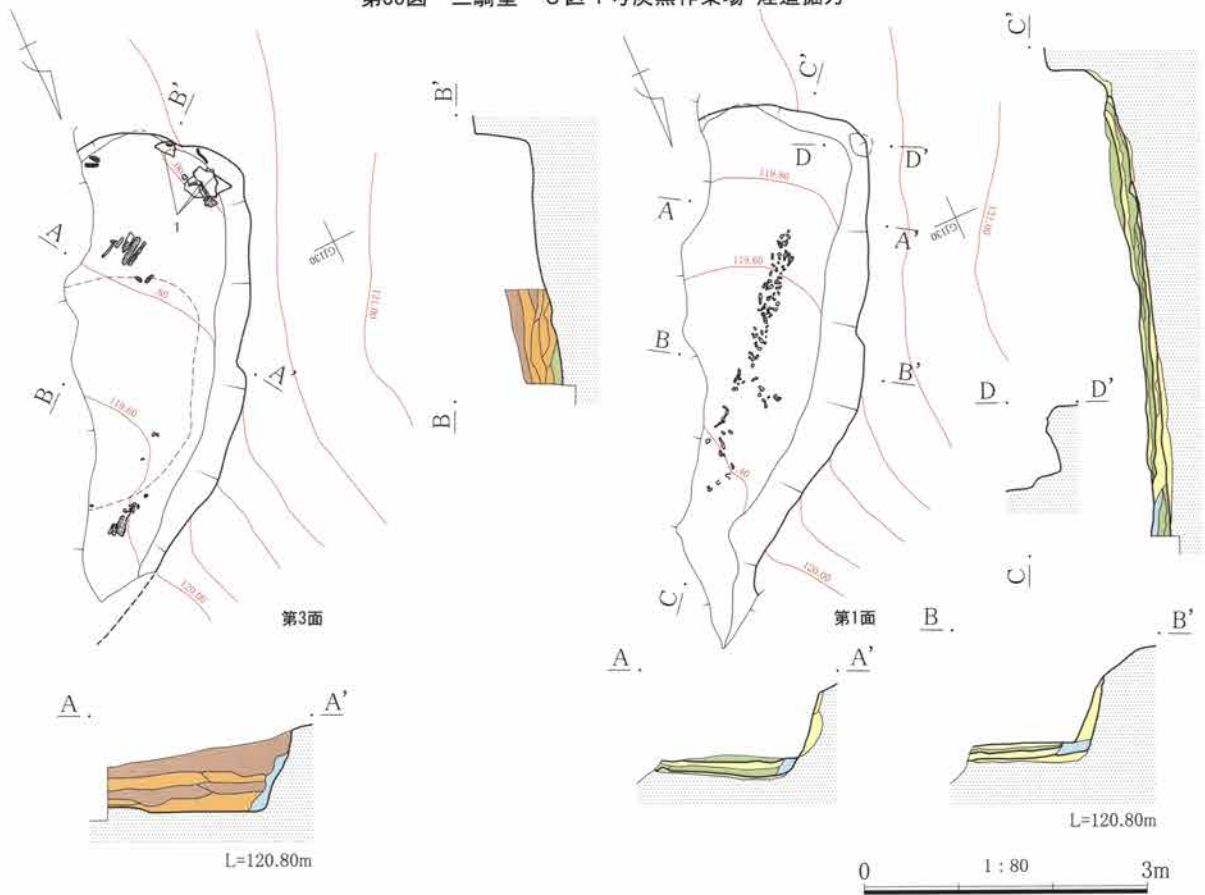
第30図 三騎堂 3区3号炭窯 第4面



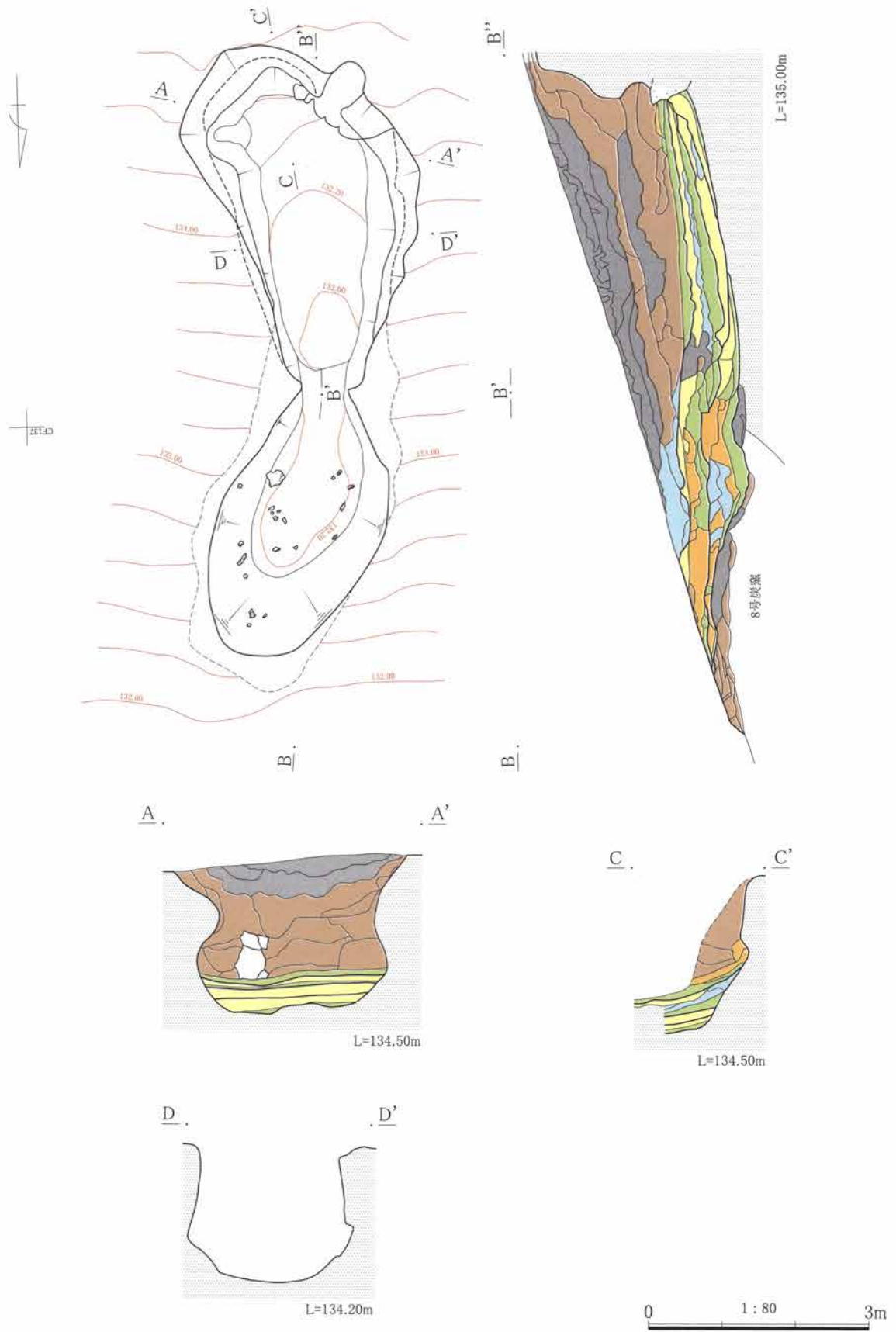
第31図 三騎堂 5区1号炭窯 第2面



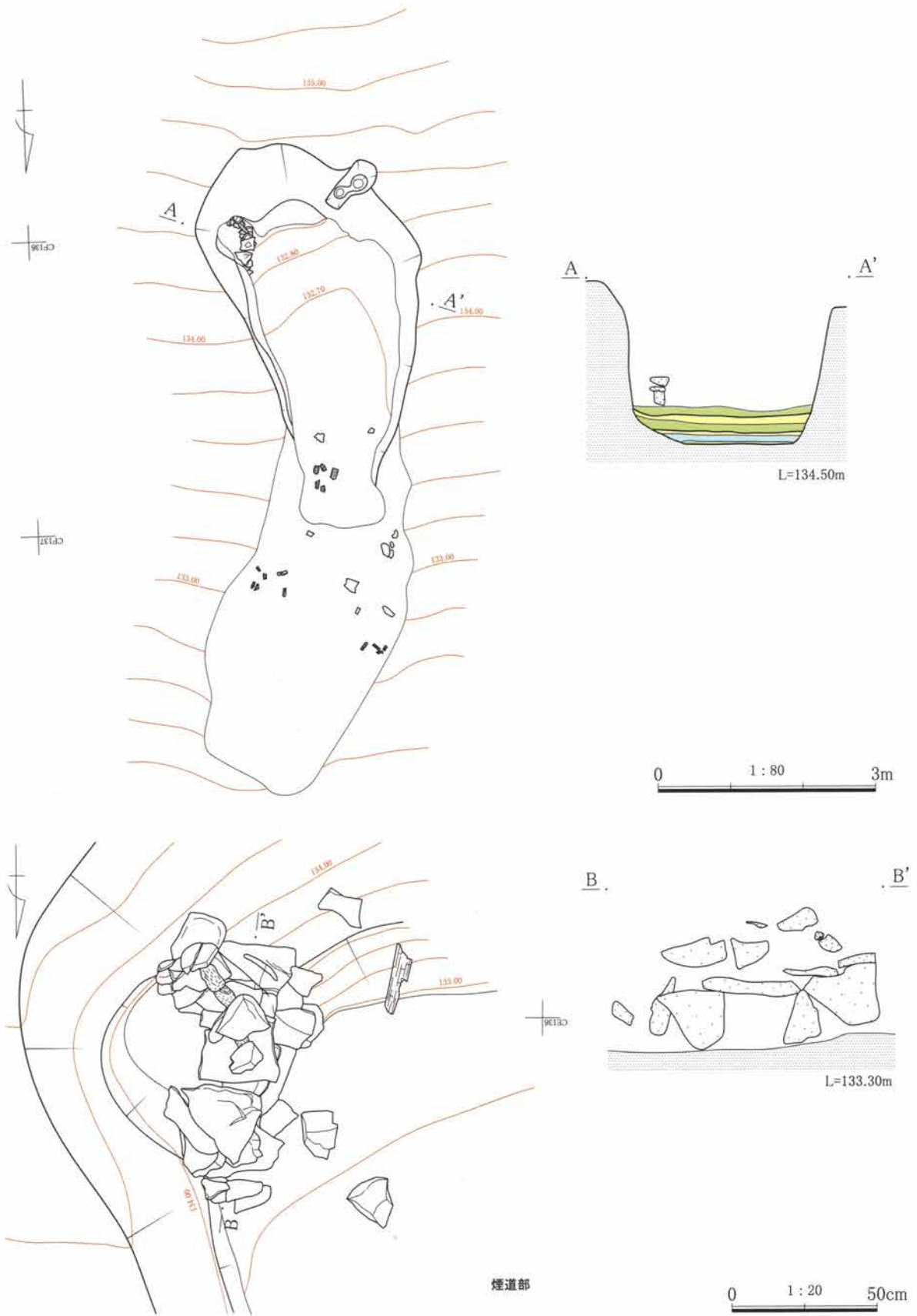
第33図 三騎堂 5区1号炭窯作業場・煙道掘方



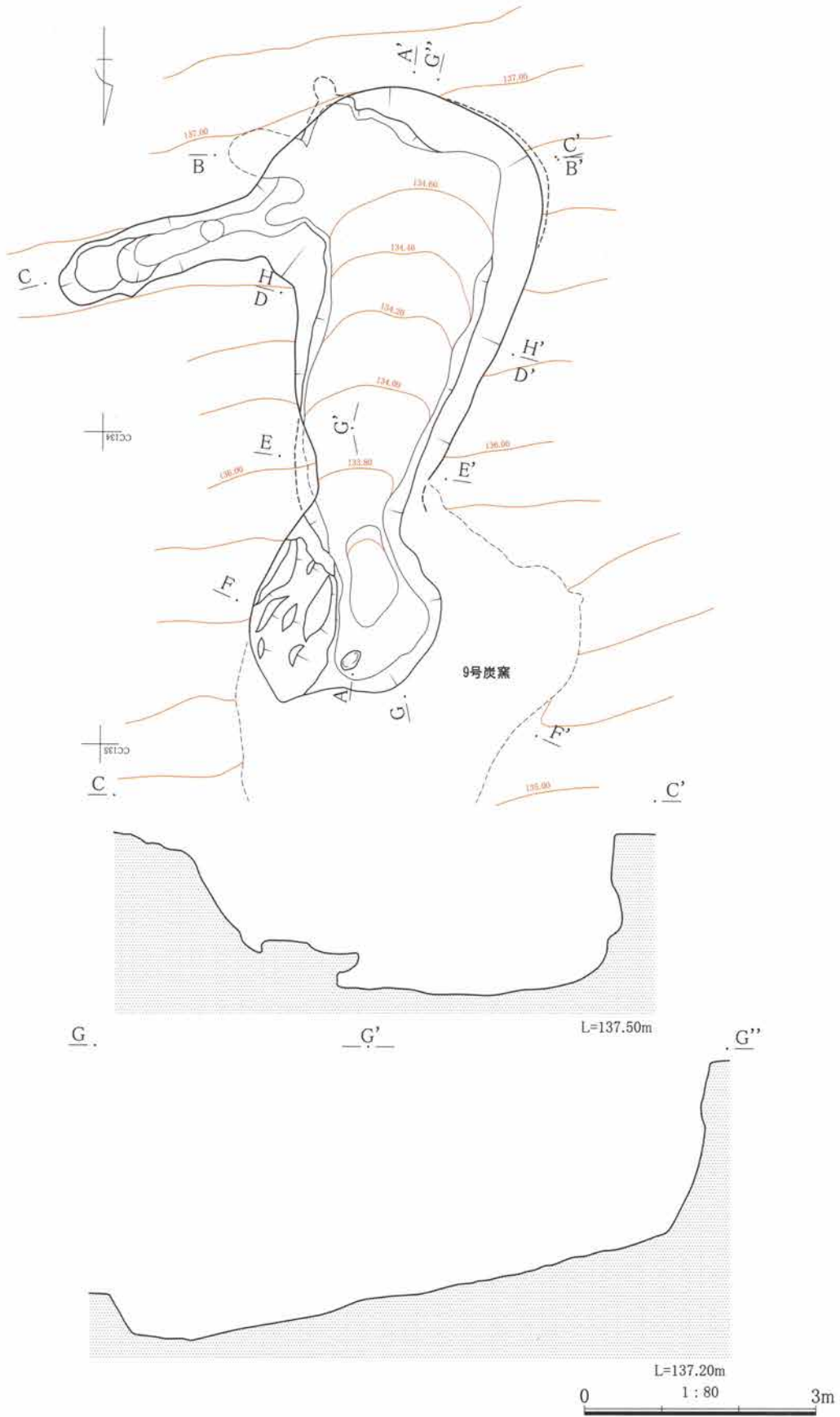
第34図 三騎堂 4区7号炭窯



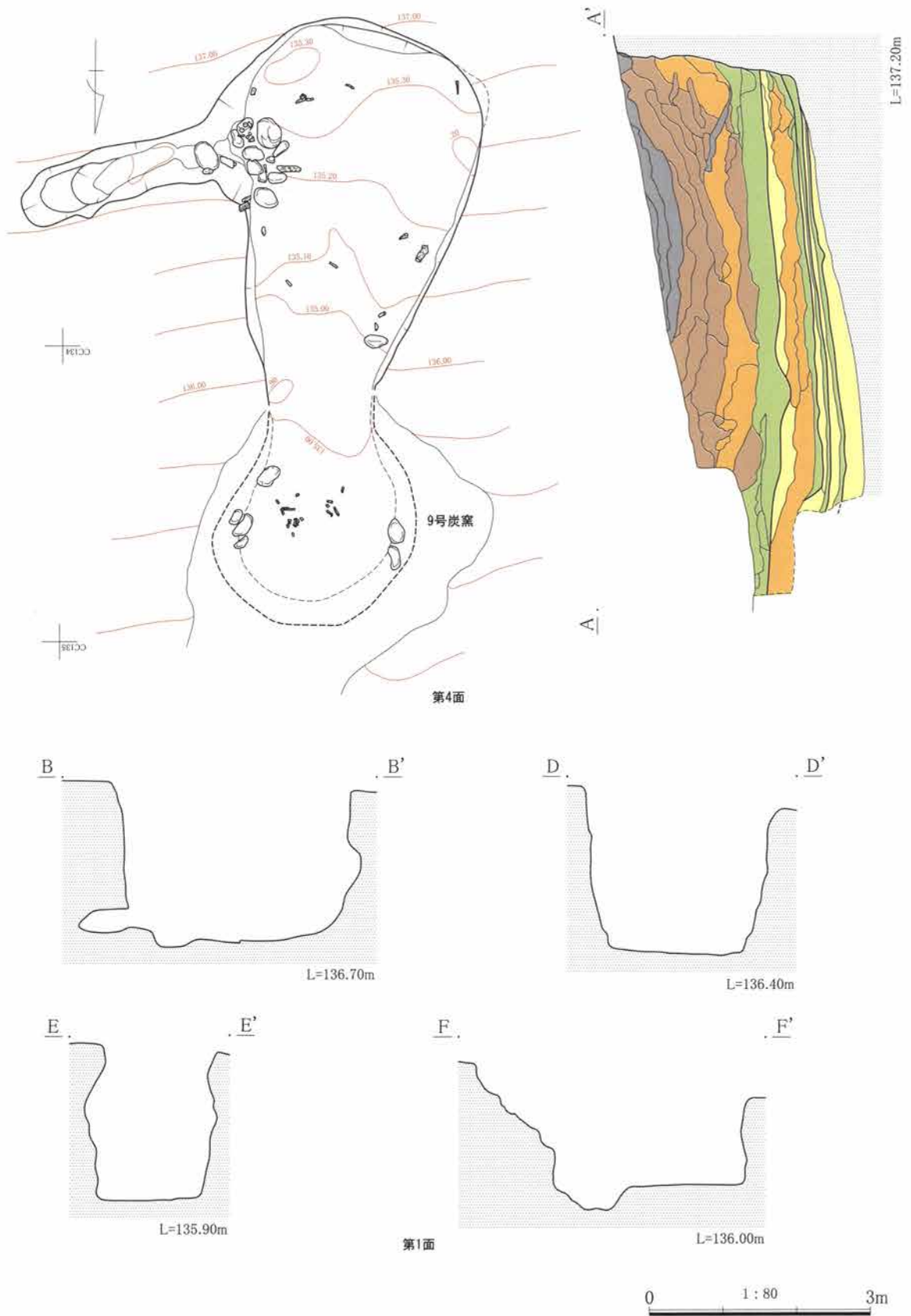
第35図 見切塚 1区3号炭窯 第1面



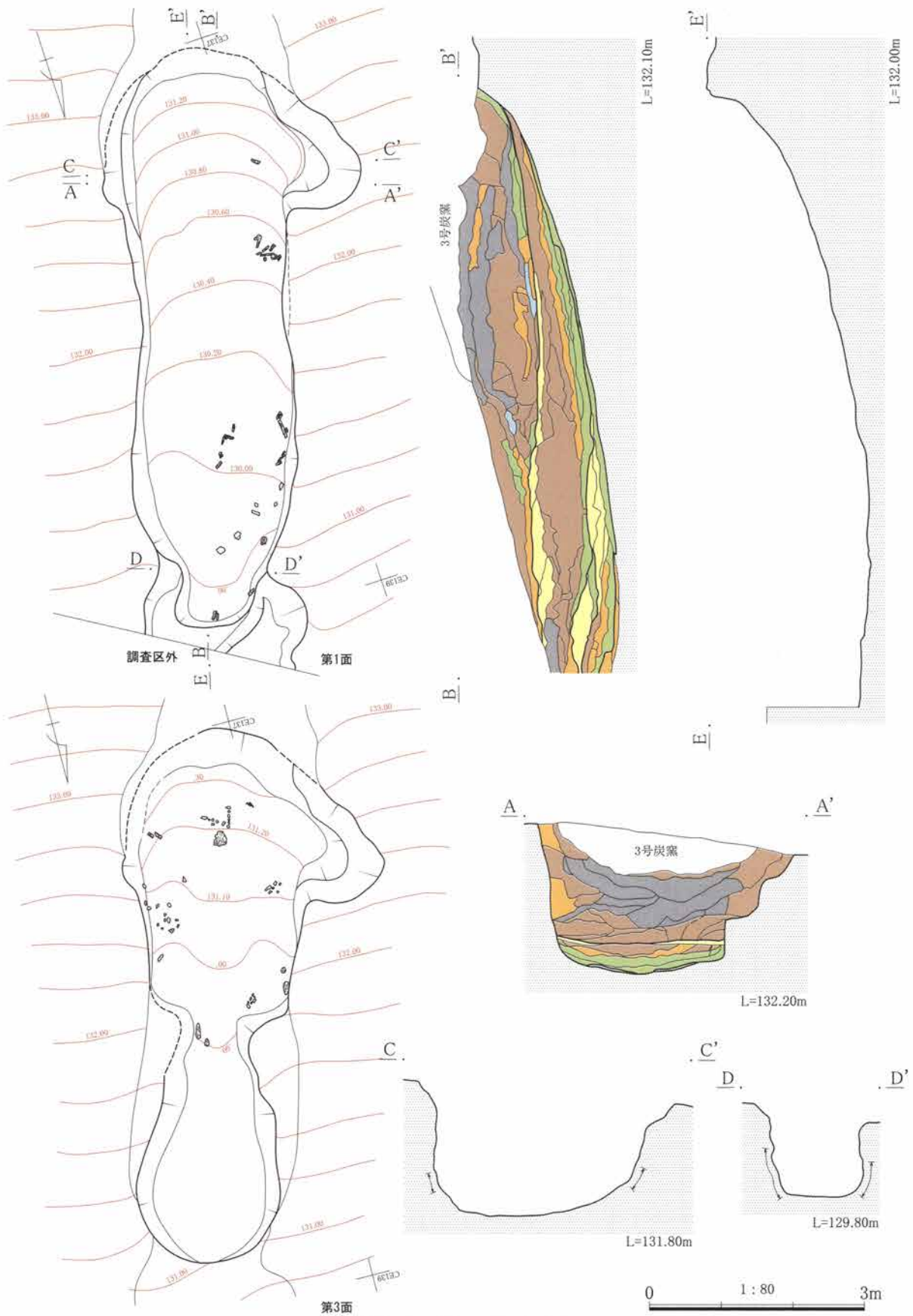
第36図 見切塚 1区3号炭窯 第4面



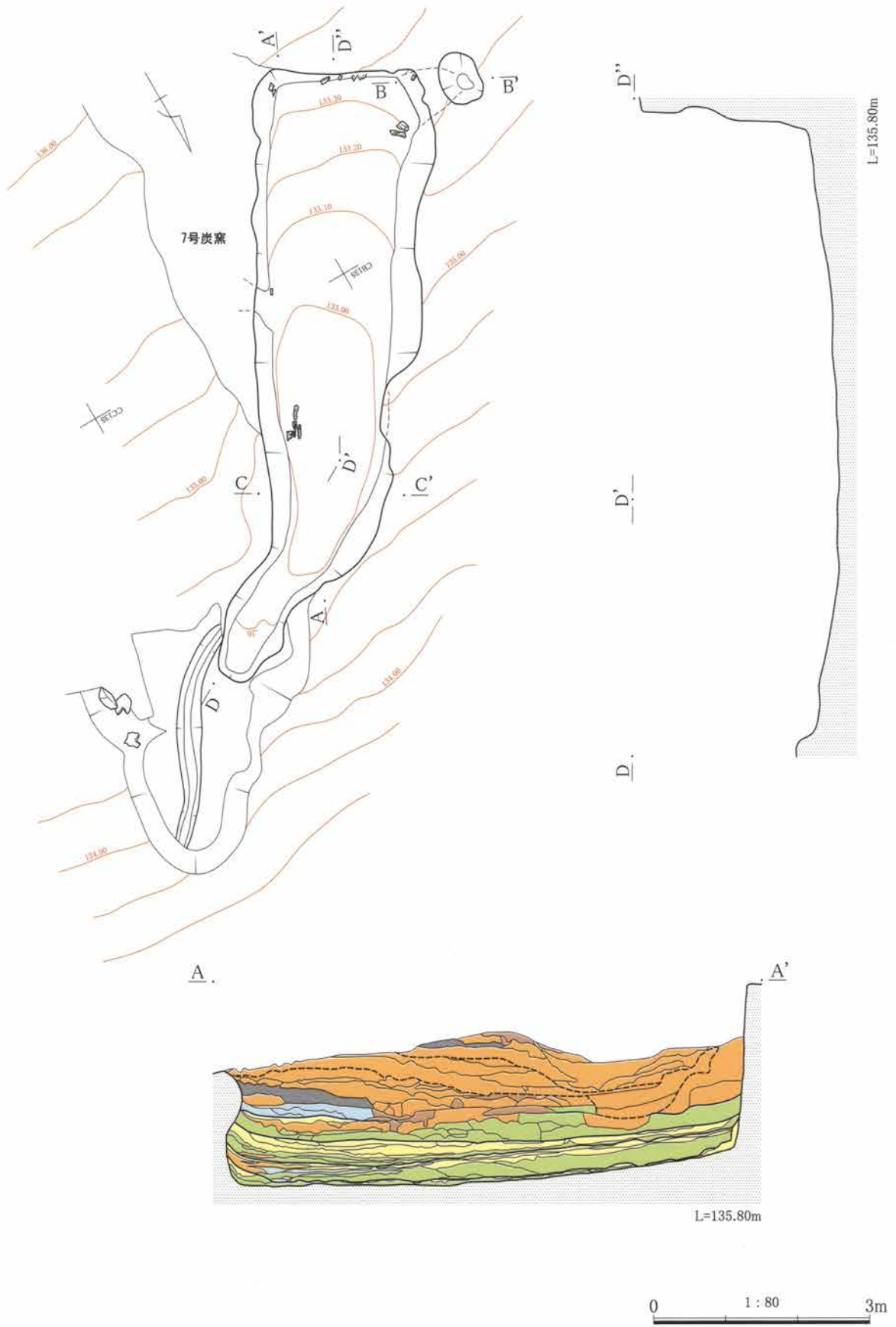
第37図 見切塚 1区7号炭窯 第1面



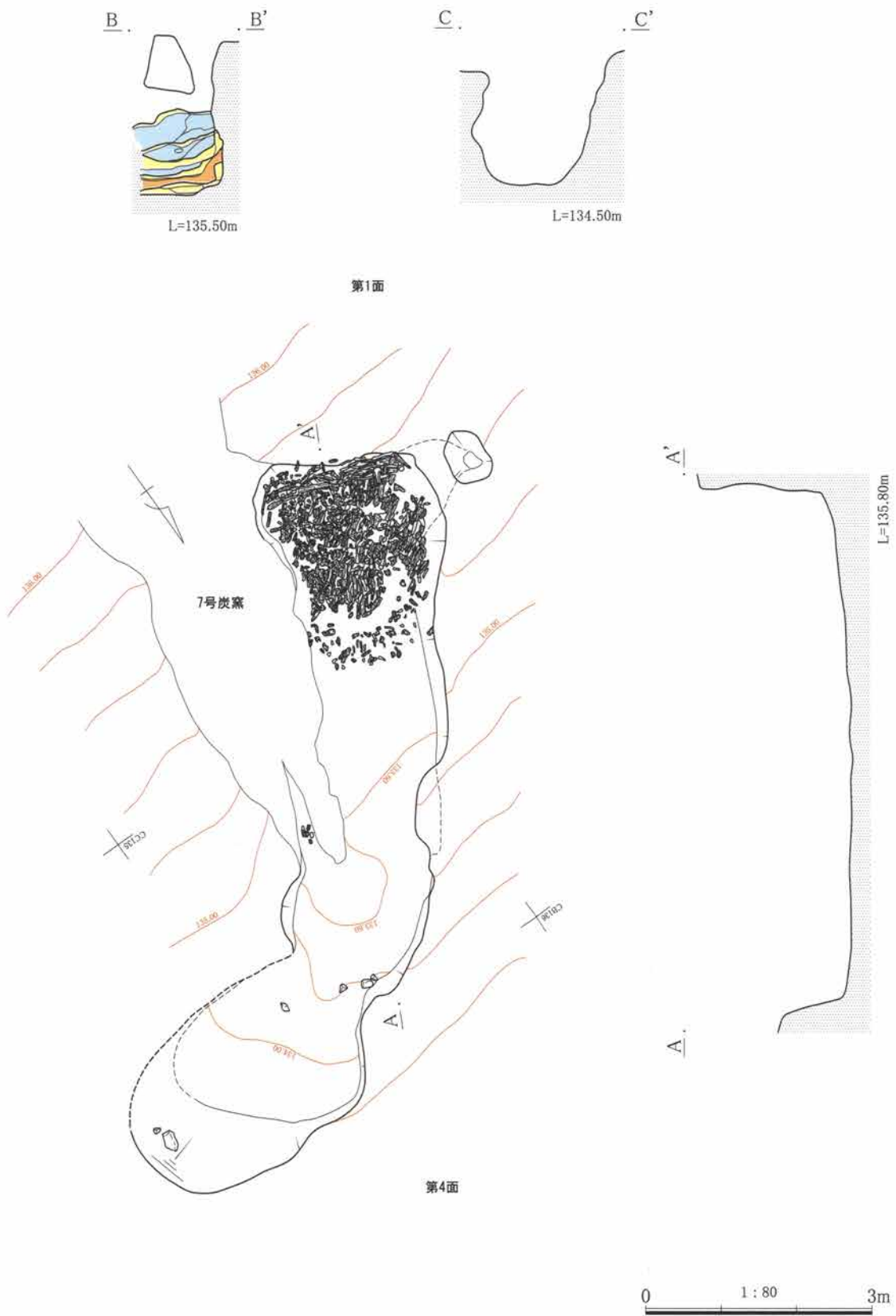
第38図 見切塚 1区7号炭窯 第1面(2)・第4面



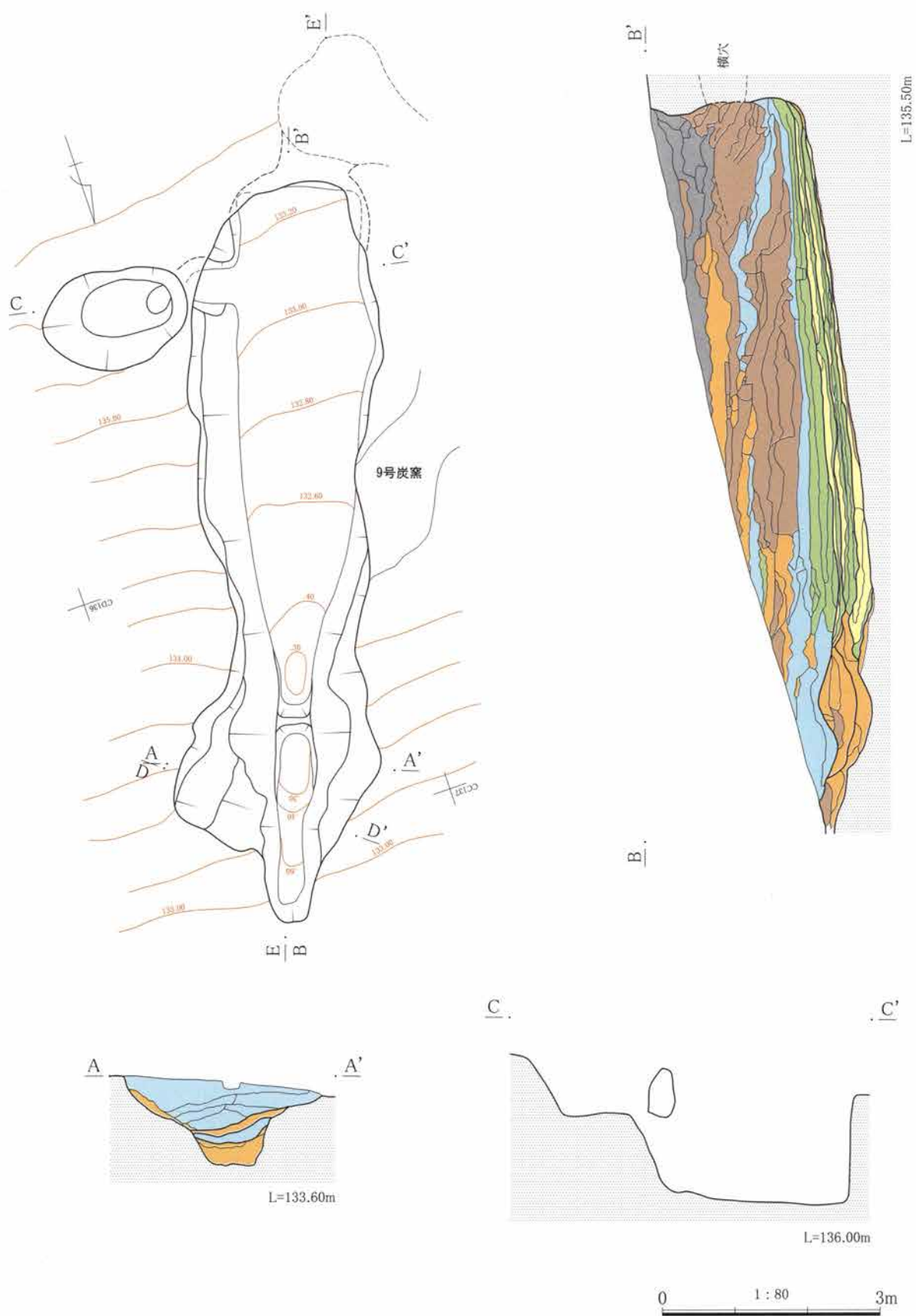
第39図 見切塚 1区8号炭窯



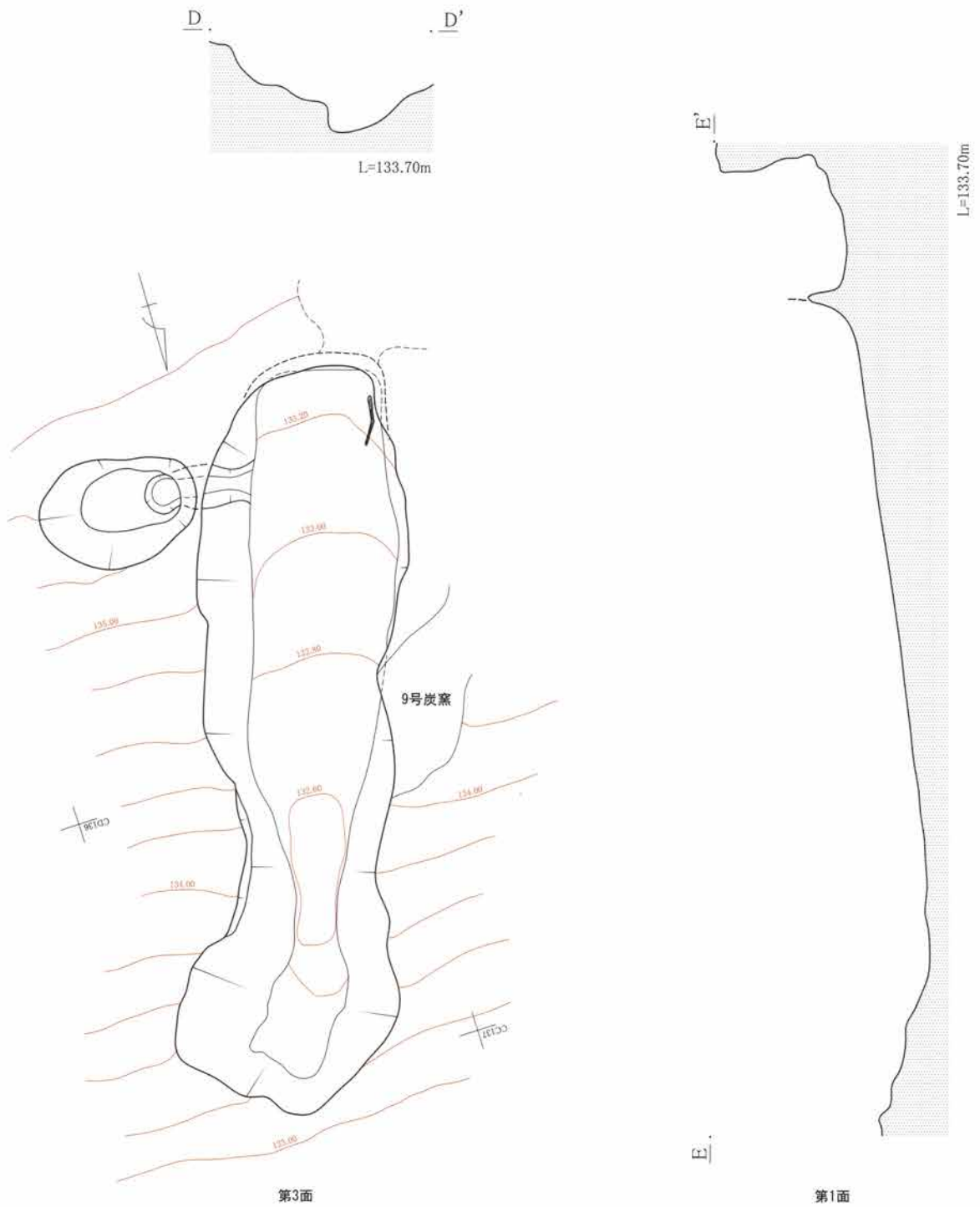
第40図 見切塚 1区9号炭窯 第1面



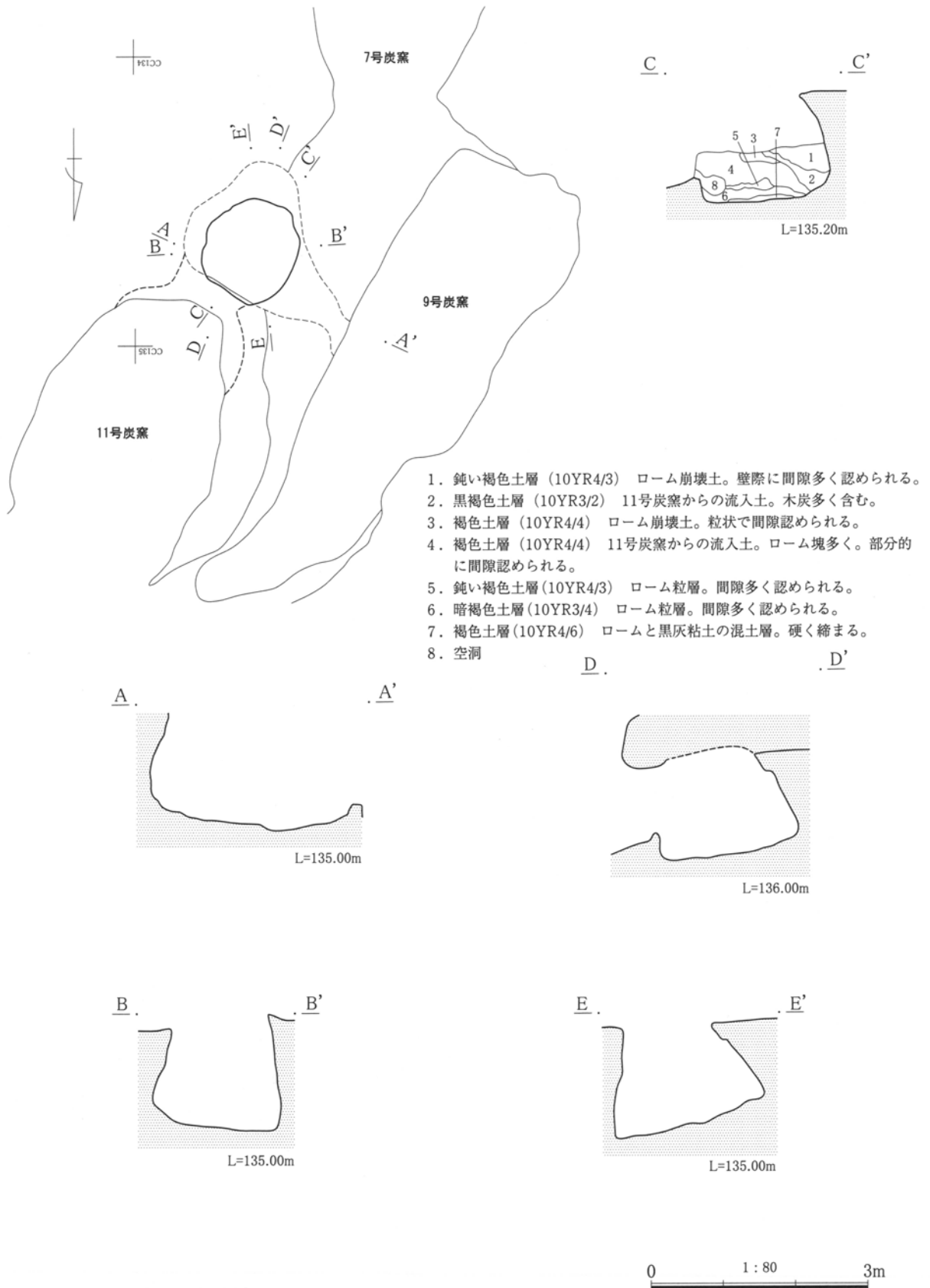
第41図 見切塚 1区9号炭窯 第1面(2)・第4面



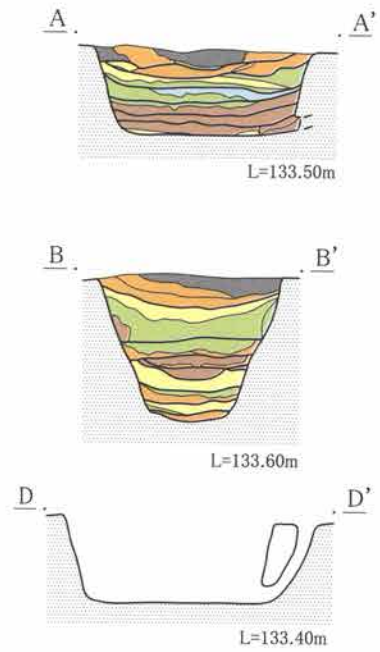
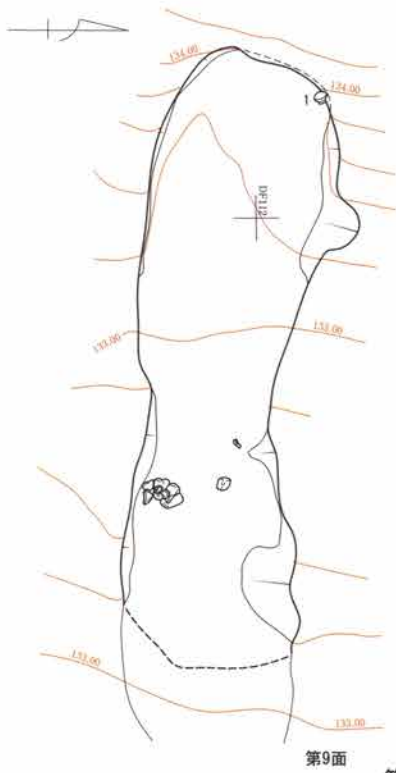
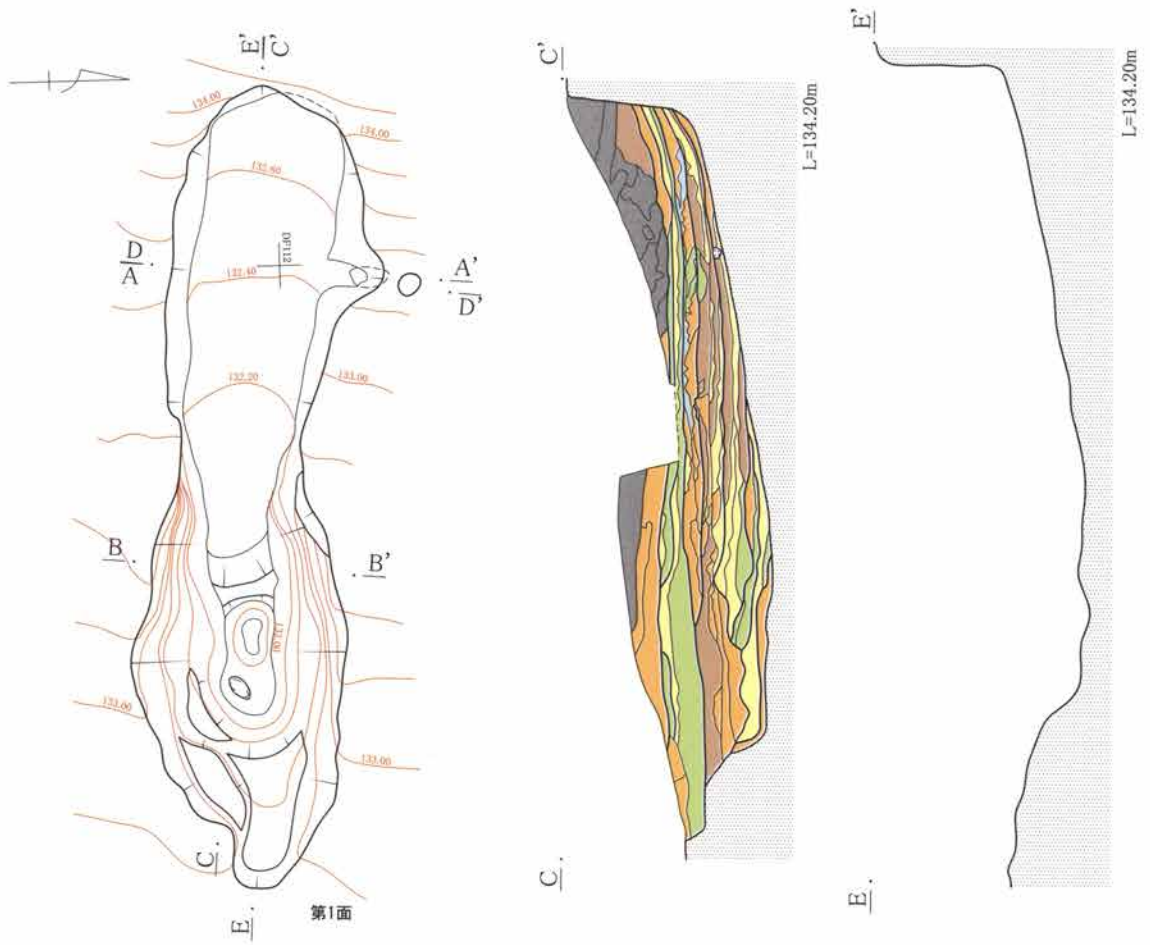
第42図 見切塚 1区11号炭窯 第1面



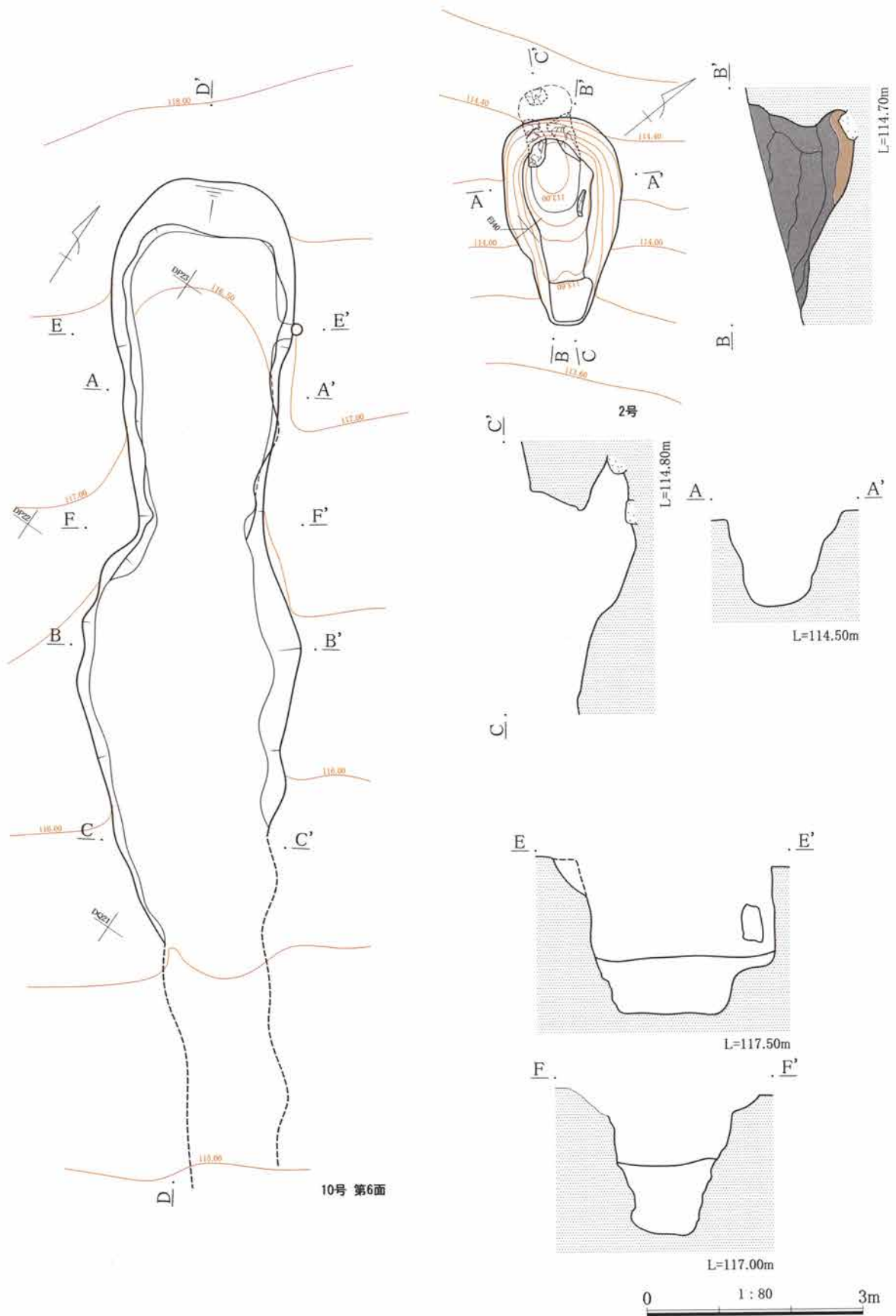
第43図 見切塚 1区11号炭窯 第1面(2)・第3面



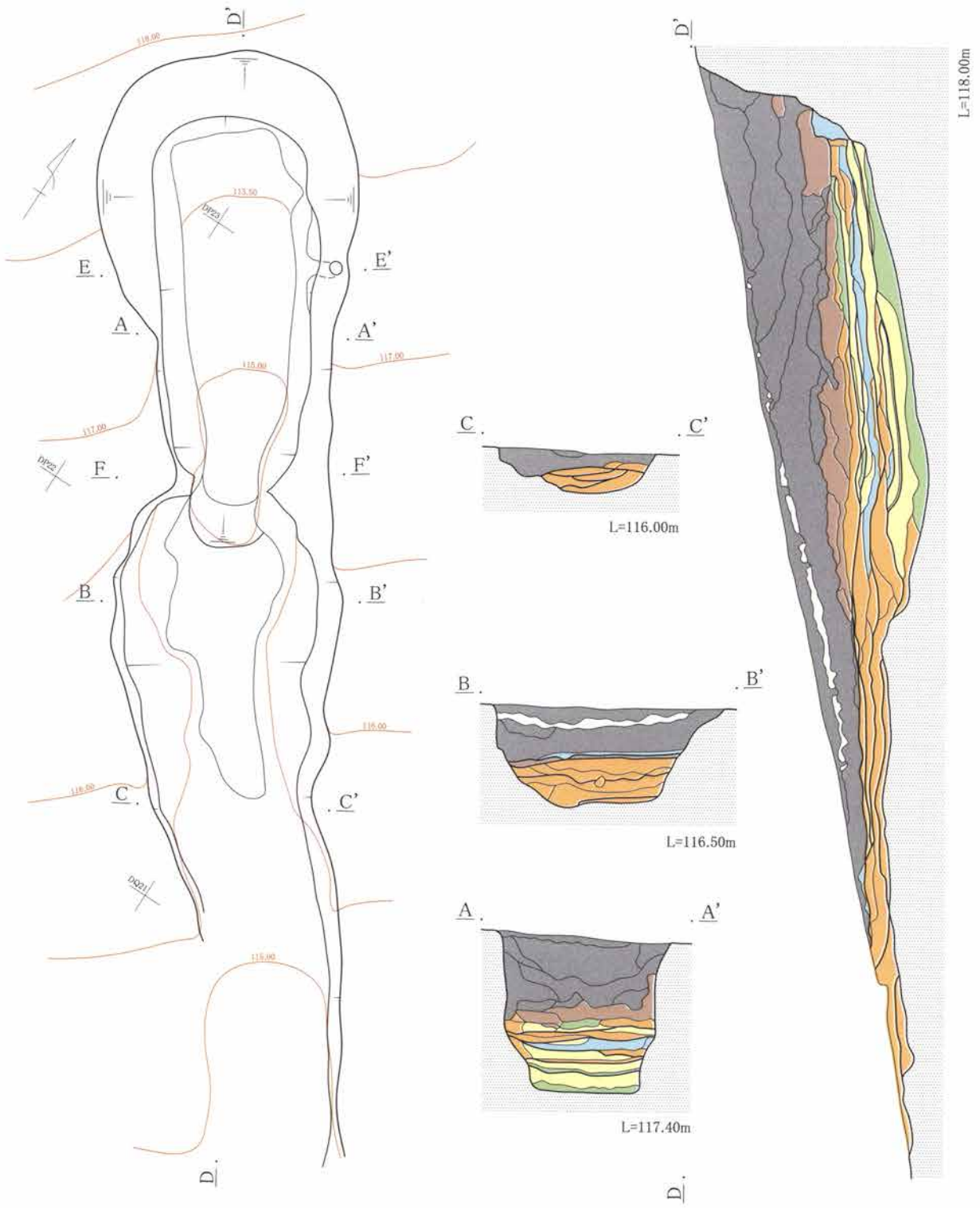
第44図 見切塚 1区9号・11号炭窯横穴



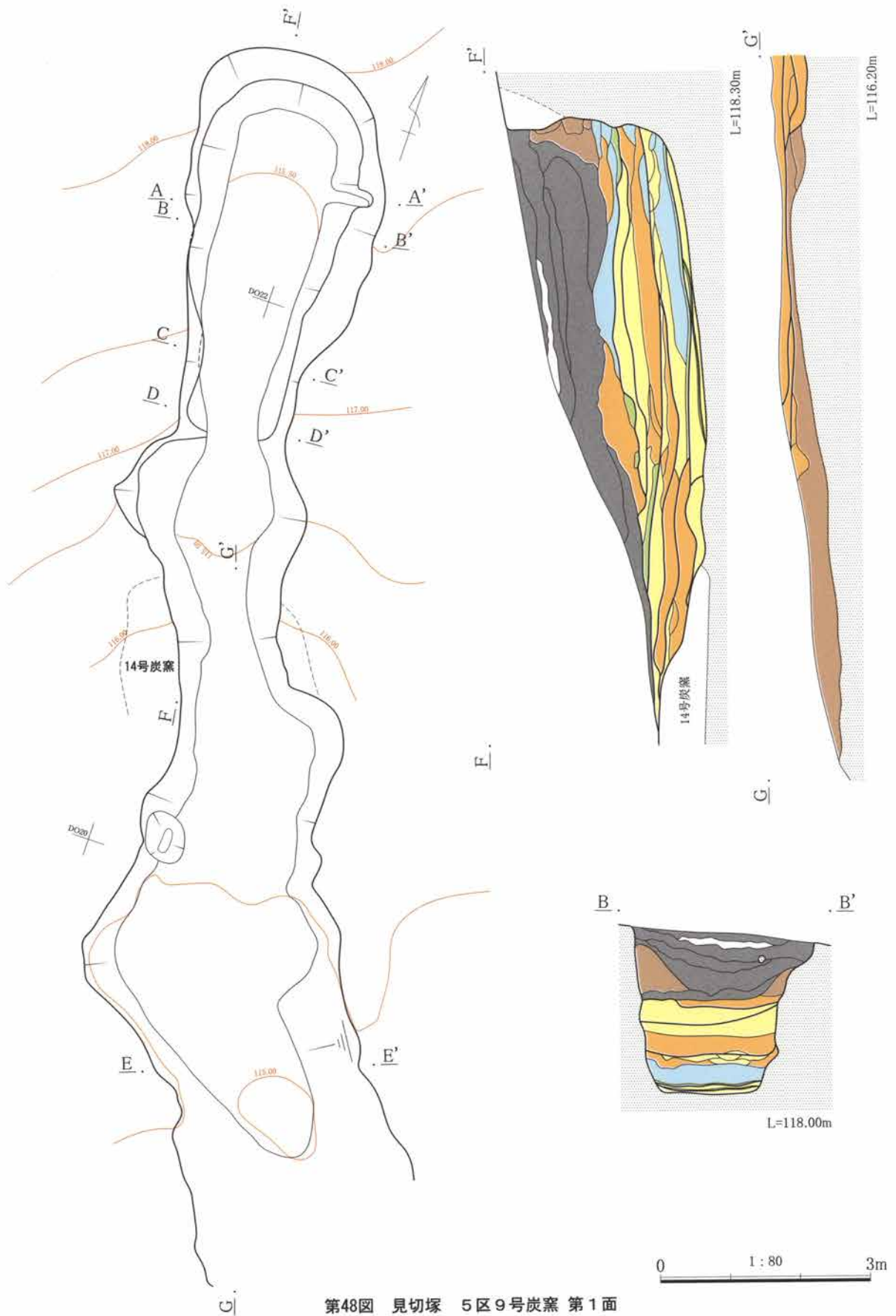
第45図 見切塚 4区1号炭窯



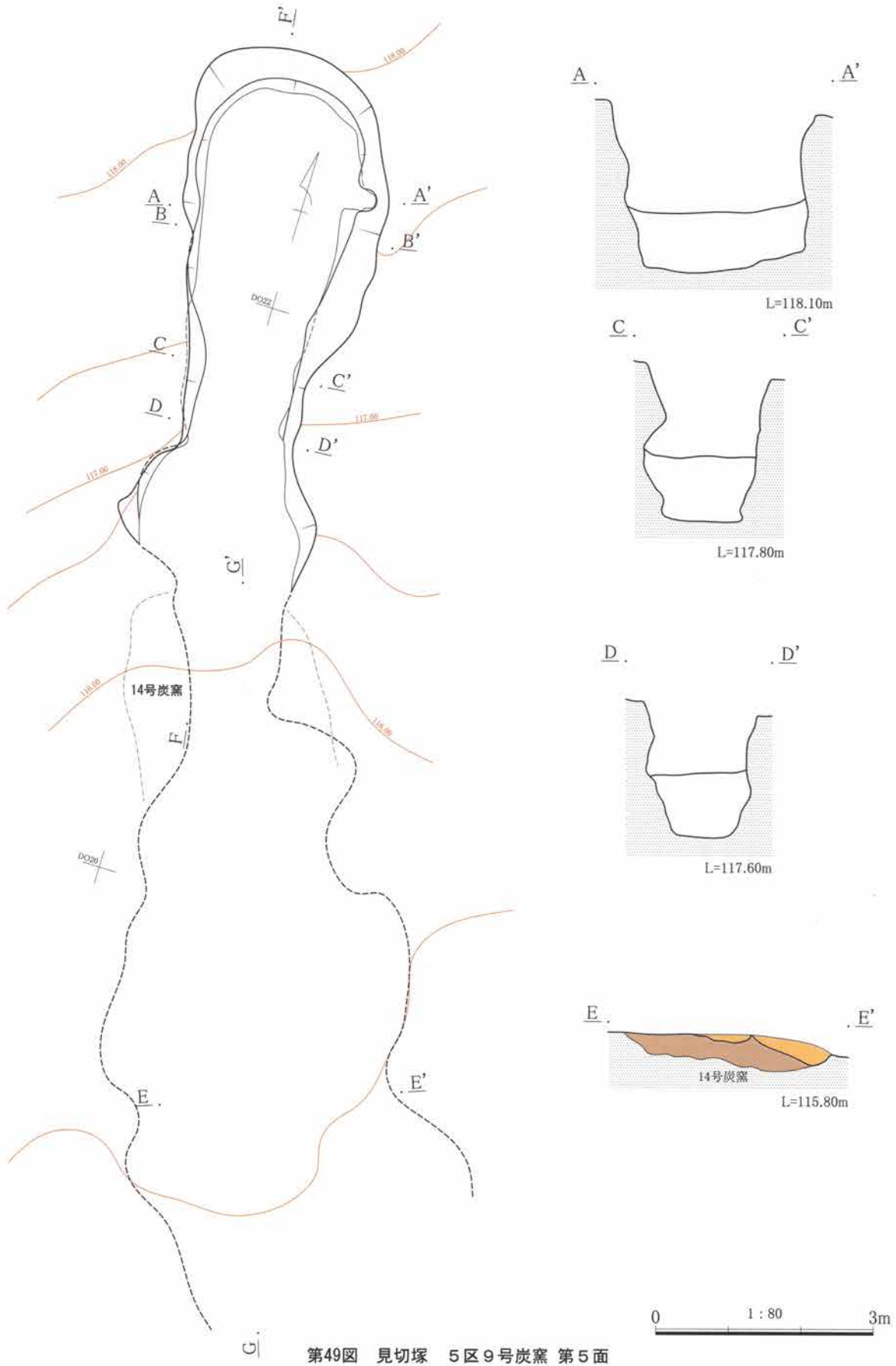
第46図 見切塚 5区2号炭窯、5区10号炭窯 第6面



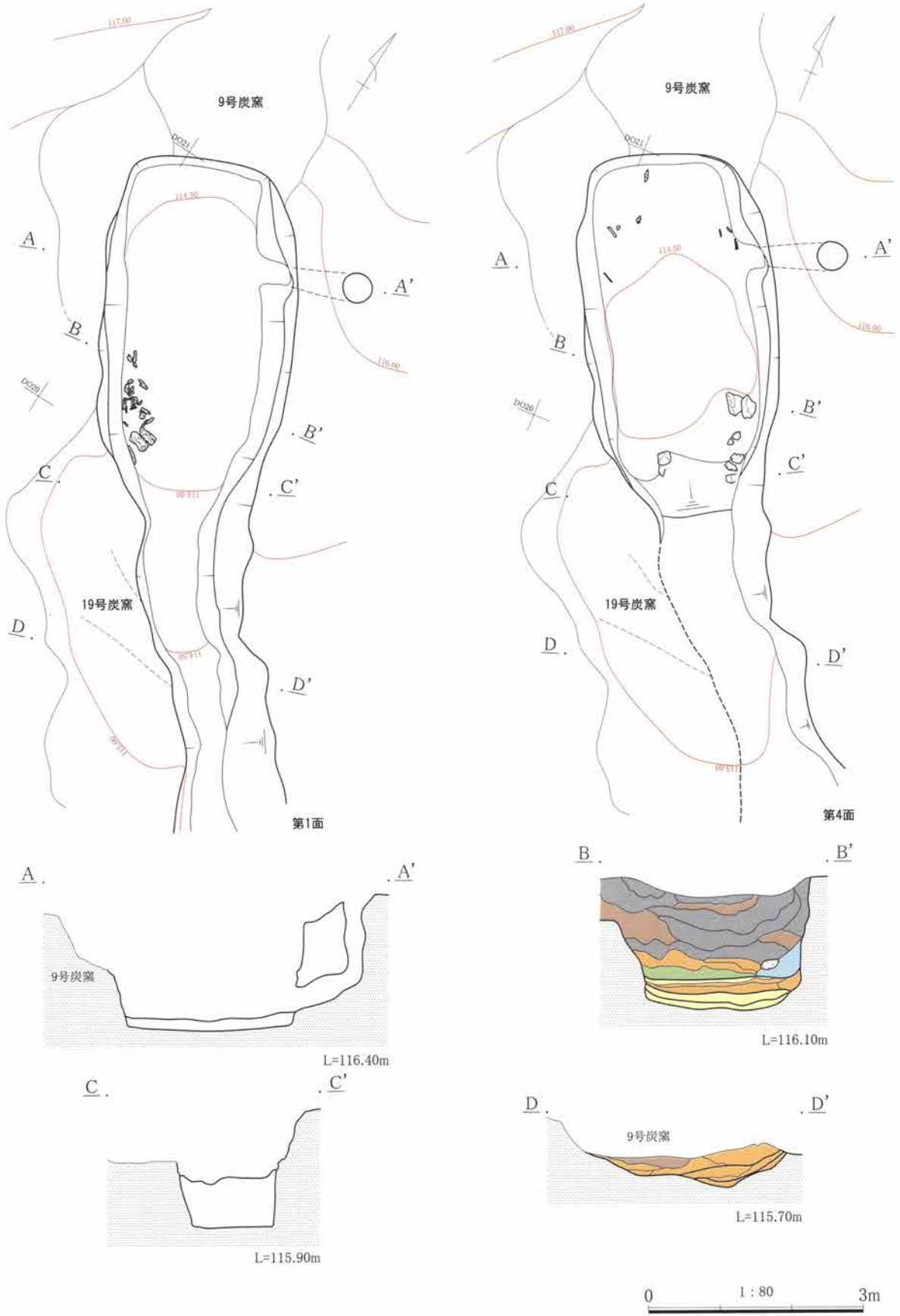
第47図 見切塚 5区10号炭窯 第1面



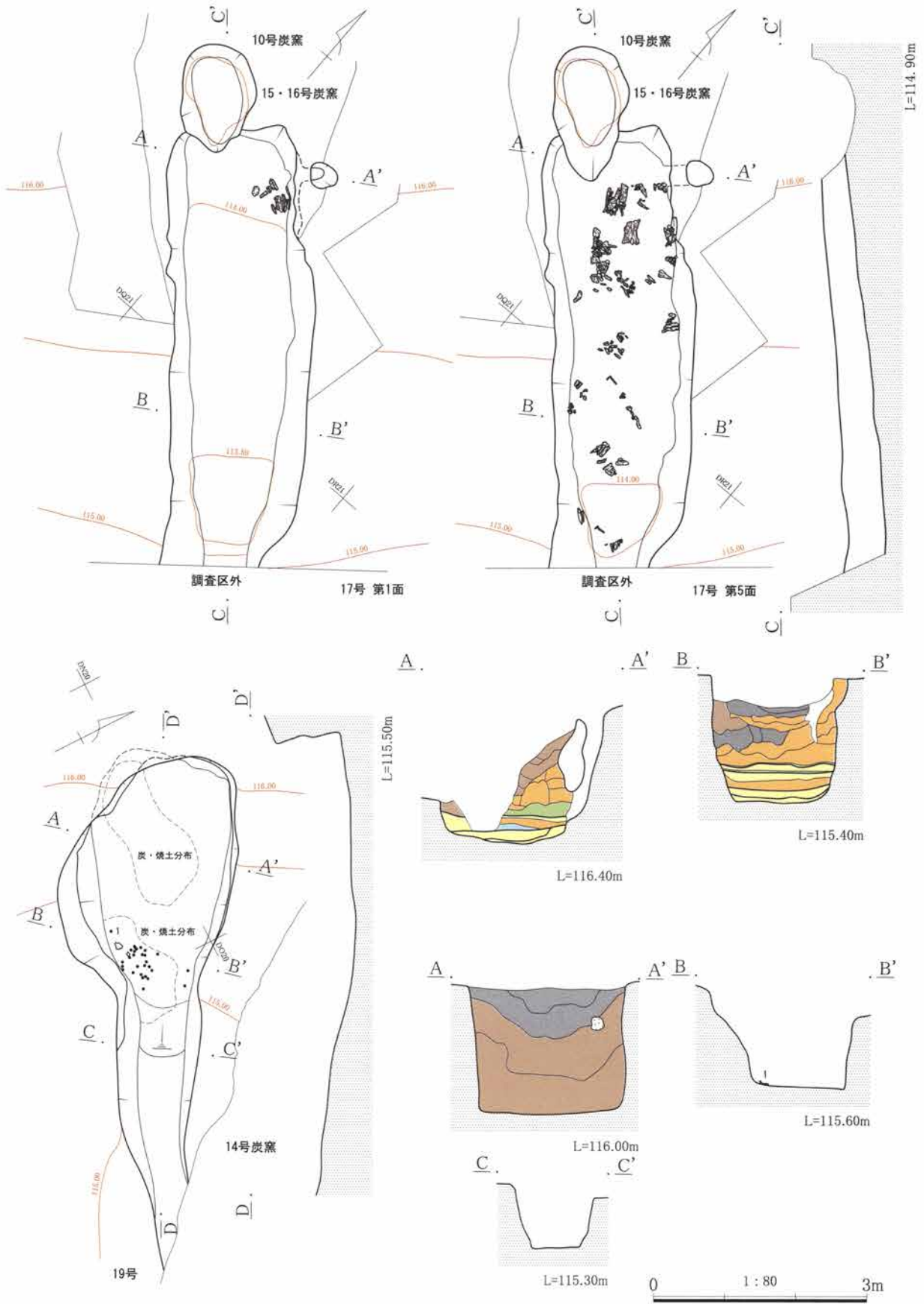
第48図 見切塚 5区9号炭窯 第1面



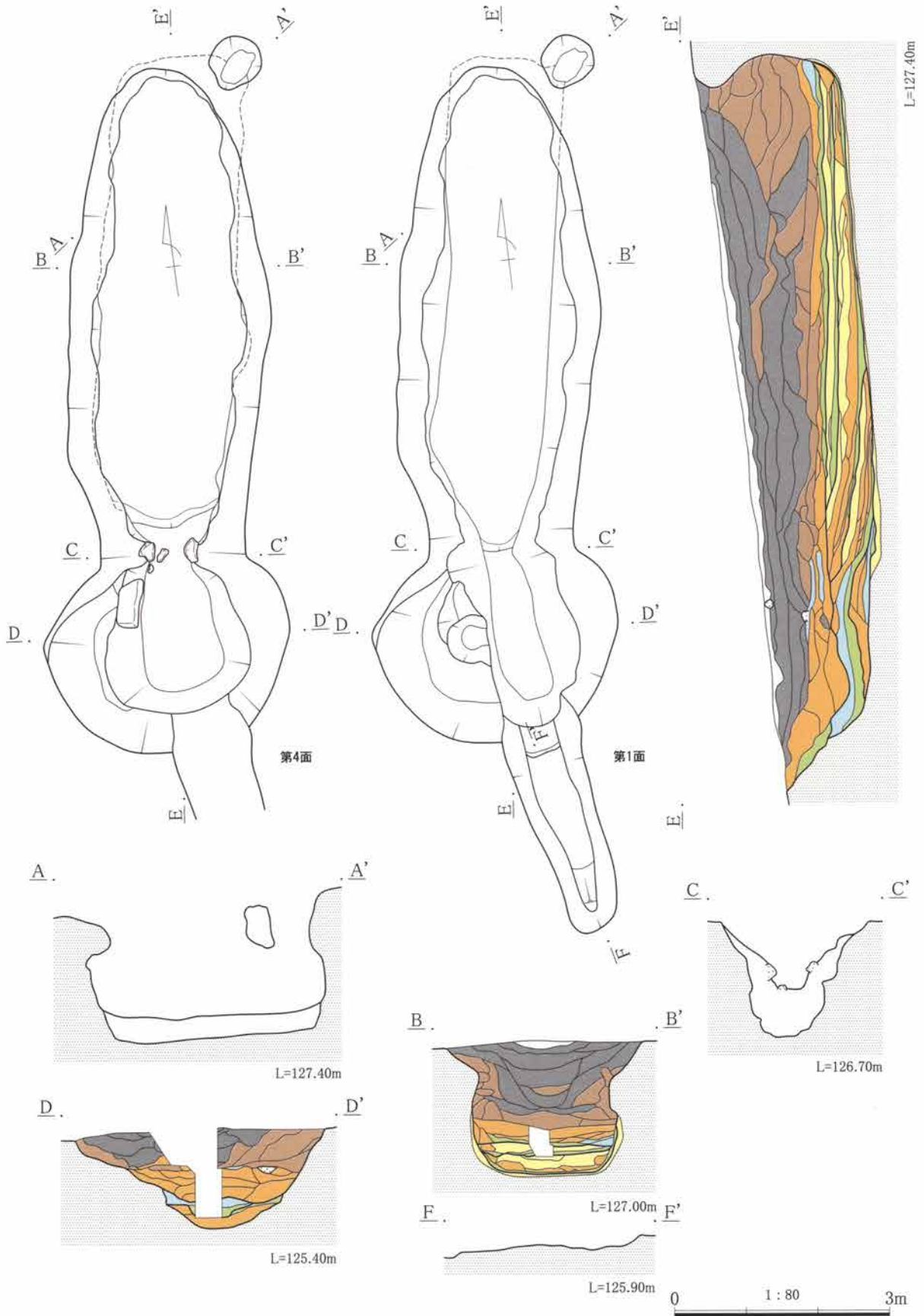
第49図 見切塚 5区9号炭窯 第5面



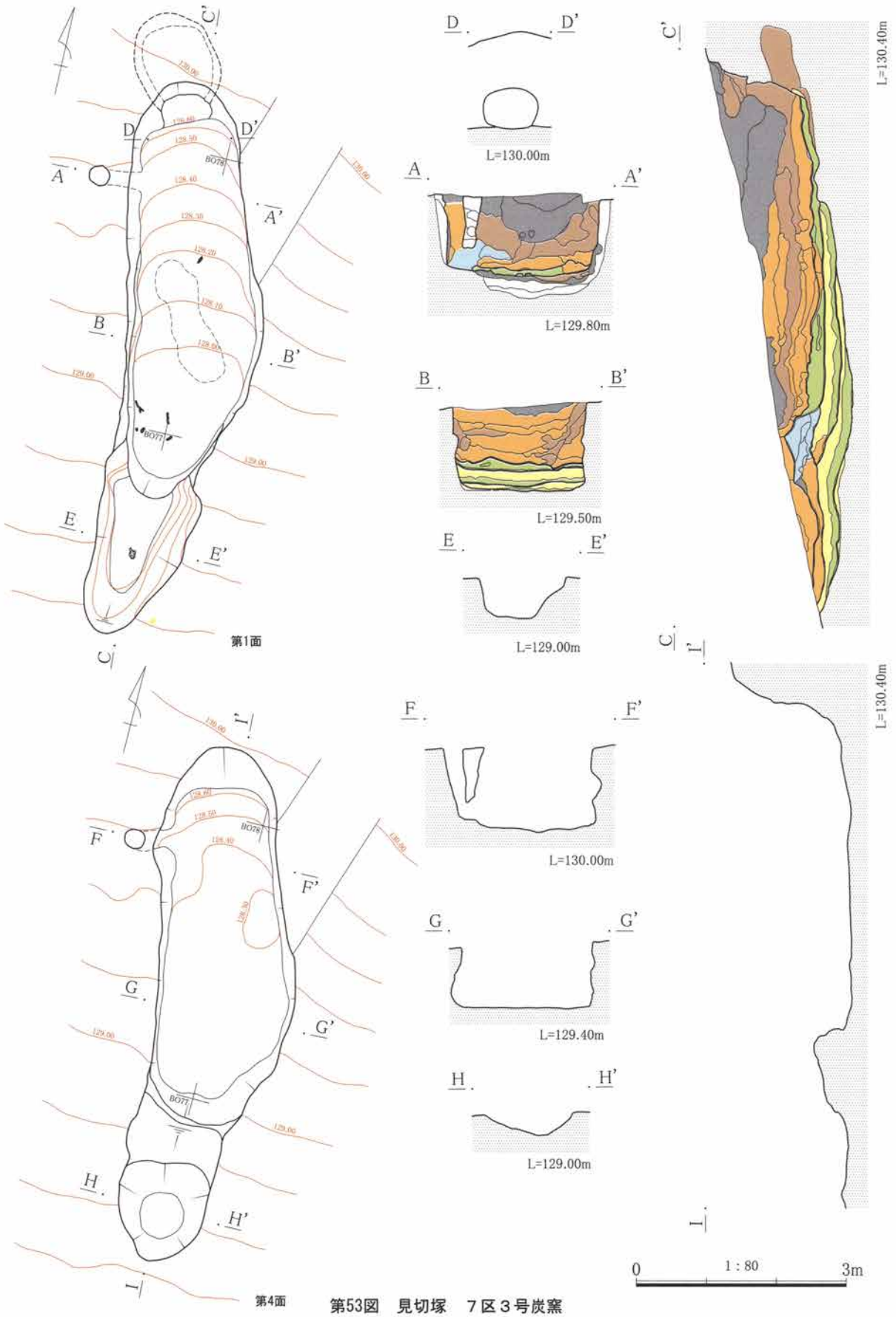
第50図 見切塚 5区14号炭窯

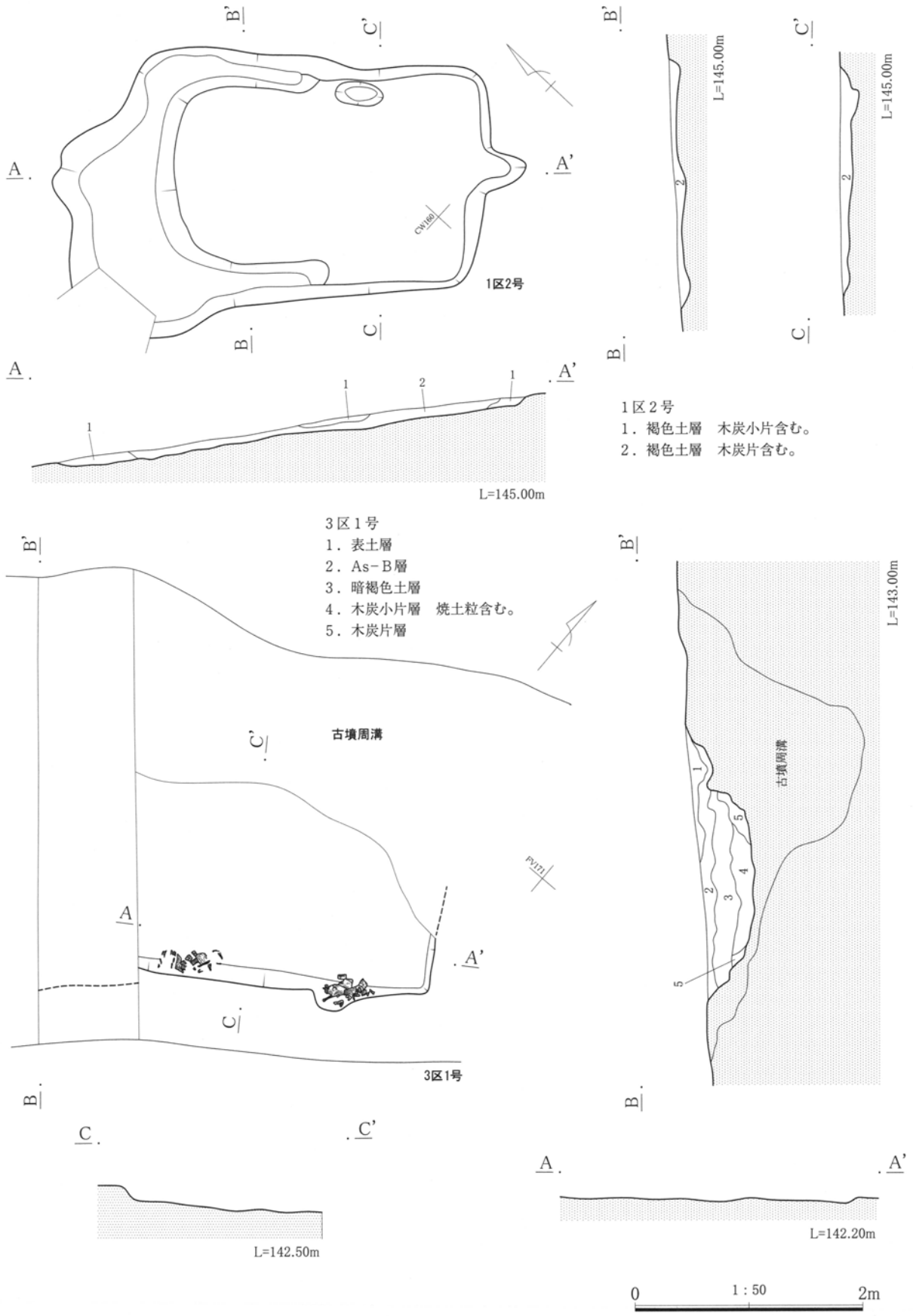


第51図 見切塚 5区17号・19号炭窯

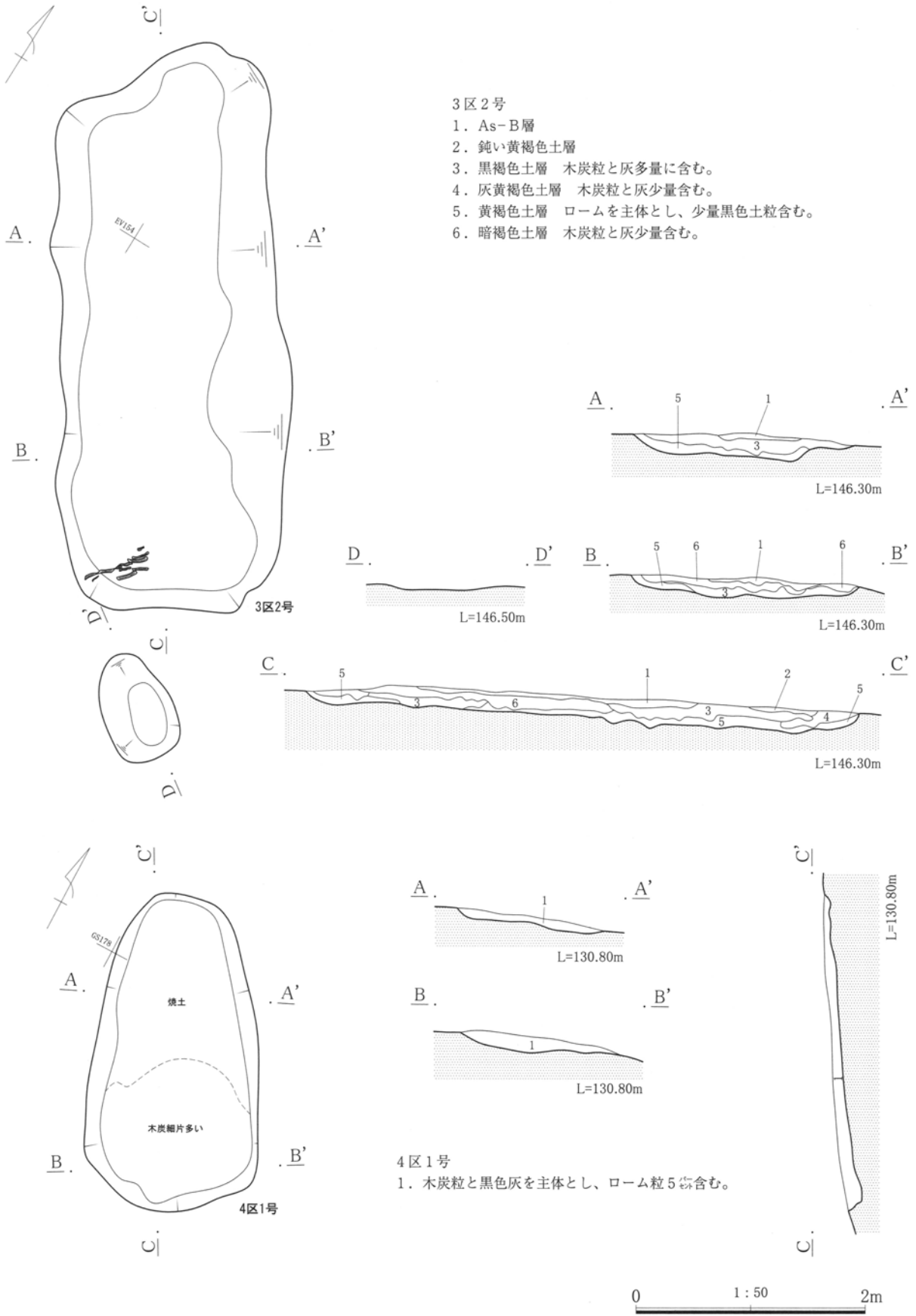


第52図 見切塚 6区1号炭窯



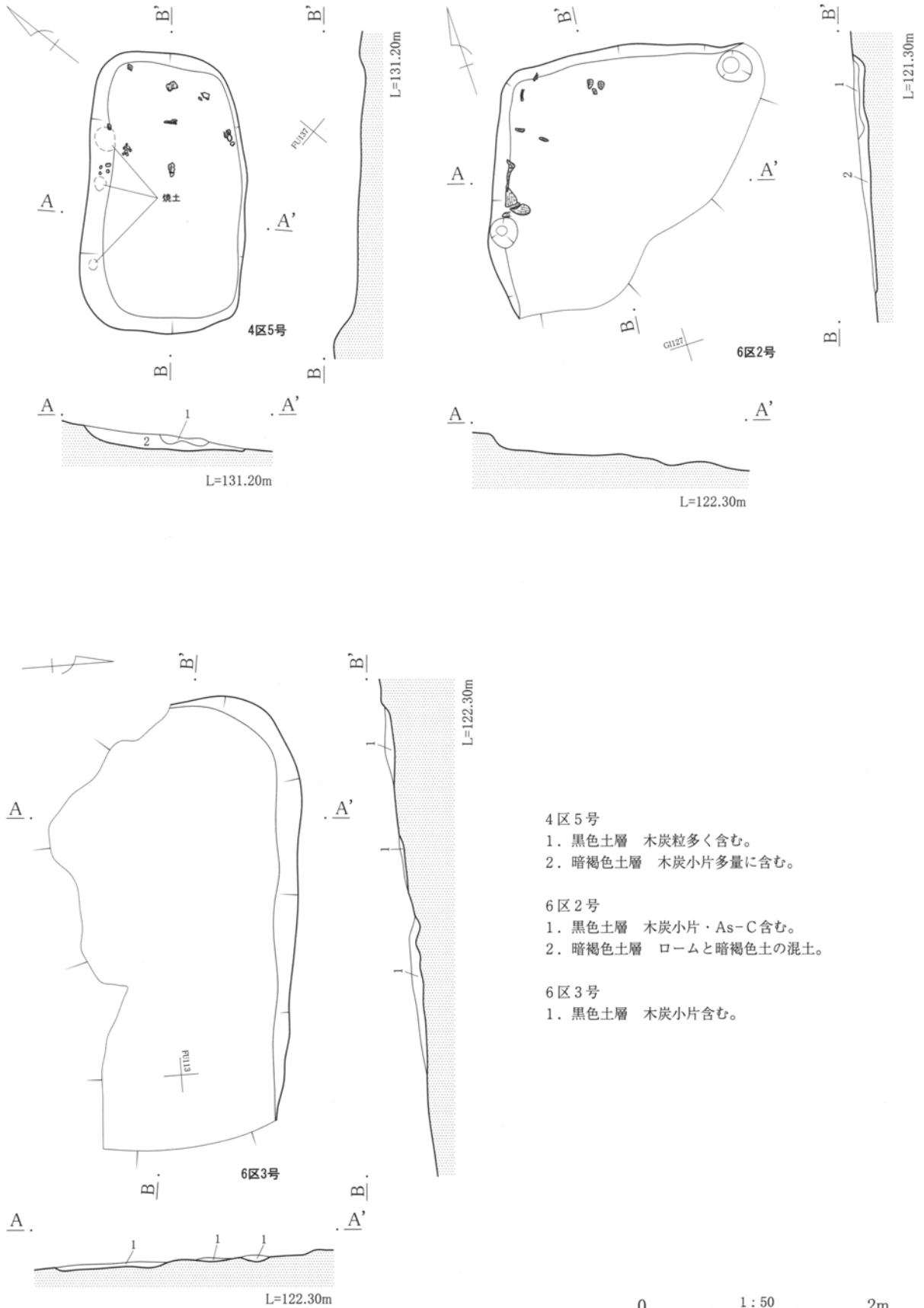


第54図 三騎堂 1区2号、3区1号炭窯

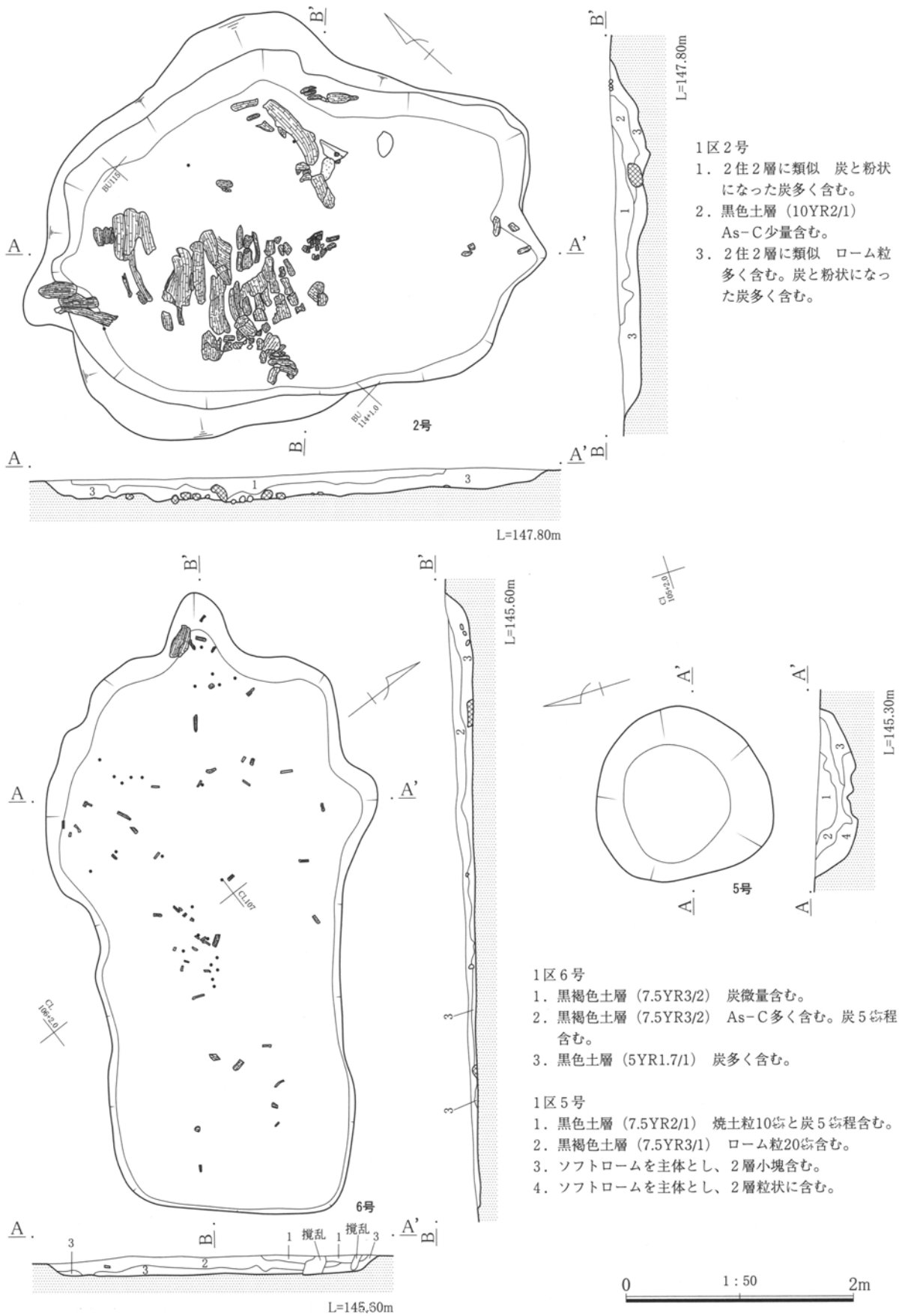


第55図 三騎堂 3区2号、4区1号炭窯

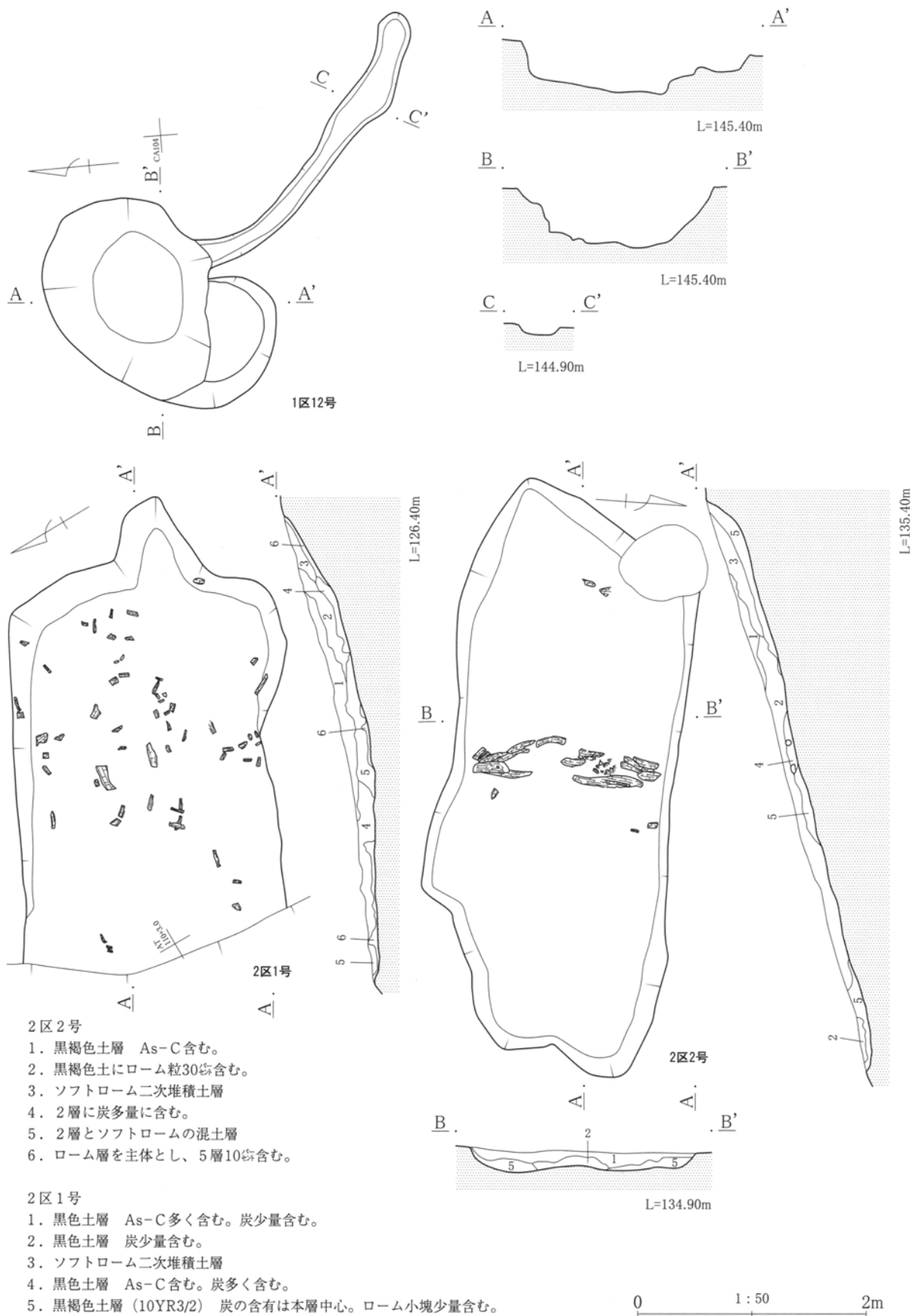
第2章 確認された遺構と遺物



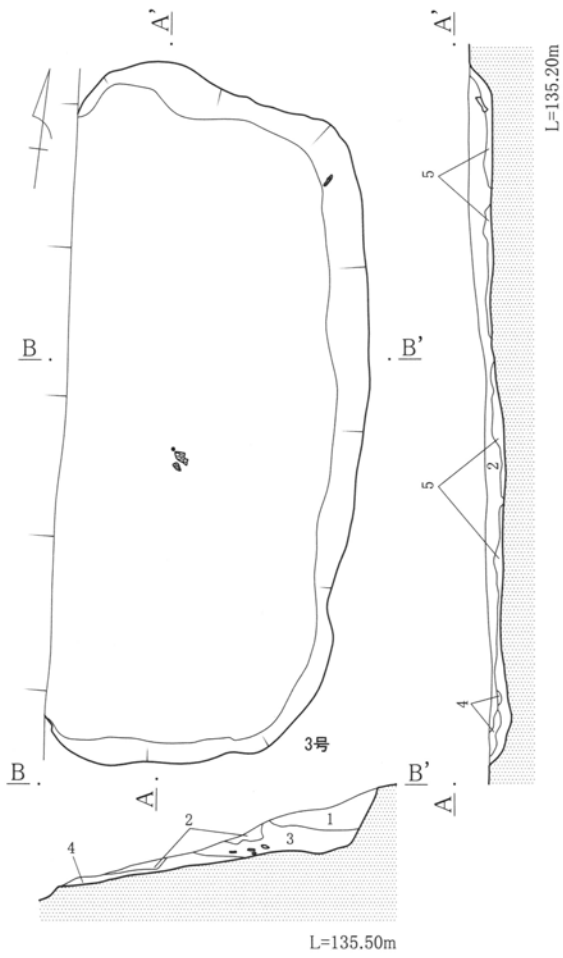
第56図 三騎堂 4区5号、6区2号・3号炭窯



第57図 見切塚 1区2号・5号・6号炭窯

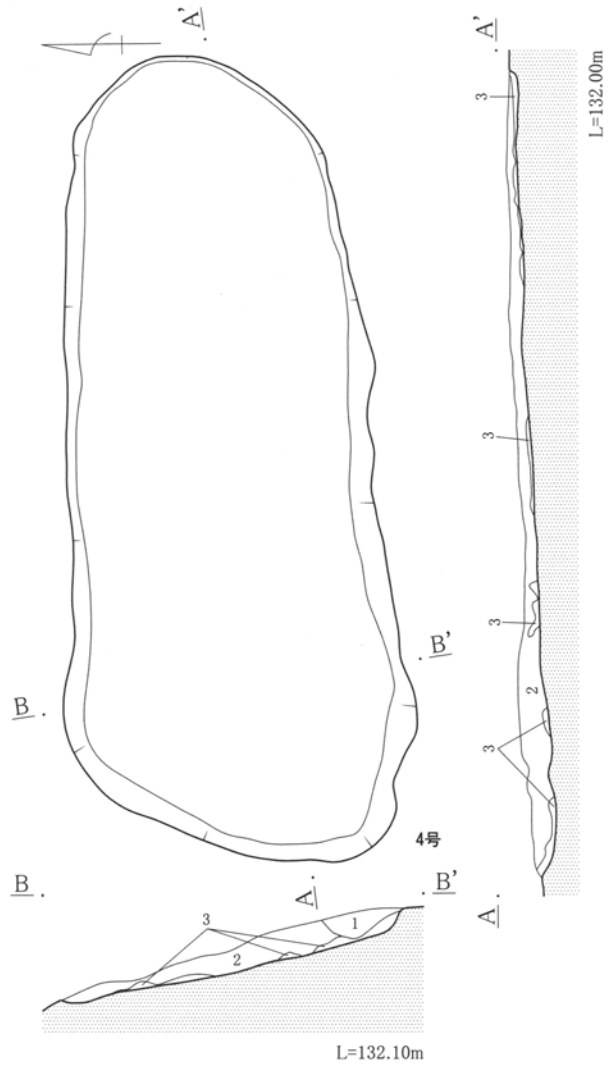


第58図 見切塚 1区12号、2区1号・2号炭窯



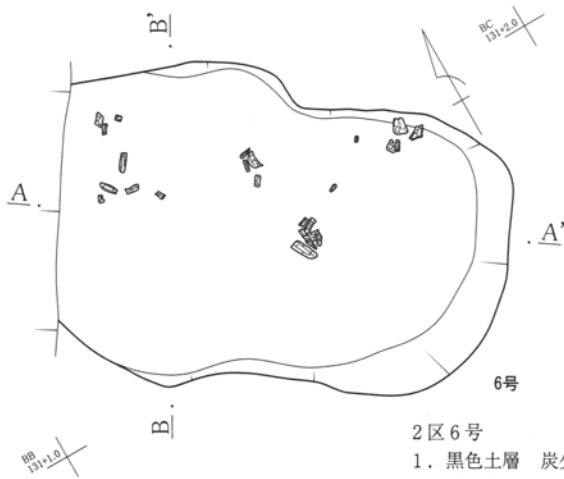
2区3号

1. 灰褐色土層 ソフトローム粒多く含む。
2. 黒色土層 炭多量に含む。ソフトローム小塊微量含む。
3. 灰褐色土層 ソフトローム小塊含む。炭多量に含む。
4. 黒色土層 炭微量含む。
5. 2層とソフトローム混土層



2区4号

1. 黒色土層 (10YR1/2) 炭非常に多く含む。
2. 黒色土層 (10YR1/2) 炭多く含む。ソフトローム小塊含む。
3. 2層とソフトローム混土層

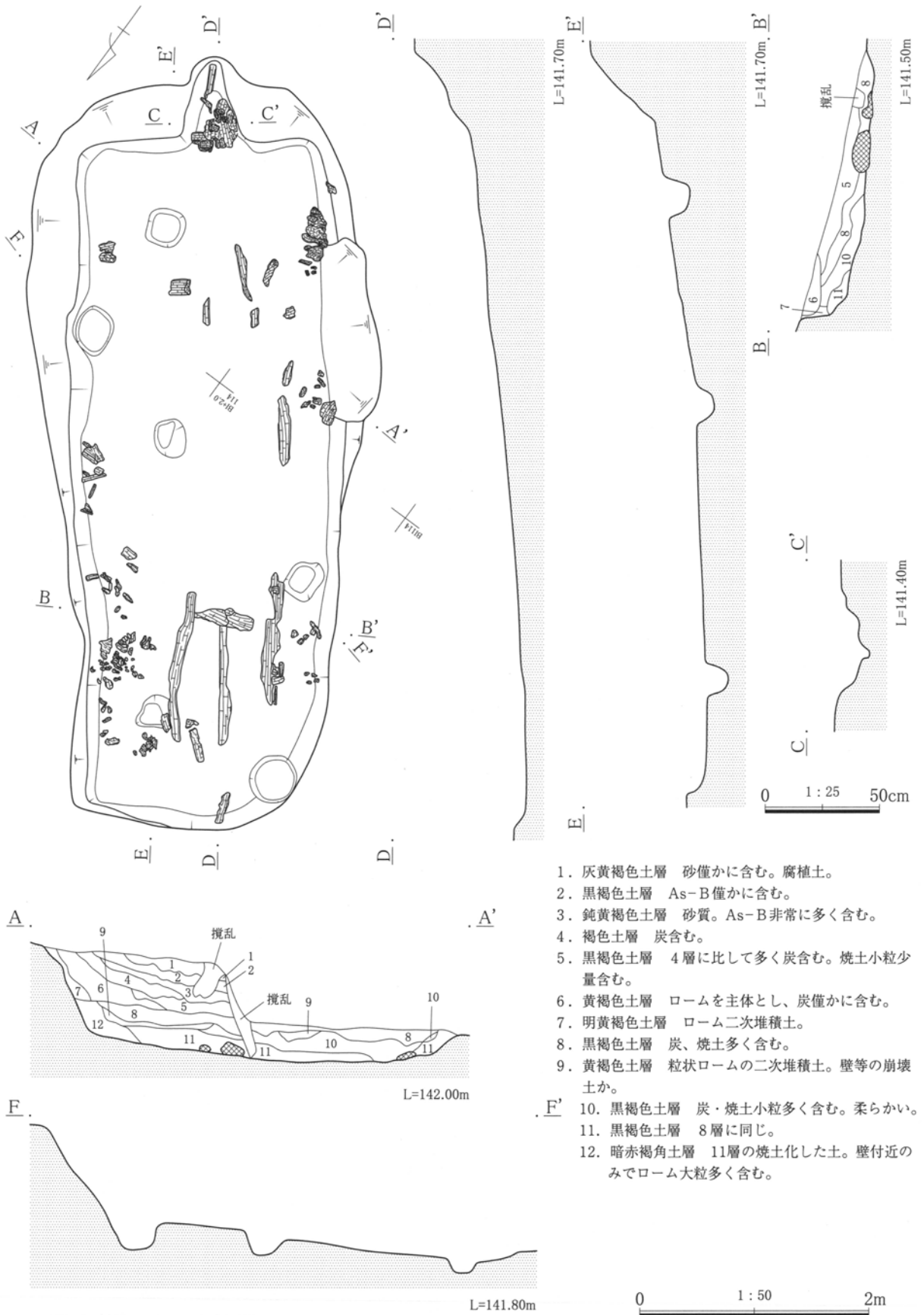


2区6号

1. 黒色土層 炭少量含む。
2. 暗褐色土層
3. 暗褐色土層 ローム小粒10%含む。
4. 黒色土と暗褐色土の混土層 炭多く含む。
5. 暗褐色土とロームの混土層

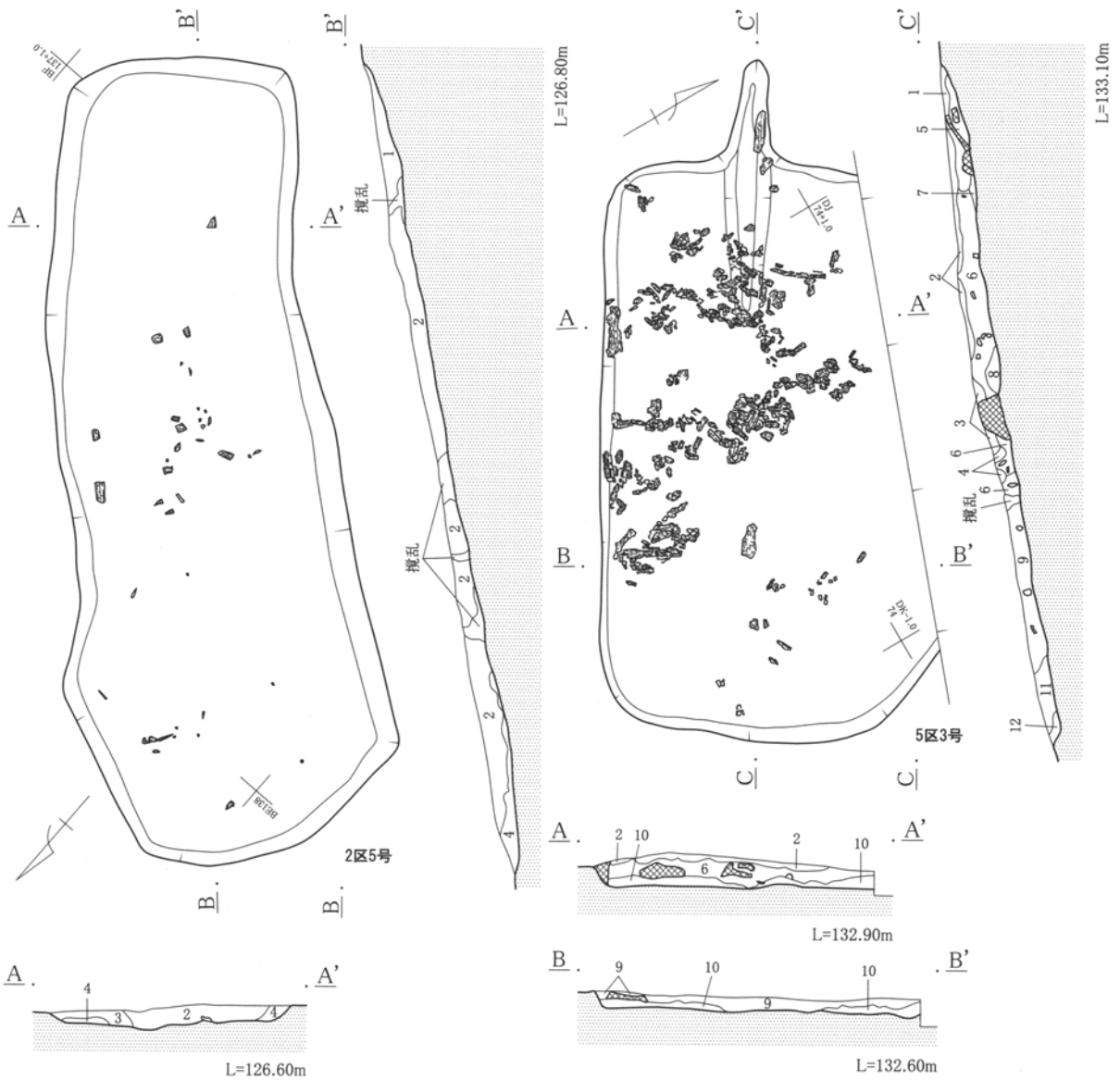
0 1:50 2m

第59図 見切塚 2区3号・4号・6号炭窯



1. 灰黄褐色土層 砂僅かに含む。腐植土。
2. 黒褐色土層 As-B僅かに含む。
3. 鈍黄褐色土層 砂質。As-B非常に多く含む。
4. 褐色土層 炭含む。
5. 黒褐色土層 4層に比して多く炭含む。焼土小粒少量含む。
6. 黄褐色土層 ロームを主体とし、炭僅かに含む。
7. 明黄褐色土層 ローム二次堆積土。
8. 黒褐色土層 炭、焼土多く含む。
9. 黄褐色土層 粒状ロームの二次堆積土。壁等の崩壊土か。
10. 黒褐色土層 炭・焼土小粒多く含む。柔らかい。
11. 黒褐色土層 8層に同じ。
12. 暗赤褐色角土層 11層の焼土化した土。壁付近のみでローム大粒多く含む。

第60図 見切塚 2区7号炭窯



2区5号

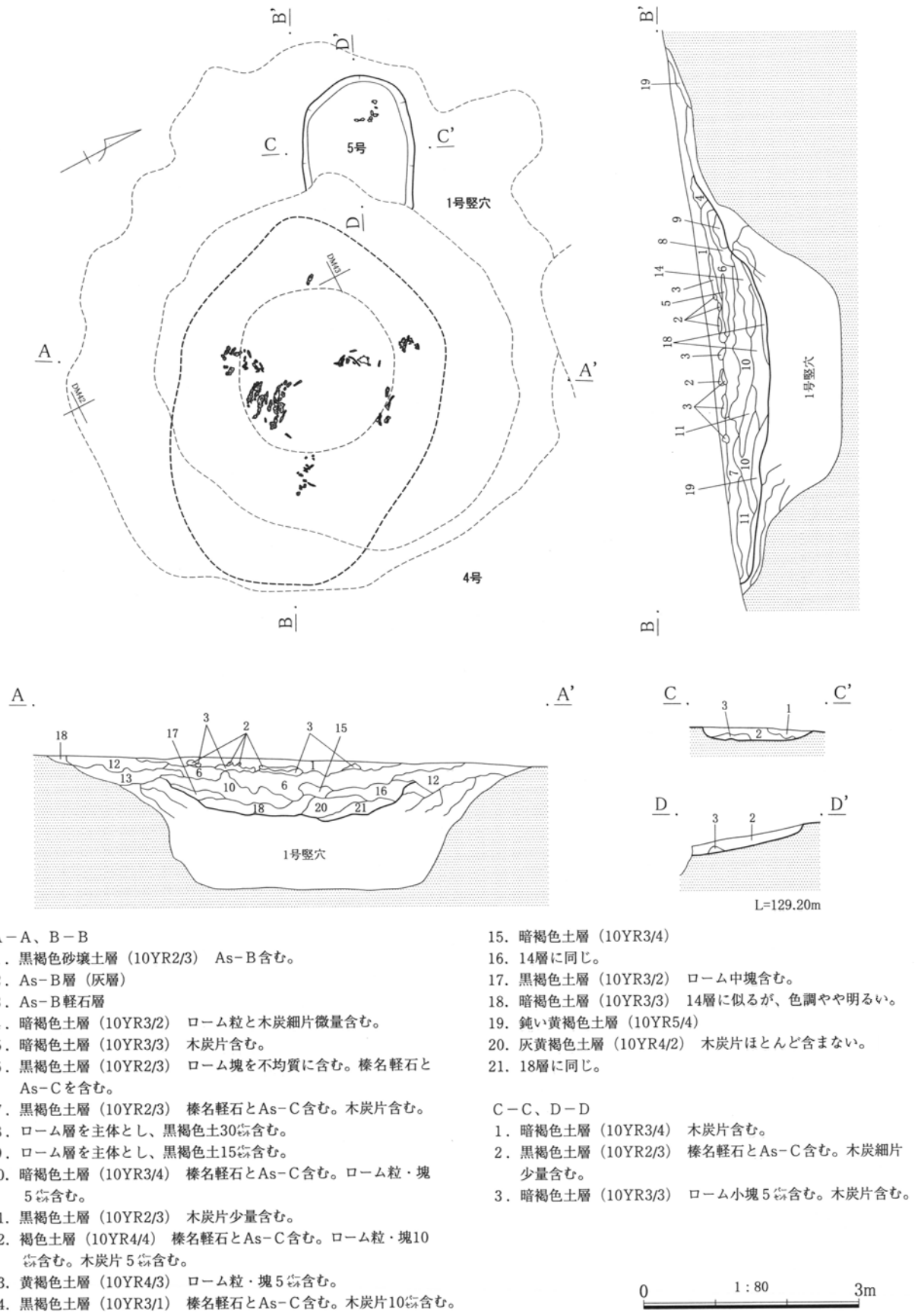
1. ハードロームを主体とし、黒色土20%含む。
2. 黒色土層 As-C含む。炭多く含む。
3. 黒褐色土層 ローム粒10%含む。
4. 黒色土とロームの混土層。

5区3号

1. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 炭少量含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) As-B純層。
3. 暗褐色砂質土層 (10YR3/3) 砂を主体とし、少量土含む。
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) 3層に比して砂少ない。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) 炭粒・焼土粒微量含む。
6. 黒色土層 (10YR2/2) 炭粒・焼土粒多く含む。
7. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 炭細片20%含む。
8. 黒褐色土層 (10YR3/2) 6層に似るが、炭細片多く含む。
9. 褐色土層 (10YR4/4) 炭細片多く含む。
10. 暗褐色土層 (10YR3/4) 炭細片少量含む。
11. 暗褐色土層 (10YR3/4) 炭細片含む。
12. 褐色土層 (10YR4/6) 炭細片微量含む。木根による攪乱か。

0 1:50 2m

第61図 見切塚 2区5号、5区3号炭窯



A-A、B-B

1. 黒褐色砂壤土層 (10YR2/3) As-B 含む。
2. As-B 層 (灰層)
3. As-B 軽石層
4. 暗褐色土層 (10YR3/2) ローム粒と木炭細片微量含む。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3) 木炭片含む。
6. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム塊を不均質に含む。榛名軽石と As-C を含む。
7. 黒褐色土層 (10YR2/3) 榛名軽石と As-C 含む。木炭片含む。
8. ローム層を主体とし、黒褐色土30%含む。
9. ローム層を主体とし、黒褐色土15%含む。
10. 暗褐色土層 (10YR3/4) 榛名軽石と As-C 含む。ローム粒・塊 5%含む。
11. 黒褐色土層 (10YR2/3) 木炭片少量含む。
12. 褐色土層 (10YR4/4) 榛名軽石と As-C 含む。ローム粒・塊10%含む。木炭片5%含む。
13. 黄褐色土層 (10YR4/3) ローム粒・塊5%含む。
14. 黒褐色土層 (10YR3/1) 榛名軽石と As-C 含む。木炭片10%含む。

15. 暗褐色土層 (10YR3/4)

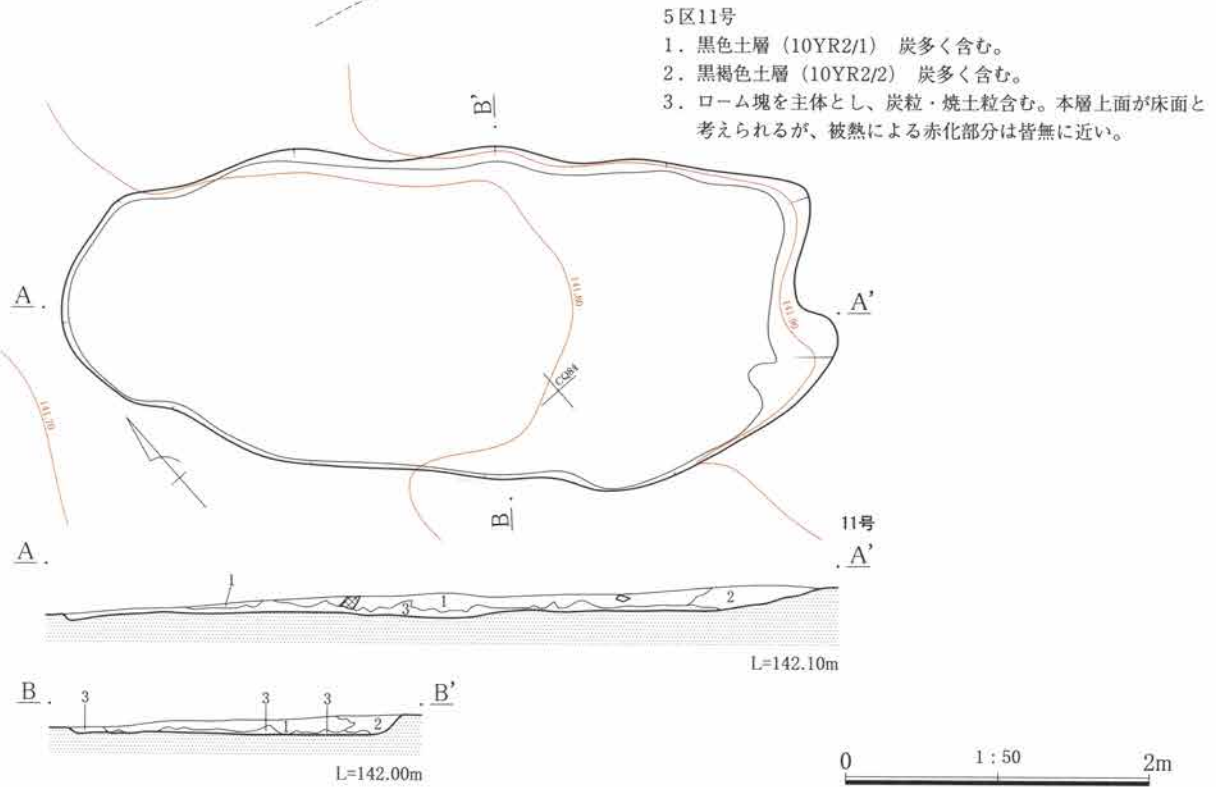
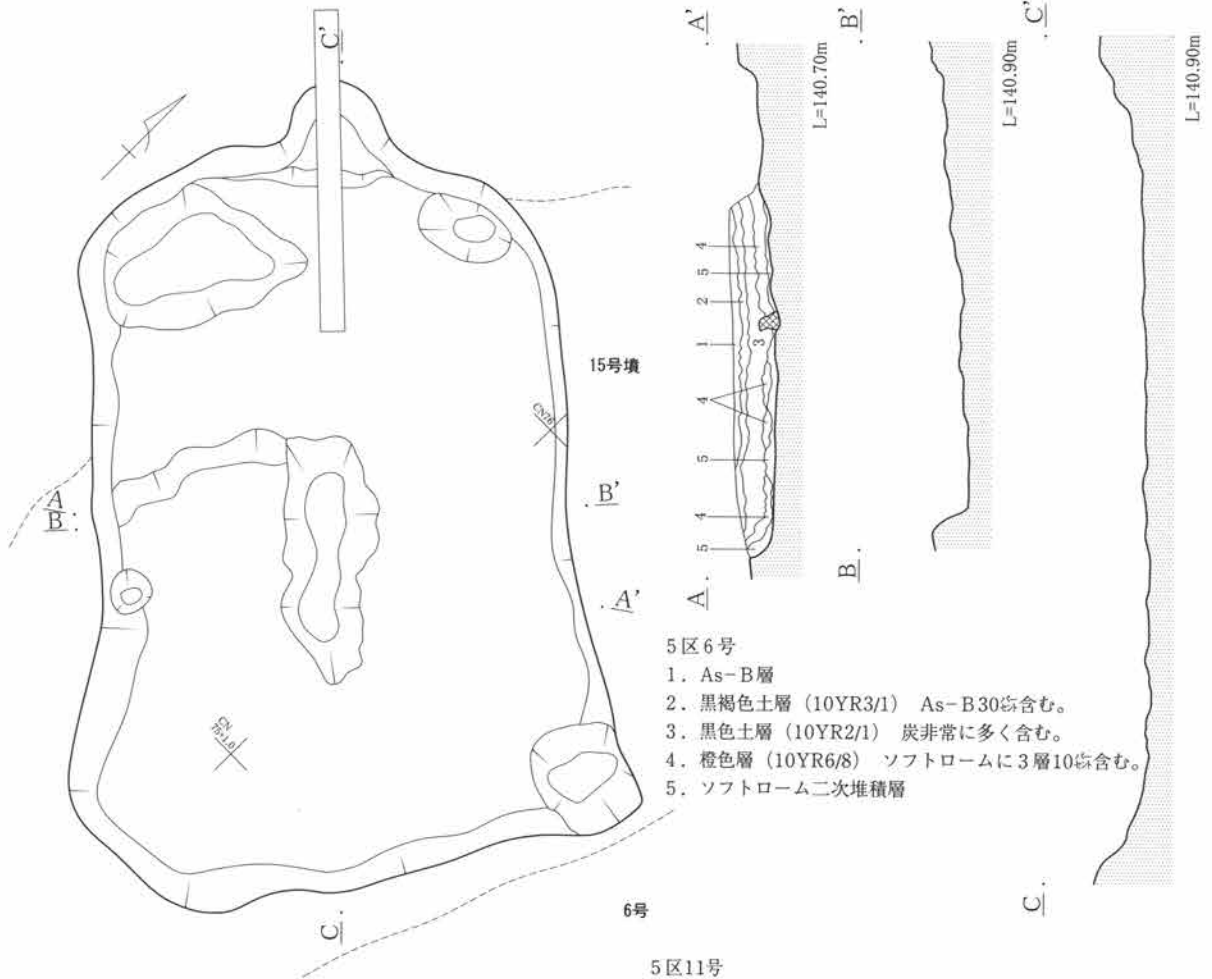
16. 14層に同じ。
17. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム中塊含む。
18. 暗褐色土層 (10YR3/3) 14層に似るが、色調やや明るい。
19. 鈍い黄褐色土層 (10YR5/4)
20. 灰黄褐色土層 (10YR4/2) 木炭片ほとんど含まない。
21. 18層に同じ。

C-C、D-D

1. 暗褐色土層 (10YR3/4) 木炭片含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) 榛名軽石と As-C 含む。木炭細片少量含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム小塊5%含む。木炭片含む。

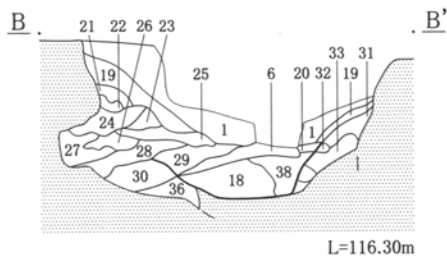
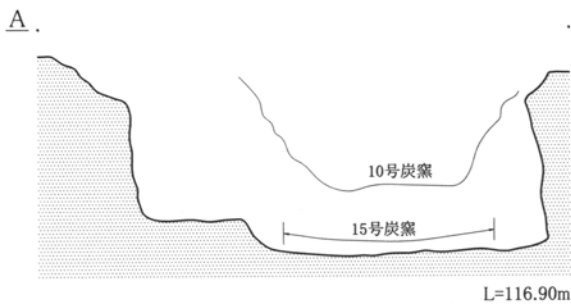
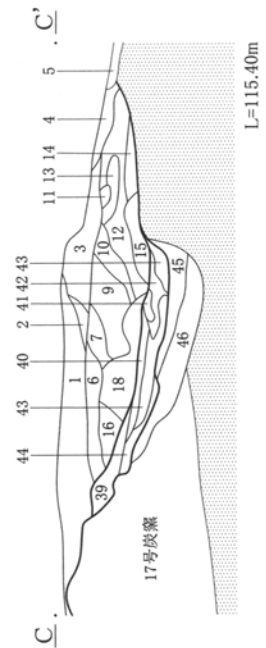
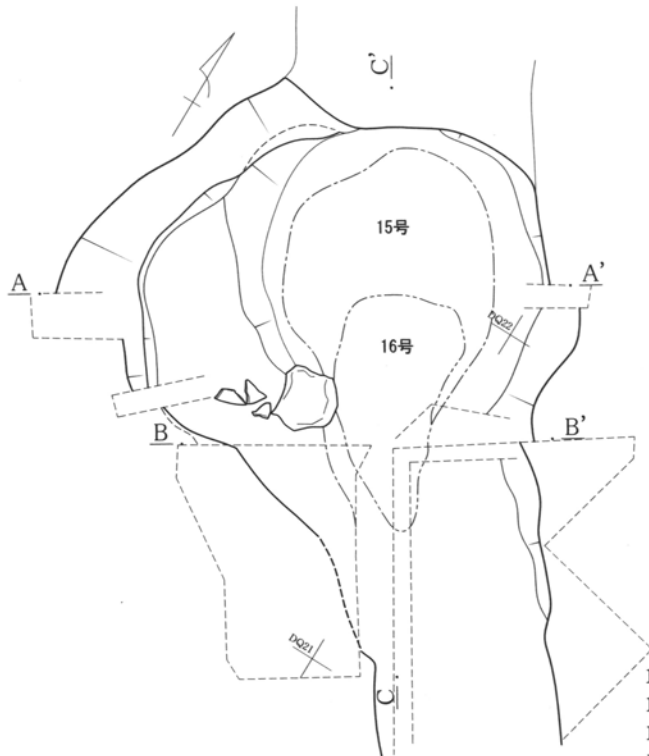
第62図 見切塚 5区4号・5号炭窯

0 1:80 3m



第63図 見切塚 5区6号・11号炭窯

第2章 確認された遺構と遺物

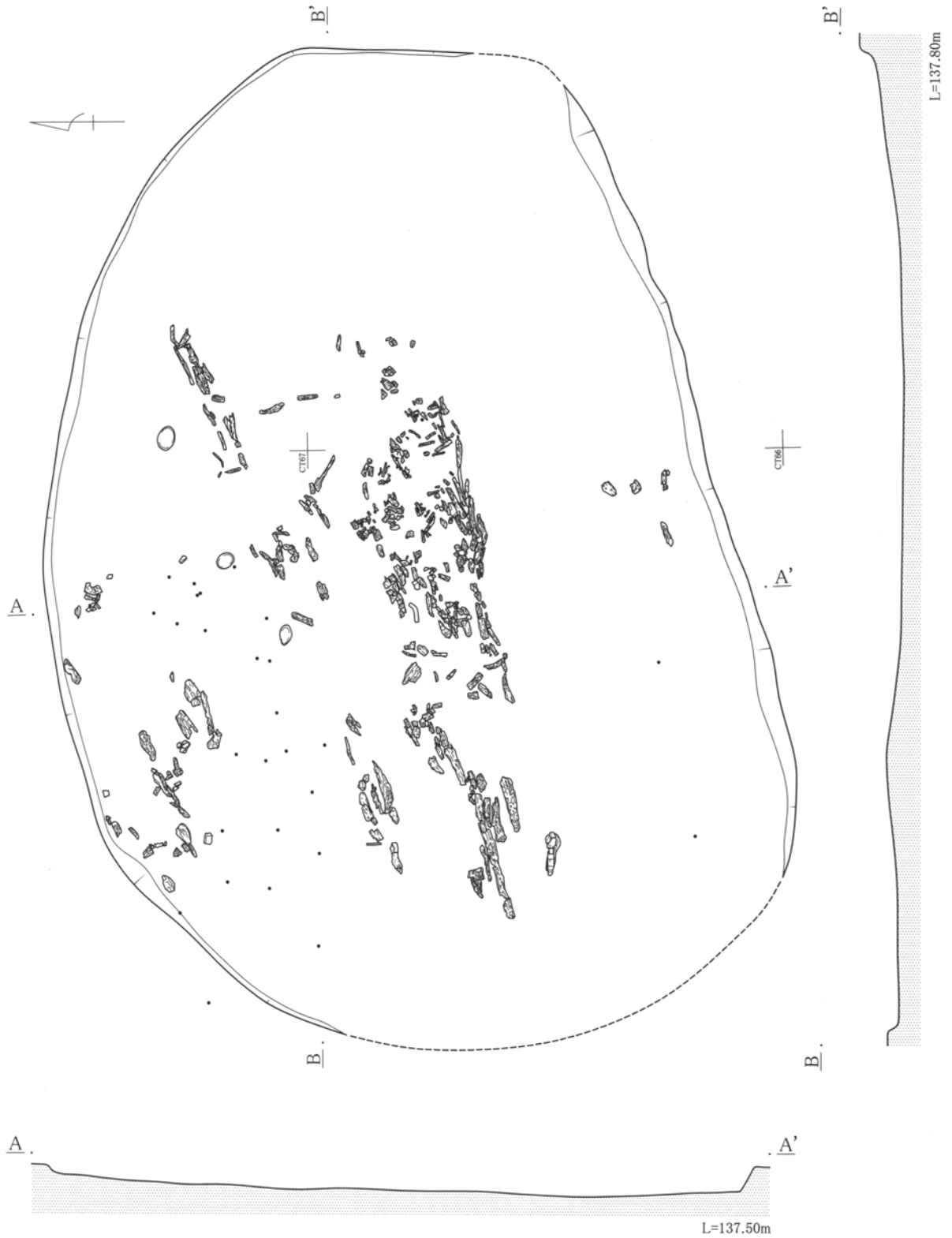


1. 黒色土層 As-C、Hr-FA含む。
2. 暗褐色土層 (10YR2/3) 黒ボク土含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黒ボク土少量含む。
4. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 10号炭窯作業場床。
5. 鈍赤褐色焼土層 (2.5YR4/4) 10号炭窯第1面床。
6. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR4/3) 不均質に焼土塊含む。
7. 黒褐色土層 (10YR2/3)
8. 黒褐色土層 (10YR2/3) 黒ボク土塊含む。
9. 暗褐色土層 (10YR3/3)
10. 褐色土層 (10YR4/6)
11. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム塊。

12. 褐色土層 (10YR4/6)
13. 褐色粘質土層 (10YR4/6)
14. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR4/3)
15. 褐色土層 (10YR4/6)
16. ローム漸移層とローム層混土層
17. 黒褐色土層 (10YR2/3)
18. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
19. 黒ボク土層 As-C、Hr-FA含まない。
20. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) ローム粒、焼土粒少量含む。
21. 黒褐色土層 (10YR3/3) ローム粒10%含む。
22. ローム塊
23. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 黒ボク土20%含む。
24. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム層30%含む。
25. 暗褐色土層 (10YR3/3)
26. 25層にローム層20%含む。
27. 黄褐色土層 (10YR3/6) ハードローム塊含む。
28. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) ローム10%含む。
29. 28層にローム層をやや多く含む。
30. ローム二次堆積土層
31. 黒褐色土層 (10YR3/3) ローム粒僅かに含む。
32. 31層にローム粒20%含む。
33. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3)
34. ローム塊
35. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黒ボク土20%含む。
36. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 地山か。
37. 褐色土層 (10YR4/4)
38. 黒ボク土塊
39. 黒褐色土層 (10YR2/3) 焼土粒僅かに含む。
40. 鈍黄褐色土層 (10YR4/5) ロームと褐色土層状に含む。上部に木炭と焼土含む。15号炭窯床。
41. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3)
42. 黄褐色土層 (10YR5/6) ローム層に41層含む。
43. 41層を主体とし、ロームを5%含む。
44. 黒褐色土層 (10YR3/2) 41層を層状に含む。
45. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR4/3) 16号炭窯床。
46. 41層を主体とし、焼土粒「中」、木炭多く含む。

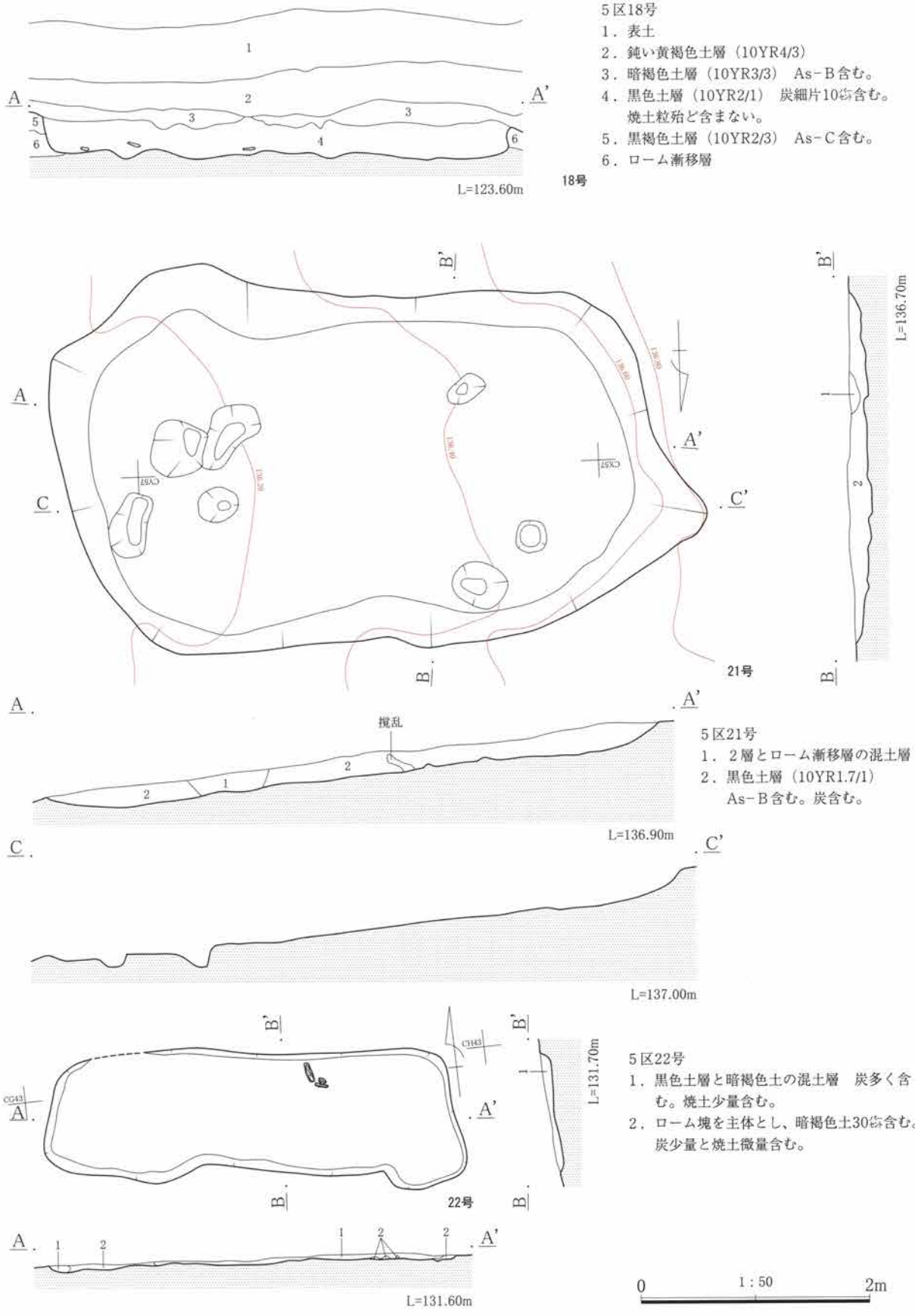
0 1:80 3m

第64図 見切塚 5区15号・16号炭窯

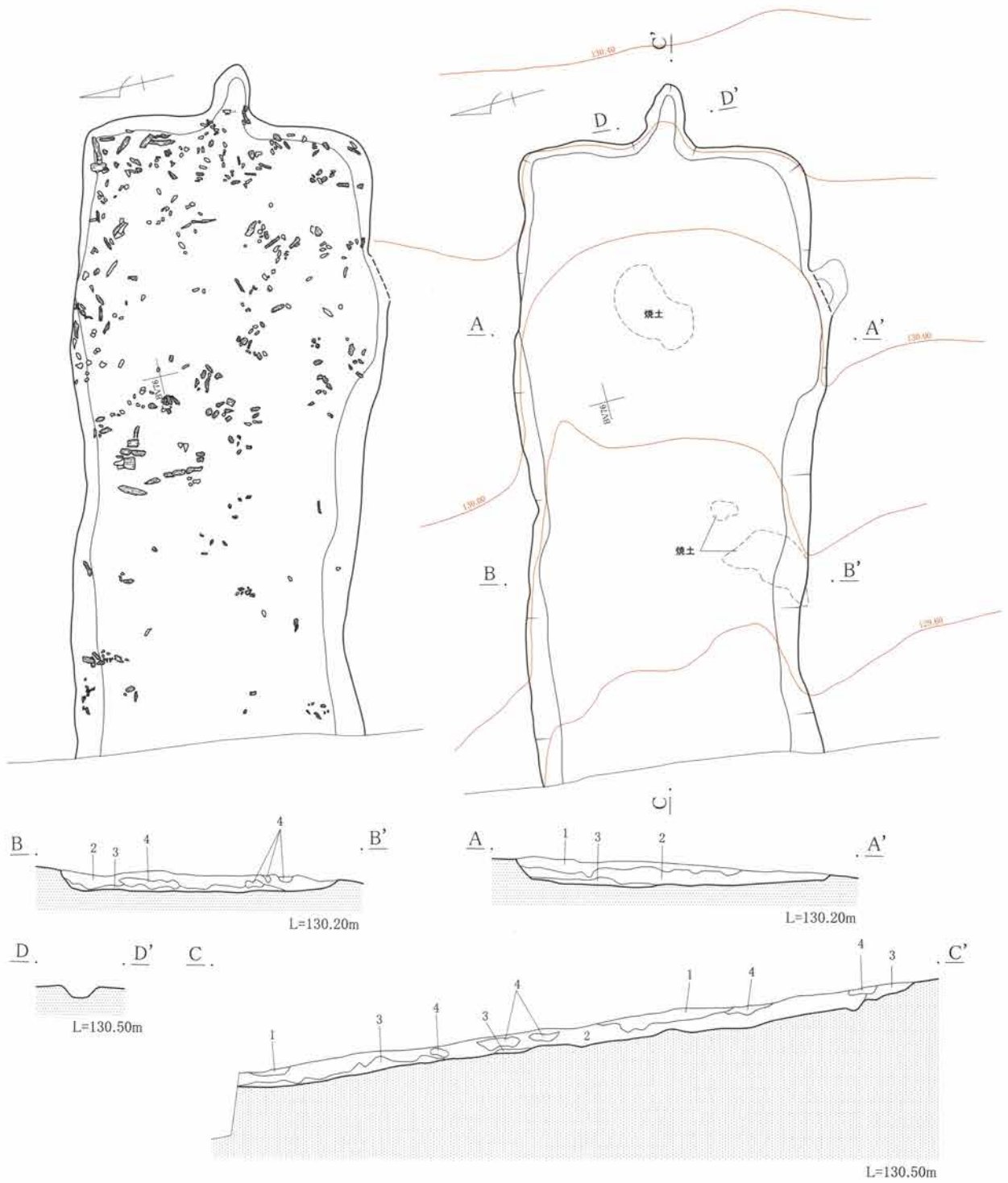


第65図 見切塚 5区20号炭窯

第2章 確認された遺構と遺物



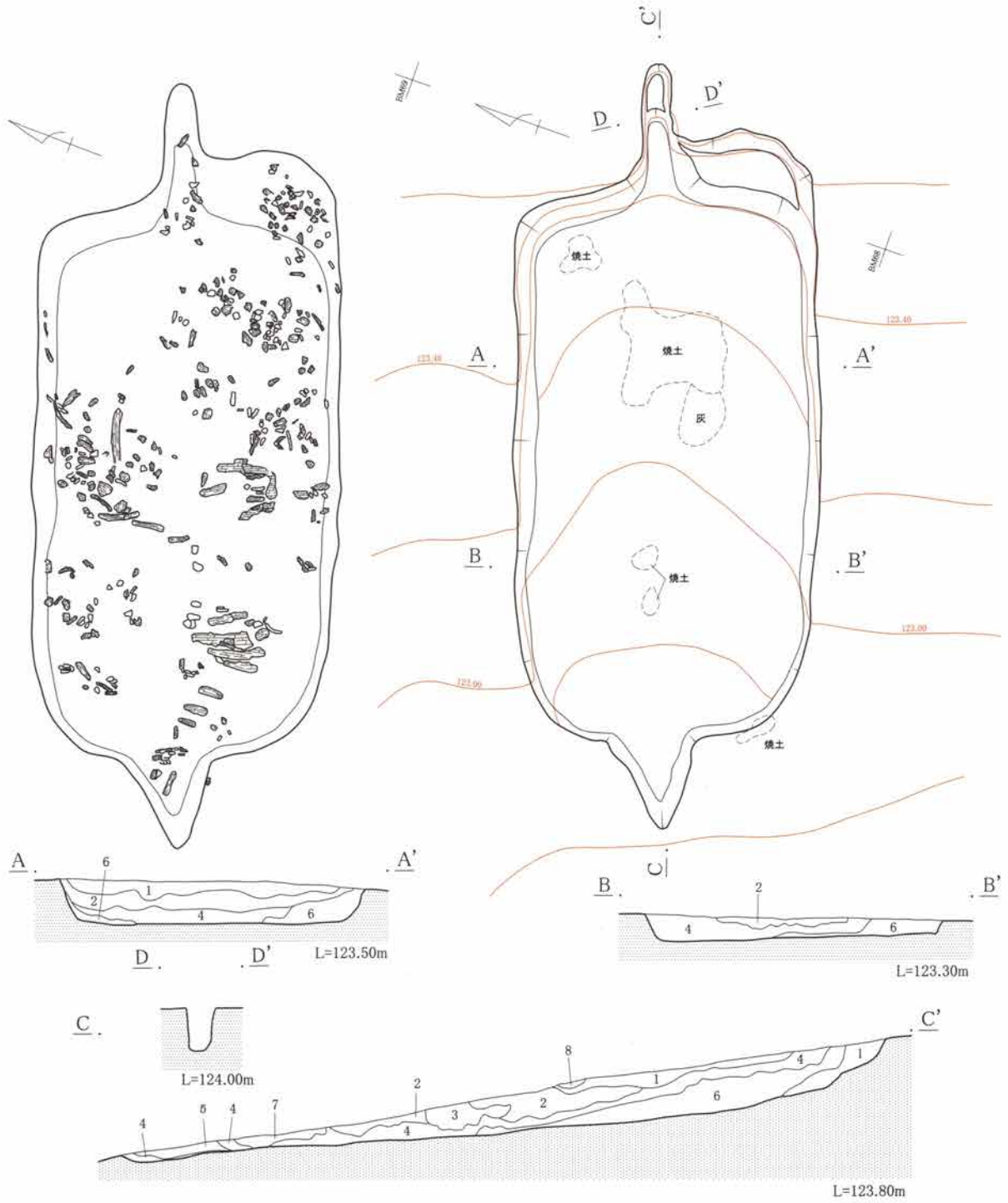
第66図 見切塚 5区18号・21号・22号炭窯



1. 黒褐色土層 (10YR2/1) 木炭片多量に含む。
2. 黒褐色土層 (10YR2/3) 榛名軽石とAs-C含む。木炭片多量に含む。締まりなく、軟らかい。
3. 褐色土層 (10YR4/3) ロームを主体とし、木炭片少量含む。
4. 焼土層

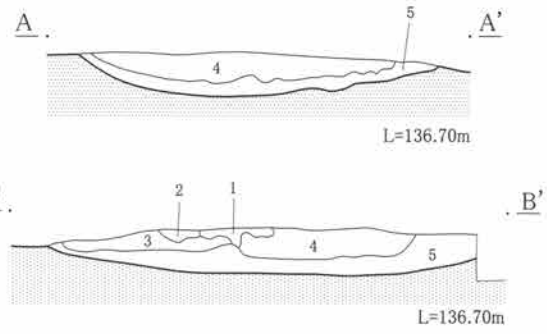
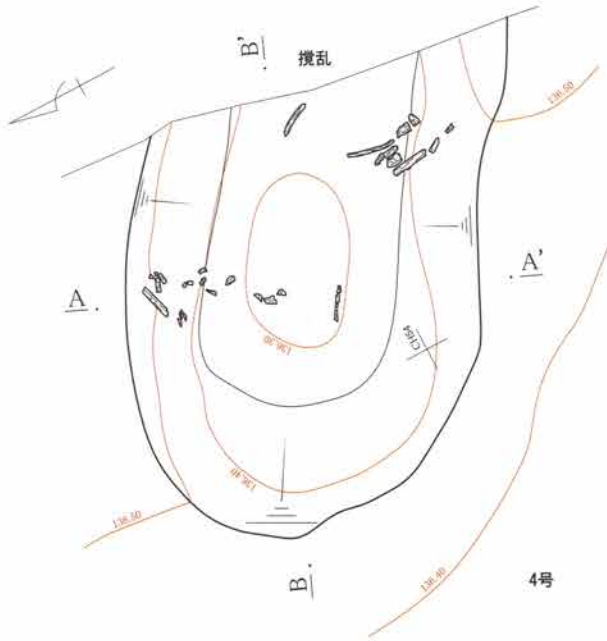
0 1:50 2m

第67図 見切塚 7区1号炭窯



1. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 木炭片多量に含む。焼土粒少量含む。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 木炭片多量に含む。締まりなく軟らかい。
3. 2層に焼土粒30%含む。
4. 黒色土層 (10YR2/2)
5. 4層に木炭片多量に含む。
6. 灰黄褐色土層 (10YR4/2)
7. 褐色土層 (10YR4/4) 木炭小片少量含む。
8. 焼土層

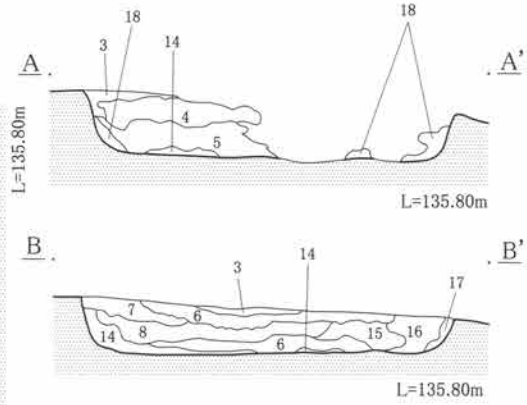
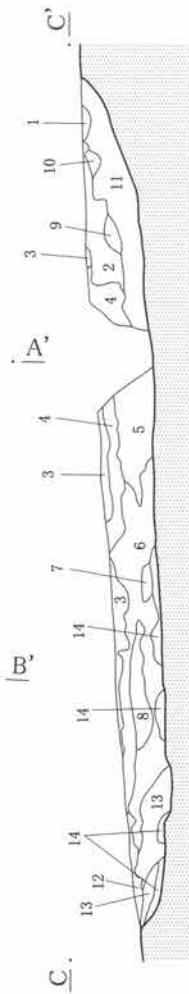
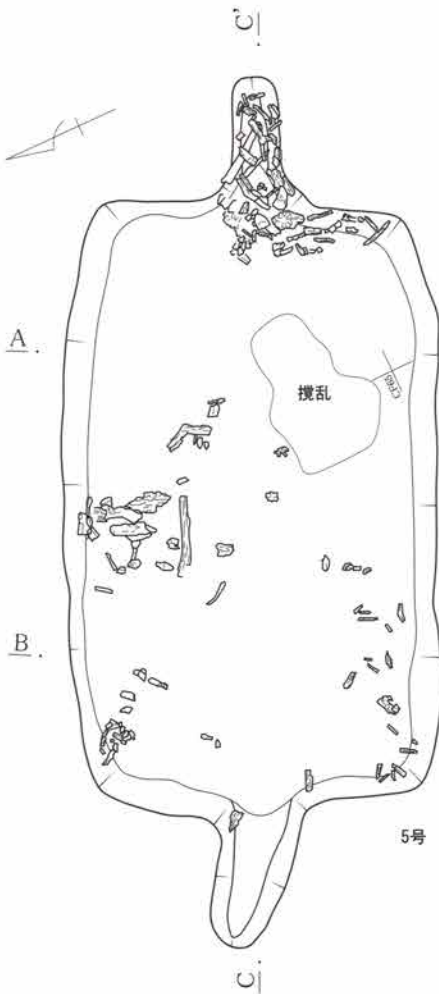
第68図 見切塚 7区2号炭窯



7区4号

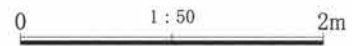
1. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム塊「小」含む。
2. 暗灰黄色土層 (2.5Y4/1) 砂壤土質。木炭片含まない。
3. 暗褐色土層 (10YR3/2) ローム粒「中」多く含む。
4. 黒色土層 (10YR2/1) 木炭片多量に含む。
5. 褐灰色土層 (10YR4/1) 暗褐色土とロームの混土層。

4号

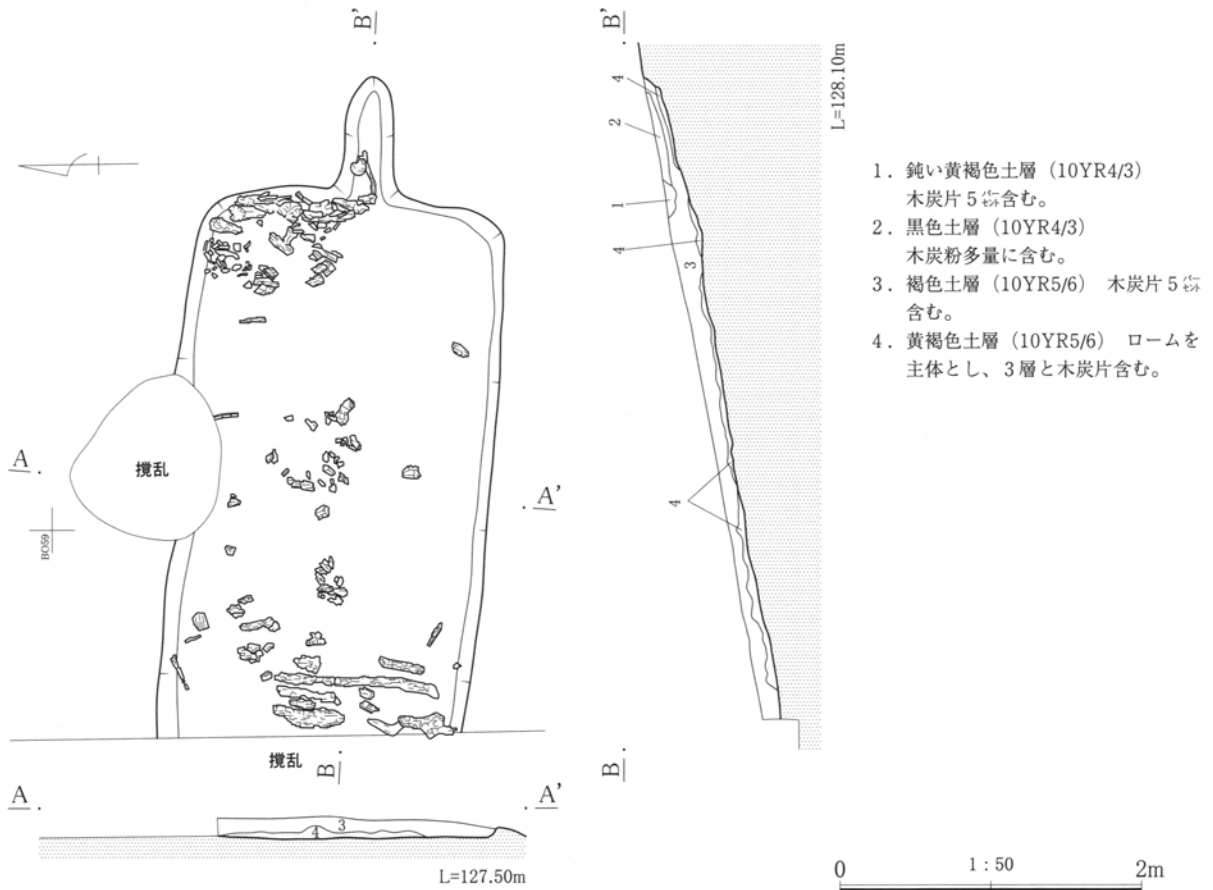


7区5号

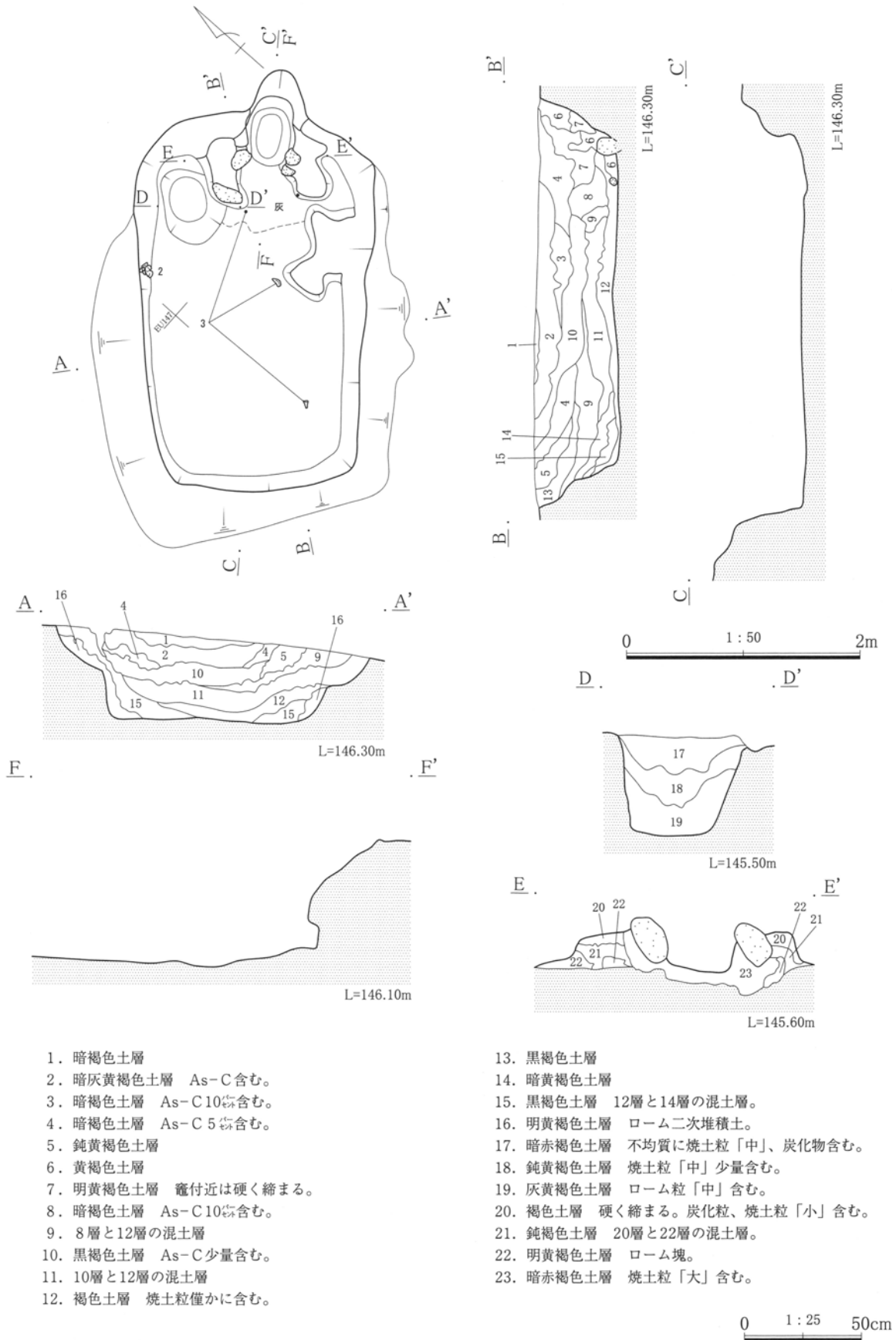
1. 暗褐色土層 (10YR3/3)
2. 灰黄褐色土層 (10YR2/2)
3. 褐灰色砂壤土層 (10YR4/1)
4. 黒褐色土層 (10YR3/1) 木炭片少量含む。
5. 鈍い黄褐色土層 (10YR4/3) ローム粒10 μ m含む。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2)
7. 黒色土層 (10YR1.7/1) 木炭片多量に含む。
8. 褐灰色土層 (10YR4/1)
9. 暗褐色土層 (10YR3/3)
10. 2層に比してやや黒み強い。
11. 黒色土層 (10YR2/1) 木炭片多量に含む。
12. 暗褐色土層 (10YR3/4) 木炭片含まない。
13. 黒色土層 (10YR1.7/1) 焼土粒微量含む。
14. 褐色土層 (10YR4/4) ローム粒30 μ m含む。
15. 14層に似るが、木炭片多量に含む。
16. 褐色土層 (10YR4/6)
17. 黄褐色土層 (10YR5/6)
18. ローム塊



第69図 見切塚 7区4号・5号炭窯

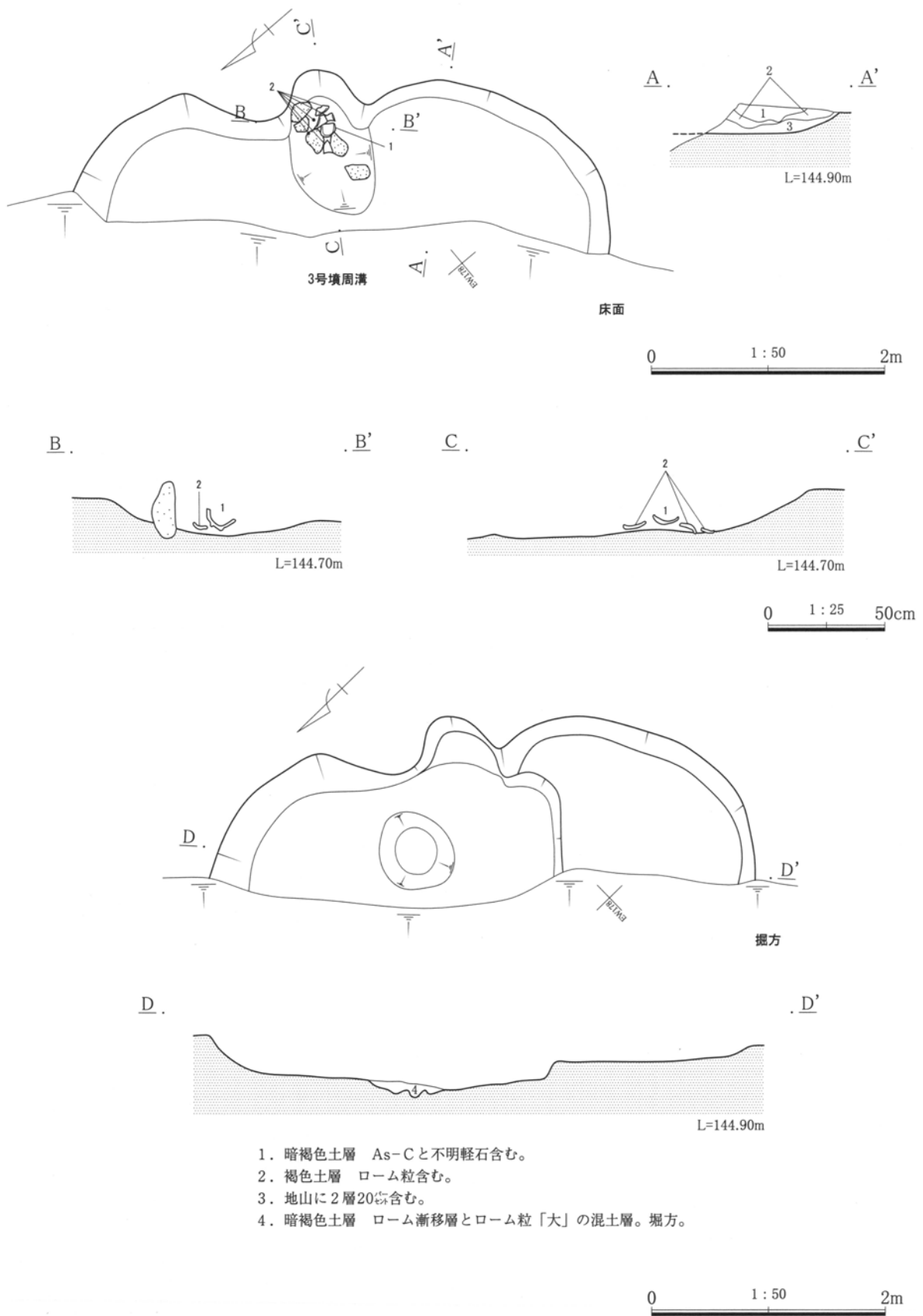


第70図 見切塚 7区6号炭窯

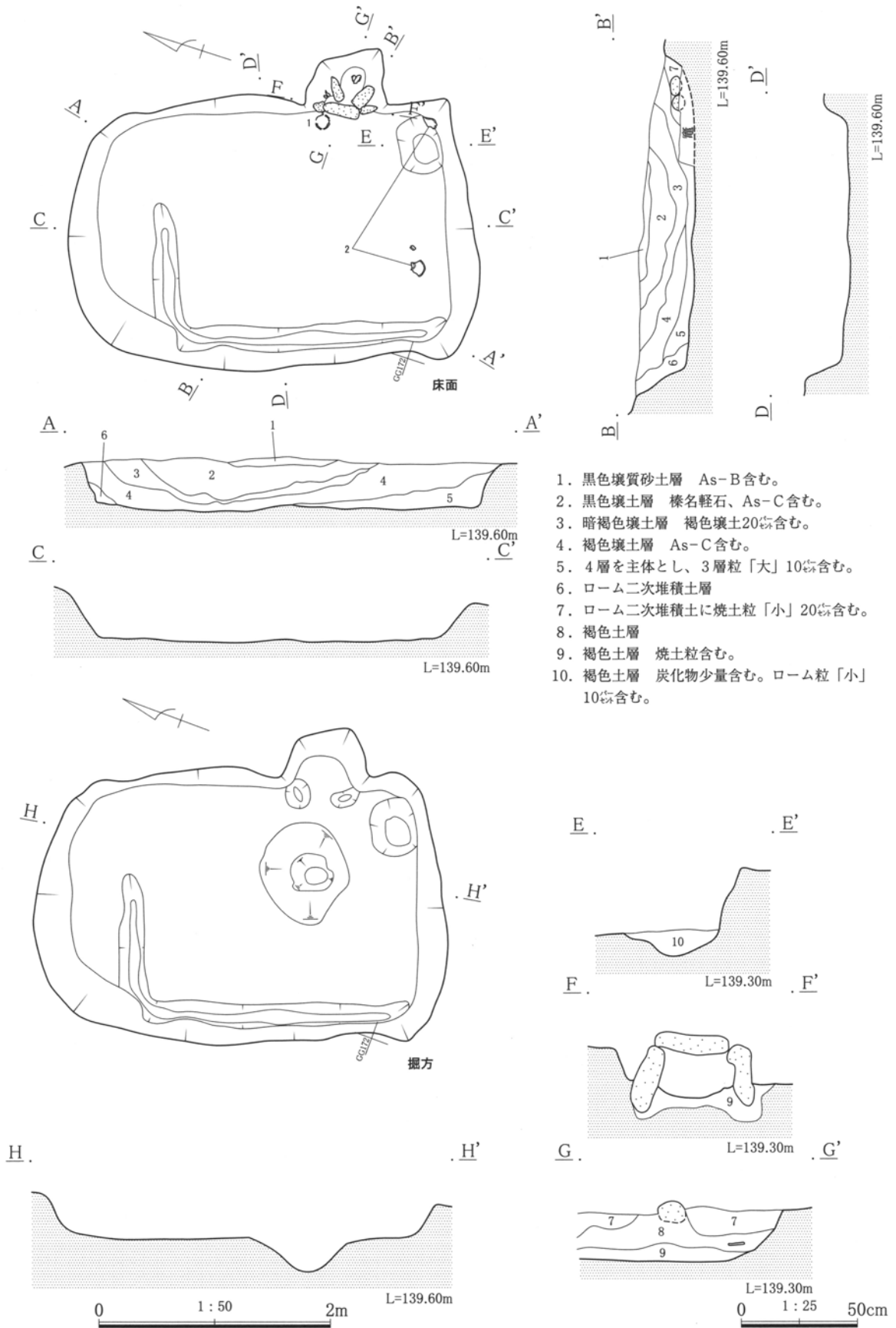


- 1. 暗褐色土層
- 2. 暗灰黄褐色土層 As-C含む。
- 3. 暗褐色土層 As-C 10%含む。
- 4. 暗褐色土層 As-C 5%含む。
- 5. 鈍黄褐色土層
- 6. 黄褐色土層
- 7. 明黄褐色土層 竈付近は硬く締まる。
- 8. 暗褐色土層 As-C 10%含む。
- 9. 8層と12層の混土層
- 10. 黒褐色土層 As-C少量含む。
- 11. 10層と12層の混土層
- 12. 褐色土層 焼土粒僅かに含む。
- 13. 黒褐色土層
- 14. 暗黄褐色土層
- 15. 黒褐色土層 12層と14層の混土層。
- 16. 明黄褐色土層 ローム二次堆積土。
- 17. 暗赤褐色土層 不均質に焼土粒「中」、炭化物含む。
- 18. 鈍黄褐色土層 焼土粒「中」少量含む。
- 19. 灰黄褐色土層 ローム粒「中」含む。
- 20. 褐色土層 硬く締まる。炭化粒、焼土粒「小」含む。
- 21. 鈍褐色土層 20層と22層の混土層。
- 22. 明黄褐色土層 ローム塊。
- 23. 暗赤褐色土層 焼土粒「大」含む。

第71図 三騎堂 H1号住居

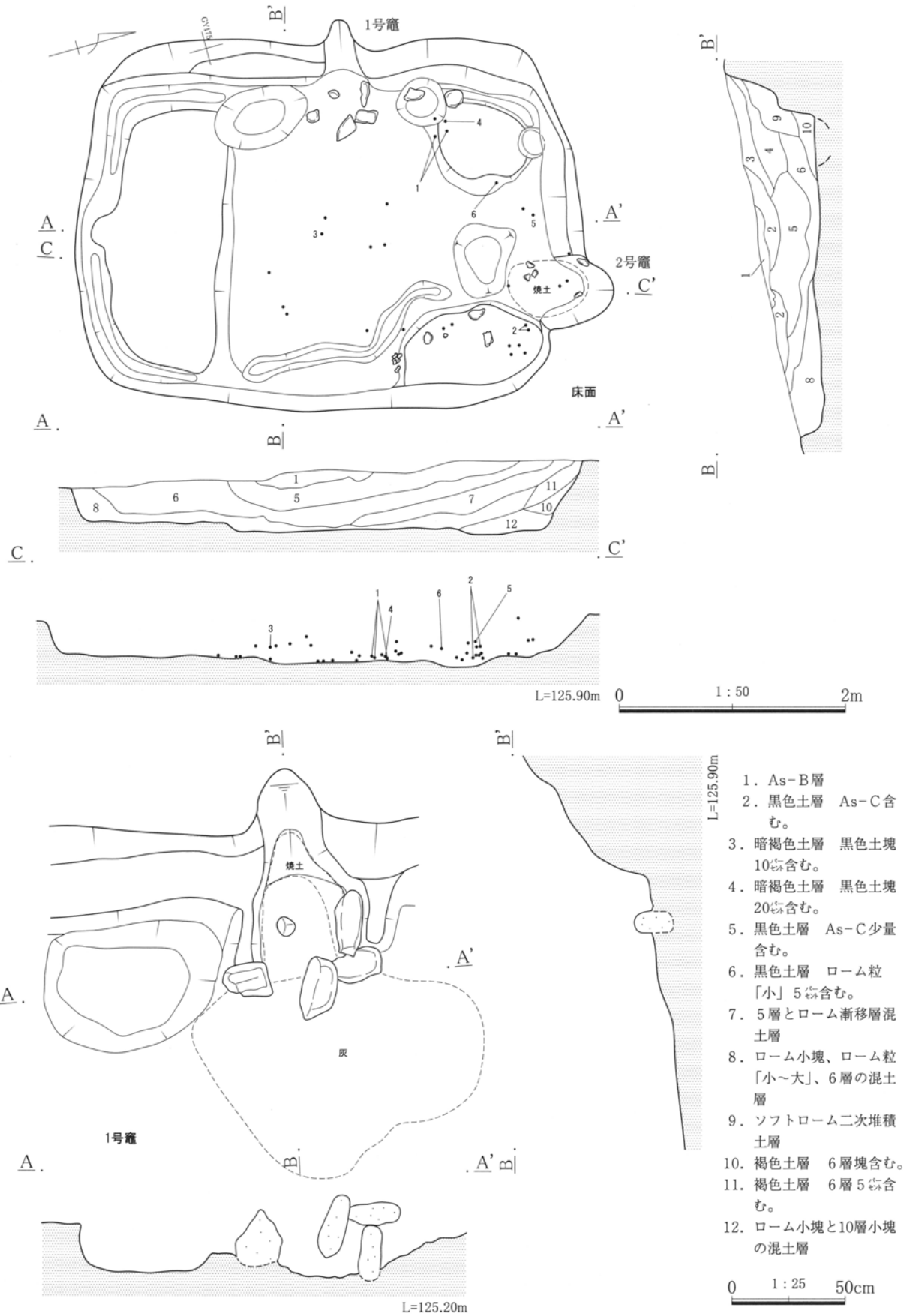


第72図 三騎堂 H2号住居

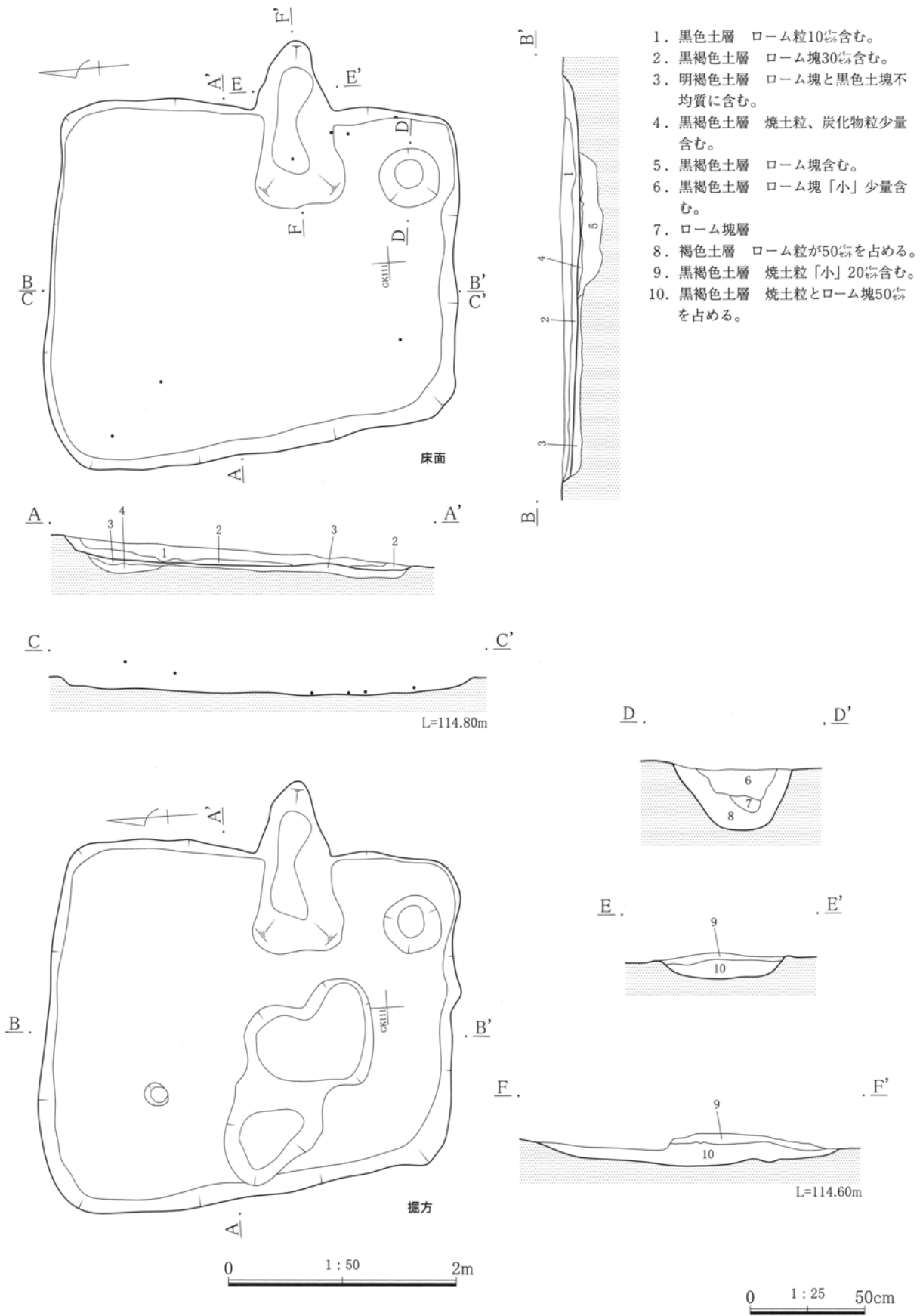


第73図 三騎堂 H3号住居

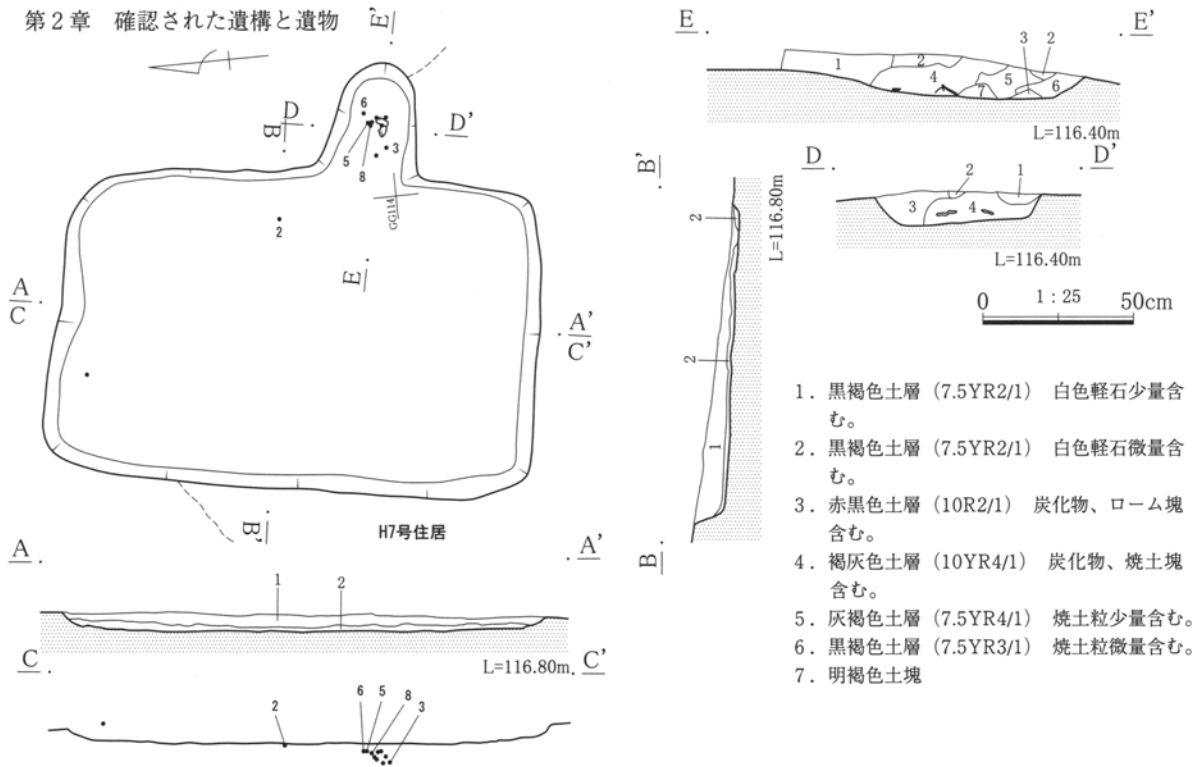
第2章 確認された遺構と遺物



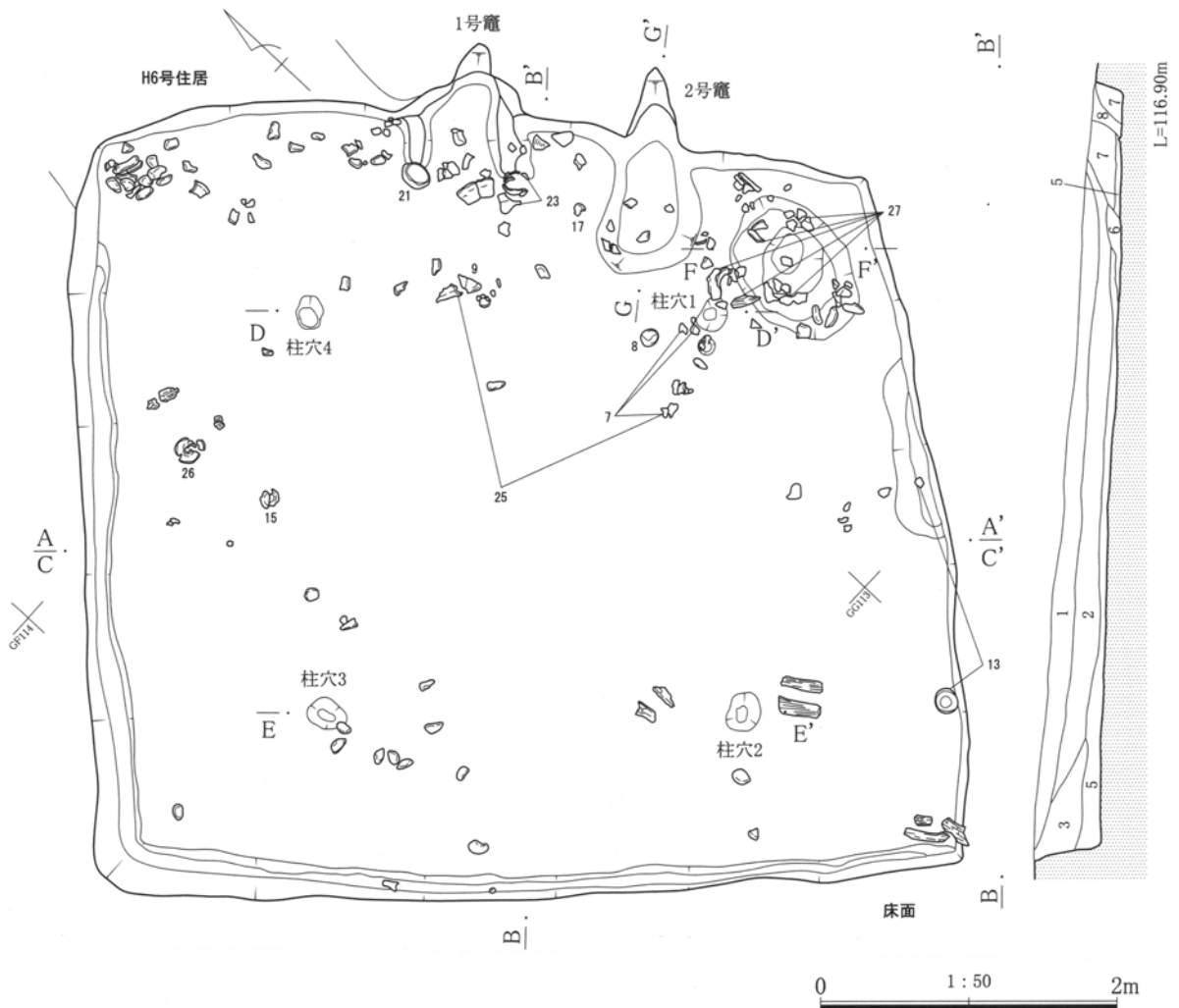
第74図 三騎堂 H4号住居

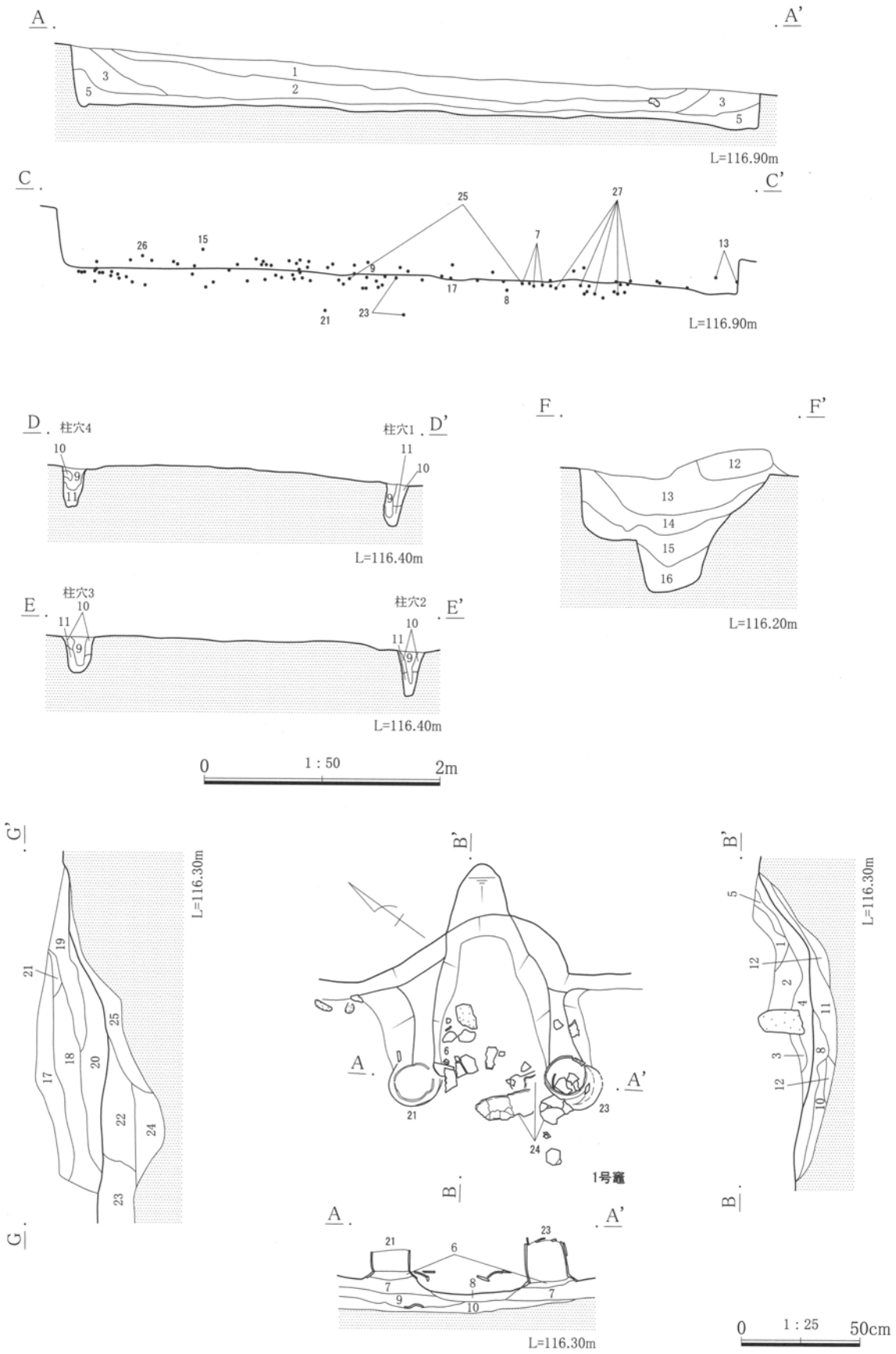


第75図 三騎堂 H5号住居



第76図 三騎堂 H6号住居





第78図 三騎堂 H7号住居(2)

第2章 確認された遺構と遺物

1. 黒褐色土層 (5YR2/1) As-C、ローム粒少量含む。
2. 黒色土層 (5YR1.7/1) As-C、炭化物、ローム粒少量含む。
3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 1層よりAs-C少量、ローム粒多く含む。
4. 褐色土層 (10YR4/4) ロームを主体とし、As-C含まない。
5. 黒褐色土層 (10YR3/2) ローム粒、炭化物多く含む。
6. 黒褐色土層 (10YR3/2) 5層を主体とし、粘土10%含む。
7. 黒褐色土層 (10YR3/2) 炭化物、焼土塊含む。
8. 黒褐色土層 (10YR2/2) 6層に比して炭化物多く含む。
9. 黒褐色土層 (5YR2/1) 柱痕。黒味強く軟質。
10. 褐色土層 (7.5YR4/3) ローム塊含む。
11. ローム二次堆積層
12. 灰色粘土層 (7.5YR5/1)
13. 褐色土層 (7.5YR4/3) 焼土粒含む。
14. 褐色土層 (7.5YR4/3) ローム塊含む。
15. 暗灰色土層 (N3/) 不明軽石多く含む。
16. 暗灰色土層 (N3/) ローム塊含む。

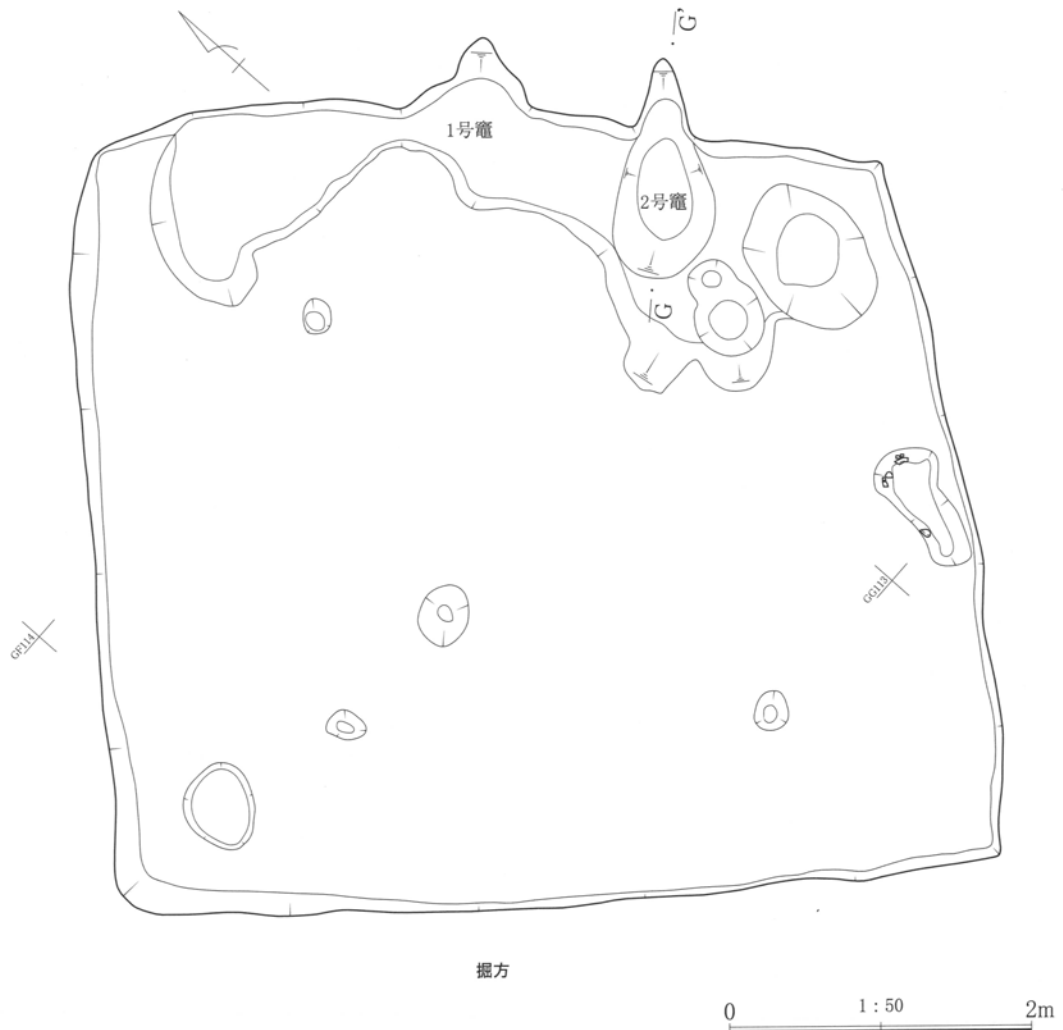
1号竈

1. 灰褐色土層 (5YR4/2) 焼土粒少量含む。
2. 灰褐色土層 (5YR4/2) 焼土粒、粘土小塊含む。
3. 灰褐色土層 (5YR4/2) 焼土塊多く含む。
4. 灰褐色土層 (5YR4/2) 不明軽石多く含む。
5. 鈍赤褐色土層 (5YR5/4) 焼土塊を主体とする。

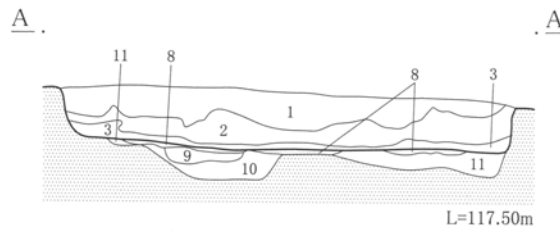
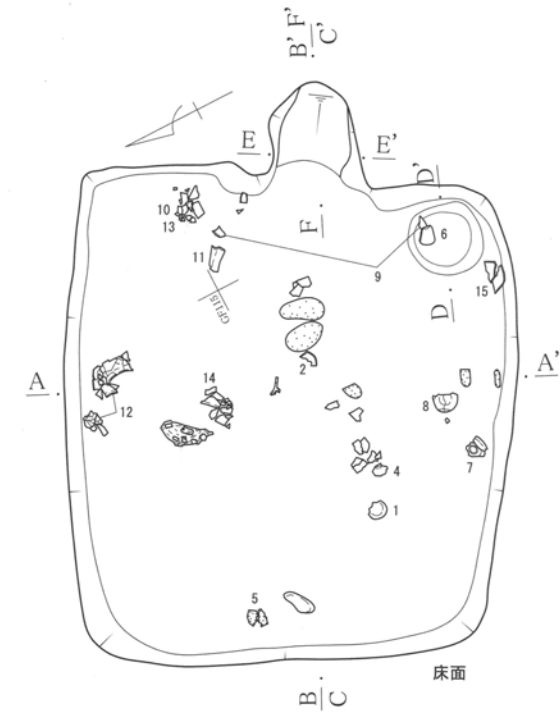
6. 鈍赤褐色土層 (5YR5/4) 焼土を主体とする。
7. 褐灰色土層 焼土少量含む。
8. 黒褐色土層 (5YR3/1)
9. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) ローム、焼土、粘土含む。
10. 鈍褐色土層 (7.5YR5/3) ローム塊多く含む。
11. 黒褐色土層 (5YR3/1) ローム粒、焼土小塊含む。
12. 褐色土層 (7.5YR4/3) ローム多く含む。

2号竈

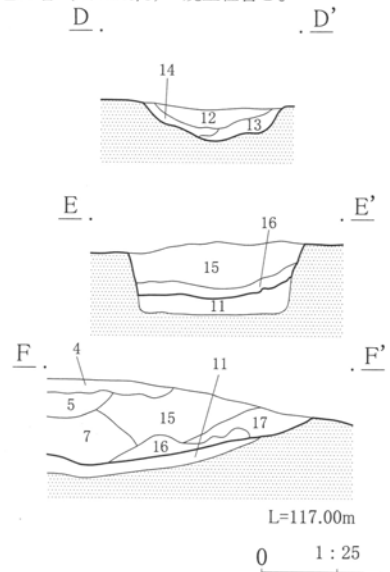
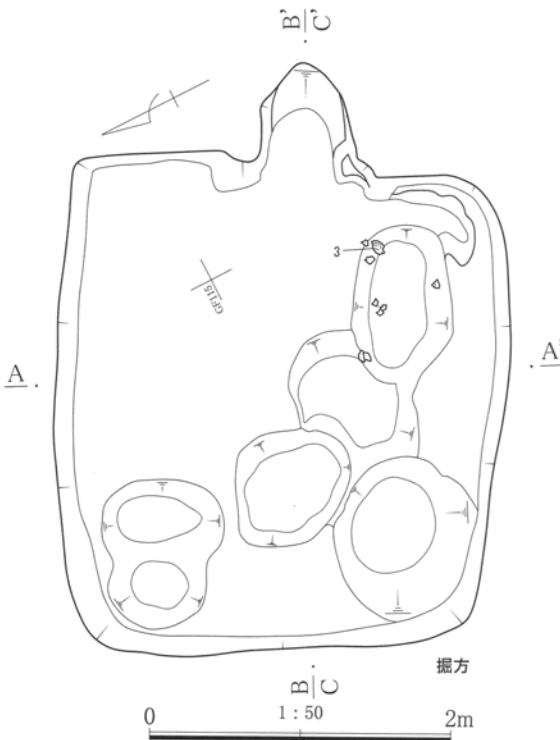
17. 灰褐色土層 (7.5YR4/2) 焼土粒、ローム含む。
18. 褐色土層 (7.5YR4/3) 焼土粒、炭化物粘土塊含む。
19. 灰褐色土層 (5YR4/2) 焼土、炭化物塊含む。
20. 鈍赤褐色土層 (5YR4/4) 焼土、炭化物、粘土塊混土層。
21. 明赤褐色土層 (5YR5/8) 焼土層。
22. 灰褐色土層 (5YR4/2) 炭化物、焼土、粘土混土層。
23. 灰褐色土層 (5YR4/2) ローム塊含む。
24. 灰褐色土層 (5YR4/2) 粘質。
25. 灰褐色土層 (5YR4/2) 焼土、炭化物、粘土塊含む。



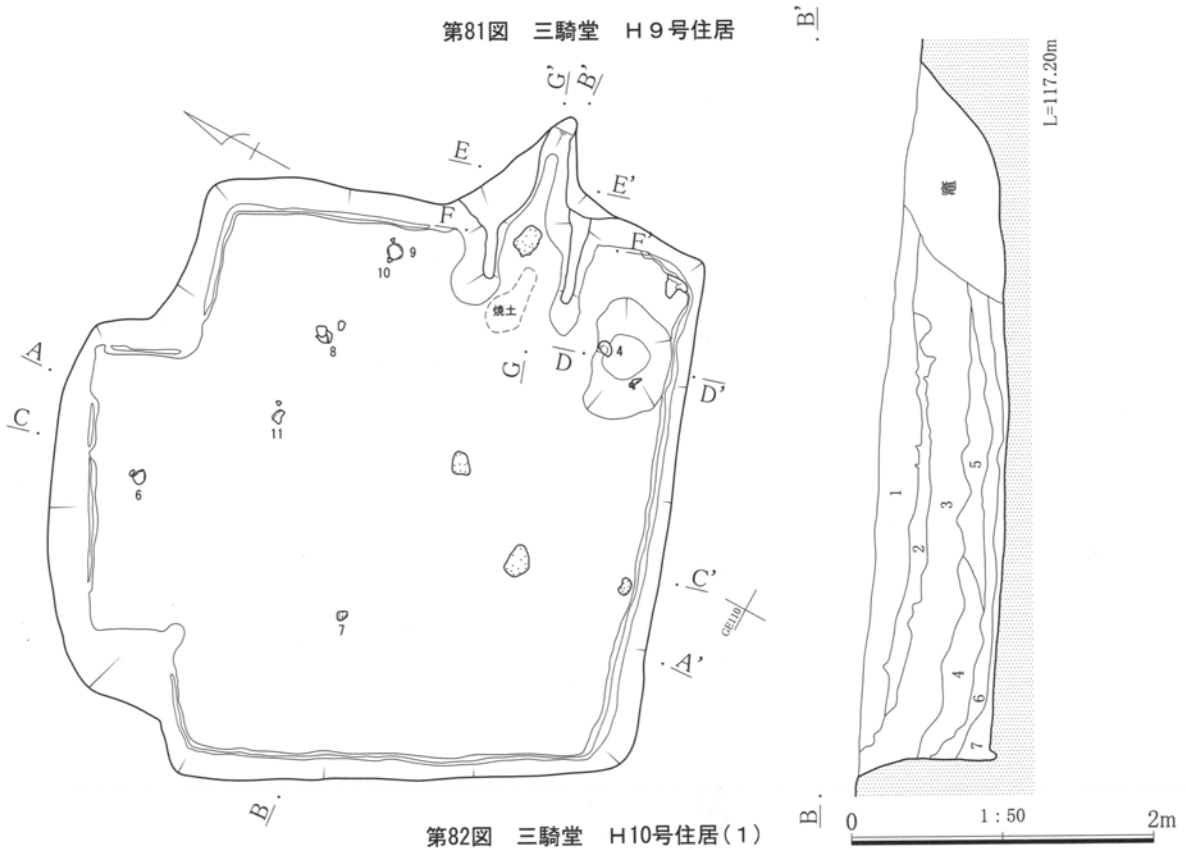
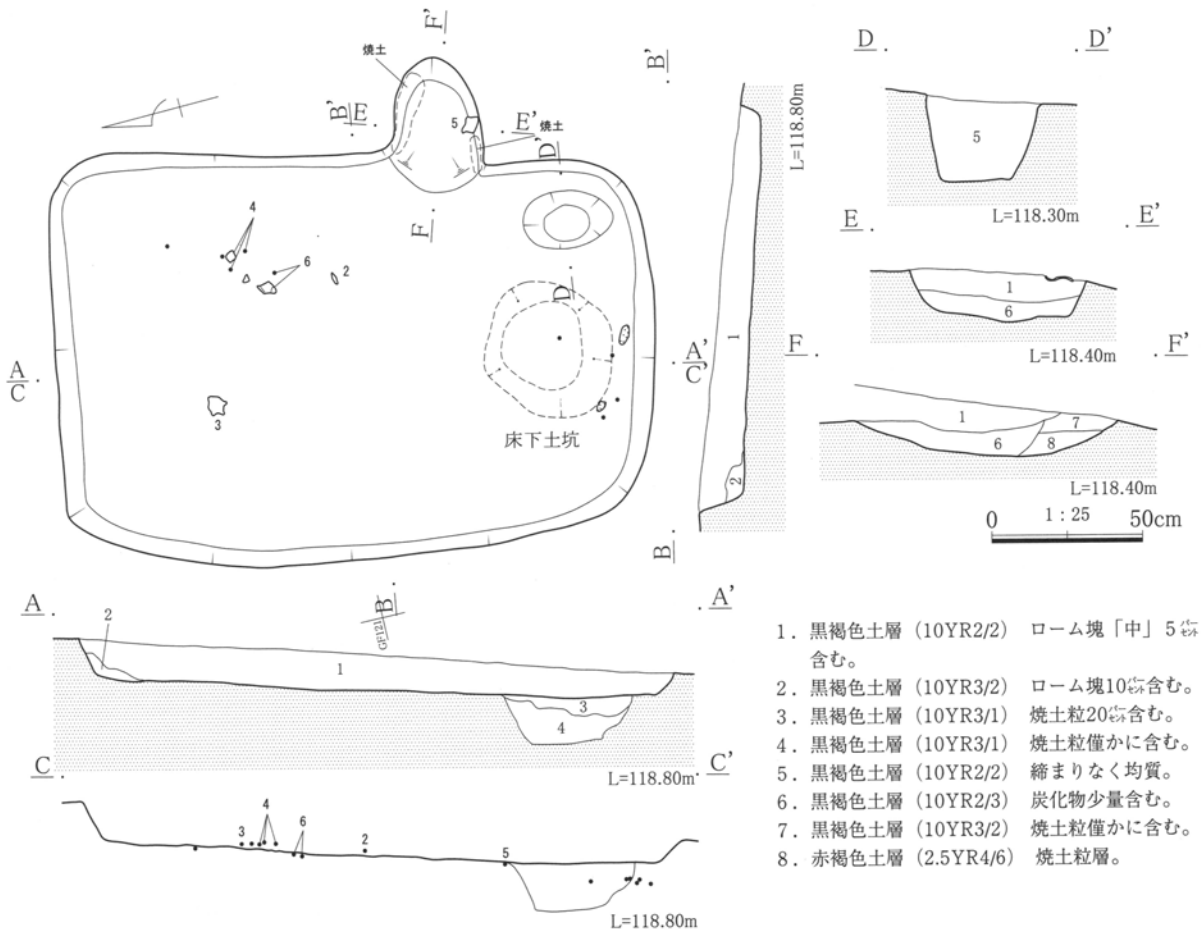
第79図 三騎堂 H7号住居(3)

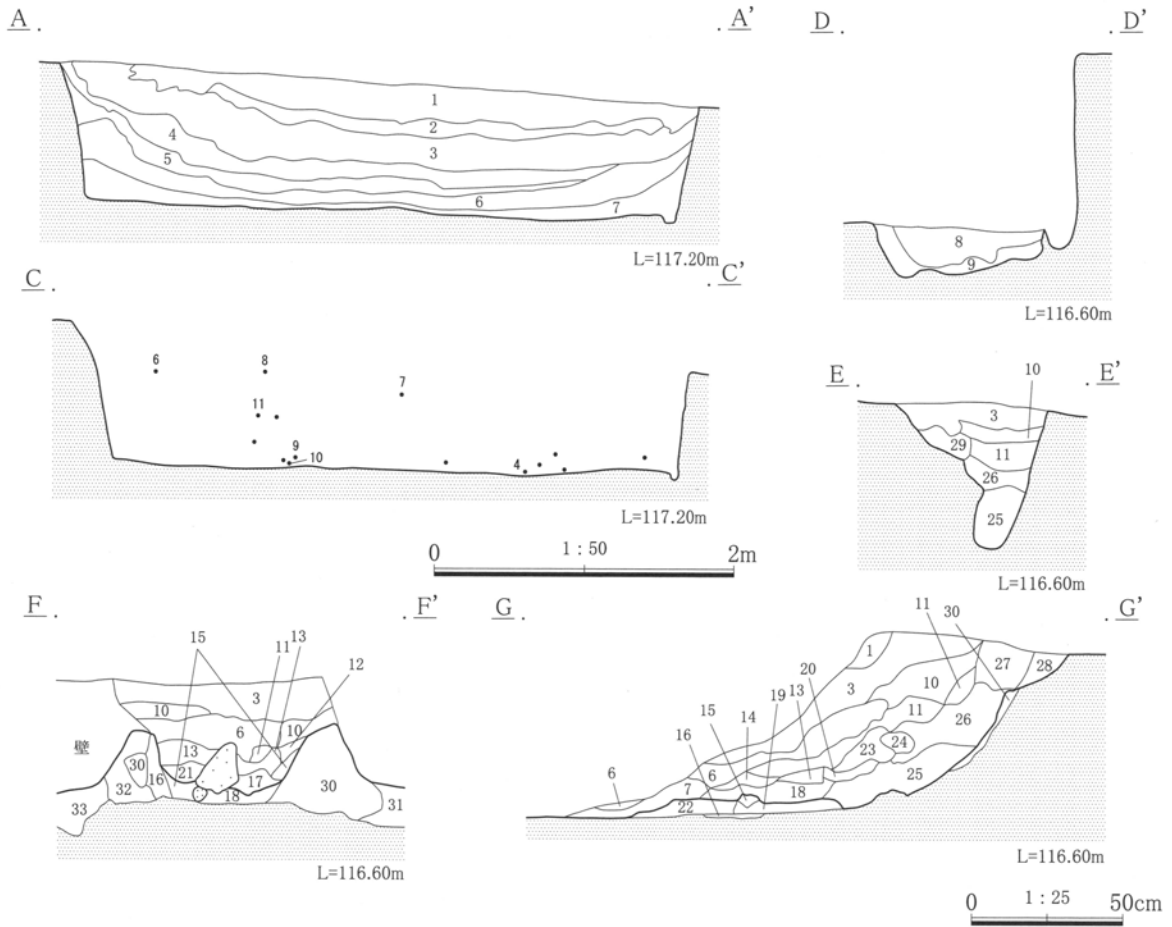


1. 黒色土層 (N1.5) 黒褐色土含む。
2. 黒色土層 (N1.5) As-C含む。
3. 焼土塊と褐色土塊の混土層
4. 1層に焼土粒、黄褐色土塊含む。
5. 黒褐色土層 (5YR2/1) 焼土粒 5粒以下含む。
6. 5層と7層の混土層
7. 暗褐色土層 (10YR3/3) 黄橙色土塊30%含む。
8. 黒褐色土層 (7.YR3/2) ローム塊と黒色土の混土層。貼り床。
9. 鈍赤褐色土層 (5YR4/4) 焼土、ローム、炭化物の混土層。
10. 鈍赤褐色土層 (5YR4/4) 9層に比してローム塊大きい。
11. 褐色土層 (7.5YR4/4) ローム塊、黒色土の混土層。掘方。
12. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3)
13. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 焼土粒、炭化物含む。
14. 褐色土層 (10YR4/4) ローム塊含む。
15. 褐色土と焼土の混土層
16. 黒褐色土層 (5YR8/1) 焼土粒「小」5粒含む。
17. 明黄褐色土層 (10YR6/8) 焼土粒含む。



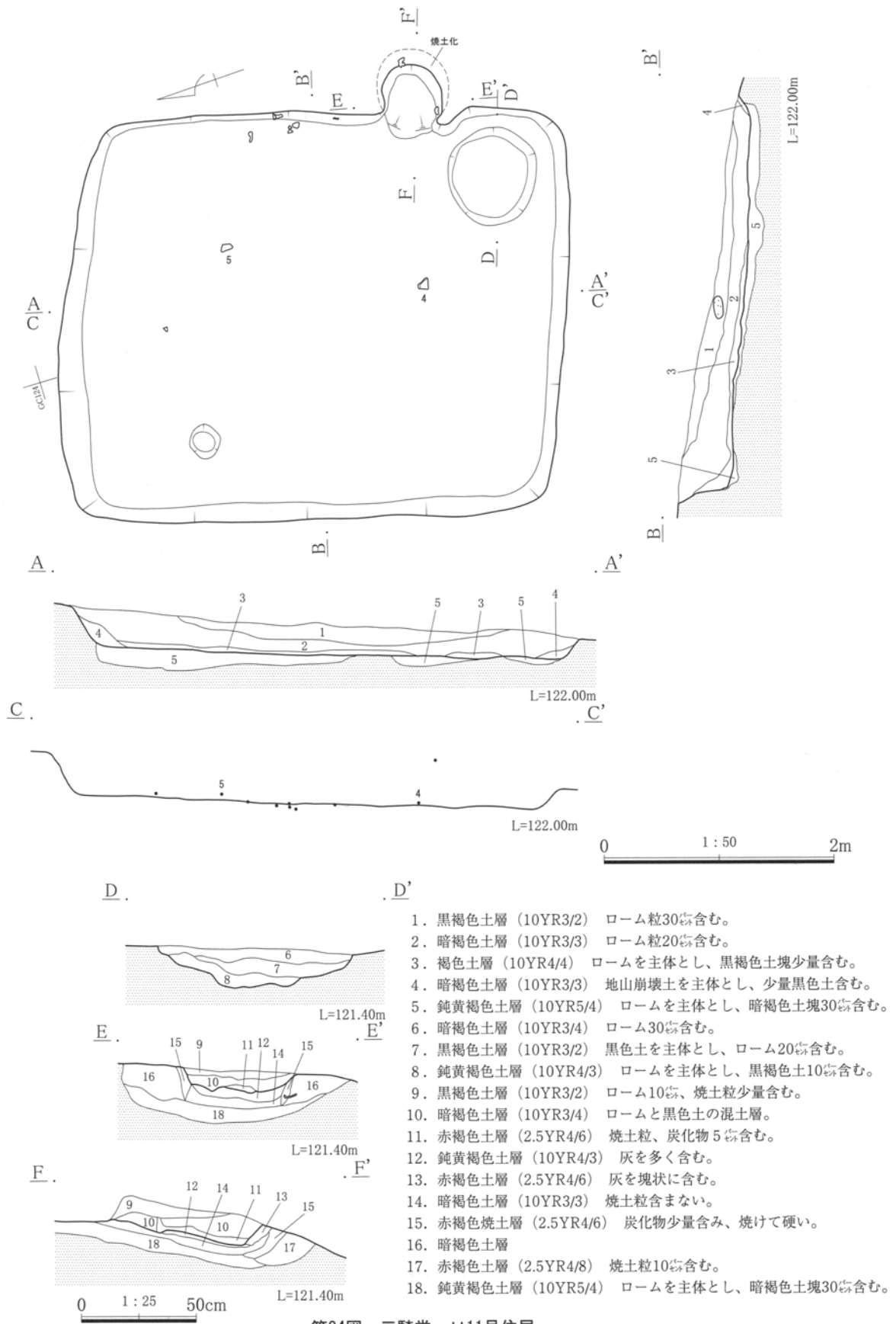
第80図 三騎堂 H8号住居



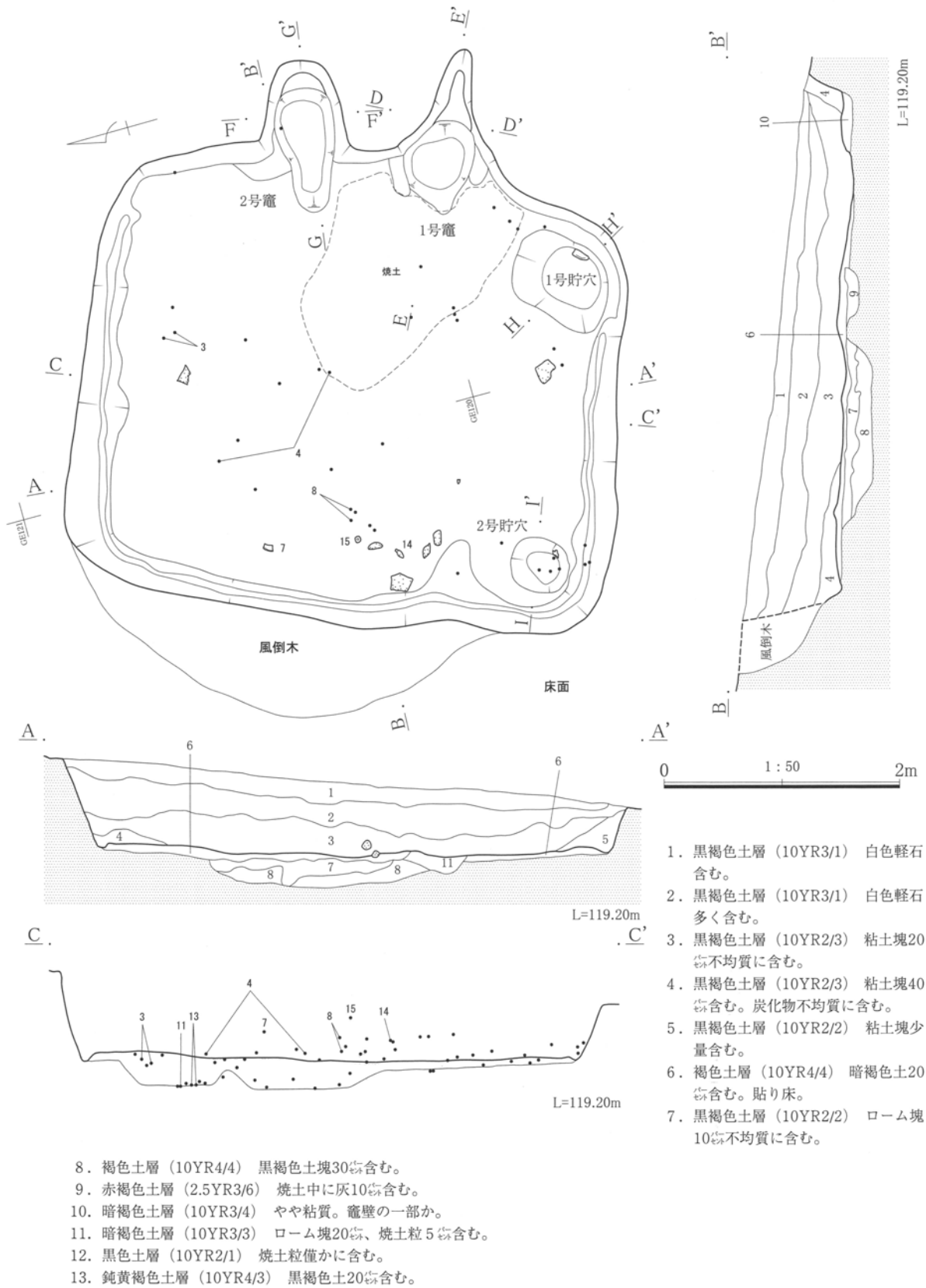


- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒色土層 (N1.5/) 黒褐色土含む。 2. 黒色土層 (N1.5/) As-C含む。 3. 黒褐色土層 (10YR3/2) 軽石多く含む。 4. 3層にローム粒「中」40%含む。 5. 黒色土層 (7.5YR2/1) ローム粒「小」10%含む。 6. 黄褐色土層 (10YR5/6) ローム粒「極小」多く含む。 7. 6層にローム粒層状に含む。 8. 黒褐色土層 (10YR3/1) 炭化物僅かに含む。 9. 黒褐色土層 (10YR3/1) ローム粒「小」5%含む。 10. 黒褐色土層 (10YR2/2) 焼土粒僅かに含む。 11. 灰褐色土層 (7.5YR4/2) 焼土粒「小」5%含む。竈天井崩落土か。 12. 灰褐色土層 (10YR5/2) 焼土粒「小」5%含む。 13. 灰褐色土層 (7.5YR4/1) 焼土粒「小」含む。 14. 鈍褐色土層 (7.5YR5/4) しまり強い。竈材崩落土か。 15. 赤褐色焼土層 天井、壁崩落土。 16. 赤褐色焼土層 地山焼土化した範囲。 17. 灰黄褐色土層 (10YR5/2) ローム粒含む。 18. 褐灰色粘土層 (10YR5/1) 褐灰色土含む。天井崩落土。 19. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) 焼土粒多く含む。上面に灰含む。使用面。 20. 橙色土層 (7.5YR7/6) 焼土化した壁、天井粘土崩落土。 21. 鈍褐色土層 (7.5YR5/3) 焼土粒僅かに含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 22. 鈍赤褐色土層 (2.5YR4/4) 竈使用面焼土。 23. 褐灰色土層 (10YR4/1) 焼土粒僅かに含む。 24. 褐灰色土層 (5YR4/1) 焼土粒多く含む。 25. 灰褐色土層 (5YR5/2) 焼土粒「中」多く含む。 26. 灰褐色土層 (7.5YR5/2) 27. 鈍褐色土層 (7.5YR5/4) 焼土粒「中」40%含む。 28. 黒褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒「小」5%含む。煙道埋土。 29. 黒褐色土層 (10YR3/1) 焼土粒僅かに含む。 30. 灰褐色粘土層 (7.5YR4/2) 炭化物、焼土粒僅かに含む。 31. 黒褐色土と灰褐色粘土混土層 32. 黒褐色粘質土層 (10YR3/1) ローム塊、粘土塊、焼土粒含む。 33. 黒褐色土層 (10YR3/2) 32層に比してローム塊多く含む。 |
|---|--|

第83図 三騎堂 H10号住居(2)



第84図 三騎堂 H11号住居

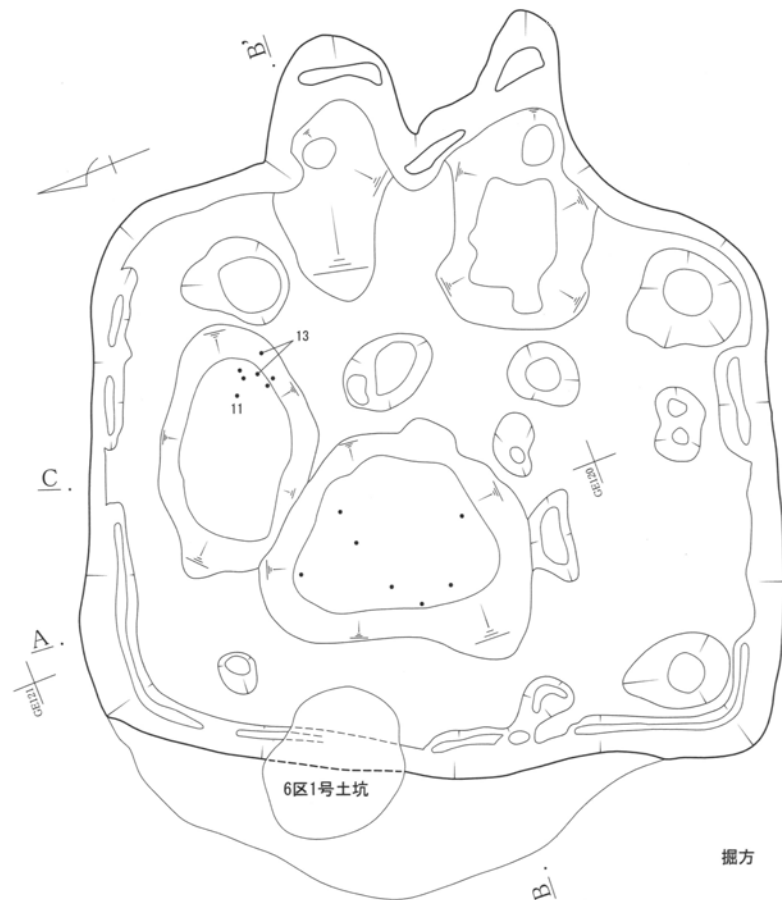
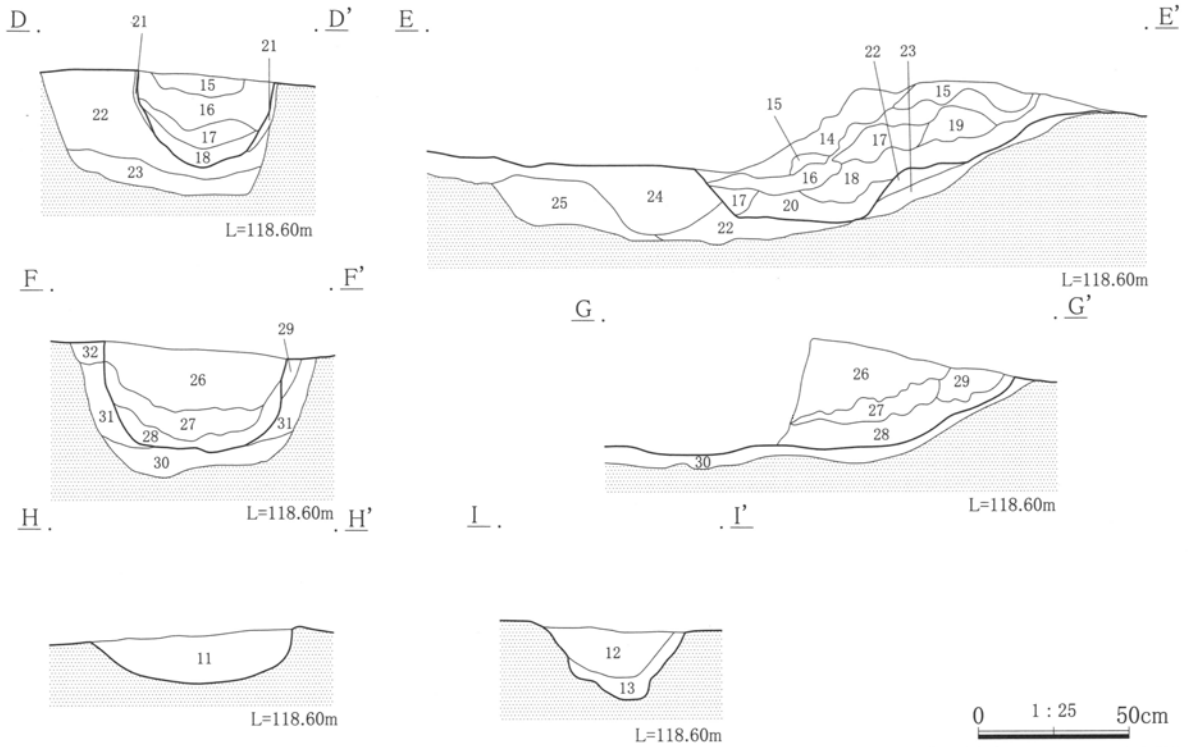


- 8. 褐色土層 (10YR4/4) 黒褐色土塊30%含む。
- 9. 赤褐色土層 (2.5YR3/6) 焼土中に灰10%含む。
- 10. 暗褐色土層 (10YR3/4) やや粘質。竈壁の一部か。
- 11. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム塊20%、焼土粒5%含む。
- 12. 黒色土層 (10YR2/1) 焼土粒僅かに含む。
- 13. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 黒褐色土20%含む。

- 1. 黒褐色土層 (10YR3/1) 白色軽石含む。
- 2. 黒褐色土層 (10YR3/1) 白色軽石多く含む。
- 3. 黒褐色土層 (10YR2/3) 粘土塊20%不均質に含む。
- 4. 黒褐色土層 (10YR2/3) 粘土塊40%含む。炭化物不均質に含む。
- 5. 黒褐色土層 (10YR2/2) 粘土塊少量含む。
- 6. 褐色土層 (10YR4/4) 暗褐色土20%含む。貼り床。
- 7. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム塊10%不均質に含む。

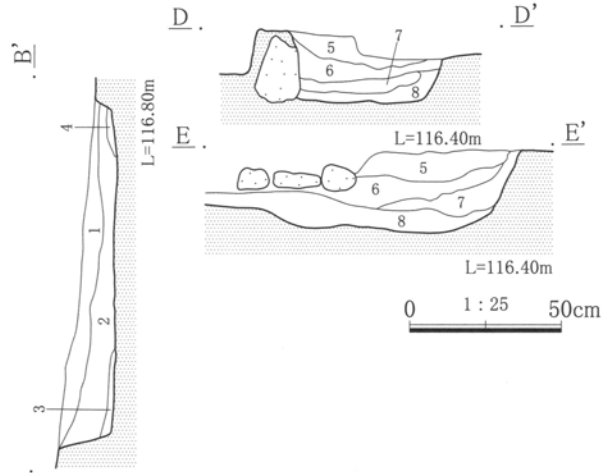
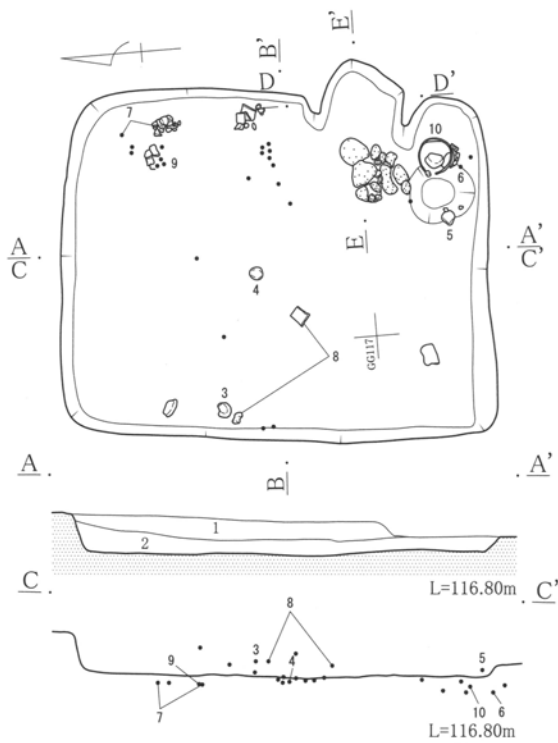
第85図 三騎堂 H12号住居(1)

第2章 確認された遺構と遺物



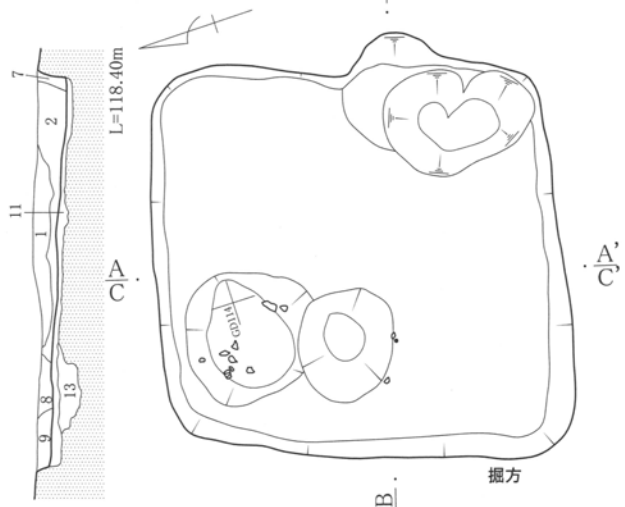
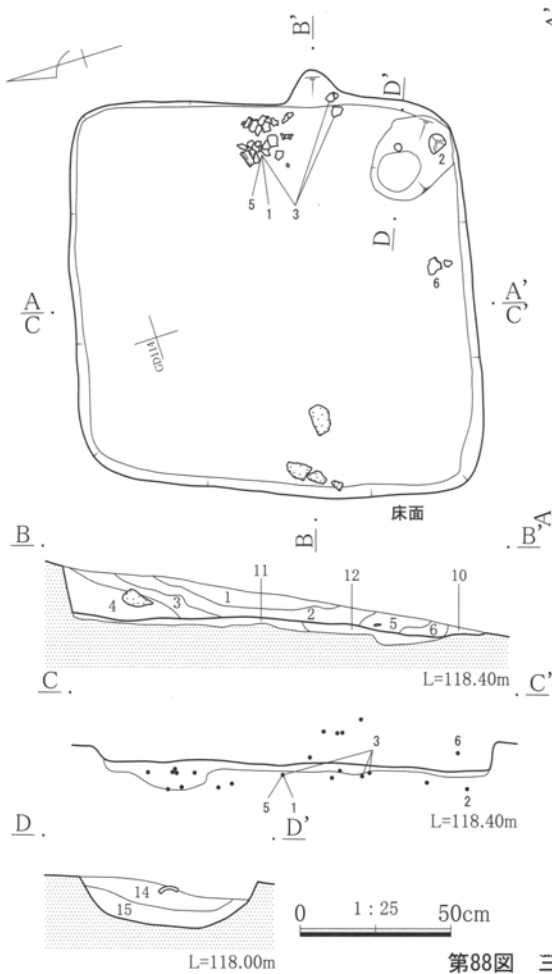
- 0 1 : 25 50cm
- 14. 灰褐色土層 (7.5YR4/2) 焼土塊僅かに含む。
 - 15. 鈍黄褐色粘質土層 (10YR5/3) 壁崩落土。
 - 16. 鈍赤褐色土層 (2.5YR4/4) 焼土塊多く含む。土器片含む。
 - 17. 灰褐色土層 (5YR4/2) 焼土、灰粒含む。
 - 18. 黒褐色土層 (5YR2/1) 灰僅かに含む。焼土粒含む。
 - 19. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 焼土塊含む。
 - 20. 鈍褐色土層 (7.5YR5/3) 灰、焼土多く含む。
 - 21. 赤褐色土層 (2.5YR4/3) 竈壁焼土。
 - 22. 褐色土層 (10YR4/6) 粘土、焼土粒含まない。
 - 23. 褐色土層 (10YR4/4) 粘土塊含む。
 - 24. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒、ローム塊、各20%含む。
 - 25. ローム塊と暗褐色土の混土層
 - 26. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒含む。
 - 27. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 焼土塊多く含む。
 - 28. 黒色土層 (7.5YR2/1) 焼土粒、灰僅かに含む。
 - 29. 鈍黄褐色土層 (10YR4/3) 焼土塊、粘土塊含む。
 - 30. 暗褐色土層 (10YR3/4) 地山黒褐色土とロームの混土層。
 - 31. 暗褐色土層 (10YR3/4) 焼土、炭化物少量含む。
 - 32. 暗褐色土層 (10YR3/4) 地山に比して色調やや明るい。軟らかい。
- 0 1 : 50 2m

第86図 三騎堂 H12号住居(2)



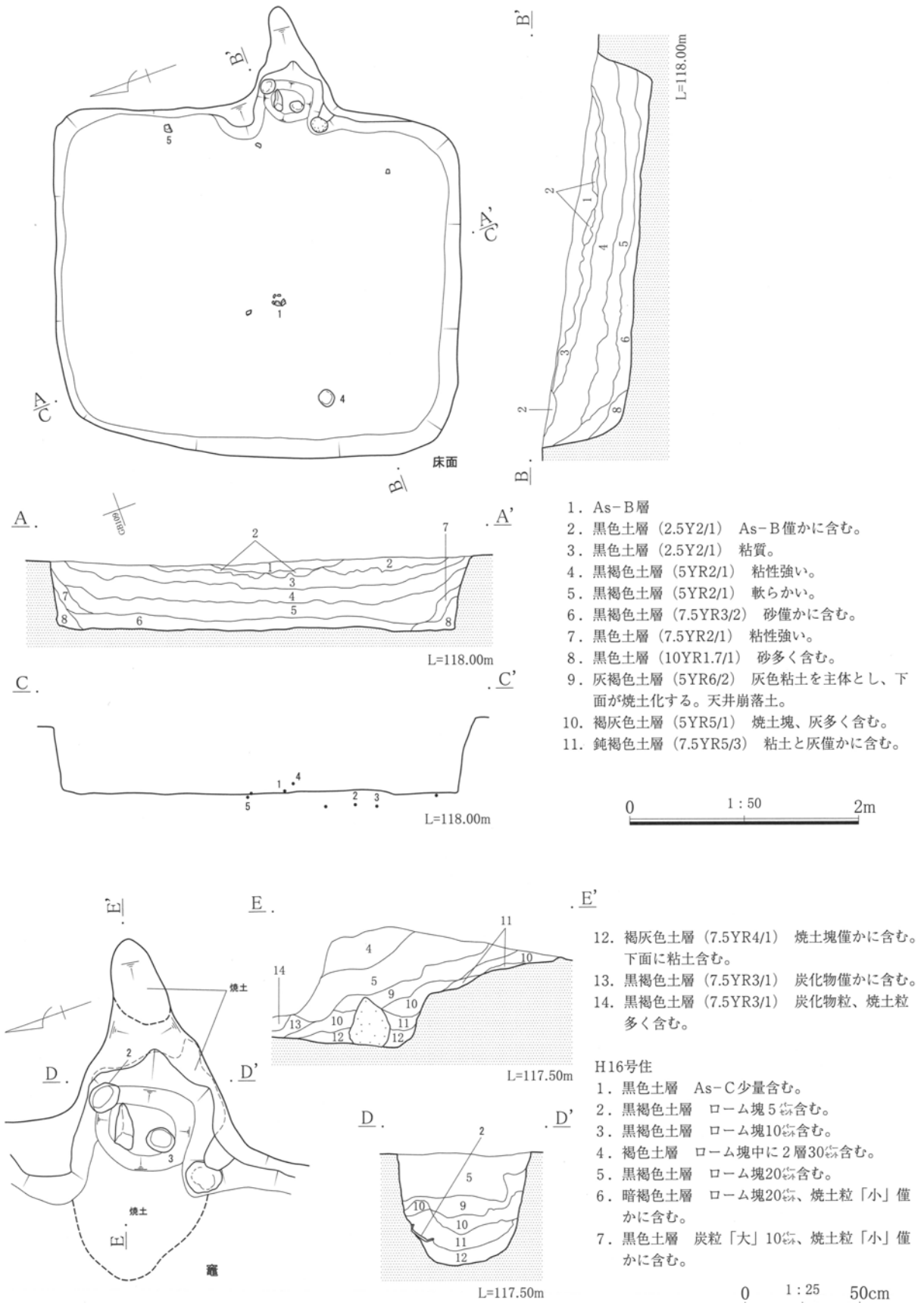
1. 黒褐色土層 (5YR2/1) As-C 含む。
2. 黒褐色土層 (5YR2/1) As-C 僅かに含む。
3. 黒褐色土層 (5YR2/1) 粘性強い。
4. 暗赤褐色土層 (5YR3/3) ローム粒、焼土粒少量含む。
5. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 焼土塊「小」 僅かに含む。
6. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) As-C 少量含む。
7. 黒褐色土層 (7.5YR2/2) As-C 僅かに含み、粘性強い。
8. 黒色土層 (7.5YR2/1) 炭化物多く含む。焼土物少量含む。

第87図 三騎堂 H13号住居



1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム塊40%含む。As-C 僅かに含む。
2. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム塊と褐色土の混土層。As-C 含む。
3. 黒褐色土層 (10Y2/2) ローム塊30%含む。
4. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム塊40%含む。As-C 含まない。
5. 暗褐色土層 (10YR3/3) ローム塊と褐色土の混土層。As-C 含まない。
6. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒極小を5%含む。
7. 黒褐色土層 (10YR2/3) ローム塊と褐色土の混土層。ローム塊がやや多い。
8. 暗褐色土層 (10YR3/3) 5層に同じ。
9. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム塊と黒色土の混土層。
10. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒「小」10%含む。
11. 暗褐色土層 (10YR3/4) ローム塊中に黒褐色土を20%含む。
12. 黒褐色土層 (10YR2/2) ローム塊10%含む。
13. 暗褐色土層 (7.5YR3/3) 焼土粒「中」20%含む。
14. 褐色土層 (10YR4/4) ローム塊40%含む。
15. 黄褐色土層 (10YR5/6) 褐色土を40%含む。焼土粒僅かに含む。

第88図 三騎堂 H15号住居



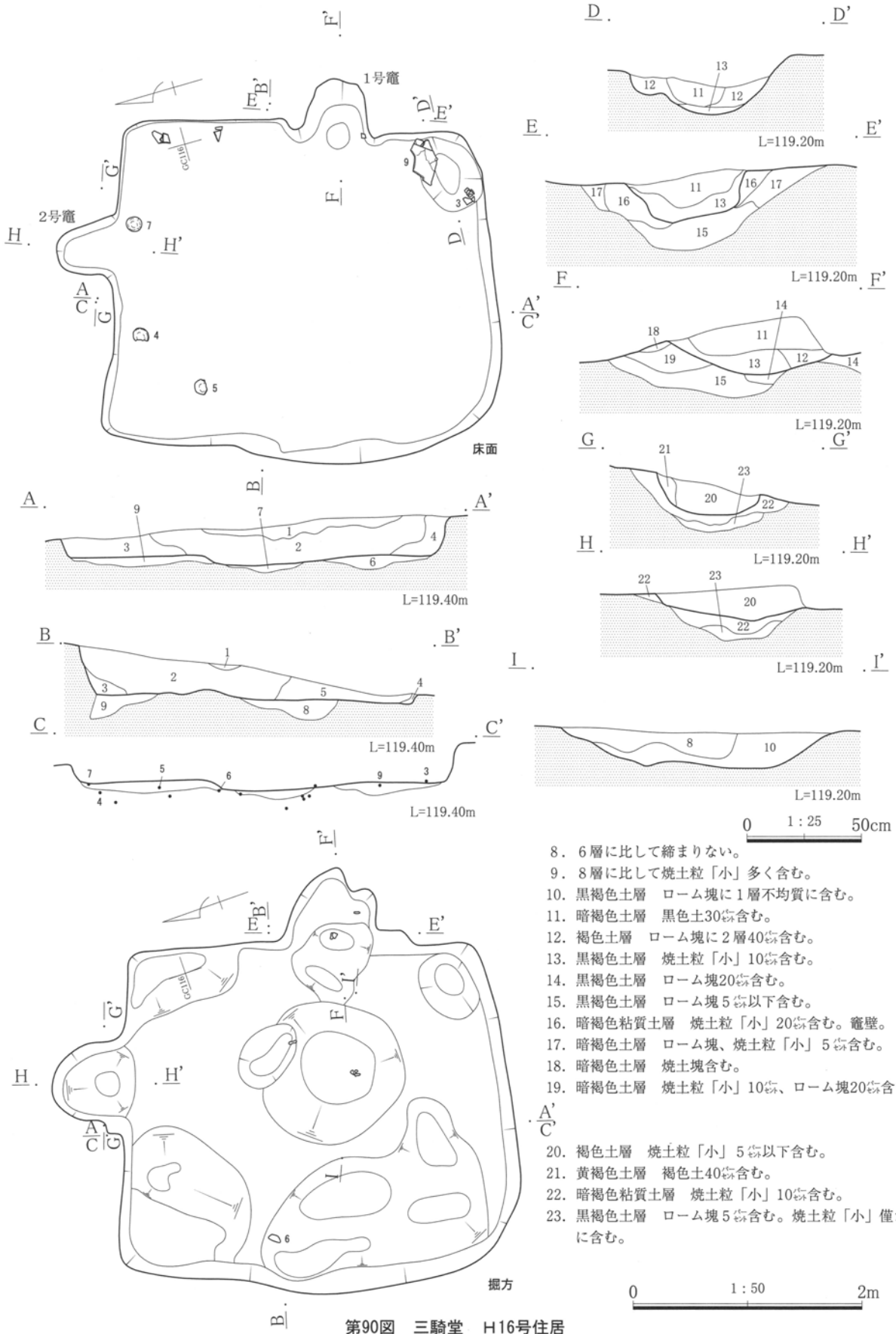
1. As-B層
2. 黒色土層 (2.5Y2/1) As-B僅かに含む。
3. 黒色土層 (2.5Y2/1) 粘質。
4. 黒褐色土層 (5YR2/1) 粘性強い。
5. 黒褐色土層 (5YR2/1) 軟らかい。
6. 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 砂僅かに含む。
7. 黒色土層 (7.5YR2/1) 粘性強い。
8. 黒色土層 (10YR1.7/1) 砂多く含む。
9. 灰褐色土層 (5YR6/2) 灰色粘土を主体とし、下面が焼土化する。天井崩落土。
10. 褐灰色土層 (5YR5/1) 焼土塊、灰多く含む。
11. 鈍褐色土層 (7.5YR5/3) 粘土と灰僅かに含む。

12. 褐灰色土層 (7.5YR4/1) 焼土塊僅かに含む。下面に粘土含む。
13. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) 炭化物僅かに含む。
14. 黒褐色土層 (7.5YR3/1) 炭化物粒、焼土粒多く含む。

H16号住

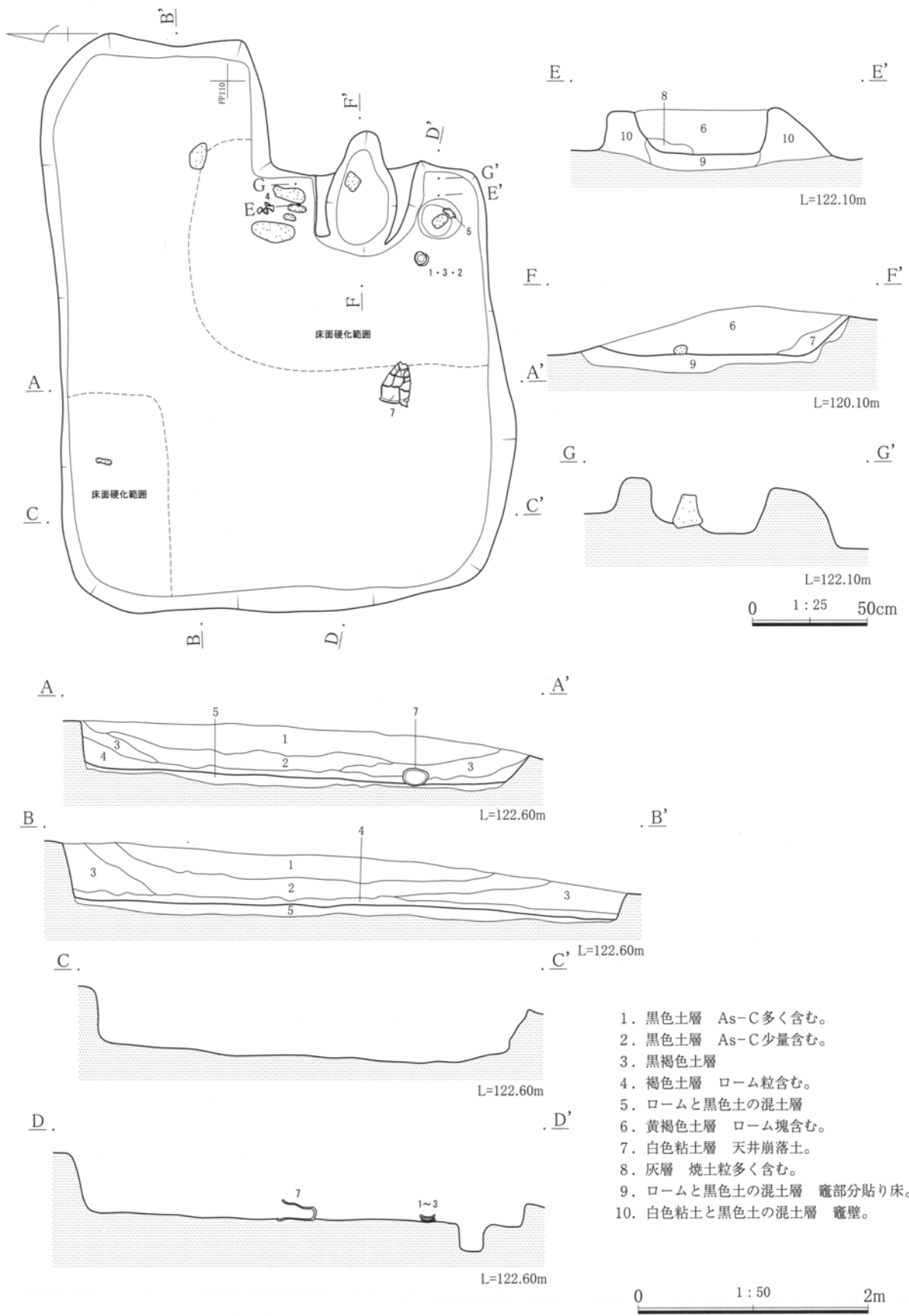
1. 黒色土層 As-C少量含む。
2. 黒褐色土層 ローム塊5%含む。
3. 黒褐色土層 ローム塊10%含む。
4. 褐色土層 ローム塊中に2層30%含む。
5. 黒褐色土層 ローム塊20%含む。
6. 暗褐色土層 ローム塊20%、焼土粒「小」僅かに含む。
7. 黒色土層 炭粒「大」10%、焼土粒「小」僅かに含む。

第89図 三騎堂 H14号住居

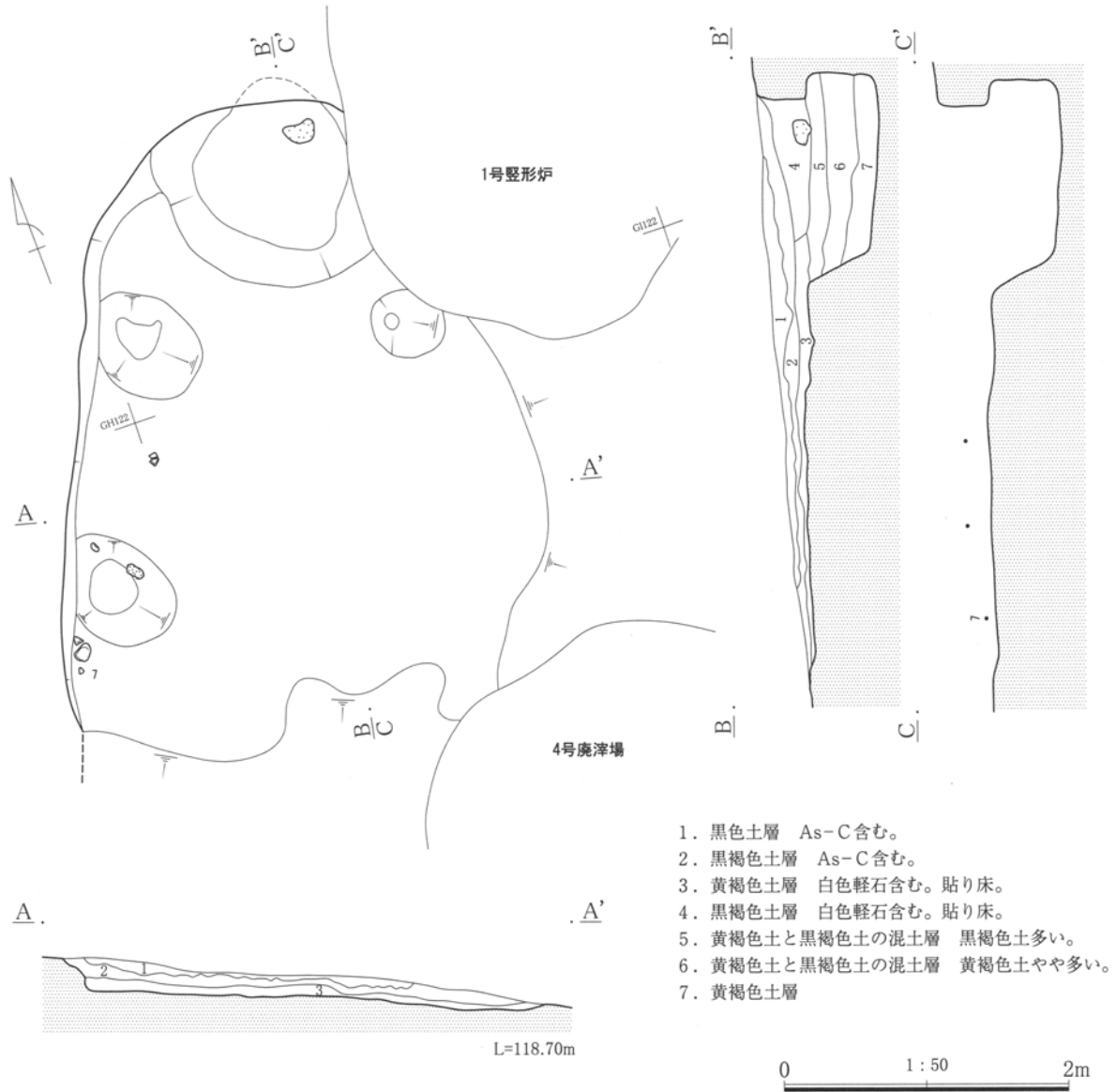


- 8. 6層に比して締まりない。
- 9. 8層に比して焼土粒「小」多く含む。
- 10. 黒褐色土層 ローム塊に1層不均質に含む。
- 11. 暗褐色土層 黒色土30%含む。
- 12. 褐色土層 ローム塊に2層40%含む。
- 13. 黒褐色土層 焼土粒「小」10%含む。
- 14. 黒褐色土層 ローム塊20%含む。
- 15. 黒褐色土層 ローム塊5%以下含む。
- 16. 暗褐色粘質土層 焼土粒「小」20%含む。竈壁。
- 17. 暗褐色土層 ローム塊、焼土粒「小」5%含む。
- 18. 暗褐色土層 焼土塊含む。
- 19. 暗褐色土層 焼土粒「小」10%、ローム塊20%含む。
- 20. 褐色土層 焼土粒「小」5%以下含む。
- 21. 黄褐色土層 褐色土40%含む。
- 22. 暗褐色粘質土層 焼土粒「小」10%含む。
- 23. 黒褐色土層 ローム塊5%含む。焼土粒「小」僅かに含む。

第90図 三騎堂 H16号住居

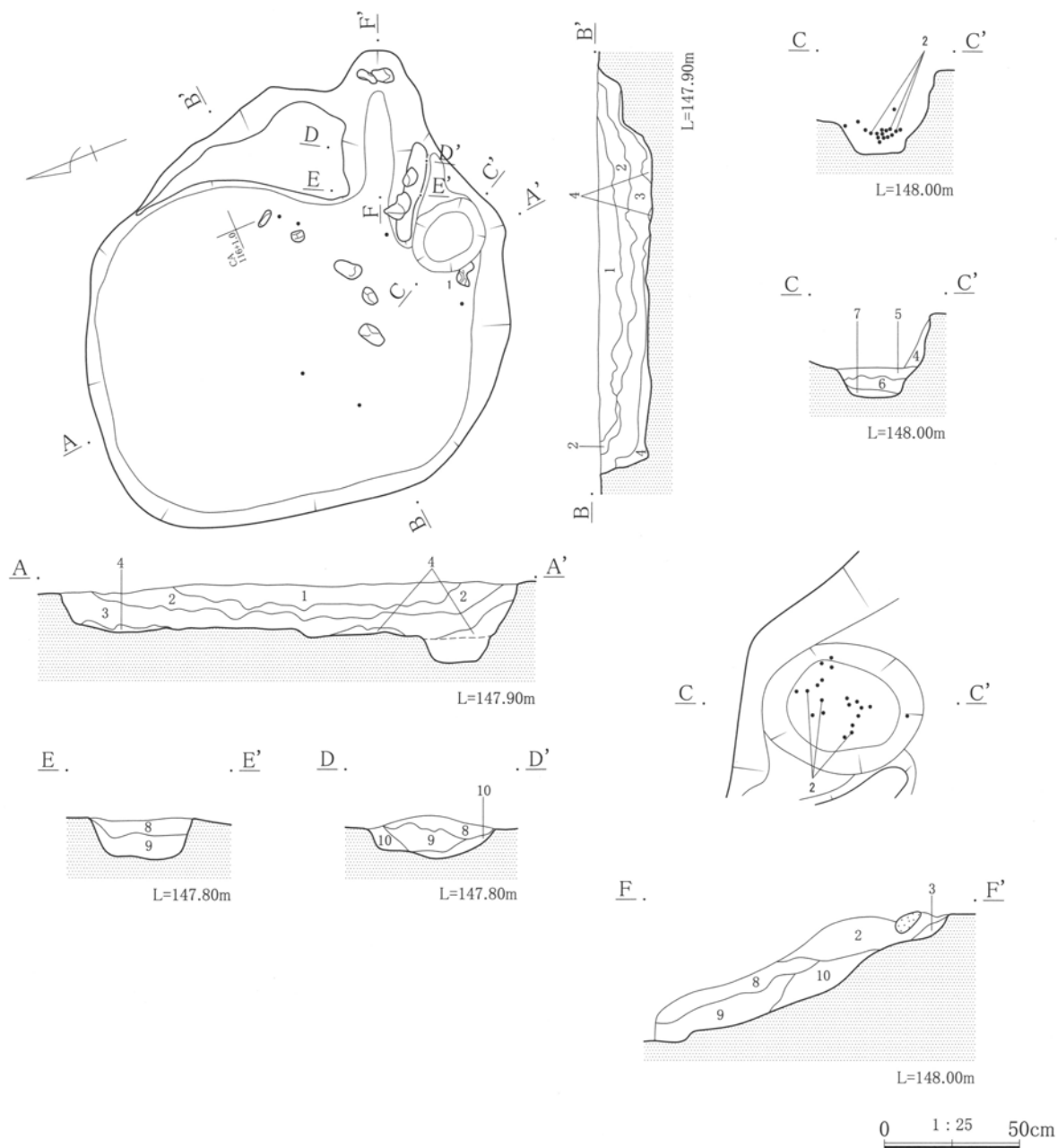


第91図 三騎堂 H17号住居



第92図 三騎堂 H18号住居

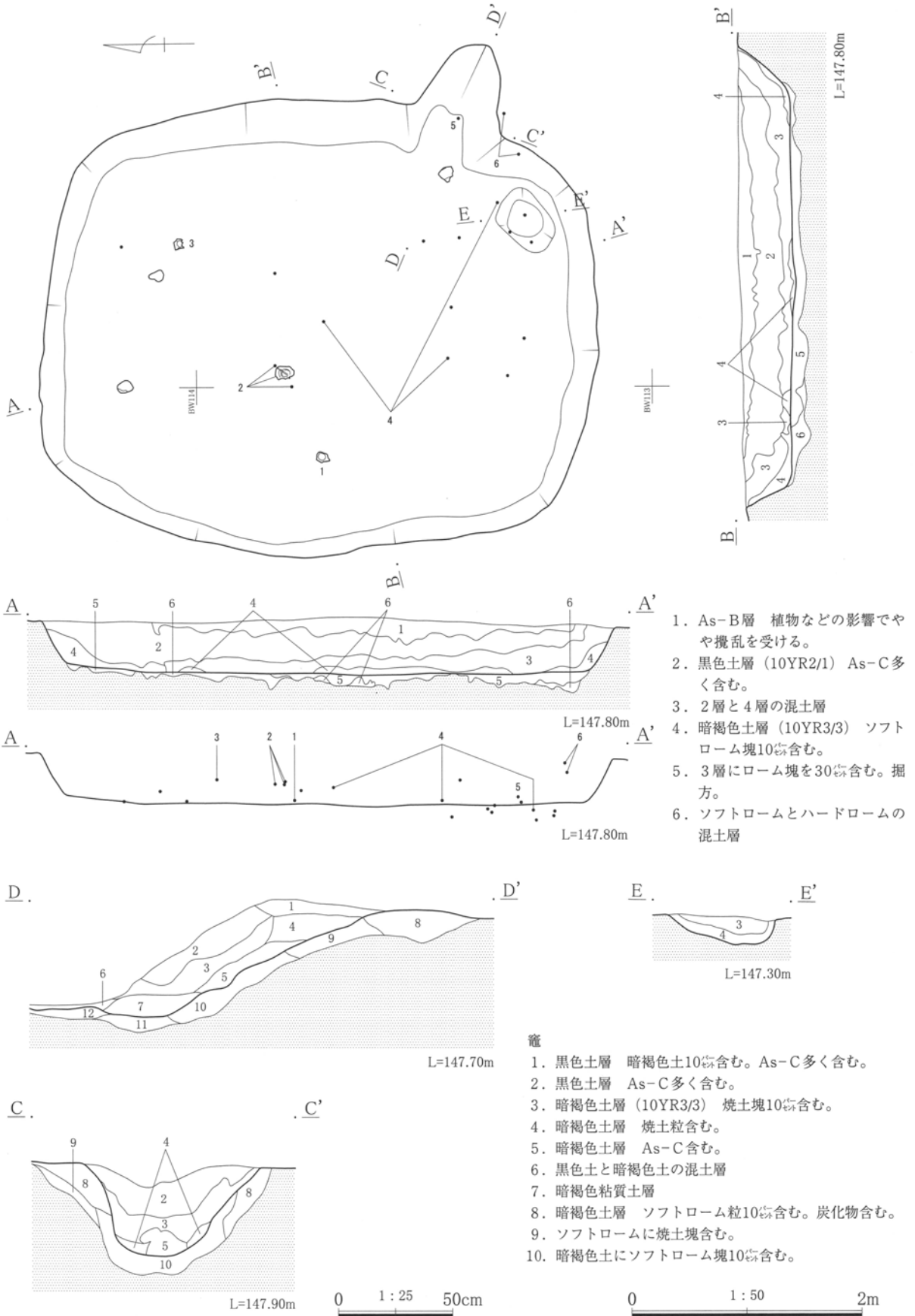
第2章 確認された遺構と遺物



1. 黒色土層 (10YR2/1) As-C多く含む。
2. 1層と3層の混土層
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) ソフトローム塊10%含む。
4. ローム塊に3層を30%含む。
5. 灰褐色粘質土層 (5YR4/2) ローム塊僅かに含む。
6. 灰褐色粘質土層 (5YR4/2) 焼土粒含む。
7. 黄褐色土層 (10YR5/6) ソフトローム塊含む。
8. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土粒、ローム塊10%含む。
9. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土塊5%以下含む。
10. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土塊20%含む。

0 1:50 2m

第93図 見切塚 H1号住居

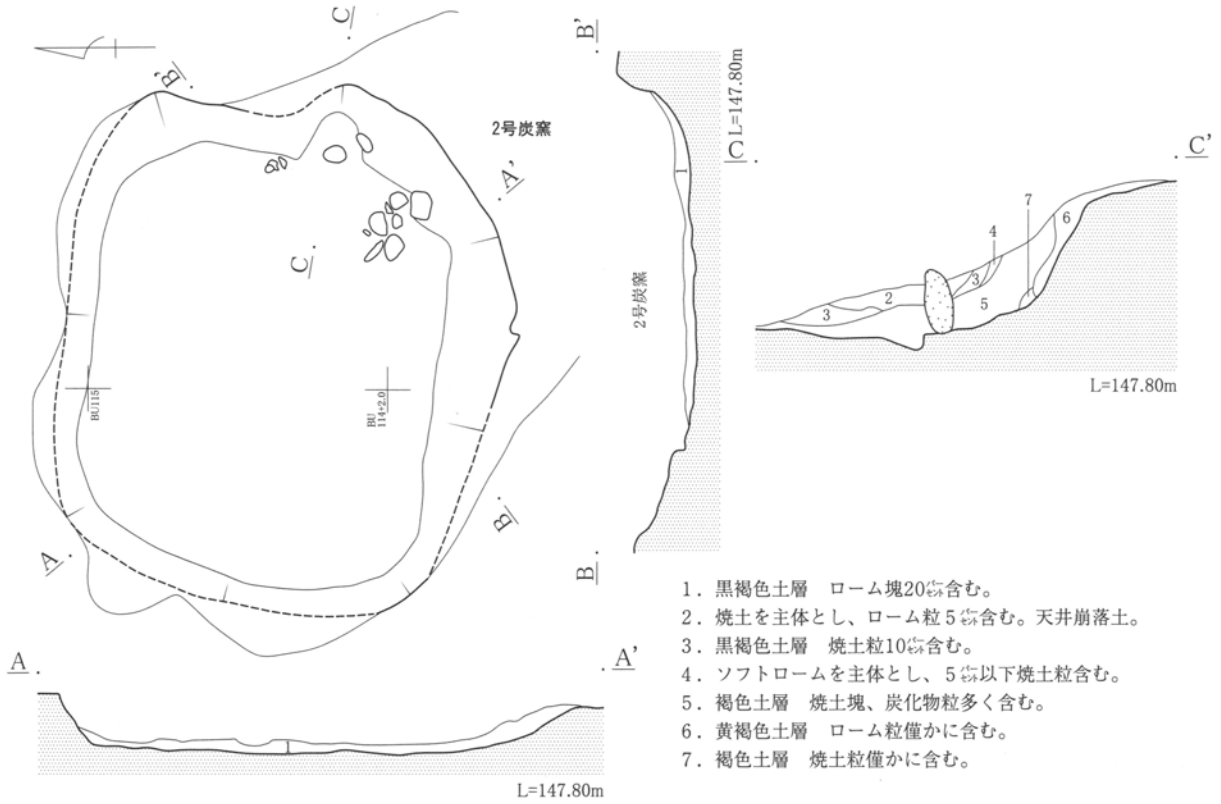


1. As-B層 植物などの影響でやや攪乱を受ける。
2. 黒色土層 (10YR2/1) As-C多く含む。
3. 2層と4層の混土層
4. 暗褐色土層 (10YR3/3) ソフトローム塊10%含む。
5. 3層にローム塊を30%含む。掘方。
6. ソフトロームとハードロームの混土層

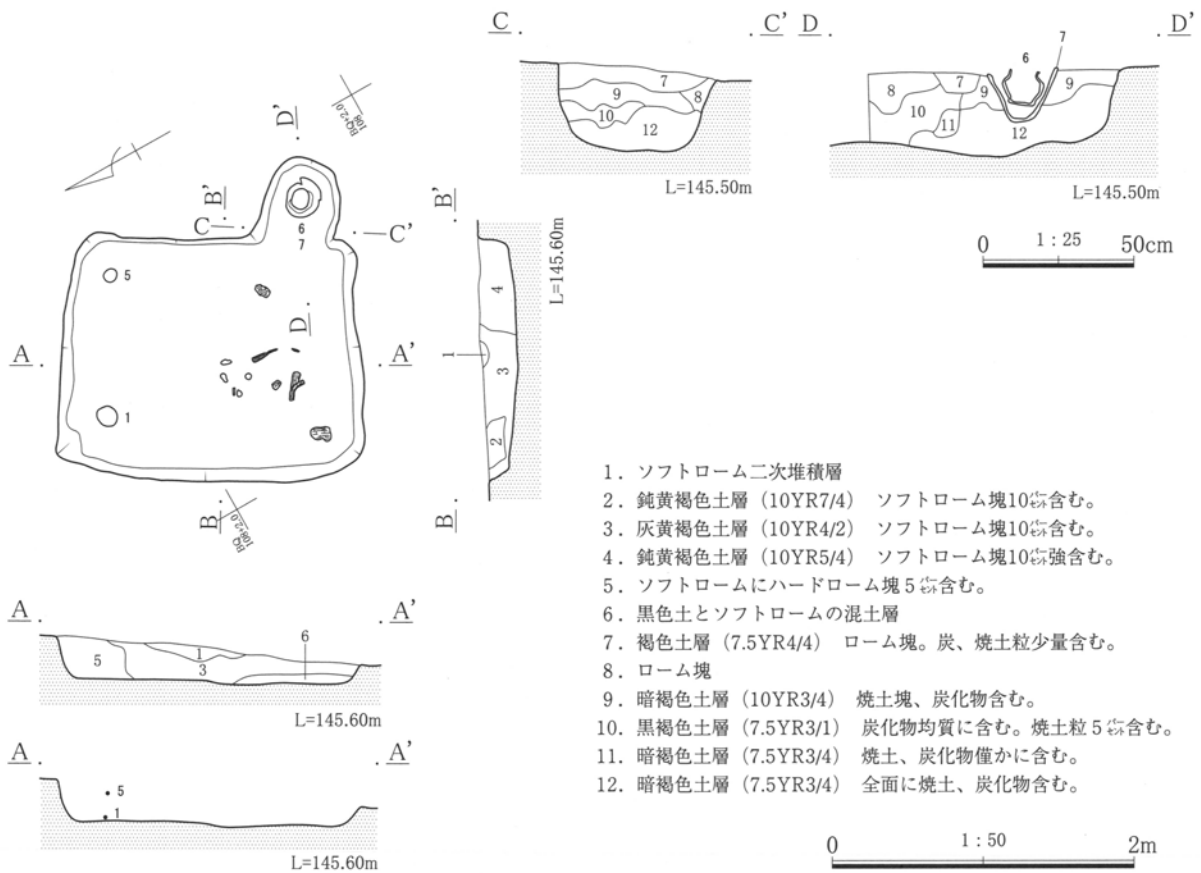
竈

1. 黒色土層 暗褐色土10%含む。As-C多く含む。
2. 黒色土層 As-C多く含む。
3. 暗褐色土層 (10YR3/3) 焼土塊10%含む。
4. 暗褐色土層 焼土粒含む。
5. 暗褐色土層 As-C含む。
6. 黒色土と暗褐色土の混土層
7. 暗褐色粘質土層
8. 暗褐色土層 ソフトローム粒10%含む。炭化物含む。
9. ソフトロームに焼土塊含む。
10. 暗褐色土にソフトローム塊10%含む。

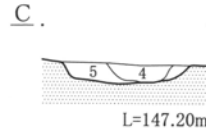
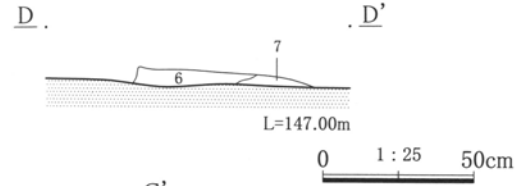
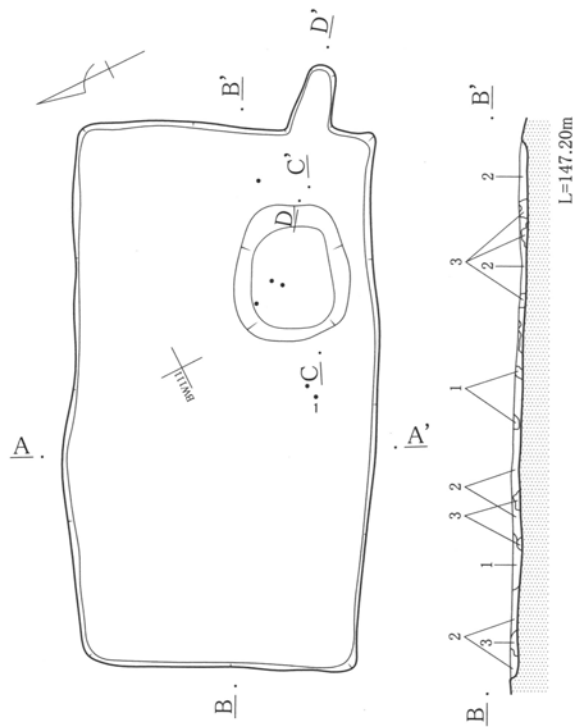
第94図 見切塚 H2号住居



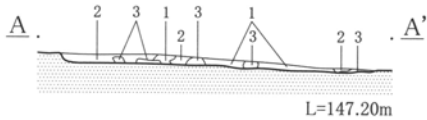
第95図 見切塚 H3号住居



第96図 見切塚 H4号住居

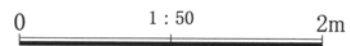
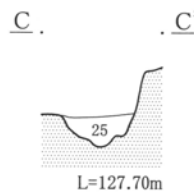
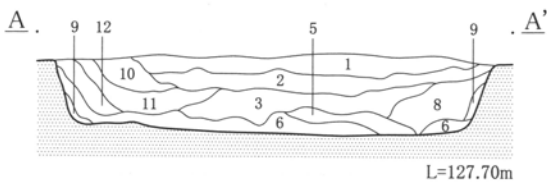
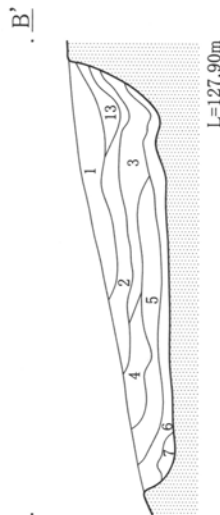
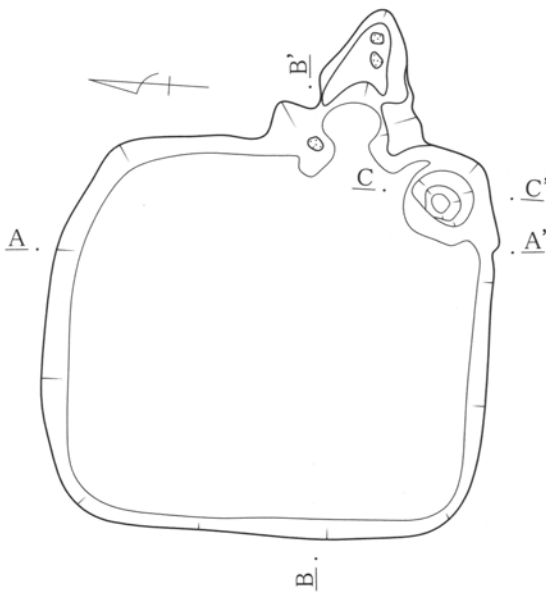


1. 黒色土層 As-C多く含む。
2. 黒色土とロームの混土層
3. ロームを主体とし、暗褐色土塊含む。
4. 暗褐色土層 炭化物、ローム塊少量含む。床下土坑。
5. 暗褐色土を主体とし、30%ローム塊含む。床下土坑。
6. 褐色土層 焼土、灰含む。
7. 黄褐色土層 焼土、灰少量含む。

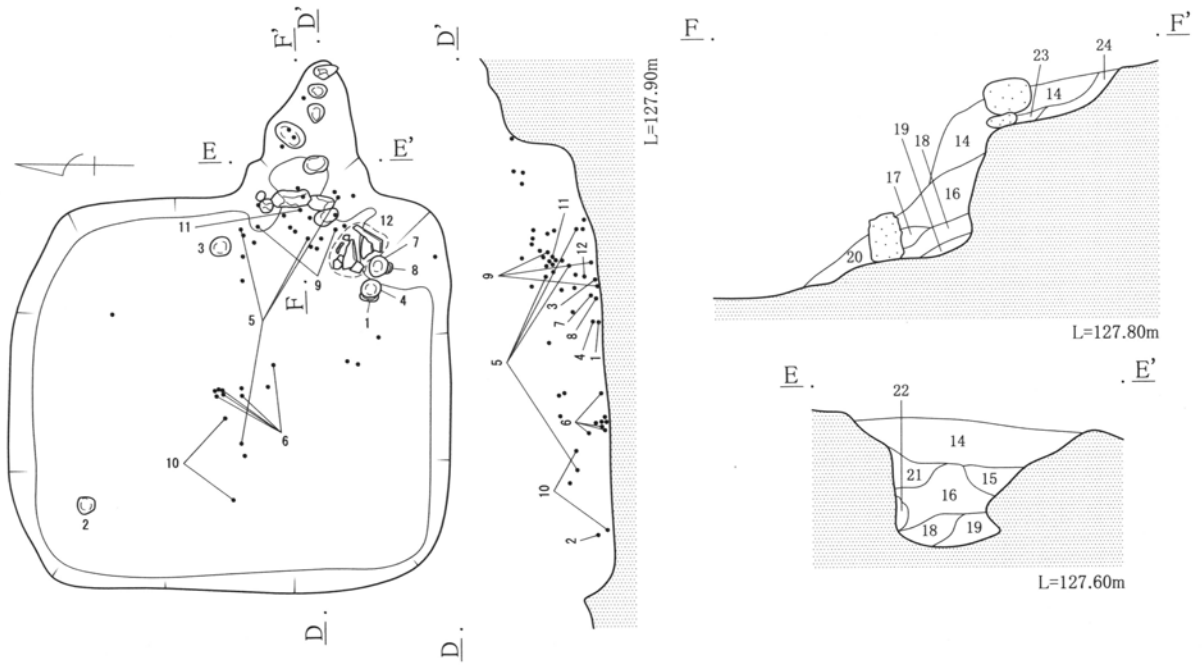


第97図 見切塚 H5号住居

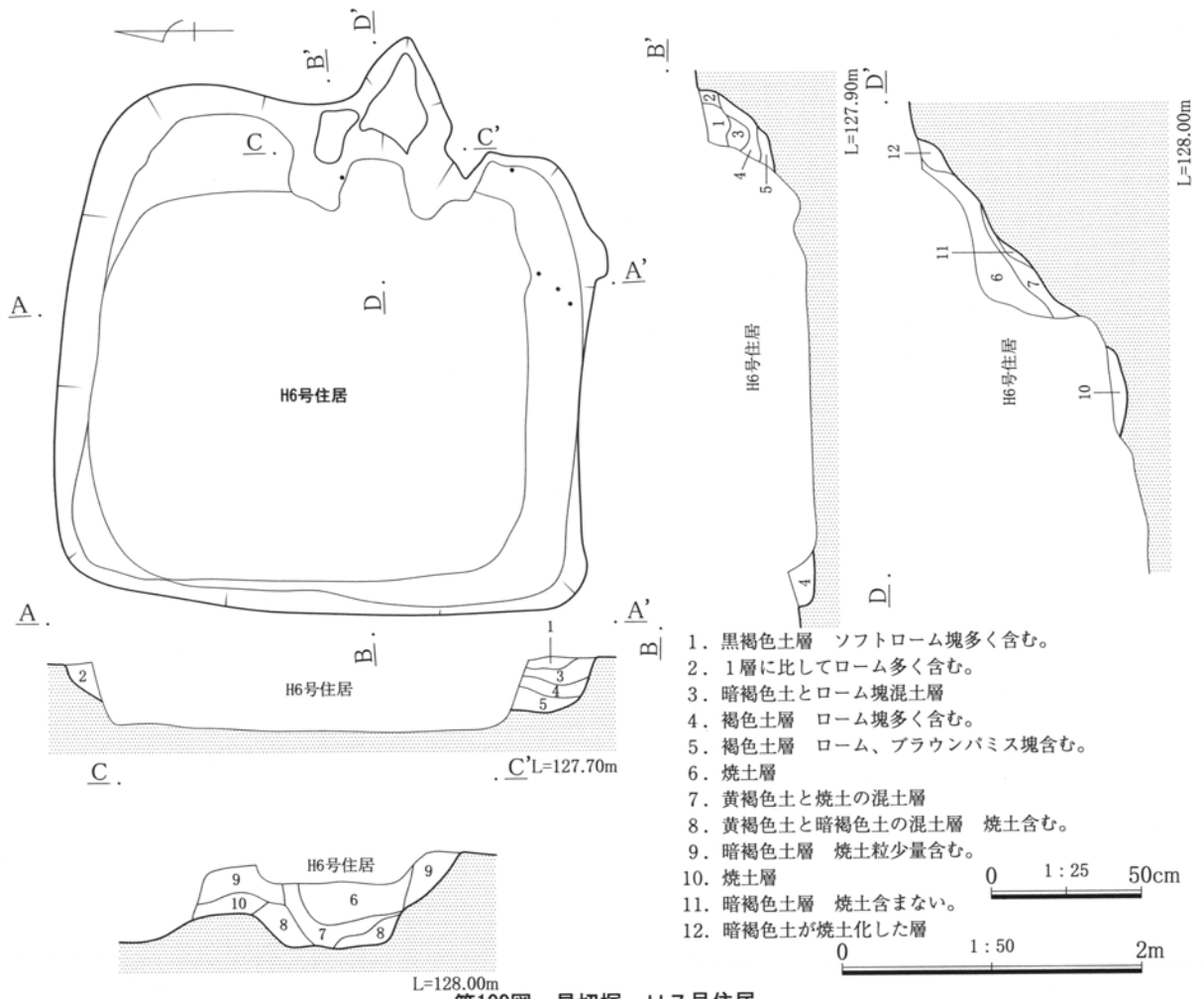
1. 黒色土層 As-C多く含む。
2. 暗褐色土層 As-C少量含む。
3. 黒褐色土層 As-C少量含む。
4. 黒色土層 ローム塊多く含む。
5. 黒色土とロームの混土層
6. 暗褐色土とロームの混土層
7. 壁崩落土
8. 暗褐色砂質土層
9. 壁崩落土
10. 黒褐色土層 As-C多く含む。
11. 黒褐色土層 ローム塊含む。
12. 暗褐色土層 ローム塊含む。
13. 1層と灰白色粘土の混土層
14. 黒褐色土層 焼土、炭化物多く含む。
15. 暗褐色土層 焼土、炭化物少量含む。
16. 暗褐色土層 灰白色粘土塊、焼土多く含む。
17. 暗褐色土と焼土、ロームの混土層
18. 暗褐色土と焼土の混土層
19. 暗褐色土とロームの混土層
20. 19層に比してローム多い。
21. 焼土層
22. 灰白色粘土と暗褐色土の混土層
23. 黒褐色土と焼土の混土層
24. 焼土層 砂質。
25. 暗褐色土層 ローム多く含む。



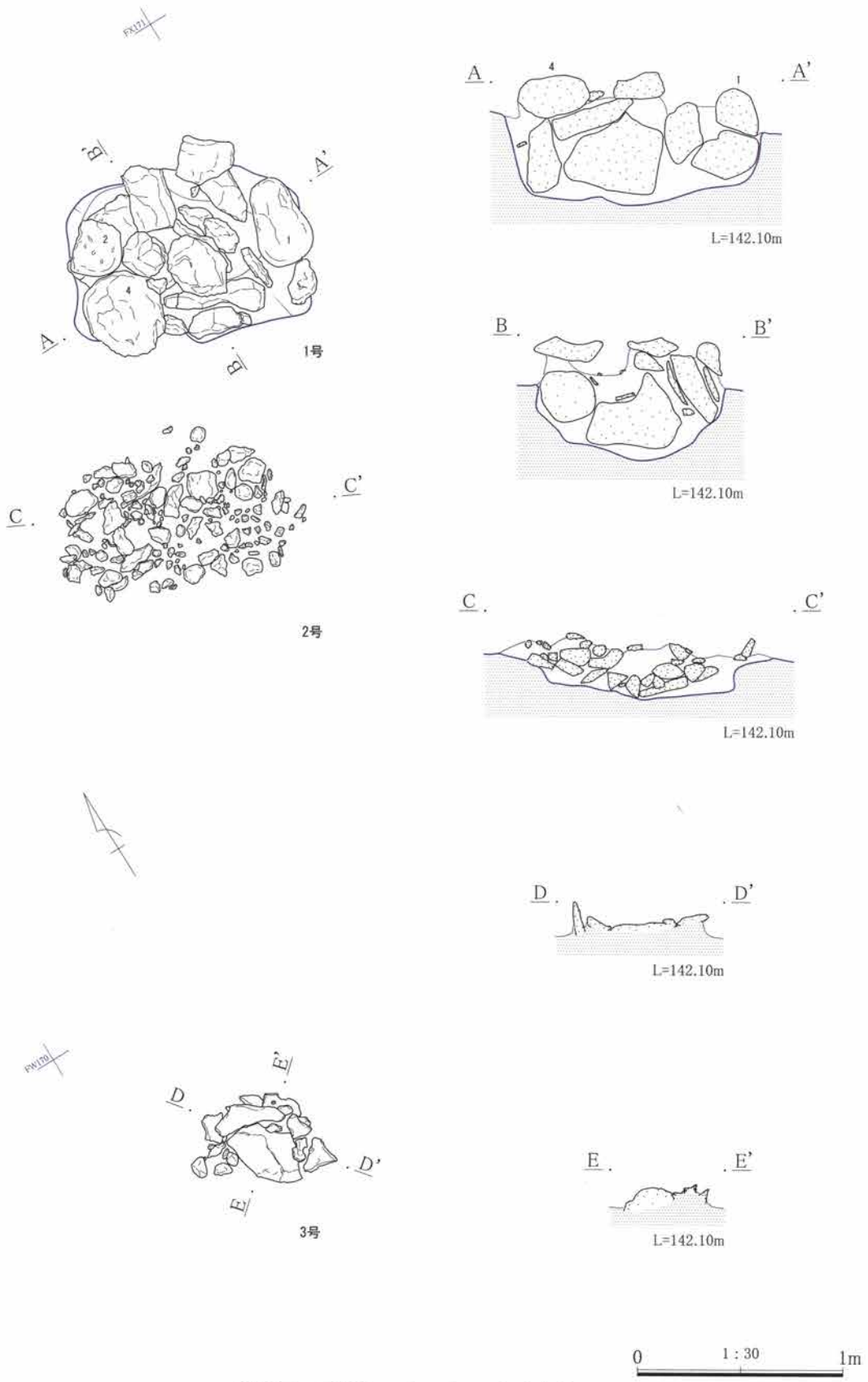
第98図 見切塚 H6号住居(1)



第99図 見切塚 H6号住居(2)



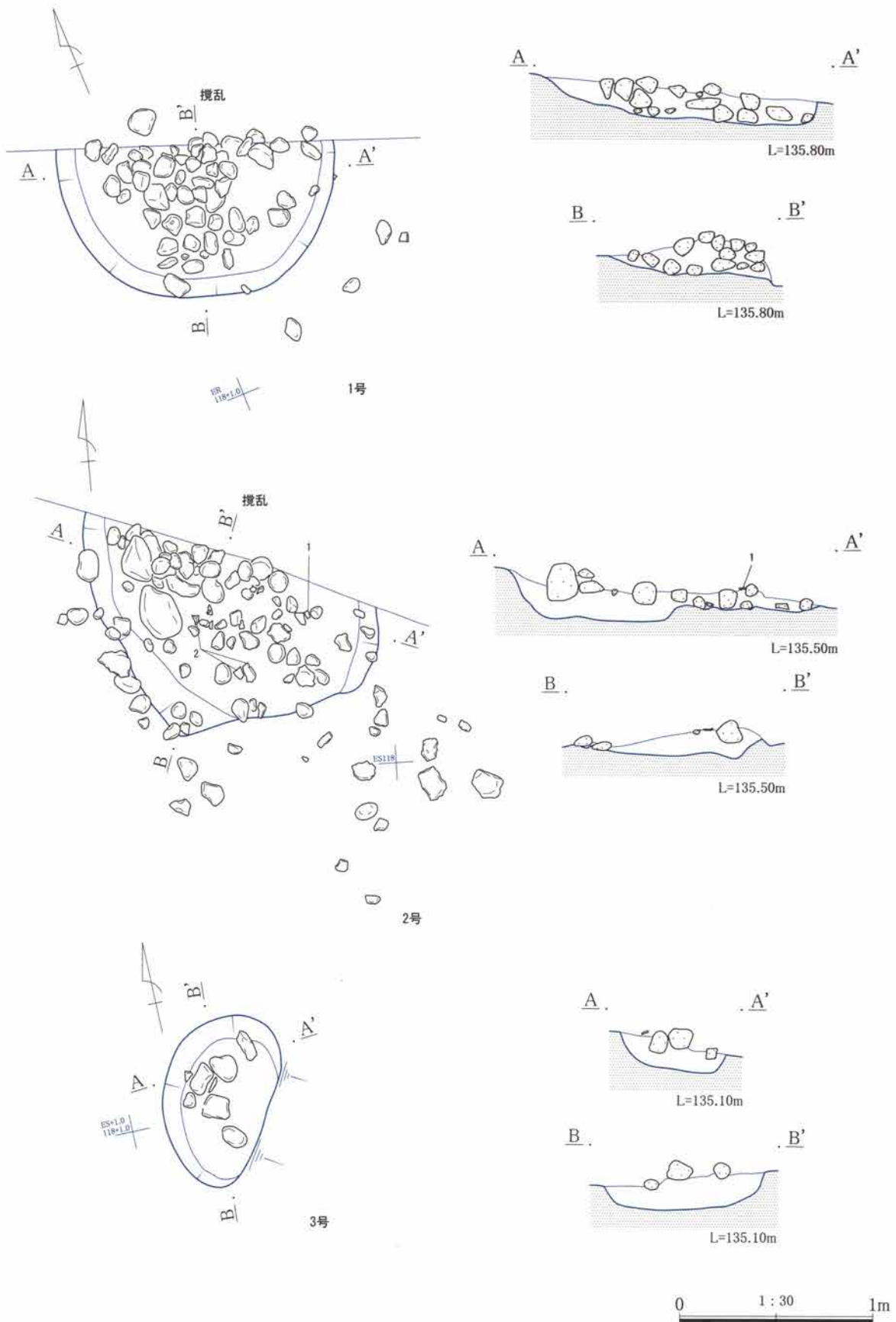
第100図 見切塚 H7号住居



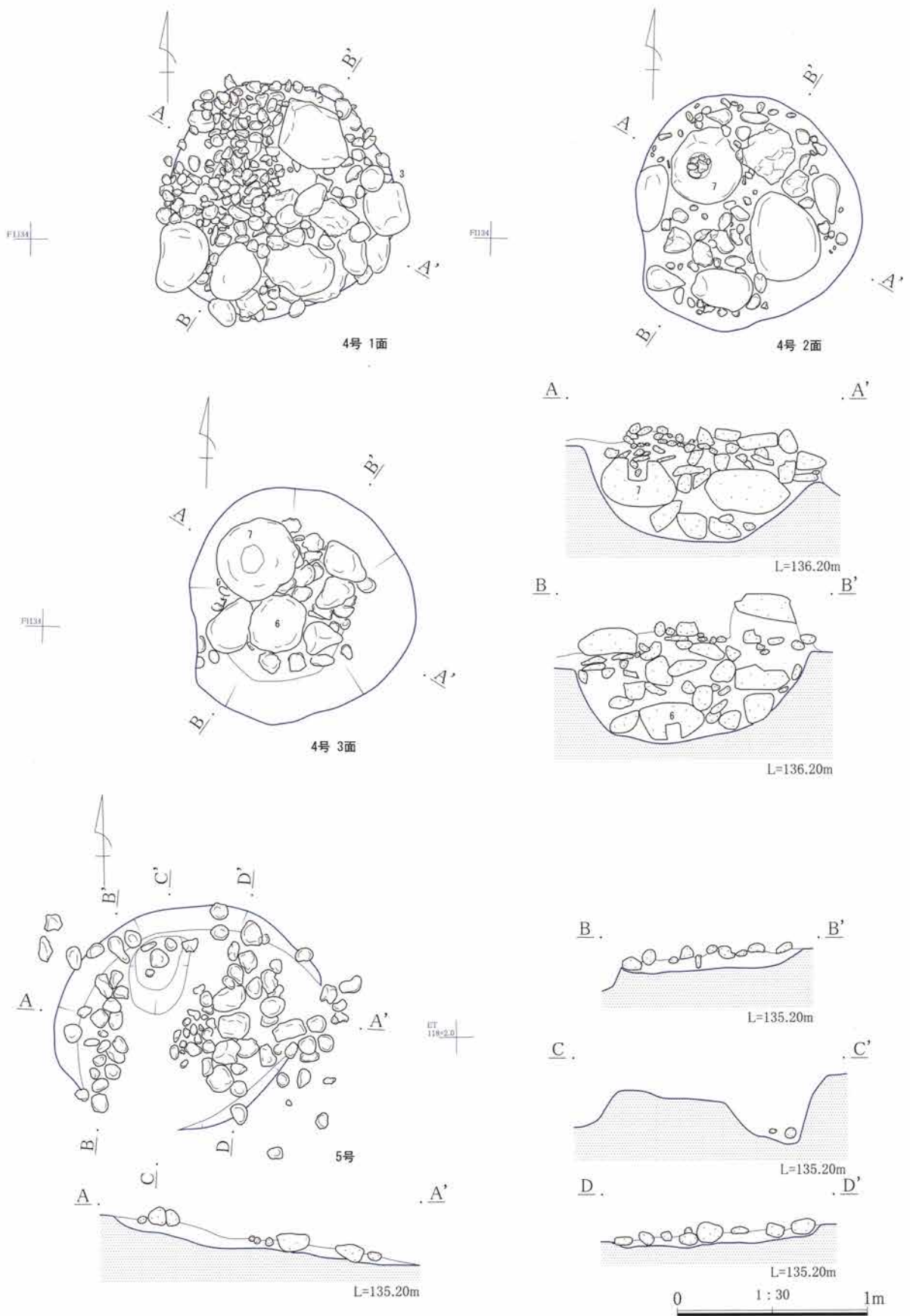
第101図 三騎堂 3区1号~3号火葬墓



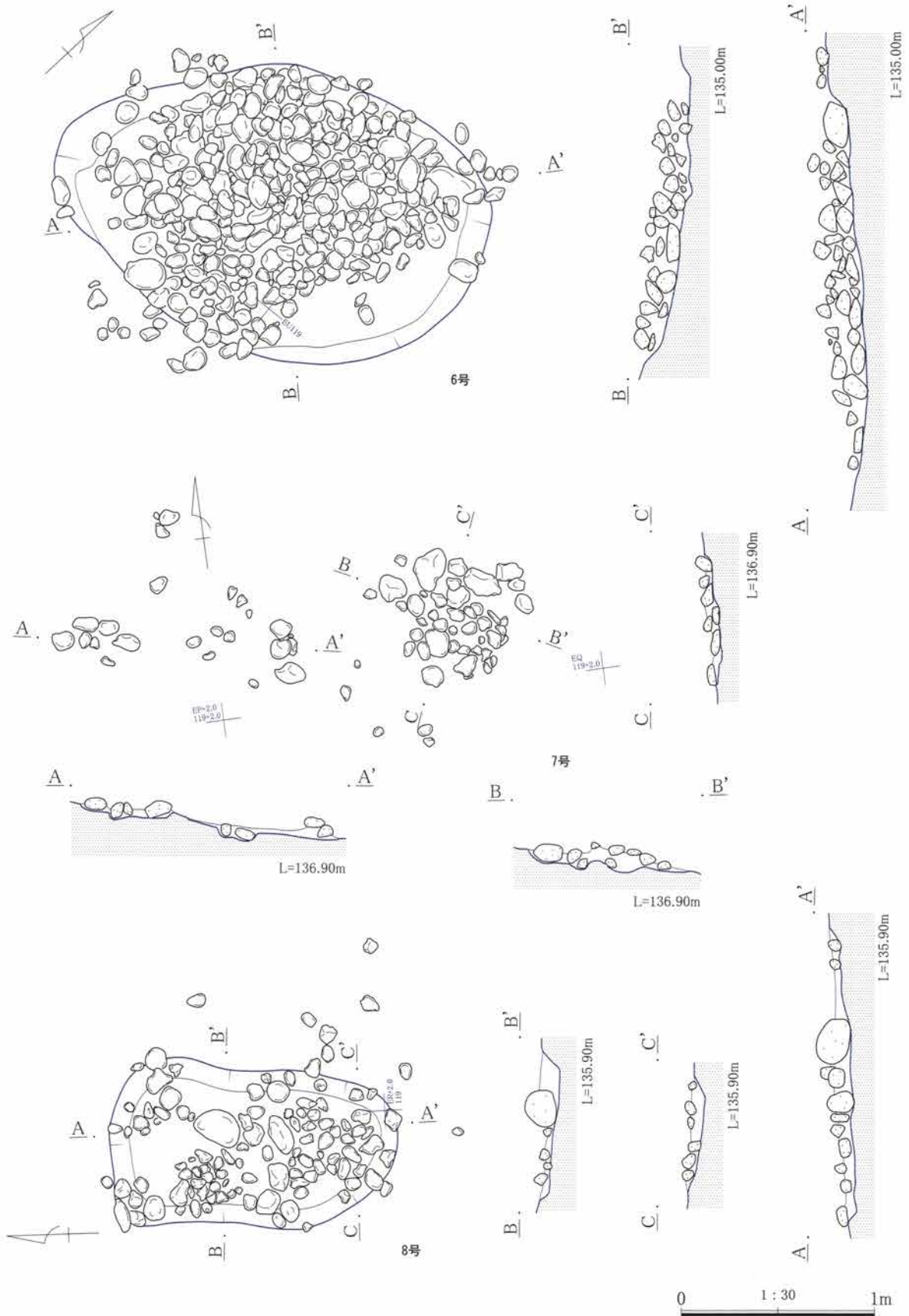
第102図 三騎堂 5区西側火葬墓分布図



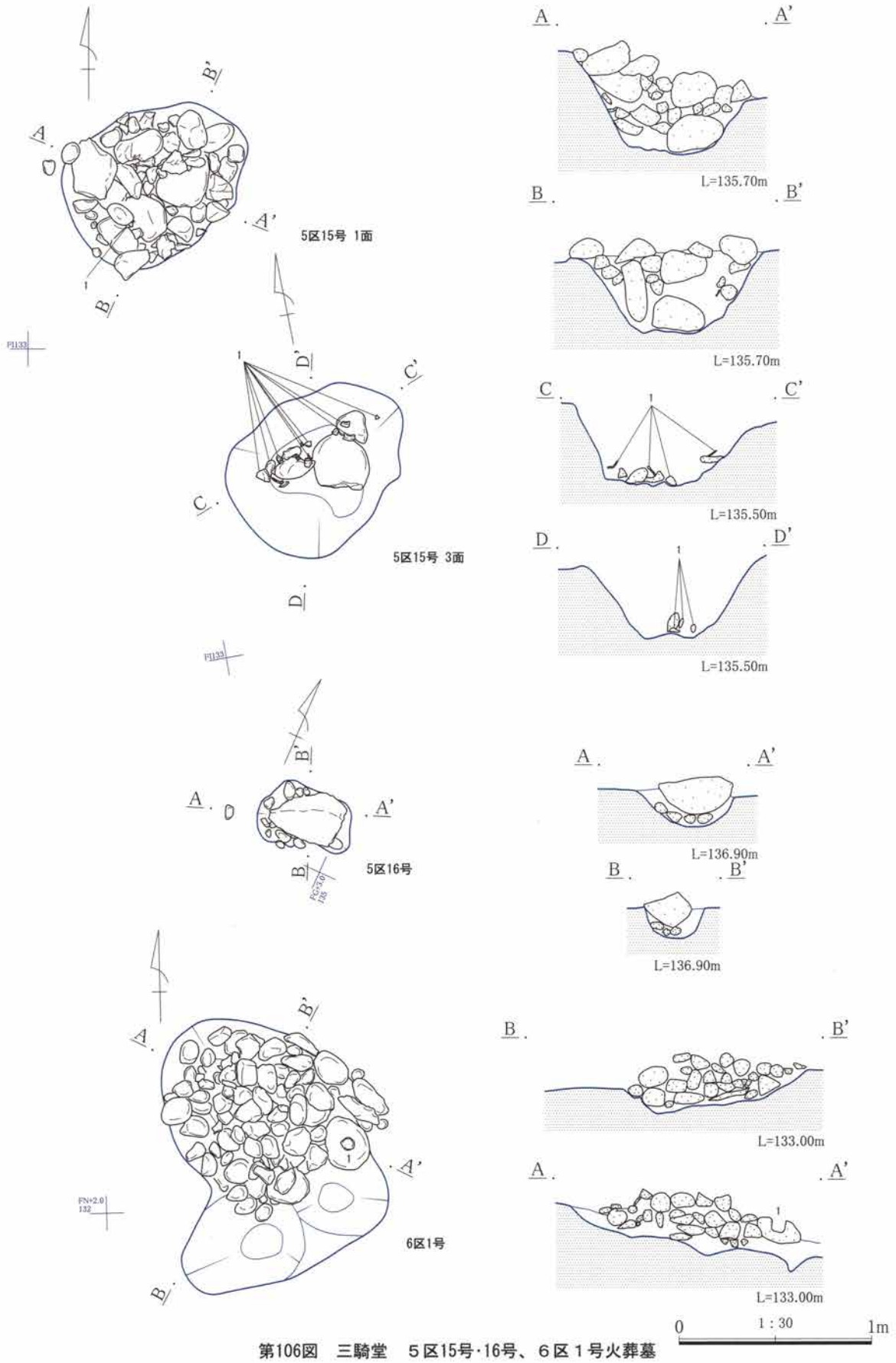
第103図 三騎堂 5区1号~3号火葬墓



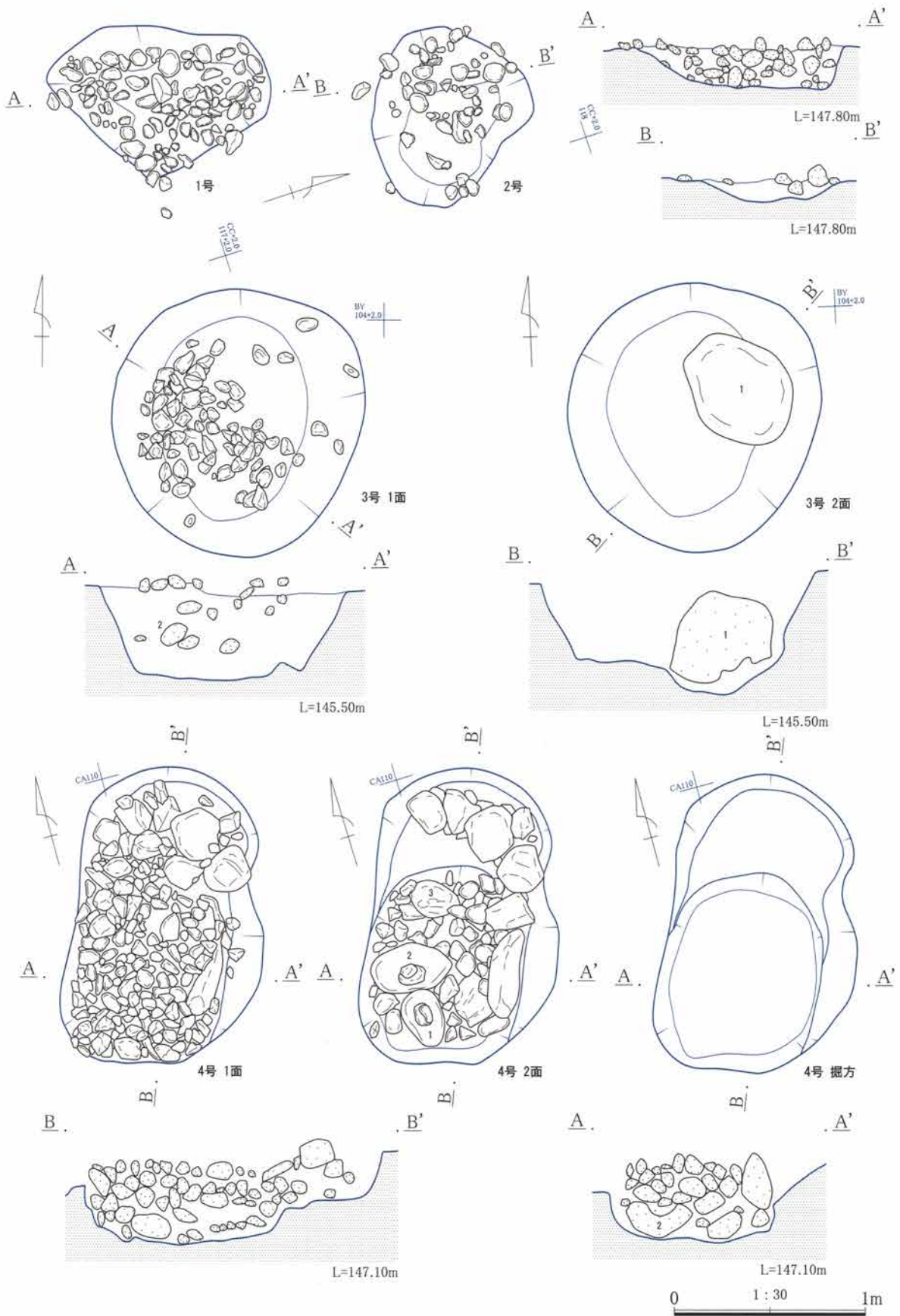
第104図 三騎堂 5区4号・5号火葬墓



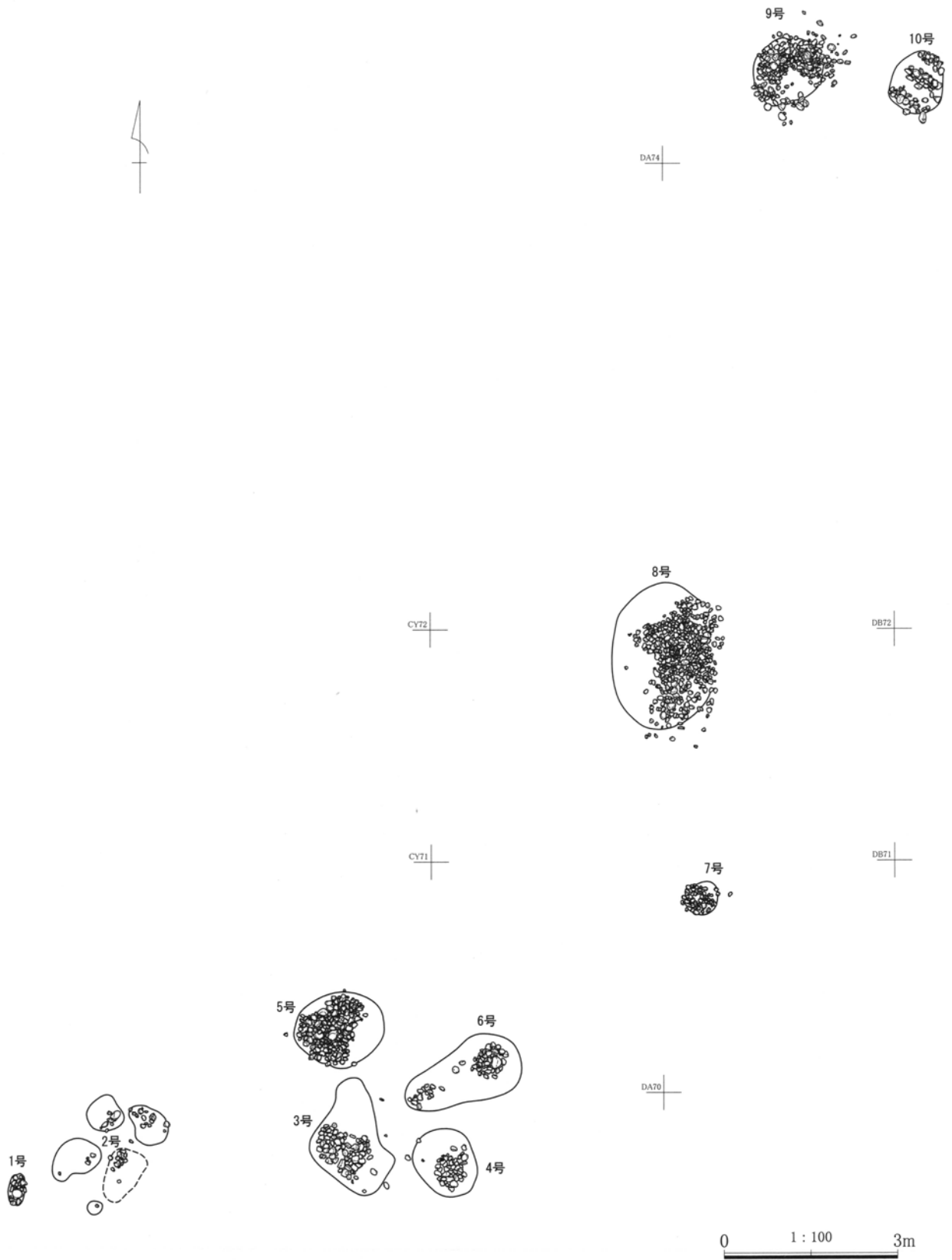
第105図 三騎堂 5区6号~8号火葬墓



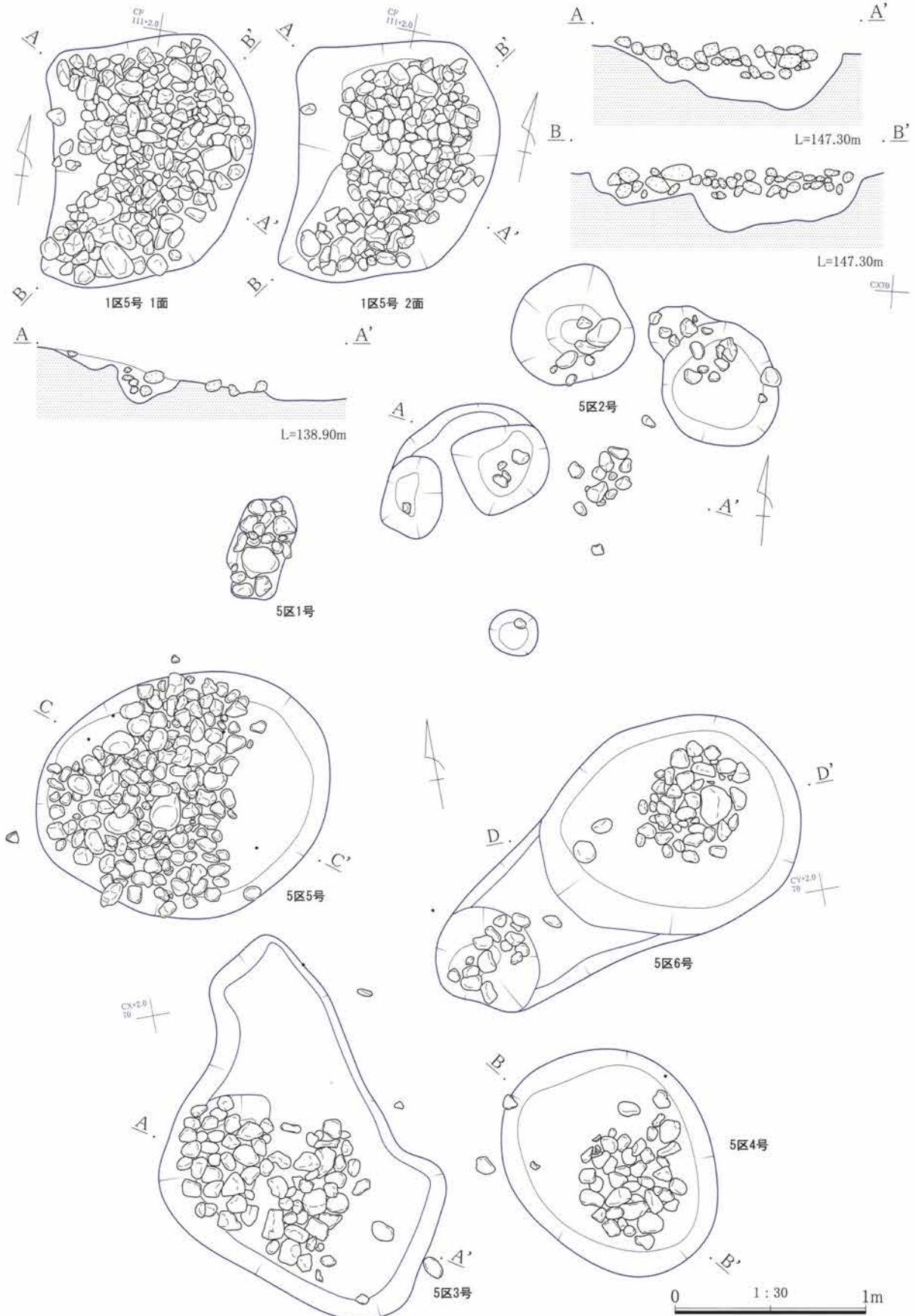
第106図 三騎堂 5区15号・16号、6区1号火葬墓



第107図 見切塚 1区1号~4号火葬墓

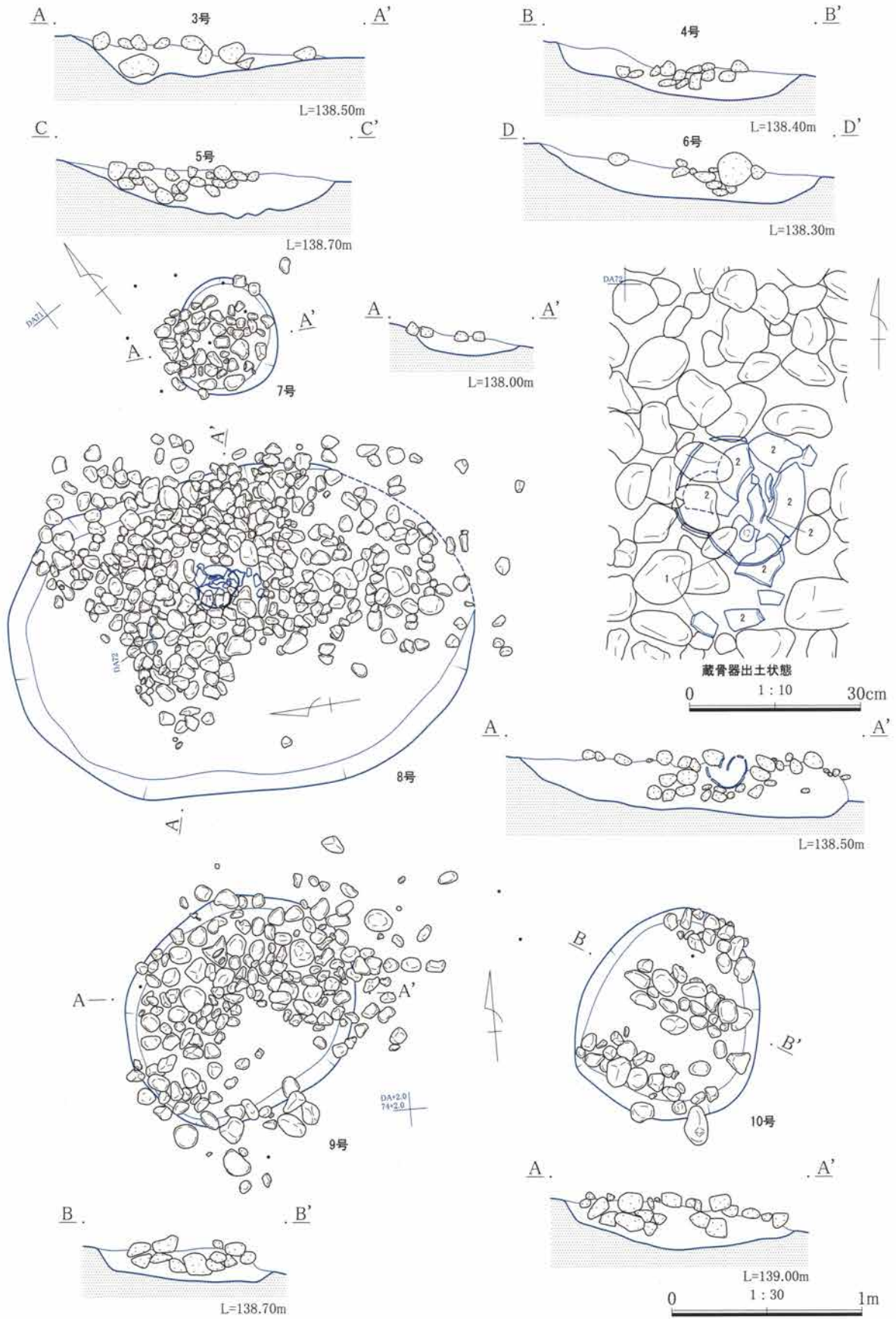


第108図 見切塚 5区火葬墓分布図

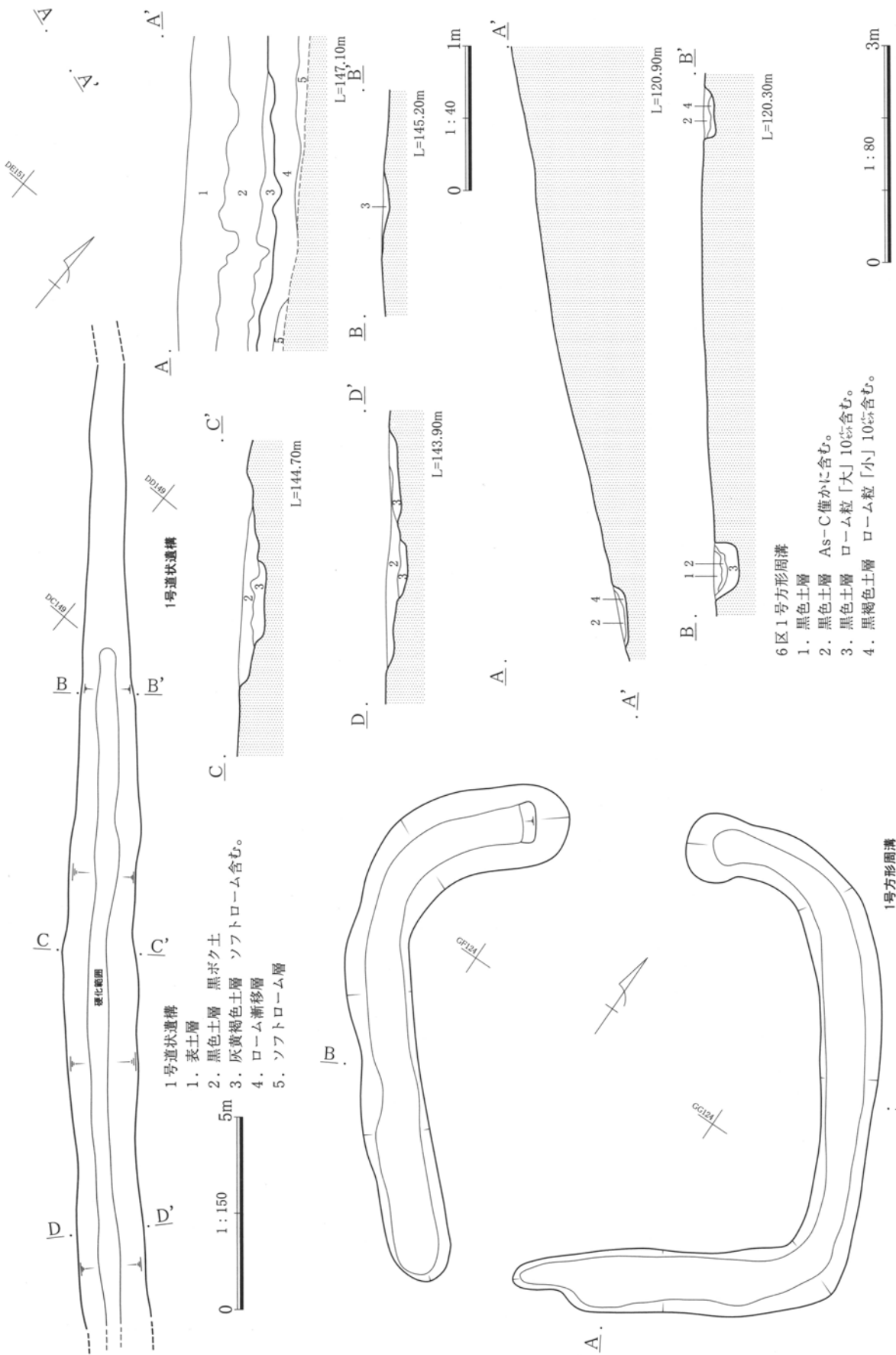


第109図 見切塚 1区5号、5区1号~6号火葬墓

第2章 確認された遺構と遺物

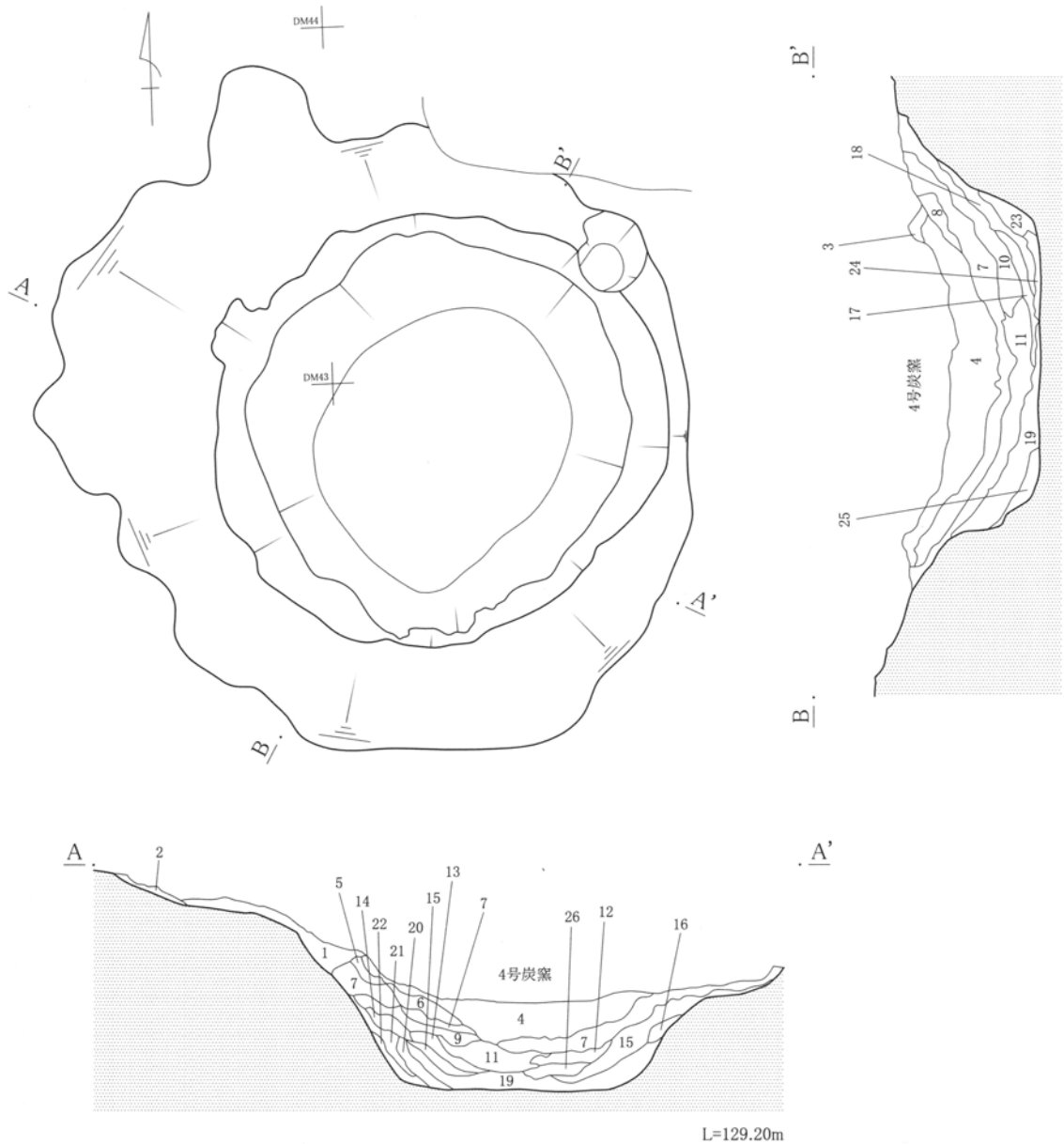


第110図 見切塚 5区3号~10号火葬墓



1号方形周溝

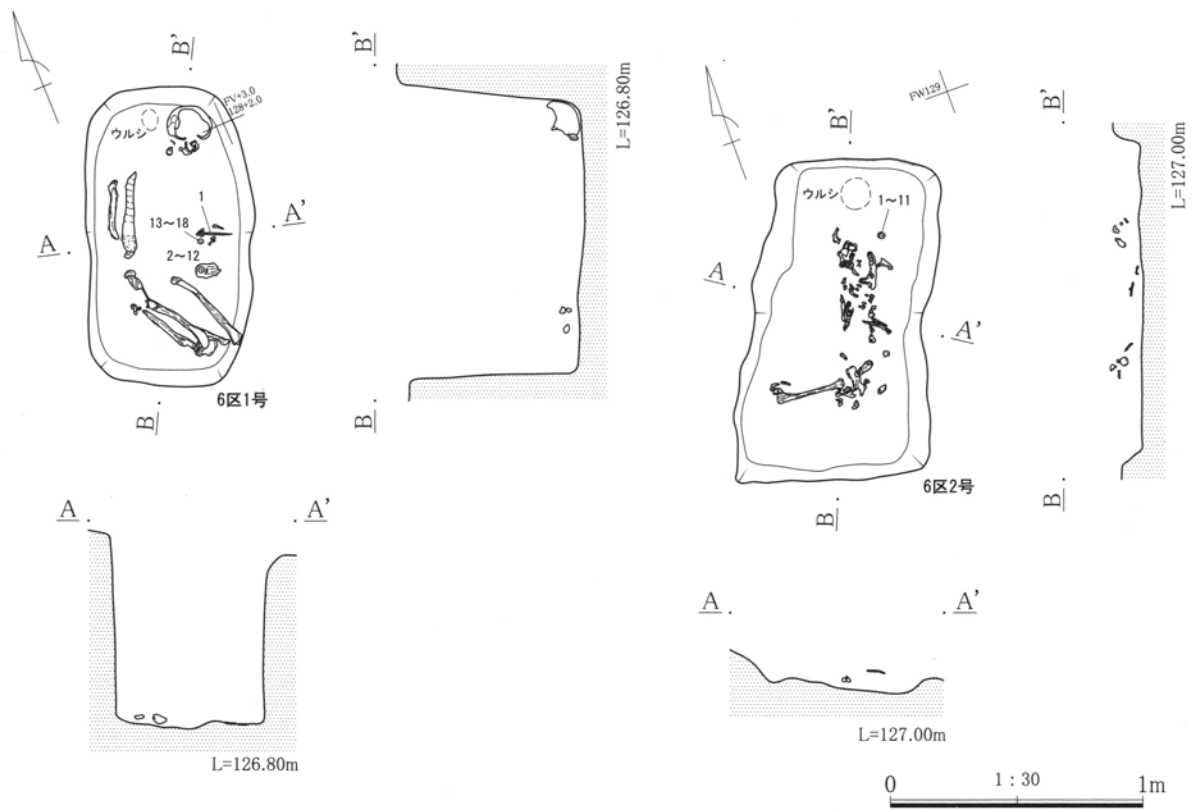
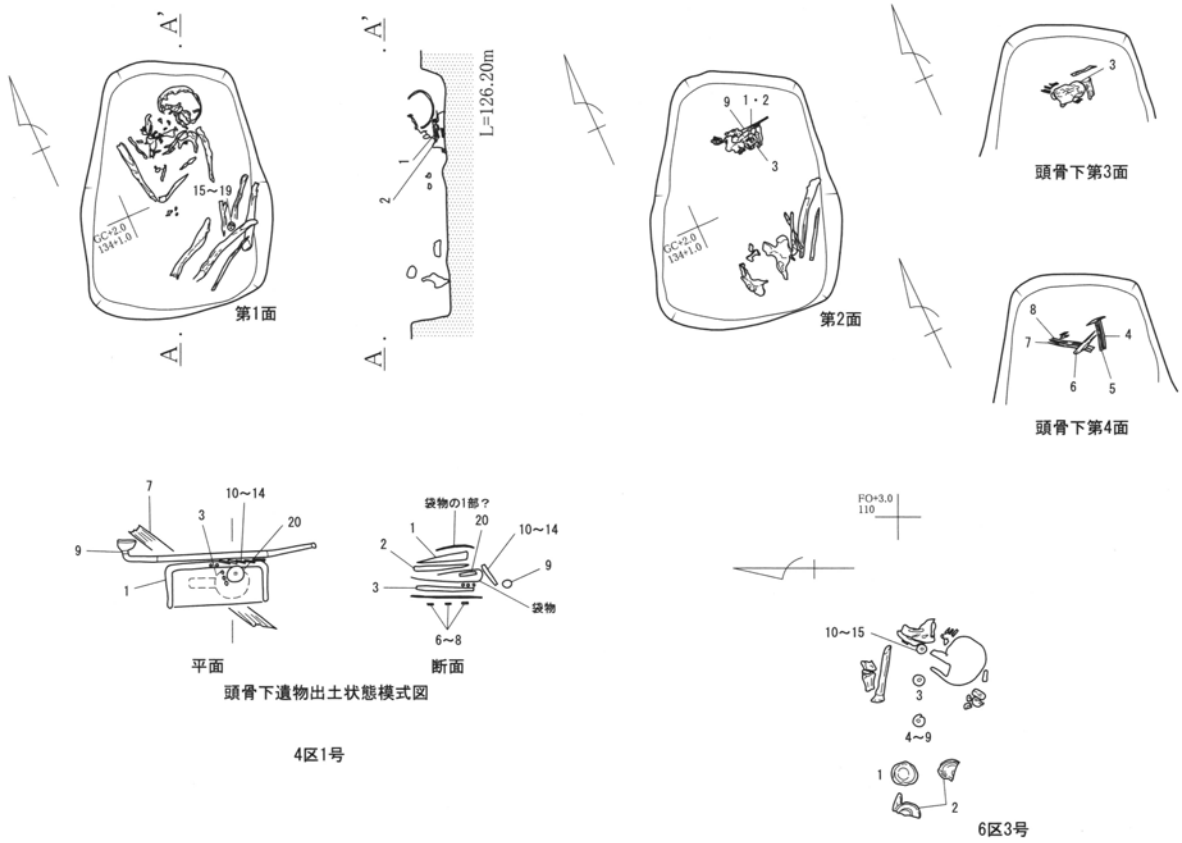
第111図 三騎堂 1区1号道状遺構、6区1号方形周溝



- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 1. 灰黄褐色土層 木炭片含まない。 | 14. 暗褐色土層 ローム粒10%含む。 |
| 2. 鈍い黄褐色土層 ロームと黒色土の漸移層。 | 15. 暗褐色土層 ローム粒10%含む。白色軽石含む。 |
| 3. 黒褐色土層 木炭片を多く含む。 | 16. 褐色土層 ローム粒5%以下含む。 |
| 4. 黒褐色土層 榛名軽石とAs-C含む。 | 17. 黒褐色土層 ローム小塊10%含む。 |
| 5. 暗褐色土層 榛名軽石とAs-C含む。焼土粒微量含む。 | 18. 鈍黄褐色土層 ローム粒・小塊10%含む。 |
| 6. 黒褐色土層 4層に似るが、色調がやや明るい。 | 19. 暗褐色土層 ローム小塊5%含む。 |
| 7. 黒褐色土層 榛名軽石とAs-C含む。 | 20. 褐色土層 ロームを主体とし、暗褐色土20%含む。 |
| 8. 黒褐色土層 ローム小塊を20%含む。 | 21. ローム崩壊土層。 |
| 9. 黒色土層 ローム粒5%含む。 | 22. 鈍黄褐色土層 |
| 10. 暗褐色土層 ローム粒含む。 | 23. 黒褐色土層 ローム粒微量含む。 |
| 11. 灰黄褐色土層 ローム小塊5%含む。焼土粒微量含む。 | 24. 暗褐色土層 |
| 12. 暗褐色土層 ローム小塊5%含む。 | 25. 暗褐色土層 ローム小塊微量含む。 |
| 13. 黒褐色土層 ローム小塊5%含む。 | |

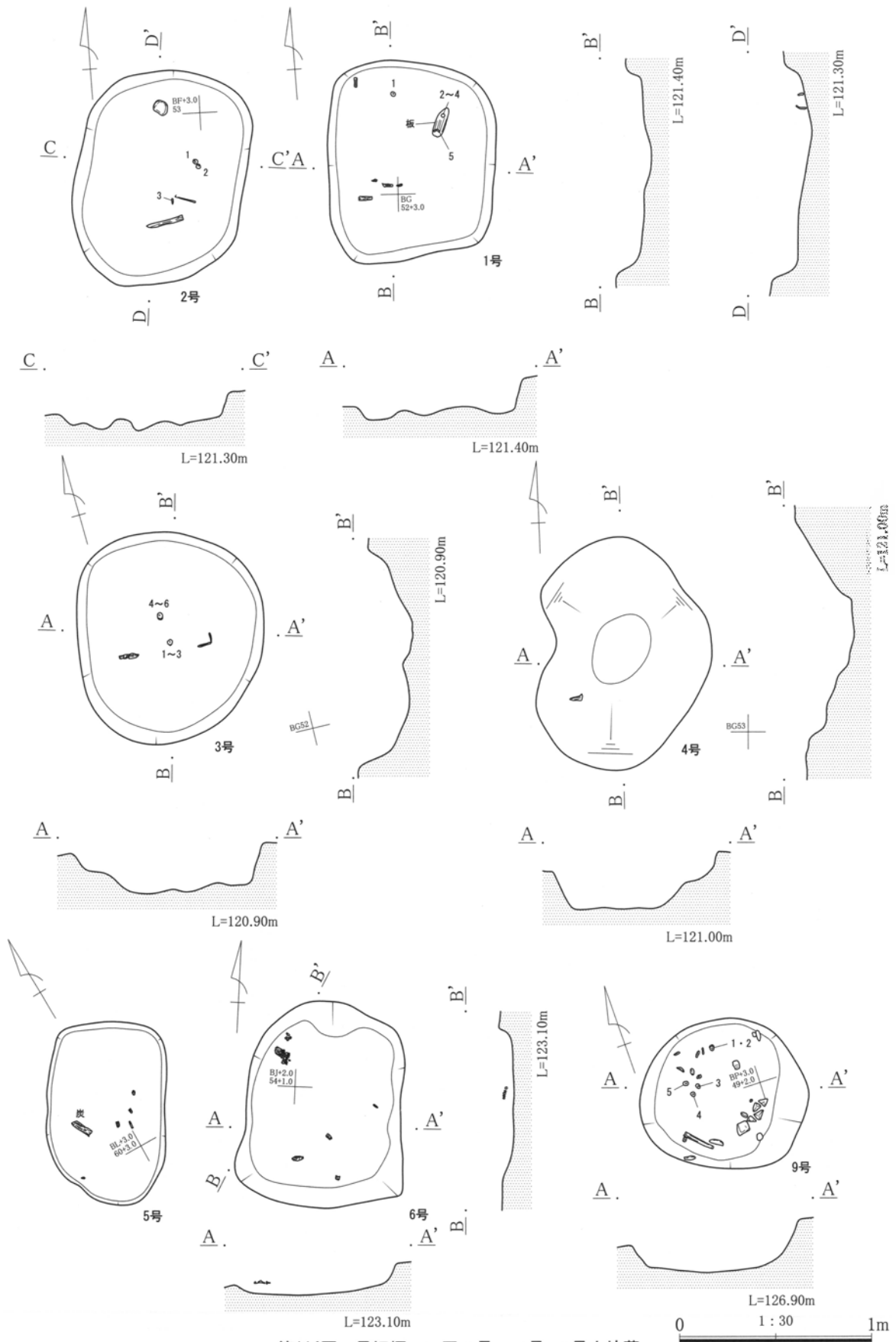
0 1:80 3m

第112図 見切塚 5区1号竪穴

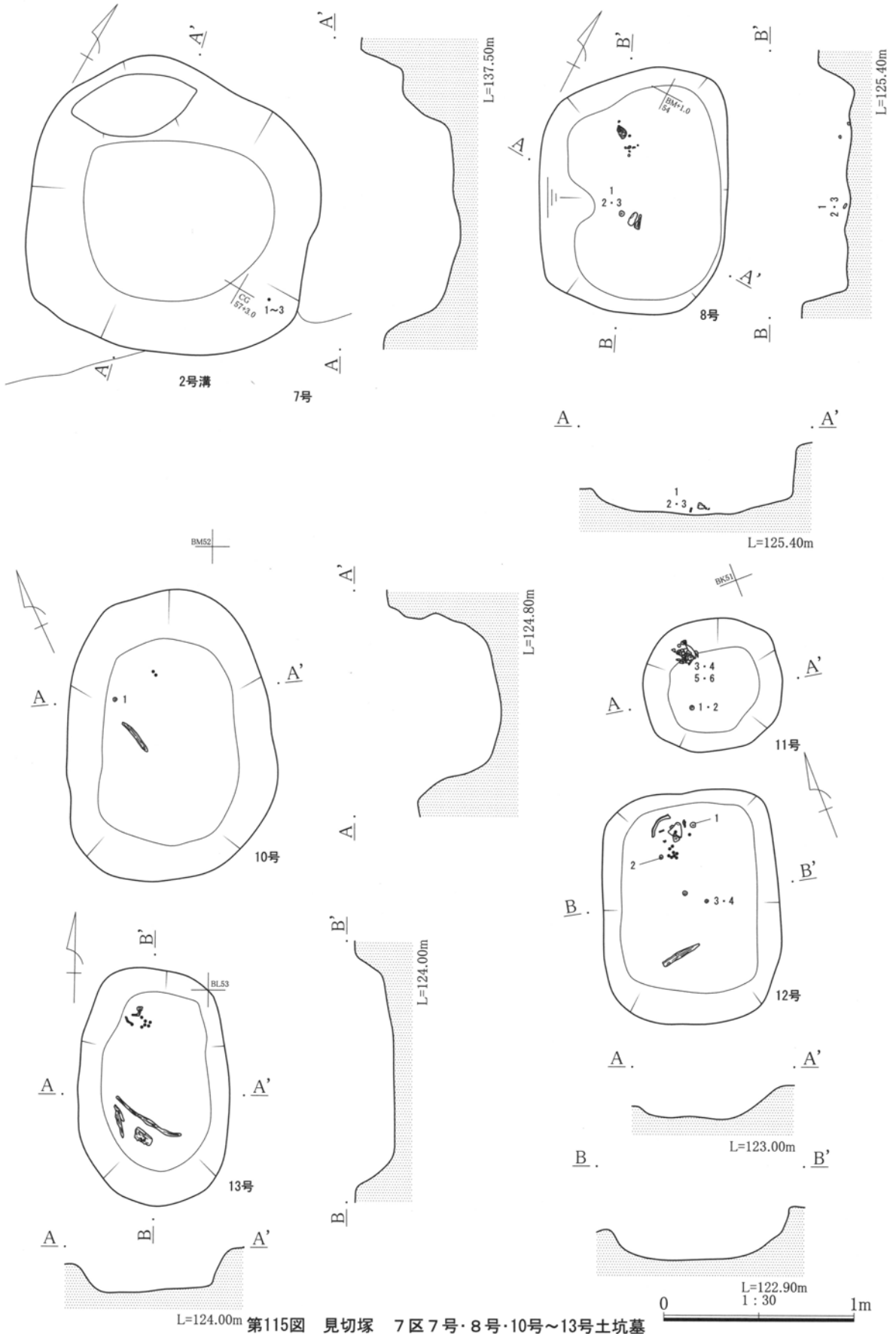


第113図 三騎堂 4区1号、6区1号~3号土坑墓

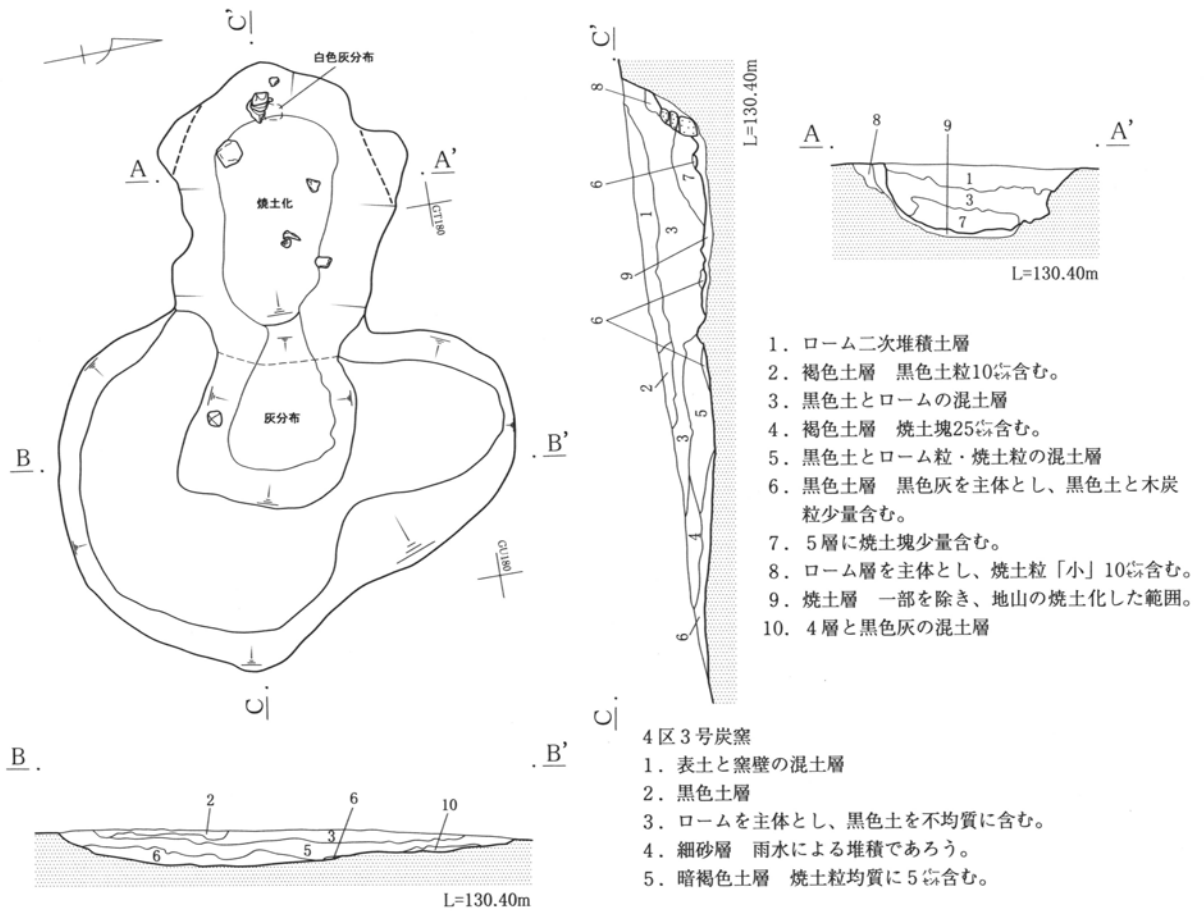
第2章 確認された遺構と遺物



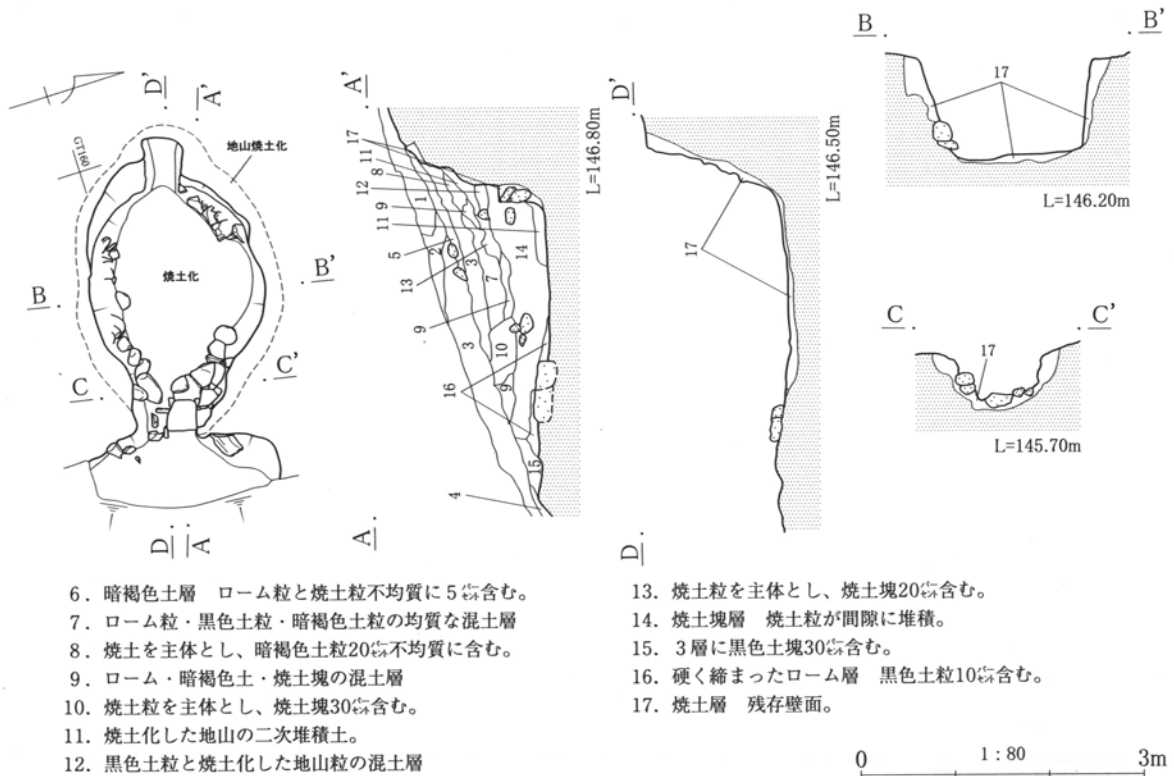
第114図 見切塚 7区1号~6号・9号土坑墓



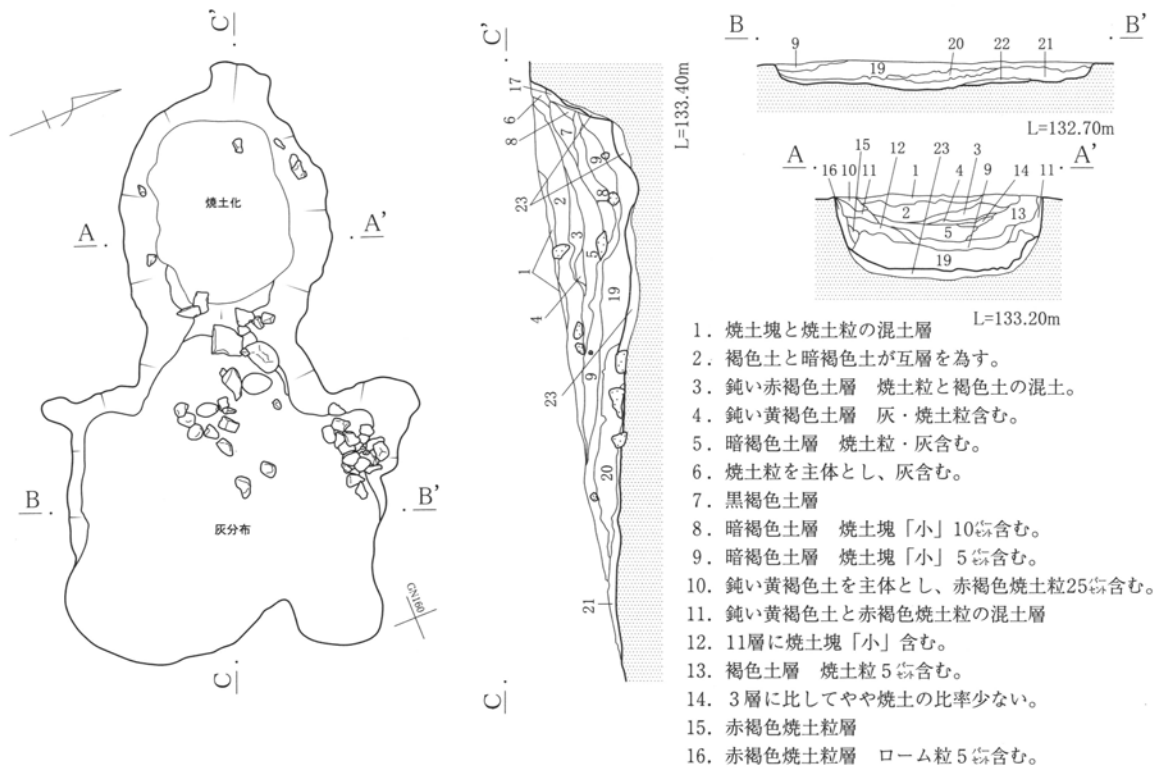
第115図 見切塚 7区7号・8号・10号~13号土坑墓



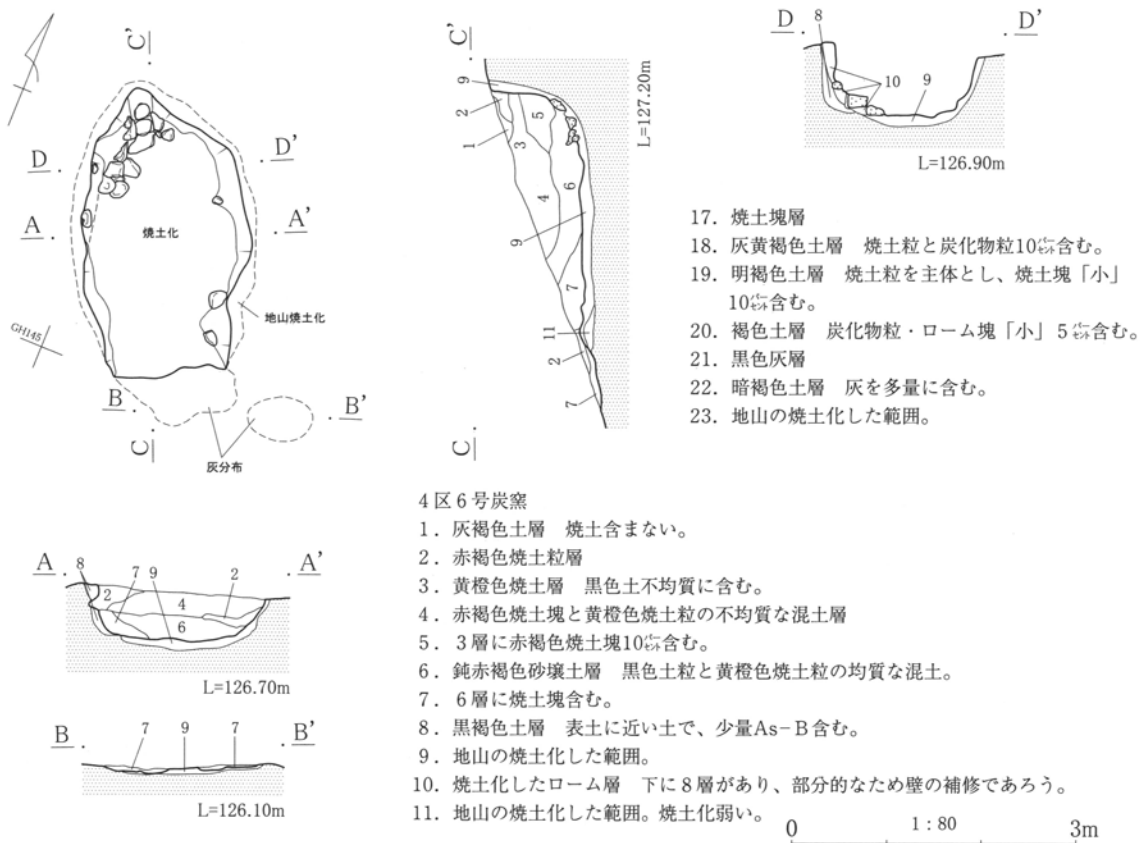
第116図 三騎堂 4区2号炭窯



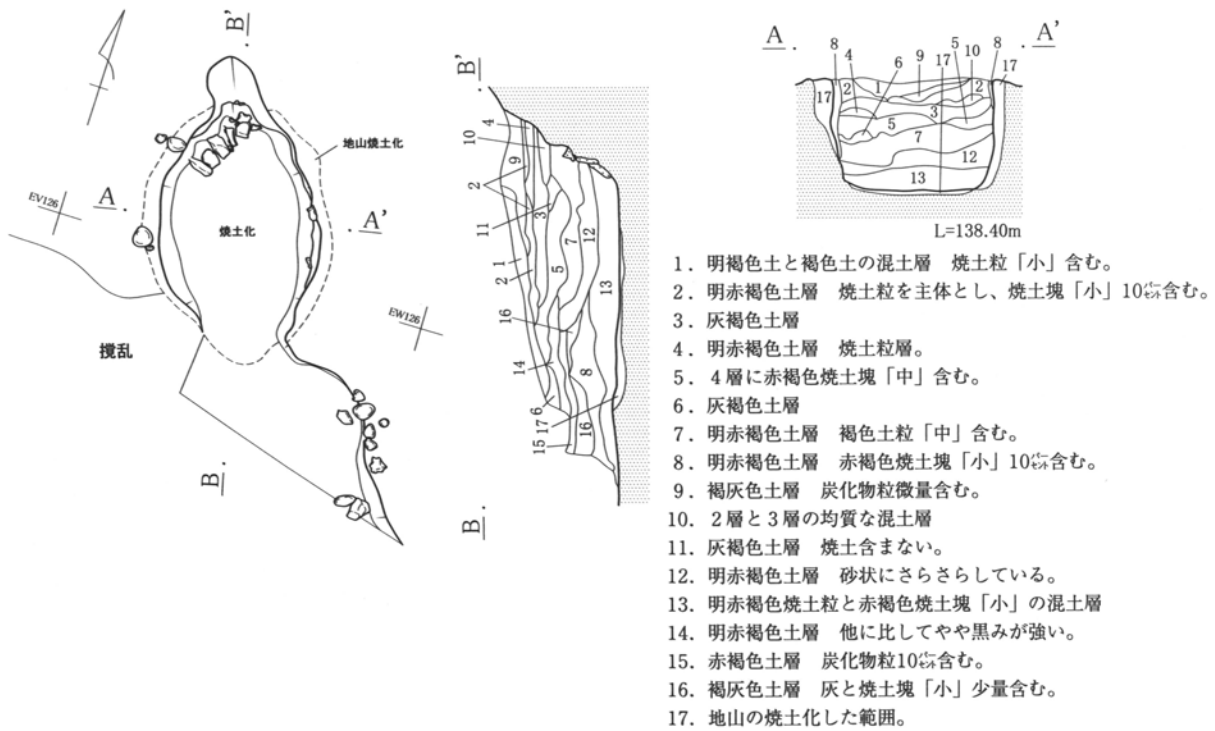
第117図 三騎堂 4区3号炭窯



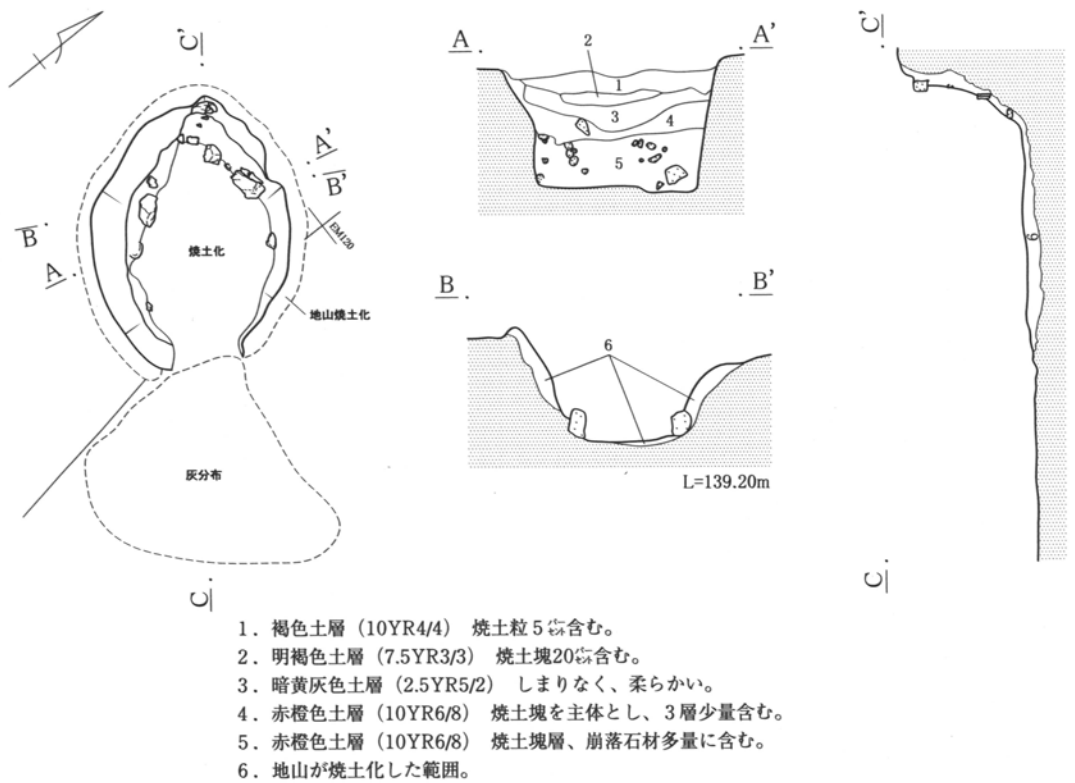
第118図 三騎堂 4区4号炭窯



第119図 三騎堂 4区6号炭窯

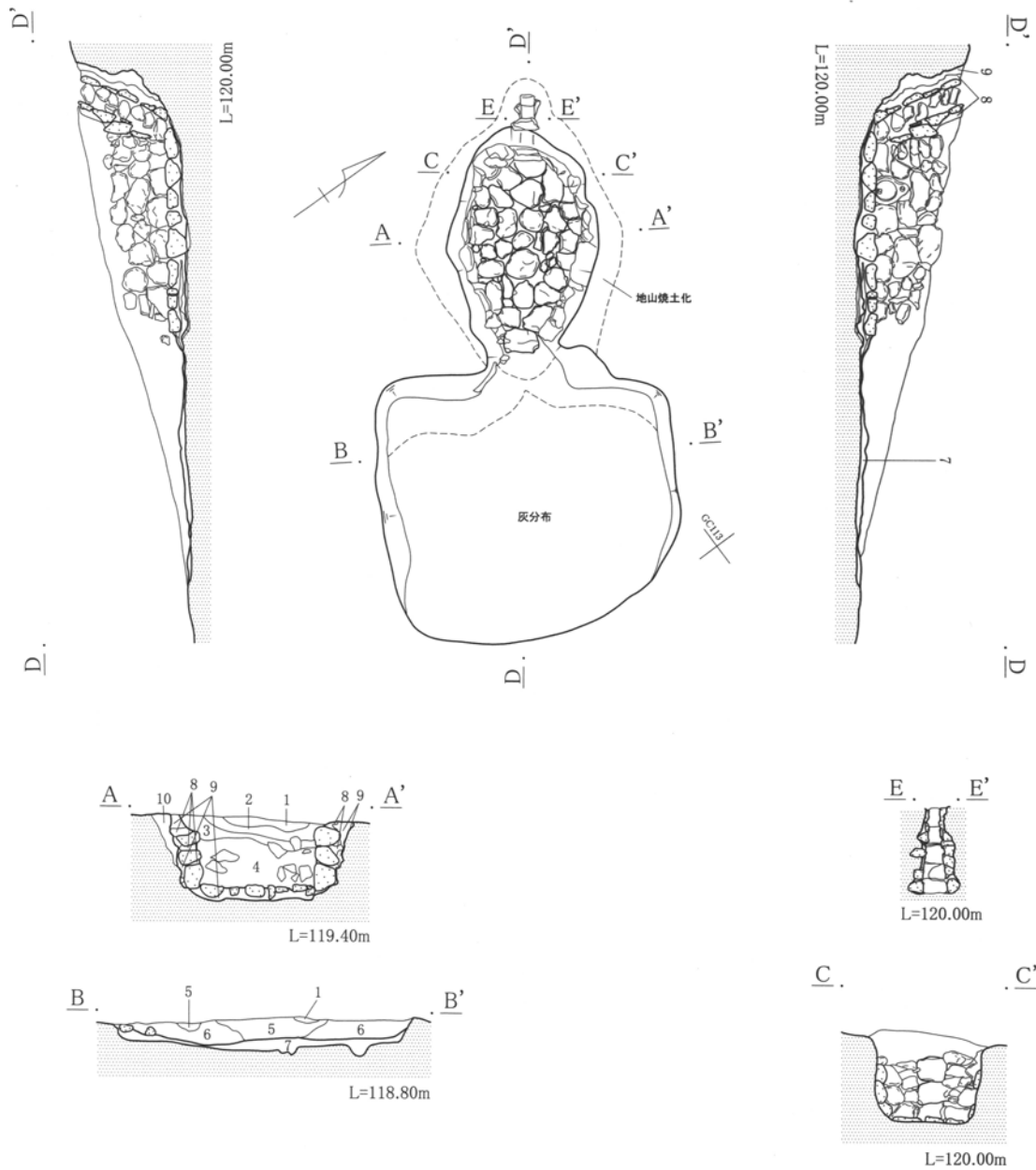


第120図 三騎堂 5区2号炭窯



0 1:80 3m

第121図 三騎堂 5区3号炭窯

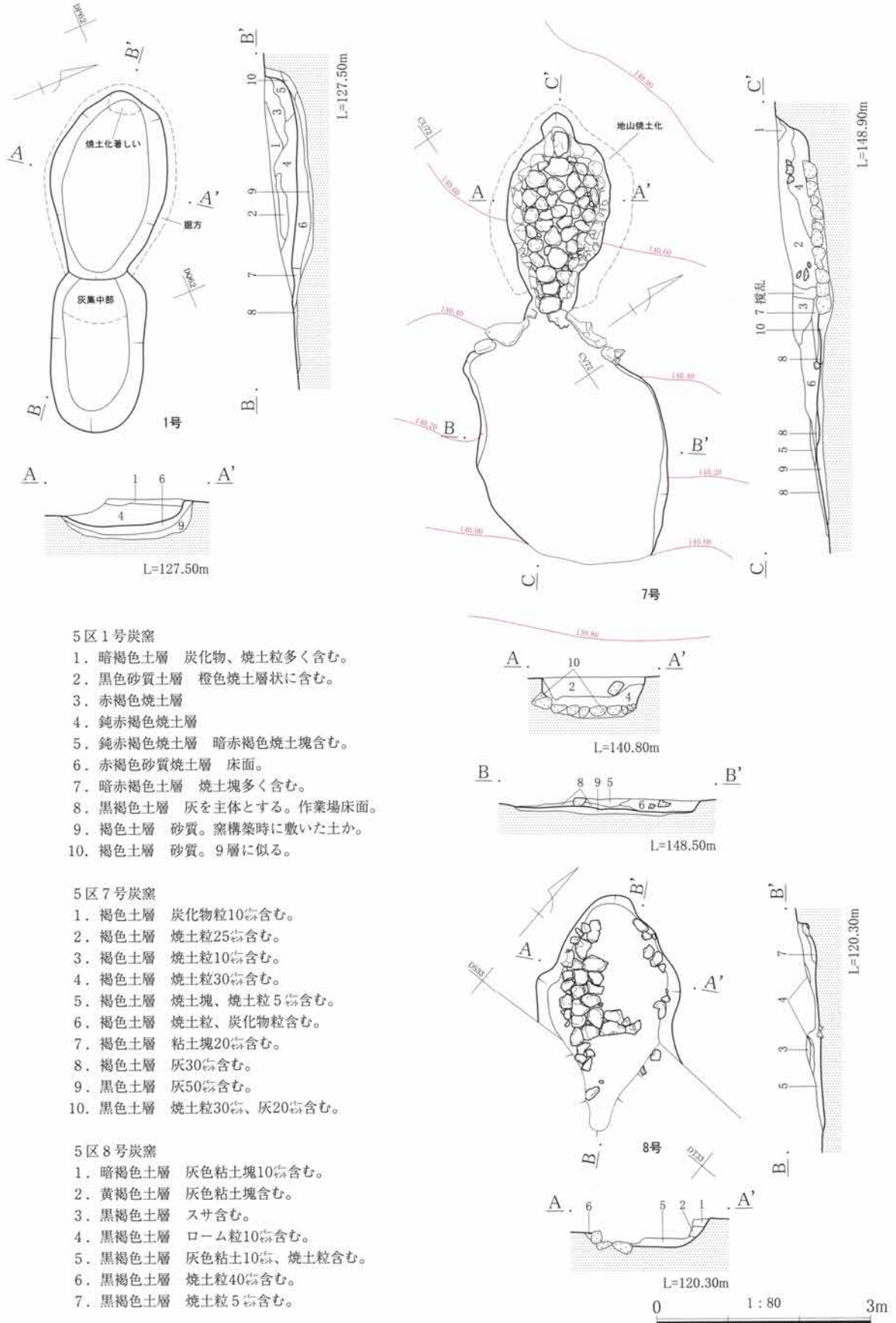


1. 赤褐色壤質砂土（焼土粒）と暗赤褐色の硬い焼土塊「小」の混土層
2. 赤褐色壤質砂土（焼土粒）を主体とし、暗赤褐色の硬い焼土塊「小」20%含む。
3. 暗赤褐色の硬い焼土塊（天井・壁片）を主体とし、赤褐色壤質砂土（焼土粒）30%含む。
4. 崩落石材と硬い焼土塊、赤褐色壤質砂土（焼土粒）の混土層
5. 2層に比して暗赤褐色の硬い焼土塊がやや少ない。
6. 褐色土層（10YR4/1） 黒色土とローム層の塊状混土層。
7. 黒色灰層 ローム塊「小」5%含む。
8. 暗赤褐色焼土層 硬く焼き締まる。石材間に詰めた粘土が焼けたもの。
9. 明赤褐色焼土粒層 砂状にさらさらしている。
10. 地山（ローム）焼土層 地山が焼土化した範囲。

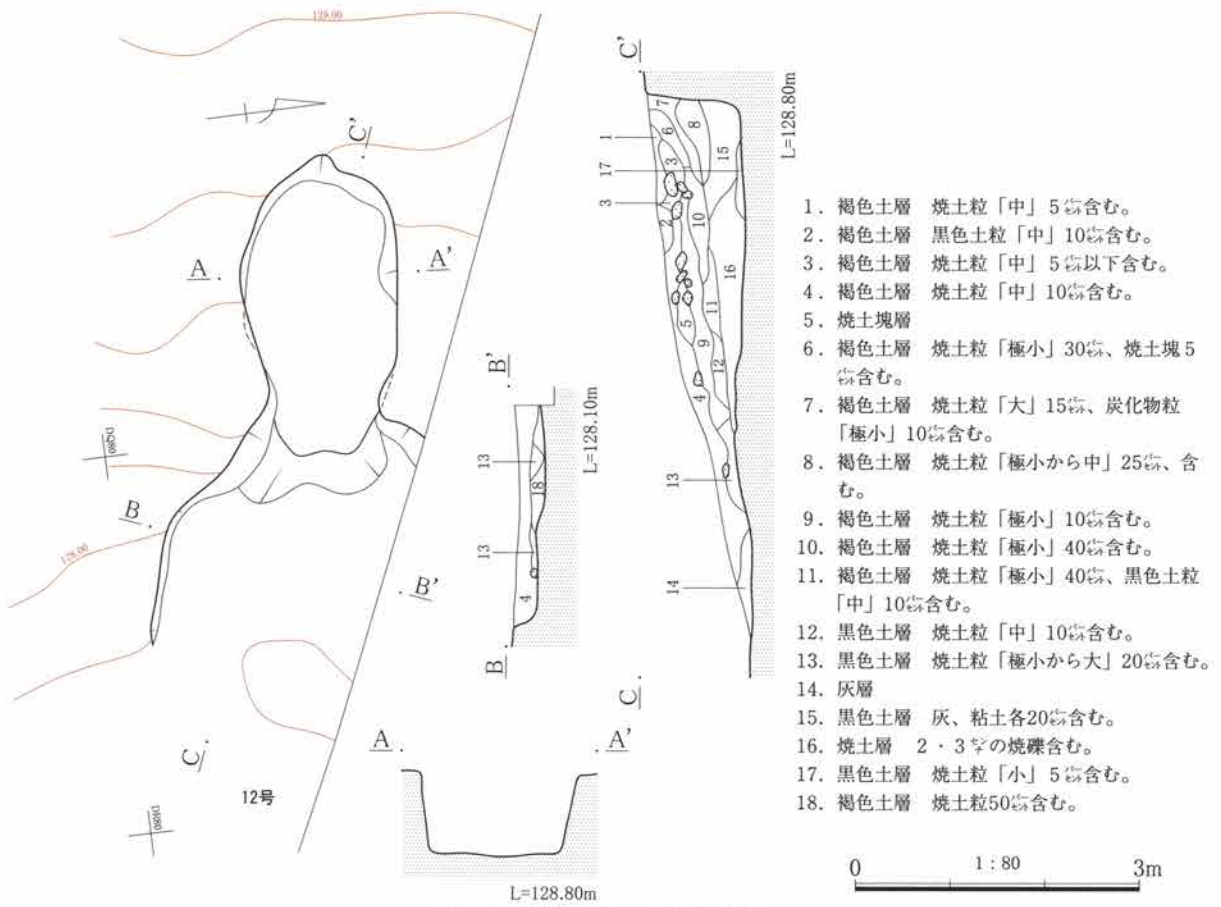
0 1 : 80 3m

第122図 三騎堂 6区1号炭窯

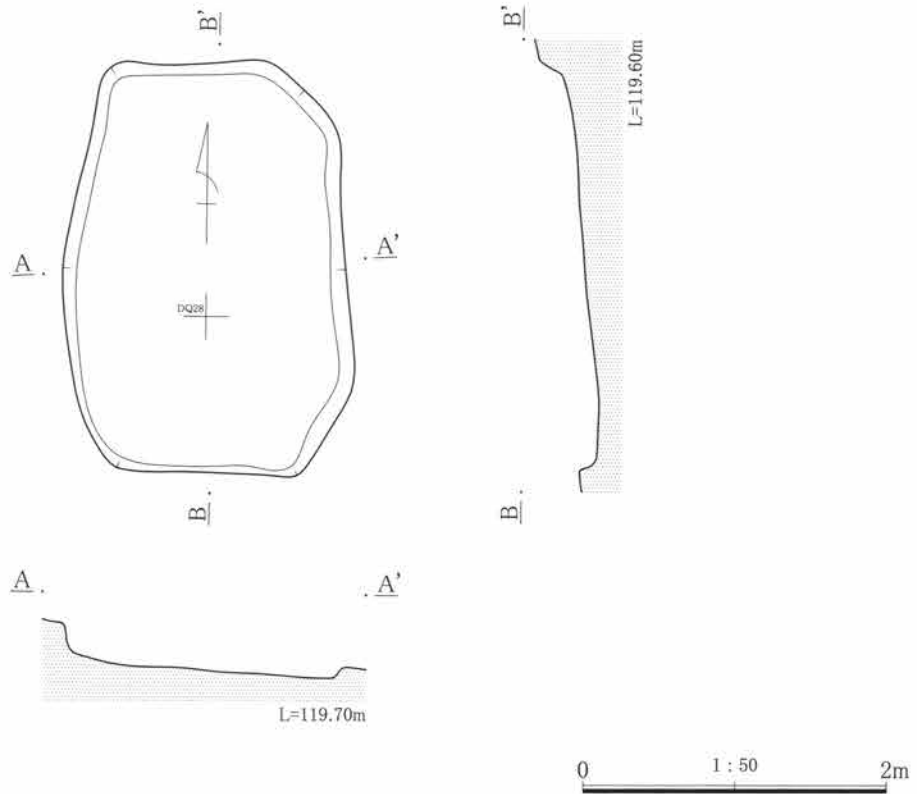
第2章 確認された遺構と遺物



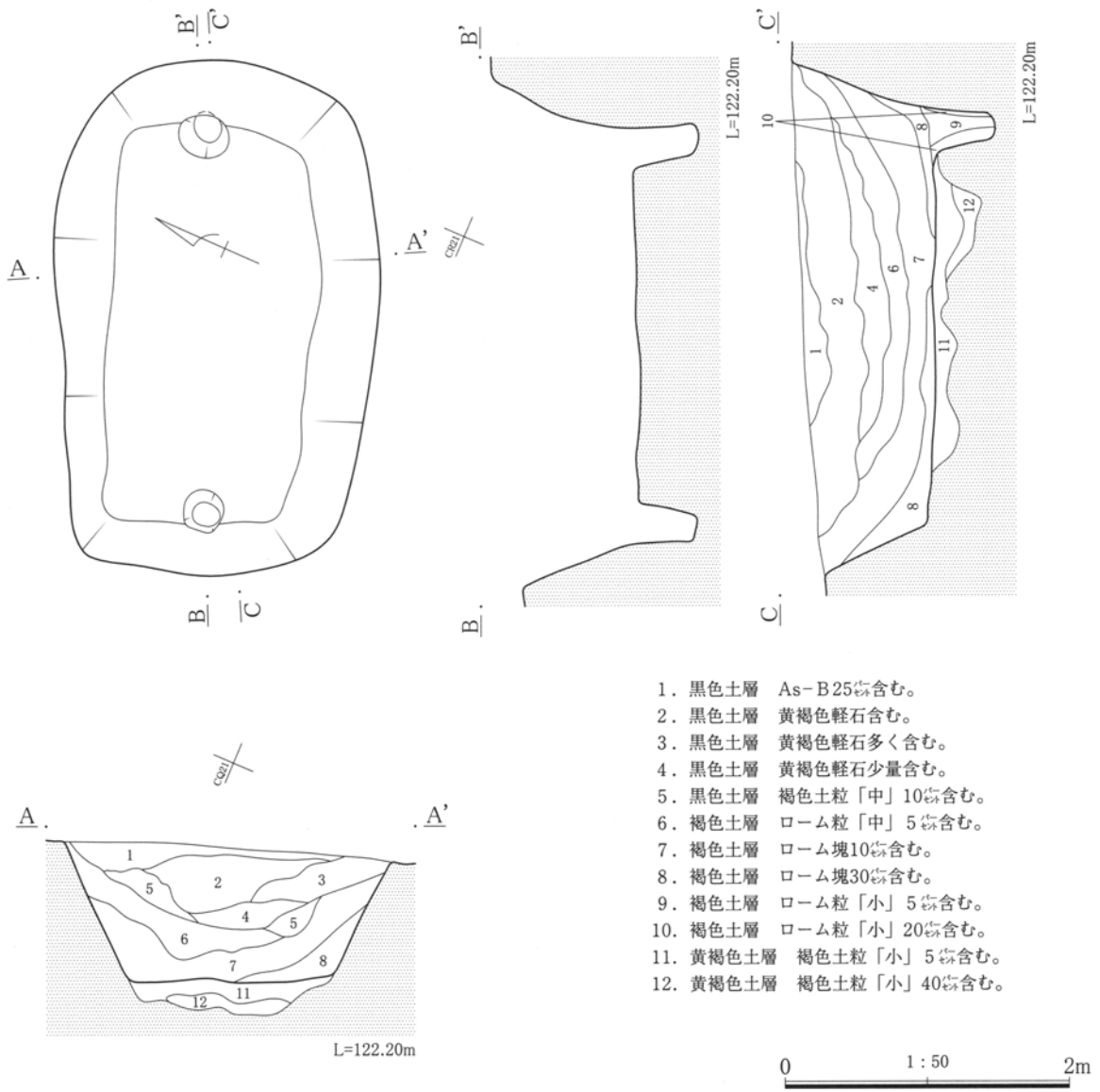
第123図 見切塚 5区1号・7号・8号炭窯



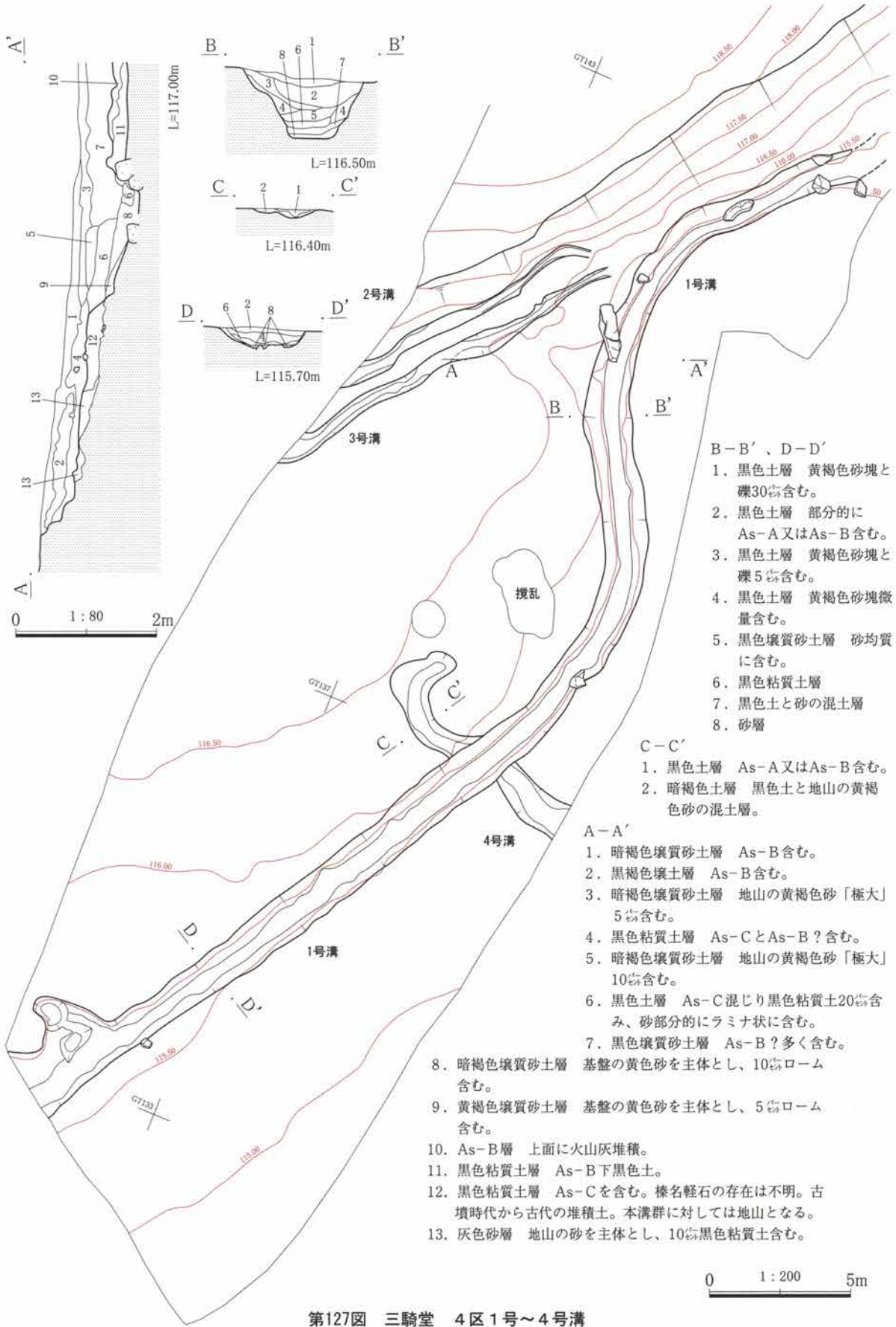
第124図 見切塚 5区12号炭窯

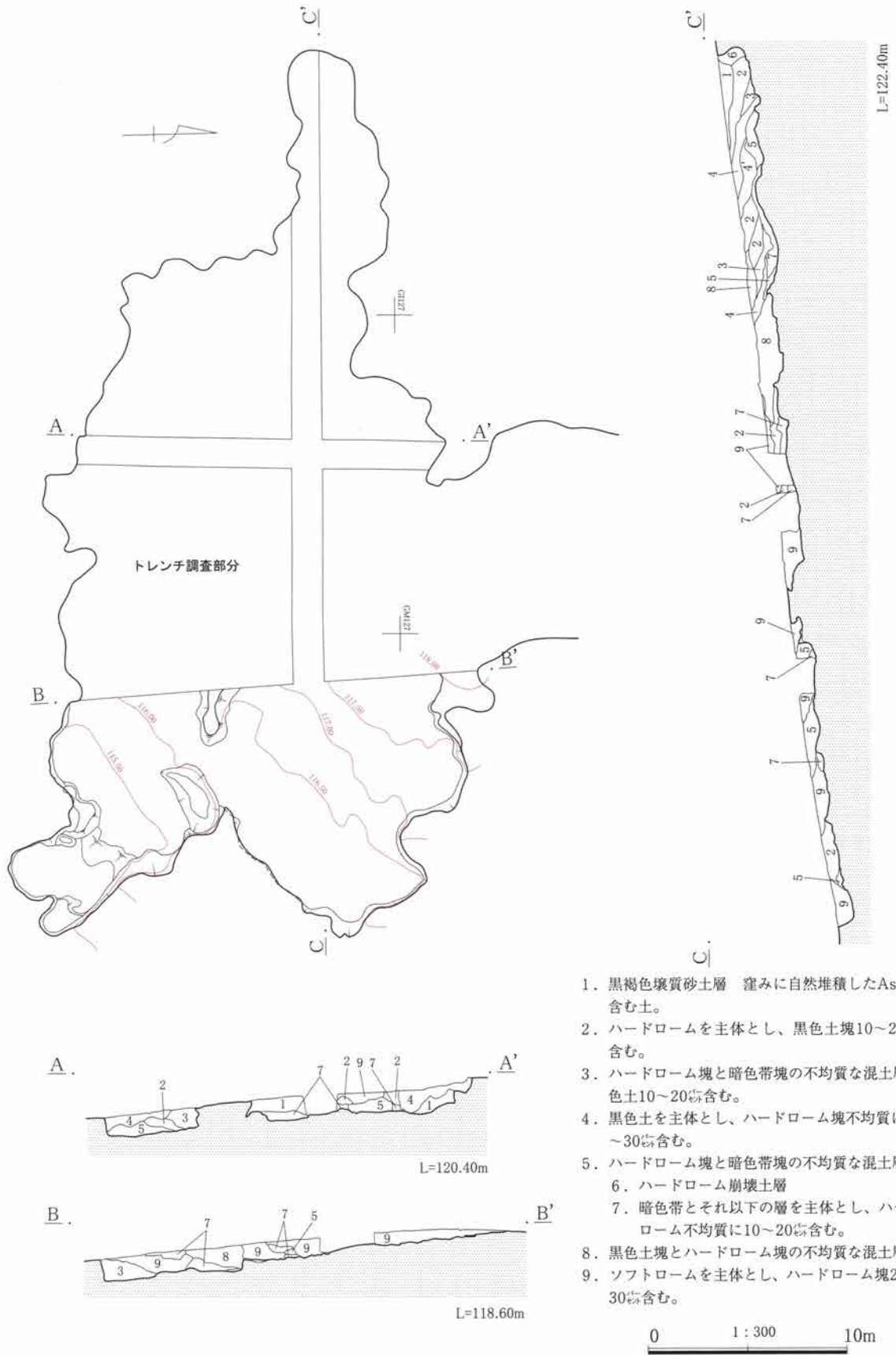


第125図 見切塚 5区3号竪穴



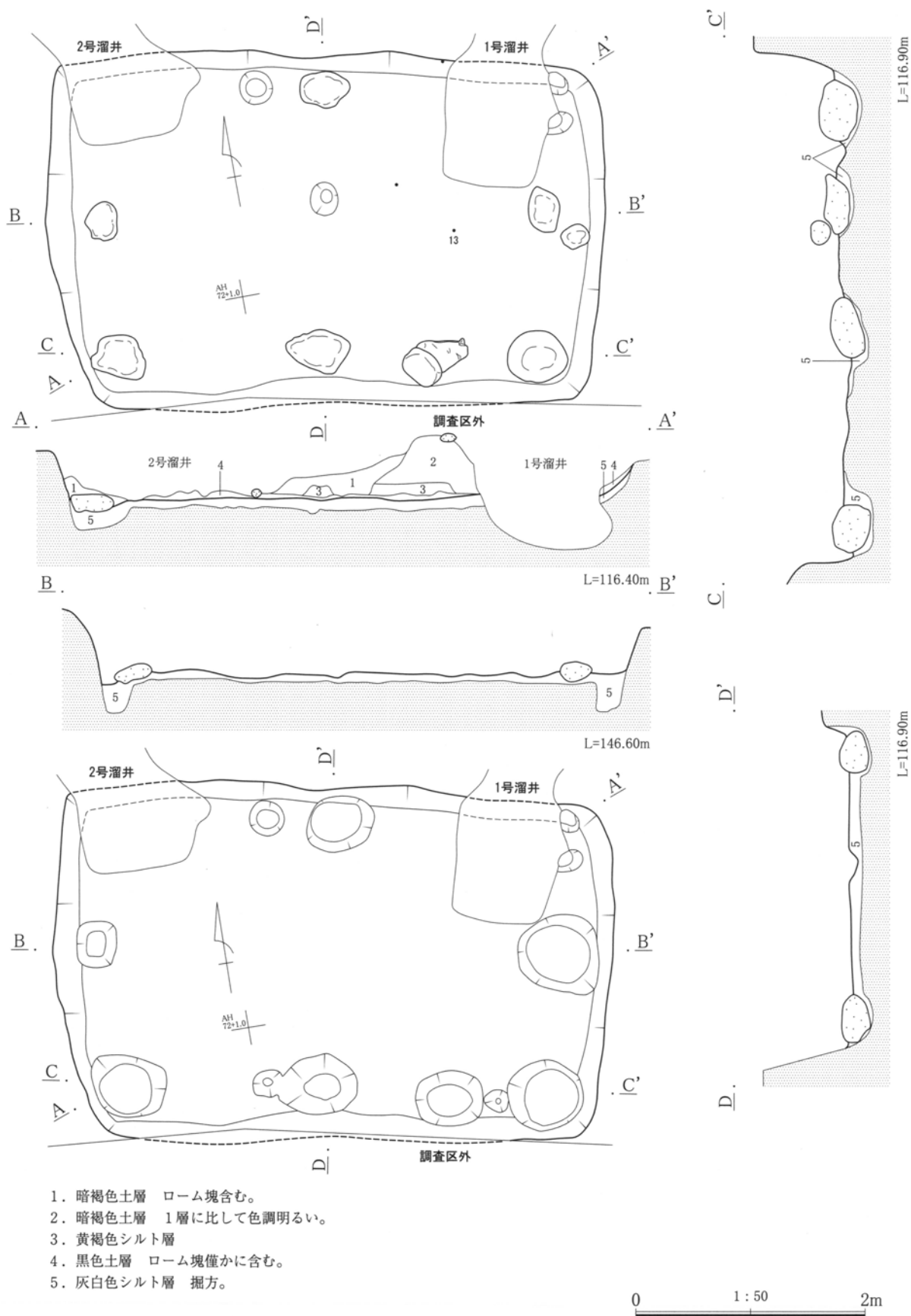
第126図 見切塚 5区2号竪穴



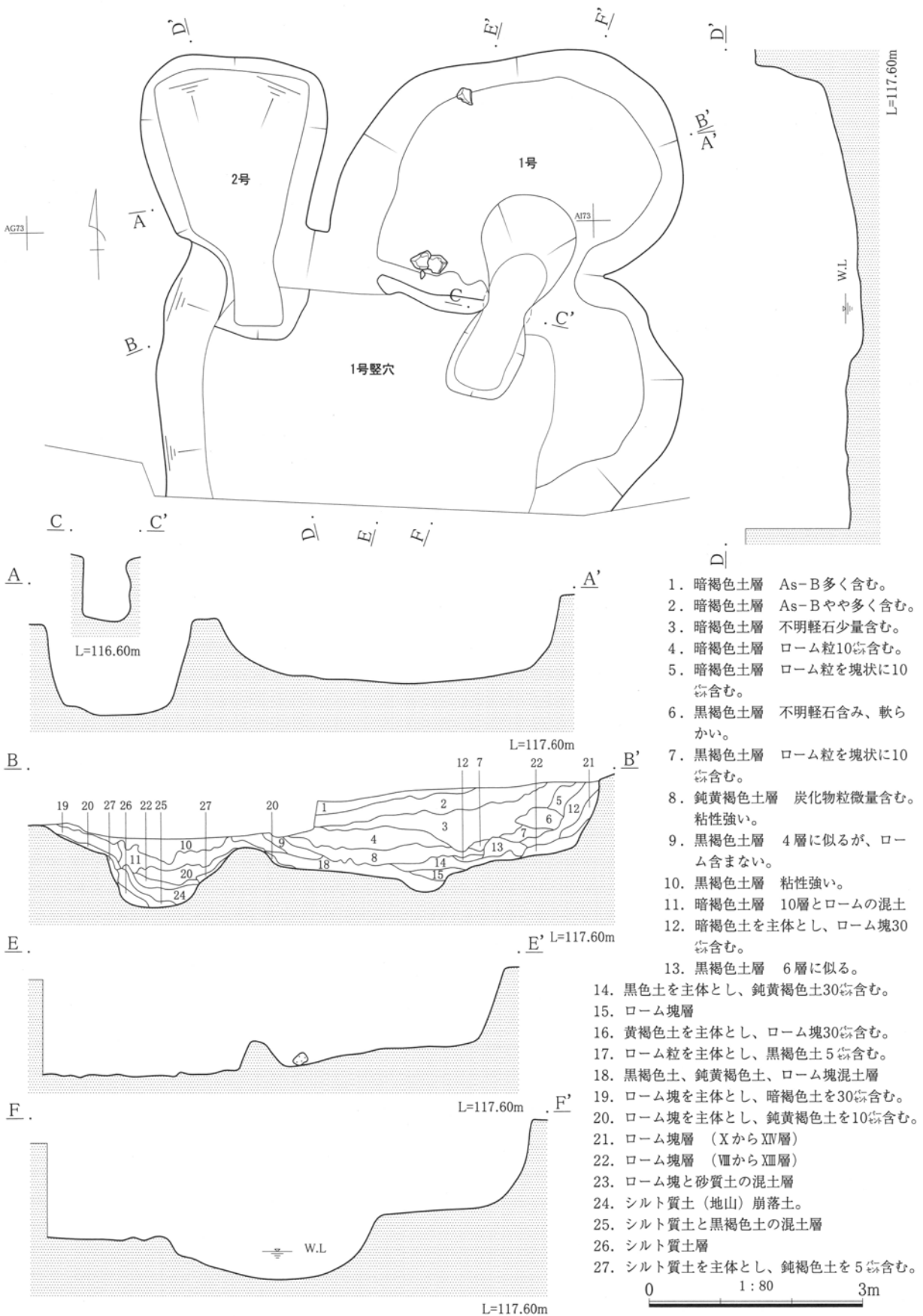


1. 黒褐色壤質砂土層 窪みに自然堆積したAs-B含む土。
2. ハードロームを主体とし、黒色土塊10~20%含む。
3. ハードローム塊と暗色帯塊の不均質な混土層黒色土10~20%含む。
4. 黒色土を主体とし、ハードローム塊不均質に20~30%含む。
5. ハードローム塊と暗色帯塊の不均質な混土層。
6. ハードローム崩壊土層
7. 暗色帯とそれ以下の層を主体とし、ハードローム不均質に10~20%含む。
8. 黒色土塊とハードローム塊の不均質な混土層。
9. ソフトロームを主体とし、ハードローム塊20~30%含む。

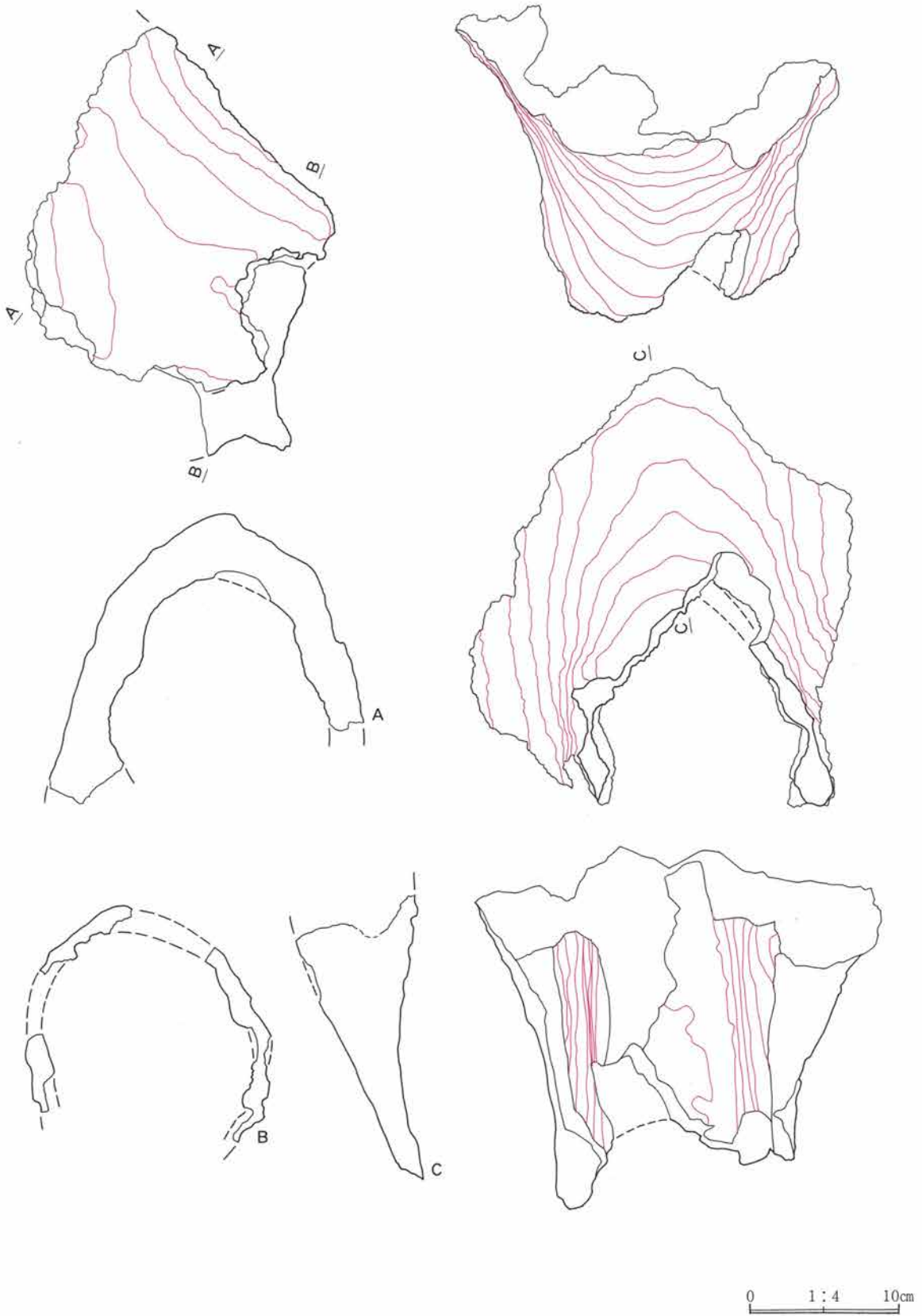
第129図 三騎堂 6区2号粘土探掘坑



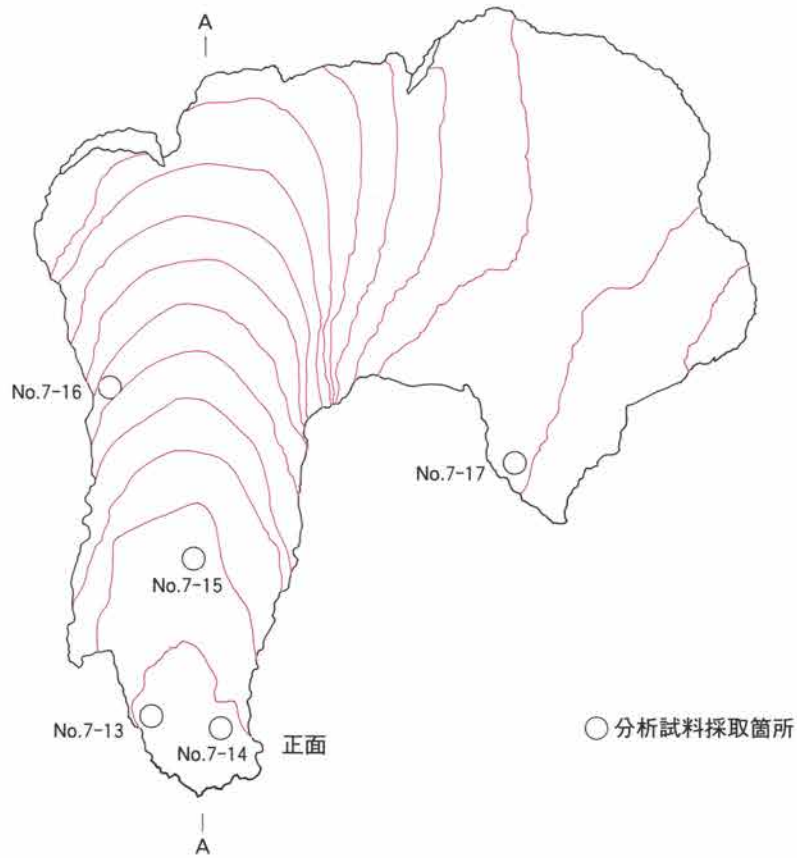
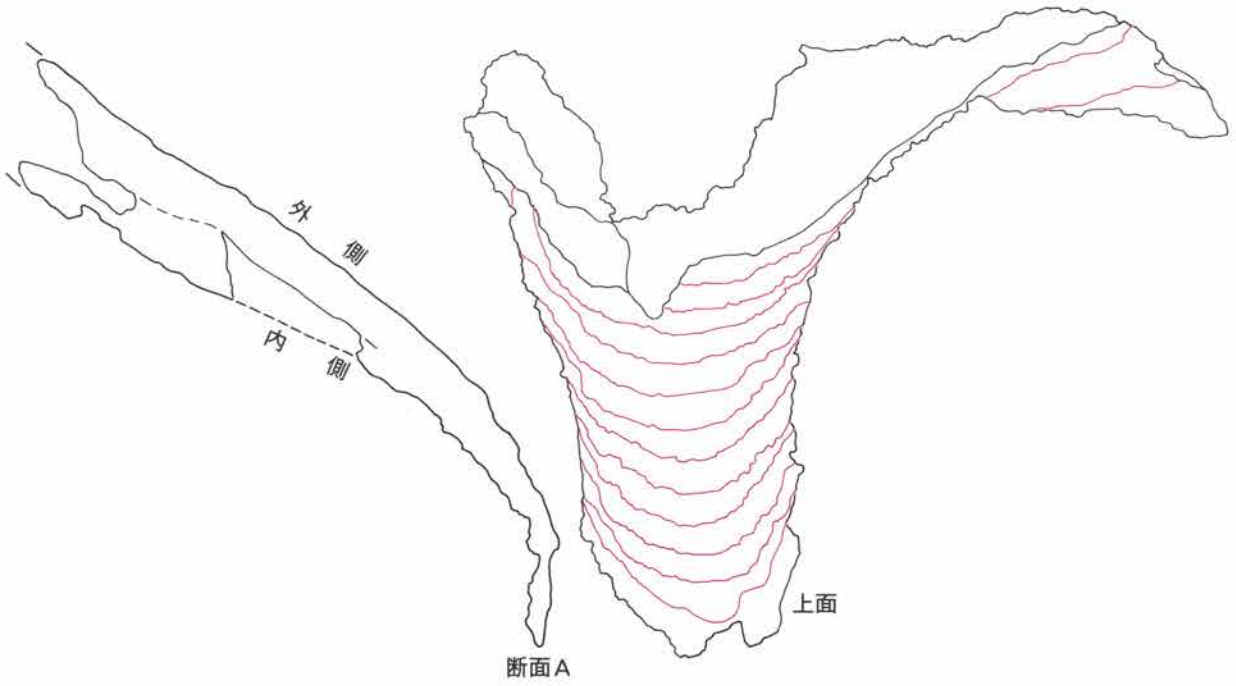
第130図 見切塚 3区1号竪穴



第131図 見切塚 3区1号・2号溜井

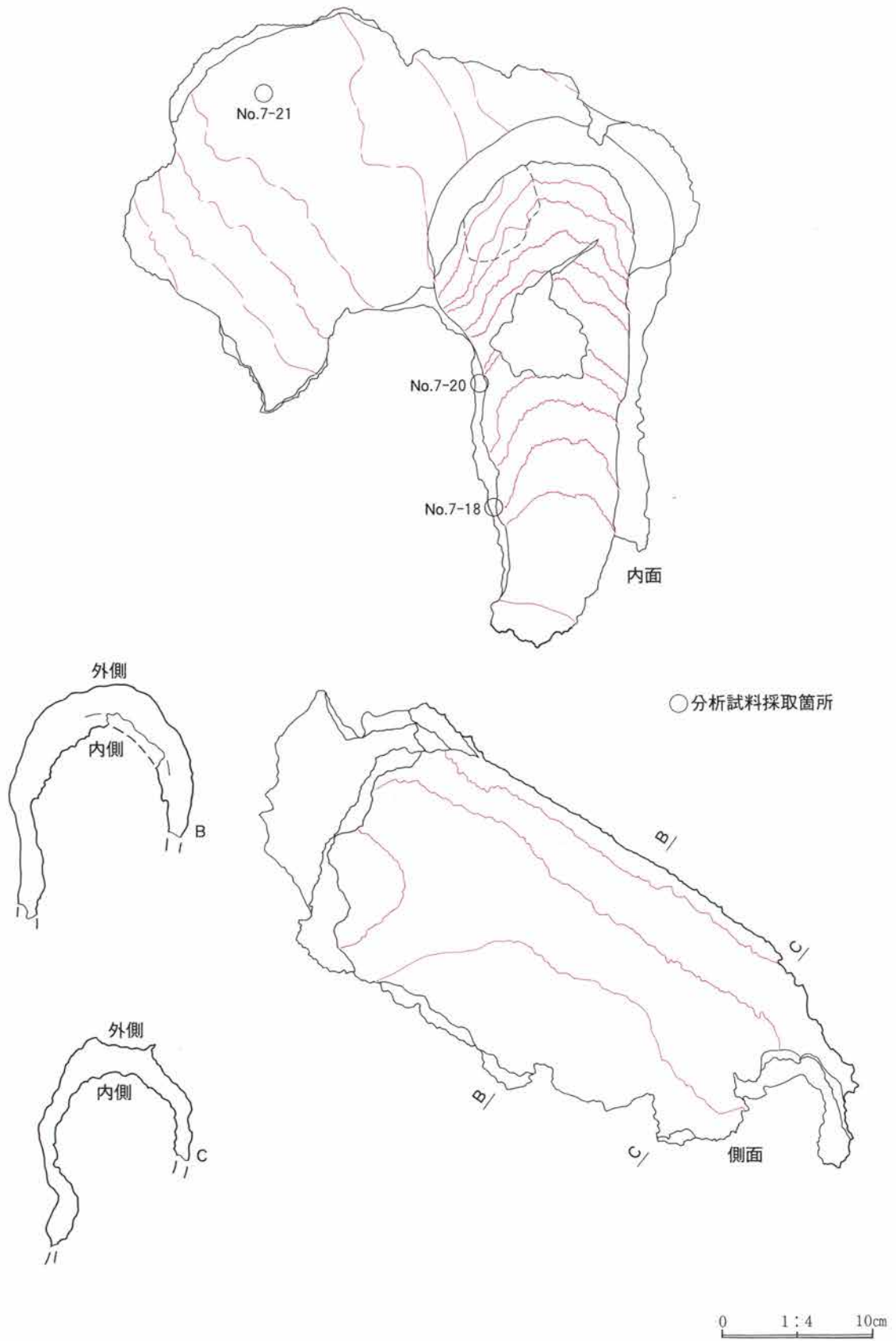


第134図 三騎堂 4区1号豎形炉出土羽口

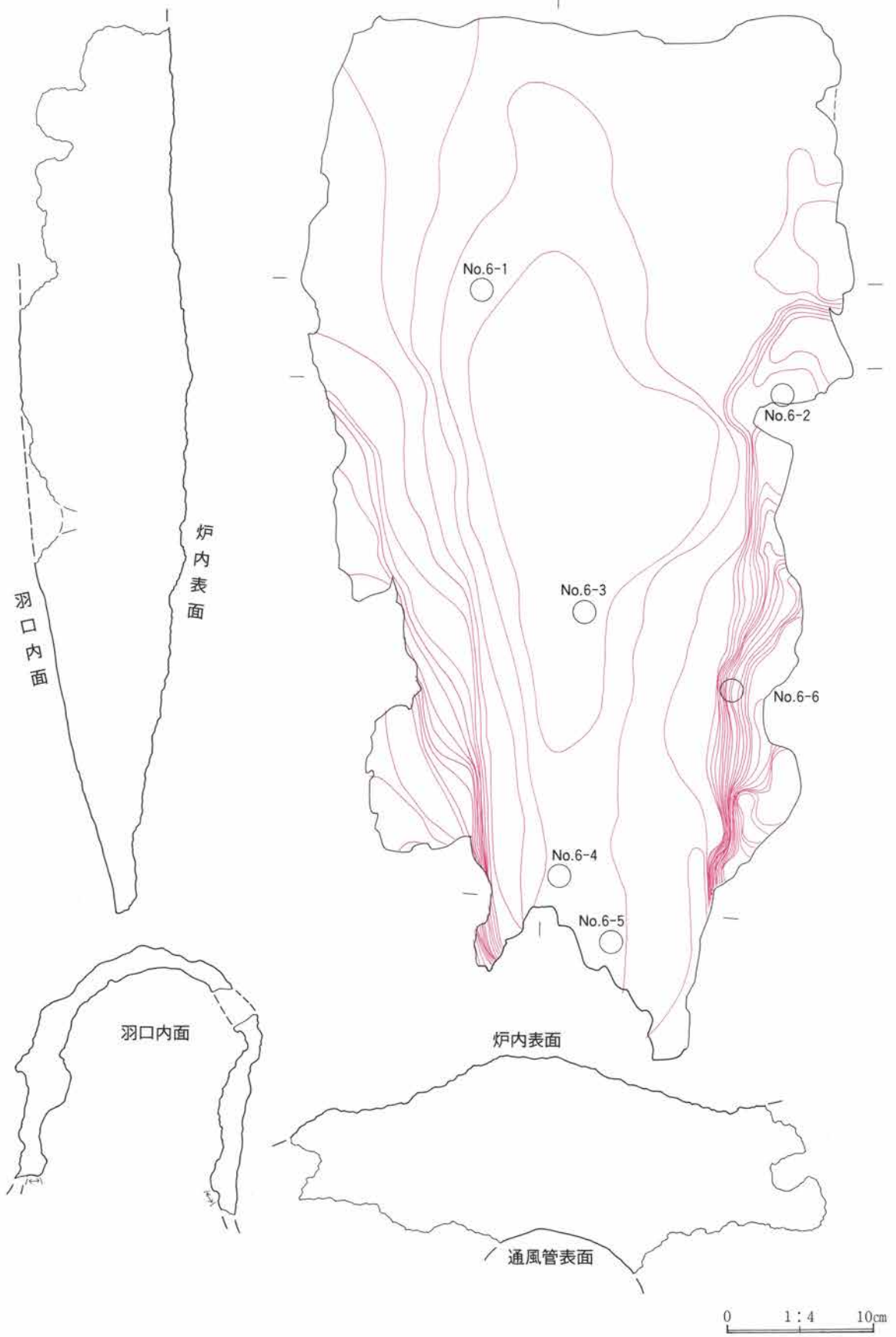


0 1:4 10cm

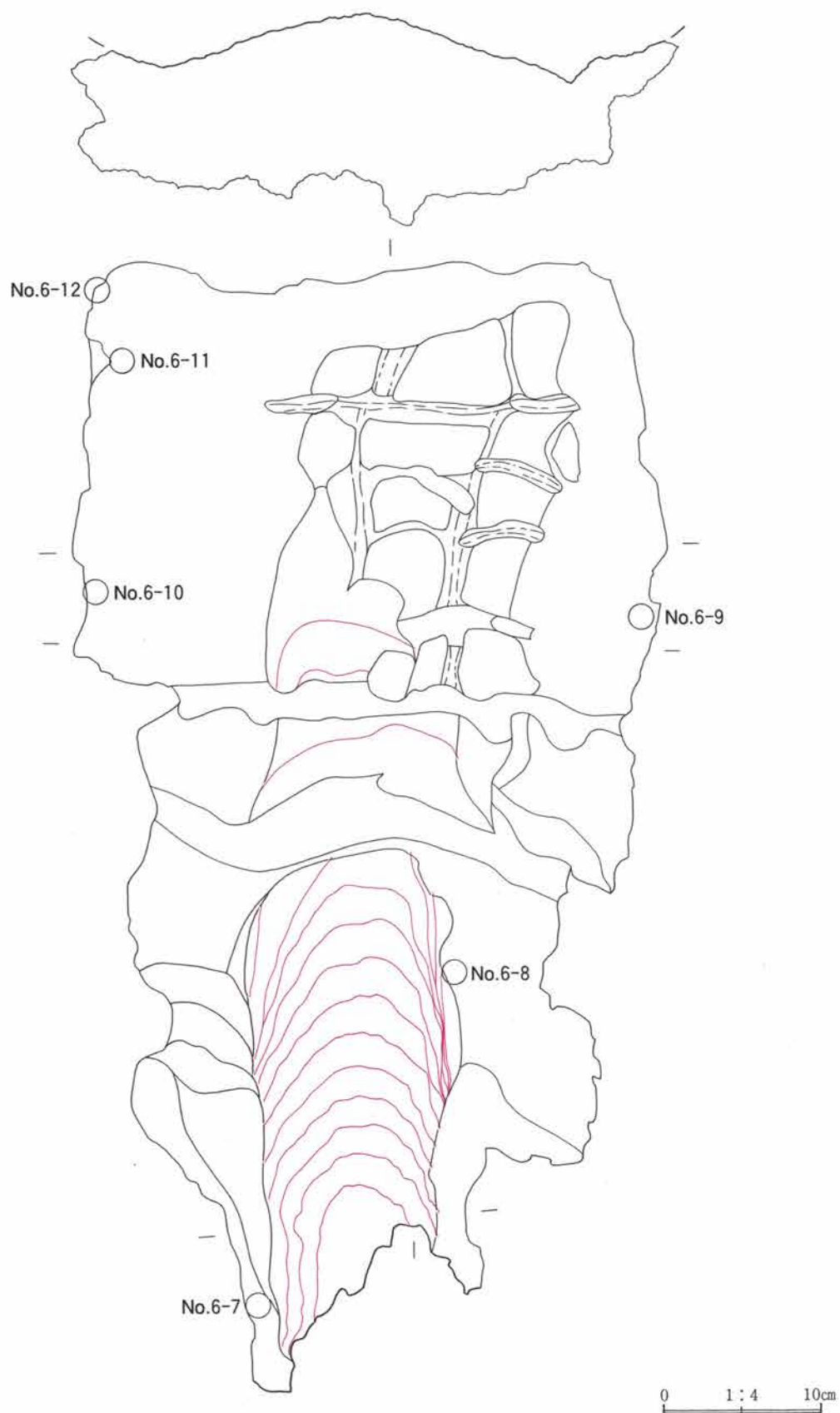
第135図 三騎堂 4区2号豎形炉出土羽口(1)



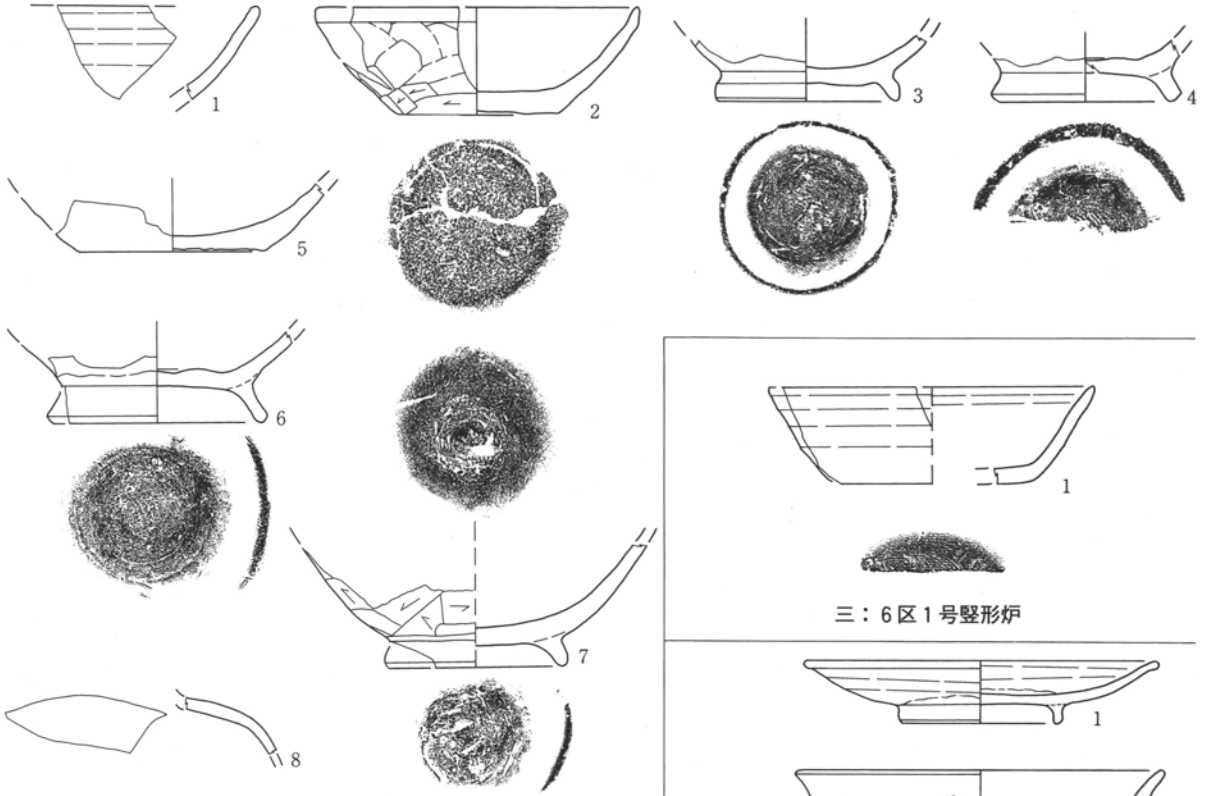
第136図 三騎堂 4区2号竪形炉出土羽口(2)



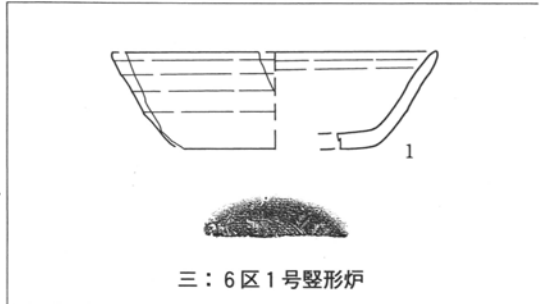
第137図 三騎堂 6区1号豎形炉出土羽口(1)



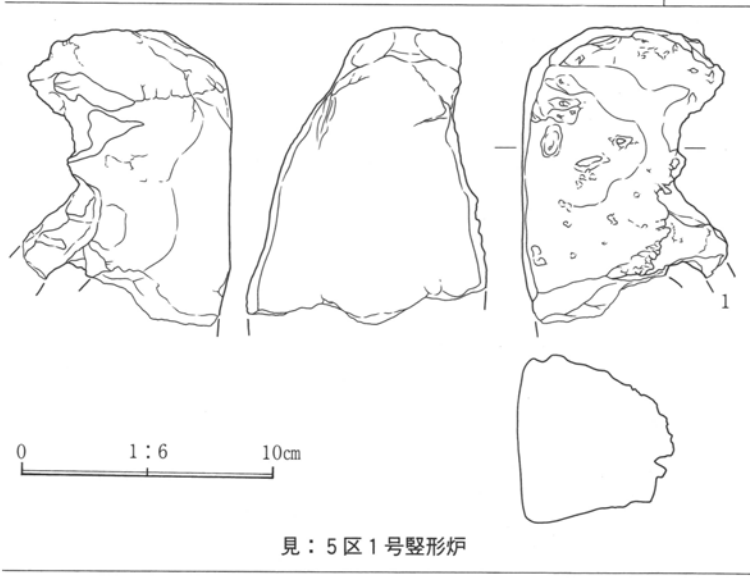
第138図 三騎堂 6区1号竖形炉出土羽口(2)



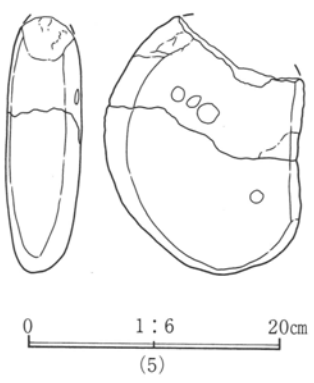
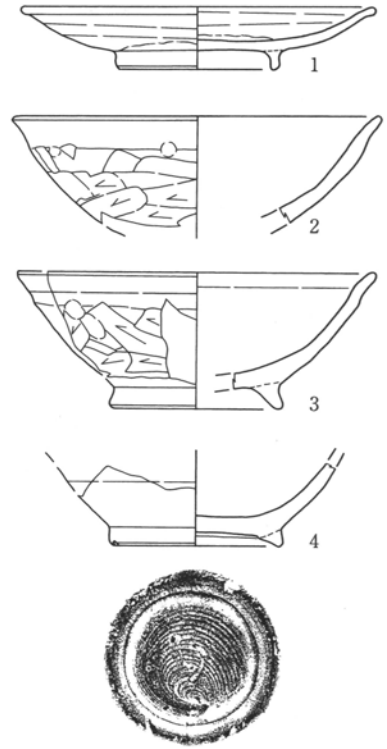
三：4区廃滓場



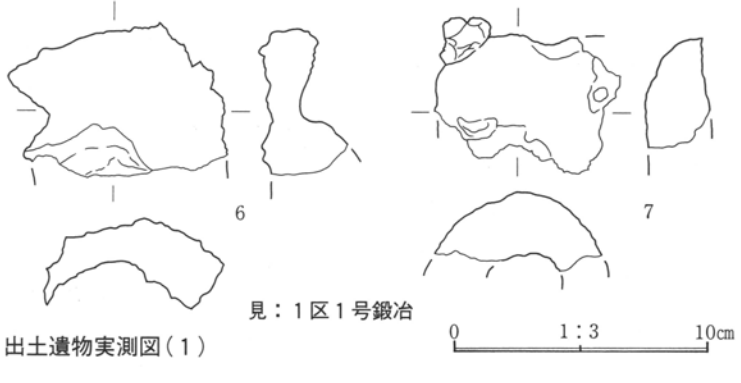
三：6区1号竪形炉



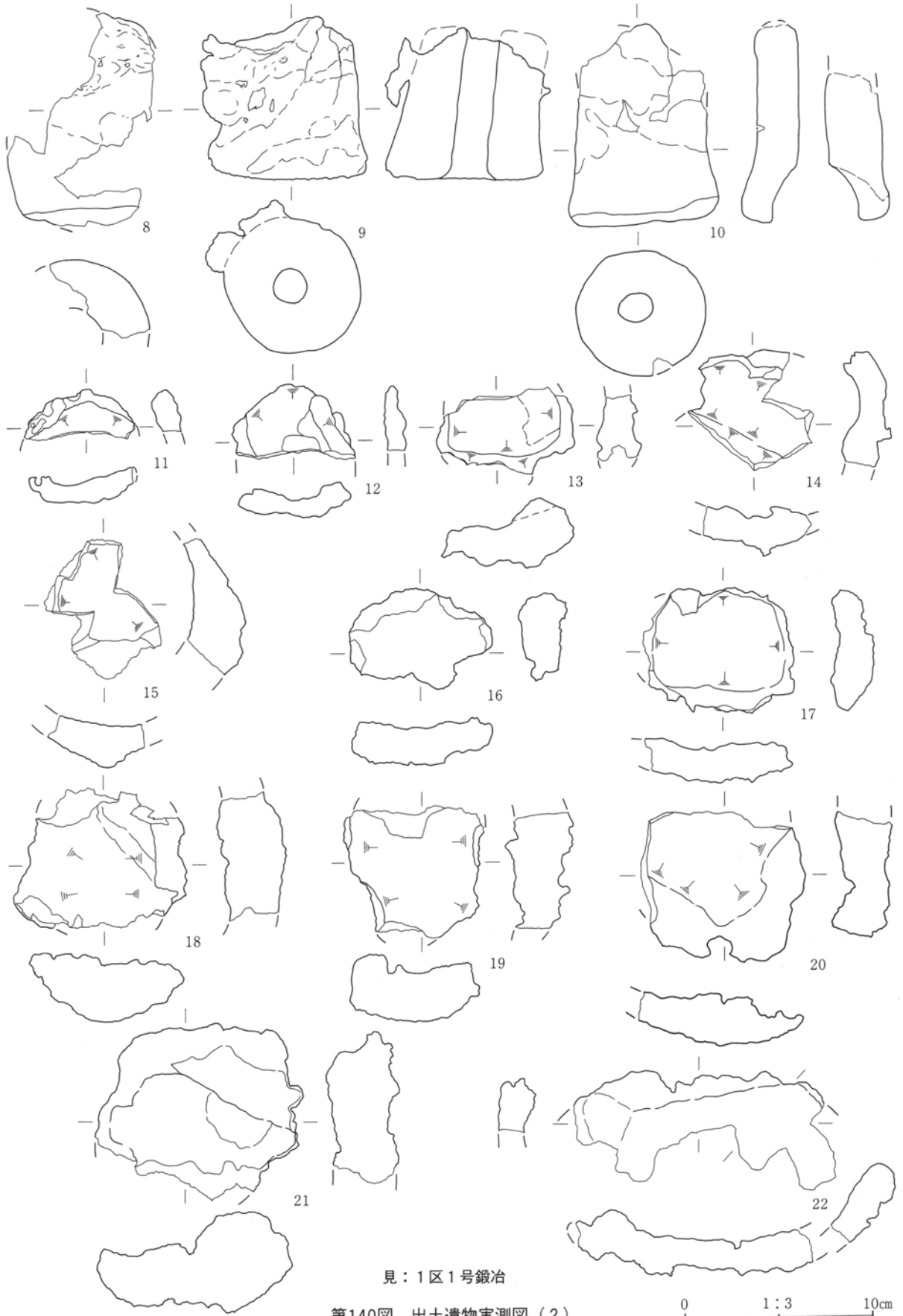
見：5区1号竪形炉

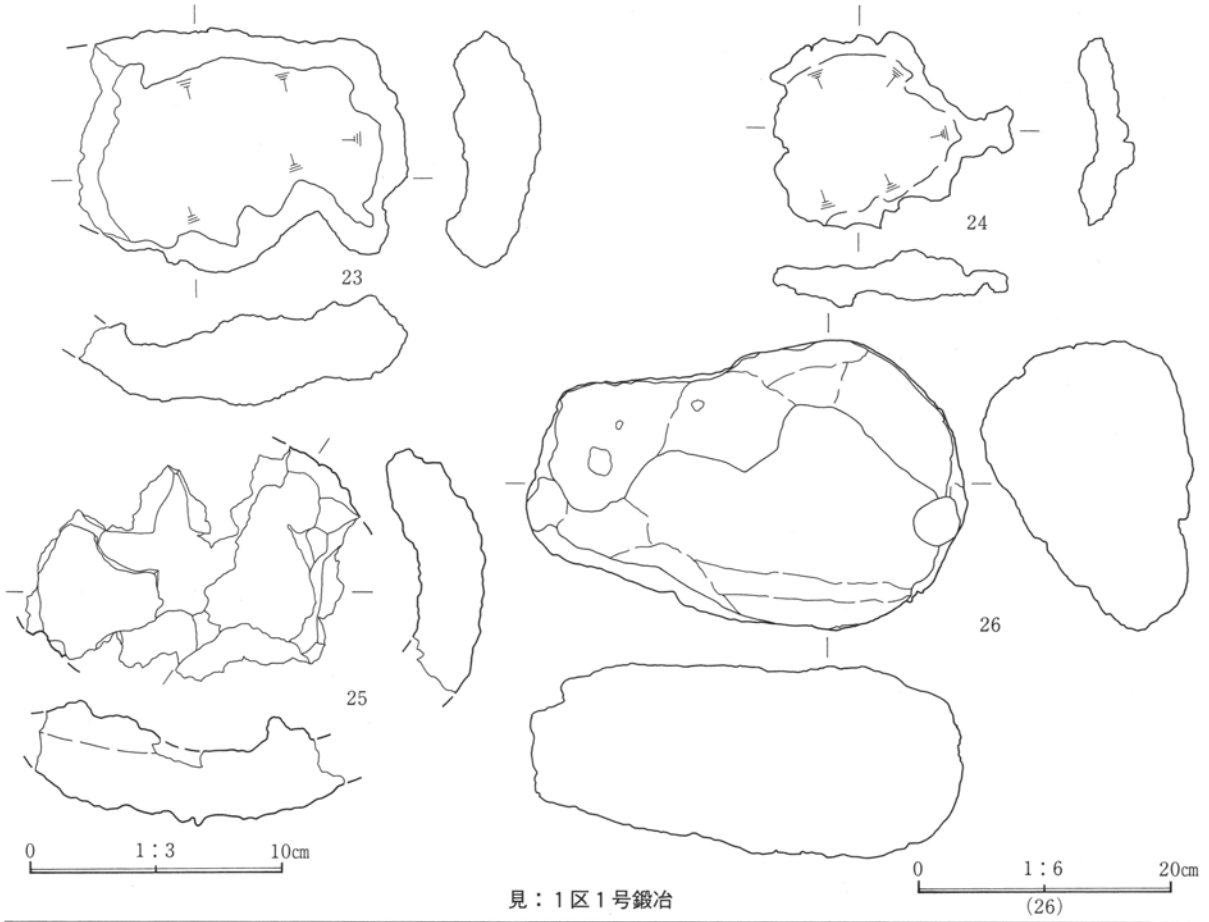


第139図 出土遺物実測図(1)



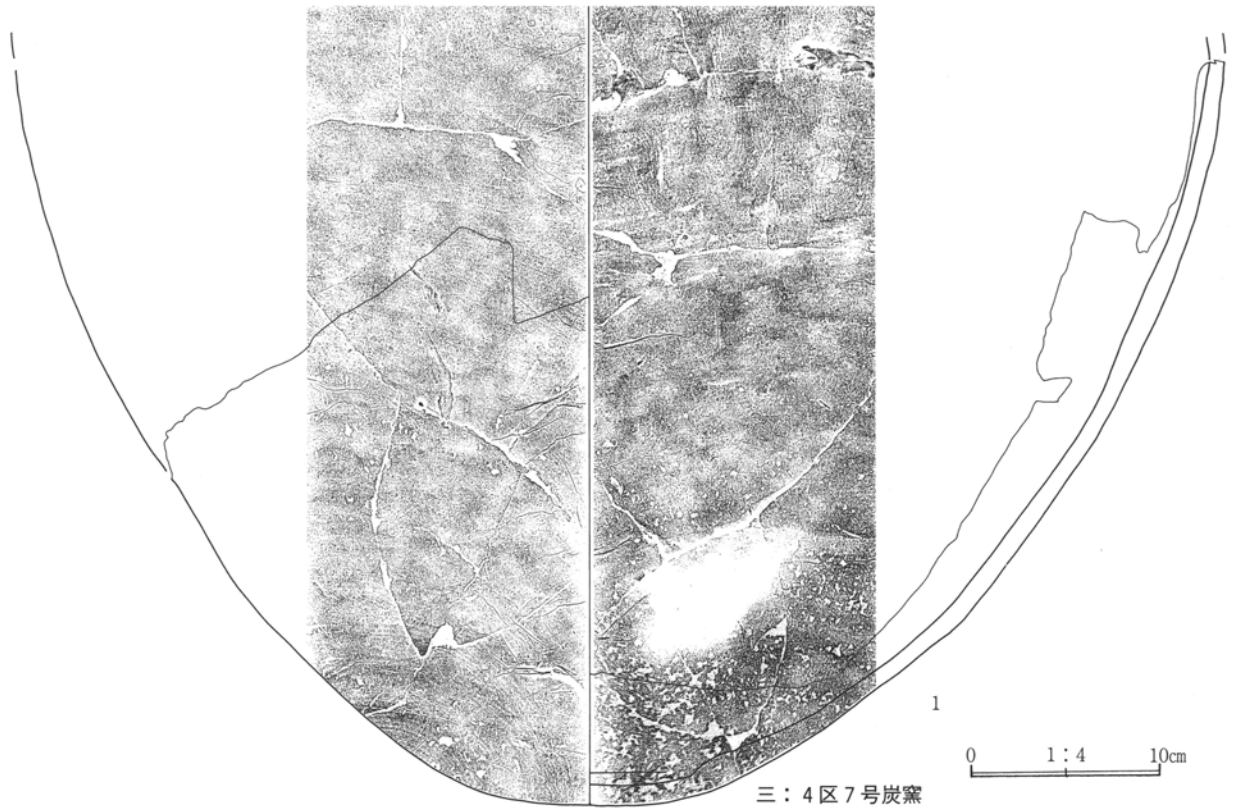
見：1区1号鍛冶





見：1区1号鍛冶

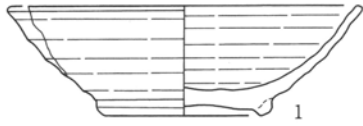
(26)



三：4区7号炭窯

第141図 出土遺物実測図(3)

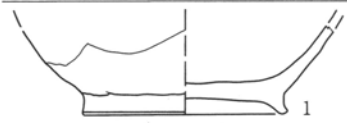
第2章 確認された遺構と遺物



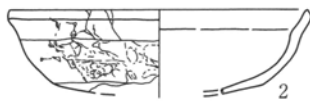
三：1区3号炭窯



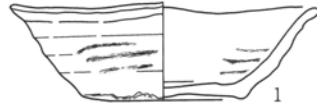
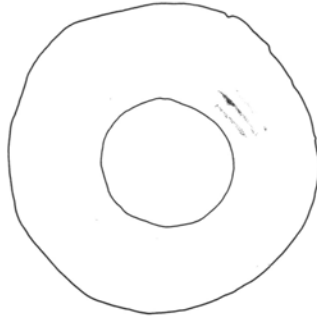
見：5区14号炭窯



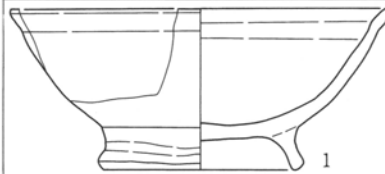
見：5区15・17号炭窯



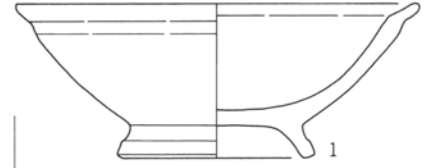
三：H1号住居



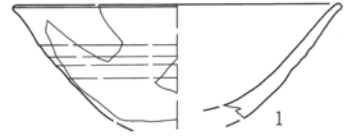
見：1区3号炭窯



見：5区19号炭窯



見：4区1号炭窯



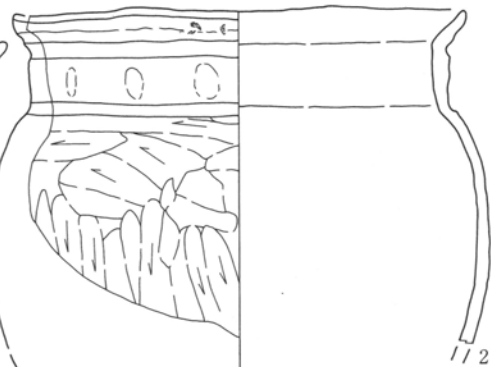
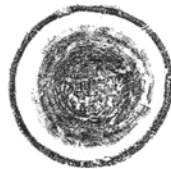
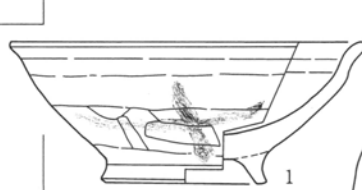
見：5区9号炭窯



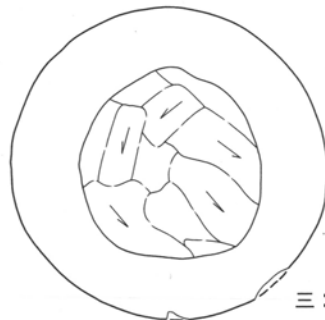
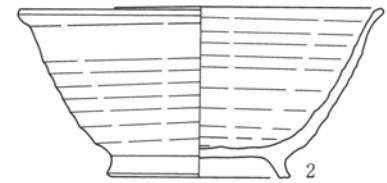
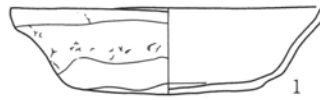
見：7区5号炭窯



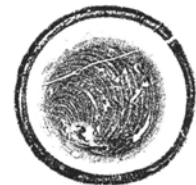
見：5区15号炭窯



三：H2号住居

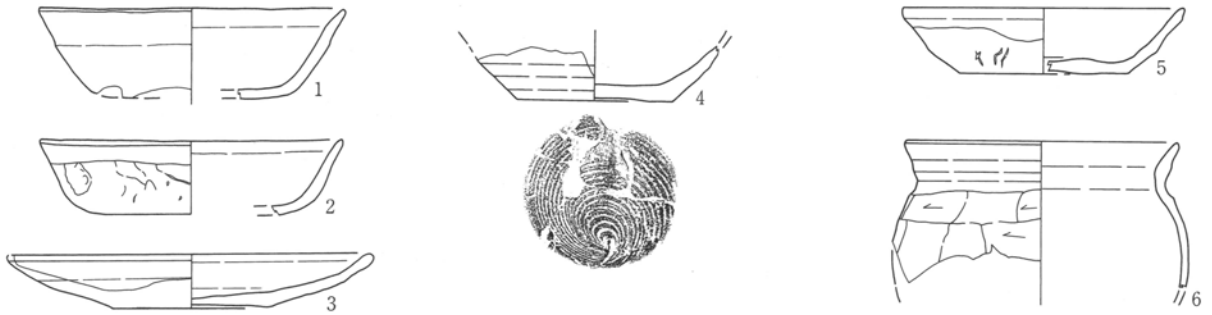


三：H3号住居

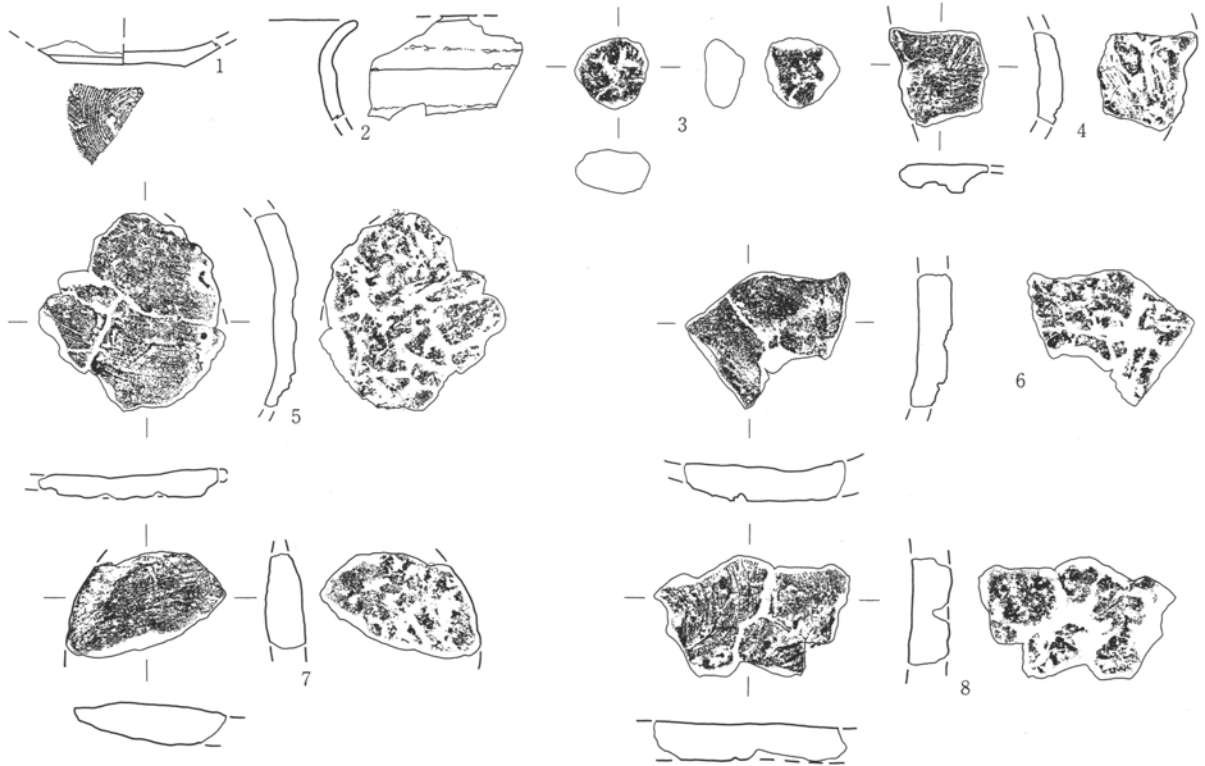


0 1:3 10cm

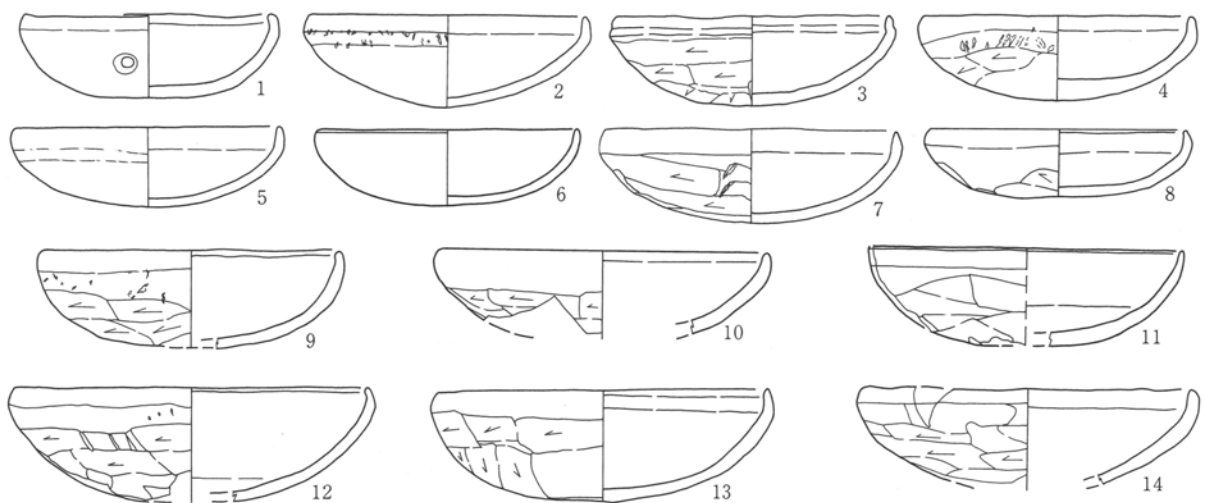
第142図 出土遺物実測図(4)



三：H4号住居



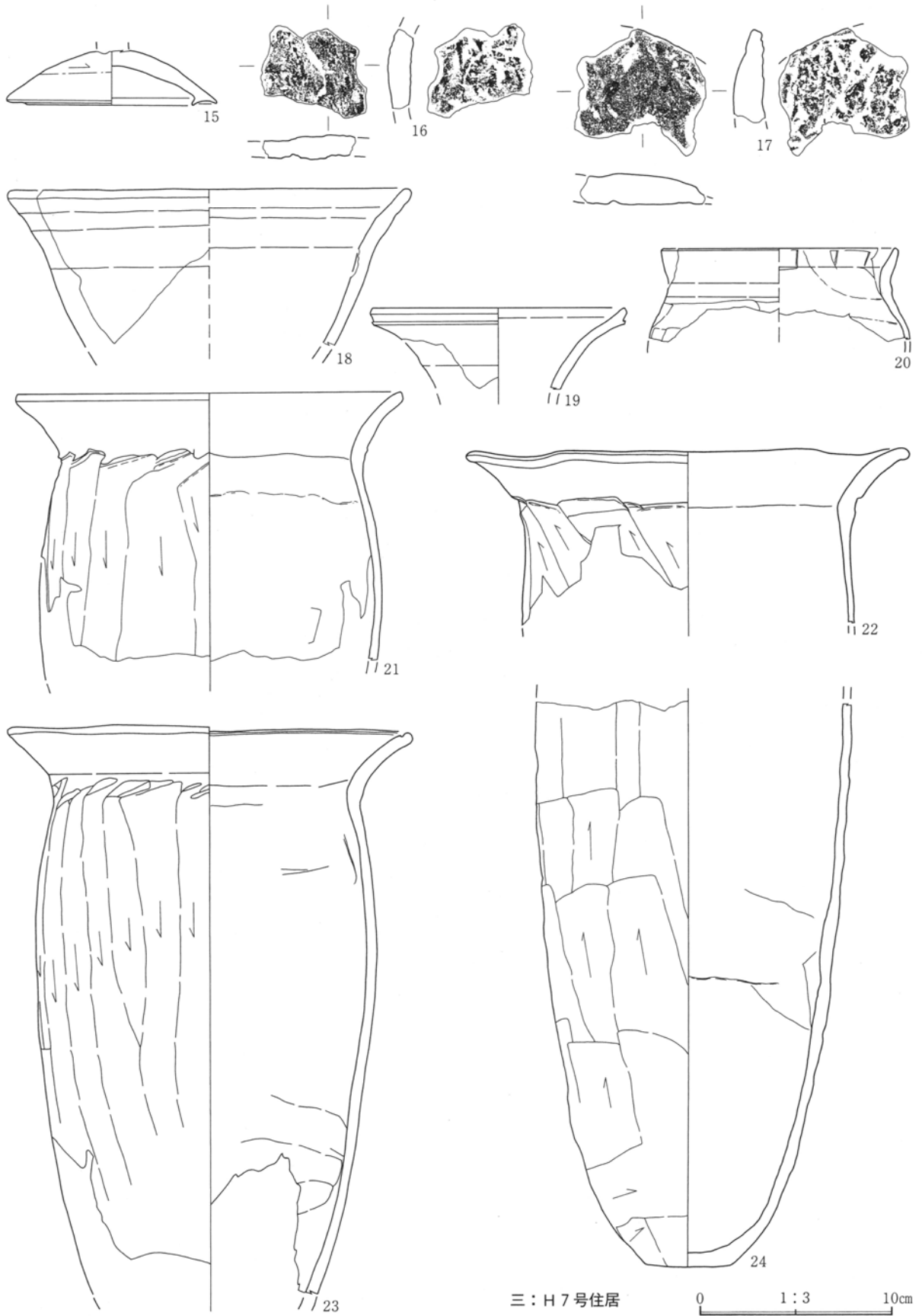
三：H6号住居



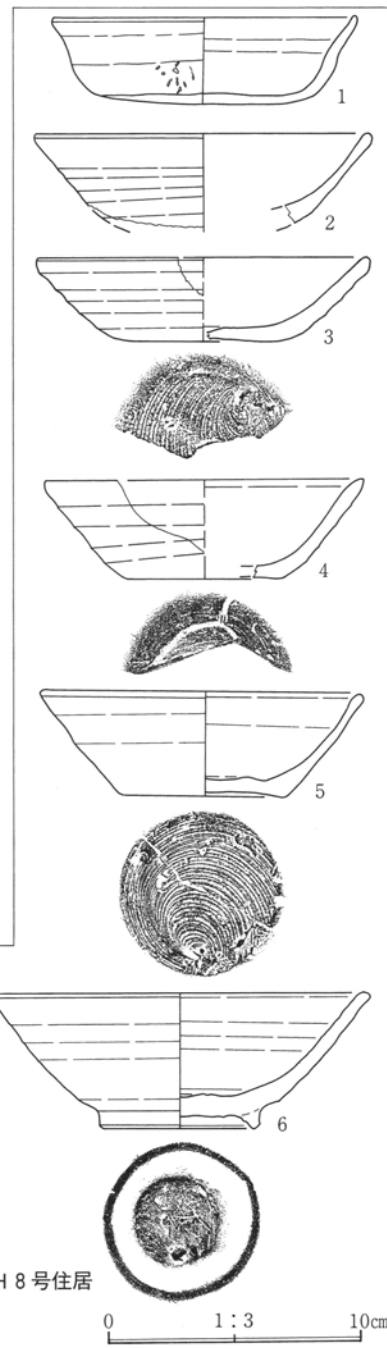
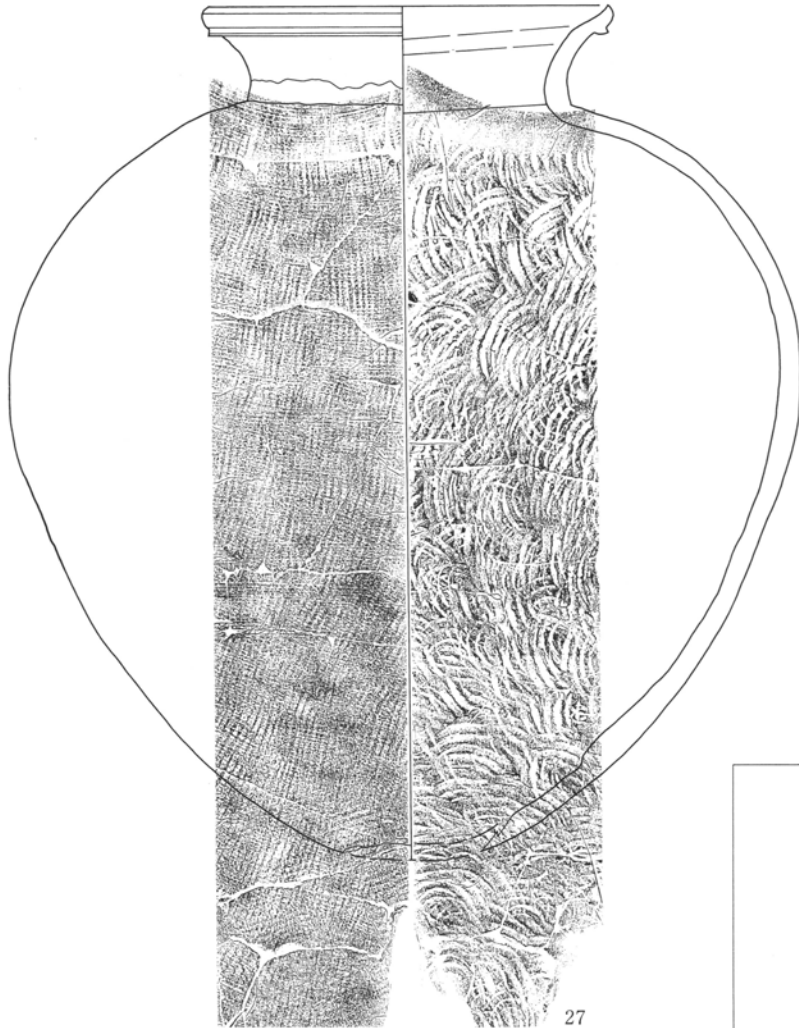
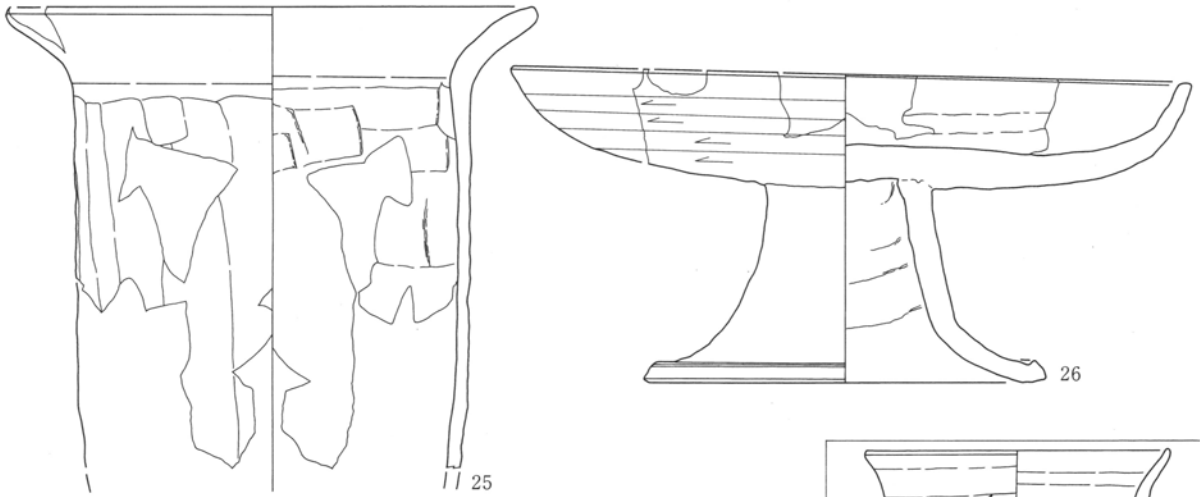
三：H7号住居

第143図 出土遺物実測図(5)

0 1:3 10cm



第144図 出土遺物実測図(6)



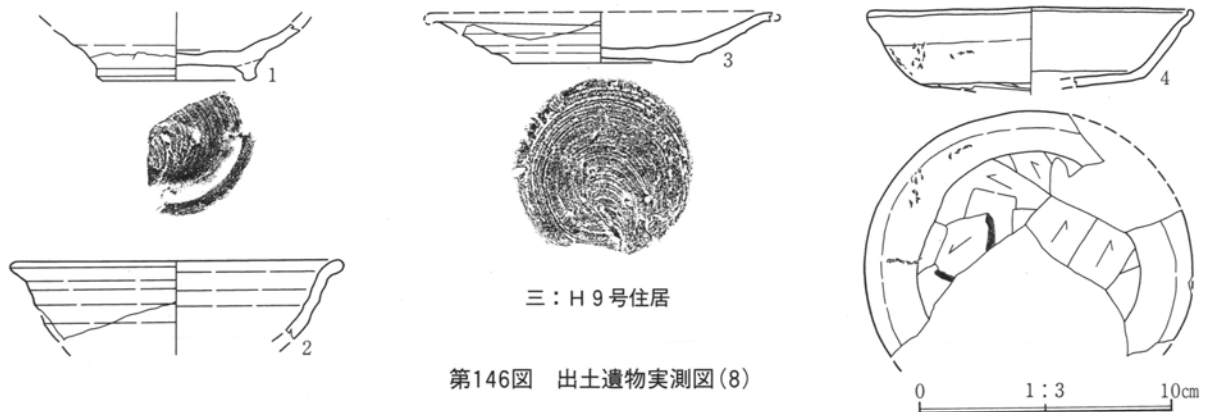
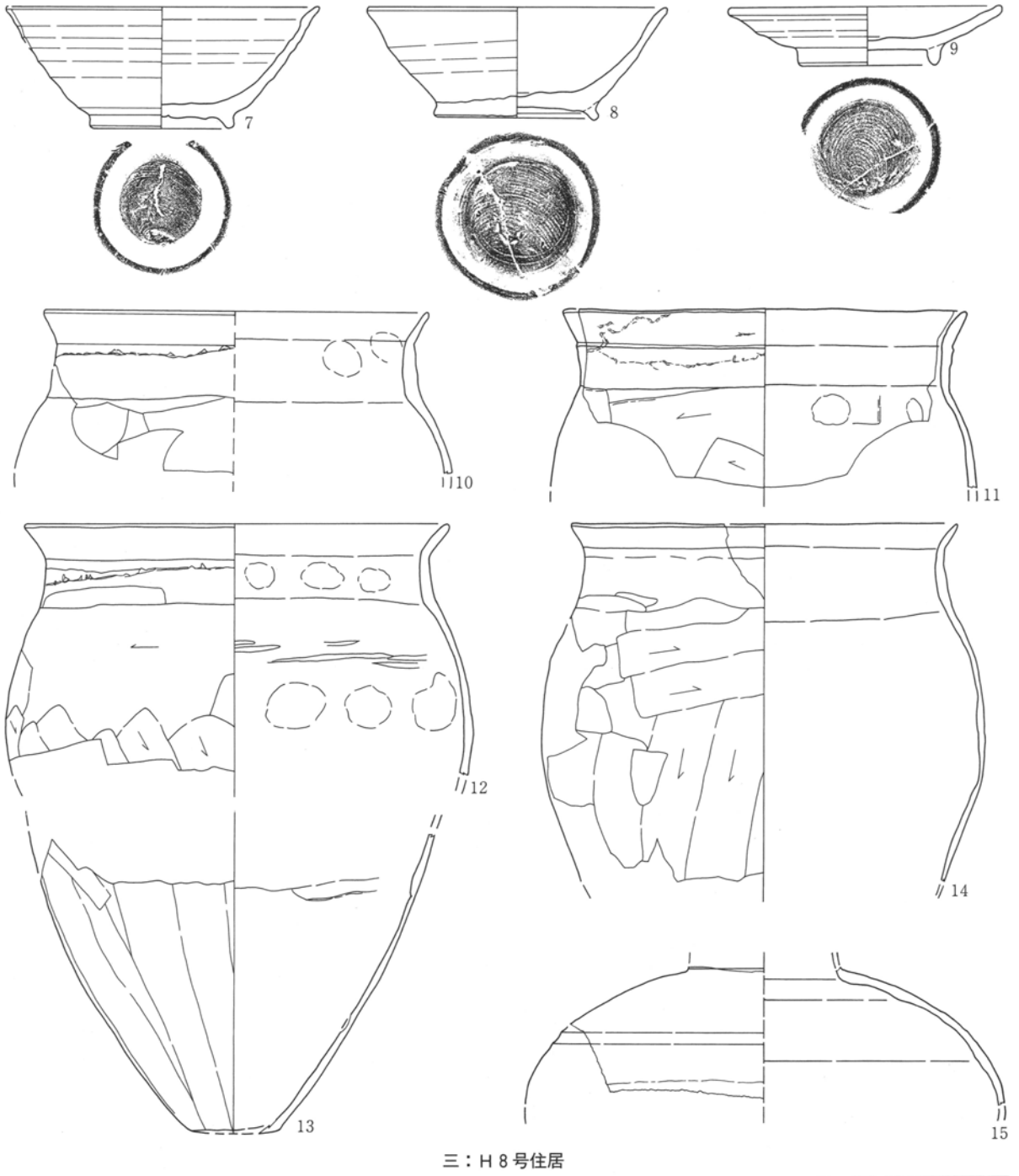
三：H7号住居

0 1:4 10cm

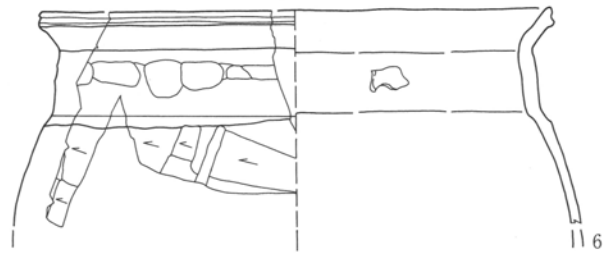
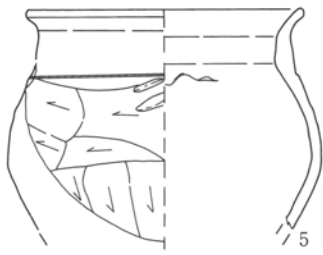
(27)
第145図 出土遺物実測図(7)

三：H8号住居

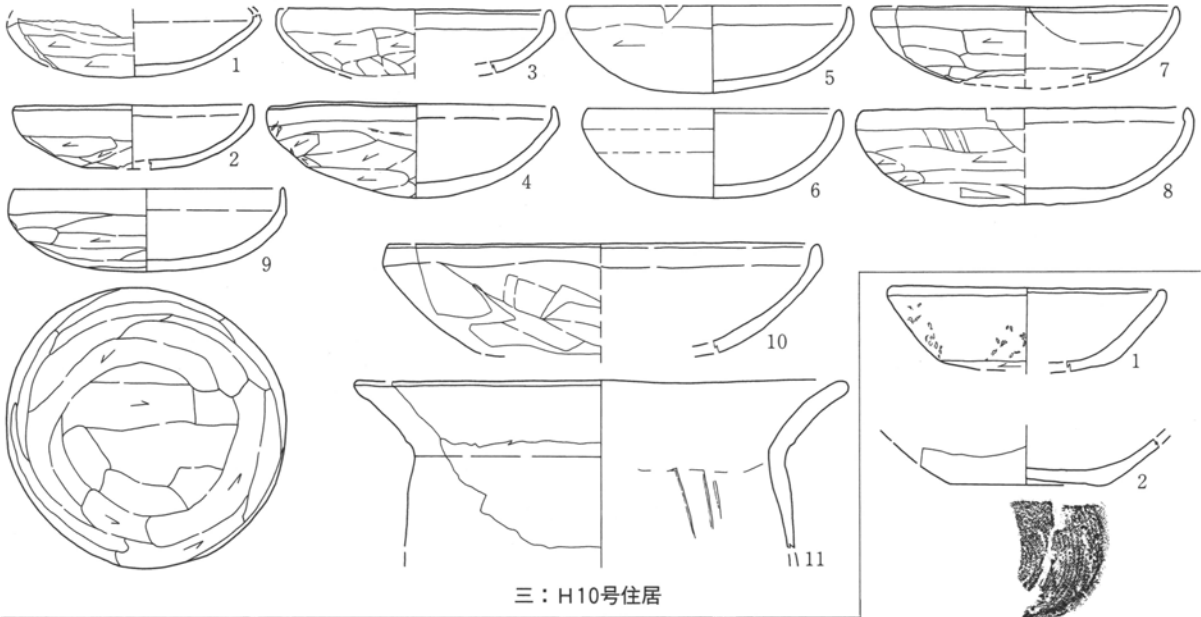
0 1:3 10cm



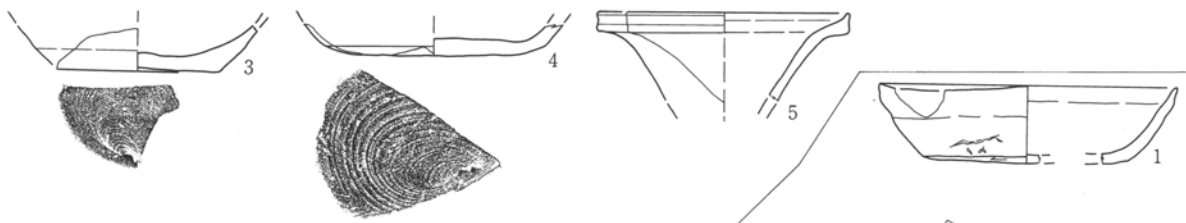
第146図 出土遺物実測図(8)



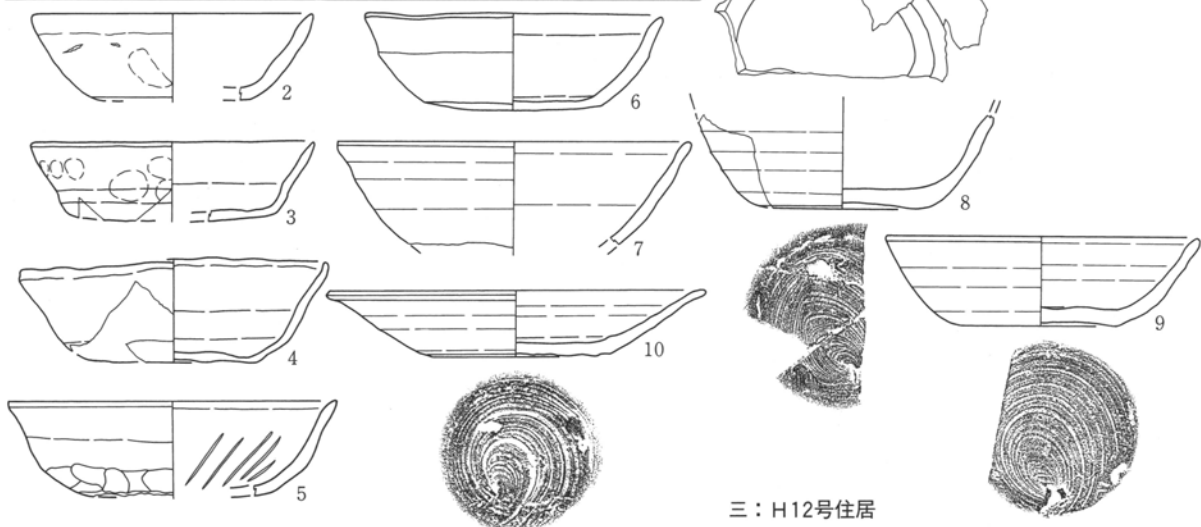
三：H9号住居



三：H10号住居

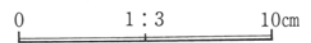


三：H11号住居

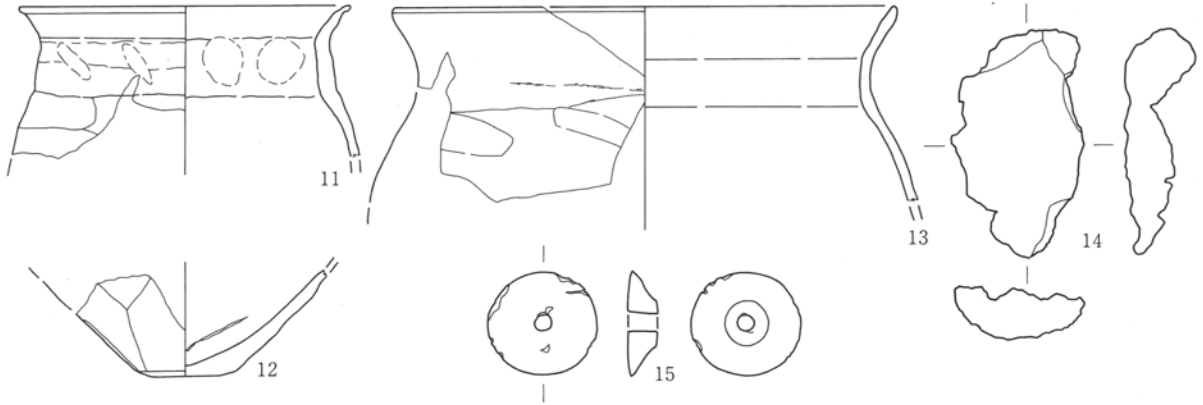


三：H12号住居

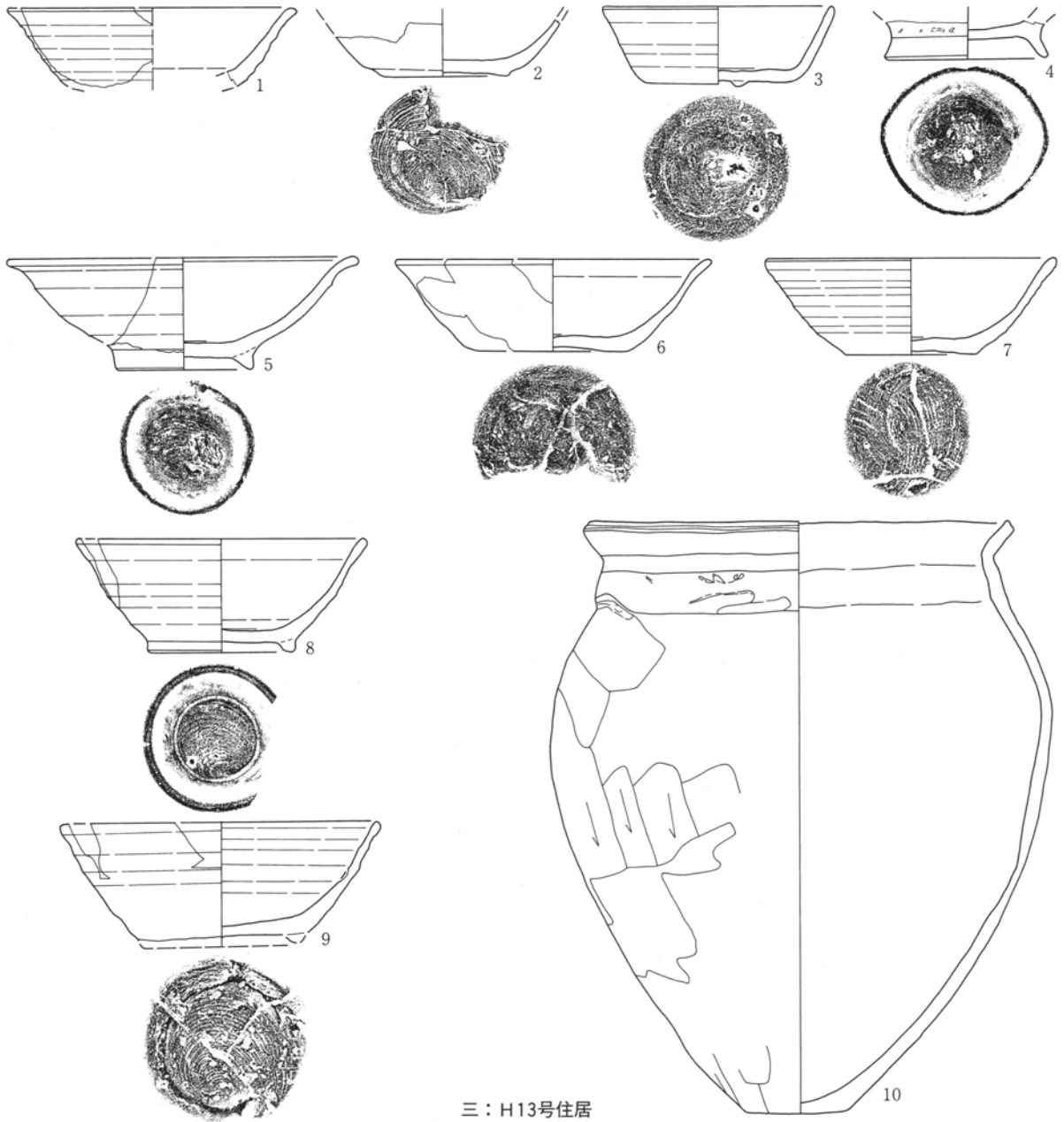
第147図 出土遺物実測図(9)



第2章 確認された遺構と遺物

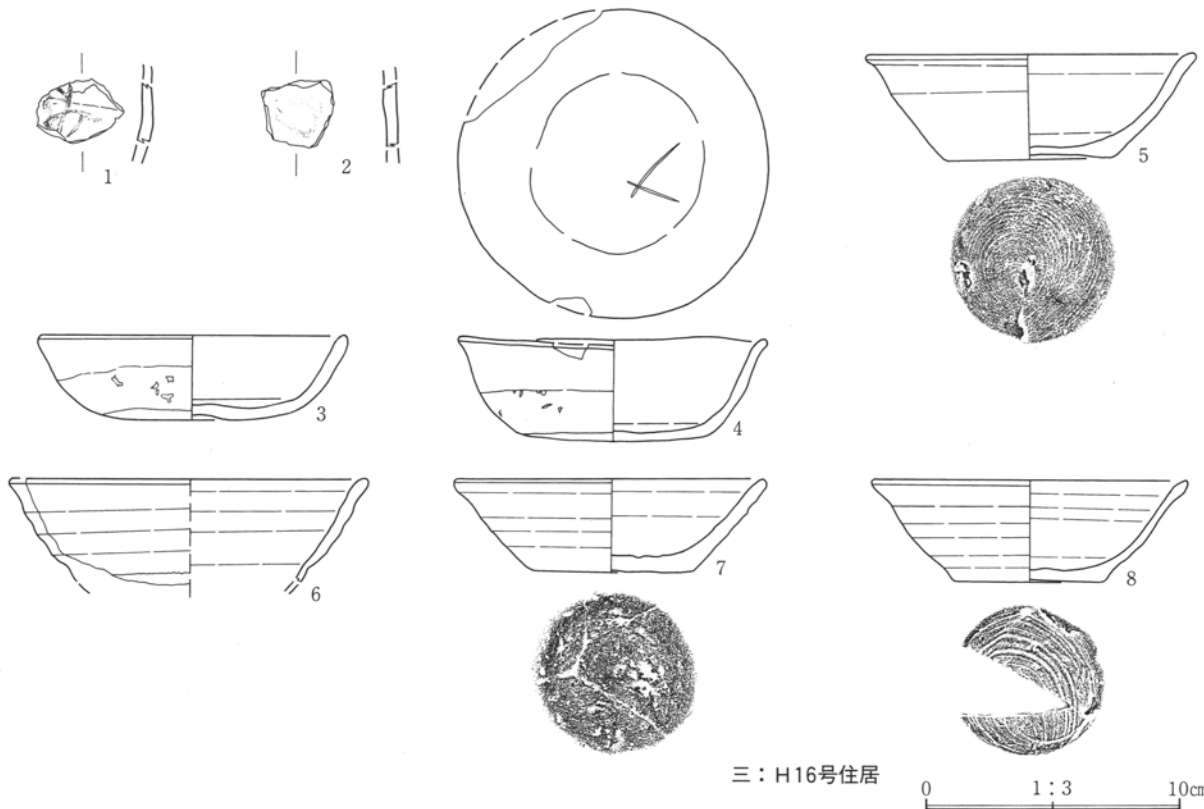
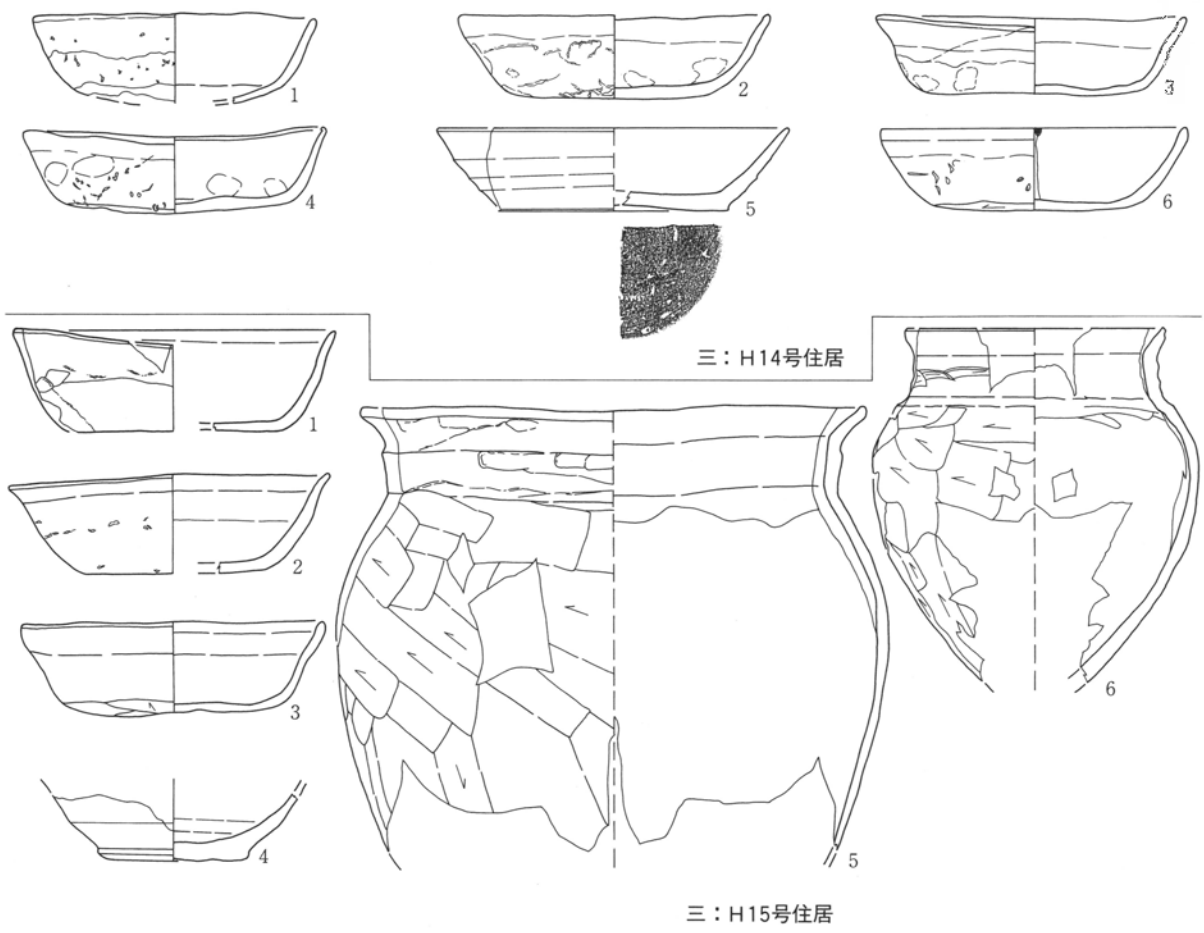


三：H12号住居

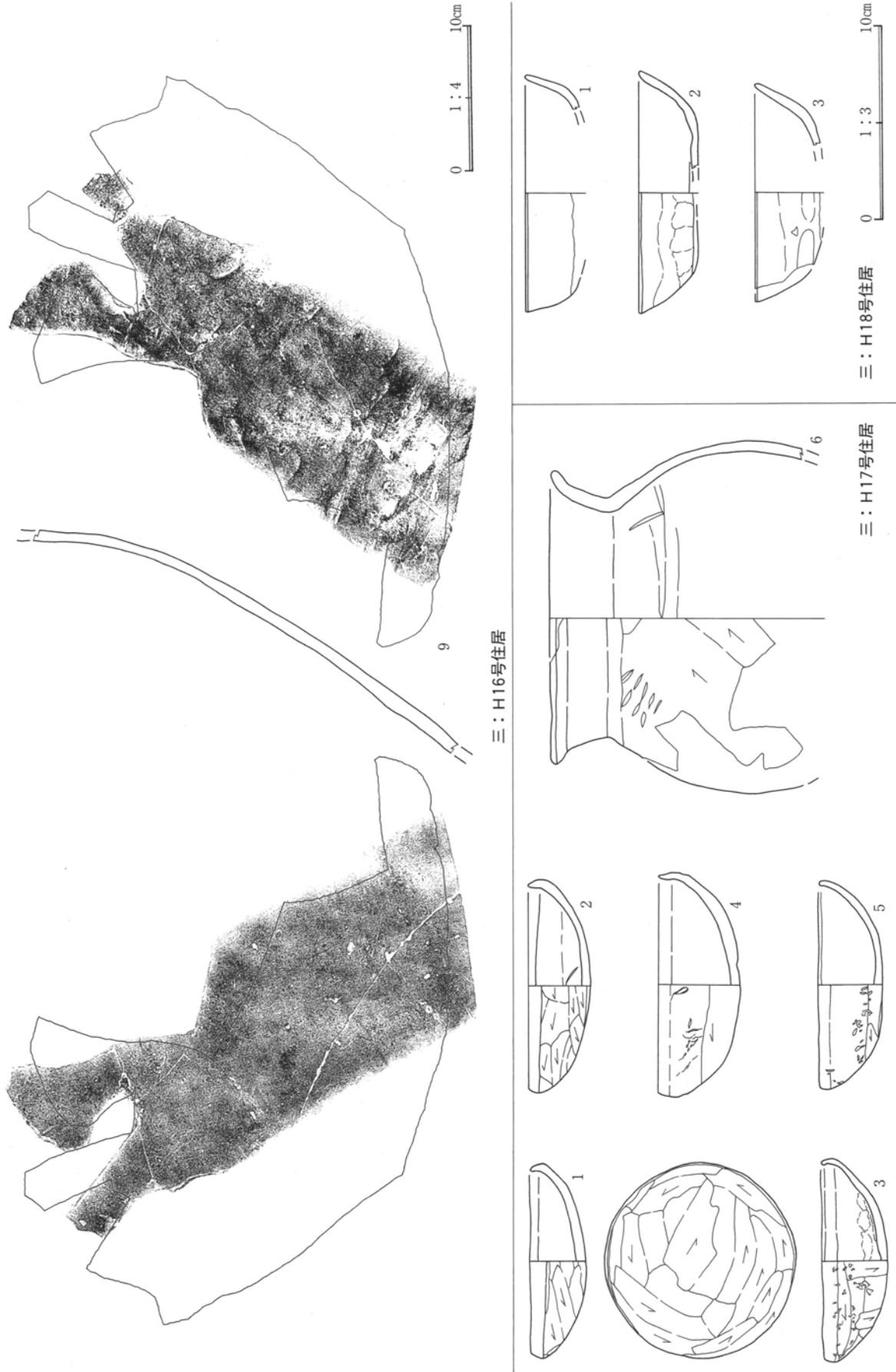


三：H13号住居

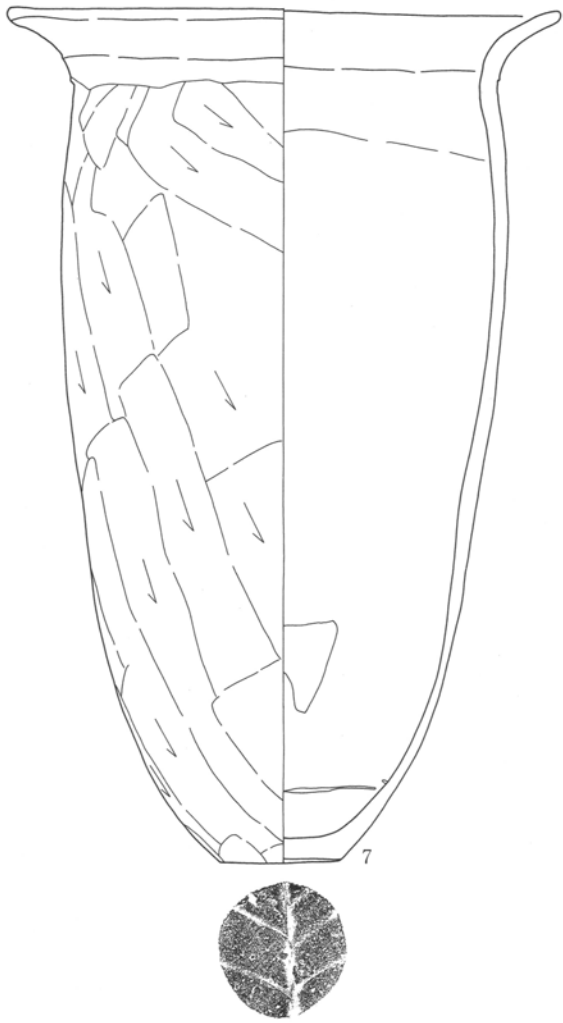
第148図 出土遺物実測図(10)



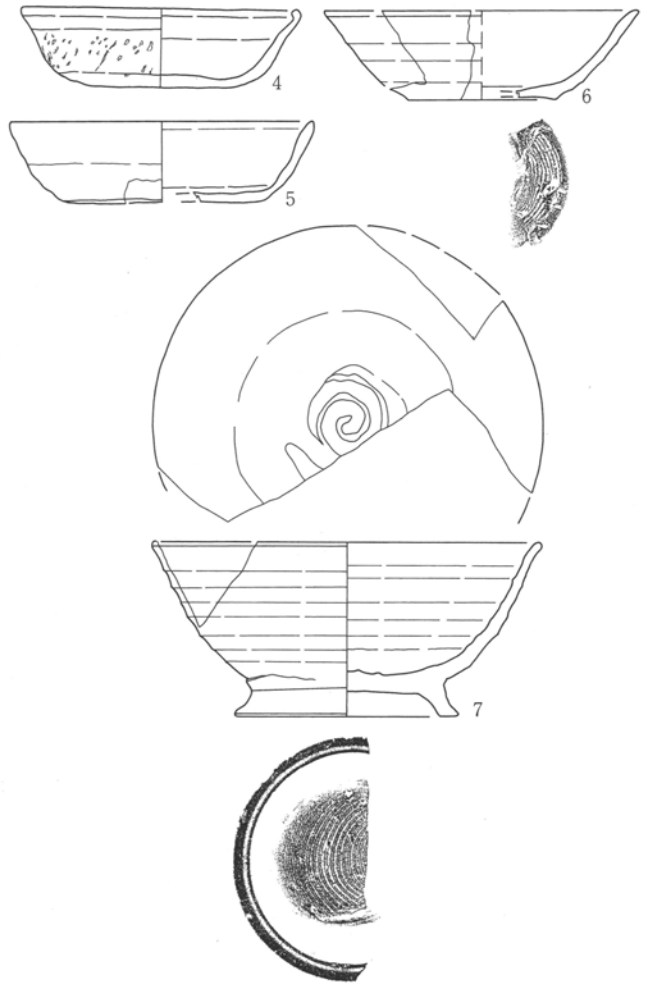
第149図 出土遺物実測図(11)



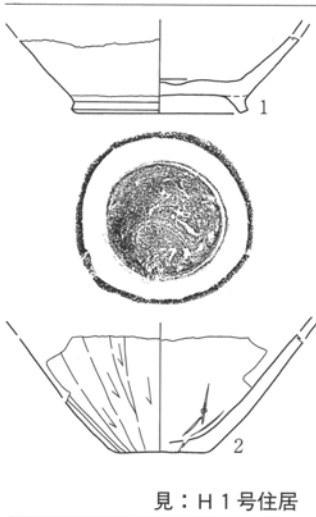
第150図 出土遺物実測図(12)



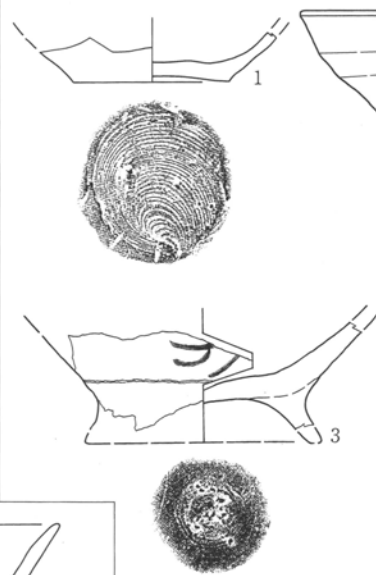
三：H17号住居



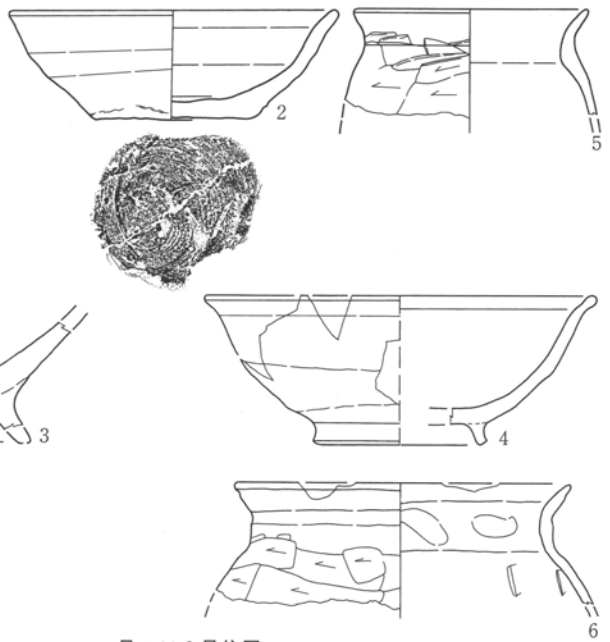
三：H18号住居



見：H1号住居



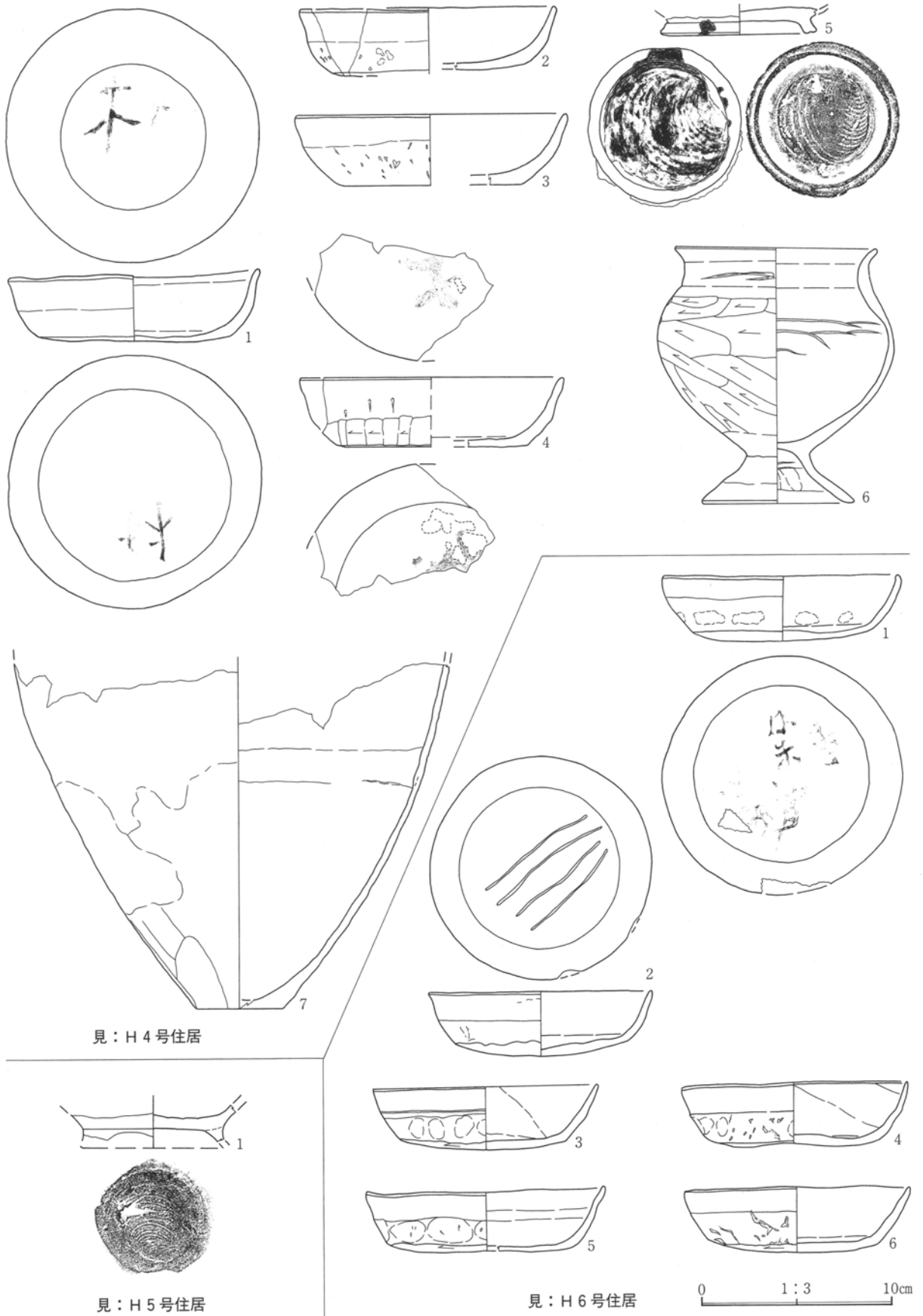
見：H3号住居



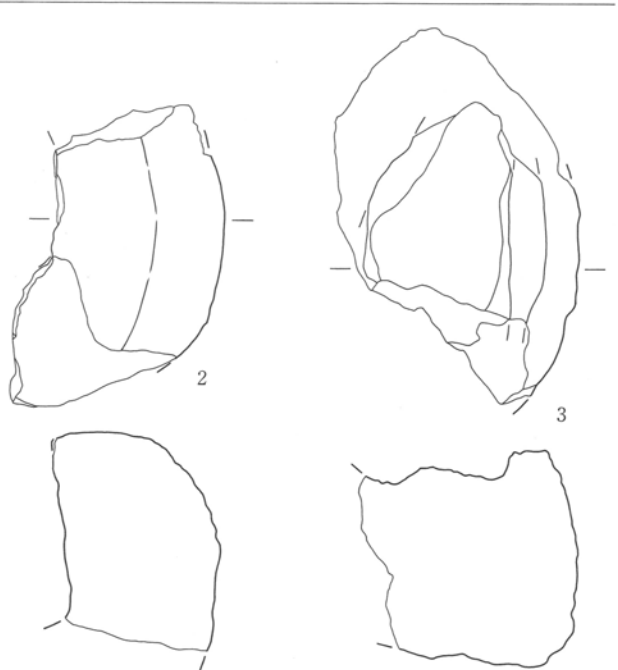
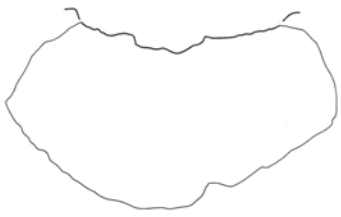
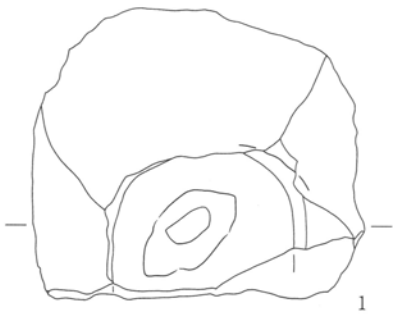
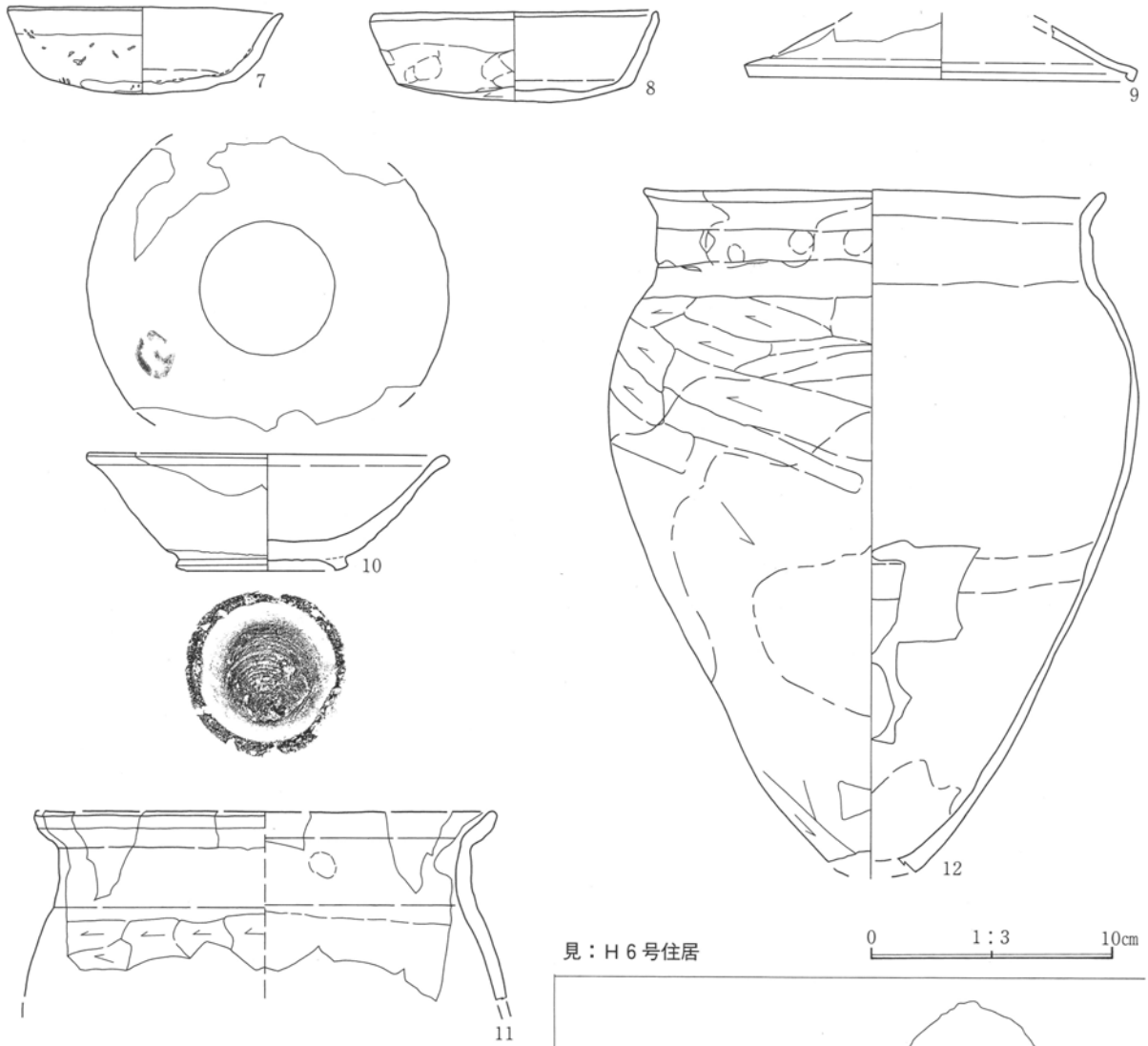
見：H2号住居

第151図 出土遺物実測図(13)

0 1:3 10cm

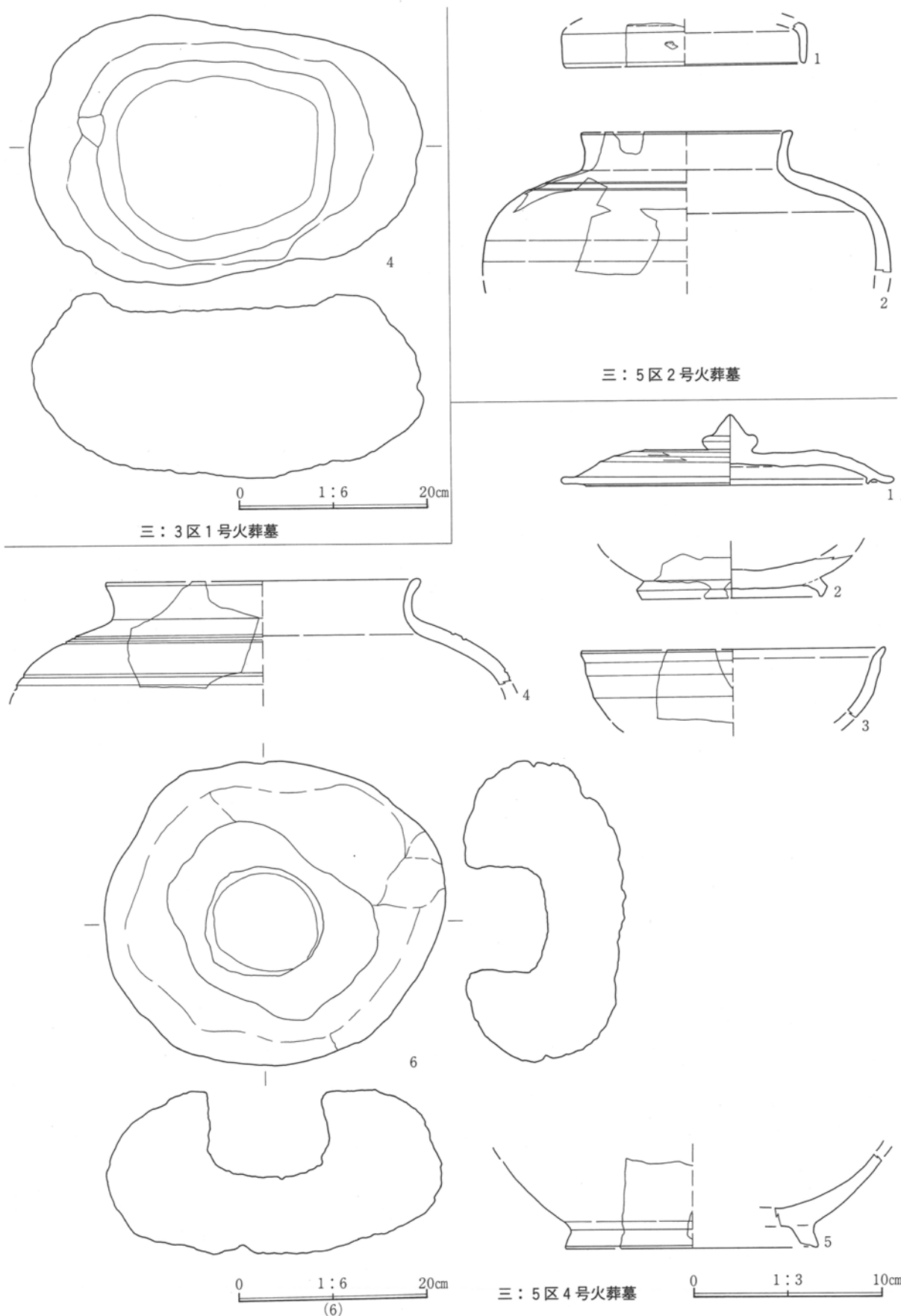


第152図 出土遺物実測図(14)



三：3区1号火葬墓

第153図 出土遺物実測図(15)

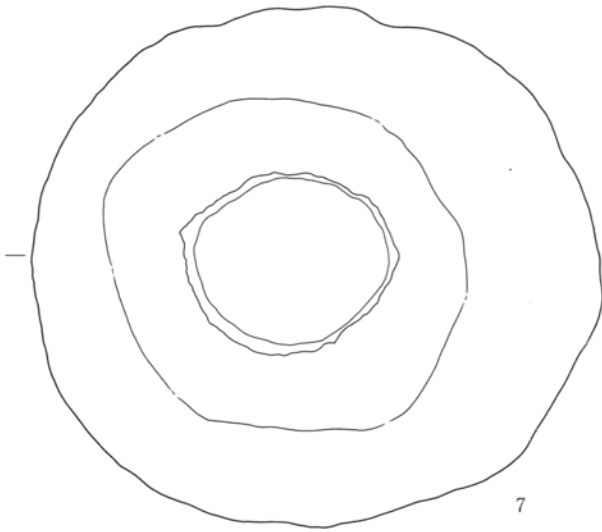


三：3区1号火葬墓

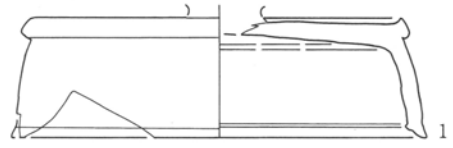
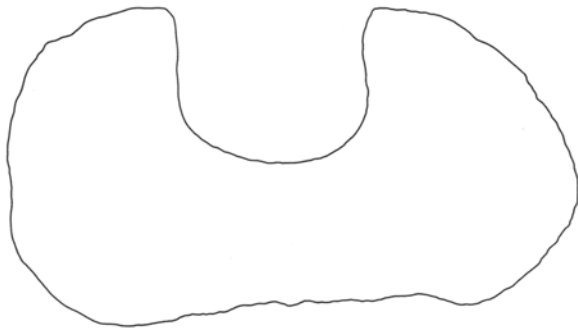
三：5区2号火葬墓

三：5区4号火葬墓

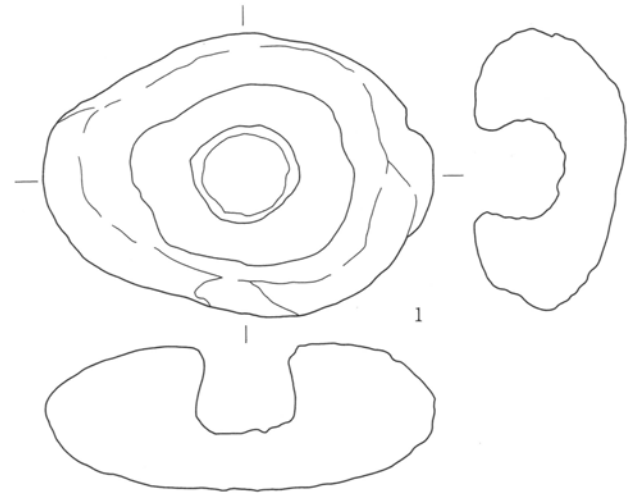
第154図 出土遺物実測図(16)



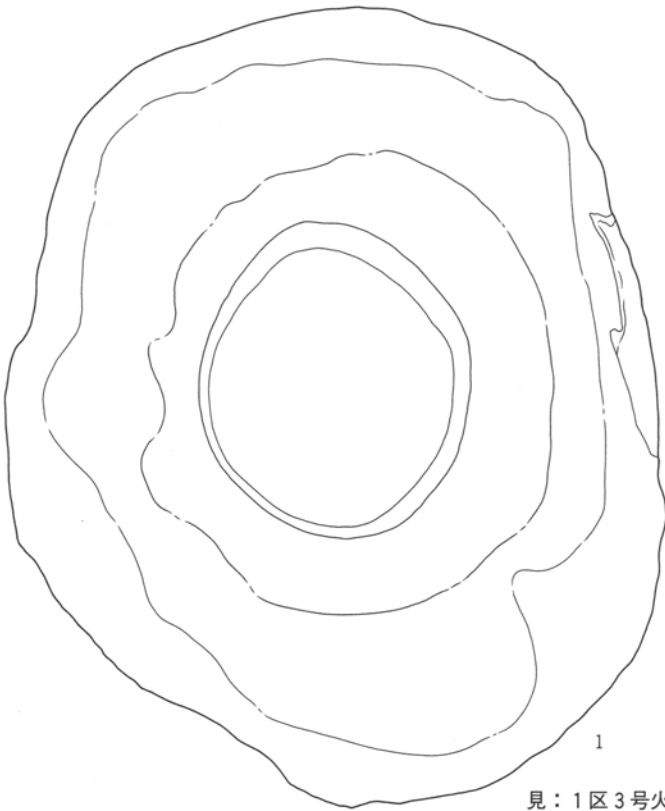
三：5区4号火葬墓



三：5区15号火葬墓

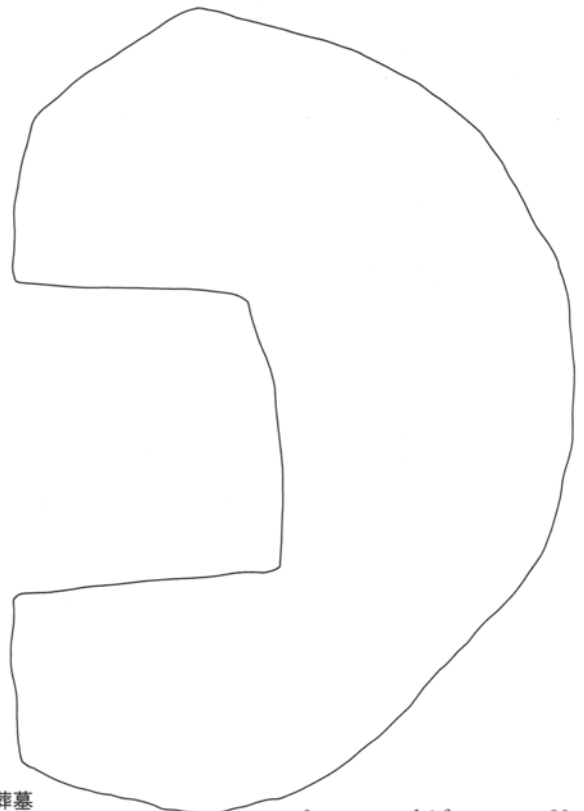


三：6区1号火葬墓

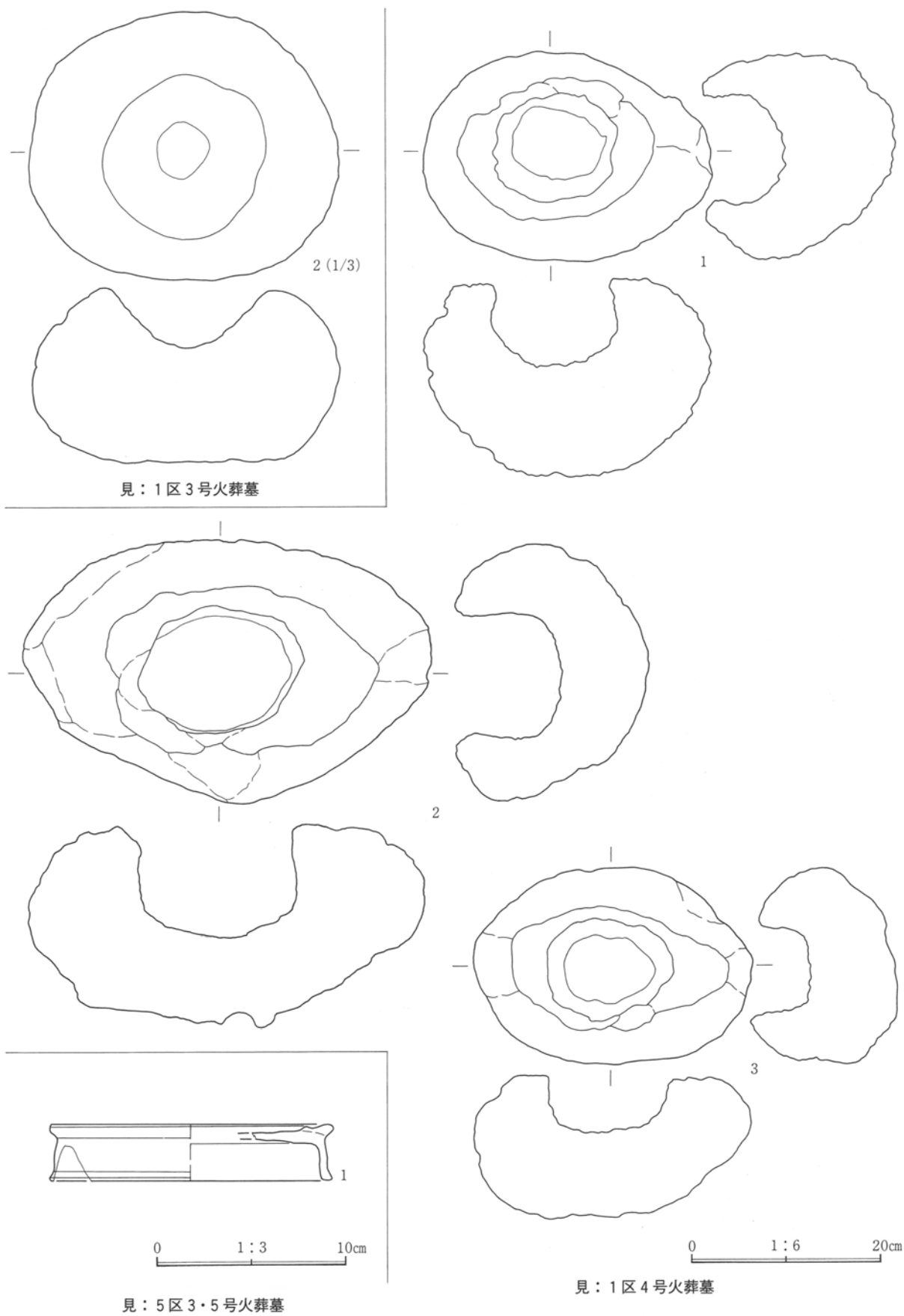


見：1区3号火葬墓

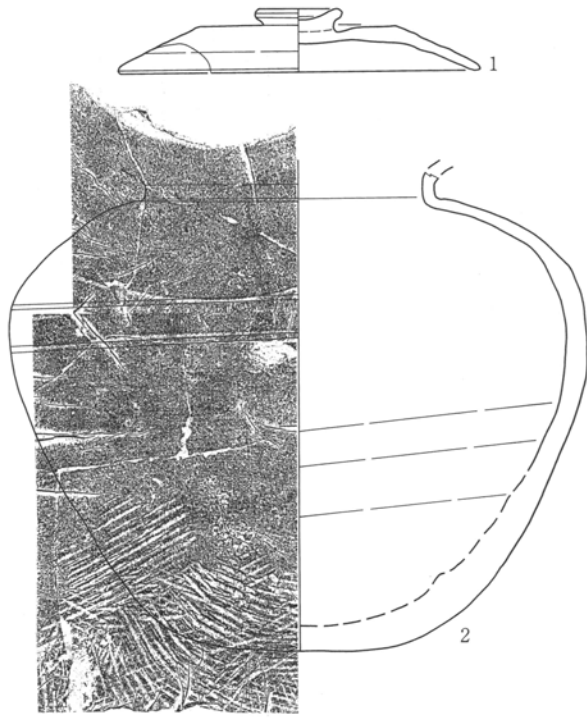
第155图 出土遺物実測図(17)



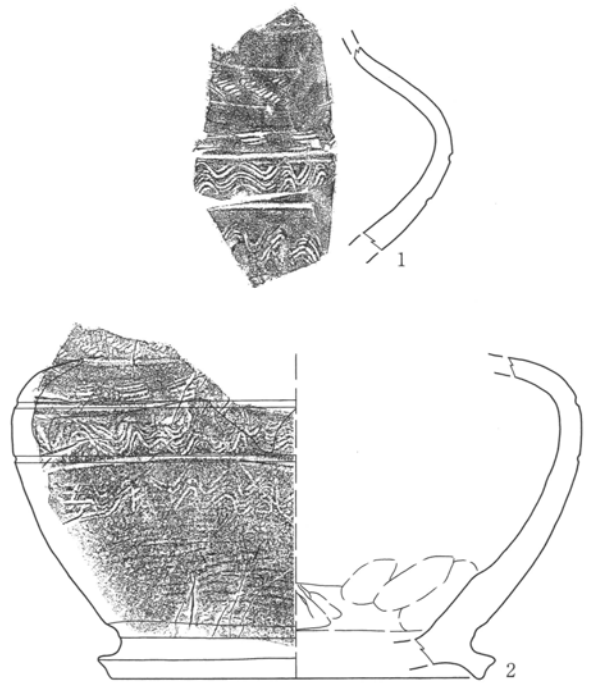
0 1:6 20cm



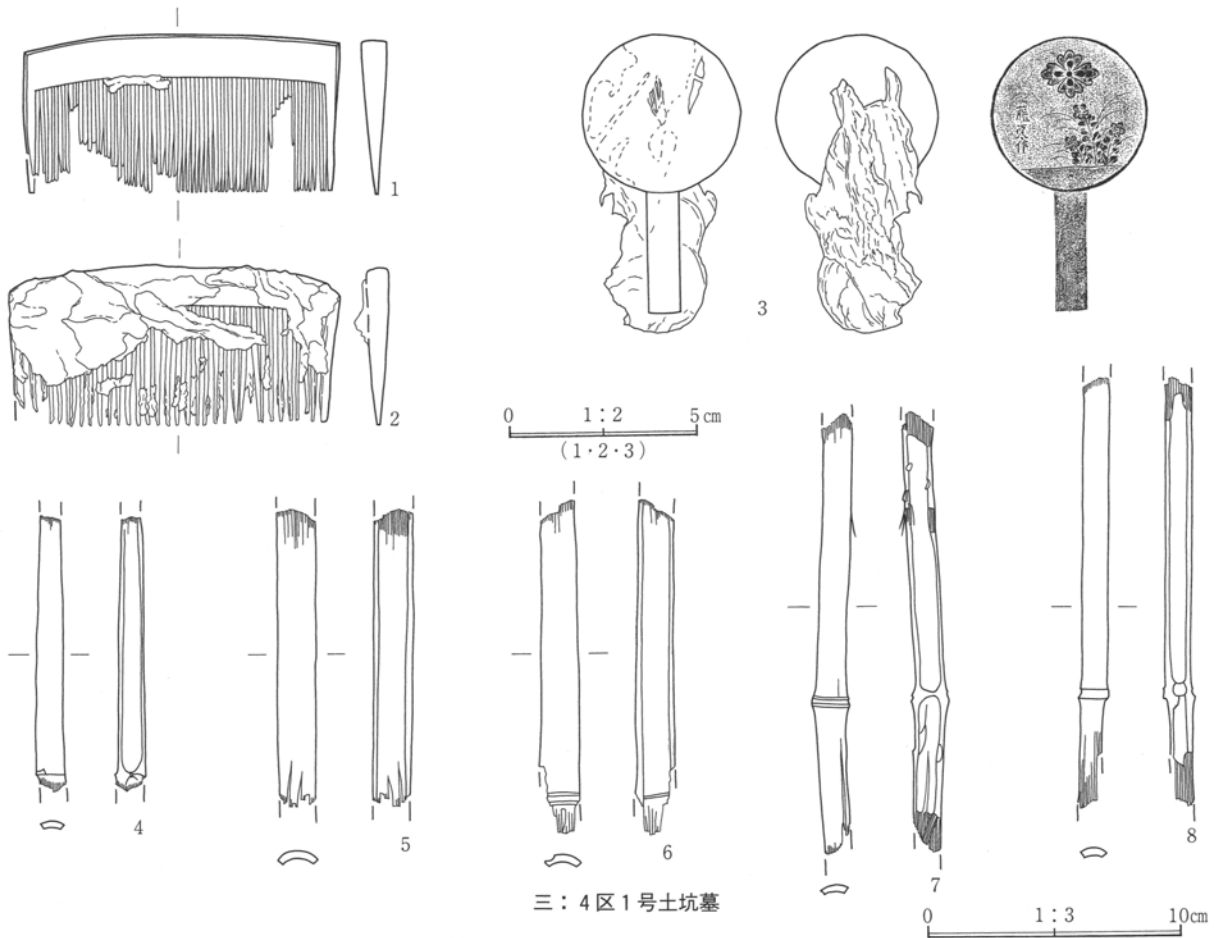
第156図 出土遺物実測図(18)



見：5区8号火葬墓

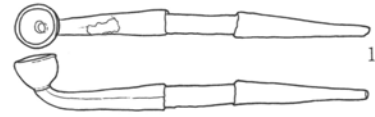
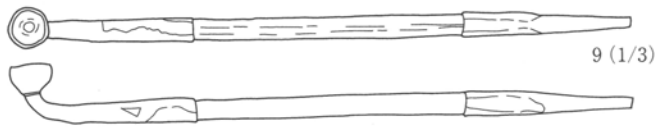


見：5区9号火葬墓



三：4区1号土坑墓

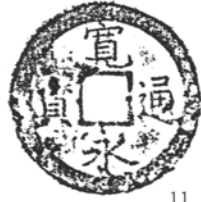
第157图 出土遺物実測図(19)



三：6区1号土坑墓 0 1:3 10cm



10



11



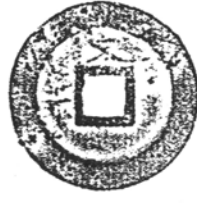
12



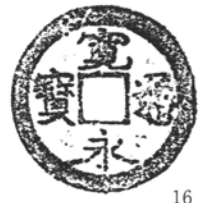
13



14



15



16



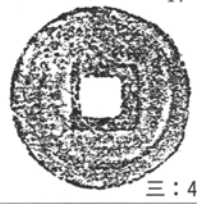
17



18



19



三：4区1号土坑墓



20



2



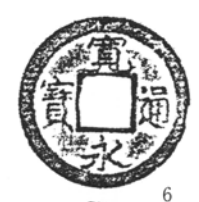
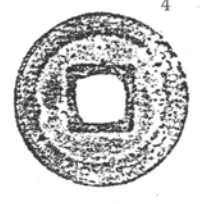
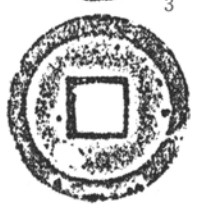
3



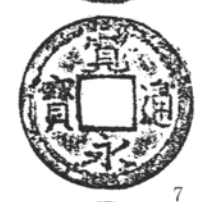
4



5



6



7



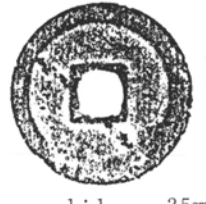
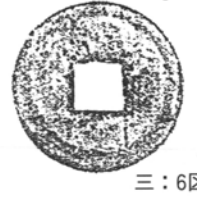
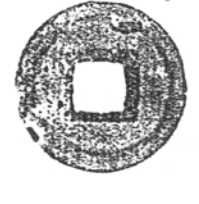
8



9



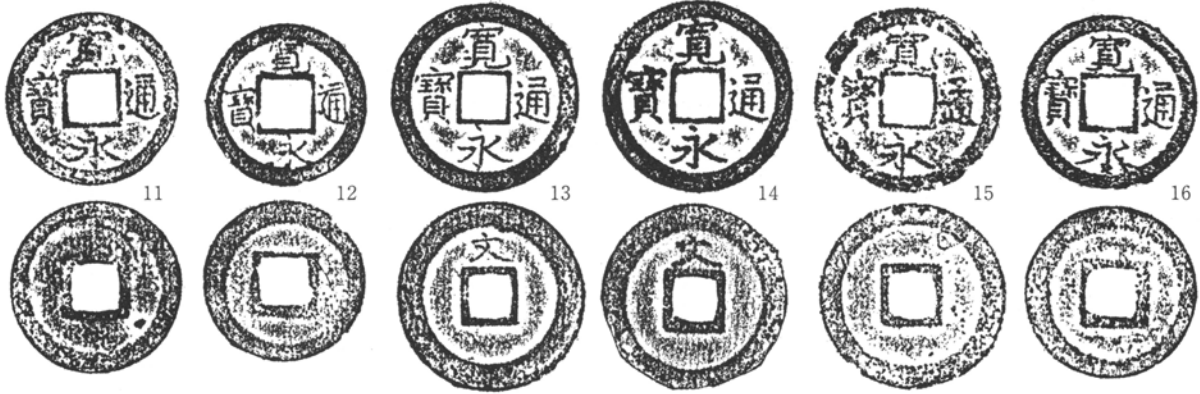
10



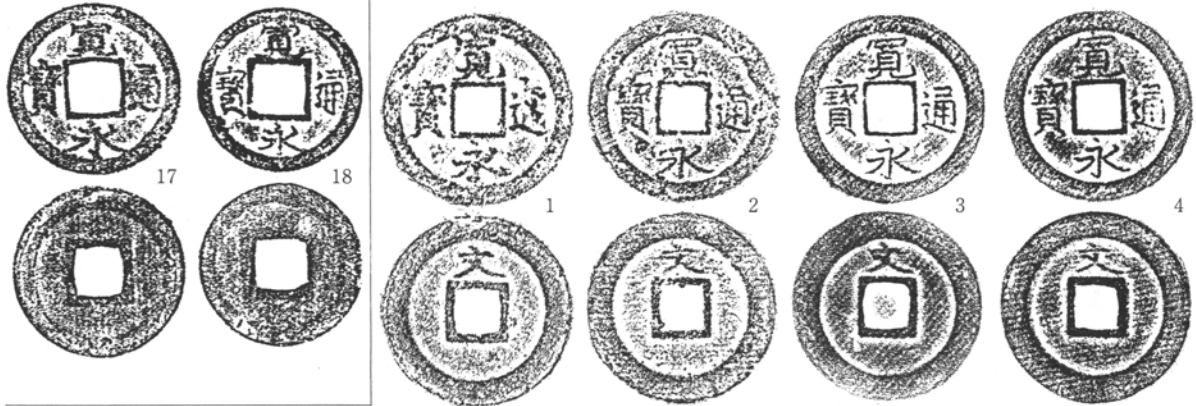
三：6区1号土坑墓

第158图 出土遺物実測図(20)

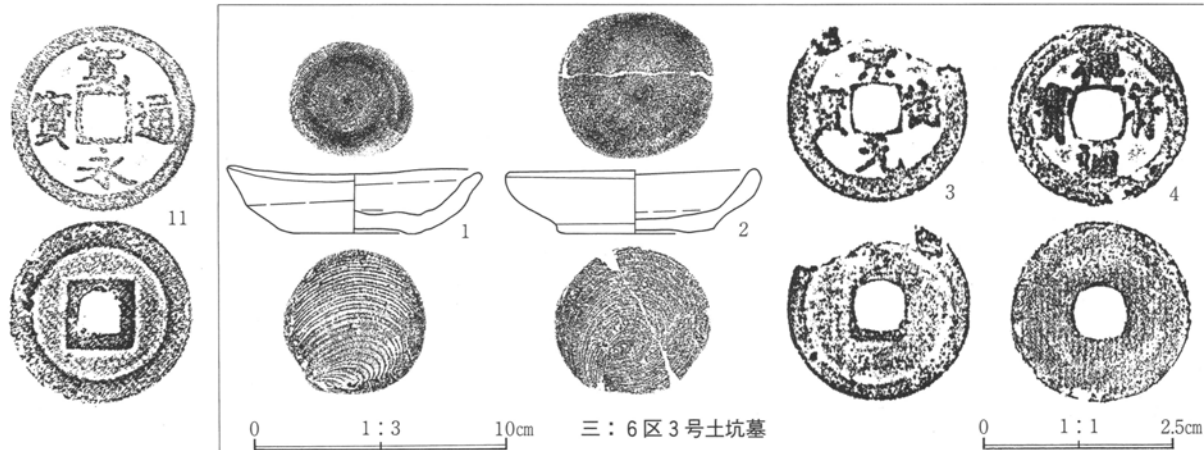
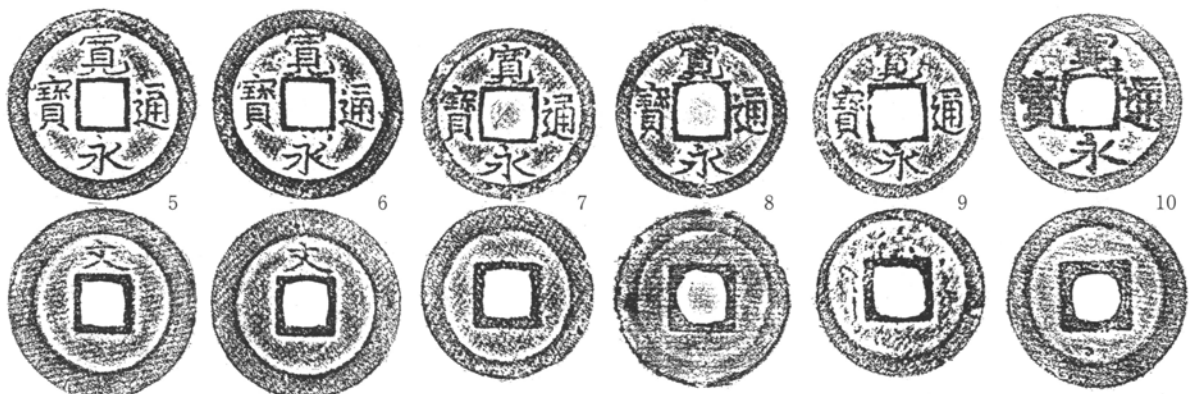
0 1:1 2.5cm



三：6区1号土坑墓



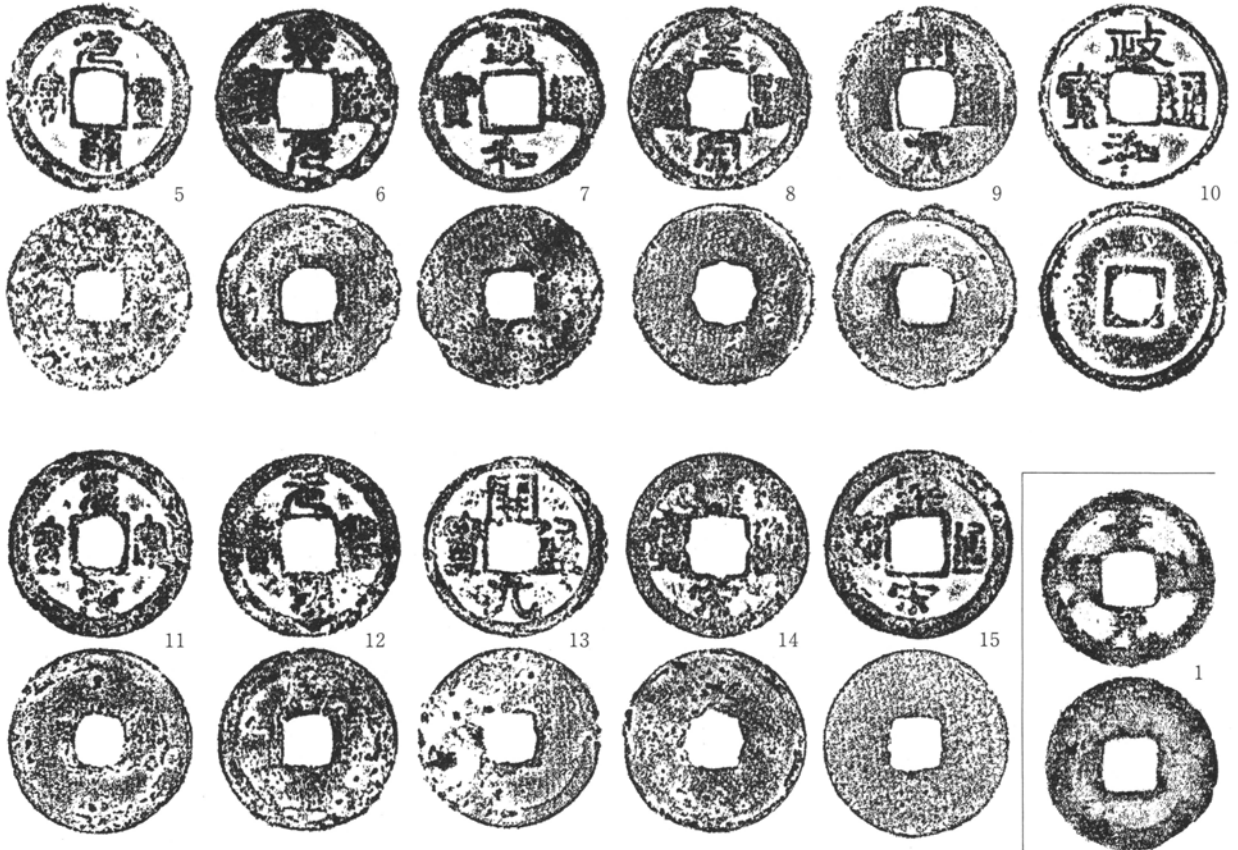
三：6区2号土坑墓



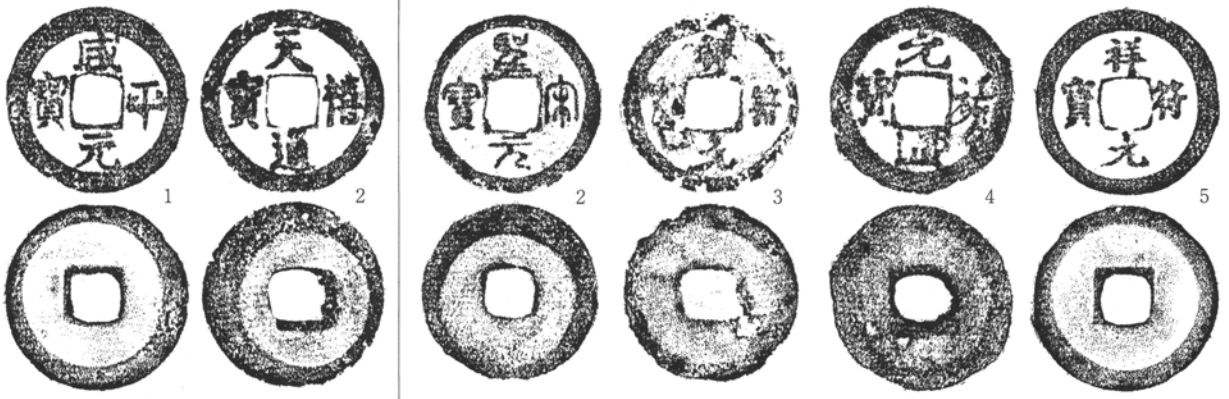
三：6区3号土坑墓

(1·2)

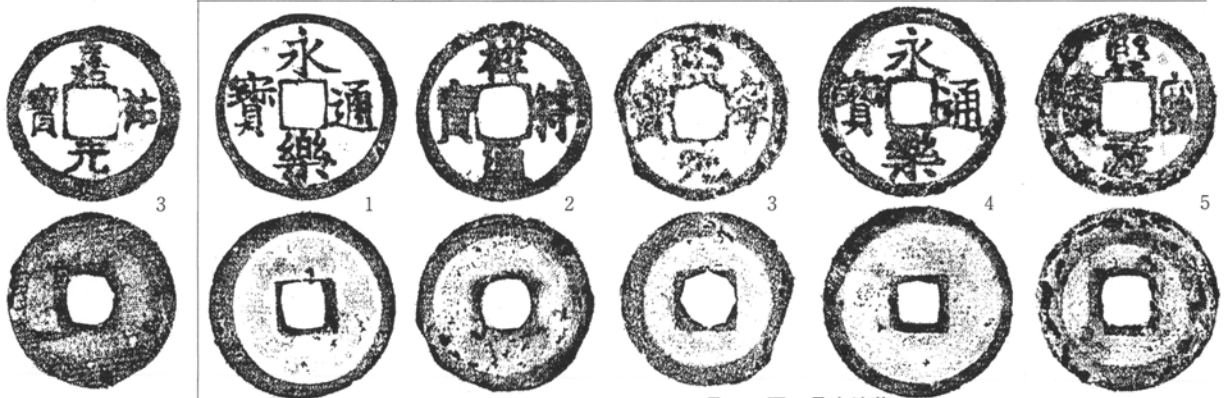
第159图 出土遺物实测图(21)



三：6区3号土坑墓



見：7区1号土坑墓

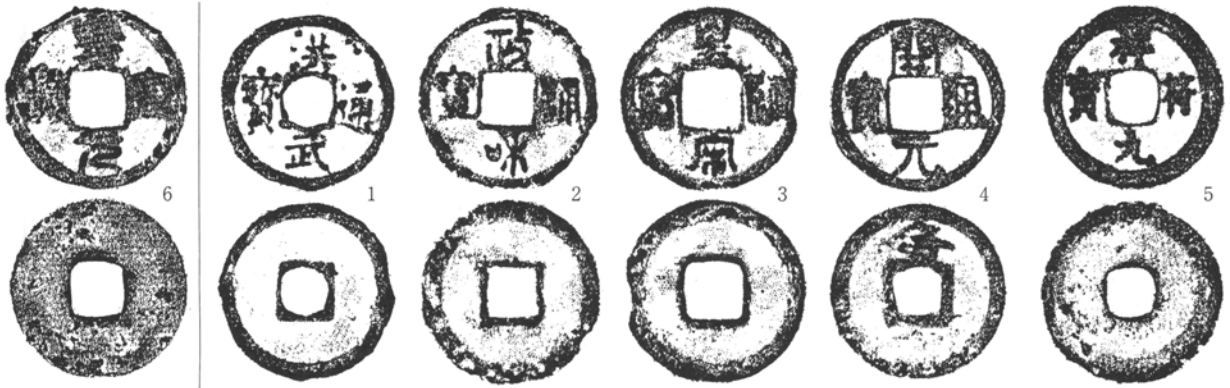


見：7区2号土坑墓

見：7区3号土坑墓

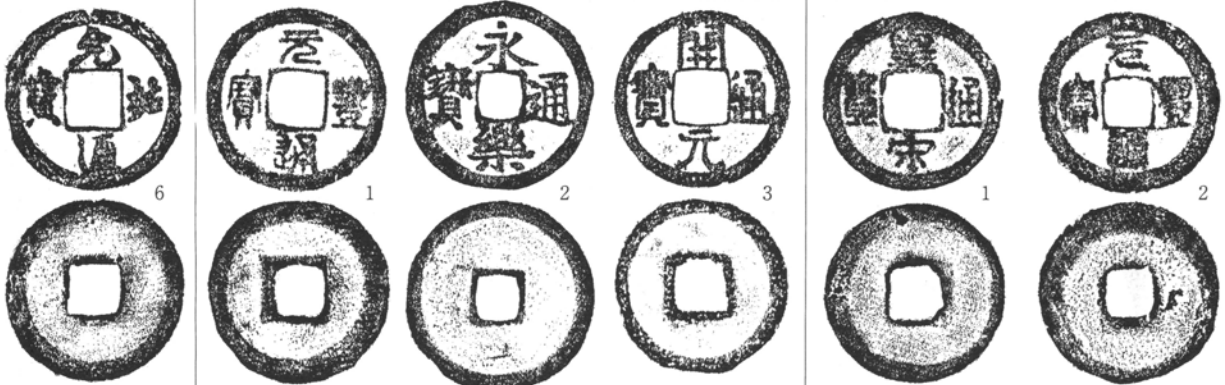
第160図 出土遺物実測図(22)

0 1:1 2.5cm



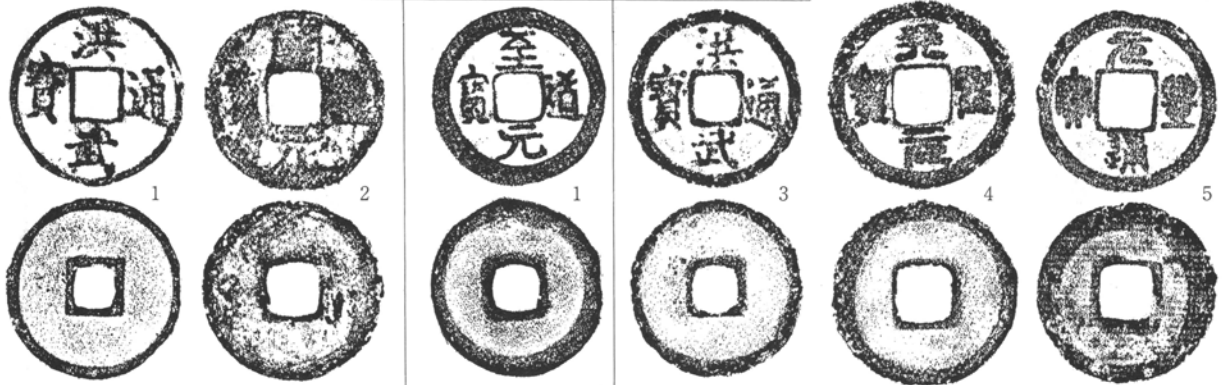
見：7区3号土坑墓

見：7区7号土坑墓



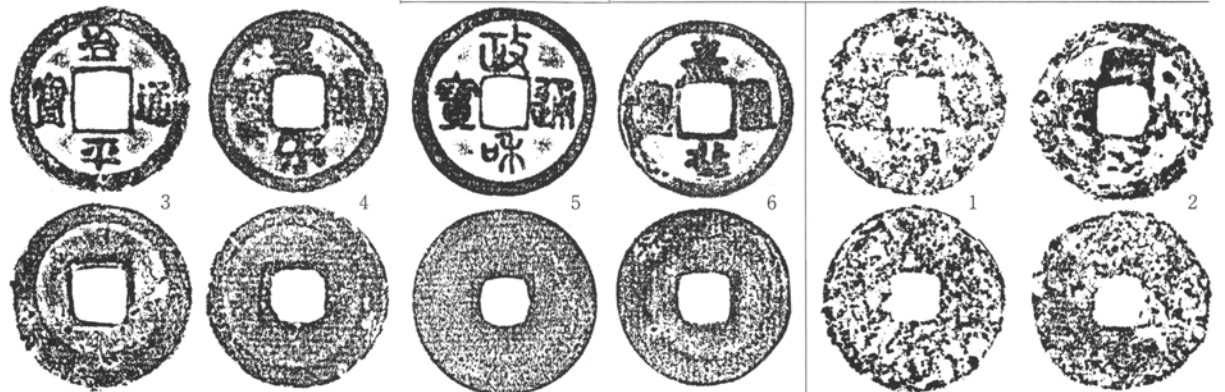
見：7区7号土坑墓

見：7区8号土坑墓

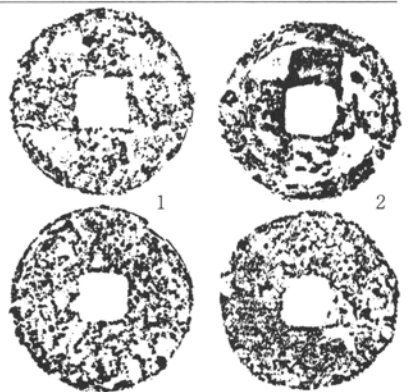


見：7区10号土坑墓

見：7区9号土坑墓



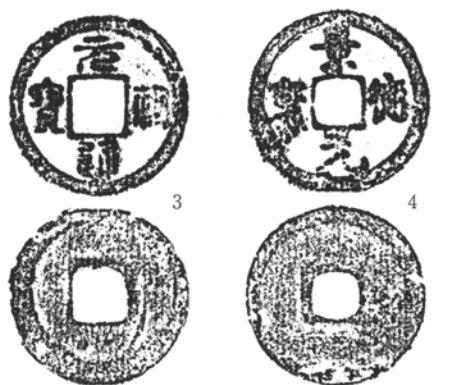
見：7区11号土坑墓



見：7区12号土坑墓

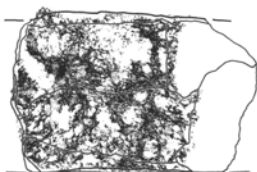
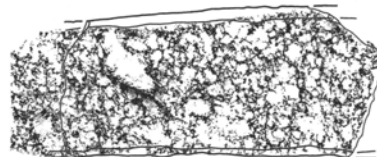
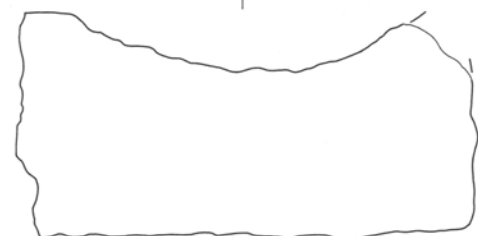
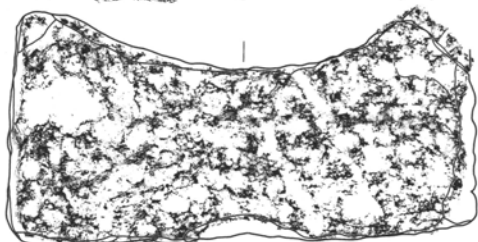
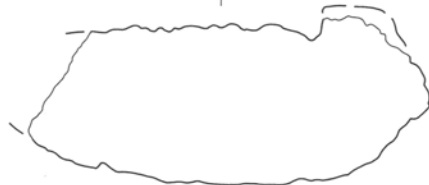
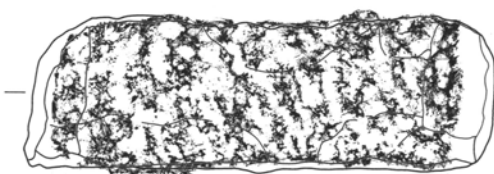
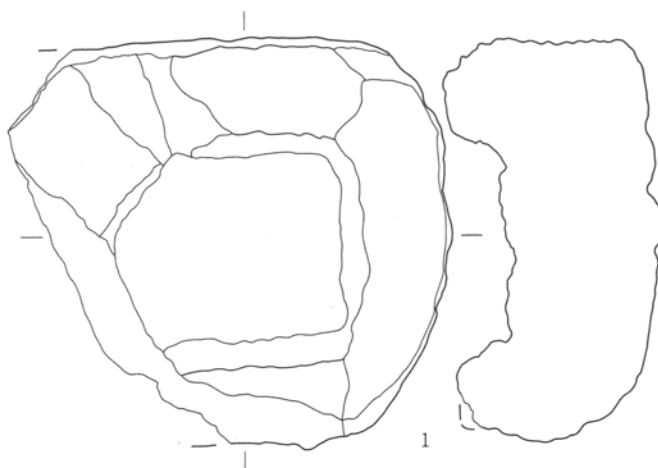
第161圖 出土遺物実測圖(23)

0 1:1 2.5cm



見：7区12号土坑墓

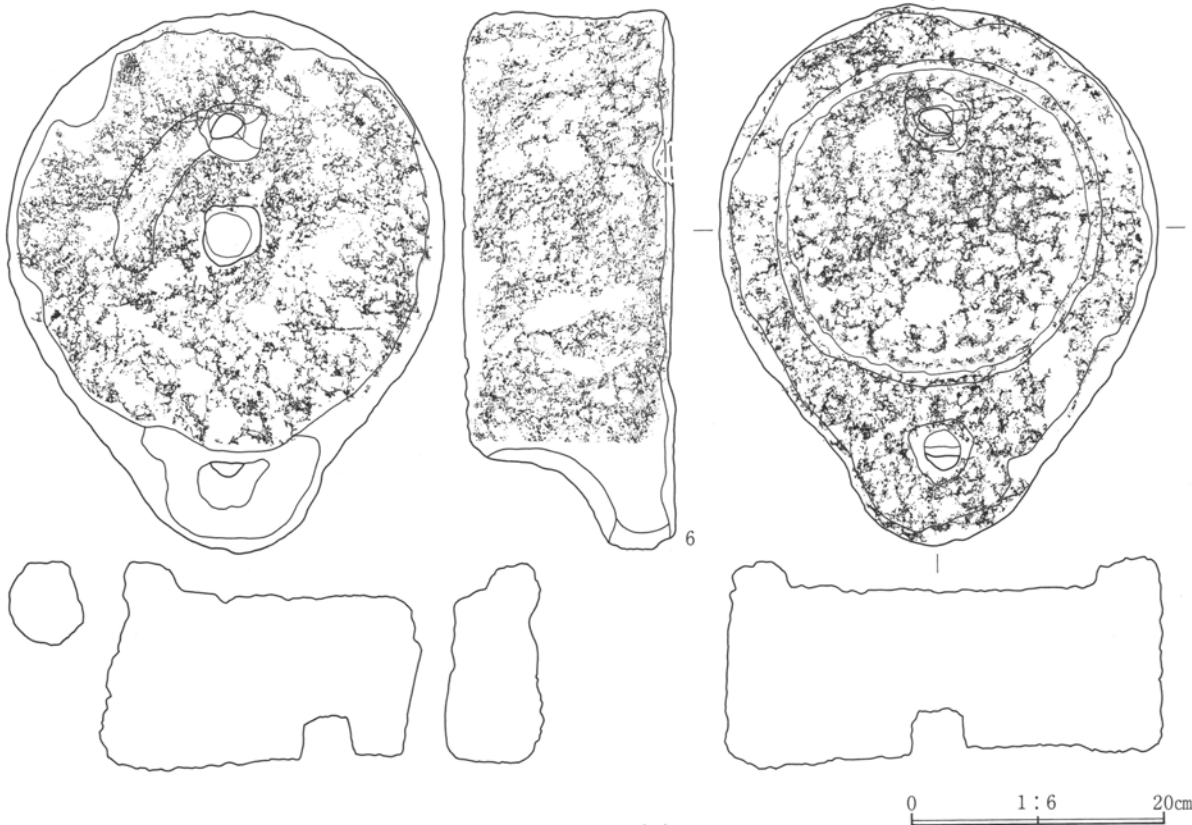
0 1:1 2.5cm



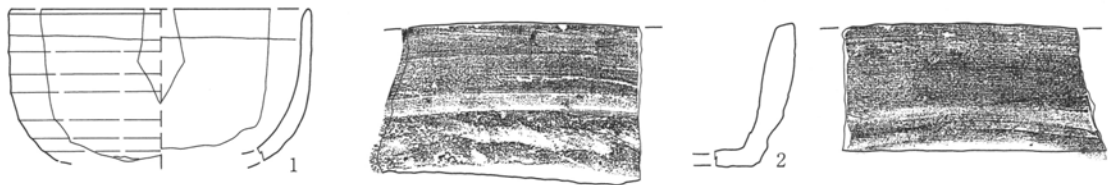
三：6区1号炭窯

第162図 出土遺物実測図(24)

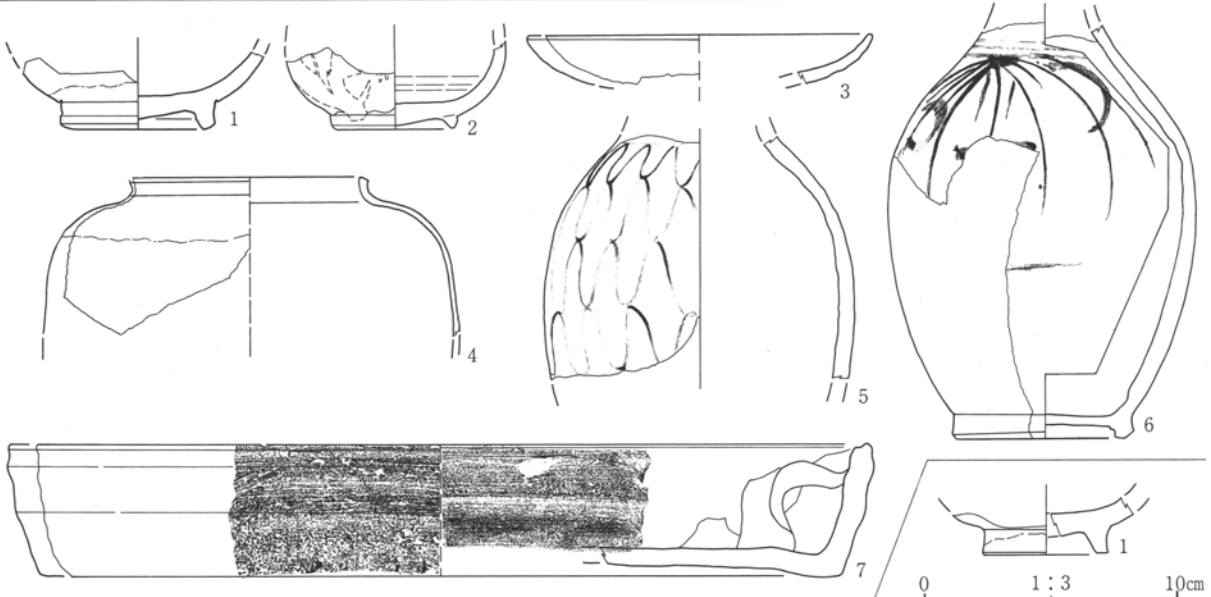
0 1:6 20cm



三：6区1号炭窯



三：4区1号溝

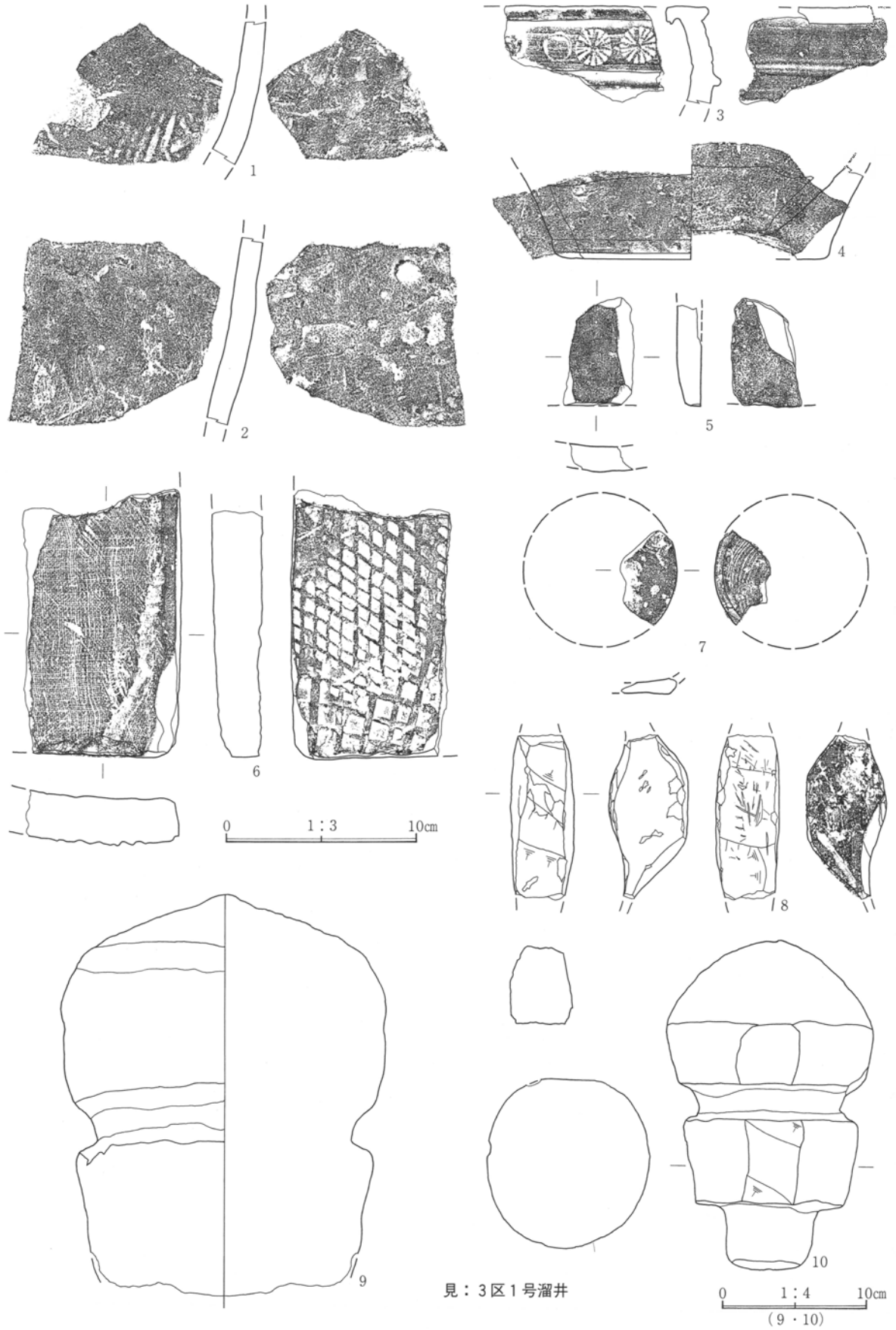


三：4区谷地砂層

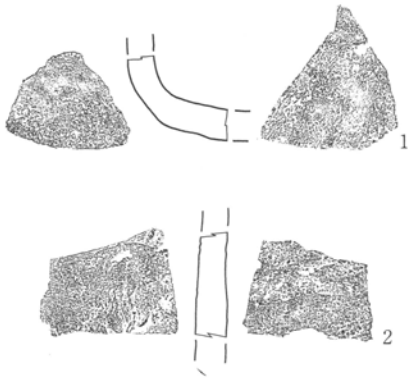
三：6区2号粘土採掘坑

0 1:4 10cm
(7)

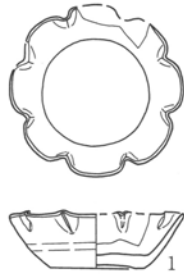
第163図 出土遺物実測図(25)



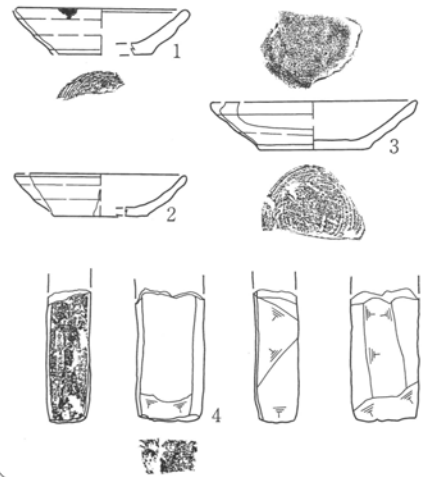
第164図 出土遺物実測図(26)



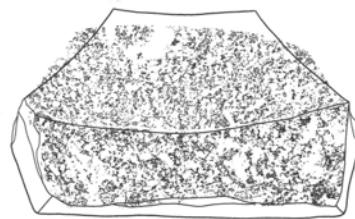
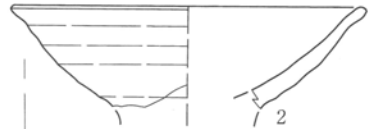
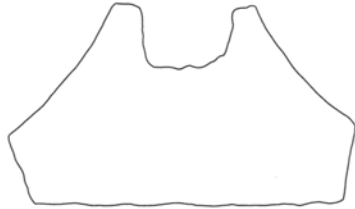
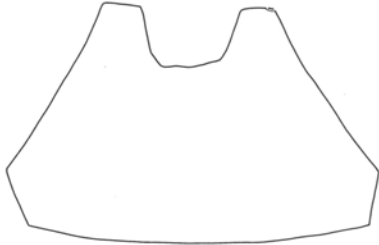
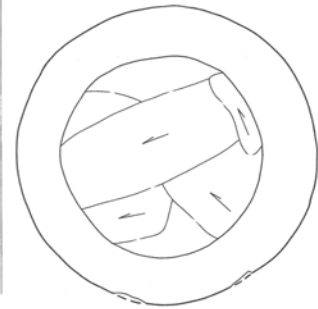
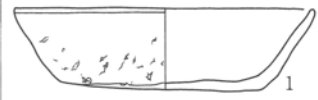
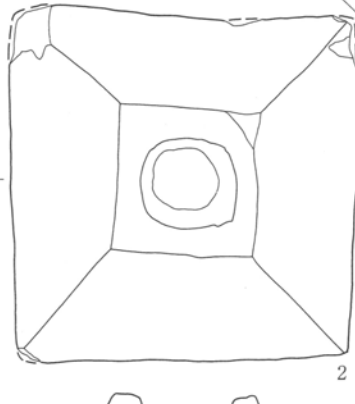
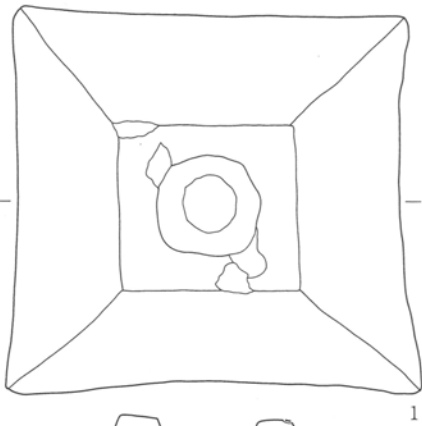
見：3区2号溜井



見：3区1号竖穴



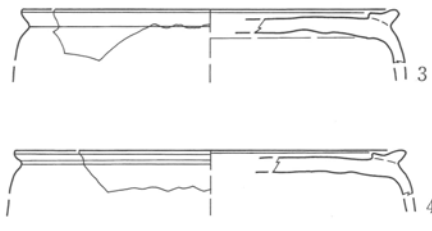
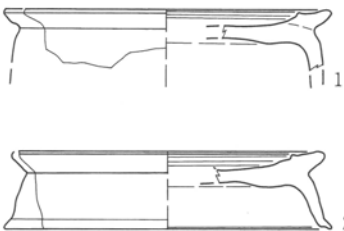
見：1区2号溝



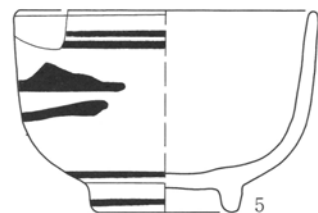
0 1:6 20cm

見：7区13号土坑

三：4区

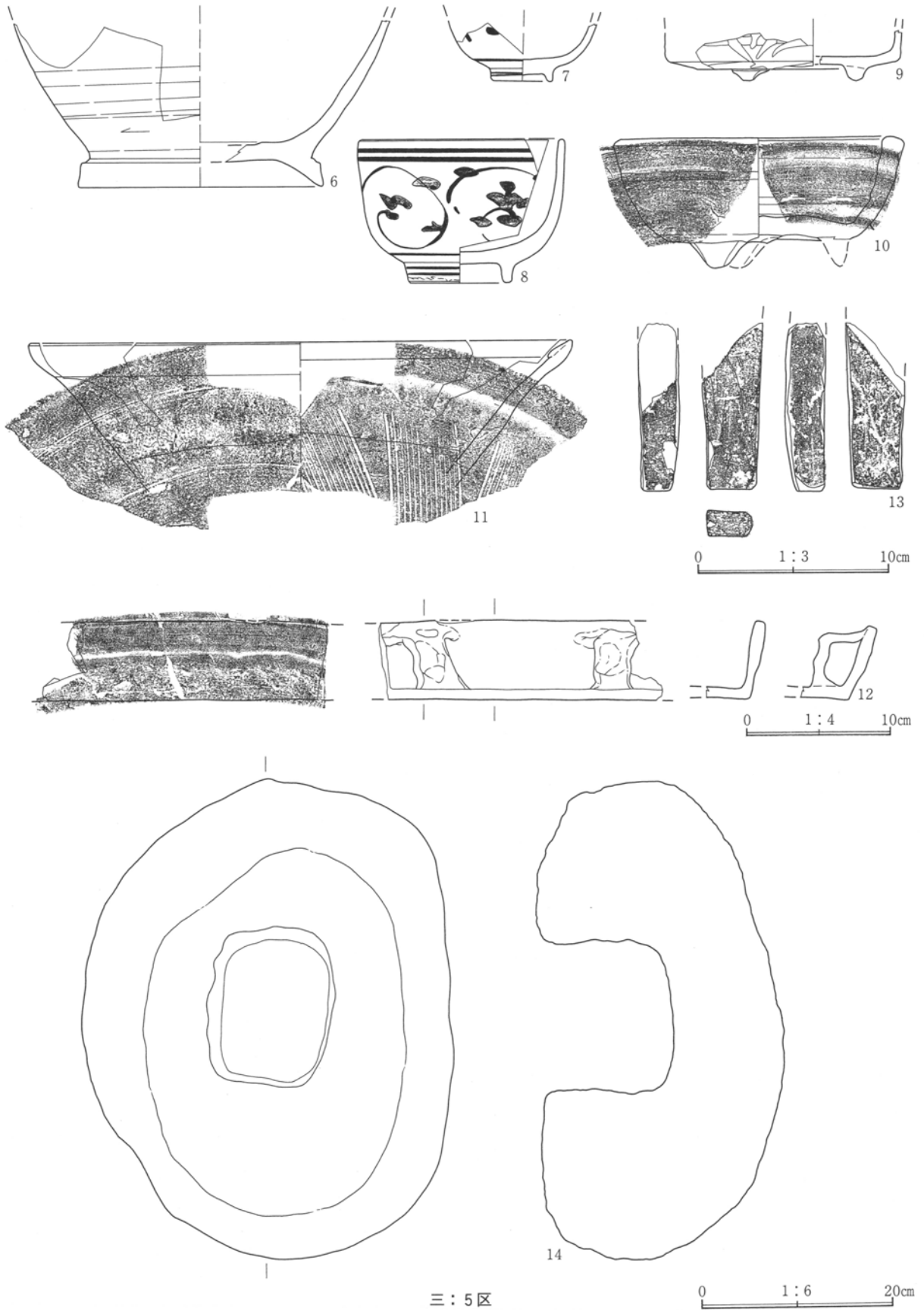


三：5区

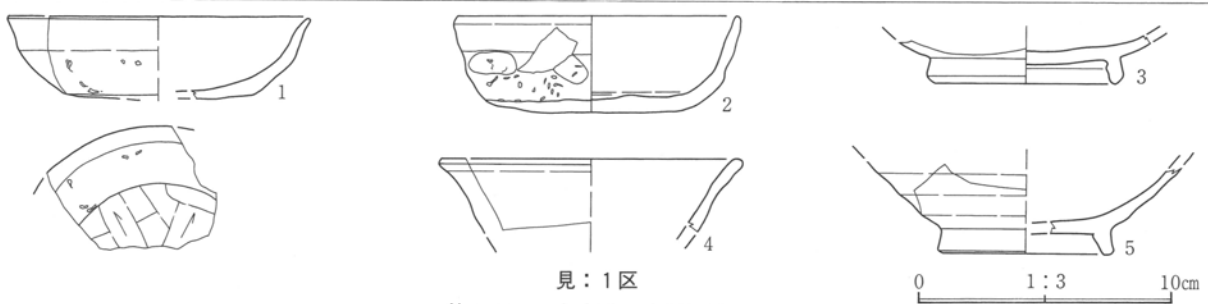
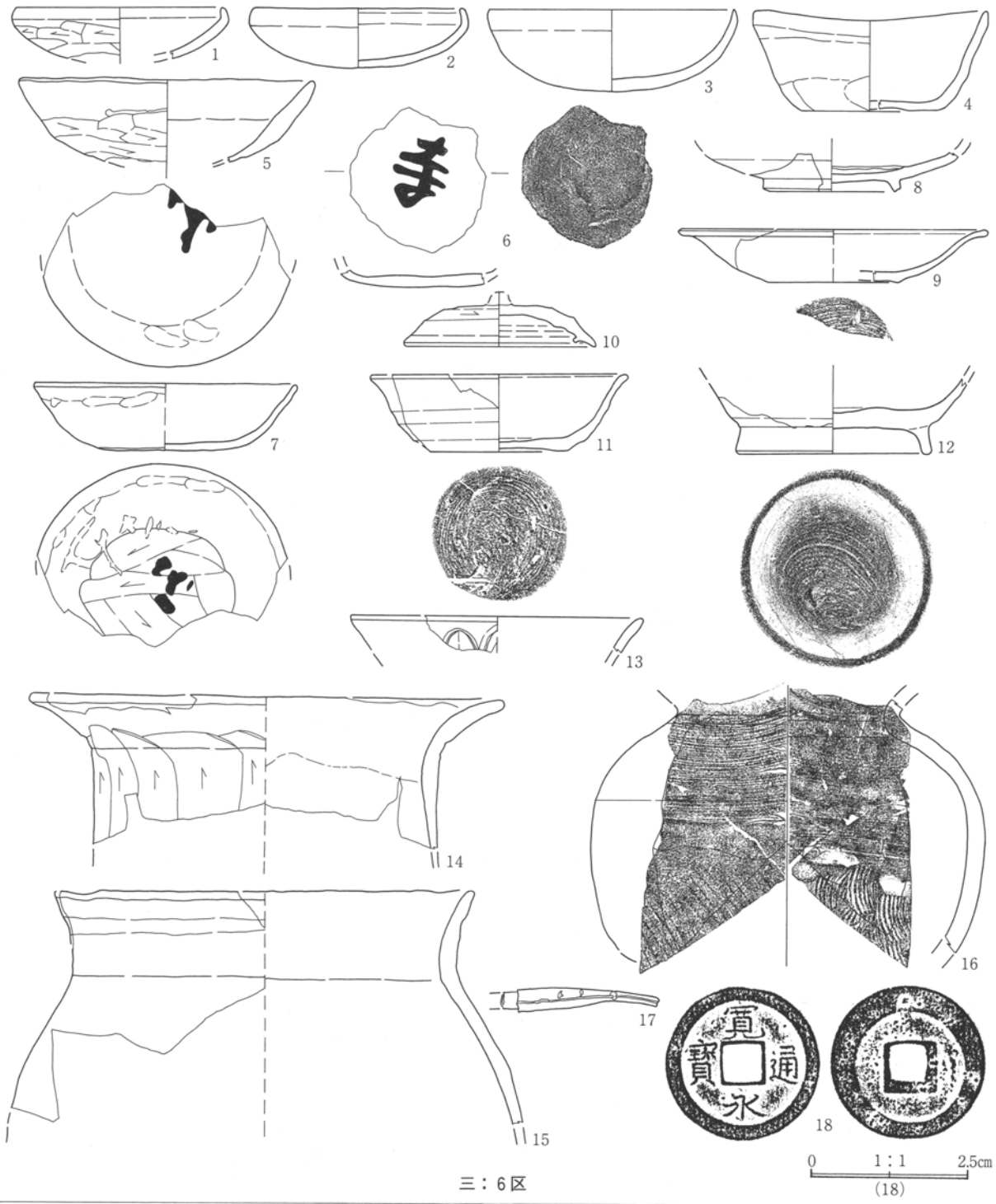


0 1:3 10cm

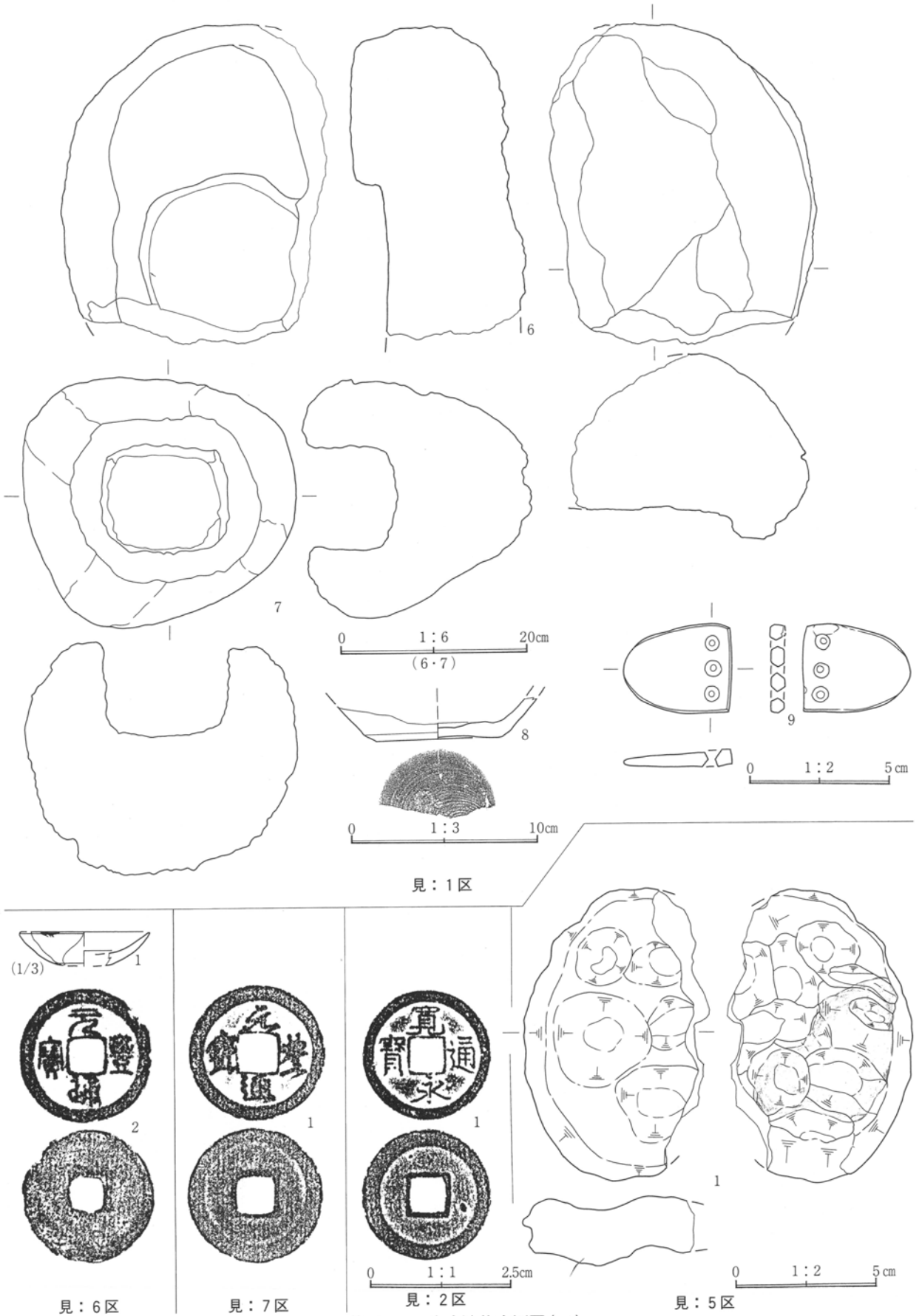
第165図 出土遺物実測図(27)



第166図 出土遺物実測図(28)



第167図 出土遺物実測図(29)



第168図 出土遺物実測図(30)

出土遺物観察表

三騎堂 4区1号竪形炉出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第134図1	炉壁 羽口						羽口はスサを含まず、やや緻密な粘土を使用する。表面はガラス化して爛れる。先端は短くなっている

三騎堂 4区2号竪形炉出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第135図1 第136図1 PL-60	炉壁 羽口						スサ入り粘土で炉壁を構築する。スサは一部焼けておらず繊維が残る。羽口はスサを含まず、やや緻密な粘土を使用する。表面はガラス化して爛れる。器壁は薄い。

三騎堂 4区廃滓場出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第139図1	須恵器 杯		口縁部片	①— ③—	②—	①須恵1 ②良好 ③灰5Y6/1	外面轆轤目顕著。
第139図2 PL-44	須恵器 杯		口縁部3/4欠損	①4.2 ③6.4	②(12.8)	①須恵4 ②良好 ③灰白10YR7/2	口縁部上方に立ち上がる。体部内面から口縁部回転横撫で。体部外面下位篋削り、上位は後撫で。底部外面砂底(砂付着)。内面底部周縁重ね焼き痕。4片接合。
第139図3	須恵器 椀		底部完	①— ③6.9	②—	①須恵1 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/2	高台貼り付け。外面器表磨滅のため、切り離し技法不明。内面黒色仕上げ。内面磨き。
第139図4	須恵器 椀?	埋土	底部1/2	①— ③(6.8)	②—	①須恵1 ②良好 ③灰白5Y7/1	底部外面右回転?糸切り後、高台貼り付け。糸切り痕は中央部に残る。底部内面轆轤目顕著。
第139図5	須恵器? 杯	GL-134b GL-136d	底部	①— ③7.4	②—	①須恵4 ②良好 ③灰白5Y7/1	内面丁寧な撫で。底部外面と体部外面篋削り後撫で。2片接合。
第139図6 PL-44	須恵器 椀		底部完、高台一部残存	①— ③(8.2)	②—	①須恵1 ②良好 ③灰7.5Y6/1	高台高い。高台貼り付け。高台内高台貼り付け時の撫でにより切り離し痕消失。
第139図7 PL-44	須恵器 椀	埋土	底部完、高台一部残存	①— ③(7)	②—	①須恵1 ②良好 ③鈍い黄橙10YR6/3	高台やや高い。高台貼り付け。底部外面から体部外面下位篋削り。高台内篋削り残す。体部外面上位撫で。内面回転横撫で。内面底部中央付近円形に爪先痕残る。
第139図8	灰釉陶器 瓶		肩部片	①— ③—	②—	①東濃窯 ②良好 ③灰白N8/0	外面施釉。内面無釉。

三騎堂 6区1号竪形炉出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第137図1 第138図1 PL-61 PL-62	炉壁 羽口						スサ入り粘土で炉壁を構築する。スサは一部焼けておらず繊維が残る。炉壁には1層砂鉄が入る。羽口部には砂鉄含まない。羽口はスサを含まず、やや緻密な粘土を使用する。表面はガラス化して爛れる。先端は短くなっている。
第139図2	須恵器 杯	前室14層	1/6	①3.8 ③(7.8)	②(12.8)	①須恵1 ②良好 ③灰5Y6/1	底部外面右回転糸切り無調整。口縁部内面凹線状に僅かに窪む。

見切塚 5区1号竪形炉出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	計測値		成形・調整の特徴など
第139図1	石 不詳	埋土	不詳	底辺19cm、高さ16.5cmの断面三角形、現存長23.5cm 端部のみ残存で全長は不明。		自然礫。三角形の一側面が強く火を受け溶け、一部炉壁のような状態をなす。他面も被熱により赤化している。炉の状態が不明確で詳細が不明であるが、4区の炉を考慮すると作業場側の鳥居状石組みの一部である可能性がある。ただ、通常石組みは炉構築材で覆われる点が疑問として残る。

第2章 確認された遺構と遺物

見切塚 1区1号鍛冶出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第139図1 PL-44	灰釉陶器 皿	+1~6	口縁から体部 3/4欠損	①2.5 ③6.2	②(14)	①東濃系 ②良好 ③灰白2.5YR7/1	口縁端部やや肥厚。口縁部灰釉浸け掛け。高台貼り付け。高台端部外面丸みを帯びる。5片接合。
第139図2	須恵器 椀	+1、+16 埋土	1/4	①— ③—	②(14.4)	①須恵1 ②良好 ③鈍い黄2.5YR6/3	口縁部外反。体部外面篋削り。体部内面凍て状の剥離。胎土黒灰色。3と同一個体であろう。5片接合。
第139図3	須恵器 椀	炉底、土坑	1/4	①5.4 ③(6.3)	②(14)	①須恵1 ②良好 ③鈍い黄2.5YR6/3	口縁部外反。体部外面篋削り。高台「ハ」の字状に開く。胎土黒灰色。2と同一個体であろう。5片接合。
第139図4	須恵器 椀	+7	底部	①— ③6.5	②—	①須恵1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	底部外面右回転糸切り無調整後、高台貼り付け。高台の張り付けは雑で、糸切り痕を殆ど残す。酸化炎焼成。
第139図5 PL-45	石 台石?	炉周辺	3/4				加工のない自然円礫。部分的に被熱痕があり、鉄滓の付着が認められる。割れ口で被熱程度が異なり、割れてからも使用されていたと考えられる。台石か。
第139図6 PL-44	羽口	埋土	先端片			①スサ入り ②良好	先端部のガラス化した部分に鉄滓が大きく付着する。図化した面が使用時の下面で、椀状滓がそのまま付着している。
第139図7 PL-44	羽口	土坑	先端			①スサ入り ②良好	先端表面はガラス化し、一部に錆化した鉄が付着する。
第140図8 PL-44	羽口	床	1/3	長さ11.2 厚さ2.6		①スサ入り ②良好	基部はソケット状をなさない。先端からガラス化し、表面が赤錆色を呈する、先端側から灰色、黄橙、基部が橙色を呈する。通風孔は先端部を除き表面から1・2cm橙色を呈する。3片接合。
第140図9 PL-44	羽口	埋土	先端欠損	長さ8 最大径8.3 穴径2		①スサ入り ②良好	先端に椀状滓の縁辺付着。先端は欠損後も火を受け、ガラス化する。基部の小口面も約半分弱、ガラス化する。基部はソケット状をなさず、直線的に終わる。
第140図10 PL-44	羽口	+3、埋土	先端欠損	長さ10.5 基部径7.9 穴径1.7		①スサ入り ②良好	基部がソケット状に窪む。先端は一部残存するが、欠けた後にもしばらく使用しており、欠け口が丸味を帯びている。7片接合。
第140図11 PL-45	椀状滓	床	1/3	最大厚1.2			小型椀状滓の側縁であろう。
第140図12 PL-45	椀状滓	土坑	1/2	最大厚1.3			小型椀状滓の約1/2程であろう。
第140図13 PL-45	椀状滓	炉底	1/2?	径7 最大厚2.2			小型椀状滓の約1/2程か。
第140図14 PL-45	椀状滓	埋土、土坑	1/2?				小型椀状滓であろう。2点接合。
第140図15 PL-45	椀状滓	埋土、土坑	中央破片	最大厚3			形状から椀状滓の中央部であろう。3点接合。
第140図16 PL-44	椀状滓	床	完形	長径7.6 短径5 最大厚2.1			不定形小型。凸側に地山付着。
第140図17 PL-44	椀状滓		一部欠損	長さ7.8 幅6.5 最大厚2			周縁一部欠損。比較的小形であるが、形状は整った椀状を呈する。
第140図18 PL-44	椀状滓	床	1/2	径8~9 最大厚3.1			両端欠損。
第140図19 PL-44	椀状滓	+1	1/2	径7 最大厚3.1			両端欠損。上、下面にローム土付着。
第140図20 PL-44	椀状滓	+7 炉底	約1/2	長さ8.7 幅7.8 最大厚3			周縁は約1/2残存。底面は丸みを帯びる。
第140図21 PL-45	椀状滓	炉底	2/3	径10.5 最大厚5.3			上面の一部に赤錆塊付着。
第140図22 PL-44	椀状滓	炉底、埋土	側縁片	最大厚2.8			側縁片。4点接合。一部赤錆付着。
第141図23 PL-44	椀状滓	炉底	3/4	幅9.5 最大厚3.9			隅丸長方形を呈すると思われる。短辺の一辺欠損

見切塚 1区1号鍛冶出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第141図24 PL-44	碗状滓	床	完形	長さ9.4 最大厚2			2点接合し、完形となる。下面、凹凸多い。
第141図25 PL-44	碗状滓	埋土、土坑	破片	長さ12.5 最大厚3.7			周縁は一部残存。4点接合。一部上面に錆化した鉄分が残る。
第141図26 PL-45	礫	土坑54	完形	長さ34.5 最大厚16		粗粒輝石安山岩 亜角礫	表面に鉄錆状のものが付着する。台石として使用したのか？

三騎堂 4区7号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第141図1	須恵器 甕	埋土 粘土探掘坑	底部1/2	①— ②— ③—		①須恵1 ②良好 ③内面：橙7.5YR7/6 外面：褐灰10YR4/1	底部に円形の窪みがあり、円盤上に粘土を積み上げたと考えられる。内外面撫で。外面は底部を除き縦位撫で。32片接合。

三騎堂 1区3号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-45	須恵器 碗	焚き口底部	口縁部2/3欠損	①4.8 ③(6.9)	②(14)	①須恵1 ②やや不良 ③灰オリープ5Y6/2	体部僅かに内湾して開く。底部外面右回転糸切り無調整。高台貼り付け。糸切り痕残る。器表磨滅。高台端部磨滅して低くなる。

見切塚 1区3号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-45	須恵器 杯	一次面焚き 口+26~30 7号炭窯	完形	①3.4~3.8 ③6.3	②12	①須恵1 ②良好 ③浅黄橙10YR8/4	口縁部外反。底部外面右回転糸切り無調整。口縁部歪む。口縁部一カ所煤付着。体部内外面各一カ所「三」墨書。4片接合。

見切塚 4区1号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-45	須恵器 碗	一次面	口縁部1/3欠損	①6.1 ③7	②15.8	①須恵5 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/4	口縁部外傾。体部外面斲削り。底部外面は糸切りではない可能性高い。高台貼り付け。内面不均質であるが黒色処理。内面斲磨き。

見切塚 5区9号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1	須恵器 碗	埋土	1/8	①— ③—	②(13.0)	①須恵5 ②不良 ③淡黄2.5YR8/2	小片のため実測図の復元径や傾きは正確ではない。体部断面から内面器表黒灰色。2と同一個体の可能性高い。4片接合。
第142図2	須恵器 碗	埋土	1/6	①— ③(6.1)	②—	①須恵5 ②不良 ③鈍い橙5YR7/4	高台貼り付け。断面から内面器表黒灰色。接合なし。1と同一個体の可能性高い。

見切塚 5区14号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1	土師器 杯		1/4	①4.3 ③(7.5)	②(12.9)	①土師2 ②良好 ③外面鈍橙7.5YR7/3 内面黒7.5Y2/1	内面斲磨き、内面から口縁部外面の一部黒色処理。口縁部下から底部外面斲削り。口縁部外面横撫で。4片接合。

見切塚 5区15号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1	須恵器 碗	埋土	1/4	①— ③(6.0)	②—	①須恵1 ②普通 ③外面黒5YR1.7/1 内面黒7.5YR2/1	底部回転糸切り無調整。高台貼り付け。

第2章 確認された遺構と遺物

見切塚 5区15・17号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-45	須恵器 椀	17炭 15炭	底部	①— ②— ③7.8		①須恵1 ②普通 ③灰5Y5/1	底部回転糸切り後高台貼り付け。体部外面に墨書認められるが、欠損のため文字不明。2片接合。

見切塚 5区19号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-45	須恵器 椀		口縁部1/2 底部完	①6.4 ②(15.0) ③7.4		①須恵5 ②不良 ③明赤褐5YR5/6	底部外面砂付着、糸切り痕認められない。外面器表一部青灰色。高台貼り付け。口縁部内外面凹線状に窪む。器表摩滅して観察しにくい。体部外面は撫で調整の可能性高い。口縁部と高台は回転横撫で。2片接合。

見切塚 7区5号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1	須恵器 杯	埋土	小片	①3.1 ②(12.0) ③(6.0)		①須恵3 ②やや不良 ③浅黄2.5YR7/3	底部回転糸切り無調整。小片のため回転方向は不明。

三騎堂 H1号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1	須恵器 杯	埋土	口縁部片	①— ②— ③—		①須恵5 ②良好 ③灰5Y6/1	胎土中に白色針状物含む。
第142図2 PL-45	土師器 杯	埋土、+1	1/3	①— ②(11.6) ③(8.2)		①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌痕著しい。底部外面篋削り。9片接合。
第142図3	土師器 杯	床～+4	口縁部一部 底部2/3	①(4) ②(12) ③—		①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。緩い丸底。底部器壁厚い。8片接合。
第142図4	土師器 杯	埋土	口縁部片	①— ②(13.8) ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い褐7.5YR5/4	口縁部外反。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。5片接合。

三騎堂 H2号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-45	須恵器 椀	竈内	口縁部2/3 底部完	①5.6 ②14 ③6.5		①須恵1 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/3	内面から口縁部横撫で。内面黒色仕上げ、篋磨き。体部外面撫で。体部下半篋削り。体部外面に一カ所大きく墨書。貼り付け高台。高台貼り付け時に高台内すべて回転撫で。
第142図2 PL-46	土師器 甕	竈内	1/2	①— ②17.7 ③—		①土師2 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/4	器壁の厚い「コ」の字状口縁。外面、上から横、斜め、縦の篋削りであるが、削りが浅く撫で状。内面撫で、内面での一部は刷毛状。頸部外面指頭状圧痕。口縁部外面一部型肌痕残る。6片接合。

三騎堂 H3号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第142図1 PL-46	土師器 杯	床	完形	①3.4 ②12.3 ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部内湾し、端部は小さく受け口状をなす。底部外面篋削り。体部外面型肌痕残る。
第142図2 PL-46	須恵器 椀	床、埋土	口縁部1/4欠損	①6.8 ②14.3 ③7.2		①須恵1 ②良好 ③灰黄2.5Y6/2	内外面幅の狭い轆轤目顕著。底部外面右回転糸切り後高台貼り付け。口縁部外反。還元炎焼成であるが、焼き締まりはない。5片接合。

三騎堂 H4号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第143図1	土師器 杯	床～+2	1/3	①3.5 ②12 ③7.5	①土師1 ②良好 ③明赤褐2.5YR5/6	口縁部外反。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、型肌は殆ど撫で消す。底部外面鋭削り。5片接合。
第143図2	土師器 杯	床～埋土	1/2	①— ②(12) ③(8)	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部僅かに外傾。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指頭状圧痕。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。外面黒変。2片接合。
第143図3 PL-46	須恵器 皿	埋土、+18	口縁部一部 底部2/3	①2.1 ②(14.2) ③6.2	①須恵1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	口縁部僅かに内湾。底部外面右回転糸切り無調整。内面は青灰色。7片接合。
第143図4	須恵器 杯	+1	底部	①— ②— ③6.2	①須恵1 ②やや不良。 ③鈍い褐7.5YR5/4	底部外面右回転糸切り無調整。外面轆轤目目立つ。底部内面轆轤目による凹凸あり。7片接合。
第143図5	土師器 杯	+10、埋土	1/3	①2.6 ②(11) ③(6.6)	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部、体部直線的に開く。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面鋭削り。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。底部中央窪む。器表やや磨滅。口縁部一部焼成時に赤変する。4片接合。
第143図6	土師器 甕	+2、+12	1/3	①— ②(10.6) ③—	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部「コ」の字状に近い。頸部中位と下位に沈線状の強い横撫で。体部外面鋭削り。口縁部横撫で。外面煤附着。6片接合。

三騎堂 H6号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第143図1	須恵器 皿?	埋土	底部片	①— ②— ③(5)	①須恵1 ②良好 ③鈍い褐7.5YR5/4	底径小さく体部は直線的に開く。底部外面右回転糸切り無調整。
第143図2	土師器 甕	+2	口縁部片	①— ②— ③—	①土師1 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	「コ」の字状口縁。
第143図3	土製品 不明	甕使用面	小片	長3 短2.7 厚1.7	①土師1 ②やや不良 ③灰白2.5Y8/2	周縁磨滅。図示した表は灰白、裏は青灰色。表面も磨滅。
第143図4	土製品 不明	埋土	破片	長3.9 短3.9 厚1.1	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄2.5YR6/3	一辺の周縁は残存か。表面は粗い撫で。裏面黒灰色を呈し、植物茎状の圧痕あり。
第143図5 PL-46	土製品 不明		破片	長7.9 短7.4 厚1.1	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄橙10YR7/3	表面粗い撫で。裏面植物茎状圧痕。断面から裏面黒灰色。一部周縁が残存か。裏面磨滅。4片接合。
第143図6	土製品 不明	甕内	破片	長6.5 短5.4 厚1.6	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄2.5YR6/3	断面形は皿状をなす。厚みから中央部片であろう。表面粗い撫で。裏面植物茎状圧痕。断面から裏面黒灰色。裏面亀裂あり。2片接合。
第143図7	土製品 不明	埋土	破片	長6.3 短4.2 厚1.7	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄2.5Y6/3	薄く丸みを帯びる部分は周縁残存か?表面粗い撫で。裏面植物茎状圧痕。裏面磨滅。断面から裏面黒灰色。
第143図8 PL-46	土製品 不明	甕使用面	破片	長7.8 短4.8 厚1.7	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄橙10YR7/3	表面粗い撫で。裏面植物茎状圧痕。裏面磨滅。断面から裏面黒灰色。3片接合。

三騎堂 H7号住居出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第143図1 PL-46	土師器 杯	埋土	完形	①3.4 ②9.3~10.2 ③—	①土師1 ②良好 ③橙2.5YR6/6	口縁部内湾。体部焼成後に穿孔。器表磨滅著しい。体部内面から口縁部横撫で。口縁部平面形楕円形を呈する。5片接合。
第143図2 PL-46	土師器 杯	+8、埋土	底部一部欠損	①3.6 ②10.9 ③—	①土師1 ②やや不良 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部屈曲し、やや内傾して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面鋭削り。器表磨滅し、鋭削り痕は殆ど見えない。体部外面型肌。5片接合。
第143図3 PL-46	土師器 杯		口縁部から体 部1/3欠損	①3.6 ②10.7 ③—	①土師1 ②良好 ③明赤褐から灰褐色 5YR5/6~7.5YR5/3	口縁部屈曲し、内傾して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面鋭削り。5片接合。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 H7号住居出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第143図4 PL-46	土師器 杯	+2、+7	3/4	①3.3 ②10.4 ③-	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面磨削。器表磨減。底部外面黒斑。7片接合。
第143図5 PL-46	土師器 杯	埋土	1/4	①3.1 ②10.5 ③-	①土師1 ②やや不良 ③鈍い橙5YR6/4	口縁部は丸みを持って直立気味に立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削。器表磨減し、調整痕殆ど残らない。7片接合。
第143図6	土師器 杯	床	1/4	①3 ②(10.2) ③-	①土師1 ②やや不良 ③橙7.5YR6/6	口縁部小さく内湾。器表磨減著しく、調整痕不明。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。
第143図7 PL-46	土師器 杯	+4~+10 埋土	1/4欠損	①3.7 ②10.5 ③-	①土師器1 ②良好 ③鈍い橙5YR6/6	口縁部屈曲し、やや内傾して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削。体部外面型肌僅かに認められる。8片接合。
第143図8 PL-46	土師器 杯	+3	口縁端部一部 欠損	①2.8 ②10 ③-	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	丸底。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面磨削。器表やや磨減。3片接合。
第143図9	土師器 杯	+3	1/3	①3.9 ②(11.7) ③-	①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR6/4	口縁部やや内湾。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面磨削。丸底。2片接合。
第143図10	土師器 杯	埋土	1/3	①- ②(13) ③-	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削。器表磨減。3片接合。
第143図11	土師器 杯	埋土	1/4	①3.3 ②(12.2) ③-	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	全体に均一に内湾。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削。丸底。外面器壁やや磨減。2片接合。
第143図12	土師器 杯	埋土	1/4	①4.1 ②(14) ③-	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部内湾。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面磨削。丸底。4片接合。
第143図13 PL-46	土師器 杯	+4、+14	完形	①4.5 ②13 ③-	①土師1 ②良好 ③橙7.5Y6/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削。器表磨減。8片接合。
第143図14	土師器 杯	埋土	1/4	①- ②(12.8) ③-	①土師1 ②良好 ③鈍い橙10YR6/3	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面磨削。丸底。器表やや磨減。2片接合。
第144図15 PL-47	須恵器 蓋	+16	つまみ欠損 口縁端部一部 欠損	①- ②8.6	①須恵1 ②良好 ③灰白10YR7/1	器壁厚。天井部外面右回転磨削後つまみ貼り付け。つまみ貼り付け時に磨削部も撫でる。かえり内傾し、小さい。天井部外面自然軸が薄く掛かる。2片接合。
第144図16	土製品 不明	埋土	破片	長5.5 短4.8 厚1.4	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄2.5YR6/3	周縁は欠損。表面は粗い撫で。裏面は植物茎状圧痕。断面から裏面黒灰色。2片接合。
第144図17 PL-47	土製品 不明	+8	破片	長6.7 短6.5 厚1.8	①土師1 ②やや不良 ③鈍い黄橙10YR7/3	表面粗い撫で。裏面黒灰色。裏面植物茎状圧痕。裏面やや磨減。
第144図18	土師器 甌	埋土	口縁部片	①- ②(20.6) ③-	①土師3 ②やや不良 ③鈍い橙2.5YR6/3	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面磨削。口縁部外面横撫でにより2カ所僅かに沈線状に窪む。口縁部内面、小さく段差がつく。2片接合。
第144図19 PL-46	須恵器 壺	+15、埋土	1/2	①- ②13 ③-	①須恵1 ②良好 ③灰黄褐10YR6/2	口縁部外反。口縁端部外面沈線。3片接合。
第144図20	土師器 小型甕	埋土	1/4	①- ②(12) ③-	①土師3 ②良好 ③明赤褐5YR5/8	ゆるい「コ」の字状口縁。口縁部内面撫で痕。頸部内面横撫で。撫で上げ痕一カ所。外面に撫で上げ痕は残らない。2片接合。
第144図21 PL-47	土師器 甕	床、埋土	上半	①- ②19.8 ③-	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部外反。外面縦位磨削。口縁部横撫で。8片接合。
第144図22	土師器 甕	掘り方	1/4	①- ②(22.6) ③-	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/8	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面縦位磨削。口縁部器壁厚。口縁部歪む。6片接合。
第144図23 PL-47	土師器 甕	+4、埋土	底部欠損	①- ②20.6 ③-	①土師2 ②良好 ③橙7.5YR7/6	口縁部外反。外面縦位磨削。内面撫で。口縁部横撫で。14片接合。
第144図24 PL-47	土師器 甕	床~+4	体部から底部	①- ②- ③4.3	①土師2 ②良好 ③橙7.5YR6/6	外面縦位磨削。内面撫で。器表やや磨減。30片接合。
第145図25	土師器 甕	+2、+4 埋土	1/2	①- ②20.6 ③-	①土師3 ②やや不良 ③橙7.5YR6/6	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部内面磨削。体部外面縦位磨削。口縁部から外面器表やや磨減。外面磨削方向不明瞭。14片接合。

三騎堂 H7号住居出土遺物(3)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第145図26 PL-46	須恵器 台盤	+11、5住 GG-116、 GG-117 など	脚部4/5 杯部一部	①11.8 ②(26.6) ③14	①須恵5 ②良好 ③橙2.5YR6/6 灰5YR5/1	器形歪む。台部貼り付け。貼り付け部の杯側にはカキヤブリを施す。台内面には紐作り痕残る。破損後に被熱し、橙色と灰色の境は接合部で明瞭。11片接合。
第145図27 PL-47	須恵器 甕 鉄滓	床～+10 床下土坑3	2/3	①— ②(21.2) ③—	①須恵1 ②良好 ③灰5YR4/1	口縁部外傾し、端部は内湾する。口縁部外面には突帯を巡らす。外面格子状叩き、内面当て具痕。68片接合。

三騎堂 H8号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第145図1 PL-47	土師器 杯	+5	口縁部から体 部1/2欠損	①3.6 ②12 ③8.2	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部外反。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、底部外面篋削り。底部外面中央直径1cmほど削り残す。2片接合。
第145図2	須恵器 杯	+12	1/3	①— ②(13.2) ③—	①須恵1 ②良好 ③灰7.5YR6/1	体部、口縁部直線的に開く。口縁部下で器壁薄くなる。器表やや磨滅。焼き締まりはない。
第145図3	須恵器 杯	掘り方	1/4	①3.3 ②(13) ③(5.4)	①須恵1 ②良好 ③灰オリーブ5Y5/2	口縁部、体部直線的に開く。底部外面右回転糸切り無調整。外面轆轤目立つ。
第145図4	須恵器 杯	+17、埋土	1/3	①3.9 ②(12.6) ③(6)	①須恵1 ②やや不 良 ③灰オリーブ7.5 YR6/2	口縁部僅かに外傾。底部外面回転糸切り無調整。器表磨滅し、糸切りの回転方向不明。3片接合。
第145図5 PL-48	須恵器 杯	+2、埋土	口縁部から体 部1/2底部完	①4.1 ②12.5 ③6.5	①須恵1 ②良好 ③灰5YR6/1	口縁部端部肥厚。底部外面右回転糸切り無調整。胎土中の礫は直径3mm大を含む。4片接合。
第145図6 PL-47	須恵器 碗	埋土	口縁部1/4 底部完	①5.3 ②(14.7) ③5.9	①須恵1 ②やや不良 ③淡黄2.5YR8/3	底部器壁断面黒灰色、器表は淡黄色。口縁部僅かに外反。底部外面回転糸切り後、高台貼り付け。高台貼り付け時の撫でにより、糸切り痕殆ど消える。器表やや磨滅。
第146図7 PL-48	須恵器 碗	+9	口縁部2/3欠 損	①5.7 ②(14.6) ③6.4	①須恵1 ②良好 ③浅黄5Y7/3	口縁部外反。体部やや内湾。底部外面右回転糸切り後、高台貼り付け。糸切り痕残る。2片接合。
第146図8 PL-47	須恵器 碗	床	口縁部1/3欠 損	①5.2 ②14 ③7.2	①須恵1 ②やや不 良 ③浅黄2.5YR7/3	口縁部外反。底部外面右回転糸切り後、高台貼り付け。糸切り痕残る。器表磨滅。6片接合。
第146図9 PL-48	須恵器 皿	+17、埋土	口縁部1/2欠 損	①2.7 ②12.7 ③6.2	①須恵1 ②やや不良 ③鈍い黄2.5YR6/4	口縁部僅かに外反。底部内面中央窪む。底部内面と高台内は灰白色。底部外面右回転糸切り後、高台貼り付け。器表磨滅。2片接合。
第146図10	土師器 甕	+22	口縁部片	①— ②(18) ③—	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	「コ」の字状口縁。頸部内面から頸部外面横撫で。頸部外面接合痕明瞭に残る。器表やや磨滅。11と同一個体であろう。3片接合。
第146図11	土師器 甕	+18	口縁部片	①— ②(18.8) ③—	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	「コ」の字状口縁。頸部内面から頸部外面横撫で。頸部外面接合痕明瞭に残る。器表やや磨滅。10と同一個体であろう。
第146図12 PL-48	土師器 甕	+20、+21	上半	①— ②19.8 ③—	①土師1 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	「コ」の字状口縁。頸部内外面、体部内面指頭状圧痕。頸部外面接合痕。体部外面篋削り。20片接合。
第146図13	土師器 甕	+22、埋土	体部下半	①— ②— ③(4.2)	①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	内面撫で。外面縦位篋削り。篋削りの方向不明瞭。外面残存部上半黒変。24片接合。
第146図14 PL-48	土師器 甕	+15、埋土	1/2	①— ②18 ③—	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	「コ」の字状口縁。器壁薄い。口縁部横撫で。体部外面上から、横、縦位篋削り。16片接合。
第146図15	灰釉陶器 瓶	+5	1/4	①— ②— ③—	①東濃窯 ②良好 ③灰白2.5Y7/1	外面灰釉。器壁薄い。頸部は欠損。2片接合。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 H9号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第146図1	須恵器 椀	埋土	1/4	①— ②— ③(6.3)		①須恵1 ②やや不良 ③灰黄褐10YR6/2	底部外面右回転糸切り無調整。高台貼り付け。焼き締まりはない。
第146図2	須恵器 椀	+9	1/4	①— ②(13) ③—		①須恵1 ②やや不良 ③灰黄2.5YR7/2	口縁部屈曲して外方に開く。外面轆轤目立つ。焼き締まりはない。
第146図3 PL-48	須恵器 皿	+3	体部から口縁部殆ど欠損	①— ②— ③7.0		①須恵1 ②良好 ③灰黄2.5YR6/1	口縁部外反。体部は直線的に開く。底部外面右回転糸切り無調整。
第146図4 PL-48	土師器 杯 (墨書)	+8、+10 埋土、竈内	1/2	①3.3 ②12.6 ③8.7		①土師2 ②良好 ③明赤褐5YR5/8	体部直線的に開く。口縁部は内側に折れる。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面篋削り。底部外面墨書。10片接合。
第147図5 PL-48	土師器 甕	+12	1/3	①— ②(11) ③—		①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	「コ」の字状口縁。体部外面篋削り、上位から横、縦。体部内面撫で。口縁部横撫で。3片接合。
第147図6	土師器 甕	+2、+5 竈内	1/8	①— ②(20) ③—		①土師1 ②良好 ③赤褐5YR4/6	「コ」の字状口縁。口縁部横撫で。頸部外面中位指頭状圧痕。体部外面篋削り。8片接合。

三騎堂 H10号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第147図1	土師器 杯	埋土	体部から底部 1/3	①— ②— ③—		①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	丸底。底部外面篋削り。器表磨滅。口縁部は屈曲して内傾か。3片接合。
第147図2	土師器 杯	埋土	1/4	①2.5 ②(9.3) ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部屈曲して立ち上がる。丸底。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。器表部分的に凍て状に剥離。3片接合。
第147図3	土師器 杯	埋土	1/4	①— ②(10.7) ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	口縁部屈曲して直立する。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面篋削り。内面器表部分的に剥離。丸底。
第147図4 PL-48	土師器 杯	+9	口縁部から体部 1/4欠損	①3.7 ②11.2 ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面篋削り。丸底。3片接合。
第147図5 PL-48	土師器 杯	埋土	口縁部から体部 1/3欠損	①3.5 ②10.1 ③—		①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。器表磨滅。11片接合。
第147図6 PL-48	土師器 杯	埋土	口縁部から体部 2/3欠損	①3.5 ②10 ③—		①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	体部から口縁部丸みを持って立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。丸底。器表磨滅。一方の口縁部外面はやや赤く変色する。
第147図7	土師器 杯	埋土	1/5	①— ②(10.8) ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	口縁部小さく内湾。体部内面から口縁部横撫で。内面横撫で一カ所撫で上げ。底部外面篋削り。内面器表剥離。
第147図8 PL-48	土師器 杯	埋土	1/3	①3.8 ②(12.9) ③—		①土師1 ②やや不良 ③橙5YR6/6	口縁部内傾して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。器表磨滅。5片接合。
第147図9 PL-48	土師器 杯	+3	口縁部一部欠損	①3.2 ②10.7 ③—		①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。丸底。
第147図10	土師器 杯	床、埋土	1/4	①— ②(17) ③—		①土師1 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。大型の杯。7片接合。
第147図11	土師器 甕	+27、埋土	1/4	①— ②(19.5) ③—		①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR7/4	口縁部横撫で。口縁部内面は横撫で以前の篋撫で痕あり。体部内面篋撫で。体部外面篋削り。外面の器表磨滅し、篋削り単位不明。2片接合。

三騎堂 H11号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第147図1	土師器 杯	埋土、竈内	1/4	①— ②(10.7) ③(6.9)		①土師1 ②良好 ③明褐7.5YR5/6	口縁部小さく内湾。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面篋削り。器表やや磨滅。3片接合。
第147図2	須恵器 杯	埋土	1/4	①— ②— ③(6.2)		①須恵1 ②やや不良 ③灰白2.5YR8/2	底部外面右回転糸切り無調整。酸化炎焼成。焼き締まりはない。2片接合。
第147図3	須恵器 杯	埋土	1/4	①— ②— ③(6.4)		①須恵1 ②良好 ③鈍い褐7.5YR5/4	底部外面右回転糸切り無調整。酸化炎焼成。焼き締まりは弱い。
第147図4	須恵器 杯	+3	1/4	①— ②— ③(7)		①須恵1 ②良好 ③灰5Y5/1	底部外面右回転糸切り無調整。底部内面螺旋状の轆轤目。
第147図5	灰釉陶器 瓶	+9	口縁部片	①— ②(9.9) ③—		①東濃窯 ②良好 ③灰白N8/0	口縁部外反し、端部を上方に小さく引き上げる。外面灰釉。口縁部内面は自然釉か。

三騎堂 H12号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第147図1 PL-48	土師器 杯	埋土	1/2	①3.1 ②(11.8) ③8	①土師1 ②やや不良 ③鈍い橙5YR6/4	口縁部横撫でにより小さく湾曲する。体部外面型肌。底部外面篋削り。器表磨滅。7片接合。
第147図2	土師器 杯	埋土	1/4	①— ②(11) ③5.8	①土師1 ②良好 ③明赤褐2.5YR5/6	体部直線的に開く。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。体部外面指頭状圧痕。器表やや磨滅。4片接合。
第147図3 PL-49	土師器 杯	+2、+3 埋土	1/4	①3.1 ②(11.1) ③(7.7)	①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐7.5YR5/4	口縁部屈曲して外傾。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指頭状圧痕多く残る。底部外面篋削り。6片接合。
第147図4 PL-49	土師器 杯	+5、+6 埋土	2/3	①4 ②12.2 ③6.5	①土師3 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	体部外傾し、口縁部は屈曲して直立する。体部外面下位屈曲する。体部内面から口縁部横撫で。体部外面撫で。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。底部外面篋削り。12片接合。
第147図5 PL-49	土師器 杯	埋土	1/3	①— ②(13) ③(7.6)	①土師3 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	体部内面から口縁部横撫で。体部下指頭状圧痕。体部上半撫で。底部外面篋削り。内面体部から底部周縁、暗文状の沈線。3片接合。
第147図6 PL-49	土師器 杯	埋土	1/2	①3.4 ②(11.7) ③7	①土師2 ②良好 ③明赤褐5YR5/8	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面篋削り。底部中央直径4.5cm程削り残し、型肌残す。6片接合。
第147図7 PL-48	須恵器 椀	+14、埋土	1/2	①— ②13.8 ③—	①須恵1 ②やや不良 ③灰白5Y7/1	口縁部小さく外反。焼き締まりはない。器表磨滅。5片接合。
第147図8	須恵器 杯	+3、+19 埋土	1/2	①— ②— ③6.8	①須恵1 ②良好 ③灰オリープ5Y6/2	底部外面右回転糸切り無調整。底部内面使用による磨滅により平滑となる。底部周縁の角は擦れていない。還元炎、焼き締まりは弱い。4片接合。
第147図9 PL-48	須恵器 杯	床、掘り方	1/2	①3.5 ②12.2 ③6.5	①須恵1 ②良好 ③灰5Y6/1	底部外面右回転糸切り無調整。体部と口縁部直線的に開く。底部内面中央盛り上がる。2片接合。
第147図10 PL-48	須恵器 皿	埋土	口縁部2/3欠損	①3.1 ②(15) ③7.4	①須恵1 ②やや不良 ③灰黄2.5YR6/2	口縁部水平に開く。体部直線的に開く。底部外面右回転糸切り無調整。
第148図11	土師器 小型甕	床 床下2坑	1/3	①— ②(13) ③—	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	「コ」の字状口縁。口縁部横撫で。頭部外面指頭状圧痕。体部外面篋削り。2片接合。
第148図12	土師器 甕	埋土	1/4	①— ②— ③4	①土師1 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	外面篋削り。内面撫撫で。器壁やや厚い。篋削り方向不明瞭。3片接合。
第148図13	土師器 甕	掘り方 床下2坑	1/4	①— ②(20) ③—	①土師1 ②良好 ③明褐7.5YR5/6	口縁部外反。器表磨滅著しい。2片接合。
第148図14 PL-49	椀状滓	+10	完形	長さ8.9 幅5.3 最大厚2		図示した上面が比較的平坦で、下面は中央が厚く縁辺が薄くなる。
第148図15	石製品 紡錘車	+28	完形	径4.4厚 さ1.2		台形を呈した紡錘車。傾斜した部分には幅2mmから4mmの調整痕が放射状に認められる。

三騎堂 H13号住居出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第148図1	須恵器 杯	竈内	1/4	①— ②(12.6) ③—	①須恵1 ②やや不良 ③灰白5YR7/1	口縁部緩く外反。外面轆轤目目立つ。
第148図2	須恵器 杯	埋土 GG-116	底部3/4	①— ②— ③6	①須恵1 ②良好 ③灰7.5YR4/1	底部外面右回転糸切り無調整。一部鈍い褐色を呈する。底部内面中央浅く窪む。2片接合。
第148図3 PL-49	須恵器 杯	+7	口縁部から体部1/2欠損	①3.5 ②10.2 ③6.5	①須恵1 ②良好 ③灰5Y6/1	体部と口縁部直線的に立ち上がる。底部外面回転糸切り後、撫で。底部と体部外面に他製品か窯壁が一部付着。
第148図4	須恵器 椀	床	底部	①— ②— ③7	①須恵1 ②不良 ③橙5YR6/6	高台貼り付け。高台内中央砂底状を呈する。酸化炎焼成。焼き締まりない。内面器表磨滅。
第148図5	須恵器 椀	+9、埋土	口縁部一部 底部完	①5 ②(15.4) ③6	①須恵1 ②良好 ③灰白5Y7/2	口縁部外反。器表磨滅。底部外面右回転糸切り無調整か。高台貼り付け。2片接合。
第148図6	須恵器 杯	床	底部1/2 口縁部一部	①4.1 ②(14) ③6.6	①須恵1 ②不良 ③灰黄2.5Y6/2	口縁部緩く外反。底部外面右回転？糸切り無調整。器表磨滅著しい。酸化炎焼成。
第148図7 PL-49	須恵器 杯	床	口縁部から体部2/3欠損	①4.3 ②(13) ③5.8	①須恵1 ②やや不良 ③灰黄2.5Y7/2	体部僅かに内湾。外面間隔の狭い轆轤目。底部外面右回転糸切り無調整。器表磨滅。2片接合。
第148図8 PL-49	須恵器 椀	+8、+10 埋土	口縁部1/2、 底部1/5欠損	①5.1 ②(12.8) ③6.3	①須恵1 ②良好 ③灰N4/0	口縁部外反。体部やや内湾。底部外面右回転糸切り後、高台貼り付け。糸切り痕残る。3片接合。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 H13号住居出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第148図9 PL-49	須恵器 椀	床、埋土	口縁部から体 部1/2欠損	①5.2 ③7.6	②(14)	①須恵1 ②やや不良 ③灰白2.5YR8/1	口縁部僅かに外反。外面轆轤目顕著。底部外面 右回転糸切り後、高台貼り付け。高台は殆ど欠 損。糸切り痕残る。器表磨減。外面器表は凍て 状に部分的に深く剥離する。13片接合。
第148図10 PL-49	土師器 甕	床、埋土、 GG-116な ど	体部一部欠損	①26.4 ③4.6	②18.6	①土師2 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	「コ」の字状口縁。口縁部横撫で。体部外面 上から斜め、縦位篋削り。器表磨減。43片接合。

三騎堂 H14号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第149図1	土師器 杯	+6、埋土	口縁部一部と 底部欠損	①— ③8.2	②11.1	①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部横撫で。 底部外面篋削り。体部外面型肌。12片接合。
第149図2 PL-49	土師器 杯	竈内	口縁部一部欠 損	①3.3 ③8	②12.2	①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR6/4	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指 頭状圧痕。底部外面篋削り。底部外面一部に型 肌残る。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。 底部中央窪む。
第149図3 PL-49	土師器 杯	竈内	完形	①3.2 ③8.5	②12.1	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。口縁部横撫でによ りやや外反する。体部外面型肌、指頭状圧痕。 底部外面篋削り。内面底部周縁から体部下位指 頭状圧痕。口縁部外面横撫で一カ所で撫で上げ る。
第149図4 PL-49	土師器 杯	+9	口縁部一部欠 損	①3.4 ③8.4	②12	①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR6/4	体部内面から口縁部横撫で。口縁部やや外反。 口縁部端部小さく内側に折り返す。体部外面型肌、 指頭状圧痕。底部外面篋削り。底部内面窪む。 内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。
第149図5	須恵器 杯	+4	1/4	①3.2 ③(9.1)	②(13.7)	①須恵1 ②良好 ③灰5YR5/1	口径、底径共に大きい。底部外面右回転糸切り 後、周縁右回転篋削り。
第149図6 PL-49	土師器 杯	竈内	1/4	①3.2 ③8	②(12)	①土師3 ②良好 ③橙5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指 頭状圧痕。体部外面の撫では比較的丁寧。底部 外面篋削り。内面底部周縁から体部下位指頭状 圧痕。口縁部内面一カ所に煤付着。5片接合。

三騎堂 H15号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第149図1	土師器 杯	床	1/3	①4 ②(8.4)	②(12.6)	①土師1 ②良好 ③明赤褐5YR5/6	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部横撫で。 底部外面篋削り。6片接合。
第149図2 PL-49	土師器 杯	+4	3/4	①3.5~3.9 ②12.7 ③7		①土師3 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部外反。やや器形歪む。体部内面から口縁 部横撫で。体部外面型肌。底部外面篋削り。
第149図3 PL-50	土師器 杯	床~+7 埋土	口縁部から体 部1/2 底部完	①3.6 ③8.9	②(11.7)	①土師3 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌僅か に残る。指頭状圧痕。底部外面直径2cm程を残 し、周囲を篋削り。中央は型肌。11片接合。
第149図4	須恵器 杯	埋土	体部一部 底部2/3	①— ③5.6	②—	①須恵1 ②良好 ③浅黄2.5YR7/4	底部外面右回転糸切り無調整。焼き締まりはな い。体部器壁薄い。5片接合。
第149図5 PL-49	土師器 甕	床、埋土	1/4	①— ③—	②(19.8)	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	「コ」の字状口縁。口縁部器壁厚い。頸部外面 接合痕。外面上から横、斜め、縦位篋削り。内 面撫でと篋撫で。口縁部横撫で。15片接合。
第149図6	土師器 小型甕	+9、埋土	1/5	①— ③—	②(10)	①土師1 ②良好 ③明赤褐2.5YR5/8	「コ」の字状口縁。口縁部横撫で。体部外面篋 削り。頸部外面中位篋状工具の当たり痕。外面 肩部に薄く煤付着。20片接合。

三騎堂 H16号住居出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第149図1 PL-50	土師器 杯	床下2坑	破片	①— ③—	②—	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	杯口縁部下位片。外面不明墨書。2と同一個体 か。
第149図2 PL-50	土師器 杯	床下2坑	破片	①— ③—	②—	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	杯底部中央小片。内面不明墨書。外面型肌。1 と同一個体か。

三騎堂 H16号住居出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第149図3 PL-50	土師器 杯	床、埋土	1/2	①3.3 ③-	②(12)	①土師3 ②良好 ③明赤褐2.5YR5/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面中央直径2.5cm程を残し、周囲を篋削り。中央部型肌残る。7片接合。
第149図4 PL-50	土師器 杯	床、埋土	口縁部一部欠損	①4.6 ③7.5	②12.2	①土師2 ②良好 ③明赤褐2.5YR5/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面の篋削りは浅く、帯状に型肌を残す。底部内面暗文状沈線で「×」。6片接合。
第149図5 PL-50	須恵器 杯	床	完形	①4.3 ③6.6	②12.8	①須恵1 ②良好 ③灰白2.5YR7/1	口縁部外反。体部やや内湾。底部外面右回転糸切り無調整。器表磨滅。
第149図6 PL-50	須恵器 杯	床	1/4	①- ③-	②(14)	①須恵1 ②良好 ③鈍い黄2.5Y6/3	口縁部小さく開く。外面轆轤目顕著。
第149図7 PL-50	須恵器 杯	床	完形	①3.8 ③6.4	②12	①須恵1 ②やや不良 ③灰白10Y8/1	体部と口縁部直線的に開く。外面間隔の狭い轆轤目顕著。底部外面右回転糸切り無調整?。器表磨滅し、底部の糸切りは殆ど見えない。
第149図8 PL-50	須恵器 杯	埋土	3/4	①4 ③5.9	②12.3	①須恵1 ②良好 ③灰黄2.5Y6/2	口縁部外反。体部内湾。底部外面右回転糸切り無調整。底部内面中央窪む。4片接合。
第150図9	須恵器 甕	埋土、 GI-116	体部下位片	①- ③-	②-	①須恵2 ②良好 ③黄灰2.5Y6/1	器壁やや薄い。底部内面に接合痕残る。体部外面下部を除き縦位内面底部周縁から体部下位縦位撫で。11片接合。

三騎堂 H17号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第150図1 PL-50	土師器 杯	床	完形	①2.9 ③-	②9.4	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部屈曲し、内傾して立ち上がる。底部外面篋削り。丸底。内面器表部分的に剥離。2・3と重なって出土。
第150図2 PL-50	土師器 杯	床	完形	①3.2 ③-	②10.4	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部屈曲して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。丸底。器表磨滅。1・3と重なって出土。
第150図3 PL-50	土師器 杯	床	完形	①3.4 ③-	②10.5	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部内湾。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。篋削り後も型肌明瞭に残る。内面底部周縁指頭状圧痕。1・2と重なって出土。
第150図4 PL-50	土師器 杯	+10、埋土	2/3	①4.2 ③-	②11	①土師2 ②やや不良 ③鈍い橙7.5YR7/4	口縁部屈曲し、やや内傾して立ち上がる。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面篋削り。丸底。6片接合。
第150図5 PL-50	土師器 杯	+11、 貯蔵穴	1/2	①3.3 ③-	②10.4	①土師3 ②良好 ③橙5YR6/6	体部から口縁部内湾。口縁部内側に小さく内湾。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面篋削り。器表やや磨滅。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。5片接合。
第150図6 PL-50	土師器 甕	竈内、埋土	1/4	①- ③-	②(14.6)	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部外反。口縁部横撫で。体部内面撫で。体部外面斜位篋削り。10片接合。
第151図7 PL-50	土師器 甕	床	完形	①33.6 ③4.8	②21.7	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部大きく外反。口縁部横撫で。体部外面縦位篋削り。底部外面植物葉圧痕。

三騎堂 H18号住居出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第150図1	土師器 杯	掘り方	1/4	①- ③-	②(12)	①土師4 ②良好 ③橙7.5YR6/8	口縁部僅かに外湾。焼成温度は高いが器表は磨滅しやすい。磨滅のため調整痕不明。2片接合。
第150図2	土師器 杯	掘り方	1/2	①3 ③(6.6)	②(12.4)	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面下位指頭状圧痕。底部外面篋削り、中央部は型肌残る。3片接合。
第150図3	土師器 杯	埋土 掘り方	1/4	①- ③-	②(11)	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/8	体部、口縁部は直線的に開く。体部内面から口縁部横撫で。体部外面下位指頭状圧痕。底部外面篋削り。器表磨滅。3片接合。
第151図4 PL-50	土師器 杯	掘り方	1/3	①3.1 ③8	②(10.9)	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部外反。口縁部内側に折り曲げる。体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面中央直径2cm程を残し、周囲を篋削り。内面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。4片接合。
第151図5	土師器 杯	掘り方 埋土	1/3	①3.2 ③(7.6)	②(12)	①土師4 ②良好 ③橙7.5YR6/8	底部外面篋削り。焼成温度は高いが、器表の磨滅はしやすい。器表磨滅し調整痕不明。5片接合。
第151図6	須恵器 杯	掘り方	1/4	①3.5 ③(5.8)	②(12.4)	①須恵1 ②良好 ③浅黄2.5YR7/3	体部下半やや内湾。底部外面右回転糸切り無調整。器壁全体に薄い。3片接合。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 H18号住居出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第151図7 PL-50	須恵器 椀	床	口縁部2/3 底部1/2	①6.9 ③8.5	②15.2	①須恵1 ②良好 ③灰5Y6/1	底部外面右回転糸切り無調整後、高台貼り付け。 底部内面使用により磨滅。4片接合。

見切塚 H1号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第151図1	須恵器 椀	+24	底部	①— ③6.4	②—	①須恵2 ②良好 ③灰黄2.5Y7/2	底部内面中央周辺窪む。底部外面右回転糸切り 無調整、後高台貼り付け。
第151図2	土師器 甕	+17~19、 埋土	1/2	①— ③3.7	②—	①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	外面縦篔削り。体部下端内面篔撫で。4片接合。

見切塚 H2号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第151図1	須恵器 杯	+3	底部	①— ③6.2	②—	①須恵2 ②良好 ③灰7.5YR6/1	底部外面右回転糸切り無調整。
第151図2 PL-50	須恵器 杯	+17~20	口縁部1/4欠 損	①4.3 ③6.5	②12.8	①須恵2 ②良好 ③鈍い黄橙10YR6/4	口縁部外反。体部内湾。底部外面右回転糸切り 無調整。胎土に含まれる礫多い。焼き締まりは 比較的不い。4片接合。
第151図3 PL-50	須恵器 椀	+20	口縁部、高台 下部欠損	①— ③—	②—	①須恵1 ②良好 ③灰白10YR8/2	底部中央窪む。轆轤成形。高台は高い。高台貼 り付け時に高台内すべて回転横撫で。体部外面 一カ所不明墨書。
第151図4	須恵器 椀	床~+13 埋土	1/4	①5.9 ③(6.2)	②(15.3)	①須恵1 ②良好 ③灰7.5Y5/1	口縁部外反。体部内湾。高台貼り付け。外面体 部中位のみ調整が粗い。8片接合。
第151図5 PL-50	土師器 小型甕	+5	1/3	①— ③—	②(9.2)	①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR6/4	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面横位篔削 り。体部内面撫で。2片接合。
第151図6 PL-50	土師器 甕	+14、+29	1/2	①— ③—	②13.1	①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐5YR5/4	「コ」の字状口縁。肩部外面横位篔削り。肩部 内面篔撫で。頸部内面指頭状圧痕。9片接合。

見切塚 H3号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第151図1	土師器 杯	埋土	1/5	①— ③—	②(13)	①土師2 ②良好 ③橙2.5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。

見切塚 H4号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第152図1 PL-51	土師器 杯	+3	完形	①3.5 ③10	②13.1	①土師3 ②良好 ③灰黄褐10YR6/2	口縁部外反。体部内面から口縁部横撫で。体部 外面型肌微かに残る。底部外面篔削り。篔削り は浅く、削り方向不明瞭。底部内外面に不明墨 書。
第152図2 PL-51	土師器 杯	掘り方	口縁部一部、 底部中央欠損	①3.5 ③10.1	②13.2	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部横撫で。 体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面篔削り。 11片接合。
第152図3	土師器 杯	掘り方	1/4	①3.7 ③(9.6)	②(14)	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部僅かに外反。体部緩く内湾。体部内面か ら口縁部横撫で。体部外面型肌。底部外面篔削 り。
第152図4	土師器 杯	埋土、 掘り方	1/5	①3.6 ③(10)	②(13.6)	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	体部内面から口縁部横撫で。平底。体部外面下 位篔削り。底部外面篔削り。2片接合。
第152図5 PL-51	須恵器 椀(硯)	+17	底部完	①(1.4) ③6.9	②—	①須恵1 ②良好 ③浅黄2.5YR7/4	底部外面右回転糸切り無調整。高台貼り付け。 糸切り痕残す。高台内から高台外面墨が明瞭に 残る。高台内使用により磨滅。体部下位は打ち 割て形を整える。転用硯。
第152図6 PL-51	土師器 甕	竈内	完形	①13.4 ③8	②10.6	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	「コ」の字状口縁。口縁部横撫で。外面篔削り、 上から横、斜め。台部貼り付け。頸部から体部 外面煤付着。体部下位から脚部には煤付着しな い。7片接合。
第152図7 PL-51	土師器 甕	竈内	下半	①— ③4.5	②—	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	内面中位接合痕残り、接合部に横位撫で。外面 中位煤多量に付着。下位はやや少ない。58片接 合。

見切塚 H5号住居出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第152図1	須恵器 椀	+4	底部	①— ②— ③—	①須恵5 ②良好 ③橙7.5YR6/8	底部外面右回転糸切り無調整後、高台貼り付け。 内面寛磨き。内面器表暗灰7.5YR6/8。胎土の 質感

見切塚 H6号住居出土遺物 遺物レベル不明

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第152図1 PL-52	土師器 杯		口縁部と底部 一部欠損	①3.4 ②12.2 ③9.3	①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR7/4	口縁部小さく内湾。体部緩く内湾。体部内面 から口縁部横撫で。体部外面指頭状圧痕。底部 外面寛削り。底部外面墨書。10片接合。
第152図2 PL-52	土師器 杯		完形	①3.3 ②11.7 ③9.1	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部横撫で。 体部外面型肌僅かに残る。底部内面凹凸激しい。 底部内面、焼成後の線状寛描き4条。底部外面 寛削りは薄く、部分的に型肌残る。9片接合。
第152図3 PL-51	土師器 杯		口縁部一部欠 損	①3.3 ②11.8 ③7.6	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌。底 部外面寛削り。内面横撫で一カ所で撫で上げる。
第152図4 PL-51	土師器 杯		完形	①3.4 ②11.8 ③8.4	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指 頭状圧痕。底部外面寛削り。口縁部内面横撫で 一カ所で撫で上げる。内面底部周縁から体部下 位指頭状圧痕。
第152図5 PL-51	土師器 杯		1/3欠損	①3.3 ②12.4 ③10	①土師1 ②良好 ③鈍い橙5YR7/4	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指 頭状圧痕。底部外面寛削り。体部内面から口縁 部横撫で。14片接合。
第152図6 PL-51	土師器 杯		底部一部欠損	①3.4 ②11.8 ③8.4	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	体部内面から口縁部横撫で。体部内面から口縁 部横撫で。体部外面型肌。底部外面寛削り。内 面底部周縁から体部下位指頭状圧痕。19片接合。
第153図7 PL-51	土師器 杯		完形	①3.6 ②11.3 ③—	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部横撫で。 体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面寛削り。 底部の寛削りは浅く、範囲も狭い。底部周縁を 指頭状圧痕が巡る。内面凍て状剥離多い。5片 接合。
第153図8 PL-51	土師器 杯		完形	①3.7 ②11.7 ③9.6	①土師1 ②良好 ③鈍い赤褐	体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指 頭状圧痕。底部外面寛削り。内面体部下端は屈 曲する。体部は直線的に立ち上がる。13片接合。
第153図9	須恵器 蓋		1/4	①— ②(16)	①須恵1 ②良好 ③灰N6/0	口縁部内側に折り返す。良く焼き締まる。3 片接合。
第153図10 PL-51	須恵器 椀		口縁部1/2欠 損	①4.9 ②14.6 ③6	①須恵2 ②良好 ③灰白2.5YR8/2	口縁部外反。底部外面右回転糸切り後、高台貼 り付け。高台内中央糸切り痕残る。口縁部内面 不明墨書一カ所。14片接合。
第153図11	土師器 甕		1/4	①— ②(19)	①土師1 ②良好 ③鈍い橙10YR7/3	「コ」の字状口縁。器壁厚い。口縁部横撫で。体 部外面寛削り。頸部内面指頭状圧痕。12片接合。
第153図12 PL-52	土師器 甕		底部欠損	①— ②18.9 ③—	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	「コ」の字状口縁。口縁部横撫で。口縁部中位 外面指頭状圧痕。外面煤付着。底部内面黒色物 質付着。体部中位内面接合痕残り、接合部横位 撫で47片接合。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 3区1号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	石材	成形・調整の特徴など
第153図1	石製品 蔵骨器 蓋?		1/2	長一 幅一 厚一	粗粒輝石安山岩	周囲を欠損。自然礫の片面を加工して窪ませる。加工は先端の尖った鑿を使用して立ち上がりに沿って筋状に動かす。窪みの平面形は隅丸方形か隅丸長方形であろう。
第153図2	石製品 蔵骨器 身?		小片	長一 幅一 厚一	粗粒輝石安山岩	小片のため全形は不明。火葬墓蔵骨器身の立ち上がり部分であろう。骨を収めるほぞ穴底部の一部が残り、深さは15cm程であることが分かる。
第153図3	石製品 蔵骨器 蓋?		1/2	長一 幅一 厚17.1	粗粒輝石安山岩	平面楕円形を呈すると思われる垂円礫の一面を1・2cm窪ませる。火葬墓蔵骨器の蓋か。
第154図4	石製品 蔵骨器 蓋?		完形	長41.6 幅28.4 厚18.0	粗粒輝石安山岩	厚さ18cmの扁平な礫の一面を長軸21cm、短軸16cm、深さ1.8cmの隅丸長方形に挟る。火葬墓蔵骨器の蓋であろう。

三騎堂 5区2号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第154図1	須恵器 蓋		小片	①一 ②(12.8) ③一	①須恵1 ②良好 ③灰白5Y7/2	口縁部直線的。天井部と口縁部の境凸帯貼り付け痕あり。
第154図2	須恵器 短頸壺	埋土	1/6	①一 ②(11) ③一	①須恵1 ②良好 ③灰5Y1/6	口縁部僅かに開く。外面肩部2条の沈線。体部外面篋削り後撫で。4片接合。

三騎堂 5区4号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第154図1 PL-52	須恵器 蓋	埋土	1/2	①3.7 ②17.7 ③一	①須恵1 ②良好 ③灰5YR6/1	宝珠状つまみ。口縁部内面のかえりは小さい。口縁部は水平に開く。5片接合。
第154図2	須恵器 鉢?	埋土	1/4	①一 ②一 ③(9)	①須恵5 ②良好 ③灰5YR6/1	内側に屈曲する高台を貼り付ける。高台内には高台貼り付け以前の回転篋削り痕僅かに残る。胎土鈍い橙色(7.5YR6/4)。胎土、焼成から3と同一個体であろう。4片接合。
第154図3	須恵器 鉢?		小片	①一 ②(16) ③一	①須恵5 ②良好 ③器表灰5Y5/1	口縁部小さく外傾。胎土鈍い橙色(7.5YR6/4)。胎土、焼成から2と同一個体であろう。
第154図4	須恵器 短頸壺	埋土	口縁部片	①一 ②(16.8) ③一	①須恵1 ②良好 ③灰7.5YR6/1	口縁部外反。肩部2条の浅い沈線2単位施す。5と同一個体と考えられる。4片接合。
第154図5	須恵器 短頸壺	埋土	底部片	①一 ②一 ③(13.4)	①須恵1 ②良好 ③灰7.5YR6/1	高台貼り付け。胎土、焼成の特徴から4と同一個体と考えられる。2片接合。
第154図6 PL-52	石製品 蔵骨器		完形	長径35.5短径31.5 最大厚16.7	粗粒輝石安山岩	楕円形、扁平の礫に直径11.5cm、深さ8.7cmの円孔を穿つ。円孔周縁は平坦に加工する。重さ17.6kg。
第155図7	石製品 蔵骨器 身			長45 幅41 厚25 重さ41.7kg	粗粒輝石安山岩	自然礫の面に長径17cm、短径14cm、深さ12cmの蔵骨孔を穿つ。蔵骨孔周辺は幅5・6cmの蓋受けの平坦面を作る。

三騎堂 5区15号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第155図1 PL-52	須恵器 蓋		つまみ欠損 口縁部1/4欠損	①一 ②16.4	①須恵1 ②やや不良 ③灰白5YR7/1	口縁部中央浅い沈線。天井部と口縁部境に高台状の突帯貼り付け。焼き締まりはない。天井部外面回転篋削り後、回転撫で。貼り付けつまみ剥離。21片接合。

三騎堂 6区1号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第155図1	石製品 骨蔵器	12	完形	長径30.5 短径22 最大厚11	粗粒輝石安山岩	河床礫の一面に直径8cm、深さ7cmの穴を穿つ。重さ6.45kg。

見切塚 1区3号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	石材	成形・調整の特徴など
第155図1	石製品 骨蔵器身		完形	重さ129kg 長63 幅52 厚44	粗粒輝石安山岩	やや扁平で楕円形を呈する礫の1面に窪みを設ける。窪みの平面径は楕円形。下端部は先端の尖った鑿を下端に沿って動かした痕が残る。蔵骨穴の周囲数cmは平坦に加工する。他は自然面である。今回の調査中最大の蔵骨器である。
第156図2 PL-53	石製品 不明		完形	重さ2.3kg 長径16.3 短径 14.2 厚さ9.0	粗粒輝石安山岩 円礫	円礫の一方を平坦に加工し、他方を窪ませる。形状や規模から蔵骨器とは考えにくい。

見切塚 1区4号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値(cm)	石材	成形・調整の特徴など
第156図1 PL-53	石製品 蔵骨器		完形	重さ11.6kg 長さ30 幅21.8 厚さ20.5	粗粒輝石安山岩 亜角礫	卵形を呈した亜角礫の一面中央に、12×11cm、深さ9cmの穴を穿つ。穴の周縁は平坦に仕上げる。
第156図2 PL-53	石製品 蔵骨器		完形	重さ20.4kg 長さ43 幅27.5 厚さ21	粗粒輝石安山岩 亜角礫	ラグビーボール型を呈した亜角礫の一面に蔵骨部を穿つ。蔵骨穴は長径17cm、短径13cm、深さ12cmである。蔵骨穴周縁には平坦面を作る。
第156図3 PL-53	石製品 蔵骨器		完形	重さ8kg 長さ29 幅20.5 厚さ14.5	粗粒輝石安山岩 亜角礫	平面形は楕円形を呈し、中央部に13×10.5cm、深さ6cmにわたって抉り込む。穴の周囲にはやや狭い平坦面を作る。

見切塚 5区3・5号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第156図1 PL-53	須恵器 薬壺蓋	埋土	1/3	①— ②(15.1) ③—	①須恵5 ②不良 ③灰黄2.5YR7/2	焼き締まりなく軟質。天井部外面に張り出しは強い。外面の突帯は低いがシャープな作り。5区3号出土小片5片と5号出土片が接合。

見切塚 5区8号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第157図1 PL-53	須恵器 杯蓋		1/2	①2.5 ②(14.3) ③—	①須恵2 ②不良 ③灰白7.5YR7/1	つまみ貼り付け。天井部外面回転斲削り。骨壺の蓋として使用。3片接合。
第157図2 PL-53	須恵器 壺		ほぼ完形	①— ②— ③—	①須恵1 ②良好 ③灰N5/0	底部から体部外面下位叩き目。肩部に2条浅い沈線。頸部1/2の割れ口は新しいが、残り半分は古く、骨壺転用時に打ち欠いたと考えられる。調査時には焼骨が入っていた。

見切塚 5区9号火葬墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第157図1	須恵器 壺		小片	①— ②— ③—	①須恵1 ②普通 ③灰N6/0	肩部とその上下に凹線を巡らし、凹線下と凹線間に波状文を施す。上部凹線上には櫛歯文を施す。2と同一個体の可能性高い。
第157図2 PL-54	須恵器 壺		1/2	①— ②— ③(14.4)	①須恵1 ②普通 ③灰N6/0	肩部とその上下に凹線を巡らし、凹線下と凹線間に波状文を施す。上部凹線上には櫛歯文を施す。高台貼り付け。体部下端外面格子状叩き目。5区10号火葬墓出土片と接合。1と同一個体の可能性高い。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 4区1号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)			成形・調整の特徴など
第157図1 PL-54	木製品 櫛		一部欠損	長さ8.3	幅4.1	最大厚0.7	背はやや丸味を有するが、対称ではない。歯は細かい。漆や装飾は認められない。
第157図2 PL-54	木製品 櫛		一部欠損	長さ8.7	幅4.2	最大厚0.6	背はやや丸味を持つ。歯は粗い。漆や装飾は認められない。表面に入れ物らしき物が付着する。
第157図3 PL-54	銅製品 柄鏡		完形	鏡面径6.2	柄長4.2		鏡面地文部分厚さ0.14、縁厚さ0.17。小型柄鏡で、裏面は桔梗文。銘は「藤原作」であるが、「藤」上方に地文が認められない部分があり、「天下一」などの銘を型の段階で削っている可能性が高い。鏡面側に有機物付着、入れ物か。裏面には布付着。
第157図4 PL-54	竹 不詳		一部	現存長10.9	現存幅1.2		割竹の一部。節が現存部の端部に認められる。両小口は自然劣化のため荒れた状態である。側面は割った状態が残る。
第157図5 PL-54	竹 不詳		一部	現存長11.8	現存幅1.5		割竹の一部。両小口は自然劣化のため荒れた状態である。側面は割った状態が残る。
第157図6 PL-54	竹 不詳		一部	現存長13.2	現存幅1.4		割竹の一部。節が現存部の端部に認められる。両小口は自然劣化のため荒れた状態である。側面は割った状態が残る。
第157図7 PL-54	竹 不詳		一部	現存長17.4	現存幅1.1		割竹の一部。節が現存部に認められる。両小口は自然劣化のため荒れた状態である。側面は割った状態が残る。
第157図8 PL-54	竹 不詳		一部	現存長17	現存幅1		割竹の一部。節が現存部に認められる。両小口は自然劣化のため荒れた状態である。側面は割った状態が残る。
第158図9 PL-54	煙管		完形	全長24.6	火皿径1.6		火皿はやや大きく、頸部との境に低い段が付く。
図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)			初鑄年代、特徴など
第158図10 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.81、25.69 ③1.12~1.28	②19.72、20.23 ④3.1		背文
第158図11 PL-54	銅銭 寛永通寶			①26.12、26.12 ③1.30~1.46	②20.12、20.13 ④3.4		背文
第158図12 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.39、25.52 ③1.20~1.33	②19.55、19.81 ④3.5		背文
第158図13 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.46、25.92 ③1.30~1.45	②19.59、19.73 ④3.7		背文
第158図14 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.36、25.94 ③1.37~1.48	②19.71、19.99 ④3.5		
第158図15 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.21、25.22 ③1.36~1.57	②19.26、19.53 ④3.9		
第158図16 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.78、25.02 ③1.13~1.21	②19.37、19.85 ④3		
第158図17 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.54、24.63 ③1.21~1.44	②19.4、19.52 ④3.4		
第158図18 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.1、24.14 ③1.22~1.30	②19.31、19.47 ④3		
第158図19 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.41、25.59 ③1.26~1.33	②20、20.04 ④4		背文
第158図20 PL-54	銅銭 寛永通寶		完形	①25.14、25.20 ③1.30~1.41	②19.90、19.99 ④		1文銭。出土時には表に擦りをかけていない不明繊維が付着していた。

三騎堂 6区1号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)			成形・調整の特徴など
第158図1 PL-54	煙管		完形	全長14	最大径1	火皿径1.2	羅字は非常に短く露出部分で2.3cm。雁首側面 図示部分に接合痕あり。
図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)			初鑄年代、特徴など
第158図2 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.11、25.38 ③1.21~1.31	②19.79、19.93 ④3.0		
第158図3 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.57、24.79 ③0.89~0.98	②19.94、20.05 ④1.7		
第158図4 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.2、23.34 ③0.95~0.99	②19.68、18.75 ④2.4		
第158図5 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.04、23.09 ③1.09~1.45	②18.8、18.81 ④3		
第158図6 PL-54	銅銭 寛永通寶			①22.93、22.99 ③0.88~0.94	②18.12、18.93 ④2.2		
第158図7 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.19、23.3 ③1.14~1.28	②18.44、18.99 ④3.2		
第158図8 PL-54	銅銭 寛永通寶			①22.94、22.99 ③0.96~1.07	②18.33、18.76 ④2.6		
第158図9 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.3、23.3 ③1.17~1.23	②18.65、18.76 ④3.1		
第159図10 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.23、24.43 ③0.92~1.05	②19.31、19.36 ④2.6		
第159図11 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.11、23.12 ③0.85~0.92	②18.74、18.75 ④2.3		
第159図12 PL-54	銅銭 寛永通寶			①21.71、21.78 ③1.08~1.18	②16.8、17.19 ④2.3		
第159図13 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.22、25.25 ③1.16~1.23	②19.52、20.02 ④3.7	背文	
第159図14 PL-54	銅銭 寛永通寶			①25.24、25.35 ③1.18~1.37	②20、20.16 ④4	背文	
第159図15 PL-54	銅銭 寛永通寶			①24.69、25.01 ③1.09~1.28	②19.43、19.78 ④2.8		
第159図16 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.05、23.14 ③1.05~1.17	②18.34、18.34 ④2.4		
第159図17 PL-54	銅銭 寛永通寶			①23.09、23.16 ③0.97~1.05	②18.71、18.38 ④2.6		
第159図18 PL-54	銅銭 寛永通寶			①21.81、21.92 ③0.97~1.04	②17.63、18.26 ④1.9		

三騎堂 6区2号土坑墓出土遺物(1)

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)			初鑄年代、特徴など
第159図1	銅銭 寛永通寶		完形	①25.54、25.59 ③1.12~1.30	②19.42、19.46 ④	「文」銭。寛文年間。	
第159図2	銅銭 寛永通寶		完形	①25.31、25.46 ③1.07~1.31	②19.42、19.75 ④	「文」銭。寛文年間。	
第159図3	銅銭 寛永通寶		完形	①25.24、25.31 ③0.86~0.99	②18.90、19.01 ④	「文」銭。寛文年間。	
第159図4	銅銭 寛永通寶		完形	①25.27、25.30 ③1.22~1.27	②18.90、18.96 ④	「文」銭。寛文年間。	
第159図5	銅銭 寛永通寶		完形	①25.40、25.63 ③1.25~1.34	②18.74、18.79 ④	「文」銭。寛文年間。	
第159図6	銅銭 寛永通寶		完形	①25.38、25.55 ③1.09~1.19	②19.07、19.94 ④	「文」銭。寛文年間。	
第159図7	銅銭 寛永通寶		完形	①23.00、23.04 ③1.06~1.09	②18.32、18.34 ④		
第159図8	銅銭 寛永通寶		完形	①22.98、23.13 ③0.95~0.99	②18.21、18.57 ④		

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 6区2号土坑墓出土遺物(2)

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第159図9	銅銭 寛永通寶		完形	①22.47、22.49 ②18.30、18.32 ③0.99~1.05 ④	
第159図10	銅銭 寛永通寶		完形	①24.13、24.15 ②18.89、18.92 ③④1.30~1.37 ④	
第159図11	銅銭 寛永通寶		完形	①24.52、24.57 ②19.12、19.18 ③④1.39~1.43 ④	

三騎堂 6区3号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第159図1 PL-54	土器 皿		完形	①2.3~2.6 ②10 ③5	①土器2 ②良好 ③橙7.5YR7/6	口縁部歪む。底部外面左回転糸切り無調整。底部外面の圧痕や底部内面の撫ではない。
第159図2 PL-54	土器 皿		一部欠損	①2.5 ②9.8 ③6.2	①土器2 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	口縁部歪む。底部外面左回転糸切り無調整。底部外面の圧痕や底部内面の撫ではない。2片接合。

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第159図3 PL-55	銅銭 景德元寶			①24.48 ②18.67 ③1.24~1.28 ④2.1	北宋。1004年初鑄。
第159図4 PL-55	銅銭 祥符通寶			①24.08、24.21 ②17.74、18.69 ③0.78~0.95 ④2.1	北宋。1009年初鑄。
第160図5 PL-55	銅銭 元豊通寶			①24.48、24.53 ②19.82、19.45 ③1.07~1.31 ④3.1	北宋。1078年初鑄。
第160図6 PL-55	銅銭 熙寧元寶			①24.6、24.69 ②18.81、19.03 ③1.54~1.65 ④4.1	北宋。1068年初鑄。
第160図7 PL-55	銅銭 政和通寶			①24.41、24.54 ②19.72、20.04 ③1.40~1.52 ④3.7	北宋。1111年初鑄。
第160図8 PL-55	銅銭 皇宋通寶			①24.44、24.63 ②19.23、20.21 ③0.91~1.04 ④2.7	北宋。1038年初鑄。
第160図9 PL-55	銅銭 開元通寶			①24.41、24.59 ②20.28、20.66 ③1.03~1.19 ④2.6	南唐。960年初鑄。
第160図10 PL-55	銅銭 政和通寶			①25.03、25.06 ②20.55、21.18 ③1.31~1.67 ④3.3	北宋。1111年初鑄。
第160図11 PL-55	銅銭 聖宋通寶			①24.78、24.78 ②18.77、19.13 ③1.29~1.33 ④3.5	北宋。1101年初鑄。
第160図12 PL-55	銅銭 元豊通寶			①24.19、24.29 ②18.93、19.15 ③1.48~1.53 ④3.4	北宋。1078年初鑄。
第160図13 PL-55	銅銭 開元通寶			①24.17、24.56 ②20.21、20.48 ③1.29~1.73 ④3	南唐。960年初鑄。
第160図14 PL-55	銅銭 皇宋通寶			①24.45、24.66 ②19.07、19.88 ③1.14~1.33 ④2.9	北宋。1038年初鑄。
第160図15 PL-55	銅銭 皇宋通寶			①25.06、25.28 ②18.74、19.47 ③1.29~1.45 ④4.3	北宋。1038年初鑄。

見切塚 7区1号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第160図1 PL-55	銅銭 景□元寶			①23.57、23.81 ②18.21、18.52 ③1.04~1.13 ④2.4	北宋。
第160図2 PL-55	銅銭 聖宋元寶			①23.63、23.84 ②19.06、19.08 ③1.41~1.52 ④4.1	北宋。1101年初鑄。
第160図3 PL-55	銅銭 祥符元寶			①23.52、23.72 ②18.27、18.84 ③0.83~1.04 ④1.6	北宋。1009年初鑄。
第160図4 PL-55	銅銭 元祐通寶			①24.67、24.91 ②18.34、18.41 ③1.09~1.23 ④3	北宋。1086年初鑄。
第160図5 PL-55	銅銭 祥符元寶			①24.85、24.94 ②18.94、18.97 ③1.15~1.58 ④2.8	北宋。1009年初鑄。

見切塚 7区2号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第160図1 PL-55	銅銭 咸平元豊			①24.92, 24.94 ②17.69, 18.3 ③1.18~1.30 ④2.9	北宋。998年初鑄。
第160図2 PL-55	銅銭 天禧通寶			①24.56, 24.7 ②18.62, 18.88 ③1.31~1.64 ④3	北宋。1017年初鑄。
第160図3 PL-55	銅銭 嘉祐元寶			①23.33, 23.46 ②17.67, 17.84 ③1.29~1.38 ④2.2	北宋。1056年初鑄。

見切塚 7区3号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第160図1 PL-55	銅銭 永樂通寶			①24.88, 24.93 ②21.14, 21.15 ③1.23~1.44 ④3.4	明。1408年初鑄。
第160図2 PL-55	銅銭 祥符通寶			①24.06, 24.77 ②19.54, 19.82 ③1.37~1.46 ④3.3	北宋。1009年初鑄。
第160図3 PL-55	銅銭 熙寧元寶			①23.64, 23.92 ②19.19, 19.27 ③1.25~1.61 ④2.8	北宋。1068年初鑄。
第160図4 PL-55	銅銭 永樂通寶			①25.38, 25.66 ②19.86, 20.85 ③0.94~1.33 ④3	明。1408年初鑄。
第160図5 PL-55	銅銭 熙寧元寶			①24.44, 24.64 ②18.49, 18.8 ③1.29~1.42 ④3.1	北宋。1009年初鑄。
第161図6 PL-55	銅銭 聖宋元寶			①24.25, 24.5 ②19.16, 19.99 ③1.26~1.40 ④3.3	北宋。1101年初鑄。

見切塚 7区7号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第161図1 PL-55	銅銭 洪武通寶			①23.76, 24.09 ②19.74, 19.74 ③1.42~1.59 ④3.4	明。1368年初鑄。
第161図2 PL-55	銅銭 政和通寶			①24.69, 24.27 ②20.25, 20.85 ③1.31~1.41 ④3.3	北宋。1111年初鑄。
第161図3 PL-55	銅銭 皇宋通寶			①24.46, 24.82 ②19.95, 20.17 ③1.11~1.23 ④2.9	北宋。1038年初鑄。
第161図4 PL-56	銅銭 開元通寶	埋土		①23.33, 23.69 ②19.39, 19.85 ③1.27~1.41 ④3	南唐。960年初鑄。
第161図5 PL-56	銅銭 祥符元寶	埋土		①24.27, 24.41 ②18.56, 18.57 ③1.29~1.50 ④3.1	北宋。1009年初鑄。
第161図6 PL-56	銅銭 元祐通寶			①24.03, 24.38 ②19.01, 19.05 ③1.31~1.35 ④3.4	北宋。1086年初鑄。

見切塚 7区8号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第161図1 PL-56	銅銭 元豊通寶			①24.46, 24.74 ②19.81, 20.31 ③1.18~1.24 ④3.2	北宋。1078年初鑄。
第161図2 PL-56	銅銭 永樂通寶			①25.49, 25.57 ②20.21, 20.51 ③0.75~0.91 ④2.2	明。1408年初鑄。
第161図3 PL-56	銅銭 開元通寶			①23.64, 23.75 ②19.56, 19.88 ③1.17~1.18 ④2.8	南唐。960年初鑄。

見切塚 7区9号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第161図1 PL-56	銅銭 皇宋通寶			①23.9, 24.12 ②19.23, 19.4 ③1.25~1.37 ④3	北宋。1038年初鑄。
第161図2 PL-56	銅銭 元豊通寶			①24.21, 24.28 ②18.07, 18.62 ③1.18~1.34 ④3.1	北宋。1078年初鑄。
第161図3 PL-56	銅銭 洪武通寶			①23.27, 23.64 ②19.42, 19.44 ③1.74~1.86 ④3.9	明。1368年初鑄。
第161図4 PL-56	銅銭 天聖元豊			①24.85, 24.9 ②18.89, 19.84 ③1.15~1.28 ④3	北宋。1023年初鑄。
第161図5 PL-56	銅銭 元豊通寶			①24.18, 24.22 ②19.31, 19.42 ③1.23~1.30 ④2.8	北宋。1078年初鑄。

第2章 確認された遺構と遺物

見切塚 7区10号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第161図1 PL-56	銅銭 至道元寶			①23.31、23.51 ②17.97、18 ③1.15~1.26 ④2.7	北宋。995年初鑄。

見切塚 7区11号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第161図1 PL-56	銅銭 洪武通寶			①23.72、24.02 ②21.17、21.17 ③1.37~1.46 ④2.9	明。1368年初鑄。
第161図2 PL-56	銅銭 開元通寶			①23.97、24.29 ②20.09、20.53 ③0.95~1.13 ④2.4	南唐。960年初鑄。
第161図3 PL-56	銅銭 治平通寶			①24.35、24.46 ②19.01、19.05 ③1.45~1.62 ④3.8	北宋。1064年初鑄。
第161図4 PL-56	銅銭 皇宋通寶			①24.22、24.34 ②19.59、19.77 ③1.13~1.23 ④2.8	北宋。1038年初鑄。
第161図5 PL-56	銅銭 政和通寶			①24.79、24.86 ②20.53、21.02 ③1.13~1.18 ④3.4	北宋。1111年初鑄。
第161図6 PL-56	銅銭 嘉祐通寶			①23.65、23.75 ②19.41、19.91 ③1.31~1.50 ④3.3	北宋。1056年初鑄。

見切塚 7区12号土坑墓出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)	初鑄年代、特徴など
第161図1 PL-56	銅銭 政□□寶			①24.74、24.85 ②19.9、20.16 ③1.61~1.91 ④3.4	北宋。1111年初鑄。
第161図2 PL-56	銅銭 開元通寶			①23.68、23.78 ②18.68、19.35 ③1.66~2.25 ④3.2	南唐。960年初鑄。
第162図3 PL-56	銅銭 元祐通寶			①23.95、24.02 ②19.23、19.75 ③1.32~1.51 ④3.1	北宋。1086年初鑄。
第162図4 PL-56	銅銭 景德元寶			①24.16、24.57 ②19.79、20.55 ③1.32~1.54 ④3.6	北宋。1004年初鑄。

三騎堂 6区1号炭窯出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	計測値 (cm)	成形・調整の特徴など
第162図1 PL-56	石製品 不明	埋土	1/2?	厚さ17 挟り5	隅丸長方形を呈するであろう。挟り深さは5cm前後で平面形も長方形と考えられる。全体には扁平の石を使用しているが、表面は粗い。
第162図2 PL-57	石製品 不明	焚口埋土	完形	最大厚11.4	直方体位の一面を弧状に挟る。全面にはつり痕。焚口から出土しており、焚口を塞ぐための石か焚口を構成する石であろう。
第162図3 PL-56	石製品 下白	側壁	1/4	径(40)	粉挽白下白。目は不明瞭であるが、やや不規則な条線が認められる。また、一部に幅広い線状の窪みがある。芯穴は一部残る。
第162図4 PL-56	石製品 下白	側壁	1/4	径(36)	粉挽白の下白。目は深く、幅も広い。割れ口の一方を側壁面とし、面は熱により白く変色する。中心の芯穴が一部残る。
第162図5 PL-56	石製品 不明	側壁	?	厚さ10.2	上下面に、はつり痕あり。上面周縁は僅かに高く平滑である。平坦な側面も平滑である。平坦な側面を壁面としており、熱により白く変色する。
第163図6 PL-57	石製品 上白	側壁	完形	高さ16.2 ふくみ1.5 長径42.2 短径35.3	挽き手穴をつくり出す。上面を窯内に向けていたため、白っぽく変色している。

三騎堂 4区1号溝出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第163図1	瀬戸美濃 陶器 碗	埋土	1/8	①— ②(11.6) ③—	①— ②良好 ③灰白2.5Y8/2	高台脇以下を除き鉛釉。口縁部に薬灰釉。いわゆる尾呂茶碗。
第163図2	在地土器 焙烙	埋土	小片	①5.7 ②— ③—	①土師3に近い ②良好 ③明黄褐10YR6/6	内面から外面体部横撫で。体部外面型肌状圧痕。底部外面砂底か。器表は黒灰色。

三騎堂 4区谷地砂層出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第163図1	瀬戸美濃 陶器 碗	埋土	底部完	①— ③5.1	②—	①— ②良好 ③淡黄5Y8/3	いわゆる尾呂茶碗。高台脇以下鉄化粧。胎土。底部内面薬灰釉掛かる。
第163図2	瀬戸美濃 陶器不詳	埋土	底部完	①— ③4.7	②—	①— ②良好 ③灰白5Y8/1	高台脇以下無釉。内面轆轤目顕著、釉は薄い。外面胎土。外面一カ所に薬灰釉流れる。瓶か。
第163図3	肥前磁器 皿	埋土	1/5	①— ③—	②(13.5)	①— ②良好 ③明緑灰7.5GY8/1	波佐見系青磁皿。恐らく蛇の目釉剥ぎであろう。
第163図4 PL-57	在地土器 壺	埋土	口縁部から体 部1/4	①— ③—	②(8.7)	①緻密 ②良好 ③外面オリープ黒 5Y2/2	断面と内面灰白色(5Y7/1)。口縁部はシャープ。肩は張り、体部は直線的だが、中央部で小さく窪む。外面肩部以下煤付着。小泉焼であろう。
第163図5	肥前磁器 徳利	埋土	体部上半1/4	①— ③—	②—	①— ②良好 ③灰白5Y7/1	体部は殆ど丸味を持たない。内面無釉。外面一重網目文。2片接合。
第163図6 PL-57	製作地不 詳磁器 徳利	埋土	体部1/2	①— ③7.1	②—	①— ②不良 ③灰白N8/0	内面無釉。焼成不良のため釉は白濁する。外簡略化した文様を染め付ける。焼成不良のため断定できないが、波佐見諸窯に似る。6片接合。
第163図7	在地土器 焙烙	埋土	1/5	①5.2 ③(31)	②(33.8)	①土師1に似る ②良好 ③黄灰2.5Y 6/1 器表下は灰白	平底。耳は一カ所残存。

三騎堂 6区2号粘土探掘坑出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第163図1	瀬戸美濃 陶器 碗	底部付近	1/2	①— ③5	②—	①— ②良好 ③灰黄2.5Y7/2	高台外面から内面無釉。胎土。高台径やや小さい。底部内面僅かに薬灰?釉付着し、白濁した小斑認められる。

見切塚 3区1号溜井出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第164図1	焼締陶器 甕	埋土	体部片	①— ③—	②—	①— ②良好 ③灰白2.5YR7/1	外面自然釉。外面叩き目。内面指頭状圧痕。
第164図2	焼締陶器 甕	導水路	体部片	厚1.0~1.3	②—	①— ②良好 ③赤灰2.5YR5/1	外面器表鈍い赤褐2.5YR4/4。知多窯。
第164図3	軟質陶器 火鉢	埋土	口縁部片	①— ③—	②—	①軟質 ②良好 ③浅黄2.5YR7/3	口縁部「T」字状をなし、内面側は更に下方に折り曲げる。外面には突帯巡らし、突帯間には円形貼付文と菊状スタンプ文を施す。
第164図4	焼締陶器 壺	埋土	体部下位片	①— ③(14)	②—	①— ②良好 ③灰N6/0	渥美窯の可能性高い。
第164図5	平瓦	導水路	小口小片	①— ③—	②—	①白色鉱物含む ②良好 ③灰7.5Y6/1	胎土はきめ細かい。表面は丁寧な撫でられ、布痕認められない。裏面は砂付着。焼き締まりはなく、比較的柔らかい。中世若しくは近世。
第164図6	平瓦	埋土	破片	長— 厚2.8	短—	①須恵5 ②良好 ③橙5YR6/6	表面布痕。裏面格子叩き。古代瓦の混入。
第164図7	土製品 円盤状	埋土	1/4	①0.8 ③7.6	②—	①土器2 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	土器皿の底部を円盤状にしたものと考えられる。下部は左回転糸切り無調整。
第164図8 PL-57	石製品 砥石	導水路	小口欠損	長8.7 短4.3 厚3.1 重154.3g	②—	砥沢石	幅の狭い2面の両端を極端に使用。両端部欠損。幅の広い一面は調整痕残る。
第164図9	石製品 空風輪	導水路	1/4	残存長28 最大径 22.5 重さ4.55kg	②—	馬見岡凝灰岩	空風輪の約1/4片。石材が軟質なため表面は風化している。節理に沿って破損する。
第164図10 PL-57	石製品 空風輪	導水路	完形	高さ22.8 最大径14.5 重さ4.18kg	②—	粗粒輝石安山岩	空風輪の一方を幅4cm前後にわたって平坦にしている。平坦部は他に比して平滑であり、制作時の加工か否かは不明。

見切塚 3区2号溜井出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径	②口径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第165図1	焼締陶器 壺か甕	導水路	頸部片	①— ③—	②—	①— ②良好 ③灰7.5Y6/1	外面自然釉。内面指頭状圧痕。
第165図2	焼締陶器 甕	導水路	小片	①— ③—	②—	①— ②良好 ③黄褐2.5Y5/3	体部下位片。知多窯。

第2章 確認された遺構と遺物

見切塚 3区1号竪穴出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第165図1	瀬戸・美濃陶器 入れ子	埋土	口縁部一部欠損	①2.2 ②6.8 ③3.2	①緻密 ②良好 ③灰N6/0	口縁部内面と底部内面周縁に灰釉が斑状に掛かる。口縁部8カ所を内側に曲げ、輪花とする。底部外面右回転糸切り無調整。古瀬戸。

見切塚 1区2号溝出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第165図1 PL-57	土器 皿	埋土	1/4	①1.8 ②6.8 ③4	①土器1 ②良好 ③淡黄2.5Y8/3	体部、口縁部直線的に開く。底部外面左回転糸切り無調整。口縁端部に一方所煤附着。2片接合。
第165図2	土器 皿	埋土	1/5	①1.6 ②(6.8) ③(3.7)	①土器1 ②良好 ③鈍い黄橙10YR7/3	体部、口縁部直線的に開く。底部外面左回転糸切り無調整。
第165図3 PL-57	土器 皿	埋土	口縁部一部、 底部1/4	①1.9 ②(8) ③(4.3)	①土器1 ②良好 ③浅黄2.5YR7/3	体部、口縁部直線的に開く。底部外面左回転糸切り無調整。2片接合。
第165図4 PL-57	石製品 砥石	埋土	1/2か	長5.3 幅2.8 厚1.5 重40g	砥沢石	小型砥石。幅広の二面と狭い一面を使用。残る一面と小口には調整痕残る。

見切塚 7区13号土坑出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第165図1	石製品 空輪	底部	完形	①18.6 ②33 ③31		下部の反りが認められる。2と重なって出土。
第165図2	石製品 空輪	底部	一部欠	①16 ②27		下部の反りが殆ど認められない。1と重なって出土。

三騎堂 4区遺構外出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第165図1 PL-58	土師器 坏		完形	①3.2 ②11.7 ③8.0	①土器2 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部横撫で。底部外面篋削り。底部内面周縁と体部下端強い横撫でにより凹線状に窪む。体部外面型肌残る
第165図2	須恵器 椀		1/4	①— ②(14.0) ③—	①須恵1 ②不良 ③灰黄2.5Y7/2	焼き締まりなく軟質。器表摩滅する。口縁部は外反り。接合なし。
第165図3	土器 皿	84トレンチ	1/4	①1.8 ②(9) ③(7)	①土器 ②良好 ③鈍い橙7.5YR7/4	底部回転糸切り無調整。小片のため回転方向不明。口縁部外面は直立気味。
第165図4 PL-58	製作地不詳陶器 灯明受け 皿	5号トレンチ	口縁部一部欠損	①2.1 ②10.2 ③4.8	①夾雑物含まない ②良好 ③灰白5Y7/1	器壁やや厚い。灰釉を施し、口縁部外面以下は釉を拭い取る。口縁部外面以下回転篋削り。受け部には一方所切り込みを入れる。19世紀。

三騎堂 5区遺構外出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第165図1	須恵器 葉壺蓋	ES117	1/5	①— ②— 天井部(13.0)	①須恵1 ②良好 ③灰7.5YR6/1	天井部外側の突帯は高く、貼り付ける。天井部外面の回転篋削り痕撫で消す。つまみ部で欠損。胎土・色調から2と同一個体であろう。
第165図2	須恵器 葉壺蓋	ES117	1/4	①3.1 ②(12.8) 天井部(12.4)	①須恵1 ②良好 ③灰7.5YR6/1	天井部外側の突帯は高く、貼り付ける。口縁端部の作りもシャープである。天井部外面の回転篋削り痕撫で消す。つまみ部で欠損。胎土・色調から1と同一個体であろう。
第165図3	須恵器 葉壺蓋	ER118	天井部1/4	①— ②— 天井部(15.0)	①須恵1 ②やや不良 ③灰白5Y8/2	天井部外側と上部の突帯を一体で貼り付ける。天井部外面回転篋削り。つまみ欠損。4と同一個体の可能性高い。
第165図4	須恵器 葉壺蓋	12号墳	天井部1/4	①— ②— 天井部(15.0)	①須恵1 ②やや不良 ③灰白5Y8/2	天井部外側と上部の突帯を一体で貼り付ける。天井部外面回転篋削り。つまみ欠損。3と同一個体の可能性高い。
第165図5 PL-58	陶器 碗		1/4	①8.0 ②(12.0) ③5.4	①肥前 ②普通 ③明褐灰7.5YR7/2	肥前陶胎染付。外面山水文の山部分が残る。染付は不鮮明。
第166図6 PL-58	須恵器 壺	ET118	1/2	①— ②— ③(12.6)	①須恵3 ②良好 ③黄灰2.5Y5/1	「ハ」の字状に開く高台を貼り付ける。内面調整は丁寧。同一グリッド出土の5片接合。
第166図7	磁器 碗		底部完	①— ②— ③(3.0)	①肥前 ②普通 ③灰白N8/0	染付小碗。波佐見系。

三騎堂 5区遺構外出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第166図8 PL-58	陶器 碗		底部完 口縁部1/2	①7.5 ②10.8 ③5.4	①肥前 ②不良 ③灰10Y6/1	肥前陶胎染付。外面唐草文。染付の発色や釉調は良いが下部の釉は白濁する。接合なし。
第166図9	陶器 香炉		底部1/4	①— ②— ③—	①瀬戸・美濃 ②普通 ③灰白5Y8/1	体部外面鉛釉。体部外面の文様は菊花状文か。内面と底部外面無釉。脚は1カ所残るが、3脚であろう。接合なし。
第166図10 PL-58	土器 香炉		1/3	①(6.8) ②(15.2) ③—	①土師2に近い ②普通 ③黒褐10YR3/1	外面鈍橙7.5YR7/4。口縁部横撫で。脚1カ所残存。本来は3脚であろう。底部外面砂底。江戸以降。
第166図11	陶器 すり鉢		1/3	①— ②(28.4) ③—	①瀬戸・美濃 ②普通 ③浅黄橙10YR8/3	錆釉。口縁部内面に折り返す。内面口縁部下まで擦り目を施す。口縁部器表小さく剥離。
第166図12	土器 焙烙		小片	①5.5 ②— ③—	①土師1に似る ②普通 ③灰黄2.5Y7/2	底部外面から体部外面型痕(砂痕?)明瞭。外面体部中位接合痕明瞭。内面二カ所耳残る。耳部に使用痕は認められない。
第166図13	石製品 砥石		1/2	長— 幅3.0 厚1.8	所謂砥沢石	本来使用する幅の広い面を使用せず、狭い側2面を使用。
第166図14	石製品 蔵骨器 身	多田山 12号墳表土	完形	長50 幅38.4 厚25.5	粗粒輝石安山岩	扁平で平面形が楕円を呈する礫の1面を平坦にし、中央をややはずれた場所に方形の蔵骨孔を穿つ。蓋を受ける平坦部は幅広い。

三騎堂 6区遺構外出土遺物(1)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第167図1	土師器 杯	GJ-115	1/4	①— ②(10) ③—	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部屈曲して内傾。体部内面から口縁部横撫で。底部外面篋削り。器表磨滅。
第167図2	土師器 杯	GH-117	1/4	①2.9 ②(10) ③—	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部内湾。器表磨滅著しく、調整痕不明。
第167図3 PL-58	土師器 杯	GJ-115	1/3	①3.9 ②(11.8) ③—	①土師1 ②やや不良 ③橙5YR6/6	全体に均一に丸味を帯びる。体部内面から口縁部横撫で。器表磨滅著しく、底部外面の篋削り痕残らない。底部外面、焼成時と思われる円形の赤変部あり。2片接合。
第167図4 PL-58	土師器 杯	GJ-115	1/3	①4.8 ②(11.2) ③(7)	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部、体部直線的に開く。体部内面から口縁部横撫で。体部指頭状圧痕。体部下位は篋削り後撫で。底部外面中央直径3cm程を残し、周縁は篋削り。削り残し部分は窪む。器形歪む。6片接合。
第167図5	土師器 椀	GI-115	1/4	①— ②(14) ③—	①土師2 ②良好 ③黒7.5YR2/1	口縁部器壁厚い。底部器壁薄い。口縁部横撫で。底部外面篋削り。器形やや歪む。
第167図6 PL-58	土師器 杯		底部片	①— ②— ③—	①土師1 ②良好 ③鈍い橙7.5YR6/4	底部外面篋削り。底部内面周縁強い横撫で。底部内面墨書。焼成前の篋削り状刻線があるが、断面が「U」字状を呈し、表面に微細な凹凸も認められ、偶然の所産と考えられる。
第167図7 PL-58	土師器 杯		1/2	①3.2 ②(12.7) ③—	①土師3 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部横撫で。外部外面篋削り。体部外面型肌残る。底部内外面墨書。
第167図8	灰釉陶器 皿	GH-118	1/4	①— ②— ③3	①東濃窯 ②良好 ③灰白5Y7/1	高台三日月形に近い。底部内面周縁重ね焼き痕。口縁部浸け掛け。
第167図9	須恵器 皿		1/6	①2.5 ②(14.5) ③(6.2)	①須恵1 ②普通 ③鈍褐7.5YR5/4	天井部外面右回転糸切り無調整。口縁部やや歪む。
第167図10 PL-58	須恵器 蓋	GI-116	つまみ欠損	①— ②9	①須恵1 ②良好 ③灰5Y6/1	器壁厚い。貼り付けつまみ剥離。かえりは小さい。天井部外面回転糸切り後、つまみ付近は貼り付け時に回転撫でにより削り痕撫で消す。焼き締まる。口縁部外反。
第167図11	須恵器 杯	GH-116	口縁部一部 底部完	①3.7 ②(12.2) ③6.6	①須恵1 ②良好 ③灰10Y4/1	口縁部外反。底部外面右回転糸切り無調整。胎土中の礫大きい。2片接合。
第167図12	須恵器 椀		底部完形	①— ②— ③9.4	①須恵1 ②良好 ③灰白5YR7/2	底部右回転糸切り後、高台貼り付け。高台の貼り付けは丁寧。
第167図13	中国磁器 碗	GH-115	口縁部片	①— ②(14) ③—	①— ②良好 ③灰7.5Y6/1	口縁部僅かに外反。

第2章 確認された遺構と遺物

三騎堂 6区遺構外出土遺物(2)

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第167図14	土師器 甕	GI-116	1/3	①— ②(22.5) ③—	①土師1 ②良好 ③橙7.5YR6/6	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面縦位斲削り。体部内面撫で。器表やや磨滅。7片接合。
第167図15	土師器 甕 須恵器	GI-116	1/5	①— ②(19.9) ③—	①土師1 ②やや不良 ③鈍い橙7.5YR6/4	口縁部緩く外反。口縁部外面中位沈線状に窪む。器表磨滅著しく、調整痕不明。2片接合。
第167図16	壺 煙管	GF-117	1/4	①— ②— ③—	①須恵1 ②良好 ③灰N5/0	体部丸味を帯びる。肩部外面掻き目。体部下位外面叩き目。体部下位内面あて具痕。3片接合。
第167図17 PL-58	吸い口	GK-129	吸い口完形	最大径1 吸い口長さ7		吸い口の先端付近折れ曲がる。羅宇一部残存。
図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (cm) ④量目 (g)		初鑄年代、特徴など
第167図18 PL-58	銅銭 寛永通寶	GO-125		①24.81、25 ③1.03~1.21	②20.03、20.03 ④3.2	

見切塚 1区遺構外出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第167図1	土師器		1/4	①3.2 ②(12.0) ③(7.5)	①土師2 ②良好 ③鈍橙7.5YR6/4	底部外面斲削り。体部外面一部に型肌残る。口縁部横撫で。
第167図2 PL-59	土師器 杯	表層	口縁部1/2欠損	①3.8 ②(11.1) ③8.2	①土師1 ②良好 ③橙5YR6/6	口縁部直線的。体部内面から口縁部横撫で。体部外面型肌、指頭状圧痕。底部外面斲削り。底部斲削りは薄く、型肌痕一部残る。4片接合。
第167図3	灰釉陶器 椀・皿		1/2	①— ②— ③7.0	①東濃 ②良好 ③灰白5Y7/1	高台退化した三日月型。
第167図4	須恵器 椀		小片	①— ②(6.0) ③—	①須恵5 ②普通 ③灰黄2.5YR7/2	轆轤右回転調整。焼き締まりはない。
第167図5	須恵器 椀		1/4	①— ②— ③(7.0)	①須恵5 ②不良 ③明赤褐2.5YR5/6	高台雑な貼り付け。
第168図6 PL-58	石製品 蔵骨器 蓋		1/2	重さ18kg	粗粒輝石安山岩	推定長さ50cm、推定幅36cm、厚さ18cmの骨蔵器蓋と考えられる。天井部の面取りはなく、自然な丸味を有する。挟りは4cmと浅く、平面形状は円形を呈すると推定される。
第168図7 PL-58	石製品 蔵骨器 身		完形	重さ17.7kg 長径29 短径26.5 厚さ24.5	粗粒輝石安山岩 亜角礫	球形に近い亜角礫の一面を平坦整え、中央に長辺13cm、短辺11.5cm、深さ10cmの長方形蔵骨穴を穿つ。蔵骨穴周縁に幅3cm程の平坦面を有する。
第168図8	須恵器 坏		1/3	①— ②— ③(3.4)	①須恵4 ②— ③明褐7.5YR5/6	底部外面右回転糸切り無調整。底部内面磨滅。
第168図9 PL-58	石製品 蛇尾?			厚0.6~0.2 長3.9 幅3.2		形状は石製蛇尾。形はやや歪で、仕上げ研磨も一部行われているが、大部分は成形時の擦り跡を残す。穿孔は両面から3カ所行う。

見切塚 2区遺構外出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (cm) ④量目 (g)		初鑄年代、特徴など
第168図1 PL-59	銅銭 寛永通寶	BI-112c	完形	①23.26、23.28 ③0.90~0.95	②18.86、19.22 ④	一文銭。

見切塚 5区遺構外出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第168図1 PL-59	土製品?		約1/2	厚2.0 長10.3 幅—	①土師1 ②普通 ③橙7.5YR6/8	楕円形粘土板の表裏に指で押したような凹凸が付く。実測図で右に示した面が焼成時の裏面のようで、色調に赤みが少なく、黒斑もある。形状から製品ではない可能性高い。

見切塚 6区遺構外出土遺物

図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 床比高(cm)	残存状態	①器高 ②口径 ③底径 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成形・調整の特徴など
第168図1	土師器 皿		1/8	①— ②(7.0) ③—	①土師2 ②良好 ③鈍黄橙10YR7/3	口縁端部油煙付着。中世以降と思われる。
図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)		初鑄年代、特徴など
第168図2 PL-59	銅銭 元豊通寶	BP-47d		①24.48、24.94 ③1.03~1.12	②18.79、18.94 ④2.8	北宋。1078年初鑄。

見切塚 7区遺構外出土遺物

図番号 図版番号	材質 銭種	出土位置	残存状態	①銭径 ②内径 ③銭厚 (mm) ④量目 (g)		初鑄年代、特徴など
第168図1 PL-59	銅銭 元豊通寶	CH-59d 1号溝		①24.03、23.64 ③1.31~1.42	②18.74、19.1 ④2.9	北宋。1078年初鑄。

第3章 科学分析

今井見切塚遺跡6区1号炭窯から出土した炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今井見切塚遺跡6区では、丘陵南斜面から平安時代(9~10世紀)の炭窯が1基検出されている。炭窯の形態は、大胡町乙西尾引遺跡で検出された炭窯(藤坂, 1994)と形態がよく似ており、複数の操業面が確認されている。乙西尾引遺跡では、各炭層から出土した炭化材の樹種同定が行われ、基本的にクヌギ節を中心とするが、上部でコナラ節が混じる種類構成が確認されている(高橋・鶴原, 1994)。また、乙西尾引遺跡では、3基の製鉄炉に対して炭窯が1基のみであることから、周辺地域から木炭が搬入された可能性も指摘されている。本遺跡の炭窯は、当該期における鉄生産やそのための木炭の製炭の実態を知る上で重要である。

本報告では、炭窯から出土した炭化材の樹種同定を行って製炭された木炭の樹種を明らかにし、当該期における木炭生産に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、6区1号炭窯から出土した炭化材である。炭化材は、各層別に一括採取された中から、試料の接合関係等を確認した上で、合計119点を選択した。

2. 方法

木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材には、コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属コナラ亜属の樹皮・イネ科タケ亜科が認められた。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

- コナラ属コナラ亜属クヌギ節

(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し・壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同列放射組織とがあるが、複合放射組織は潰れている試料が多い。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節

(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科環孔材で孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同列放射組織とがある。

- イネ科タケ亜 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

4. 考察

炭窯から出土した炭化材は、燃焼部・焼成部のいずれの層でもクヌギ節を中心とした種類構成であった。この結果は、基本的には乙西尾引遺跡で得られた結果(高橋・鶴原, 1994)と一致している。乙西尾引遺跡では、炭窯と製鉄炉で合計3000点を越える炭化材の樹種同定が行われており、製鉄燃料としてクヌギ節の木材が選択的に利用されたことが指摘されている。本遺跡においても、製炭にはおもにクヌギ節が選択された可能性が高い。

本遺跡で検出された炭窯は、乙西尾引遺跡の炭窯(藤坂, 1994)と平面形態、断面形態ともによく似ている。複数回の操業面が確認できる点も一致しており、同じ方法で製炭されていたことが推定される。